

THE HISTORY OF
THE
CITY OF
NEW-YORK
FROM 1609 TO 1801.

mentioned of some difficulty. I was en-

It was not very easy matter to write
much consideration & I was thus for con-
postpone it. because when I returned
very soon to a portion of Rushin I could
mostly used up on account of my ex-
an intense heat there. "What I had

number of telegraphic despatches came
I must
me to return home as soon as possible to
grave to be at the matter into existing let-
ment. I hope you will never be discour-
rather to be encouraged when I inform you
difficultly just very ^{to say upon any subject} ~~strongly pressing upon~~
fully convinced that the Lord has deigned
to bear all sort of trials & difficulties for
Kingdom & my ^{beloved} ~~native~~ land. No man
Heavy the cross may be, I am ready to

But what I fear is that I could
clearly express and present critical con-
you ^{there} in ^{fully} ~~could~~ understand our
want. You my ^{naturally} ~~thing~~ ^{ask} ~~me~~ ^{Editor} ^{of the} ^{paper}
that to my difficulty & my want.

view for a falling season. Since
the Foreign Department are situated
much endangered. It united again
and our Majesty's friends for Kyoto.
to the first part of their Victory which
second official for Mr. Leonard's pass as
a new nearly dit. Every thing seemed
to dark & hopeless. But my only hope
I knew early that a permission could
take a criminal course. I thought it
to obtain a permission is to cross Robert
~~into a la the~~ ^{to money} make a bold strike.
or excellent ~~was my misper~~
miss me to approve my official for Mr. Leonard
to speak favorably of them to the Foreign
took the course, because ~~is my~~
to Ministry of Foreign Departments before
official on a certain reason, although he
real refusal & originator) mischief.
attempts to stop
in any more mischief against us.
note is at whether he would be pushed to
I think it is better to

新島襄全集

10

『新島襄の生涯と手紙』

新島襄全集編集委員会 編



同朋舎

圖書贈一 同貸
85.05.07.123

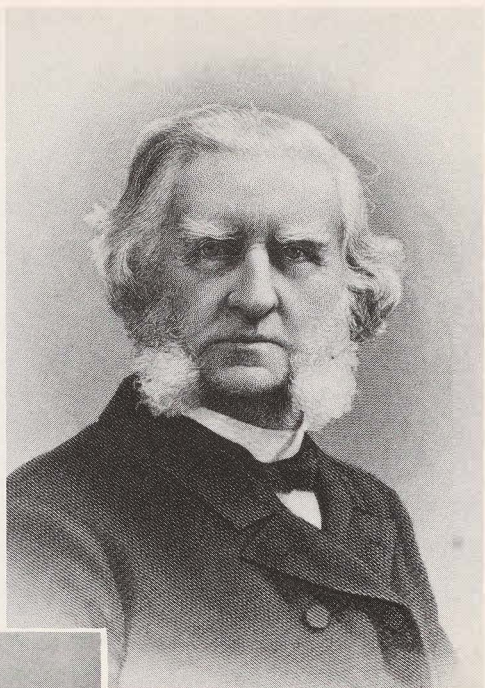


新島 襄 (1843—1890)

晩年の肖像。本書の底本である A.S.Hardy,
Life and Letters of Joseph Hardy Neesima
の巻頭に掲げられている。



アーサー・シャバーン・ハーディー(1847—1930)
本書の著者。アルフィーアス・ハーディーの
三男(「解題」449—56ページ参照)。



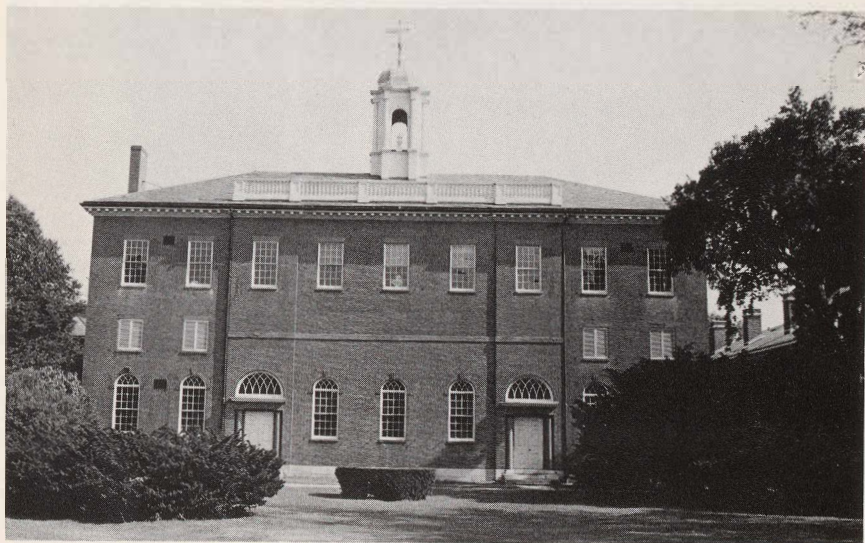
アルフィーアス・ハーディー (1815—1887) 新島自身が「米国の父」と呼んだ恩人。ボストンの実業家で、篤実なキリスト教徒であった(「注解」380ページ参照)。



スーザン H. ハーディー (1817—1904) アルフィーアスの夫人で新島の「米国の母」。本書は新島が彼女にあてて書いた手紙を多数収録している。



新島が留学した時期(1867-70)のアーモスト大学
中央がジョンソン・チャペルで、左が新島の住
んだ北寮(ノース・カレッジ)である(85ページ参照)。



旧アンドーヴァー神学校のバートレット・チャペル
現在はフィリップス高等学校がピアスン・ホールと
名付けて使用している。



ジョイ通り4番 ポストンにある旧ハーディー夫妻の住居。このジョイ通りをへだててマサチューセッツ州会議事堂に面している(294ページ参照)。



旧ヒドン邸 1811年に建てられたもので、アンドーヴァーにある。左半分にヒドン姉弟と新島が住み、右半分にフリント夫妻が住んでいたものと考えられる(57ページ参照)。



Congregational House Bostonのピー
コン通り14番にあり、1961年までここにアメリカ
ン・ボードの本部があった。

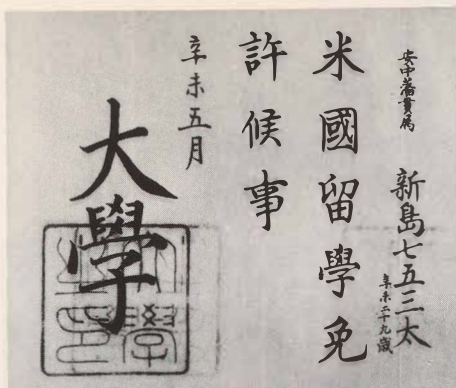
and join these missionaries already in the
field. I stand here before you this
afternoon as a monument of grace,
to bear witness that the money which
you give the Board is not wasted and
better than, and that the results of
missionary labor is not unsatisfactory.
You are all well aware of the direct
springing of Japan to missionary efforts.
(X) The result is almost beyond your forecast.
It is as though the people had been
into your hands. The work is fairly
beginning. I trust you will continue
to until the whole Empire of Japan
shall be given to the Lord.
Friends of Missions. Pray for us!
Blessings on
the Board of Missions. It is a pleasure
to hear of the work of the Board.
The work of the Board is a great
thing. It is a great thing. It is a
great thing. It is a great thing.
Joseph Matthews
May 22, 1874.

I have often heard persons say that it
is ~~not~~ ^{not} just for the American churches to
send the Missions to the heathen. For
money is needed, and the result is
unsatisfactory. I think, however,
who make such remarks, are greatly mis-
taken in comparing the missionary labor
with material works. The missionaries
have less to do with money. Hence the
results of their labor cannot be measured
by the length of time, and the amount of
their labor. Some may rather see
all their life time without seeing a single
fruit, while others may labor but a few
years, and gather a rich, abundant harvest.
The work, which has been accomplished
by a few missionaries is one of the most
wonderful in human history. Look at
what has been done in the Sandwich Isles,
and Madagascar, and what is going on

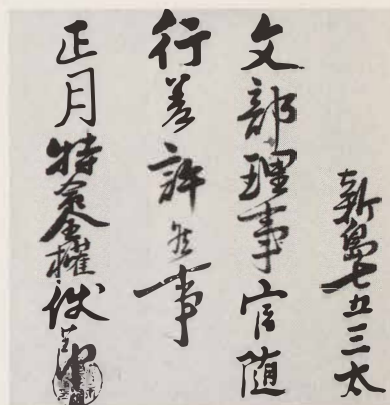
新島の演説の草稿 日付は1874年5月22日。アメリカン・ボー
ドの集会のためのもので、ボードへの寄付を訴えている。



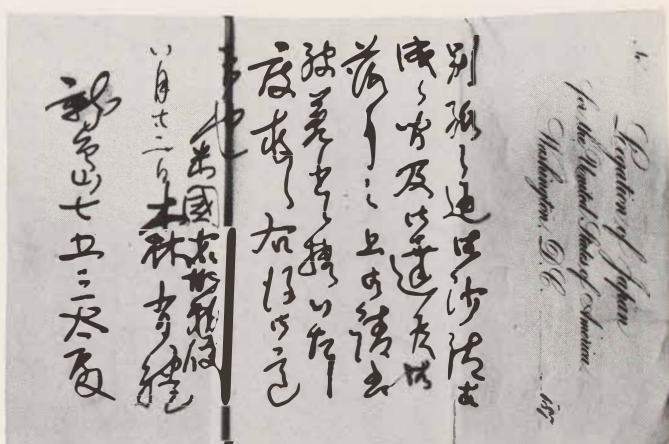
ナイアガラ瀑布でのスナップ 1871年 8月に撮影したもの。
新島の左の人物はアーモスト大学時代の同室の友人ジョージ
E. サザーランドであろう(119-23ページ参照)。



留学免許状 1871年に日本政府の「大学」から与えられた。



田中不二麿文部理事官随行の辞令
1872年1月、岩倉具視特命全權使節
名で出された(132-33ページ参照)。



留学免許状送達に関するメモ 1871年8月22日付。森有礼米
国少弁務使から新島にあてたものである(126-27ページ参照)。

1 原著の中に見出される事実のあやまりはすべて、できるだけ訂正した上で訳文を作成し、訂正箇所は注記した。
重要なあやまりは、九ページの例のように、本文のページの末尾に注記した。

2 訳文中の「」の記号は訳者による挿入語句を示す。原著者も数回使用しているが、その場合は注記した。

3 原著者による脚注は注解において「原注」として示した。

4 原文でイタリック体になっている部分には訳文で傍点をほどこした。

5 ・・・は本文では原著者、注解にあっては訳者による、省略箇所を示す。

6 本書の注解で用いた文献のうち、繰返して用いるものは次のように略記した。

DAB — *Dictionary of American Biography*

デイヴィス—北垣—J・D・デイヴィス著、北垣宗治訳『新島襄の生涯』（同志社校友会、一九七五／小学館、一九七七）

DNB — *The Dictionary of National Biography*

『回覧実記』——久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使、米欧回覧実記』五卷（岩波文庫、一九七七—八二）
『新島研究』——同志社新島研究会編、一九五四——（一九八五年二月現在で六七号まで発行された研究誌）

『新島先生書簡集』——同志社校友会、一九四二／統編、一九六〇

『詳年譜』——森中章光編『新島先生詳年譜』（学校法人同志社、同志社校友会、一九五九）

『全集』——『新島襄全集』（同朋舎出版、一九八三）

新島襄全集10■新島襄の生涯と手紙■目次

序	1
第一章 新島襄の生涯	1
第二章 新島襄の手紙	1
第三章 新島襄の著作	1
第四章 新島襄の思想	1
第五章 新島襄の教育	1
第六章 新島襄の政治	1
第七章 新島襄の宗教	1
第八章 新島襄の文学	1
第九章 新島襄の美術	1
第十章 新島襄の音楽	1
第十一章 新島襄の科学	1
第十二章 新島襄の歴史	1
第十三章 新島襄の地理	1
第十四章 新島襄の生物	1
第十五章 新島襄の物理	1
第十六章 新島襄の化学	1
第十七章 新島襄の医学	1
第十八章 新島襄の法律	1
第十九章 新島襄の経済	1
第二十章 新島襄の社会	1
第二十一章 新島襄の文化	1
第二十二章 新島襄の生活	1
第二十三章 新島襄の死	1
第二十四章 新島襄の追善	1
第二十五章 新島襄の追慕	1
第二十六章 新島襄の追思	1
第二十七章 新島襄の追憶	1
第二十八章 新島襄の追念	1
第二十九章 新島襄の追悼	1
第三十章 新島襄の追哀	1
第三十一章 新島襄の追慕	1
第三十二章 新島襄の追思	1
第三十三章 新島襄の追憶	1
第三十四章 新島襄の追念	1
第三十五章 新島襄の追悼	1
第三十六章 新島襄の追哀	1
第三十七章 新島襄の追慕	1
第三十八章 新島襄の追思	1
第三十九章 新島襄の追憶	1
第四十章 新島襄の追念	1
第四十一章 新島襄の追悼	1
第四十二章 新島襄の追哀	1
第四十三章 新島襄の追慕	1
第四十四章 新島襄の追思	1
第四十五章 新島襄の追憶	1
第四十六章 新島襄の追念	1
第四十七章 新島襄の追悼	1
第四十八章 新島襄の追哀	1
第四十九章 新島襄の追慕	1
第五十章 新島襄の追思	1
第五十一章 新島襄の追憶	1
第五十二章 新島襄の追念	1
第五十三章 新島襄の追悼	1
第五十四章 新島襄の追哀	1
第五十五章 新島襄の追慕	1
第五十六章 新島襄の追思	1
第五十七章 新島襄の追憶	1
第五十八章 新島襄の追念	1
第五十九章 新島襄の追悼	1
第六十章 新島襄の追哀	1
第六十一章 新島襄の追慕	1
第六十二章 新島襄の追思	1
第六十三章 新島襄の追憶	1
第六十四章 新島襄の追念	1
第六十五章 新島襄の追悼	1
第六十六章 新島襄の追哀	1
第六十七章 新島襄の追慕	1
第六十八章 新島襄の追思	1
第六十九章 新島襄の追憶	1
第七十章 新島襄の追念	1
第七十一章 新島襄の追悼	1
第七十二章 新島襄の追哀	1
第七十三章 新島襄の追慕	1
第七十四章 新島襄の追思	1
第七十五章 新島襄の追憶	1
第七十六章 新島襄の追念	1
第七十七章 新島襄の追悼	1
第七十八章 新島襄の追哀	1
第七十九章 新島襄の追慕	1
第八十章 新島襄の追思	1
第八十一章 新島襄の追憶	1
第八十二章 新島襄の追念	1
第八十三章 新島襄の追悼	1
第八十四章 新島襄の追哀	1
第八十五章 新島襄の追慕	1
第八十六章 新島襄の追思	1
第八十七章 新島襄の追憶	1
第八十八章 新島襄の追念	1
第八十九章 新島襄の追悼	1
第九十章 新島襄の追哀	1
第九十一章 新島襄の追慕	1
第九十二章 新島襄の追思	1
第九十三章 新島襄の追憶	1
第九十四章 新島襄の追念	1
第九十五章 新島襄の追悼	1
第九十六章 新島襄の追哀	1
第九十七章 新島襄の追慕	1
第九十八章 新島襄の追思	1
第九十九章 新島襄の追憶	1
第一百章 新島襄の追念	1

凡例	1
目次	iii

新島襄の生涯と手紙

まえがき	3
目次	5
1 〔誕生から日本脱出まで〕	7
2 高等学校・大学時代	55
3 アンドーヴァー神学校時代	111
4 最初のヨーロッパ訪問	155
5 日本における宣教事業	199
6 第二次欧米訪問	263
7 晩年と永眠	323
付録	377

新島襄の生涯と手紙

注 解	379
解 題	447
新島襄略年譜	471
索 引	x

装幀・小島友幸

まえがき

新島さんとは個人的な知り合いであり、彼の生涯のおもな出来事についてはよく知っているつもりだったが、彼の手紙や日記を読んでみて、あらためて深い印象を受けた。その人柄をあらわし、その生涯を物語るのに、その人自身の言葉ほど適切なものはないと思う。ひとが或る種の性質を備えていると述べることはよいことである。しかし、その性質が実際に生きて活動しているのを見ることは一層よいことである。新島さんは自分の手紙や日記が公にされるなどとは夢にも思わないで、彼独特の単純な謙遜さをもって、また他人に見せるつもりがなかっただけに、一切の評判を気にしない人の真実さをもって、そこでは自分自身をさらけ出している。それ故ぜひとも彼に語らせようとわたしは努めた。それは彼こそが最も上手に語るからである。そういうわけで、この書は本質的に自叙伝だといえる。相당한分量にのぼる資料を手許に集めたが、新島さんの生き生きとした印象を打ち出すのに貢献しないと思われるものは一切採用しなかった。というのは、わたしの意図は日本伝道の歴史を書くことでなく、新島さん自身の行動と発言と思想の光のもとで、新島さん自身を示すことにあったからである。

いま一つの目的が、一人の息子にとってこの書を神聖なものにすることになった。わたしの父（「アルフィーアス」ハーディー^{*}）は自分の伝記といったものが書かれることについて嫌悪の念を示してきた。けれども、長い生涯にわたって彼がたずさわってきた、記録されないままの善行が、何の記念碑もなしに消えていくのは、時として残念な気がする。

のである。しかしながらこの考え方は事実には忠実とはいえない。愛の心から出た言葉は一語たりとも失われることはないし、親切な行為もまた同様である。その結果は益を受けた人たちの人生に刻み込まれるのであって、それ自体が愛と善行を叙述する書物や、それらを記念するタブレットよりも一層価値のある記念碑だといえるからである。本書を準備するに当り、或る人物の特定の行為を記録せざるをえなかった。それはその人物を知る者たちにとって、そのような数々の行為の総体にすぎなかったといえる。だがその息子にとっては、父の願いを妨げることなしに、彼の高貴な性格に、いわば側面からの光をあてたことになる。息子にとってそれは嬉しいことであつた。

アーサー・シャバーン・ハーディー
ニュー・ハンプシャー州、ハノーヴァーで
一八九一年五月二十一日

目次

第1章 一八四三年—一八六五年

日本からの脱出 9 ボストン到着 10 「脱国の理由」 11 「青春時代」 21

第2章 一八六五年—一八七〇年

フィリップス高等学校 57 アーモスト大学 80

第3章 一八七〇年—一八七二年

アンドーヴァー神学校入学 113 岩倉遣外使節団 129 田中理事官に同行 132

第4章 一八七二年—一八七四年

ヨーロッパの教育事情視察 158 神学校に復学 182 アメリカン・ボードの準宣教師に任職 183 按手礼 185 ラ
ットランド集会でのスピーチ 186 日本へ向けての旅立ち 190

第5章 一八七四年—一八八四年

- 新島不在中の日本国の変化 201 安中訪問 207 京都をねらう 214 同志社創立 217 ジェインズ大尉の熊本洋学
校 226 宣教活動 232 同志社排斥の動き 241 アメリカン・ボードに対する基本金設定の訴え 243 大学設立計
画 255 健康の悪化 260

第6章 一八八四年—一八八五年

- スエズ経由で米国へ 265 旅行中の日記と手紙 268 ホンコン 269 「ジャンハイ」コロンボ 273 スエズ 276 ロ
ーマ 277 トリノ 278 ワルドー派の地域での夏 280 サンゴタール峠での心臓発作 291 ボストン到着 294 同志
社のための訴え 295 クリフトン・スプリングスでの冬 318 メイン海岸での夏 320

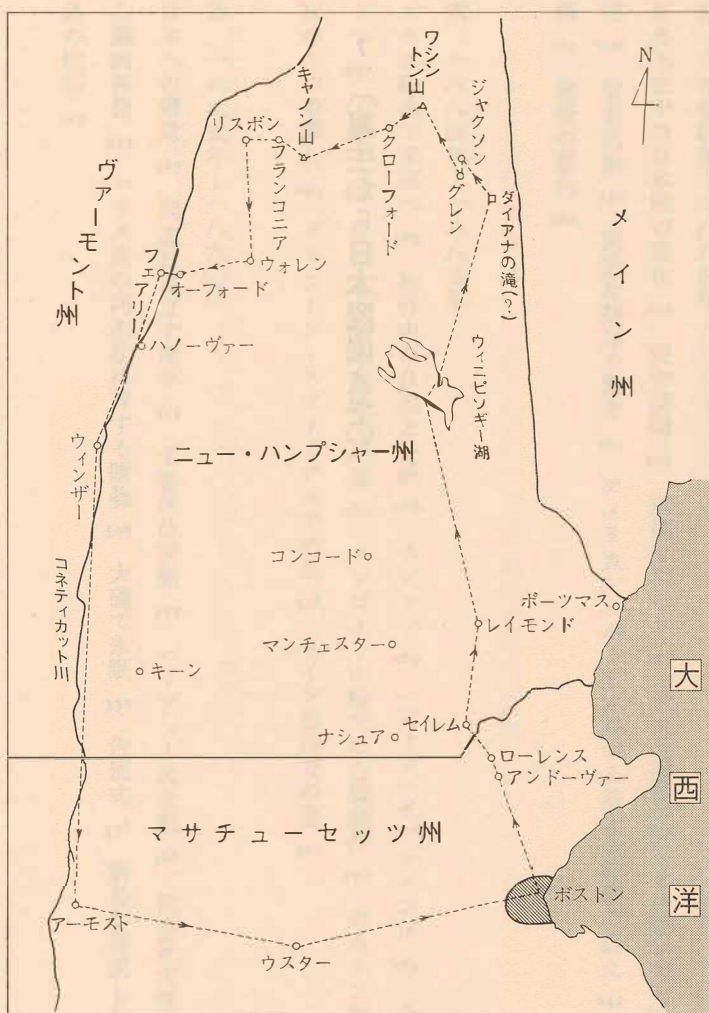
第7章 一八八五年—一八九〇年

- 日本への帰還 325 同志社創立十周年 325 名誉学位受領 327 ハーディー氏永眠 328 同志社大学設立計画 331
心臓病再発 344 ハリス氏の同志社に対する贈物 348 大磯で永眠 355 告別式 356 新島が達成した事業 358 新
島の性格 373

1
〔誕生から日本脱出まで〕



1944年10月1日現在



1868年の400マイル徒歩旅行

一八六四年夏のことである。長崎のトーマス・ウォルシュ会社所有の二本マストの商船ベルリン号は、フレデリック・ウィルキー氏あての商用を帯びて函館に到着した。同船の船長はマサチューセッツ州セイラム出身のウィリアム・T・セイヴォリー^{*}だった。シャンハイめざして出港する直前のことであつたが、セイヴォリー船長はウィルキー氏から次のような話をきかされた。彼の会社の日本人店員の友人である若い日本人が何とか日本を脱出してアメリカに行き、かの地で教育を受けたがつていゝ、といふのである。^{**}日本人を国外に連れ出したことが発覚した場合にはゆゆしい結果が起こるといふことを船長に述べたあとで、ウィルキー氏は当時二十一歳くらいだったその若者を事務所呼び入れた。セイヴォリー船長は店員のムノキテ「富士卯之吉」氏を通訳として、ベルリン号乗組員の援助を受けることなしに船までやってくることであれば、シャンハイまでつれて行つてあげよう、と言つた。そしてシャンハイから、アメリカに向かう他の船に移乗できるよう、及ばずながら努力してみようと約束してくれた。この提案の結

^{*}一八六四年当時、函館にはたしかに Frederick John Wilkie (1838—71) というドイツ系アメリカ人の商人が居住していた。

しかし、新島をセイヴォリー船長に紹介したのは、Alexander Porter 商会の店員富士卯之吉（一八三八—一九二二）であつて、ウィルキーではない。ハーディーは卯之吉を Mr. Munokite と書いている。富士卯之吉は新島をセイヴォリーに紹介し、脱国を助けた恩人である。のちには富士成豊と称した。ポーター商会に五年つとめ、のち船大工となり、さらにその後は北海道開拓便につとめ、測量に従事した。一八八七年夏、新島夫妻は札幌の富士の持家で一夏をすごした。

果として、ムノキテ氏は七月十八日の夜、その友人を手伝ってベルリン号まで送り届けた。船上には日本の税関の役人がいたので、この密出国者は船室の一つにかくまわれ、船が十分に走り出すまでは隠れていなくてはならない旨を、身振りで告げられた。「十九年後の」一八八三年にセイヴォリー船長は書いている。「わたしは彼との最初の出会いのことを決して忘れることはないだろう。祖国の姿が視界から消えていくときに、もうこれですっかり安全だと知って、彼は本当に喜んだことであつた。当時彼の唯一の目的は、同胞のために聖書を日本語に翻訳できるようになるまで、英語を勉強することだつた。」

シャンハイにつくと、ベルリン号は長崎に帰るよう指令を受けた。セイヴォリー船長は、彼の若い庇護者が日本に帰れば生命が危いことを知っていたので、アメリカのボストンのアルフィアス・ハーディー商会所屬の商船ワイルド・ロウヴァー号^{***}にのり替えられるようあつせんした。その船の船長はマサチューセツ州チャタム出身のホラス・S・テイラー^{***}といつた。一八六四年九月、テイラー船長はフーチョウ^{***}〔福州〕めざして出帆し、そのあとホンコン、サイゴン、再びシャンハイ、マニラ等に寄港しつつ、その冬はシナ海域ですごした。一八六五年四月一日、船はマニラを出てボストンに向かい、四か月の航海のち七月^{***}〔二十日〕にボストンに到着した。

この日本青年がシャンハイではじめてワイルド・ロウヴァー号に乗船したとき、彼は英語はほとんど話すことができなかった。もっとも、書く方は多少できた。君の名は何というのか、と聞かれたとき、彼は「ニイシマ・シメタです」と答えた。「じゃ、君を今後^{***}ジョウと呼ぶことにする」と、船長は簡潔に宣言した。

ボストン到着のちしばらくしてテイラー船長は船の持主に対し、一人の日本青年を連れてきたこと、その男はしきりに教育を受けたがっていることを報告した。そこでハーディー氏の指図で新島が呼びにやられた。航海中に彼は

船で使う単語は覚えたのであったが、自分の意思を通じるような英語で伝えることはまだできなかった。ハーディー夫人の質問のひとつひとつに対し、彼の反応は短い音声だけ。何故日本を出国してきたのかという理由を彼から引き出すことは不可能だった。大へん内気な男であったから、彼の目的や希望についてはテイラー船長の陳述以上のことは何もわからない。このような状況の下で外国人を援助することについて従来宣教団体が経験してきたことは、はかばかしいものではなかった。そこで新島はひとまず海員ホーム*に送られ、何故祖国を脱出することになったのか、その理由を綴るよう求められた。

十月十一日にハーディー氏は次のような手記を受取った。

〔脱国の理由〕

私は或る殿様〔板倉***〕の江戸屋敷で生まれました。父〔新島民治たみはる〕は藩邸内で書道の師匠と祐筆***をつとめていました。祖父は総元締の執事***でした。和漢の学問を始めたのは六歳の時です。十一歳の時、決意をあらたにして剣術と馬術を習い始めました。十六歳になると漢学に対する欲求が深まり、剣術その他は廃してしまいました。けれども殿様は私を日誌記録係に採用しました。それは私の希望にそわない仕事だったのです。やむをえず、私は一日おきに殿様の事務所に通うことになりました。その上私は家の中で、父に代って小さな子供らに授業する羽目になりました。そのためはや漢学所へ行つて漢籍を勉強することができません。しかし毎晩家で本を読みました。ある日友達****が北アメリカ合衆国の地図書を貸してくれました。それは或るアメリカの聖職者が漢文で書いたもので、私はそれを繰返し

読みました。^{*}すると驚嘆のあまり私の頭はとろけそうな気がしました。大統領を選ぶこと、自立の学校、公立教養院、感化院、工場等をたてること。そこで私は、日本国の將軍はアメリカの大統領のようであなければならぬと考えたのです。そして自分にこうつぶやきました。ああ日本国の將軍よ、なぜあなたはわれらを犬や豚のようにしいたげるのか。われらは日本の民だ。もしあなたがわれらを支配するつもりならば、あなたはわれらをわが子のように愛さなくてはならないのに、と。その時以来私はアメリカのことを知りたいと思うようになりました。しかし、ああ、それを教えてくれる教師はどこにもいません。私はオランダ語を勉強したいとは思わなかったけれども、それを勉強しないわけにいきませんでした。なぜなら私の国では多くの者がオランダ語を読めたからです。一日おきに私は蘭学教師の家に通いました。

ある日のこと、私は殿様の事務所に出ていきましたが、何一つ記録することはありません。そこで事務所をぬけ出し、蘭学教師の家に行つたのです。やがて殿様が事務所にお出ましになり、私を探されました。誰もそこにいなかったで、殿様は私が戻ってくるまで待つておられたのです。私を見つけると殿様は私を殴りつけました。「どうしておまえは事務所を抜け出したのか。もうここから逃げることは許さんぞ。」十日後に私は再び逃げ出しました。その時は殿様に気付かれずにすみしました。しかし、ああ、その次に逃げた時にみづかり、したたかぶたれたのです。「おまえはどうして逃げたのか。」私は答えました。「私は外国の知識を学びたかったのです。外国のことをできるだけ早く理解したいのです。ですから、私はここにとどまって、殿様のきめられた規則を守らなくてはならないことは存じておりますが、私の心はすでに先生の許にあります。私の体もまたそこへ行かざるをえなくなるのです。」すると殿様は非常にやさしくこう言われました。「おまえは習字がうまい。だからそれでもって身を立てていけるはずだ。お

まえがもうこれっきりここから逃げ出さないとするのであれば、給金をふやしてやろう。いったいどうしておまえは外国の知識などをほしがるのか。ひょっとしたらそれが道をふみ迷わすことになるかもしれないのだぞ。」私は言いました。「どうしてそれが私の道をふみ迷わすことになるのでしょうか。誰でも何かの知識をもつべきだと思えます。知識をもたない人は犬や豚に等しいのです。」すると殿様はからからと笑って言われました。「おまえはしっかりした子だな」と。この逃亡事件について祖父、両親、姉たち、友達、隣人たちが、私を殴ったり、笑ったりしたのです。しかし私は彼らのことを意に介さずに、しっかりと堅固さを保ったのであります。^{*}二、三か月しますと、事務所での仕事がふえ、もはや逃亡どころではありません。ああ、このことで私ははげしく思い煩い、とうとう病気になるてしまいました。誰にも会う気がせず、遊びに出たい気持ちも起こらず、願うところはただ、静かな部屋にじっとしていることだけ。悪質な病気だとわかったので、薬をもらうために医者のところへ行きました。医者は何度か私の病気を診察したあとでこのように言いました。「あなたの病気は心から来たものです。だから熱した心をまず打ちくだくようにしなさい。健康のためには散歩をすることです。散歩は沢山の薬よりもっとききめがあります。」殿様は私の病気を直すために惜しみなく時間を下さいましたし、父も遊ぶようにといて、いくらか金をくれました。しかし私はオランダ語を学ぶために毎日蘭学教師の家に通いました。多大の時間を費してオランダ語の文法書を読み終り、次には自然科学の小冊子^{*}にとりかかりました。この本は大へん面白かったので、医者のかれた薬よりもずっとよく私の病気にきいたと言えましょう。二、三か月して病気が直ると、殿様は再び私に日誌記録の仕事させました。君命により私は毎日日出仕することになりました。ああ、もはやオランダ語の勉強のために抜け出すこともかありません。やむをえず夜間に長時間をかけ、蘭和辞典をたよりに、例の物理書を家で読み終えました。ああ、夜の勉強は目

の毒となり、または勉強中止のやむなきに至りました。十週間たつと目の方が完全に回復しましたので、再びその本を読み始めました。けれどもその中の理数的な部分がわかりません。それ故算数を学びたいと思いました。しかしその時間はともありません。ある日私は殿様に「お願いですから、学問のためにもっと時間を下さい」と願い出ました。そこで殿様は週三回私を開放して下さいましたけれど、むろんそれだけで十分とはいえません。私は算数の塾に通って足し算、引き算、掛け算、割り算、分数、利息算等を修得しました。その上で例の物理書と取り組んでみますと、その書の中の理数的な計算の部分がよく理解できた次第です。

ある日のこと私は海を見ようと思って江戸の海岸に行きました。そこで私の見たものはオランダの最大の戦艦だったのです。^{*}それはまるで城のようにも、砲台のようにも見えました。これが敵と戦えばずい分強いだろうな、と思いました。この船を眺めている間に一つの思いがうかんできました。それは、われわれは海軍を作らなくてはならぬ、ということ です。なぜなら、わが国は四面を海で囲まれており、もし外国と戦うことになれば、海で戦わなくてはならないからです。しかし私にはもう一つの思いが浮かびました。それは、外国人が通商に従事するから諸物価が上がり、国は以前よりも貧しくなる。^{**}日本人は外国人と通商する道を知らないのだから。それ故われわれは外国に出掛けていって、通商の仕方を覚えなくてはならぬ。つまりわれわれは外国に関する知識を学ばなくてはならないのだ、と。ところが国法は私の思いをまったく無視するものでありました。私は心の中で叫びました。幕府は何のためにあるのだ。どうしてわれわれを自由にしてくれないのか。どうしてわれわれは籠の鳥、袋のネズミ同然であるのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な政府は倒さなくてはならぬ。アメリカ合衆国のように大統領を選ばなくてはならないのだ、と。だが悲しいことに、そのようなことはまったく私の力の及ばないことでした。

その時以来、私は幕府の軍艦教授所^{*}に週三回通って航海術を学ぶことになりました。何か月も費して、多少なりとも代数学や幾何学がわかるようになり、また航海日誌のつけ方、天測器械の使い方、緯度の測り方などを覚えしました。夜間に勉強したものですからまたもや目が悪くなり、一年半ばかりの間、全然勉強することができなくなりました。こういうことは人生に二度とあってほしくないことです。目がよくなると、殿様の事務所に出仕せざるをえなくなりしました。江戸はその頃非常に暑くて、うんざりするような時期でした。太陽がかんかん照りつけた或る日の夕方に大雨となりました。その時私は悪寒がしてぞくぞく震えました。翌朝には頭痛が始まり、火が燃えているかのように体内がほてってきました。何一つのどに通らず、冷たい水だけを飲む始末。二日するとハシカが体じゅうを襲ってきました。ハシカがなおると目の方が弱り始め、多くの時間をぶらぶらと空しくすごすようになりました。或る日友達を訪ねたとき、彼の書齋に小型の聖書をみつけました。それはアメリカの宣教師が中国語で書いたもので、聖書の中の最も大事な出来事だけが記してありました。私はそれを友達から借り、夜の間に読んでみました。私は野蛮な国のおきてを恐れていたのです。というのは、私が聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全部をはりつけの刑に処したでしょうから。私は先ず神を理解しました。すなわち神は天と地をわかち、地上に光を創り、草木や鳥獣、魚などを創られました。神はご自分の姿に似せて男を創り、彼のアバラ骨を切り取って女を創られました。神は宇宙の万物を創造したあとで休息されました。その日を私たちは日曜日または安息日と呼ばねばなりません。次いで私はイエス・キリストが聖霊の御子であること、彼は全世界の罪の故に十字架につけられたこと、それ故私たちは彼を私たちの救い主と呼ぶなくてはならないことを悟りました。そこで私は聖書を置き、ぐるりを見まわしてから、このように自問したのです。私を創ったのは誰か？ 私の両親か？ そうではない、それは神だ。私の机を作ったの

は誰か？ 大工か？ そうではない、それも私の神だ。神が地上に木をはえるようになさったのだ。神が大工に私の机を作らせられたのだが、その机は実際どこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して心の正しい人にならなくてはならないのだ、と。この時以来私の心は英語の聖書を読みたいという思いにみたされ、函館に行つて、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を得たいと決意したのです。そこで殿様と両親にむかつて函館に行かせてほしいとお願いしました。しかし彼らはとうていそんなことを許してくれません。むしろ私のことを怪しんだくらいです。しかしながら私の固い決意は彼らの説論にくじけることなく、その思いを保ち続け、神に向かつて、どうかお願いですから、目的を達成させて下さい、とひたすら祈つておりました。

それから私は或る日本人の教師^{*}について英語を習い始めました。ある日江戸の通りを歩いていました時に、突然、私の知人で私をかわいがってくれていたスクーター船^{*}の船長^{**}にでくわしました。「お船はいつ出るのですか」と聞きますと、「三日以内に函館に向けて出帆するところだ」とのこと。「ぜひともおともしたいですね。お願いですからばくも行かせて下さい」と頼みました。「連れて行つてあげてもいいけれど、君の殿様とご両親がお許しにならんだらうなあ。先ずそちらに頼んでみてごらん。」二日後、私はいくらかの金と、少しばかりの衣服と、少数の書物とをたずさえて家を後にしました。もしこの金が無くなったらどうやって衣食の道をたてるべきかを考えることなく、ひたすら運を神の御手にゆだねたのでありました。翌朝私は函館行きのスクーター船に乗り込みました。函館に到着のち適当な英語の教師を探しましたが、八方手をつくしても見つけることができません。そこで私の心は一変して、国外への脱出を考えるに至ったのであります。しかし一つの思いが私を押しとどめました。それは、そんなことをすれば祖父や両親がどんなに悲しむだろうか、ということです。その思いがしばしの間私の決意を鈍らせ

たのです。けれどもやがて一つの考えが私の頭に浮かびました。それは、私の両親が私を生み、育ててはくれたが、私は本当は天の御父に属している。それ故私は天の御父を信じ、御父に感謝し、その道に従って走らなくてはならないのだ、ということでした。こうして私は自分を日本から連れ出してくれる船を探し始めたのです。

多くの苦勞の末に、私はシャンハイに向うアメリカ船に乗り込みました。シャンハイの河口に到着のち、ワイルド・ロウヴァー号に移り、約八か月間中国沿岸を往来しました。神のご加護のもと、四か月間かかってポストン港に着いたのです。はじめてH・S・テイラー船長に会ったとき、もしアメリカに到着したら「どうかぜひ学校にやって下さい。そしてよい教育を受けさせて下さい。そのため私は力の限り船内で働きますし、賃銀をいただくつもりはありません」とお願いしたのです。船長は帰国したならば学校にやってやろう、そして船内では彼の召使いとして働かせてやろう、と約束して下さいました。船長から金はもらいませんでしたけれど、衣服、帽子、靴、その他は買って頂きました。海上では航海日誌*のつけ方、緯度、経度の測定の仕方を教わりました。ポストンに着くと、船長は私を長い間船内におらせて下さいました。ですから私は船の番をしている荒くれた不信心な男たちと一緒にでしたし、波止場でくわす人は次のように言って私をこわがらせました。陸の上じゃおまえなんかを救ってくれる人は一人もありませんよ。南北戦争このかた何もかも高つくようになったんだからな。まあ、もう一度海に戻るのだな、と。私はこの分だと衣食のために相当頑張って働かなくてはならないと思いました。学校の授業料を稼がずには、とうていどんな学校にも行けそうにありません。そのような考えが私の頭をおさえつけたとき、もうあまり働くことができなくなり、本も楽しく読めませんでした。私はまるで気がふれた人のように、長いことあたりを見まわすばかりでした。毎晩、寢床に入ってから神にこう祈りました。どうか、私をみじめな境遇に打ち棄てないで下さい。どうか、私

の大目的をとげさせて下さい、と。今や私はあの船の持主であるハーディー様が私を学校へやって下さり、一切の経費をまかなって下さるかもしれないとうかがいました。船長がこのことをはじめて告げて下さったとき、私の両眼は涙にあふれました。まことにかたじけないことであります。私は思いました。神は私を見棄て給うことはないのだ、と。

「脱国の理由」終り」

この驚くべき手記が機縁となって、ハーディー夫妻は新島に関心を抱きはじめた。この関心は年月とともに深まっていたし、またそれから先の出来事は十分にその関心の正当さを証拠立てるものであった。

日本からの航海の間にテイラー船長は新島にむかって、この船の持主がボストンで何かの働き口を見つけてくれるかもしれない、ひょっとすると教育を受けさせてくれるかもしれない、と話していた。この希望を抱きつつも、生計の資を得ながら勉強することの困難さに困惑しながら、新島は紙きれに次のようなことを書いて、ボストン到着の前に船長にこっそりと示したのであった。

「私はどうやら私の大目的を達成しえないのではないかと心配していることを申し上げなくてはなりません。それは以下のような考えによるものです。

この船の持主は私に非常に親切にして下さることでしょうが、その方は私があの大目的を達成するまで私を学校にやって下さるわけにはいかないでしょう。なぜならその方は私のために金を無駄使いすることになるからです。私の

推測では、その方はひと月に少くとも二十ドルを私の衣食と、学習に必要な経費として使うことになるからです。その方がもし私のためにそんな多額の出費をなさるのであれば、私に相当な仕事をいつけられることでしょう。私はほとんど一日中働かなくてはなりません。働くことをいとうわけではありませんが、そうなれば勉強時間を大いに取られることになるでしょう。もし十分な知識を獲得できないのであれば、どうして日本に帰り、藩主や家族や友人に顔を合わすことができるでしょうか。それは全く恥ずかしいことであります。私は知識を得ることを望んで、大迷惑をかけて国を出たのですから、このままですと彼らは私を犬や猫に等しいものと見做すことでしょう。

私はそのことについて頭がとろけるほど心配しています。そのような思いが頭に浮かぶと、読書は全く手につかず、何事も楽しくはたせなくなり、まるで気がふれたかのように、長い時間あたりを見まわすばかりです。それほどにまでこの問題は私の心を混乱させました。私はどのような人生航路を辿るのかわかっていないし、どのようにして暮しをたてるべきかもわからない。ああ、私はみじめな愚か者です。あなた以外に私を救って下さる人は誰もいません。そういうわけですから、私は心の底からお願います。私の目的を達成できるように、どうかよい道を示して下さい。目的を達成させて下さるならば、私はあなたのご親切と思いやりを絶対に忘れません。死んで墓に埋められなくても、私の魂は天国へ行き、神様にあなたのことを報告し、神が真実をもってあなたを祝福なさるようにいたします。

ハーディーさんは私をどんな学校にやって下さるのでしょうか、どうか教えて下さい。私の願うところは、ハーディーさんが食事の余りを私の食物として与えて下さること、古着一着を私に下さること、私の勉強のためにインキとペンと紙と鉛筆を下さることなのです。」

この手記は当時ハーディー氏の目にふれるところとならなかった。それから十七年をへて、テイラー船長未亡人からそれはハーディー氏に送られたのであった。

ハーディー氏が新島を学校にやることを決意したことを聞いて、彼は次のような手紙を恩人に宛てて書いた。

心から感謝申し上げます。あなたは私を救って下さいました。しかしこの感謝の気持はとも言葉で言いあらわせるものではありません。私は常にこのような祈りでもって、あなたのために神に祝福をお祈りしています。神よ、もし目をお持ちならば私を見て下さい。もし耳をお持ちならば私の祈りを聞いて下さい。どうか私を聖書でもって教化して下さい。主よ、どうぞあなたの霊をわがハーディー様の上に送り、私を悲しい状況から救うようにして下さい。主よ、お願いです。あなたの目をハーディー様の上に留め給い、彼を病氣や誘惑から守って下さい。

あなたの忠実なしもべ

ジョゼフ・ニイシマ

二十年の歳月がすぎた一八八五年に、この国外逃亡者は祖国において、影響力のある名譽な地位を占めていた。その彼は、好んで彼がアメリカの両親と呼び、その名をミドル・ネームとして採用したところの人々に対し、彼の生い立ちと、彼が日本を脱出したときの状況に関するより詳細な手記を送ってきた。彼の日本の家に関する興味深い絵を提供してくれるこの物語を次にかかげよう。

日本国京都*、一八八五年八月二十九日

アルフィアス・ハーディーご夫妻様

物心両面において、私の幸福のために示して下さった限りない愛とたゆまぬ関心の故に、生みの親にまさって負うところの多いお二人様に、心からの感謝と愛情をこめて、私の青春時代に関するこの短い手記を捧げるものであります。

万感の感謝をこめて、息子、

ジョゼフ・ハーディー・ニイシマ

〔青春時代〕

〔誕生と命名〕

私は日本の或る藩主「板倉勝明」に仕える家に生まれた。藩主は江戸（一八六八年以降は東の都を意味する東京と改称）の町なか、それも將軍の居城からさほど遠くないところに藩邸を構えていた。彼の所領は上野こうつけの国にあり、その安中あんなかと呼ばれる城下町は江戸から京都へと直接に伸びている二本の街道の一つ「中山道」に臨んでいる。それは人口四千人に満たないつつましい町で、首都からほぼ北の方角に約七十マイルのところに位置している。その江戸藩邸は家臣たちの家がずっと取囲み、正確に正方形の囲い地を形成していた。

私はこの囲い地の構内で一八四三年一月十四日^{*}に生まれた。私より先に四人の姉^{**}が生まれていた。そういうわけで、私はこの家族にできた最初の男の子だった。封建制度がしっかり根をおろしていた頃で、武士階級のしるしとして大小を帯びることを許されていた家では、男の子は女の子よりもんと尊ばれたのである。というのは、父が死んだ場合、その階級と家禄を永續させるためには、どうしても男子の相続人を必要としていたのだから。それで私の誕生は家中に、特に私の祖父に、大きな喜びをもたらした。祖父は男の子がうまれたと聞くと、大声で「しめた！」と叫んだ。これは長い間抱いてきた望みや願いがかなえられたときに、日本人がよく使う最も喜ばしい叫び声なのである。

われわれの太陰暦は太陽暦よりひと月ばかり遅れるのだが、^{***}たまたまその時は松の内だった。日本では正月は最もめでたい時期である。どの家でもシメ「注連または七五三と書く」と呼ばれる複雑で途方もないお飾りをつけていた。あ^{***}け方、お飾りを外す直前に男の子の誕生となった。吉兆をあらわすシメにちなんで私が七五三^{しめ}太^めと命名されたことは疑いの余地がない。しかし隣近所では、私が生まれたときに祖父が「しめた！」と叫んだのでそのように名付けられたというふうにいわれていた。この名前には二重の意味があるのかもしれない。ともかく私は七五三^{しめ}太^めと呼ばれ、日本流に新島という名字の次にその名を書いた。私が赤ん坊だった頃、うちでどういう出来事が起こったか、私はむろん知らない。しかし、思い出す限りでは、私は家じゅうの寵児であり、特に祖父のお気に入りだった。私は主として祖父の膝の上で育ったのである。私はまた、ほんやりとはあるが、時々祖母におんぶされたことを思い出す。家の中で母がお針やつくろいもので忙しくしている時には、よく姉たちにおんぶしてもらって戸外に出たものであった。四歳のときに弟が生まれた。あの時どんなに嬉しく感じたか、今でもよく思い出すことができる。彼は何という小

さな赤ん坊だったことだろう。この子が少し大きくなって、彼のためにコマをまわしたり、タコを揚げてやつたりするようになったら、どんなにすばらしいだろうか、と私は思った。

〔新島家の宗教〕

五歳のとき宮参りに連れていかれた。その神は私の生涯の守護神と考えられ、神から私にたまわるご加護に対し、家族の感謝をささげるためであった。それは家じゅうにとって最も喜ばしい機会であった。父は私がさすために二本の小型の刀を買ってくれた。その日私を着るために一張羅の絹の着物が作られた。私は両親、祖父母と一緒に宮に詣でた。家に帰るとお菓子、小さなタコ、コマ、その他あらゆる遊び道具が私のために山と積まれたのである。

祖母があゝの世に旅立ったとき、人間の死というものがいかに深い感銘を与えるものであるかをさとしたことを、はつきりと思い出す。祖母は人に好かれる気質の女性で、晩年には貧しい人に惜しみなくめぐんであげることを常としていた。お寺の坊さんたちによれば、あれだけいつもほどこしをしてきたのだから、祖母の未来のすみかは幸福な涅槃であるに相違ないとよくいわれていた。彼女がいまはのきわに「往生じゃ！ 往生じゃ！」と叫んだことをまざまざと思い出す。その時私は祖母が涅槃に入り、慈悲深い仏様のみ胸に受容られようとしている、と思ったのである。葬式の時の家の中の混乱のことも思い出す。隣人たちがやってきて、遺族を慰めようと躍起になったし、祖父は隣人たちのために惜しみなく多くの種類のごちそうと酒等をふるまった。当時私は六歳だった。葬式の当日、私は時には自分の足で歩き、時には誰かにおんぶしてもらいながら、葬列についていった。お寺が遠方にあるため早朝に出発した。その寺の境内の先祖たちの許に祖母は葬られるのであった。寺の本堂に入ると、沢山の僧侶が紫、赤、黒の

ケサをつけて現れ、太鼓を叩いたり、どらを鳴らしたり、仏教のお経を繰返しあげることによって、おごそかな儀式が行われた。

幼い頃、父は毎月または毎年の祭礼の日に従って、いろんな神社にお参りするために私を連れて出かけたものである。そういう日には神社の境内はふつうあらゆる種類の売店でごったがえし、絵、タコ、コマ等さまざまな種類の遊び道具をはじめ、菓子、飴、果物、花、植木等が売られていた。

ここで忘れずに述べておかなければならないことは、父と祖父がいかに熱心な異教の崇拜者だったかということである。祭礼の日には二人は神社にお参りすることを決しておこたらなかったし、また家の中にもたくさんの神々をまつていた。居間の神棚に十二柱^{はしち}、客間にもう十二柱と先祖の位牌、そして台所に少くとも六柱の神がまつられていた。朝には神仏にお茶と御飯をそなえ、夕方には灯明をあげた。おそなえのたびに彼らは深々と頭を垂れ、家族のために祈るのであった。私が思い出す限りでは、家族の生命と繁栄とは神仏次第によるということを完全に確信していたにちがいない。幼くて思慮のなかった私は、祖父と父こそはこの世における最良の人々だと考えていた。もちろん私は彼らの例にならない、しばしばこれらの物言わぬ偶像の前に頭をたれた。それは子供心にも、立派な武士になれるよう、知恵と技倆を習得したいという野心からなのであった。

〔家庭教育〕

父は書道の教師だったので、書道と学問の神〔天神〕を特に信仰していた。そしてそのお宮に詣でては、息子が書道に熟達しますようにと祈るのであった。私が父の後継者となり、父の授業を助けるようになることを父が望んでい

たことは、私には痛いほどよくわかっていた。私はあの退屈な仕事に専心することはどうにも我慢がならなかった。けれども私は少年時代の何年間か、父が注意深く書いた手本に従い、半日を費して繰返し、四角ばった文字を書くことを余儀なくされたのであった。

若い頃に私が受けた家庭教育について、ここで一つの例を述べてみよう。或る日私は腕白ぶりを発揮し、母から用事をいつかつたのにいうことをきかなかった。母に叱られて私は口ごたえした。祖父がそれを聞きつけ、まっすぐに私を追っかけて来て、物をもうわずに私を取りおさえ、ふとんにくるんで押入れにとじこめてしまった。とじこめられること一時間で私はこの罰から開放された。これは私が祖父から受けたそもそも最初の罰であったと信じている。その時私はとるにたりないわるさに対して祖父のやり方は厳しすぎるという気がして、部屋の隅でしくしく泣いていた。しばらくすると祖父は私のところにやってきて、やさしく、もう泣かんでもよい、と言った。それから彼は私がこれまでに聞いたことがないほどのやさしさと愛情をこめて笹の話をかかせてくれた。「憎んでは打たぬものなり笹の雪」(もし私が若笹を愛していないのであれば、垂れさがった若笹から雪をふるい落とすために若笹を打つことがあるだろうか)という句を教えたあとで、「七五三太よ、この意味がわかるか」と祖父は聞いた。そしてその意味を自分で説明してくれた。「おまえはまだ幼くて、ちょうど笹のようにやわらかい。ちょっとつもった雪の重みで柔かい笹が簡単に折れるように、もしおまえの悪いくせがお前をそこなってしまうたら、おじいさんはどんなに悲しいことか。お前をこのように罰したおじいさんはお前に悪意を抱いているのだと思うかい？」私はそのとき黙っていた。しかし祖父の言う意味と、私を矯め直すために祖父がどんなに暖い意図をもっていったかは、完全にわかった。私は自分の口答えを本当に恥じていたし、祖父の罰は善意から出た行為だと考えた。祖父の教えは私の若い精神に深い

印象を与え、それ以後は前よりもずっと素行があらたまるようになったと信じている。しかしながら、私はほかの男の子たちと同様快活でよく遊んだ。コマまわし、輪まわし、タコあげが大好きだった。特に好きだったのはタコあげで、タコをあげに出ていくと夕食時に帰宅することを忘れることがしばしばあった。このことで甚だしく母に迷惑をかけた。このため父は私にタコをもう買ってくれなくなった。そこで私は父に内密でタコを作るのに必要な材料の一切を確保し、自分自身で第一級のタコを作りあげた。そのタコが青空にまっすぐに上るのを見たときどんなに意気揚場としたか、とても言葉に表わせないほどである。走ったり跳んだりすることもまた大好きだった。左のこめかみの上にある傷あとはあやまってこけた時の記念碑である。それは私には大いに恥ずかしい出来事であり、およそ二か月間も家から出られなかった。

それ以来私は子供じみた荒々しい遊びと手を切り、家にいて勉強したり字を書いたりすることを好むようになった。私はまた隣人について絵の稽古を受け、純日本式に遠近法ぬきで鳥や花や木々や山を描いた。当時私は九歳をすぎたばかりだった。

〔作法の訓練〕

あととり息子であったため、私は母から、藩主に仕えていた高官たちには深々と頭をさげるよう特別な注意をうけていた。この高官たちの好意によって、私が父の位よりもずっと上位にあがれるように、というのが母の野心だったのである。しかるに私は近所の何人かの青年たちのように、そんなことに注意を払ったりは一切しなかった。彼らはきわめて丁寧なお辞儀をし、おべっかを使うことにかけては専門家だった。私の若げの至りがそれに反撥したので

あったろう。さらに言えば私は非常に内気であり、発音に多少の障害があった。見知らぬ人と話すことを余儀なくされる時には、あまりはつきりとものが言えないのであった。時には近所の人とさえ話すことを拒否した。これは母にとっては大きな不安のたねだった。母の影響によるものか、それとも父の決断によるものかわからないが、私は礼儀作法の塾にやられ、貴人たちの面前における深々としたお辞儀の仕方、優雅な立居振舞いを学び、丁重な言葉使いを修得することになった。私の先生は本当の天才に思えた。彼は私にたくさん面白い話をきかせてくれ、できるだけしげしげと来るように招いてくれた。こうした昔風な丁重さを修得するのに一年間以上を費したと思う。その利益は当時の私にはわからなかったけれども。

「家老のお気に入り」

私の若い頃の一切の出来事は藩主の所有する四角い囲い地の中でおこった。それはほんの小さな場所にすぎなかったけれども、私にとってはなかなか小世界どころではなかった。どのような出来事が起ころうと、どのような噂話がひろまろうと、すべて私の幼い心には小さな事件には思えなかった。とりわけ、藩主は私たちにとって常に恐怖の的に思われた。殿様は自分勝手に、無礼者として、私たちの首をはねたり、私たちを追放したりすることができた。殿様からほんのちょっとした好意でも示されると、私たちはそれを大へんな幸運だと考えた。そういうわけで、藩中の者は誰でも、事実上殿様の領地を管理している家老たちを通して、主君の愛顧を蒙ろうと欲したのである。私が幼かった頃、父はよく私をつれてこういう家老の一人（尾崎直紀なおのり）のところに出席したもののである。のちには父と一緒になく、自分一人で彼の家に行った。できるだけしばしばやってくるように言われていたからである。彼には子供がなか

ったので、特別な用事のない時にはいつも喜んで私と遊んでくれた。夕方までそこにいた時、私は時折家老の膝の上で眠ってしまい、家老にだかれて家に帰ったりした。絵を習い始めると、その絵を持って彼に見せにいくのが常であった。彼は私の進歩を見て心から喜んでくれた。彼は客があるとよく私を呼びによこした。私が礼儀作法の塾で丁寧な動作を習っており、特に食事や宴会の席で来客に酒をついだり、もてなしたりすることができたから、そういう場合にはとても重宝だったのである。彼は先祖の墓参りをしたり、神社にお参りするときにはよく私をつれて出掛けた。本当に私は彼に愛着を感じていた。彼が私をまるで自分自身の息子のようにかわいがってくれたからである。彼は乗馬の名手であり、弓術においても達人だった。その上、彼は気骨のある人だった。藩主の極端な気まぐれと過度の飲酒のゆえに、彼はしばしば藩主に諫言した。そこで藩主は彼を側に置いておくことが面白くなくなり、城下町安中に送り、城代家老とした。それを藩主は昇進と称したのであった。彼が安中に向けて江戸を出発することになった日は、私にとって何と苦痛に満ちた日だったことか。私は父や、その他大勢の人々と一緒に彼を見送って、あの大都市の町はずれまで行った。最後の別れを告げる時、私ははげしく泣いた。彼の方でもいくらか動かされたようだったが、男らしくおさえ、私に愛情にみちた感動的な微笑を示した。彼の別れの言葉はこうであった。「七五三太よ、さようなら。いい子でいるんだぞ。大きくなったら、安中まで会いにくるんだぞ。」それから彼は供の者たちに出発の合図をした。彼はたくさんの供まわりの者どもを従え、駕籠^{かど}は動き始めた。父と一緒に家路についた私はげっそりと疲れ、どこにもぶつけることのできない気持を味わっていた。これは私の生涯の最初の十年間に起った重大事件の一つだった。同じくこの十年間に、私の姉二人が結婚した。

「ペリー提督の来日」

ちょうどこの頃、日本は最も苦痛にみちた状態にあった。人民は徳川家の治下三百年の太平に慣れっこになっていた。幕府の掟はきびしく定められていた。幕府の為政者たちは極度に疑い深く、また恐るべき圧政を敷いてきた。人民の希望は完全にふみにじられた。多くの武士はほとんど刀の使い方を忘れる始末であった。鎧は骨董品として倉庫にしまわれており、腐って用をなさなかった。事実、人民は臆病になり、腐敗しており、無気力になっていた。淫蕩の風がほぼ全国にみなぎっており、まことに何らかの改革が迫られていた。少数の先見の明のある愛国者たちはこの悲しい状態を嘆き、当然起こるべき革新に希望を抱いていた。けれどもその実現はほとんど彼らの期待を越えたものだった。ちょうどその頃（一八五三年）、ペリー提督麾下の有名なアメリカ艦隊がわが水域に突如姿をあらわした。この事件は国内に恐るべき混乱をもたらした。人民はアメリカ船の大砲の轟音に一驚したのである。しかしながら、国内の雄藩諸侯の大多数はアメリカ人うちはらうべしというきわめて性急な雄叫びをあげ、幕府に対し、ただちにアメリカ船のわが水域からの撤去を強要した。しかしわが国には要塞もなく、軍艦もなく、大砲もなく、戦争の訓練をうけた軍隊もなかった。幕府の枢機にあずかる人々はただちに、アメリカの艦隊を日本の水域から追い払おうとすることがいかに無益なことであるかを見てとった。彼らはアメリカ側の動機が全く平和的なものであることを知ったので、通商のためにいくつかの港を開港することに同意した。このアメリカとの条約に引続いて、いくつかのヨーロッパ諸国との条約がまもなく結ばれた。しかし老中たちのこの措置は元気のいい藩主たちを憤激させた。あらゆる種類の非難が幕府に向けられた。將軍は雄藩の君主たちから卑怯者、夷狄の奴隸などと呼ばれた。やがて党派心が燃えあがった。九州と四国の指導的な藩主たちは同盟を結んで將軍に抗して立上った。彼らは血気にはやる数多くの若い武

士たちを全国に送り、幕府の失政と諸外国に対する人民の憎しみをかきたてさせた。王政復古と夷狄うちはいの叫びはほとんど国中にひびきわたった。これこそまさしく日本の最近の革命の出発点だったのであり、さいわいにしてこの革命は結果として王政復古をもたらし、また外国人をわが水域から追い払う代りに、外国との自由な通商を開くことになった。

〔藩主板倉勝明のこと〕

日本史におけるこの異常な時期と関連して、私の藩主「板倉勝明」について若干述べておかななくてはならない。彼は中国の古典に精通しており、国内では藩主たちのうちの最も傑出した学者として有名だった。先見の明があり、目的意識もきわめてはっきりしていた。アメリカの艦隊が日本の水域に現れるよりもおよそ五、六年前に、ほとんどの時間を藩邸ですごしてきたこの藩主は、国の軍事制度は改善されなければならないこと、そしてまた人民はよりよい教育を受け、もっと情報を与えられなくてはならないと考えた。彼は自分の家来の中から二、三人の将来性のある若者を選び、幕府がたてたばかりの軍事専門学校^{*}に入学させた。彼は家来たちに命令を下し、老人を除くすべての者たちに剣術と馬術の訓練をうけるよう強制した。さらに漢学所を設け、若い家来たちには義務教育をほどこした。彼は若い時分に過度に飲酒にふけり、またお気に入り友人や臣下には高価な贈物をするのが大好きだったので、いざ家来たちを外国製の武器で装備する段になると彼の資金はほとんどからっぽであった。オランダ人が日本に持ち運んできたヨーロッパ製の大型砲や小銃を買うためにかねを手に入れようとすれば、藩内の農民や商人に余分の税金を課するはかなかった。彼は藩内の仏教寺院からすべての青銅の鐘を没収し、それでたくさんの野砲や臼砲を鑄造した。その

ような途方もない努力をして、彼はすべての家来が使用するように、新式の大砲や小銃を十分な数だけととのえることができたのであった。藩主の命令をうけ、私は十一歳のとき馬術の塾に通い始めた。馬術は剣術ほどには面白くなかった。馬はあまりよく調教されていなかった。ある馬は全く醜悪そのものであり、私はそういう馬に乗っている代りに、その背中で運ばれている、ということがしばしばあった。

〔蘭学に打ち込む〕

十四歳のとき私はこういう訓練を廃し、漢籍の勉強に懸命に打ち込んだ。ちょうどこの頃藩主はオランダ語に精通している日本人の学者を藩に招聘し、この外国語を彼の家臣に教えさせた。藩主はこの教師につかせるために家臣の中から若者を三人だけ選んだ。私はその時選ばれた三人のうちの一人で、しかも最年少だった。私はこの教師についておよそ一年間オランダ語を勉強した。彼の学識はやがて幕府にも知れわたり、彼は長崎に行ってオランダ人から技術と航海術を学んでくるよう任命を受けた。彼が去ったのち私は徐々に蘭学に対する興味を失っていき、一時はまったくオランダ語を中断していた。その間に私の漢学はいちじるしい進歩をとげた。そのおかげで、特別なはからいによるものではあったが、藩主は私を漢学所の助教師に昇進させてくれた。また漢学研究に一層興味ができた。そういうするうちに藩主は重病にかかり、みまかった。それは私にとって大きな失望であり、悲しみであった。彼の弟〔板倉勝殷^{かつまさ}〕があとをついで新藩主となった。しかし弟の方はどの点から見ても、なくなった兄君にはるかに劣っていた。新藩主は家来たちの状況を改善するために何一つかまうところがなかった。藩邸内のすべての出来事が今までとは異った様相をおびてきた。殿様のたのしみは主として食うことと飲むことだった。彼は部下を昇進させたり罷免し

たりするのに、お気に入りの方の意見をきくことがしばしばだった。それで私は学問を続けようという望みが一切ふつとんでしまったように感じた。しかしながら私は目的をとげることについて怠けていたわけではなく、できるだけ勉強を続けようと努めていた。父は私がこれ以上学問を続けることが賢明なことかどうか疑いをもつようになった。父としては書生たちの間にしばしば見出されるあの無作法で不注意な連中に私が影響されはしないかと恐れたからである。その上なお、父は依然として私に書道の塾で自分の後継者になってほしいという希望を失わないでいた。そういうわけで父は私の学問に口をさしはさみ、書道の教授を手助けせよといい始めた。それはしかし、私としてはあまり気乗りのしないことだった。

当時としては息子が父親のいいつけにそむくなどということはほとんど不可能に近いことだった。だから私としてはいいつけ通りにせざるをえなかった。私の目的を達成するための唯一の望みは私の漢学の教師〔添川廉斎〕の、そしてまた、以前に述べた安中の家老〔尾崎直紀〕の好意を得ることだった。このことを深刻に考えていたうちに、兩人は二、三か月の間になくなってしまった。その時の落胆したこと。私はしばしば心の中でこう叫んだ。「殿様はなくなり、先生もなくなった。私が望みの最後の綱をかけていた安中のご家老もまたなくなった。私は何という不運な男だろう。学問を続けるのを助けてくれる人は誰か。将来の自分の運命はどうなるのだろうか？」と。私はこの世にほとんど一人ぼっちで、よるべない者として取残されたような気がしたのである。

〔出仕と学問の板ばさみ〕

十六歳になると出仕を始めなければならなくなった。藩邸の表玄関に接続した小さな事務所に坐っていることが私

の義務だった。その事務所には常に六人以上がつめていた。私たちの仕事は玄関の番をすることだった。そして殿様のお出掛け、お帰りのたびごとに私たちは玄関の間の片側に一列に並んで坐り、タタミの上に深々と頭をさげなくてはならなかった。それ以外に私たちは殿様のために記録役をつとめることになっていた。しかし私たちの時間は主として馬鹿げた噂話をしたり、しゃべったり笑ったり、何度もお茶をのんだりして過ぎていった。私はこういう連中と一緒にいることがほとんど堪えられないほどであった。けれども私としてはそれへの参加を免除してもらう方法はなかった。のみならず、その事務所で勉強することは彼らによって大いに妨げられた。私が十七歳になった年の早春に、殿様は將軍の命令により、約三世紀前に日本全国を平定し統治した有名な英雄「豊臣」秀吉のたてたあの偉大な城を守るため、大坂に派遣された。殿様はむろん多数の家来を連れて行った。父もその中の一人だった。父は殿様の書記役として随行し、彼の塾を私の手にゆだねた。私はまた殿様から留守中は江戸の藩邸で書記役をつとめるよう命令を受けた。家と藩邸とでの二重の義務に大いに多忙をきわめていた間に、ヨーロッパ諸国のことを知りたいという新たな欲求が起こり、ほとんど堪えがたいほどになった。当時ではオランダ語が私たちの学びうる唯一のヨーロッパ語だった。私は家から一マイル以内のところによいオランダ語の先生^{*}をみつけた。私はたくさん義務に縛られてはいたが、できるだけ暇をみつけてはそこへ通うのが常であった。けれどもこの新しい学問が強烈に面白くなると、殿様と父から有無を言わずに押しつけられたあの義務を無視し始めたのだった。私は藩邸の事務所にいなければならぬのに、そこから時々抜け出した。わざとそうしたのだった。というのは、私は君命を無視したかどで、出仕を放棄されることを願っていたからである。しかし私の代りをつとめる者がなかったので、私は依然として事務所に縛られていた。私がしばしば事務所を抜け出したために、殿様の留守のあいだ藩邸の責任者だった上司に非常な迷惑が

かった。記録すべきことが沢山あったにもかかわらず、上司が事務所に来てみると私は不在。上司はしばしば私を叱った。しかし私はそれを意に介さなかった。私はただ彼にむかって、ただちにお務めをやめさせて下さるようお願いした。私がとうてい手に負えないと知ると、上司は時々私の祖父を事務所に呼び出して祖父をも叱った。そこで祖父は私の学問に口を入れはじめた。しかし私は相変らず頑固で、このようなつらい状況の中にあってもなお、勉強を続けたのであった。父が帰ってきて復職したので、私は開放された。それでもまだ出仕から全く自由になったわけではなかった。

ちょうどその頃日本はなはだ乱れた状態だった。ほとんど毎日のように殺人、流血があちこちで起こっていた。臆病者であった殿様はこれに恐れをなし、家臣の中から沢山の若者を選んで身辺の警護にあたらせた。不幸にして私もその一人に選ばれた。殿様が藩邸から出掛ける時にはいつも私はお伴をさせられた。私が十八歳になった年の早春には、安中までもお伴をしたのであった。殿様はむろん駕籠で行き、私たち警護役のものは徒歩だった。私としてはそのような強制に服するには相当な忍耐を要した。安中から帰ってきたとき、私は藩主に仕えることにはもう全く厭気がさした。それから逃れるために家出を計画したことが時々あったが、私はそうするに十分なだけ大胆でなかった。私はあまりにも家に愛着を感じており、両親と祖父に大きな悲しみと不名誉をもたらすことを大いに恐れたのである。このピンチの状態にあった間にも、私は絶望してしょげてしまったわけではなく、家老の一人から何とか好意を得ようと努めていた。この家老の力によって、私は出仕の任務を一部分軽くしてもらった。勉強のための時間がこれまで以上とれることになって本当に嬉しく思った。当時の私は物理学と天文学についての簡単な書物が読める程度のオランダ語を身につけていた。しかし数学にかけては全くの無知であって、この書物の中にある最も簡単な計算でさ

えも私の理解を超えるものであった。そこで私はちょうど江戸に設立されたばかりの軍艦教授所に通う気になり、そこで算数の初歩から学んだのであった。当時軍艦教授所は国内で有能な数学の教師をみつけることのできる唯一の学校だったと信じている。そこでは教師たちから外国の蒸気船について聞かせてもらう機会があったし、そういう汽船を見たいという欲求を覚えたこともしばしばあった。或る日のこと私はたまたま江戸湾べりの海岸を歩いていたとき、オランダの軍艦が停泊しているのをみつけた。それは堂々として、威容あたりを払うものがあった。これら威厳のある海の女王たちを、不細工で不釣合な日本の小舟とくらべてみたとき、このような軍艦を建造した外国人たちは日本人よりも知識においてはるかにすぐれた、優秀な人々であるに違いないことをいやというほど確信したのだった。これはわが国をよくし、改革していかなくてはならぬという叫びへと私の野心を燃えあがらせるための強力な実物教育のように思われた。まずなすべきことは海軍をこしらえること、外国貿易を容易にするために外国風の船を建造することだと考えた。この新しい考えが航海術の勉強へと私を駆りたてたのである。

二年間のきびしい勉強のすえ私は算数、代数学、幾何学を終え、航海術の理論の初歩をもおさめた。ところが私の学習はひどいのはかのため残念ながら中断された。病気は大へん重くなり、肉体は全く衰弱した。そこで約三か月の間休学を余儀なくされた。まだ体は弱っていたけれどオランダ語の本で代数学を始め、元氣よく戸外に出られるようになる前にそれを完了した。しかしこうして小康を得たかにみえたが、それはかえって他の大きな故障の原因となった。眼病、頭痛、不眠が次々に私を襲い、とうとうしばらくの期間学業を廃する羽目におちいたのである。

〔快風丸で玉島へ〕

その年の冬に私ははじめて玉島という、岡山より少し行ったところにある港まで洋式帆船^{*}で行く機会を得た。そのスクーナー船は松山藩主の持船で、その人は私の殿様と親戚の關係にあった。^{**}その關係からして私はただで乗船することを許されたのだった。江戸に帰ってくるのに三か月と少しかかった。この航海は私にとっては非常な喜びだった。私の青春時代のすべてをそこですごした方形の江戸藩邸、したがって天は小さな四角形であると思うようになっていたあの場所から遠く離れて生活しえたことは、とてもためになった。いろんな人々と交わり、さまざまな場所を見るというはじめての経験をした。この航海によって私の精神的な視野がうんと広がったことはあきらかである。大坂の町を訪れたが、そこではじめて牛肉というものを味わった。自由に対する新鮮な考え方に満たされた私は、幕府と關係することによって私の藩主への義務から免れることを目論んだ。そのための方法は航海士として幕府に備われることであつた。しかしその計画はやがて將軍の海軍に備われている人々の生活ぶりをいくらか知るに及んで消え去ってしまった。彼らの墮落した淫蕩な生活はショックであつた。私は彼らと交わることを好まなかつた。こういうわけで私は藩主と縁を切る道を見出しかねていた。それでもなお、自由を得たいという強い欲望のために引き続き藩主を無視し、不服従の気持に駆られていた。小銃を執つて兵士となる準備をするように強いられた時には、断然その命令を拒否したのであつた。

〔天父の発見〕

当時、国内には戦雲が急を告げていた。藩主は力を得つつあつた尊皇派に対抗して、不幸な將軍の側に加担して立

ち上ることを余儀なくされた。私としては尊皇派の方に十分な共鳴を感じていて、それに参加したいと思ったことが時々あった。しかし両親と祖父に私を結びつけていた親愛の絆は私を同時にまた彼らの主君にも結びつけていた。これは私にとって今一つのきびしい試練であった。私は極度に神経がとがり、苛立ちを覚えるようになった。この悩みの中から私を救い出して慰めてくれる一人の友達を見出さなかったならば、私は完全にだめになっていたのであろう。彼は一緒にオランダ語を勉強するために時々家に招いてくれた。蘭学では彼は相当先輩だったので、彼は私にとって大きな助けであった。彼は沢山の書物を貸してくれた。その中にはロビンソン・クルーソー物語の日本語訳があった。外国を訪れてみたいという欲望をかきたてたのはこの本だった。大へん面白かったので、私は祖父にそれを見せ、ぜひ読むように言った。祖父は一読ののち、おごそかな警告を発してこう言った。「七五三太よ、このようなものを読んでではならぬ。これがお前の道を誤らせはしないかと心配だ。」その頃私は或る私塾に通う許可を藩主から得ていた。そこで私の出仕が必要でない時間の一部は塾ですごしていた。それからしばらくして、私の友達は沢山の中国語の書物を貸してくれた。その一冊は北シナ伝道団のブリッジマン博士が書いた合衆国の歴史地理の書物だった。もう一冊は中国におけるイギリスの宣教師のあらわした簡単な世界史。そしてもう一冊はウィリアムソン博士の小雑誌だった。そして私の好奇心を最もかきたてたのは、シャンハイかホンコンで発行された二、三冊のキリスト教の書物だった。私はそれらを熟読した。いくらか懷疑を覚えたけれど、またいくらかは畏怖の念にうたれた。以前に勉強したオランダ語の書物を通して、創造者という言葉は知っていたが、中国語で書かれたこの短い聖書の歴史の中で、神の宇宙創造に関する単純な物語を読んだ時ほど、創造者という言葉が胸にひびいたことはなかった。私たちが生きているこの世界は、神の見えない御手によって創造されたのであって、単なる偶然の産物ではないことを私は知った。

同じ書物から私は神の別の名前が「天父」であることを知り、そのことは私の内部に神に対するさらに大きな尊崇の念をかきたてた。なぜなら私にとって神は単なる世界の創り主以上のものだったからである。これらの書物は、この世に生まれてから二十年間にわたって目隠しされたままだった私の心の目に、おぼろげながらも、一つの存在を見ることを得させてくれたのである。

〔新しい決意〕

当時は外国の宣教師に会うというようなことは不可能だったので、私は多くの疑問点についての説明を得ることはできなかった。私は今すぐにでも福音が自由にのべ伝えられている土地、そしてそこから神の御言葉を教える教師たちが派遣されてくる土地を訪ねてみたいと思った。神をわが天の御父と認めた以上、私はもはや自分の父母にわがちがたく結ばれているとは感じなかった。孝行に対する孔子の教えが、いかに偏狹で偽りがあるかということにはじめて思い当った。そのとき私は「もはや自分は父母のものではなくて、神のものだ」と断言した。父の家に強く私を縛りつけてきた強い絆は、その瞬間にばらばらになった。その時私は自分自身の道を進むべきだと感じたのだ。私は地上の両親よりも一層天の御父に仕えなくてはならぬ。この新しい考えが私を力づけ、私は断然藩主を見棄て、また一時的に家をも祖国をも離れる決意をしたのであった。

〔函館行きのチャンス到来〕

或る朝、江戸の通りを歩いていたとき、全く思いがけないことに、玉島への航海のときに知己となった一友人にで

くわした。彼の藩主のスクーター船「快風丸」は三日以内に江戸を出て函館にむかうところだという。彼は私がまだ航海に興味をもっていることを知っていたので、函館までこの船で短期の航海をする気があるかと訊いた。彼としてはそれは単なるお世辞のつもりだったかもしれない。しかし私にとって、これは並々ならぬ利害の問題だった。彼は急ぎ足で自分の行く方向へ進み、私もこのことについては何らはっきりしたことを言わないで自分の行く道を取った。けれども彼と別れるとすぐに、一つの考えが稲妻のように私にひらめいた。函館に行けるこの機会をのがしてはならぬ、そこから外国への逃亡をはかるのだ、と。すると問題はどうかやってこの機会を利用するかであった。殿様が私に函館まで行く許可を下さらないであろうことはわかりすぎるほどわかっていた。その時思いついたことは、私の目的を達成するのにいちばん適したやり方は、殿様や両親に告げるよりも前に、そのスクーター船の持主である松山藩主「板倉周防守勝静」の好意を得ることだった。私は帰宅せずにまっすぐに松山藩主の信頼の篤い顧問役*のもとに赴き、ご主君の船に函館まで無料で乗せてもらえようとなしてくださいと申し出た。私はその人とは以前から知合いであったので、彼は私に会ったことを大いに喜び、私のためにただちにご主君にこの話を持ち出してくれた。取りきめの内容は、松山藩主が函館に向かう彼の持船に私を備って下さるということ、そして「安中」藩主に私の出張の許可を求めて下さるということだった。松山藩主は欣然として私の願いのすべてをききとどけて下さり、「安中」藩主のところに使いをやって、出仕御免の許可を要請して下さった。その使者は遅滞なく了承をとりつけてくるようにと特にいい含められていた。私の藩主は松山藩主からのこの特別な要求を拒否することなどはむろんできず、使者に対したちによろしいとの答を返した。これで私の問題にはうまくけりがつき、もはや誰一人として私の函館行きを邪魔することはできなかった。

この知らせが父に届いたとき、父は全く困惑した。父は私を行かせることに少しも乗気でなかったが、君命を変えるわけにはいかなかった。隣近所の人々も知人たちもみんな驚いた。準備のためには時間を空費するわけにいかない。しかし母と姉たちの大奮闘のおかげで、すぐに出発の準備ができあがった。家を出ることにきまつて二日目に、祖父ははりこんで夕食をととのえ、近所の人々や友人を招いてくれた。私たち一同が座敷に円陣を作つて坐り、各自の前に低いお膳がそなえられ、いざ食事が始まろうとした時、祖父はみんなに水のうつわをまわしのみするよう求めた。これは二度と再び会えないかもしれないという時にふつう行われる、厳粛な別れの儀式に従つたものである。私のような経験の浅い者にとって、それは何というつらい時であつたことか！ 居合わせたすべての人が泣き、私と祖父以外、誰一人として顔を上げる者はなかった。祖父は如才なく涙を隠し、ふだん以上にはしゃいだ風を装つた。私自身も元氣を見せ続けた。夕食が終ると祖父は私に言った。「七五三太よ、お前の未来は花ざかりの山に遊山に行くようなものだ。少しも恐れることなしに行くがよい」と。^{*}祖父の口から出たこの思いがけない言葉が、男らしく家を出で立つに十分な勇氣を与えてくれた。そこで私は祖父、両親、姉たち、そこに招かれていた人々すべてに向かつてお辞儀をし、広大な世界を見るまでは再び見ることなしと誓つたなつかしのわが家を後にしたのであつた。

弟は相当遠くまで江戸の通りを私についてきた。話しかけようとしてふりむくと、彼は悲しげに泣いていた。そこで私は言った。「弟よ、どうして泣くのか？　まるで女の子みたいだぞ。もうここらで帰つた方がいい」と。こうして、十分に勉強にはげむようにという別れの言葉を与えて、私は彼を帰らせた。（これが弟の見おさめだった。彼は一八七一年、私の帰国の三年前になくなった。）翌朝早く私たちは江戸湾から出帆した。江戸の町を水平線の彼方に

残し、また雪を頂いた美しい富士山を時折遠望しながら。函館までの途中、松山藩主の商品のつみおろしのため、あちこちに寄港した。或る港の入口にさしかかった時、岩礁に当る強い潮の流れに流されて手も足も出なくなったことがある。^{*}陸地からの親切な救いがきて、危険な場所から引っぱり出してもらわなかったら、私たちは難破の憂き目に会っていたかもしれない。江戸を出たのは一八六四年の早春の頃で、一か月以内に私たちは無事に函館についた。ここで私は外国人への接触を計画した。彼らの好意によって脱国を目論んでいたからである。一友人を通してロシアの司祭ニコライ神父に^{**}紹介され、彼の日本語の教師をつとめることになった。彼の影響力を通して私は自分の目的を上げようと思ったのである。

〔日本脱出の計画〕

家から遠くはなれていたため、私はこれまで以上に注意深く観察するようになった。いちばん驚いたことは、人々の腐敗した状況だった。単に物質的に発展するだけで、道徳がそのようなげかわしい状態にある限りすべては無益である、とその時考えた。日本は単なる物質的な進歩にまさって道徳上の革新が必要だ。こうして、外国に行こうという私の目的は一層強化されたのである。

ロシアの司祭宅におよそひと月間滞在したあとで、私は彼に徐々に私の秘密の目的を打明け、それを実行するための助力を頼んだ。その時私は彼にこう言った。日本がいちばん必要としているのは道徳上の改革です、そして私の確信するところでは、その改革はキリスト教を通してもたらされなくてはなりません、と。司祭は私と話すことを大いに喜びはしたが、私が打明けたような計画には反対の意志を表明した。彼はなおも私に自分のところにとどまってい

るようにすすめ、英語のみならず聖書も喜んで教えよう、と言った。彼の警告にすっかりした私は、外国商館に友人を見つけようとし始めた。こうして見つけた最初の友人はイギリス商人に傭われている日本人書記であって、短い会見であつたけれど不思議なくらい親切な関心を私に示してくれた。私は彼が非常に好きになり、彼の事務所にしばしば顔出しさせてもらえるようにお願いした。彼は自分がひまな時は何時でも歓迎するといひ、その上なお、私に英語を教えることを受け合せてくれた。二、三度会つたのち、私は彼に長い間暖めてきた計画を打明けた。彼はそれを聞いて大いに喜び、心にとめておくことを約束してくれた。その計画を何としても実行しようという熱望を抱いていた私は、平民の服装をし、函館の通りを歩くときには目立たないように注意していた。当時武士階級のしるしとみなされていた長い刀はささなかつた。頭髮もより簡単な恰好にした。その友人に秘密を打明けて一週間とたたないうちに、彼はただちに出発の準備をととのえるようにと私に告げた。或るアメリカ人の船長が私を中国まで連れていくことに同意したという。彼の計画によれば、中国まで行きさえすれば、アメリカにわたる好機にめぐまれるだろう、ということであつた。海の彼方の未知の国まで探求の旅に出掛けるこのすばらしいチャンスが到来したことを知らされた時の私の喜びは、いかばかりであつたらう！

ちょうどその頃ニコライ神父は夏の休暇を取つて家を留守にしており、家の管理はすっかり私にまかされていた。函館にほとんど二か月滞在したので、沢山の友人ができ、そのうちの何人かは地方の役所の上級の役人であつたが、そういう友人たちのうちのごく一部の人にしか私は計画を打明けていなかった。アメリカ船にのる準備がほぼ完了すると、函館から突然姿を消したことで私が外国船に逃げ込んだのではないかという疑惑を役人たちがおこしたり、幕府の船が私を追跡したりしないために、私は家から呼び返されたのだというふりをした。当時は誰でも幕府の許可な

しに外国に赴こうとする者は、捕えられれば死刑になるのであった。^{*}

急いで準備をしていたのだが、一寸の暇をみつめて、ロシア人の写真屋に写真をとってもらい、お別れの手紙にそえて両親に送ることにした。そうすることにより私は両親に、遠い国——めあてはアメリカであった——にむけて出発したということを知らせたのである。^{**}

〔ベルリン号に乗船〕

指定されていた時間に私は外国商館に、^{***}アメリカ船までつれていってくれることになっていた日本人の友人「富士卯之吉」を訪ねた。その船は翌朝シャンハイに向けて出帆するはずであった。友人は私を待っていて、暖く歓迎してくれた。彼は深夜の冒険に二人が乗出す前に飲むために、熱いレモネードを出してくれ、危険を前にしてびくびくしてはいけない、と言った。しかし今思い出してみると、私はちっともびくびくしていなかったように思う。その場所に来る前に遠くで犬がほえていたので、私は下駄が犬の注意をひいたのだとすぐに気付いた。そこで下駄をその場にぬぎ、どれくらいはなれた所で、またどの方向で犬がいないのかを確かめようとした。友人に下駄をぬぎすてきた、と言うと、彼ははだしで駆け出して行って、下駄を拾ってきてくれた。それから私たちは波止場まで一緒におりて行った。彼はそこに小舟を一そう用意していた。波止場に立っていると、誰かが近付いてくる音がした。私は急いで舟に乗り込み、舟底に平つくばって、私の持物の入っている荷物の一つであるようなふりをした。それは見張りの男だった。すんでのことで二人をつかまえることもできたであろう。ところが何とさいわいか、彼は臆病者で、私たちを見分けられるくらい近寄ってこようとしなかった。彼はただ波止場で舟の綱を解こうとしていた友人を見ただけ

で、震え声で「だれだ、そこにいるのは？」と訊いた。「わたしです」と友人は静かに答え、明朝までのばせない緊急の用事でアメリカ船の船長のところまでいくところです、と述べた。友人は見張りの男によく知られていたのも、見張りもすぐ誰であるかがわかった。静かに自信をもって友人が手短かに説明すると、深夜の時間であっても波止場から出ていくための通行証としてそれで十分なのであった。漕ぎ出していくと岸には何千という光が見えた。人々は異教の神の祭礼を祝っていた。アメリカ船は岸からかなりはなれた所に停泊していたので、そこまでたどりつくのに相当な骨折りが必要とした。船長は私たちを待っていてくれた。私たちはすぐさまベルリン号に引きあげられた。暖い握手をしてから、友人はさようならを言い、一人で岸辺をさして舟を漕いで行つた。私は船室付の荷物室に入れられ、カギをかけられた。私はすぐに眠りにおちた。すばらしい夜だった。朝になって頭上にひびく水夫らの急ぎ足の音で目がさめた。船室で日本人が船長と話している声も聞こえた。それは税関の役人で、出港前の船を点検するために乗船してきたのであった。私は一室に監禁されていたのだから、起き上ったところで無駄だった。それで私は船長の呼び出しを待ちながら、静かにしていた。

〔脱出の成功〕

その時私の生涯の一切の出来事が脳裡にうかんできた。最も苦しかったのは、両親と祖父に対する堪えがたいほどに胸をしめつける愛着の情だった。けれども後をふりむくにはもう遅すぎた。それに今までのところは嬉しいことに成功したのだ。これまで何一つ困難を経験したことなかった私が、新しい生活を始めるということ、私の消したい欲求を満足させるために何物かを求めて、ほとんど無際限の大洋に乗出すということは、並たいていのことでは

なかったのである。私の勇気をもちこたえさせてくれたのは、見えない御手が必ずや私を導いて下さるという考えだった。私はまた新しい冒険のために命を賭けるつもりであり、心の中でこう言った。私の試みが全く失敗に終わったとしても、それは祖国にとって何らの損失ではなからう。だが、もし、未知の国での長い放浪の後に帰国することを許されるならば、私は愛する祖国に何らかの奉仕をすることができらう、と。

昼近くになって船長はカギをあけて甲板の上に呼び出してくれた。船は港から相当遠ざかっており、あの美しい函館の町はほとんど水平線の彼方に沈んでいた。船は沿岸ぞいに航海していたので、十二日間というものは青い山々が見えかくれていた。広大な水平線の向こうの祖国の山々の青い頂きといよいよ別れる時がきた。私はその姿を見おさめるために帆桁の上にのぼった。その時私は幾分か感傷的になった。しかし未来への思いが私に新鮮な勇気を与え、私は故国の方角を眺める代りに中国の方角を望んだ。祖国の山が視界から消えて三日目に、私たちの船は小さな引き舟によってシャンハイへと曳航されたのである。

〔航海中の経験〕

ここで私は航海中の経験を語らねばならぬ。私は船賃を払うことができなかったのも、船長には船内で働くという約束をしていた。こうして船室での仕事が始まった。しかし、ああ、私はひとことの英語もしゃべれなかった。そこで船長は親切にも船室内にある物品の名を私に教えてくれた。まさしく実物教育である。彼はひとつの物を指し、私にそれをわかるようにはっきりと発音してくれた。船中に一人の乗客がいた。アメリカ人であったか、イギリス人であったかは知らない。彼もまた私に英語を教えてくれた。彼は非常に親切にしてくれるかと思うと、時には非常に乱

暴だった。或る時私は何を命令されているかがわからなかったために、彼からなぐられた。その時私は怒りが心頭に発し、復讐の念にかられて私の日本刀を求めて自室にかけこんだ。刀をつかみ、室からとび出そうとした時、たちまち一つの考えが湧いた。そのような行動をとる前によく考えなければならぬ、と。そこでベッドの上に腰をおろして、心の中に言った。これは取るにたらぬ事柄ではないか。恐らく私はこの先もつときびしい試験に会うことだろう。今ここでこれしきのものを忍ぶことができないければ、大試験にどうやって対処できようか？ 私は自分の辛抱のなさを恥じ、今後はどのようなことがあっても刀に手をかけまいと決意した。

中国への航海の途中に今一つのことが起こった。皿を洗い終ったあとで、洗い桶の水を流したときに、うっかりスプーンを一箇海中に捨ててしまった。「船長がお前をなぐるぞ」といって、中国人の給仕が私をおどした。それは高価な銀のスプーンだったような気がした。そこで私は自分の持ってきた日本のかねのすべてをもって船長の部屋に行き、両手や肩の身ぶり手ぶりで船長に出来事を告げ、なくしたスプーンの代りにこのかねを受取って下さるようお願いした。本当に驚いたことに、船長は笑い、かねを受取ることを拒否した。今やここに私はこの船長、自分の船をくびにされる危険を犯してまで、親切にも私をシャンハイまで連れて行って下さった船長の名前をここに記させて頂く。その人こそはマサチューセッツ州セイレムの市民、ウィリアム・T・セイヴォリー船長その人である。^{*} シャンハイで私はワイルド・ロウヴァーという別のアメリカ船に乗換えた。その船長はマサチューセッツ州チャタム生まれのホラス・S・テイラーという人だった。セイヴォリー船長は同じ船で日本に帰ることになっていたの、彼は私の世話をテイラー船長に頼んでくれたのであった。

「ワイルド・ロウヴァー号でボストンへ向かう」

ワイルド・ロウヴァー号に移って二、三日後に私は船長のところに行って長刀を差出し、アメリカ合衆国まで連れて行ってほしいと頼み、船賃代りに無給で働くことに同意した。こうして私は船長の船室で働きはじめた。船長は私を日本名で呼ぶことができなかったので、ジョウという「新しい名前」をつけてくれた。こういうわけで私のアメリカの両親は私をジョゼフと呼ぶことになったのである。船は九月のはじめまでシャンハイに停泊していた。それから木材積み込みのためにフーチョウ〔福州〕へ行き、再びシャンハイに帰ってきた。それからホンコン、そしてサイゴンに行き、サイゴンで米を積んでホンコンに戻った。ホンコンで私は中国語訳の新約聖書を買いたいと思ったが、日本のおかねは通用しないことがわかった。そこで私は船長に頼んで私の小刀を八ドルで買ってもらった。そのかねを入手してしばらく後、船長はホンコンの町を見学するために、中国人の給仕と一緒に上陸する許可を与えてくれた。その時私は中国人の書店で新約聖書を買う好機にめぐまれたのであった。船は荷をおろしてまもなく、こんどはマニラへ向かい、「マニラ」麻をいっぱい積み荷して帰国の途についた。マニラの港を出帆しようとした矢先に、港の出口にイギリス船がアメリカ船を待ち伏せているとの知らせが入った。その頃アメリカでは南北戦争が終つていたことを知るよしもなかった船長は、そのイギリス船がわれわれの船に何かの危害を加えるかもしれないと恐れた。船長は甲板の上でさかんに望遠鏡で様子を探り、航海士たちはあわてて倉庫において、いざという時の自衛のために火薬と砲弾を準備した。しかしながら、私たちはこの怪しい船の方に進んでいき、その側を通りすぎたけれども、何一つ妨害は受けなかった。私たちがマニラを出たのは一八六五年四月一日のこと[※]で、ボストンに着くのにちょうど四か月かかった。私たちは食料も水も十分積み込んでいたので、途中どこにも寄らなかつた。

この航海の期間、私の仕事は食事どきに船長の給仕をすること、船室をきちんと整頓すること等であった。船長への奉仕をしなくてもよかった時には、綱引きの仕事も時々やった。航海中最も楽しかったことは、船長と一緒に毎日船の位置を計算することであった。彼は私に対して非常に親切で、私をまるで自分の兄弟の一人のように扱ってくれた。彼は私にむかって不機嫌な言葉を用いたことは一度もなかった。乗組員のすべてが私に愛想よくしてくれた。私は時々船首部に行つて水夫たちに会いたいと思つたが、そうすることは許されなかった。船長は私に水夫たちからは遠ざかっているように注意した。一、二度はげしい嵐に見舞われたほかは、航海中ずっと好天気と順風に恵まれた。ちようど喜望峰の沖合いで竜巻を見た。こんなすばらしい眺めをそれまで見たことがなかった。それから貿易風に乗り、平均時速十三マイルの速力で毎日進んだ。

コッド岬の近くまで来たとき、一人の漁師から南北戦争が終つたこと、リンカン大統領が暗殺されたことを知らされた。^{*}船はゆっくりとボストン港に入つていき、私たちはま近に金色のドームの建物^{*＊}を含む美しい、にぎやかな町を見た。船長は乗組員に錨をおろすことを命じた。錨はするするとおりていき、船に乗つていた一同は航海が終つたことを喜んだのである。

けれども私にとつてはボストン到着は喜び以上のものだった。というのは、私はまもなくして、航海の終りが私にとつて幸運となることがわかつたからである。船長の親切によつて私は船の持主とその夫人に紹介された。お二人はただちに、私が住むことになった国での私の養い親となつて下さつた。お二人のやむことのない世話と、賢明な導きと、絶えまない祈りによつて、私は青春時代に故国において、あれほどしばしば、あれほど漠然と夢見てきたいくつかの夢を実現することを許されたのである。

新島は後年の日記の中でしばしばこの「青春時代」のことにふれている。彼は自分の母について次のように述べている。

「母は非常に親切な心の持ち主で、自分の家にもいっぱい仕事があったが、いつでもすぐに近所の人を助けてあげた。……ある日のこと母は病気でねていた。母は医者からもらった薬をのんではいたが、私は母のことが心配でたまらず、何とかして妙薬を手に入れたと思った。そこで私はお宮に行き、どうか母をなおして下さるようと神に祈った。私は朝の供え物にする菓子を少々買い、どうか靈験がありますようにと祈りながらそれを母に与えた。自然の力でおったのか、それとも彼女の意志ないし信心の力でおったのか、そのところはわからないが、彼女はその菓子をいただいたあとすぐによくなったのである。彼女は神様が私の母思いのまじめな願いをききいれて、そんなに早くいやして下さったのだと本当に信じてしまった。私は近所の人々に対しても同じことをして、病気をなおすことにしばしば成功したのであった。」

新島が最も暖い愛を抱いていた自分の祖父については、次のように述べている。

「祖父は四十年間にわたって家令の職を忠実につとめた。彼は殿様にむかってしばしば、老齢その任に堪えず、仕事もつらい故に家令の職から放免されることを願い出た。七十八歳、それは私が家郷を離れる一年前のことであったが、その年になって祖父は榮譽と年金を頂戴してようやく退職することを許されたが、それも数回お願いを繰返した

あとのことであつた。彼は私の訓育に特別の意を注ぎ、夕方になると私を膝に乗せ、昔の英雄や善人たちの話をしてきかせた。祖父は私に、両親には従順、友達には親切であるべきこと、おしゃべりをせず、謙遜であるべきこと、盗みをせず、嘘をつかず、へつらわないようにと教えた。祖父は私を非常に深く、強烈に、情愛をつくして可愛がってくれた。ああ、私は祖父が私のためにつくしてくれたことを忘れるわけにはとてもいけない。」

新島は自分自身について次のように記している。

「私は両親に対して従順だった。そして幼い頃両親が教えてくれたように、人の手で作られた神々を非常にうやうやしくおがんだものである。私は先祖やなくなった友人の命日を嚴重に守り、その日には墓地へ行つて彼らの霊に合掌した。私は時々朝早く起き、家から少なくとも三マイル半はなれている神社へ行つては神々を礼拝した。そして朝食にまにあうよう急いで帰宅するのであつた。私がそうしたのは神々からの祝福を期待したためばかりではない。私の両親や近所の人たちからほめられたいという気持ちもまじつていた。……ペリー提督が江戸湾に来航してアメリカへの開港を迫ったとき、われわれは彼を沿岸から追払うことを非常に強く欲した。ただし、そうするための手段は持ち合わせていなかったけれども。わが国は三百年以上にわたつて太平をむさぼり、柔弱のきわみに達していた。われわれの刀はさやの中でさび始めていた。われわれは刀が使えるように刀鍛冶の許に修理に出した。長い間仕事がなく貧しかった鉄砲鍛冶たちは豪華な衣服を身にまといはじめ、逆に流行を追う人々のおかげをこうむつていた芝居の役者たちはもはや贅沢ができなくなった。帯刀の特権を持っていた者は誰でも剣術、軍事教練、馬術にせいを出し始めた。当時私はまだ若年であつたけれども、日本の古い歴史にしばしば登場するような勇士、偉人になりたいと思

っていた。私は時々いくさの神をまつる神社にまいり、私に力を授けて下さるようにとまじめに祈った。そしてその儀式のさいには非常にばかげたふるまいをやったこともある。ある時中国の英雄の伝記を読んでいたところ、その人が剣の修業をやめたときに発したという有名な言葉にでくわした。いわく、「剣はただ一人の人を殺すためのものにすぎない。わたしはこれから万人の敵を殺す道を学ぶのだ。」つまり彼は兵法を学ぶつもりだったのである。私は自分自身の素質を測ることはできなかったけれども、この英雄の例にならい、剣によらず、兵法によって何千人の敵を倒したいと思った。この考えのおかげで私は剣道の修業をやめ、それ以後は全く学問にとじこまることになった。私は非常に熱心に勉強し、時にはニワトリの鳴き声を聞いてやっと寝るという有様であった。私は西洋の諸国民を、それが外国人であるが故に憎んだし、はじめは西洋語を勉強することを嫌った。西洋語は私には大層へんな、奇妙なものに思われた。殿様は私に非常に親切だった……しかし天は彼の生命を長らえさせなかった。殿様は私が十六歳のときノドの病気でなくなった。それは私には大きな悲しみであり、学問に対してきざし始めていた希望をすっかりうちこわしてしまった。殿様の弟君があとを襲うと、彼は亡くなった兄が打ち建てたことすべてを変えてしまった。塾は全く無視された。藩主は塾生たちを激励する代りに憎しみをあらわしたので、彼らの多くは去っていった。彼は民のうちで最も無知で頭の悪い連中を小姓に選び、彼の兄君が備った最上の連中をくびにした。彼は私を秘書役の助手〔祐筆補助役〕に指名し、奴隸のようにこき使った。一方において秘書役の手伝いがあり、また他方では四、五十人の生徒を受持ったので、漢学の勉強をする時間はほとんどなかった。そのような幼い、遊び好きな生徒を教えることは実につらい仕事だった。やさしく扱うと彼らは私をくみしやすいいと思ひ始め、ちっとも勉強しなくなる。鞭を与える

と彼らはかたくなになり、何人かは長い間泣き続けて、全然勉強しないのであった。連中を教えることにはほとんど

厭気がさしていた。なぜなら私の心は彼らを教えることにあるのではなく、自分自身の学問にこそあったからである。私は家郷を逃げ出し、さらに知識を追求できるような場所に行くべきだとしばしば考えた。私はこのような気持の動きをおさえていることができず、その計画を実行したいものだとしばしば考えた。」

ボストン到着までの新島の日記と、江戸で自分の勉強を続けていた頃に書いた筆記帳はきわめて面白いものである。[函館からボストンに至る長い航海の間に、彼は英作文の練習を数冊のノートに書き込んでいる。それまで、世界といえは藩邸の「方形の囲い地」だけであったこの青年にとって、すべてが新しいものばかりだった。船内に見出されるあらゆる機械仕掛け、たとえばキャプスタン〔ロープを引くための装置。「車地」という訳語もある〕、圧力ポンプ、滑車装置、操舵装置等は立体感をもって正確にスケッチされており、これらの挿絵にはそれに関する原理や、用法についての詳しい説明がついている。巻き揚げ機の下にはじめて次のような英語の文章があらわれる。「目がよくなったら、この船の中にあるすべてのものの絵を描くつもり。」彼が玉島へ、またのちには函館への航海で乗った日本船は、沿岸沿いにいくつかの港に寄り、貿易や測量に従事したり、避難所を求めたりした。彼の日記はこうした港のことを詳しく記述し、港の地図、藩主の名前、城の防備の状況、この地域一帯の歴史を、産物、輸出品、税金、人口の統計、さらには人々の道徳的状况に関する個人的観察をも加えて書き記しているのである。彼は飲酒と売淫が蔓延していることをはげしく嘆き、単なる物質上の進歩だけでは祖国の繁栄を保障するのに十分でないと確信して、キリスト教への渴望を深めていったことがうかがわれる。函館で彼はロシア人経営の病院に目の治療のために毎日出掛けた。そして貧しい者たちがお金を払わなくても迎えられ、手当を受けていることに對する驚きの念を記録している。

彼自身の記述からすると、彼は日本人の観点から見て、よい教育を受けた人であるように思われる。中国の古典に対する彼の知識は広範なものであった。彼の書は専門家のそれであり、絵についても生まれながらの素質があった。函館を出る前に彼はオランダ語で算数、代数、幾何ならびに航海術の基本をおさめており、物理学と天文学の初歩も習得していた。上記の科目に対する彼のノートブックはほとんど論文といってよいくらいである。彼はすべての証明を日本語で書き直し、無数の問題と練習問題を解いている。どのページを見ても、この若い魂が嘲笑、殴打、病弱にもかかわらず、真理と知識の追究をしたそのまじめさと根気強さに感銘を受けるのである。ここにはまた、親孝行の考え方との戦い、失敗や面目失墜の恐れについての記録もある。彼は野心と栄達に向けて開かれたあらゆる容易な大道に背を向けた。彼は自分の育ってきた宗教と社会制度の強い影響に訣別した。それらが決して彼を満足させなかったからである。彼の目は個人的栄達という狭い地平には向かわなかった。このように若くて経験の浅い人には驚きとしかいえないほどの視野の広さをもって、彼は祖国の本来の善のための真の源をおぼろげながらに見分けた。そして、その確信の光をしっかりと辿りながら、この真の愛国者は、失敗のあかつきには唯一の迎え手である死をもともしないで、自分自身の道を着実に前進するのであった。

2 高等学校・大学時代

ハーディー夫妻は若干の躊躇がなかったわけではないが、ともかく新島の教育をひき受けることにきめ、一八六五年十月の末に、彼をマサチューセッツ州アンドーヴァーに連れて行った。彼の将来の学業に対する計画が漠然としたものであったことは止むをえないが、どのような前進をめざすにしても、英語の修得が必須であることは明らかであり、彼はそのためフィリップス高等学校^{***}の英語科に籍を置くことになった。外国人としていろんな困難にでくわすこともあろうかと考えて、ハーディー氏はこの高等学校の校長であるサミュエル・H・テイラー博士^{***}に相談して個人の家庭に下宿させることにした。そこで、村のはずれの小さな農場に気持のよい家を構えていたヒドン氏とその姉が推薦された。ハーディー氏がただちにミス・ヒドンを訪ねたところ、彼女はこの申し出に驚いた。彼女の弟は病身であり、彼らは召使を置かず静かに暮していた。下宿人を置いたこともないし、ましてアメリカの生活様式に慣れない、英語もしゃべれない日本人を引受けるというようなことは一度も考えてみたことがないという。^{***}そこで、新島の日本脱国を綴った例の手記をミス・ヒドンの手許に残してハーディー氏は辞去した。以前と同様、この単純な物語はそれを読む人の心を開いた。翌日ヒドン家は新島を引受けるという通知をハーディー氏に伝えた。彼らの大きな家の半分には、当時「アンドーヴァー」神学校で神学の課程を終えようとしていた、イーフレ임・フrintont氏が住んでいた。フrintont氏夫妻はこの若い外国人に非常な興味を抱き、彼の教育のために多くの時間を割いた。この関心は暖い友情へと発展していき、後年、新島はマサチューセッツ州ヒンズデイルにフrintont氏をしばしば訪問している。同氏

はそこに定住し、大いに敬愛され、その死は大いに悼まれた。

新島は一八六七年の夏まで^{*}アンドーヴァーに滞在し、それから彼の将来の仕事に最も適した学業を追求するためにアーモストに送られた。^{**}アンドーヴァーでの彼の時間は英語、自然科学、数学の勉強にささげられた。高等学校を卒業するにさいして、テイラー博士は新島について「彼はやることを立派にやり通した」と書いている。彼は目が丈夫でなかったので、当時はボストンの眼科医にかかっていた。彼は肉体の故障をひどく心配し、この好機を善用したいという欲求と、過労のために彼の「大目的」をふいにすることになりはしないかという恐れ、との間の葛藤に悩んだことが彼の日記にしばしば記録されている。

アンドーヴァーについていた時、彼の日記帳の折返しに彼は次の聖句を書きつけた。この聖句はすべての聖句のうちで最もしばしば彼の個人的な書きものの中に顔を出すことになる。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ伝3・16)。後年彼は「この聖句こそは神聖な神の御言葉のページを照らすすべての星の中の太陽である」と語った。彼にとって宗教の核心的な原理は常に人間に対する神の愛の確信であった。日記の対面するページにはこのような祈りが見出される。

「主よ、あなたは暗黒の中から私を選び出されました。愛する両親を捨てた私をここへ導いて下さいました。その間、ハリケーンにも嵐にも会うことなく、常に良風を送って、安全に無限の大洋を通過させて下さいました。主よ、あなたは日々のあなたの御言葉の真理を悟らせて下さり、私が寝るために暖いベッドを作り、私が十分に食べるためにすばらしい食卓を用意して下さいます。主よ、あなた以外に私にこのような親切とめぐみを与えて下さる方はありません。主よ、私の罪を洗い流し、私の邪悪な心を取り去り、あなたの御言葉を理解し思い出すために正しい精神を

お与え下さい。あなたの御言葉をさらにますます見、かつ聞くために、私の目と耳とを強めて下さい。神よ、多くの異神や偶像を打ちこわすことができるように助けて下さい。どうか、それらをあなたの力で打ちこわし、私を慰めて下さい。主よ、あなたの御名をないがしろにするようなことは致しませんし、できる限りあなたのいましめに従うように致します。私を助けて下さる人々、先生たち、両親、すべての兄弟たちのために祈ります。彼らを病氣と誘惑からお守り下さい。力と栄えと御国は永遠にあなたのものだからであります。アーメン」

メアリ・E・ヒドンからハーディー氏あての手紙

アンドーヴァー、一八六六年一月二日

お手紙有難うございました。弟の依頼で私からご返事を差上げます。ジョゼフはあなたからのお言葉を喜んでおります。学期が終った後の週以来、彼はどうしたらよいかと気持を決し兼ねて、あなたからのお言葉を待っていたようです。あなたがきつとテイラー博士から彼の成績について通知を受けていらっしゃることと存じます。実は彼にはもう一人の先生があつて、この方が毎夕彼のおさらいをして下さっており、彼が非常に急速に進歩しているとの評価を頂いております。この先生というのはわが家の半分を占めていらっしゃる紳士のことです。この方とご夫人はともに、最初からこの若い日本人に非常な関心を示され、現在のご夫妻のひっそりした生活の中に開かれた扉、つまりこの扉をあけて自分たちを役立たせたいと思われる対象として彼のことを考えて下さっているご様子なのです。ジョゼフは学校生活と絶えず接触していく必要はありますが、実際のところ彼がプリント氏から得ている利益は高等学校の

先生から得ているものよりもはるかに大きいといえます。ジョゼフは紳士です。クリスチャンの共同体を形作るものとして私たちが、この「私たち自身の戸口にもたらされた異教徒」と誰かが言った彼よりもすぐれているといえないことは、恥ずかしいことでございます。

ジョゼフの飾りけのない会話によって私たちは、彼が自分の道に投げかけられた誘惑にいかん抵抗してきたか、またいかに模範的な生き方をしてきたかを見ますときに、私たちは、神の御手が彼の上にあり、彼が自分の民を暗黒と偶像崇拜の中から、祝福の神の輝かしい福音の中へとあがない出していくために選ばれた器になるであろうことを感じる次第でございます。

ジョゼフはこの休暇中も勉強で非常に忙しくしております。しょっちゅう何かを説明したり、訂正してあげたりする必要がありますので、私たちは彼に相当の関心を払わずにいることはできません。彼は親切を示されると非常に感謝し、お返しに、何でもしたい気持ちにすぐなります。彼は中国風の絵筆を非常に器用に使いますので、私は彼に、描いた絵の見本を一つハーディー様あてにお送りしたらどうか、と申しました。・・・彼はあなたが彼のためになさいましたことに対し、深甚な感謝の念を抱いており、あなたが平穩無事であられますようにとのみ願っているようです。どうやら彼の目的は自分の民の益となることにあります。彼は健康には十分な考慮を払う必要があると感じております。

私は下宿人を置こうと考えたり、それを望んだりは致しません。特別な状況は例外ですけれど、この場合、特にそうすべきではないと考えます。私たちはジョゼフを家族の正式の一員に加えました。彼は常に私たちみんなと共に席につき、家族としてのあらゆる特権を共有しています。私たちがこのように、何らの侵入者の感覚なしに受け容れら

れるような人を見出すことは、あまりございません。でも彼は例外なのでございます。

ハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八六六年一月一日

私は非常に元気でとても快適に新年を迎えました。ああ、私は自分の生涯でこれほど快適な新年を迎えたことはいと申上げてよいほどです。なぜなら私は今何の困難も苦勞もなしに、ほしいと思っていたすべてのものを十分に所有しているからです。ハーディー様、私は頭のとっぺんから足の先まであなたのご親切とご好意を感じています。私がここに來ましてどんなに幸福であり、どんなに成功したかを、どうか知って頂きたいのです。

学校で私は数学の授業を受け、小数から十二進法まで進みました。沢山の生徒が英語を読み、英語の綴りを言うのを聞きました。ハーディー様、私はヒドンさんの家に住んでいるフrint先生という親切で敬虔な隣人をみつけたように思います。この方は毎夕算数を教えて下さり、私は先生の前で約分、正負数、定義、常分数、小数、寄せ算、引き算、掛け算、割り算、利息算、複利算から歩合算まで復誦しました。^{*}二、三日前に先生は少し地理を教えてくださいました。またフrint夫人は毎夕私に新約聖書を教えて下さいます。私は「さいわいなるかな」^{*}、主の祈り^{***}、黄金律^{****}、マタイ伝十二章三十七節^{****}、ヨハネ伝三章十六節、詩篇第一篇と第二十三篇、「モーセの」十戒を暗記しましたし、新約聖書はルカ伝十七章まで読みました。旧約聖書ではイスラエル人がエジプトから脱出したこと、荒野にとどまっていたとき、神の不思議な御業によって衣食を与えられたこと、モーセの死、ししの穴に投げこまれたダニエル〔ダニエル書6章〕、

業火に投げ入れられた三賢人〔ダニエル書3章〕、大力のサムソン〔士師記13―16章〕、エリヤの時代におけるやもめ女とナアマンの奇蹟^{*}、について読みました。そしてこれらのことがらについて、毎日夕方に先生の部屋に行っておさらいをしています。

ヒドン氏とその姉上は非常に親切にして下さいますので、まるで自分の家にいるかのように快適です。すべてこのことは神の摂理とめぐみに属することだと考えますので、私は神の栄光をたたえ、神を愛し、神に従わなくてはなりません。神がハーディー様とご家族の皆様をも祝福して下さいるように望み、かつ信じています。そのうちにお目にかかりたく存じます。

ハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八六六年一月二十日

神のめぐみとあなたのご親切のおかげで、大へん元気しております。あなたに対する私の深い感謝の念をどのよう表現したらよいかわかりません。ただ心の中で感謝を唱えるのみです。勉強をやめて休息するとき、私はいつも神のめぐみとあなたのご親切を思い出し、神に感謝を捧げ、神にむかってハーディー様のために「あなたの御名のために貧しい者たちを助けている人を祝福して下さいように」とお祈り致します。ご友人がボストンから横浜へ行かれるのはいつでもでしょうか。私は父と、函館にいる友人とに、私が今どんなにめぐまれた状態にあるかを知らせる手紙をことづけてほしいと願っています。

「函館からの脱出を助けた日本の友人『福士卯之吉』あて

アンドーヴァー、一八六六年二月二十三日

あの危い冒険に乗り出して以来、ぼくは神のめぐみにより、とても元気にしています。天と地と海とその中にあるすべてのものを創られた方に呼び求めるとき、ぼくの悲しみは喜びに変わり、ぼくのみじめさはすばらしさに変わりました。そのような成功がぼくを訪れたということは実に驚くべきことであると確言していいと思います。ぼくは何千マイルという海の上を、暴風その他の難事に出会うことなく、全く無事ですごしました。「・・・」また一人の親切で信仰の厚い人「イーフレ임・フリント氏」が数学の復習を見て下さっています。その人の奥さんは『新約聖書』という、この世で最も神聖で価値のある書物をぼくに教えて下さいます。聖書には一人の救い主イエス・キリストという方が、暗闇を照らし罪人を救うために父なる神からつかわされた、と書いてあります。学校では読み方、綴り字法、英文法、数学を習っております。また日曜日ごとに聖書を教わります。すべての教師と生徒、またぼくのことを知っている多くの人たちがぼくに興味をもち、ぼくを愛してくれ、また中にはぼくを喜ばせるために物をくれたりします。けれども彼らがこうしたことをするのはぼくのためというよりは、主イエス・キリストのためなのです。友よ、どうかキリストがどういう方であるかをよく考えて下さい。キリストこそは闇の中を照らす光です。太陽や月や星やローソクの光とは異なり、それは暗黒にとざされた邪惡な世界を照らし、救いの道へとぼくらを導く光なのです。これは永遠の生命をあらわす真の光であって、どのようにしてもそれを消すことはできません。そしてこの生命はイエス・キリストを通して頂くことができますのです。「神はそのひとり子を賜わたしたほどに、この世を愛して下さい。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたの

は、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。* 新約聖書、ヨハネ伝三章、十六―十七節。

友よ、ぼくは君のご親切にむくいるすべがありません。ただ、聖書を学んで下さい、と申し上げるだけです。ぼくの写真を送ります。どうか健康に気をつけて下さい。上に述べた書物をぜひ学んで下さい。ああそうでした。聖書を読むことと、天の父をおがむことは国法に触れるのでしたね。その父こそはぼくらを創り、愛し、ぼくらが救われるようにとその独り子を賜わったやさしい、慈悲に富む父でありますのに。けれどもそのような法律は打ち破らなくてはなりません。なぜならそれは悪魔、つまりこの世の王が作ったものだからです。この世は悪魔が創造したのではなく、ぼくらの真の父、ぼくらの真のおきてを与えた神が創造したのです。であるとすれば、いったい神の御声に聞き従うよりも悪魔の声に聞き従う方が正しいかどうか、友よ、君ご自身で判断してごらん下さい。たとい恐るべき悪魔が義のために君を迫害することがあっても、心配してはなりません。君の神は必ずや君を悪から守って下さいます。たとい君の肉体は殺されても、君の魂は神に受け容れられ、君は永遠の生命を与えられて一層輝かしい場所に住むことになるでしょう。本当に今すぐにでも飛んで帰ってお目にかかりたいものです。

君の真の友である

新島七五三太^{しめだ}

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六六年四月九日

・・・春が来て日増しに暖かく、気持よくなってきたことをとても嬉しく思います。あちこちで鳥が鳴き、道端や野原や丘の草は緑色になりつつあります。まもなく農夫たちが種まきにかかるようです。私自身も永遠の命に向けて実を結ぶために、心と頭の畑に種をまかなくてはならない、と自分に言いきかせています。勉強に疲れると、私は運動のために散歩します。今ではオーバーは暖かすぎますので、奥様から頂いた春用のオーバーがこの時期にはぴったりです。ご親切を身に泌みて感じております。この休暇を読書と作文と絵と、それにヨハネ福音書の日本語への翻訳に費しました。これをどうかお受取り下さい。その中に私は日本の宗教について書きました。お体を大切に。ご主人様とご家族の皆様にごどうかよろしく。

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六六年七月二十四日

そのようにして奥様は（あのサマリヤ人のように）私をみじめな境遇から救い出し、良い教育を得させて下さいました。それ故私は奥様をわが隣人と呼ばせて頂きます。それどころか、奥様を神が与え給うた母と呼ばせて下さい。私は日夜神にむかって、御祝福がご家族の上に豊かにありますようにと祈っております。神は私たちの心の中にある願いをご存知です。信仰をもって神にお願いすれば、神は最上のものをもって答えて下さいます。・・・（羽を失った小鳥のようにあわれな）私を、今後ともよろしくお願い致します。天にいますわれらの父は、奥様のご親切を喜び、最上のものをもってむくいられることでしょう。・・・今学期の算数が終わったことを嬉しく思います。来学期には代数学と文法を取ります。目の方はあまりよくありませんが、この休暇中にしばらく勉強をやめて大いに運動すればよ

くなるだろうと思います。今日の午後は高校の展示会に行かなくてはなりませんので、多くのことを書いている時間があります。ご主人様によろしく、そして、この暑い時期には十分健康に留意しています、とお伝え下さい。

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六六年九月十日

・・・ミス・ヒドンの叔母さんに当るC夫人が春頃から弱り始めて、ますます悪くなりました。今では生死の間をさまよっています。この日曜日の夕方に私は彼女の部屋に行つて、しばらくの間つきそっていました。何か別のことを考えていらつしやるようですが、ほかの時よりは一層静かに見えました。「奥さん、私はあなたに対する祝福を神に祈っています。神は私の祈りに答えて下さると信じています。あなたも神様に祈ってみませんか？ 神はあなたの祈りを聞いて、祝福して下さいと思うのですが。」すると彼女はこう答えました。「ジョゼフや、ご親切に有難う。」そう言いながら、はらはらと涙を落としました。それから大声をあげて、「主よ、わたしをあわれんで下さい。イエス・キリストを通してあなたのみ恵を示して下さい！」彼女はこのように二度叫びました。その時ミス・ヒドンは階下にいました。彼女はこの叫びをききつけて、非常に不思議に思ったのでしょう、病人の部屋の戸口まで上ってきて「どうしたの？」と聞きました。叔母さんが祈られました、と言うと、「叔母が祈ったのですって？ 今まで一度も叔母の祈りを聞いたことがなかったし、それに気付いたこともなかったわ。本当に嬉しいわ」と言ってから、叔母さんにむかつて、「イエス様を信じますか？」と聞きました。「はい、生きようと死のうと、わたしはイエス様を信じます」との答えでした。その叔母さんはほぼ七十歳ですが、これまでイエスについて述

べたこともなく、お祈りをしたこともありませんでした。しかしあの日曜日の夕方に私が発したたった一つの問いがもとで、この世から罪を取り去り給う方のほうへと心を向けたのでした。……主が彼女のまじめな祈りを聞きとどけて、永遠の住まいへと導き給うことを信じています。……

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六六年十月二十七日

……神のご加護のもとに元気ですごしております。今学期の勉強は大いに楽しんでいきます。目もよくなりましたので、昼間勉強できるだけでなく、夜間も少くとも一時間半か二時間は勉強ができます。今学期のはじめに、夕方の勉強の材料にローマ人への手紙を選び、一週間前にそれを読み終わりました。フrint先生は私に大いに関心をもって下さり、それを教えて下さいました。今コリント人への第一の手紙を読んでいます。先週の金曜日にテイラー船長の奥さんから手紙を頂き、船長が再び中国へ行くので、出航前に会いたがっている、とありました。ですから船長にぜひ会いたいと願っております。でも往復に金を使わなくてはならないことが気がかりでした。しかし土曜日の朝、フrint夫人が切符を下さり、またヒドン氏はポストンで使うようにと行って、一ドル札を下さいました。高校での朝のお祈りのあとでポストンに出掛けました。……それからチャールズタウン^{*}へ行ってテイラー船長に会いました。船長は乗船しており、会えたことをとても喜んでいました。ひる前から船長と一緒にあり、この旧友と数時間を共にすごせたことは大きな喜びでした。その後船長は夕食をとるためにポストンへ連れて行って下さり、彼の薄手のオーバーを下さいましたが、これはこの時期には最高のものです。また、そうしてはしいと言ったわけではありません

んが、私にすばらしい帽子を買って下さいました。五時十五分に停車場まで一緒に来て、切符を買って下さって、別れを告げた時に、船長は急に泣き出しました。奥様、神の御摂理が、貧しい日本人である私の上に、これほどまでに働いたとは、何という驚くべきことでしょうか。

月曜日に私のトランクが届いたことをMが知らせてくれました。奥様、トランクを開けたとき私は「奥様に対していったい自分はもうどうしたらいいのだろうか？」と考えました。だってご自分の坊ちゃんにお与えになるくらい多くのものを私に頂いたのですから。こういうものばかりでなく、私が祖国のために大きな善をなすようにと、私は教育までもお世話になっていきます。これほどまでに私を助けて下さいますが、奥様は私から何らのむくいをも期待なさらないと思います。私が貧しい者であることはご存知の通りですから。それ故私は、天において奥様の受けられるむくいが必ず増し加わる、と申し上げてよいと思うのです。どうか主イエスの「受けるよりは与える方が、さいわいである」〔使徒行伝20・35〕という御言葉を覚えて下さい。……月曜日の夕方にC夫人がなくなりました。彼女は今やイエスの右手に坐っていることでしょう。二、三週間前にシェッド夫人が、私が神学校付属教会に入会することについて奥様に照会されました。そして奥様からご承認を頂いたことを彼女からプリント夫人に知らせてきました。奥様とハーディー様が承認して下さいれば、私は次の聖餐式のときに入会したいと思います。今や私はイエス・キリストが私たちの罪のために死に給うた神の御子であり、私たちはイエスを通して救われる、と信じています。私は何にもましてイエスを愛しています。私は自己の全部をイエスのために投げ捨て、イエスの御前で正しいことをしようとしています。これが私の誓いです。私は日本に帰り、人々を悪魔からイエスへと方向転換させるために頑張ります。私はイエスに対して自分自身でしっかりと決断しましたので、今や何物をもつてしても私の愛をイエスから引きはな

することはできません。けれども私の肉は霊よりも弱いので、それで私は教会に入会してキリストと一体になりたいのです。これは私がもっとキリストのようになり、キリストの御名のために私の国に大きな善をなしうるためです。もし認めて頂けるようでしたら来週ご返事を下さいませんか。お大事に。ハーディー様とご家族の皆様によりしく。そのうちにお目にかかりたく存じます。・・・

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六六年十二月二十五日

美しいクリスマスの朝です。すがすがしい幸福感に満たされています。ご存知の通り、ボストンに上陸してから今日まで、天の御父が私をこの上ないほどお護り下さったことを感謝しております。・・・神学校付属教会の聖餐式は次の日曜日に守られることになりました。私はその時に入会し、父と子と聖霊の御名において洗礼を受けることになります。多分この週末はともにお忙しいでしょうから、「どうかお出下さい、そして次の安息日を私と一緒にすごして下さい」とは、とても申し上げるわけにはいきません。しかし、奥様とハーディー様がその聖餐のときに臨席して下さいとすれば、それは無上の喜びといわなくてはなりません。・・・*

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六七年五月十八日

お別れしてからというもの、どうしていらっしゃるかをお尋ねする手紙を書きたいと思いつつも、蜜蜂のように

勉強にいそしんで参りました。・・・物理が終ると、学期の終りまでは植物を勉強することになりました。私は植物を取ることをためらいました。なぜなら私の時間を花のために使うわけにはいかないという気がしましたから。私の先生は植物学に好意的で、それはちゃんとした学問で、物理と同じく有用である、とのことでした。そういうわけで植物を取らざるをえなくなり、先生の書物を借りました。その書物はとても高価なものですから。奥様にご相談上げることなしに書物を入手したくなかったのです。花の名前を覚えることは大変むずかしいことです。しかし、神は最少の花ですら心にとめ給う故に、私をもお見捨てになることはないと考えて励まされ、今では植物をとっても楽しく学んでいます。私は自分自身の書物を持ちたいのです。よろしければMを通して、その書物を買ってよいかどうかを知らせて下さい。また私の先生とプリント先生は幾何学を始めるようにすすめて下さっています。・・・高等学校の幾何のクラスは私が入るには進みすぎているので、プリント先生は毎日半時間、私のおさらいを見て下さることになりました。・・・私は日本の代表団に会いたいのですが、やはり隠れている方がいいかもしれません。なぜなら私は脱国者であり、政府の法律を犯した者であるからです。・・・

ハーディー夫人あて

ノース・チャタム、一八六七年八月八日

七月二十五日にアンドーヴァーを去って、ノース・チャタムの友人を訪れております。ポストンに到着したとき何度も夕立に会いました。私はメイン駅からオールド・コロニー駅まで、夕立の合間を見はからってトランクを運びました。・・・これから先どんな事が起ころうとしていたかを知る由もなかった私は、不幸にして車輛の後部座席に坐

っておりました。トレモントに着いたとき、車掌は乗り換えるよう呼びかけていたのですが、私は非常に興味深い本に読みふけていました。加えて相当きつい夕立が通りすぎたため、車掌の声を聞き逃してしまいました。この前チャタムに来たとき乗換えた途中の場所に着く時分だと考えて、というのは、それよりも少し前に乗換えなければならなかったことを知らなかったからです、私は一人の紳士に、チャタム行きの汽車にはどこで乗換ええるのでしょうか、と尋ねました。「チャタムですって！」と彼は驚いて言いました。そして「乗りちがえましたね。これはニュー・ベッドフォード^{*}行きだから、今夜のうちにチャタムに着くことはできませんよ」と言うのです。そこで車掌にそのことを話し、チャタムまでの切符を見せました。車掌はとても善良で親切でした。「今はどうにもなりません。次の駅、ニュー・ベッドフォードまで行きなさい」と言いました。余分のお金は払わなくてよい、とのこと。午後七時頃にフェア・ヘイヴンに着きました。そこはニュー・ベッドフォードとの間には大きな川[※]があります。フェリボートでその川を渡って、ニュー・ベッドフォードの町に無事に着きました。

そこでは誰も知人がありませんから、私はまったくな種類の人々を見付けることが安全な道であろうと考えました。教会堂が一つ目にとまりましたので、通りがかった人にその教派と牧師の名を尋ねました。その人はとても親切に「それは正統派の組合教会で、牧師さんはC先生です」と教えてくれました。牧師のお宅はどちらでしょうか、と聞きますと、その人ははっきりと教えてくれました。その家まで行ってベルを鳴らすと、若い女の人が玄関に出てきました。C先生にちょっとお目にかかりたい、と申しますと、彼女は私を美しい応接間に連れていって椅子をすすめてから、C先生をすぐにお呼びしますが、お名前は、と尋ねました。私は自分の名前をはっきりと伝えましたが、彼女は私の姓のみこめず、とにかくジョゼフという名前だけを頭に入れて出ていきました。しばらくするとC先生が

応接間に現れて、握手して下さいました。そこで私は言いました。「私はよそから来たもので、ジョゼフ・ニシマと申します。チャタムをめざして午後四時にポストンを出たのですが、トレモント駅で乗換えすることを知らなかったために行き先をまちがえてしまい、予期していなかったこの町に着いたのです。恐れ入りますが、最少限の経費で一夜をすごせる家を教えて下さいませんか。」すると彼は「宿賃はお持ちですか」と聞きました。「はい、持っています。しかし私は最少限の経費で一夜をすごしたいのです。今晚この町に来ることは全く予期しておりませんでしたから」と私は答えました。その人は私が貧しい旅人であると取ったのでしよう、五十セントを差出して、「これで宿賃の半分のたしにされたら」と言いました。それはおことわりして、こう申しました。「有難うございます。でもこれは頂くわけにいきません。ただ、お願いですから、どうぞ安全な場所を教えてください。」

曇り空の夕暮れ方で、七時をまわっていましたから、家の中は相当暗かったのです。家を出ると牧師は、海員ホームに案内しましょう、と言いました。つまり私の色が黒いものですから、そしてまた沢山のスペイン人が捕鯨の仕事でこの町に来ることを知っていたので、牧師は私を金に困ったスペインの漁師だと考えたのでした。牧師の家では牧師さんの顔つきがはつきりわからなかったのですが、戸外ではよく見分けがつかしました。五十六、七歳くらいの人で、背はほぼ中背といったところ。濃い髪の毛はところどころ灰色になっています。物腰は単純そのものでありませんが、容姿には気品を備えています。口数は多くはありませんが、いったん口をひらけば非常に明晰かつ雄弁でありました。牧師は私にどこから来たかを聞きました。「日本からです。」「いつごろ?」「二年ほど前です。」「どこにお住まい?」「アンドーヴァーに。」牧師はアンドーヴァーには知人があると言うのです。知人とはどなたですか、と聞きますと、それはA執事でした。Aさんなら知っていますし、私はAさん宅からほんの少しのところに住んでい

るのです、と答えました。牧師はE・A・パーク教授^{*}も知っており、パーク教授は、二、三週間前に按手礼のためにこの町を訪れたとのこと。牧師は私がアンドーヴァーで何をしているのかと聞きました。「フィリップス高等学校の生徒です」と答えますと、アメリカの習慣は気に入っているか、との問いでした。「はい、私は自分の国の異教的な習慣よりもアメリカの習慣の方が好きです」と申しました。こんどは宗教をどう思っているか、との質問でした。「木や石で作った神々よりは、真の神の方が好きです。」そこで彼は、どのようにして私がこの国にやって来たのかと尋ねました。そこで私の日本脱国のことと、いかにしてすばらしい摂理に導かれてこの開明の国にやってきたかという顚末について手短かに語りました。すると牧師は、さきほど述べた場所とはちがったところに案内しようと言いました。それはパーカー・ハウスという大きな美しいホテルで、どうやらこの町で最上のホテルのようでした。しかもホテル代を払ってくれたのです。牧師が財布から金を取り出そうとするので、私も急いで金を出して彼に返そうとしました。しかし牧師はそれを取ろうとせず、こう言いました。「わたしがあなたの国に行って一人の知人もない状況になったときには、どうか親切にお願いしますよ。」そして、おやすみなさい、と言いつ残して急いで去っていきました。ポケットの中に入れていた紙きれに名前を書いてもらいました。ウィーロック・クレイグ先生^{**}、という方です。そのホテルでおいしい夕食を頂き、すばらしい部屋に眠りました。・・・翌朝は早目に朝食を取りました。「コード」岬に行くのに乗り違えた場所まで引返してから、ハリッジ中央まで汽車に乗り、そこから馬車で七マイル行つて、午後三時を少し過ぎた頃にチャタムにつきました。なつかしい友人たちから暖い歓迎を受けましたし、私も彼らに会えてとても嬉しく思いました。ニュー・ベッドフォードの町に着く前に、主が私を見守り、安全な所へ導いて下さるようにと祈りました。主はその祈りに答えて、あの晩を安全にすごせるようにと、あの親切な敬虔な人のところに私

を導き給いました。自分自身の知恵をたのみとし、神の摂理を信じない人々ならば恐らく、摂理のことなどは全然考えないで、あの時私は運がよかったのだと言うことでしょう。しかし私は、確かに摂理が私を安全な場所へと導いたのだと断言することができます。なぜなら、神の御摂理なしには何一つとして起こる筈がないと信じるからであります。

ハーディー夫人あて

ノース・チャタム、一八六七年八月二十六日

・・・私はテイラー船長のお父さんのご家族から親切に心をこめて迎えられました。みんな気持のよい親しみやすい方々で、私は家族の一員としての待遇を受けております。神様が絶えず私のことを気遣って下さることを有難く思います。日本を出たとき無一文でしたのに、今では日々必要とするものを欠くことは全くありません。神は私のことを気遣って下さる友として、奥様や他の人々をお与え下さいました。それ故私はこの大切な聖句「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」〔ヨシユア記1・9〕を証明しているのです。この聖句を読んだとき、神に対する感謝の念が湧き起こって、数行の涙を流しました。・・・この休暇中はあまり本を読んでいません。ただ毎日聖書と、地理の本を二、三頁は読んでいます。目が丈夫になって、次の学期には新しい勉強に取掛れるようになりたいものです。勉強することはとても好きです。勉強を完全にはったかしにすることはできません。・・・いまやこの家族は大家族です。全部で十二人います。昨日は浜辺に行き、一ブッシュル〔三十五・二四リットル〕分のハマグリを掘りあてました。あしたは天気によ

ければ森へ行つてクロイチゴつみをする予定です。……奥様にあまり手紙を書きませんが、ご親切を常に感謝しております。そして奥様のこの世におけるご繁栄と、来るべき世におけるご祝福を毎日お祈り申し上げております。……モンソン高等学校に在学中の日本人^{*}とはしばしば連絡を取ってきました。彼らのうちのいちばん若い男は立派な学生で、今は暗闇の中にある日本の将来の開化のために、彼が立派な道具となってくれることを望んでおります。

チャタム滞在中の日記の抜萃

毎日午前中はラテン語の勉強、午後は演説の練習と海辺の散歩をしている。夕方にはヘンリー・マーティン^{*本}師の回想録を読む。この本は私の冷えた心に火を点じ、傲慢な気持をへりくだらせてくれる。神と同胞に対する私の信仰と愛はあまりにも弱く、ほとんどそれを知覚できないほどである。私は「しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」「マタイ伝9・2」という聖句に慰められている。あの無限の大海のほとりを歩いていた間にも私は「淵々呼びこたえ」「詩篇42・7」を思い出していた。そして、私の罪は深いけれども、神の愛の深みを汲みつくすほど深くはない、と心の中に言った。それから私は、自分の顔が後へも横にも向かないで、前に向いていることを神に感謝した。のちほど私は自分が非常におろかで無知であることに気付き、「こんなにおろかで無知な私がどうして異教徒である友人たちに神の国を約束することができようか?」と自問した。主が私に次のように答えて下さったように思った。「わたしがお前の主人となつて、私の道を教えよう」と。そのような欲求をもちながらも、同時にまた私の中にある悪の力がきわめて強いというのは不思議なことである。

今日は今年になっていちばん暑い日だ。しかし散歩をしていても、自然に対する愛のおかげで、この暑さにあまり

閉口しているわけではない。

今朝は非常に疲れていた。心の中の悪魔は、気持をしつかり保っていさえすれば罪にはならない、お前は教会に行った場合と同じように聖書も読み、神を賛美し、神に祈ることができないではないか、と言って、教会をさぼるように私を誘惑した。「いや、ちがう」と私は言った。午後にも悪魔は同じようにやってきて、「お前はもうへとへとなのだ。ぼんやりした頭じゃ大した利益を得ることもなからうぜ」と言った。私は再び答えた。「いや、ちがう。本当に病気でない限りは、私は礼拝を休むつもりはない」と。

ミス・ヒドンからハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八六七年七月十一日

……朝食のとき思いついたのですが、ジョゼフのことと書かせて頂きたいと存じます。奥様の方からジョゼフあてに、入用な品があれば、それをリストして時折送るように、とのご意向のよし承っております。彼はこうしたことについてはきわめてつましく、奥様のご芳情を利用しようなどという気は毛頭なく、それでいて、結局は奥様に全く依存することがどうしても必要になってくる現状に心を痛めている次第でございます。奥様のおかげで、彼はアンドーヴァーにおりました間、非常に快適に暮してきました。彼が学問の面でも人物の面でも示した進歩をごらんになって、奥様も必ずや魂の中に酬いを受けられたことと存じます。彼は疑いもなく非凡な能力の持主であり、彼のなすことはすべて、神の栄光のおんためであるということの故に、彼の能力がまぶしいほどに光っていることは明白でございます。

最初の時から私は、彼の影響力が私の歩む道に及んでくることは特権であると感じて参りました。その影響力はともすれば忘れやすい私の心をおさえてくれる護り札のようなものであり、このためにも私は彼が私たちの許から去っていかなくてはならないことを深く悲しむものでございます。彼のおかげで私たちは、キリストにあって私たちがいかに一体であるか、人間家族そのものであるか、ということが本當にわかるようになりました。奥様、神様はそのご摂理を通して、この天国をめざす放浪者をあなたの庇護の許におこうとして手段とお心とお備えになったのだと思います。あなたはこの世がそれに値しないほどのダイヤモンドをお見つけになったのです。これをあなたが誇りとなさることは当然でございますし、お心の中には、それ自体が酬いであるようなご満足がみちあふれることと存じます。

ジョゼフはどこへ行っても光ることでありましょう。土地が変わってアーモストへ行けば、それが彼のために役立つことと思います。はじめ彼は自分はどうてい大学には向かないと感じておりました。しかし彼は奥様の一切のご計画に喜んで従うことでしよう。そのすべてが彼の最大の利益となることを信じていますから。・・・彼は極端なほど注意深い人で、必要な品を奥様にお願ひするのを遠慮しておりますが、それは奥様の方でいやがっていらっしやるからではなく、彼の高貴な本性と男らしい性格の故でございます。私たちのところから彼の影響力が消えていくことは残念でございます。どうか神様が彼と、そして奥様に恵みをお与えになりますように・・・

イーフレイム・フリント・ジュニアからハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八六七年八月二十九日

……ジョゼフの訓育と、いわゆる「彼に対するわたしたちの親切かつ貴重な関心」に対してご丁寧なお言葉をたまわり、私たち夫婦は深謝申し上げます。ジョゼフを教え、そして徳操と知識の面で彼を導くことを通して経験しました以上に高い喜びは、天国のこちら側ではどのような仕事にも期待するわけにいきません。私は数年間にわたって人を教えてきましたが、他のいかなる生徒の知的・徳操的な発展にも、これほど関心を抱いたことがありませんでした。彼のための労苦は、愛の労苦でした。私たちが努力と、消えることのない関心を払い、祈りを捧げることができましたことは、何という祝福だったことでしょうか。彼と別れることは残念ですが、アーモストではシーリー教授*が導いて下さることを喜んでおります。

イーレイム・フリント・ジュニアからJ・H・シーリー教授あて

アンドーヴァー、一八六七年八月三十一日

アルフィアス・ハーディー氏の依頼により、本状の持参人、ジョゼフ・ニイシマについて若干のことを書かせて頂く次第であります。二十二月前にアンドーヴァーに参りまして以来ずっと、ニイシマは私と同じ家に下宿してきました。彼はフィリップス高等学校に通っておりましたが、私たち夫婦は彼に聖書、綴り字法、英文法、算数、代数学、幾何学等を大いに教えて参りました。ジョゼフは算数、代数学、それに幾何学のはじめの二巻をマスターいたしました。数学を得意とする彼は、三角法と測量術を学ぶことを熱望しています。彼は二学期間で、これらの二つの分野の相当な知識を得るものと考えます。彼はまた生理学を勉強したい希望をもち、さらに化学を勉強して自然科学に関する現在の知識の不足を補いたいのです。彼はまた光学の実験を喜んですることでありましょう。

彼はあなたのご指導の下に精神と道徳の哲学を学びたいと熱心に希望しています。

彼はアンドーヴァーに来てからずっと目を悪くしておりました。私の判断では、彼が今すぐギリシア語を始めることは賢明ではありません。辞書と取組むことは彼の目に特によくないと考えるからです。これまでにどうしても英語の辞書を引かざるをえなかったわけですが、それは他のどのような目の使い方にもまして、目をいためてきたのです。

私たちはジョゼフの精神的、徳性的な発展に強烈な興味と最大の喜びとをもって注目して参りました。アンドーヴァーに到着後の最初の八か月の間、彼の英語の知識はまことに微々たるものでありましたが、彼は算数をすっかりマスターしました。他の諸学科における進歩もまた、それに劣らずめざましいものでありました。聖書の勉強にかけては彼は人一倍忠実かつ熱心であり、聖書というご馳走でもって魂を養いました。彼が神の御言葉に没頭するほど熱心に、小説に没頭する人をこれまでに見たことがありません。彼は他のどのような書物の意味にもまさって、たちまち聖書の意味を理解するのでありました。新しい章句の意味が彼の心にひらめくや否や、彼の魂は感動の余り、うっとりしてしまうのであります。

彼は品行において、一個の紳士であります。これまでに一度たりとも、彼が粗野であつたという覚えはありません。礼儀の感覚においてきわめて鋭く、それはまたしばしばきわめて美しいものであります。自分のためにしてもらったことの一切について、彼は十分に感謝の意をあらわします。彼の教師たちや恩人たちに対する感謝の念は限界を知らないかのようにです。彼の信仰上の進歩も注目すべきものでありました。彼はアンドーヴァーに来る前に改心していたのだと思います。真理が彼の心に届くや否や、彼はそれを欣然として受け入れたようです。彼は自分の義務を忠

実に、ひるむことなく果たします。主を否定するよりは、むしろ火刑に処せられることの方を選ぶ男であることは疑いありません。彼は密室の祈りにおいて最も忠実な人であると信すべき理由があります。彼は献身的なキリスト者の交わりを愛しています。彼は謙遜で、目立ちたがりませんから、彼の真価はすぐには現れません。しかし彼は最も高貴な人間の一人であり、完全な信頼を置くに値します。彼の口は真実を語ります。彼は体にさしさわりのない限り学びうることの一切を学ぼうとすることでしょう。彼は手にした金をこの上なく儉約しながら使います。彼には監視の必要がありません。彼は英語の構造をマスターし、また英語を楽に書く点で進歩を示しました。しかし英会話については、残念ながらそれに見合う進歩を見せたわけではありません。運動については、彼はそれをしすぎるといふより、しなさすぎる傾向があります。

私は過去何年間か人を教えて参りましたが、この生徒に対するほどの興味は他の誰にも抱いたことがありませんでした。私はあなたがしばらくの間彼の教育を見て下さることを嬉しく思います。時々彼から手紙をもらうことを楽しみにしております。

この若い日本人の、光と真理に対する渴望はあまりにも強烈であり、彼が祖国と家をとび出した状況は劇的な出来事に満ちていた。教育や伝道の事業に関心をもつ人々が、この日本人にひきつけられたということは不思議ではない。しかし、この興味が至るところ、またいつでも暖い個人的友情に発展していったという事実は注目値する。彼はどこへ行っても、心を休めることのできる場所を見出した。アーモストでは、それはシーリー教授の家であり、そこで彼は休暇の多くの部分をすごしたし、病気のときはそこに迎えられ、息子のように世話をうけた。シーリー教授

の不在中には食卓の主人の席に坐り、朝食前の家庭礼拝の司会をしたことを、新島はしばしば日記の中に誇らしげに記している。一八七〇年三月に病氣になったときには、「シーリー教授夫妻は、わたしの両親と全く同じように親切でやさしい」と書いている。アーモスト時代の彼の健康は全体としては良好だったが、時々リユーマチと眼病に悩むことがあった。しかし彼の快活さは無際限であり、あらゆる機会を最上の仕方で活用するように心を傾けた。一八六八年から六九年にかけて、日本は嵐のような激変の時期を通過しつつあった。当時新島は、もう一年近くも便りのない友人たちのことで非常に心を痛めていた。彼らの安全に関する心配と、日本人の性格の驚くべき特性である家族愛の故に悩んでいた新島にとって、ついに彼らが安全であり、彼の年老いた祖父がまだ元気で生きているとの便りに接したときの彼の喜びはいかばかりであったろう。彼は日本人の特性である弾力的な気質の持主だったが、しかし彼が自分自身の愛する者たちをゆだねた神への深い信仰のみが、自分がいったん選んだ道では後戻りしないだけの、澄み切った目的意識を彼に維持させたのである。

ギリシア語とラテン語の知識がなかったために、アーモスト大学における彼の資格は選科生であった。彼の場合、中国がギリシアであり、ローマであった。しかしながら、彼はここでラテン語の勉強を開始した。またルームメイトのウィリアム・J・ホランド氏^{*}に日本語を教え、その代りに同氏からギリシア語の手ほどきを受けた。一八六九年にホランド氏はアーモスト高等学校の校長になった。新島はこうした彼の指導の下でギリシア語の勉強を続けることができた。新島は特に自然系の諸科学、すなわち化学、物理学、植物学、鉱物学、地質学が好きで、これらの分野に対する興味を終生持ち続けた。ホランド氏はのちほどアメリカ政府の皆既日食観測隊の一員として日本に派遣される科学者となった人であるが、当時自然科学の研究に打ち込んでおり、新島は彼と一緒に鉱物と植物の標本採集のために、

アーモスト近辺の愉快な徒歩旅行を何度も楽しんだ。彼のノートには物理学や化学の講義のきわめて正確かつ完全な要約が、用いられたすべての実験道具の絵とともに記されている。こうしたスケッチは授業中にすばやく、らくらくと描かれたもので、これには級友たちも驚いた。

日本人の心が本来、思弁的な探求には向いてないことはよく知られている。儒教は実践的、政治的、社会的な義務に關するしきたりの儀礼的集大成として、仏教よりもはるかに根強く国民の生活に根をおろしてきた。仏教の哲学は内容的に深い影をおとしたといえ、国民の共感を呼び起こすまでには至らなかったのである。歴史をまじめに学んだ新島ではあるが、西洋哲学の形而上学的な抽象論には比較的興味がなかった。彼が同胞のための教師になれるようにと進めていたあらゆる努力を特長づけるあの忠実さをもって、彼は精神と道德の學問を追求した。しかし彼は常に思弁的、論争的な面よりも、一層、実践的、倫理的な面に惹かれたのであり、西洋の科学、歴史、倫理學の方が、西洋の文學や詩にはるかに勝って彼の心を捉えたのだった。彼は機敏であり、知覚も鋭く、大學の成績も上位だった。しかし、目立つほどの知的能力の持主でありながらも、教師や友人たちに与えた最も深い印象は、彼の性格と生きざまからくるものであった。「金をメッキするわけにはいかない」——これは彼がまさに日本に帰ろうとしていたときに、シーリー教授が彼の教え子を評した言葉だった。一八六八年から六九年にかけて、新島と同室だった人は次のように述べている。「彼は几帳面さの鏡だった。私たちの部屋を完全にとのった状態にするという仕事を進んで喜んで引受けた。この周到な几帳面さと清潔好きはわたしが感銘を受けた第一の特性だった。彼はまた終始變らずに快活であり、學問好きな点でも目立っていた。それに劣らず驚くべきものは、彼の信仰だった。私たちが共用して勉強した広いテンプルは中央の見えない線で仕切られ、その上に彼の聖書が置かれており、夜となく朝となく、彼は

忠実かつ入念にこの愛すべき書物を熟読した。彼はユーモアの感覚が鋭く、時には英語で諧謔をとぼすことさえあった。ライデン瓶^{*}の放電のあと、かすかに第二次の放電がおこることが時々ある。これを『残留放電』と呼んでいる。一八六九年七月四日はわが静かな大学町も愛国的な興奮に包まれていた。五日の朝、新島とわたしは朝食に行くとき、走ってきた子供がいきなりかんしゃく玉を鳴らした。新島はにっこり笑ってわたしの方をむき、『ねえホランド君、あれは残留放電だね』と言った。わたしは生きている限り、この男とつきあうことを許されたことを、大学生活最後の年における大きな特権の一つだったと見做すであろうし、また、彼の教育にいくらか力を貸し与え、そして彼がなしたげた大事業のために準備をいくらかでも手伝うことができたことを、わたしの生涯の最大の名誉の一つと見做すであろう。いま一人の級友は、次のように書いている。「彼はいつも彼の学年の祈禱会に出ており、しばしば祈りをささげた。当時、彼の英語はあやふやであり、語彙も限られていた。しかし彼の心は大きく、愛に満ちていた。言葉と行動のひとつひとつを通して、透き通るようにして人格が輝き、すべての人の尊敬を勝ちえた。『王の前に立つ』〔箴言22・29〕ことができるようにしたのは、実にこの性格であった。彼は日曜学校式の模範生の一人ではなかったが、明かるく、きびきびした、しかも面白味のある人だった。彼が教授たちの質問に対して洞察に満ちた答えをする時、それを聞くことはクラスの大きな楽しみだった。というのはわたしたちはその答が教科書からというよりは彼の『内部意識』から出てくることを知っていたからである。誰一人として彼の中に卑劣などところを見た者はなかった。彼の素質の中には不道德な要素は皆無であった。彼は謙虚で辛抱強くて勇気があった。そして彼の生命と意思を創り主へささげて我を忘れる状態に入るとき、彼の野心は最高に達成されたのであった。」彼の大学生活について、もう一人の証人から引用しておく。「新島は、それが意識的にあらわれるからではなくて、それが意識的にはあらわれない

ために、認めざるをえなくなるような、真の価値の要素を持っていた。彼は決して出しゃばることがなかった。彼は人から尋ねられるのでなければ決して自分のことや、何を達成したいと思っている、ということさえ語ろうとしなかった。それを聞かせてもらうと、彼の野心は日本のためばかりでなく、世界のために働くことだということがわかるのであった。大学時代の彼を知っていた者には、彼の生涯がアーモストだけで終っていたにしても、彼のことを到底忘れ難かっただろう。そのわけは、彼の中に人を高める影響力があり、そのせいで友人は彼が生きて歩んでいた高みへ自分もまた昇りたくなるからだった。彼はその高みに到達しよう、そこにしがみついているように思われた。あんなあがきを一切することなしに、そこに存在し、そこに属しているように思われた。彼の生活ぶりは静かだったが、それだからといって敏捷な行動、きびきびとした態度を妨げるものではなかった。彼は気持のよい友人であり、さいわいにして彼を自分の家の者とみなすほどに幸運だった家族にとってはその喜ばしい一員であり、常に神のことを思い、それ故に常に他人のことを思う、真のキリスト者の紳士であった。」

新島がアーモスト時代に書いた手紙の中には、金銭の支出に関することが絶えず出てくるが、これは省略することとし、ただ彼がどれほど出納簿を正確につけていたか、また彼がどれほど几帳面に支出をきりつめてきたかを示すに役立つものだけにとどめることにした。他方彼は必要な品を報告するに当って、きわめて卒直だった。彼の性格の單純さと正直さは、自分自身のことにはふれるたびに輝いて見える。落ち着いた態度のせいで、彼の述べる一切のことを人はただちに信頼せざるをえない。なぜならこの落ち着きは、自信過剰からくるのではなく、自己忘却からくることかわかるからであった。教室で彼が自分の無知を述べるときの率直さは、彼が必要品のことを申し出るときと同じ率直さ、つまり、自己本位の要素を全く欠いた率直さなのであった。この特質は病気のときに目立った。彼は自分の苦痛

をあるがままに、つまり、自分の苦痛であるからといって、それを実際以上にも実際以下にも述べることなく、真実ありのままに述べていることが感じられたのである。

ハーディー夫人あて

アーモスト、一八六七年九月二十三日

・・・先週の土曜日に寮（北寮第八号室^{*}）に移りました。シーリー教授が私に必要なものをすべて入手して下さいました。教授が、あちこちに小さな借りを作っておくのはよいことではない、と言われますので、全部の支払いをすませました。リストをお送り致しますので、どれだけのものを買ったか、いくら支払ったかをご覧下さい。日常的な出費がありますので、恐れ入りますがご送金をお願い致します。誓って申しますが、私は決しておろかな仕方でお金を使うのではなく、きわめて慎重に使うつもりです。なぜなら天の御父は、「わたしには乏しいことがない」（詩篇23・1）と言えるように、すべてのよいものを備えてくださるからです。何かを買えばその都度書き留めておき、のちほど奥様にお見せするつもりです。

私の部屋はとても大きく、非常に快適です。ルームメイトは至って物静かで善良な、若いクリスチャンです。このような青年と同室になれたことを感謝しています。私たちは信仰による祈りをこめて、毎日天父に礼拝をささげています。また、クラブでの食事は楽しみです。一般的に見て食事はとても上等です。大学のミッショナリ・バンド^{**}に加入しました。日曜日の朝ごとに面白い集会があります。みんなが集って、歌い、創造者をほめたたえ、主に向かって、私たちがあわれな異教徒たちに喜びの音ずれをもたらせるよう助けて下さいと祈るのは、とても愉快なことで

す。神が私を暗黒から呼び出し、永遠の休息が取れる場所をお示し下さったことを感謝いたします。それ故、私の同胞もまた私同様に幸福になれるように、彼らに福音をのべ伝えたいものと心から願っています。彼らに対して真理をのべ伝えるとき、恐らくは迫害を受けることになるでしょう。しかし私はそれを恐れません。暗い領域で死ぬことがあっても、主は輝かしい天国に永遠に住まわせて下さるのだというこの確信を、イエスに対して抱いているからです。新聞で、六十三人の日本人クリスチャンが横浜で逮捕されたことを読みました。^{*}しかし私に言わせて頂くなら、信仰は倒れません。倒れてはなりません。そして福音を彼らに告げなくてはなりません。

ご配慮に対し常に感謝し、奥様のために絶えず祈っています。お手紙を頂けたらどんなに仕合わせであるか知れません。

フリント夫人あて

アーモスト、一八六七年十月三十日

・・・国を出てからはじめて受取った父の手紙についてあなたにお知らせできることを非常に嬉しく思います。父は昨年の春にアンドーヴァーから出した私の手紙を受取りました。横浜にいる或るアメリカの人が、故障が起らないようにと、信頼できる日本の友人をわずらわせて、その手紙を届けて下さったということです。^{**}使者は返事をもらって横浜に帰るようにと、待っていてくれました。それで父は大急ぎで返事をしたためたのです。父の書いていることの一切をお話するわけにはいきませんが、二、三の事柄について述べてみましょう。私が函館から脱出したという知らせを聞いてからというもの、父は私のことを非常に心配しておりました。しかし父は海を越えて届いた便り

から、私の居場所と無事を知って非常に喜びました。父は私が日本を出ていったことについてあまり不満はなく、どちらかといえばそのことにとても満足しているようです。なぜなら私は父あてにアメリカのうるわしい習慣について知らせましたし、また何をしているか、何を勉強しているか、いかに仕合わせであるか、またいかにして真の神を信じるようになったか、について書き送ったからです。家族もみな元氣です。祖父はまだ生きています。八十二歳でまだ頑健です。祖父は私に、毎日孫の帰国を待ちわびている、という意味の歌をよこしました。祖父には私が帰国するまで長生きしてほしいものです。そうしたら、どうすればイエスに出会うことができるかを説いてやることができますから・・・

祖父は私がきわめてはっきりと説明しておいた宗教については、何の反応も示しませんでした。多分、多くのことを書く時間がなかったのでしょう。藩邸内に住んでいる友人や、弟や姉からも手紙をもらいました。友人は私の両親や祖父があまり私のことを心配しすぎないようにと、絶えず彼らを慰めようとしてきたそうで、今後ともそうするつもりだと言っています。彼は自分の家族同様に、私の家族の面倒を見よう、というのです。弟は私の手紙を読んだとき大変興奮して涙が流れ落ち、体全体に冷たい汗が出たと言います。彼は私の助言と教示に感謝しています。彼は今学校「聖堂」で漢学の勉強をしています。全くの無知で、恥ずかしい様子。小さな井戸の中に住む蛙が小さな空間を通して天を仰ぎ見るようなものだ、と言うのです。彼は大洋と大空を眺めたいのです。彼は毎日藩邸に来て沢山の子供らに漢文を教えています。姉は私のために毎日祈っていると言います、ただし空しい神々に。姉のことはあわれなりません・・・

ハーディー夫人あて

アーモスト、一八六七年十一月十六日

・・・まもなく休暇がきますが、どこですごしたらいいか、わかりません。どこに行けばよいか教えて頂けません。休暇中にいくら勉強したいと思いますが、何かよいチャンスがあれば、私の出費にあてるためにアルバイトをしてみたいと考えます。休暇中に寄宿舎に滞在できるかどうかをシーリー教授に尋ねましたところ、大学の規則により、冬休み中は学生は火事をおこすといけないから、自室に残ることは許されない、ということでした。教授は自分のうちで休暇をすごすようにと招いて下さいました。まだどうするか、きめていません。どうしたらよろしいでしょうか。お指図に従いたいと思います。

この前の日曜日の朝、トリート博士がチャペルで説教されました。午後にはホィラー師がハーブートにおけるお仕事のすべてについて報告をされ、また夜にはクラーク博士が中国の伝道について講演され、十年間に中国北部に千人の宣教師を送るという高邁な発言をなさいました。お三人とも私にとってもよくして下さい、大いに激励して頂きました。バビロンに対して戦い、サタンの大壁を打破るために出かけていくようにと、ほとんど説得されてしまいそうになりました。けれども私は自分自身を養い、われらの主イエス・キリストの十分な力と知識を与えられるまで待たねばなりません。この思いが常に私を仕合わせにし、日々の学問に立ち向かうよう力づけてくれます。・・・

フリント夫人あて

アーモスト、一八六七年十二月一日

・・・月曜日にハーディー夫人から手紙を頂きました。ハーディー家で休暇をすごすよう招かれています。テイラー船長もボストンに到着なさったそうです。ですからどうしてもボストンに行かねばなりません。月曜日、丸太を伐り終ったら出掛けるつもりでした（何という堅い木だったことでしょう。背柱が痛くなりました）。ところが同日の朝二人の若者が思いがけないことに私を訪ねてきました。誰だと思えますか。モンソンからの二人の日本人でした。彼らのおかげでのこぎりの作業はできなくなりましたが、同国人と一緒に二、三日をすごせて本当に満足でした。

彼らに会ったとき、英語で話すべきか、日本語で話すべきかに迷いました。しかし彼らが日本語で話し始めたので、私もまた自国語を使わざるをえなくなりました。はじめ話しかけると、一寸とまどいを感じました。けれども私の方が彼らよりも上手に、また早口でしゃべりました。彼らは午前中ずっと私の部屋にいました。午後、「標本の」陳列棚と体育館を案内しました。夜には私の方が彼らをホテルに訪ね、十時になったので一泊することにしました。一緒にマタイ伝の二十八章を読みました。彼らはこの章を十分よく理解したように思いますが、三位一体のことが理解しにくい様子。そこで私にできる限りの説明をしました。お祈りをしてほしい、と頼まりましたが、私は日本語の祈りができなかったので、英語で祈りました。彼らは英語を自由に話すことはできませんが、でも英語は非常によくわかります。

この二人はモンソンにいる日本人の中では最もよくできる学生です。彼らが祖国のためによい道具となってくれることを望んでいます。この間ずっと宗教問題について話し合いました。彼らは自分の罪を認めています。また、どうすれば主に出会えるかということもわかっています。ちょうど幼な子のように、へりくだった美しい精神の持主です。最初彼らは祖国の利益のために自然科学を勉強しようと考えました。しかし神は彼らのとざされた目を開き給

い、彼らと天国との間にあった厚いヴェールを取り払い給いました。神は、それを通して永遠の生命を得ることができ、彼らに示して下さいました。それ故彼らはやさしい御恵みに感謝し（彼らはまだ罪人ですが）、またキリストのために、祖国の人々に何かよいことをしたいと望んでいるのです。神が日本人をこれほどまでに祝福して下さっていることは有難いことです。あの不毛の、未熟な国土において、福音が実を結ぶ日が遠からずやってくることを望んでいます。

この手紙の中でふれられている日本人は、偽名のもとに、また中央政府に報告しないで薩摩藩主がこの国に派遣した六人のうちの二人なのであった。一八六八年の維新ののち、日本政府が彼らの支援を引き受け、彼らに本名を名乗らせた。彼らはみなまじめな学生であった。彼らのうちの一人はのちほど日本に農学校を設立するに当たり、ウィリアム・S・クラーク学長と連携した人で、エゾの知事に任命された^{**}。これらの同国人に対し新島は非常に深い関心を抱き、数度にわたってモンソンに彼らを訪ね、長年にわたり彼らと文通したのであった。

ハーディー夫人あての手紙からの抜萃

一八六八年一月十日

年の初めにあたり、キリスト者としての義務をよりよくはたすために心をあらたにし、キリストの光をより強く保ち、主のご用に対して備えたいと望んでいます。罪におちいらぬように祈り、かつ警戒しています。同じようにご家族のためにも祈っています。健康に気をつけられまして、十字架のもと、おすこやかにお過ごし下さい。

一八六八年二月十四日

大学生活を大いにエンジョイしています。イエスに在る大きな深い喜びは、とてもペンであらわすことができません。主はすべての悪に抵抗するよう助けて下さいます。主は聖霊によって私を慰めて下さいます。主はやさしい御手でもって正義の道に私を導き、「さあ、命の水を好きなだけ飲みなさい」と言われます。私のような罪人にとって、こんな有難いお招きの言葉があるでしょうか。主の御恵みを思うとき、この世のことについての思いは消えていきます。神の御国を押し進めるために、大胆に何かをしたいものです。

一八六八年二月二十一日

日本からの最近のしらせによれば、將軍と諸大名との間に戦いがあったとのことです。江戸にある將軍の邸宅は薩摩藩主（モンソンに若者たちを送って教育をうけさせているあの藩主です）の手下どもによって焼き払われました。^{*}お城は私の家から歩いてすぐのところにあります。しかし私は家族を全能者の御手の守りの中にぜひとも置いて頂くようにと祈っておりますので、家族のことは心配していません。

明日は休日ですから、授業はありません。^{**}時々そのような日があれば、どんなにいいでしょう。この日のために、この国に英雄という贈物がなされているために、そして独立のために、皆様にご挨拶を送ります。私の国にもそのような自由が実現する日を見たいものであります。

一八六八年三月二十五日

上衣の袖口がすり切れ、ボタンの孔がひろがり、上衣の色もいくらかあせてきました。お手許に余分の上着があれば、教会に着ていけるように無心を申し上げたいのですが。お持ち合わせがなければ次の秋まで待たせて頂きます。新しい服を着る特権は私にはありませんから。ただし行く末の世界においては、純白の衣をまといたいというのが私の一大希望であります。

一八六八年三月三十日

ここ四、五週間、神経が高ぶり、熟睡できませんでした。ヒッチコック博士は毎晩足浴をすることと、就寝前に脳を麻痺させるために軽食を取ることをすすめて下さいました。^{*}しばらく忠実にそれを守ってきましたが、以前よりはかなりよく眠れるようになりましたので、先週からはそれを止めています。それに、そうした空しい療法のためにお金を使いたくありません。ご主人様はよく散歩をなさいますか。散歩こそがいちばん大切であり、それはまた実業家にも学生にも必要であると思います。自室にとじこもって長時間勉強していると苦しくなり、退屈してきますが、原っぱに出て胸を開き、酸素を胸いっぱい吸い込みますと、常に軽やかで仕合わせで、力が湧いてくるのを感じます。私の健康を回復するにはこれが唯一の方法です。ご主人様も戸外でうんと運動なさいますよう希望いたします。ご主人様をはじめ、ご一同様によりしくお伝え下さい。

この年の四月、新島は炎症性のリユーマチがひどくなり、数週間にわたり床についた。そしてシーリー教授宅で手

厚く看護を受けた。

アーモスト、一八六八年四月二十七日

お手紙と小切手、それに日本からの転送物を無事に受取りました。私の病気について暖いお尋ねを頂き、有難うございます。もうほとんどよくなりましたが、シーリー教授はなおお宅に引留めて下さっています。教授のご親切に對してどうしたらよいかわかりません。感謝あるのみであります。氣候がたいそう変わりやすくて体にさわりやすいものですから、私がまた風邪を引きはしなかと心配されて、教室に出てよいというお許しが出ないのです。そういうわけで私はまだ教授宅におります。私の滞在をととても喜んで下さっていますのは、シーリー夫人がまだオールバニーから帰ってこられないからです。しかしできるだけ早く寄宿舎の部屋に帰らなくてはなりません。小切手を受取ったとき、これだけの高額を自分の手でもうけようとすれば、相当の重労働をしなければならないことを思い、このご好意に對し心から感謝の念を覚えた次第です。シーリー教授の使いの人がお手紙を届けてくれた時、本当はそれがどこから来たのかを知らないで、「これはお国からですよ」と彼は言いました。表書きを見ると、奥様からだとわかりました。しかしその中には和紙のような柔かいものを感じましたので、その人に「多分そうでしょう」と答えました。それから開封してみますと、たしかに国からの手紙でした。父は少し前に私に手紙を書いたのですが、私がそれをまだ受取っていないようだ、と書いています。家族は母以外はみんな無事です。母は私の出国以来私のことをずっと心配してきましたから。姉からの手紙もありました。彼らはご夫妻に對し特別な敬意と感謝の念を表明しています。そのほかのことですが、市民の間には非常な混乱が起こっています。江戸の市民は、將軍の敵が江戸を攻撃することを

極度に恐れており、父をはじめ誰も彼もが私に帰ってほしいと言うのです。しかしながら私は父のものではありません。すでに鋤に手をかけた私が、どうして今戻る事ができましようか。^{*}私は主のお仕事のために備えなくてはなりません。それでもなお私はここにいて母のために大きな善をなすことができると思います。彼女のために熱誠をこめて祈ることができるからです。神はあらゆる場所にまします故に、私は神が彼女のお世話をして下さると信じています。今帰国すれば戦争に参加しなければならいでしょう。そんな野蛮な戦争で殺される気は毛頭ありません。代りに私は救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取つて、^{**}サタンに対する戦に身を献げる覚悟です。どうか奥様のお祈りの中に母を覚えて下さいますように。一日に何度も母のために祈っています。母が命の言葉^{*}を聞くことができる日まで、神が彼女の生命を保つて下さるよう望んでいます。

アーモスト、一八六八年六月十五日

最近鉱物の採集を始めました。鉱物に関しては何かを知っておく値打があると考えからです。日本にいた頃、私はあの国は農業国だと考えていました。でも、今では日本は鉱物の国だと思います。日本には金、銀、銅、鉄、（最近発見された）白金、その他沢山の貴金属を産出するいくつかの鉱山があります。しかしながらふつう人民は山の頂上に神社を造るのであって、たといそこに鉱脈があることが明白であっても、神社を汚すたたりのあることを恐れて、そういう山に敢えてさわろうとしないのです。私が帰国する時には、恐らく鉱物に多くの時間をかけることはできませんでしょう。私は人々に唯一の賢明な創造者のことを教え、彼らの愚かな考えを取除き、彼らがキリスト教文明を受け入れるよう刺激したいと望んでいます。

新島は休暇の大部分を、ボストンの友人たち、ヒンズデールのフリント夫妻、アンドーヴァーのヒドン姉弟、チャタムのテイラー船長の家族を訪問してすごした。彼はまたマサチューセッツ、コネティカット、ロード・アイランドの諸州で、鉱物学・地質学上の標本を採集しながら、数度にわたって広範囲な旅行を試みた。一八六八年夏には大きな期待をもってホワイト・マウンテンズ*までこの目的のための遠征を計画した。次に掲げる手紙の中に彼はその報告をしたためている。

ハーディー夫人あて

アーモスト、一八六八年八月二十二日

・・・なつかしいアーモストからお便りをしたためられますことを仕合わせに存じます。昨日無事ここに戻りました。シリー教授が親切に迎えて下さり、今は教授宅に滞在しています。次の月曜日までは寄宿舎に入ることができないからです。旅行はまったくすばらしかったとだけ申し上げます。五週間以上にわたり、四百マイル以上を歩きまわりました。それでも足はちっとも痛みません。足の扱い方というものがよくわかりました。この休暇をこのように有益かつ愉快に過ごせるようにとおかねをご配慮頂き、深謝申し上げます。ウスターで友人たちと落ち合い、そこから私たちの徒歩旅行が始まりました。ボストン、アンドーヴァー、ローレンス、ニュー・ハンプシャー州セイレムを通り、ニュー・ハンプシャー州レイモンドへの途中で最初の安息日をすごしました。私たちは晩の祈禱会であかしをするよう求められました。私たちはその教会に伝道精神をめざすために、宣教事業についての奨励をしました。祈禱

会はいっぱいの人々で、奨励はとも注意深く聞かれました。一人の紳士が宣教事業を助けるために、前回よりもっと多くのかねを出そうという提案をしました。彼らは私たちに無料で食事と宿泊の世話をしてくれました。

ウィニピソギー湖は蒸気船で渡りました。霧が立ちこめていて遠くの景色を眺めることはできませんでした。ダイ

アナの滝で水浴したため、ジャクソンでしばらく体が不調となりました。ジャクソン・ハウスに二日間ばかり滞在したため、思わぬ出費。同月の三日、私たちはグレンの側からワシントン山に登りました。霧が深いため山頂に一泊二日の滞在。莊厳な日没を見ました。その後クロード側下山。キャノン山に登り、老人のプロフィールを形づ

くる岩の近くまで行きました。^{***}それからフルーム谿谷に入り、一行で記念写真を撮りました。その一枚を奥様のため

に取っておきたいと思います。一行はフルームで解散となりました。というのは、私はフランコニア、リスボン、ウ

ォレンにあるいくつかの鉱山を訪ねたく思いましたが、友人たちは鉱山に興味がなかったからです。彼らはプリマス^{***}

街道を辿り、私はフランコニアのオア・ヒル、リスボンの金鉱、ウォレンの銅鉱へとやってきました。そういうわけ

で私は休暇中に鉱石に関して相当な知識を得た次第です。土曜日の午後四時半ごろにウォレンをたち、七時以後は森

の中を歩きました。まっくらになり、その夜をすごすべき家も見出せません。やっと一軒の家があったのですが、そ

この人は家の中はおろか納屋にさえとめてくれません。致し方なく、なお遠く歩いて行きました。とうとう、そこか

らさらに行ったところに一軒見つけ、その晩は納屋にとめてもらいました。納屋に入るとすぐ、はげしい嵐になりました。

かなり古い納屋で、あちこち雨漏りがしましたが、ゴム製毛布のおかげで濡れずにすみしました。翌日は主の日

でしたが、安息日を守れるような家はみつきりません。この方面では人々は安息日などにかまっていないようです。

或る人々は庭で働いていました。そこで致し方なく私はその朝九マイル歩き続けなければなりませんでした。〇――

町の教会に礼拝の始まる直前につきました。教会堂の外観は非常に古そうで、ペンキも塗っていないようでしたが、内部は申し分なくととのっていました。牧師がいなかったため、定例の説教は行われていません。その人々は私にはとても豊かに見えました。そうです、数人の牧師を備えるくらいに富んでいます。なのに彼らは講壇を担当する牧師を持つていないのです。ちゃんとした服装をした人々でしたけれど、礼拝している彼らはつめたく見えませんでした。アメリカに来てからというものの、このように乾いた、つめたい集会に出たことは確か、一度もありません。老紳士が担当していた安息日学校のクラスに出てみました。これまた、これほどひややかで、気乗りのしない学校はじめてでした。その日の午後、川を渡ってF——町^{***}の教会に行きました。そこでは年老いたすばらしい説教者の説教を聞きました。のちほどそれがミス・マッキーン^{***}の父上であることがわかりました。私はマッキーン先生にお目にかかろうとしましたが、先生はその地にお住まいではありませんでした。一人の紳士が私を丁重に迎えて下さいました。また私は祈禱会で何か話すように言われました。集まった人たちに私は日本の異教的な習慣と風習について語りました。次の日の晩はヴァーモント州ウインザーのどこかで泊ることにしました。或る家に近付いて見ると、一人の若い紳士が椅子に掛けていました。私はその人にむかって、ひと晩、納屋に寝かせてもらうわけにはいきませんか、と頼みました。彼は私は何者で、どこから来たのかを聞きました。名前と出身地を告げますと、彼は母親を呼んで私に会わせました。私が日本人であることがわかると、彼女は宗教新聞で私のことを何か読んだことがある、と言いました。彼女はとても親切に、「わたしはクリスチャンである紳士を、わが家の納屋におとめするわけにはいきません」と言いました。しばらく話してから、立派な寝室に案内され、必要なものをすっかりととのえて頂きました。甘美な休息をとり、八時間以上も眠りました。翌朝婦人はすばらしい朝食を準備して下さり、また沢山の宗教パンフレットとポケット型の

賛美歌集もくございました。疑いもなくこの婦人は善良なクリスチャンであります。また息子の方も一マイル半ばかりある村までの道のりを馬車で送ってくれました。何人かの人々は私のような見ず知らずの者に対して、このように寛大で親切であります。

コネティカット川流域を下っていくさいに、新島はハノーヴァーを通った。^{*}機会がくればすべてそれをつかまえるという新島特有のくせを発揮して、ちょうど開講中であつた医学校の講義に彼は出席した。オリヴァー・P・ハバード教授は朝の授業に行く途中でこの若い徒歩旅行者に出会ったとき、彼をカナダからやってきたセント・フランシス族のインディアン^{*}の一人であると勘ちがいのした。教授が彼に話しかけようとしたとき、新島の方から鉱物学の教授はいらっしゃいませんか、と聞いた。そこでハバード教授は自己紹介をし、新島を自分の研究室に招いた。新島は袋に入れていた鉱物標本を見せてから、準備にとりかかる助手の仕事を興味深く観察した。講義が終ると彼は丁寧にいまを告げ、旅を続けたのであつた。

ハーディー夫人あて

一八六八年九月十九日

……家具を売って得た十ドルのことですが、それがどこへ行ったのかわからないのです。全く不思議なことです。それは消えてしまいました。トランクの中にしまっていたのですが、どこかで無くしたのだと思います。トランクにはいつも鍵をかけていましたから、盗まれたのではないことは確かです。ですから、私がそれを取り出して、い

つであつたか夕暮方に、一ドル札とまちがって支払つたのだと思います。よくご存知の通り、私はおろかな仕方でお金を使うものではありません。使つた時にはいつも決算報告をお送りしています。残念なことに、不注意からあの金をなくしたと申し上げざるをえません。私の不注意をどうかお許し下さい。おろかな使い方をしたあとで、奥様をごまかしたなどとはお取りになりませんように。私は善人たろうと心がけ、また日々神様とともに歩もうとしています。ですから、奥様を欺こうなどとは思ひもよらぬことであります。

一八六八年十月一日

・・・一週間前の火曜日に小包を受取りました。上衣、燕尾服、チョッキ、ズボンを有難うございます。恐縮ですが、あの燕尾服だけは頂くわけにいきません。あれを着るにふさわしい年齢ではありませんし、そんな威厳も備わっていませんから。申しわけのないことですが、実はあの燕尾服を着たとき、それを見て同室の友達が笑つたのです。私は今チョッキは三枚ありますので、このチョッキもご辞退申し上げます。衣類は頂きたいのですが、必要以上のものを持ちたいとは思いません。

一八六八年十一月八日

・・・ご主人様にダーナの鉱物学^{*}を入手して頂くようお願い致しました。その本がほしくてたまらなかつたのですが、高価なものですから、長い間お願いせずに参りました。しかし先日ついに、何とか節約して本代を捻出しようと決意しました。そこでお茶を絶ちました。一学期間では大した金額になりませんが、一年間たてばかなりの金額に

なります。そのような高価な書物をお願いすることをどうかお許し下さい。大学での出費のリストを同封させて頂きます。予期していた以上の出費でしたが、あやまりはないものと存じます。・・・このような肉体を養うのに何度となく、絶えず心を碎かねばならないことはまったく嫌なことです。今思いますが、この種の一切の労苦から解放されて、もはやつくろうことも、洗うことも、作り変えることも必要としない純白の衣をまとえるような場所に到着する日がくれば、どれほど仕合わせだろうかということです。けれども、この世にある限りは、肉体を大切にすることはきわめて理にかなったことであると思うのです。

ハーディー夫人あて

アームスト、一八六九年五月二十一日

・・・ご存知の通り、過日、「日本の」家族から手紙を受取りました。一年以上にわたって音信を待ち望んでいたところでしたから、とても嬉しく、慰めを得ました。父は長文の親切な手紙の中で、ここ二、三年のうちに日本で起こった驚くべき変化のことをすっかり知らせてくれました。上層の人々の大部分は髪を短くし、アメリカ風の服装をしているということです。

父は私がこの国に滞在していることに一層満足しています。さらに、支配層の人々がすばらしい変化をとげつつあることを見、また、西洋諸国の教育制度がやがて日本に導入されることを知って満足を見出しております。お二人様にあてた父の手紙をお読み下されば、父が私からの消息を手にし、こちら側の世界でよい友達にめぐまれていることを知ったとき、彼がどれほど喜んだかがご理解頂けると存じます。父はお二人様にあてた手紙の内容を知って頂けた

めに、それを英訳するように申しました。そこで私は父が父なりに気持を表現したほとんどそのままに訳してみました。姉と弟もお二人様あてに書いて参りましたが、父の手紙とほとんど同一内容でありますので、訳すことは致しませんでした。どうか彼らの感謝の念と敬意を受け入れて頂きまして、お二人様が私のためにして下さいましたことに對し、彼らがどれほど有難がっているかをお汲み取り頂きますように。すみませんが、ほんの二、三行でもよろしいですから、父あてにご返事を頂けますならば幸いです。お許し頂ければそれを日本語に訳します。お手紙を父は非常に喜ぶことでありましょう。

新島の父からハーディー夫妻あて

江戸、一八六九年二月

まだお目にかかる機会はありませんが、一筆啓上させて頂く次第であります。今なお寒い時期であるとはいえ、ご健勝のことと推察し、お喜び申し上げます。

せがれ七五三太が知識を求めて貴国に渡来致しましたみぎり、ご同情をかたじけなくし、かつはご親切にせがれの希望をお聞き届け下さり、せがれを学校に送り、しかも就学中の必要経費をご負担下さるとのお約束をたまわりました。こうして過去数年にわたり、せがれの経費を引きうけて下さり、ためにせがれは何の不自由も感じませんでした。このご恩恵に対して私の感じました喜びと感謝の念は筆舌につくしがたいものがあります。家族一同このご親切に感じ入り、ほとんど毎日のようにあなた様のおうわさをして参りましたが、これまでにまだ一度もお手紙を差上げていませんでした。これまでに不義理を重ねましたために、良心は大いに痛みを感じている次第でございます。

せがれはあまり賢いとは申せませんが、それでもなお、親と致しましてはせがれがご親切のおかげで名を挙げるようになることを望みつつ、せがれのために大いに喜んでゐる次第であります。せがれが貴國に滞在致します間、何とぞ引き続きよろしくお願い申し上げます。心から懇願いたす次第でございます。また、令夫人様がせがれに対してお示し下さいましたご親切に対しましては深謝申し上げます。私はせがれがあなた様のようなご親切なお方の庇護の下にあることの故に、自分自身を何となく誇らしく感じ、「自分は何という果報者だろう」と口に出して言うこともしばしばありました。お國を訪問してあなた様に直接お目にかかり、そして山よりも高く、海よりも深いご恩に対しお礼を申し上げる機会を得たいものと話し合つて参りました。けれども私は義務に縛られておりまして、海を渡ることができません。そこで私は胸から溢れ出る感謝の念を手紙に託した次第です。私の父は今八十四歳で、いつもあなた様のご親切のことや、また孫の幸運のことについて語っております。父からも、ご一同様に対して感謝の念と敬意をお伝えするようにと申しております。またおたより致したく存じます。恐惶頓首。

新島民治

ハーディー夫人あて

アーモスト、一八六九年九月三日

・・・コネティカット、ロード・アイランドの旅はとても楽しいものでした。またチャタムでは非常に愉快な時をすごしました。チャタムはかなり静かなところですが、でも私は騒がしい都市よりはチャタムが好きです。自然の静けさが静かな冥想へと導いてくれましたから。心を勉強から解き放ち、自然界の驚くべき秩序に静かに思いを寄せたり、

宇宙全体をしろしめす方でありながらなお、私のようなあわれな罪人をも心にとめて下さる神様と交わるという甘美な時を持ちえたことは、私の休暇の最良のひとつであったと考えます。

勉強の方もうまく行っています。新しい同室者^{*}も気に入っています。彼は非常にまじめなクリスチャンです。アーモストは何という魅惑的なところでしょう。ここで勉強していると、あきることがないようです。急いで書いたこの手紙、どうか笑わないで下さい。蜜蜂のように忙しくしていますので、勉強以外のことに使う時間はあまりないのです。生涯を賭けた仕事のために準備する力をどうか神様が支えて下さるようにと念願しております。

奥様が私の手紙に対するご返事をたとい一箇月、いや一年も遅らせなさることがありません。私に對するご関心のことをつゆ疑うことはありません。だって奥様は私の最も親しい友であるからです。それでもなお、私はいつも奥様の手紙がほしいのです。奥様に手紙を書くとき、私は切にご返事を待っています。だって私はいつも奥様が仕合わせでいらっしゃるのだということを確認したいのですから。お忙しい時でも、二、三行のお手紙を下さい。たった二、三行でいいのです。どうかご近況を知らせて下さい。

ハーディー夫人あて

アーモスト、一八六九年十月二十四日

……今朝アメリカ伝道協会^{*}の主事が説教し、アメリカ人が現在どのような恐るべき状況に立っているかをいきいきと描いてくれました。アメリカには八百万人のアイルランド人、沢山のドイツ人とフランス人、南部には四百万人の黒人、太平洋岸には何千人かの中国人と若干の日本人がいます。アメリカ人がこういった人々をキリスト

の真理でもって啓蒙し、高め、教育するのに手を貸さなければ、この人々が、この国の誇りである自由な制度を破壊していくでしょう。私は彼のまじめな論説にかきたてられ、キリストと共に働いてキリストの王国を拡大していくことはまさしく最上の特権だと思いました。チャペルから出てきますと、多くの連中が「あんな説教は好かん」と言っていました。説教者に対する共感などは少しもないのです。彼らの心のつめたさ、キリストの教会と自分の国の福祉に対する無関心は、まことに残念であります。すべての異邦人たちがアメリカを目してキリストの光の中心地と考えていますのに。光の中心がたいして強烈でないとすると、どうしてこの国が遠い暗い隅々に住んでいる人々に光をもたらすことができるでしょうか。友よ、自分自身のためにのみ生きて、キリストのためには生きようとしなないこれらのクリスチャンたちのために、まじめに祈ろうではありませんか。アメリカの教会がすべての国々に対して、祝福された福音を、さらに熱情をこめてのべ伝えていけるようにお祈りしようではありませんか。・・・『日本の』私の家族はみな元気で、父は今なお藩主とともに江戸に滞在しています。しかし、やがて職を退き、国許に隠退する予定です。父の年では出仕はかなりこたえるようになったからです。時にはどうしても免れられない義務の故に、朝の二時、三時まで起きていなくてはならないことがあるのです。父は静かな田舎町で休息するのがよいと思います。けれども彼が江戸を去っていくことは私には悲しいことです。恐らくこれからはこれまでほどに手紙をもらうことがなくなるかもしれません。父はいつも私あての手紙を横浜まで自分で持参してアメリカに送ることにしていましたから。父は私あての手紙の発送には非常に気を配っていました。私への秘密の通信が何かの事故でばれたりしないように、父は郵便屋に手紙を託すことをしなかったのです。帰郷のあかつきには父はもう横浜まで手紙を届けに行くことはできなくなります。歩いていくには遠すぎるからです。そうです、『安中は』江戸から六十マイルくらいもあるのです。

家族のことは一切神様の御手にゆだねます。家族に何事が起ころうとも、それは主のなさったことだと信じることに致します。

一八六九年の夏、新島は徒歩と鉄道による旅を試みた。彼の日記からぬき書きしてみよう。

七月十五日、一〇時三〇分の汽車でアーモストを發ちハートフォード^{*}に向かう。ハートフォードでは旧友D・E・バートレット^{*}氏のところに泊まる。手厚い歓迎を受けた。市立図書館と州會議事堂に案内される。議事堂のてっぺんからは全市を一望することができる。レンガや砂岩の建物が緑の木々の間に散在している姿は絶景であった。

〔七月〕十六日。正午の汽車でハートフォードを發つてミドルタウン^{*}に向かう。到着してみるとウェスリアン大学の卒業式がメソジスト教会で挙行される所であると聞かされた。だが教会堂は満員。入口の近くでもじもじしていると、後から私の腕をひっぱる者がある。ふりむいてみると「一八」七〇^{*}年組の、大きな青い目をしたA君が笑っているではないか。彼は今しがたハダムからやってきたばかりで、ハダムでは誰に会うべきか、また私のほしがっている物〔鉱物〕を入手するにはどこへ行けばよいかを教えてくれた。そこでハダム行きについては勇氣百倍。だが汽船

の出る時刻までにはまだ時間がある。有効に時をすごすため、フェリボートで「コネティカット」川を横切り、ポートランド^{*}の砂岩採石場を訪れる。恐龍の足跡の化石の標本をたくさん見つけたが、事務所の人は一つもわけてくれない。暗くなつてから、六時発の船でミドルタウンを發つ。はげしい雷雨。その光景に見とれていた。W・B・氏が食事と部屋を提供して下さる。奥さんの加減がよくないという話。二人とも私に好意をもってくれているようだ。首尾

よく電気石を入手したが、コルンブ石の方はいまうまういかなかった。

〔七月〕二十一日。ハダムを徒歩で出発、ニュー・ヘイヴン^{***}に向かう。午後およそ十七マイル歩いたが、相当長時間を鰯釣りといちごつみに費した。ノース・ギルフォードの農家で一夜をすごす。主婦はとても親切にしてくれ、宿泊代、朝食代とも、どうしても受取ろうとしなかった。

〔七月〕二十二日。朝はげしい雨。午後は美しく晴れあがり、とても暑くなった。小川でシャツと靴下を洗濯する。ニュー・ヘイヴン到着後、ホテルで一夜をすごす。

〔七月〕二十三日。イエール大学の卒業式が中央教会で開催される。吉田と大原という、二人の日本人に会う^{***}。式にはキリスト教の要素があまりなく、あんな式ではどうかと思う。鉱物学の標本コレクションと美術館を訪れる。預言者エレミアの絵はすばらしい。うっかり者の連中が私のことを秘密結社の一員と勘違いして、デルタ・カップ・イブシロン^{***}会の会館に招いてくれる。文芸クラブ用の部屋は申し分なく調度がととのっている。階段上には沢山のガラスのうつわとワインのびんが並んでいた。「秘密」が何を意味するかがわかって嬉しく思う。次々に部屋を案内しながら、私はどこでこの会に加入したのかと彼らが聞いた。「まだ加入してないんです。時間があれば入りたいと思います」と答える。この答を聞いて連中は少なからずびっくりしたことだろう。

〔七月〕二十四日。プロヴィデンス^{***}から八マイルのスミスフィールドの石灰石採石場を訪れる。いい標本をみつけた。プロヴィデンスで一泊。

新島はあらゆる機械仕掛と工業製産に強烈な興味を抱いていた。もちろんのこと、彼の見たものの大部分は彼にと

って全く新しいものだった。この旅行で彼はスプリングフィールド^{*}の兵器工場をはじめ、道すがらにあるいろんな町の工場や鑄造所を訪ねてまわった。彼のノートは二百ページ以上にわたって、鉄、真鍮、小火器、彈藥筒、ガス、紙、針金、綿布、めっき製品、菓子製造等々の實際を、それに用いられる機械や道具のおびただしい挿絵とともに綿密に書き込んでいたのである。

夏休みの残りを新島はチャタムのテイラー船長の家族のもとですごした。十二月十一日にテイラー船長はイースト・ボストンに上陸するさいにフェリボートとドックの間にはさまれて、ほとんど即死の状態でなくなった。この月の新島の日記には、次のような一節がある。

「いつでも主の呼び出しに備えていなければならぬ、ということを、私自身と友人たちに対する警告として、この悲しい出来事を忘れないように、これを記しておく。一八六九年十二月十三日、月曜日朝のことだった。一人の子供が黄色い紙片を私の許に持ってきて、手短かに、宛名人をたしかめた。それはテイラー船長の死を知らせる電報だった。非常に驚いた。どうしていいかわからなかった。全然口がきけなかった。椅子に掛けたまま、『こんなことは信じられない。夢だ。そんなはずがない。ありえないことだ』とつぶやいていた。涙も、言葉も出なかった。しかし・・・それから静かに立ち上り、船長の小さな写真のかかげてある壁までゆっくりと歩いた。目をしっかりと見開いて、その似姿をみつめた。元氣そのもので、とても死んだ人に思えない。そこで急いで電報局へ行って、この電報に何か間違いはないかと聞いてみた。間違いはないとの返事。そこで疑うことをやめて、鉄道の駅へ急行した。汽車の中で、私の思いは千々にみだれた。これはあまりにも重い十字架である。歩き始めたときには、まるで足の悪い人のよ

うで、コウモリにすがって歩いた。その夜はテイラー夫人には会わなかった。私を見て夫人の悲しみが一層刺激されてはいけなと思ったからだ。でも船長のきょうだいたちに会ったとき、大声で泣き出してしまった。あんな悲しい場面はとうてい表現できるものではない。中国ではじめて船長に会って以来、船長が私のために示してくれたあらゆる親切、そして、たった十週間前に彼のところですごした休暇のことが心に浮かんできた。ほとんど顔を上げることもしないまま、顔をそむけ、はげしく泣くのみだった。船長がなぜ私にとってかけがえのない人であったかを、どう表現したらよいだろう。私はシャンハイで彼の親切な手でうけとめられたのだった。シナ服を与えた上、縫い方を教えてくれた。航海術も教えてくれた。辛抱強く話しかけてくれたし、いつも私のあやまちを許してくれた。私にひどい言葉をかけたことは一度もなかった。それ以後私の親代りとなって下さった方に私を紹介してくれたのも船長だった。最後に別れるとき船長は私に接吻してくれた。船長よ、これが私の最後の接吻です。船長のひたいは大理石のようにつめたかった。

それからテイラー夫人と男の赤ん坊に別れを告げた。『御座の正面にいます小羊は彼らに食物を与え、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとして下さるであろう。』〔ヨハネの黙示録7・17〕

ハーディー夫人あて

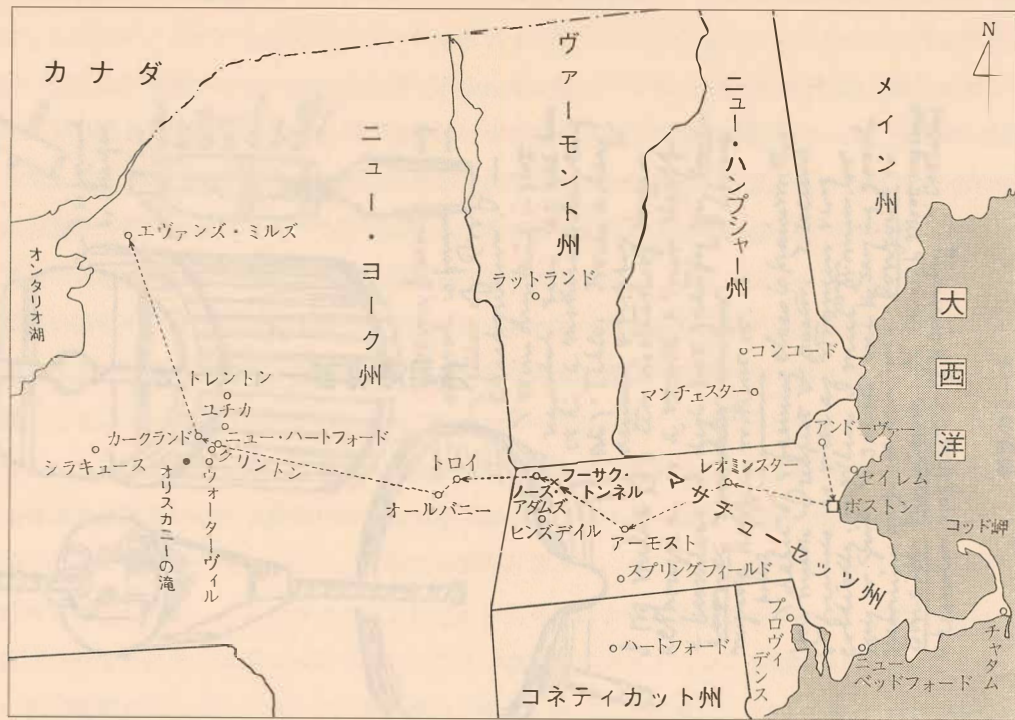
アーモスト、一八七〇年四月五日

気分がよくなりましたのでこの手紙を書いている次第です。先便以来だんだんとよくなり、力がついてきました。

この金曜日から戸外にも出るようになり、シーリー教授宅の玄関先の庭をそぞろ歩きしています。しかし今日はとても寒く、荒れ模様です。やむをえず暖い私の部屋にとじこもって静かにしています。ふだんとほとんど変らないくらいに感じるのですが、それでも何かをしていると長持ちできないことは不思議なことです。風邪はなおりましたが、あれからというもの、すっかりよくなったわけではありません。頭痛がしますし、神経も高ぶるのです。はたすべき義務に圧迫されながらも、できるだけ勉強を続けています。このことで不平をこぼしたくありませんでしたので、勉強もお祈りも元氣いっぱい続けてきましたが、ついにこのリューマチには全く参ってしまいました。この国に來ましてから、これほど健康状態の悪化を経験したことはありません。この学期に勉強したくらいに、来学期のはじめにも勉強をし続けるとなると、すっかりダウンしてしまうのではないかと心配です。ですから、しばらく休養して健康の回復をはかるのがいいと思います。どうか、これは勉強が嫌になったのだと思わないで下さい。勉強はしたいのです。勉強を始めた強い誘惑を感じています、ちょうど餓えた狼が餌物を求めるように。四週間以上も病気でしたが、時間をすっかり無駄にすごしたわけではありませんでした。

この秋には神学を勉強するために二年間にわたって私をアンドーヴァー「神学校」へ送ってやろうというお知らせを頂きました。以前にアンドーヴァーを去る時のお話では、アーモストで二年間、そしてアンドーヴァーで一年間勉強するということになっていました。しかし私はアーモストに、おきめ頂いた期間よりも一年間長く滞在しました。病気のためこの一年間の後半のほとんどを悲しみの中で失ってしまいました。なのに奥様は私をあとも二年もアンドーヴァーにやって下さる。何という有難いおぼしめでしょうか。このご恩恵なくしてどのように勉強が続けられましょうか。ご親切に対し心の底から感謝申し上げます。このご芳情に答えて、今後できる限りみのり豊かな日々にして

3
アンドーヴァー
神学校時代



1872年夏の旅

アーモストでの最後の年の後半になって、新島は再び炎症性のリユーマチに襲われ、この病気は彼の学業をいたく妨げた。暖くなって健康を取戻した彼は、四月から勉強に取りかかった。彼は一八七〇年卒業生として理学士（B・S・）を取得し、級友たちに選ばれて、卒業の日に森の中で演説を行なった。^{*}これから何を勉強していくかという問題はむずかしいことではなかった。新島は同胞に対する天国のメッセージの伝え手として、祖国に帰りたいという願望に燃えていた。そしてこの目的のために、彼はアンドーヴァーの神学校^{*₂}に入るべきであるということになり、この決定は新島に最大の満足を与えた。この頃もう一つ問題となったのは、日本に帰るに当たって、日本人として帰るべきか、それともアメリカ人として帰るべきか、ということであった。神戸と横浜にいる人たちに彼が助言を求めたところでは、彼はアメリカに帰化すべきだという意見であった。つまり、そうすれば、宣教の事業に従事しているときに困難に遭遇した場合、米国領事の権限による法律の保護を受けられる、というのである。ところが、条約は宣教師の働きを禁じてはいないものの、日本政府から苦情が出た場合、米国領事がはたしてどれだけの保護を与えられるものか、大いに疑わしかった。また、帰化することは法律的に外国人になることであり、この事実が日本生まれの彼を個人的な悪意から守ってくれるとは考えにくかった。その後起こった事からは、この問題がさして重要でなかったことを証明した。しかし、それが当時の新島の心の中でどういう形を取っていたかに注目することは興味深いことである。新島の場合それはいかにして最大限の保護を確保するかではなく、いかにして最大限の影響力を及ぼすかの

問題だった。日本市民としての彼の諸権利を放棄することによって、彼の影響力がいかに深刻に傷つくかということ、明らかであった。それ故彼は帰化しないことに決め、一八七〇年の秋に、神学の勉強を始めるためにアンドーヴァーに戻ったのであった。

一八七一年の冬に彼は再びリ्यूマチにかかった。数週間何もできない状態が続いた。一月十日に彼は次のように書いている。

「自分の病氣と苦痛を通して、苦難を受けて死に給うた救い主に対し、一層共感することが出来ます。十字架上の主を見つめることによって、あらゆる苦勞と苦難を安らかに、喜び勇んで堪えることが出来ます。〔樂園を〕喪失した人類を救うために、私が今経験している苦しみよりはるかに大きな苦しみを味わわれたことを知っておりますから。救いのご計画に深く思いを致しますとき、私はその美しさと壮大さにはほとんど我を忘れるほどであります。自分の体を使うことはできませんが、心を働かすことは出来ます。私は自分の苦悩を通して考え、祈り、そして神をほめたたえることができます。どうか私のために祈って下さい。私の病氣のためだけでなく、私が天の御父の御心に常に従順であり得ますようにと。」

ハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八七一年一月二十九日

この金曜日に転送してくださいました手紙は日本からのものでした。悲しい知らせが来しました。祖父がなくなったのです。手紙は八月五日付でしたが、祖父は七月十四日に死にました。

祖父の病氣について弟が手短かに述べていますが、それによると、死因はコレラであったと考えます。コレラは日本ではよくはやる病氣なのです。病氣であったのは四日間だけで、老齡のせいで、あまり苦しまずにみまかりました。八十六歳でした。弟によると、祖父は十分に長生きをし、孫たちの成長を見とどけ、私がアメリカでどんなふう暮しているかを聞いたので、後顧の憂いなしに死んで行ったそうです。けれども、もし祖父が最後の日にひと目私を見ることができたならば、一層満足して死んだらうと思うのです。晩年の祖父はいつも私の噂をしており、私に会うことを非常な楽しみにしておりましたから。ああ、祖父はもはや親しい者たちの中に存在しません。彼はキリストに対する希望を持つことなしに逝きました。恐らく彼は私たちの隣人の間に私が見かけた最もまじめな信頼のおける人でありました。祖父は律法なしに生きてきましたから、神は律法なしに彼を裁いて下さることと信じております。祖父のために私がささげた祈りと、以前に祖父に送ったいくつかの貴重な聖句の翻訳とが、彼の魂のために何かよい働きをしました。函館からの脱走の知らせを聞いたとき、祖父は私が苦しい目にあいはしないかとひどく心配しました。しかし私がアメリカの最良の学校の一つで学んでいることを聞いた時、彼は圧倒的な喜びを覚え、アメリカ人は日本人よりもはるかに気まえがよいことを認識したのです。

この知らせは大きな悲しみをもたらしました。もし救い主が、苦悩している私に共感して、この十字架を負うのに助けの御手を下したまわなかったならば、私は悲しみのために倒れてしまったことでしょう。この苦悩が私には、キリストに一層近付くための、また、キリストの御腕の中に静かにいこうための手段となりますように、どうか祈って下さい。もう一つの悲しいお知らせがあります。私たちの友、サミュエル・テイラー博士がなくなりました。博士はアカデミー・ホールに朝の祈禱のために入ろうとして、突然倒れたのでした。どうか主がこれらすべての悲しい情

景を私たちの魂に神聖なものとして定着させて下さいますように。テイラー博士の葬式は火曜日のはずですが、奥さまとご一緒にご出席になるのでしょうか。その時お二人様に拝眉の機会を得たいと存じます。

プリント夫人あて

アンドーヴァー、一八七一年三月二十一日

先週の水曜日に、ミカドからワシントンに派遣されている日本の公使、森〔有礼〕^{*}にボストンで会いました。彼が申しますには、もし私が日本政府あてに手紙を書き、私が何者で、アメリカで何を勉強しているか、また私に帰国の意志があること等を簡単に記すならば、その手紙を政府に転送して旅券を取得してあげよう、とのことでした。彼はまた上層部の内部で現在起こっている、キリスト教についての動きのことを話してくれました。彼らはプロテスタントとカトリックの間に大きな相違のあることがわかり始めたのです。政府は人民がキリスト教の信仰を抱くことを禁じていますけれども、二、三年以内に政府がプロテスタントの宣教師たちに対して国を開くであろうと信じています。ハーディー夫人がこれまでに私のために使われた出費分を森日本国公使が夫人あてに支払うのではないかと心配しています。彼はハーディー氏にむかって、私の教育のために使った全支出のリストをほしいと言ってきましたから。ハーディー氏がそのリストを送られるのではないかと心配なのです。森に対してその支払いをなされば、私はその金によって日本政府に縛られることになるからです。私としてはむしろ自由な日本市民としてとどまり、全力をあげて主の御用のために献身したいのです。なるべく早くハーディー氏に会って、この問題について話したいと思います。この問題を解決するために主が私たちに賢明で慎重な考え方を示して下さいるよう念願しています。〔森公使からの

申し出はただちに拒否された。」*

フrint夫人あて

アンドーヴァー、一八七一年六月七日

二十日前に日本の「森」公使からアーモストに来るようにとの招待を受けました。公使はマサチューセツツ農科大学でアメリカ式の農業を習わせるために一人の若い日本人を連れてきたのです。私はアーモストで公使と非常に楽しい二日間をすごしました。彼はきわめて紳士的に私を遇してくれ、私の旅費はすべて払ってくれました。彼が私を招いたことのおもな理由は、彼が日本にアメリカ方式の学校を創設することを企図していて、私にその責任をまかせたいと考えたからでした。私は彼の計画を大いに激励しました。ただし私がその責任者になることについては、はっきりした返事を保留しました。だって、もし私が、尊みまつるわが主の福音を説くことをしないのであれば、それはわざわざいふものだからであります。

ハーディー夫人あて

アーモスト、^{***}一八七一年六月十三日

こちらに帰ってきましてから、旅券を取得するため、日本政府あての手紙を書き直そうとしました。といいますのは、最初の手紙の中に、私はキリスト教の信仰を抱いていることには触れないで、ただ、アンドーヴァーで勉強している、とだけ書いたからです。神学を勉強しているということにすらも触れないで、文明の進歩の真正の秘密を研究中

である、とだけ書きました。^{*}アーモストで日本の公使「森有礼」に会いました時、私は彼に、みつかることを恐れて、暗夜にふるえながら道を行く盗人のように、キリスト教信仰を隠したまま帰国したくないこと、むしろキリストの愛の中を歩み、また自己の良心の光に照らして行動するキリスト者として帰国したいということを告げました。さらには、政府あてに手紙を書く場合、私の新しい、より健全な宗教のことを政府に知らせるようにしたい、と申しました。しかし彼は、そうすることがはたして安全であるかどうかはわからないが、まあとにかく、そのようにしてみたらどうか、と言いました。けれども、さらに一層注意深くしらべてみますと、私がここにいることを公然と知らせることは望ましくないことに気付きました。つまり、もしそうすれば、何かの仕事をやせよ、または、何かを学べ、といった命令を「政府から」受けるだろうと思うからです。そのような場合、私としてはそれを手ざわよく拒否することはできません。そんなことをすれば政府は私に対して好意をもたなくなるでしょうから。私としては修学中は政府のことで煩わされたくないのです。奥様が私をさらに長く庇護の下において下さると承知しておりますだけに、私を奴隸としてつなぎとめてしまう政府の奨学金を受けるよりは、むしろクリスチャンからのご親切な暖い奨学金を受けたいと存じます。それでもなお私はワシントン駐在の公使とは友好的な関係を保ちたいと思います。それは、いよいよ帰国することになった時、彼が何らかの助けになってくれるかもしれないからです。そういうわけで私は、これから帰国するというその時までには、政府あてに手紙を書くまいと決めました。あまり用心しないで事に当たるのが常であった私ですが、それでいて或る事柄については非常にうまく事が運びました。しかし上記の事柄に関しては私はきわめて注意深くありたいと思います。私の将来の成功不成功はこの一事にかかっているのですから。すべてを摂理の導きにゆだねたいと思います。

最近の祈禱会の帰りにすばらしいオーロラを見ました。変化しながら流れてゆく光を眺め、また青い九天井に無数の星がきらめいているのを見ました時に、「主よ、みもとに近付かん」の賛美歌が心にうかびました。もし神のめぐみによって喜びの翼を駆って空にかけのぼり、太陽、月、星々を後にして飛び去ることが許されたならば、どんなにすばらしいことか、と考えました。

次の木曜日から数えて二週間後に休暇が始まります。この夏はどうしたものか、わかりません。勉強したい気持ちもあり、またどこかへ旅をして鉱物学、地質学の標本を集めてみたい気持ちもあります。

ハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八七一年六月二十一日

昨日付のお手紙を受取りました。休暇中の出費について暖いご配慮を頂き、深謝申し上げます。私は化石と鉱石を採集するためにナイアガラ瀑布、トレントンの滝、ユチカ^{*}、その他の場所へ旅をしたいと願っています。大学時代の友人でユチカの近くに住んでいる男から、二、三日滞在するようにと招かれました。そんな遠方に出かけるのに支出をお願いすることはとても気のひけることでありますが、この旅からも多くの利益があることを信じておりますし、また地質学と鉱物学を実地に即して学んでみたいのです。恐らくあちらこちらで日本について講演し、幾分か費用のたしにすることもできるのではないかと思っています。

ハーディー夫人あて

ニュー・ヨーク州エヴァンズ・ミルズ、一八七一年八月十八日

もう手紙を書くことを忘れてしまったのではないかと思っていらっしゃるかもしれませんがね。けれどもこの手紙をお読み頂きますならば、今までお便りしなかったことの理由がおわかり頂けると思います。旅行に出て以来きままた住まいを持ちませんでしたので、そのため、すわって手紙を書いたり読書したりする時間はほとんど見出せませんでした。友人のところに泊めてもらったときには、私は彼らにとって一種の見世物でした。何しろ彼らはこれまでに日本人を見たことがなかったのですから。食事やお茶に招かれ、沢山の質問を受けました。同時に私はつとめて地質学の勉強を続けました。友人のいない土地に行った時には、やむをえずホテルに泊りました。私にはどうもあのように多額のホテル代を払うことは苦痛で、そういう場所に余り長い間かかずらうことはよくないことだと思いました。見ることのできるものは急いで見ることにして、地質学の勉強のために必要以上滞在することは致しませんでした。このようにして、訪問すること、放浪すること、地質の調査をすること、そして時には信仰者、不信仰者たちと議論することで時間をすっかり消費しました。神の敵に出会いましたが、彼らに屈しないだけの力を授けて下さいました神に感謝しております。

ニュー・ヨーク州の中心部を横切り、汽船でオンタリオ湖を渡り、今はエヴァンズ・ミルズにいるアンドーヴァーの神学生のところに厄介になっています。この旅で味わった、幸福で豊かな経験のすべてを書き記すに十分な雄弁さを持ち合わせることができたならと、どんなに願っていることでしょう。ブロークンな英語と不十分な文法ではありますが、不慣れた手でもって短い素描を試みたいと存じます。

なつかしいボストンの友人たちに別れを告げたあと、私は西の方角を目指しました。最初の宿泊地はレオミンスタードで、安息日を含む五日間、テイラー船長の兄弟のところですごしました。私は午後の礼拝でテイラー氏の代りに説教しました。これは正規の礼拝で多くの会衆を前にして語ったはじめての経験でありました。日本の歴史と日本人のもたらした最近の変化と進歩について語り、夕方にはいくつかの日本の品を見せながら、安息日学校でお話をしました。子供たちは非常に喜びました。予期していたよりもうまくやれたと思います。第二の宿泊地は愛するアーモスト。シリーズ教授のお宅で二日半だけをすごしました。卒業式に出席し、大いに楽しいひと時を味わいました。第三の宿泊地はフーサク・トンネル^{**}。私は東側からトンネルに入りました。トンネルの内部は非常に暗く、湿っぽく、肌寒く感じました。快適に保つためにも毛織物の上着と、防水した雨具をつけていました。湿気と低温で体を痛めないために、トンネルの中に長くはとどまりませんでした。トンネルの中でボストン港の練習船の先生に出会いましたので、同氏のおともをして中央シャフトまで行きました。シャフトの中では水が多いために作業員たちは全く働くことができず、蒸気の力で水を汲み出しているだけでした。完成すると一〇三フィートの深さになる筈です。このトンネルのことはすべてご存知のこととは思いますが、とりあえずここにトンネルを説明するため山の図を書いておきます。その夜はあの人けのないロマンチックな山の中ですごしました。翌朝は非常に早く起き、急いで朝食を取り、四時半に出発しました。朝の空気は大そううつめたく、山風は大そうやさしく、しかも活気付けるものがありましたので、山を越える速度も倍加しました。その上景色は壮大で、すばらしく美しいものでしたから、五分か十分たつごとに足を止めてみなくてはなりませんでした。あけぼのが山頂の眠い小鳥たちをめざまし、淋しい旅人のためにしらべをかなでさせるのでした。谷という谷から立ちのぼる白銀の霧はアルプス山中の氷の海のようにでした。私は一人ぼっ

ちでなければ、右に左に、上に下に、ぐるりに沢山の仲間を見つけました。自然界のすべてのものが私を歓迎し、私と一緒に万物の創り主をはめたたえているようでした。私は一人でありましたけれど、一人だけではありませんでした。

六時前にノース・アダムズ^{*}に着きました。そんなに朝早くそこへ行くと、「異教のシナ人」とまちがわれはしないかと心配でした。しかし何の困難もなしにそこへ入っていき、そこから出てきました。靴工場で働いている中国人を訪問しました。親方のアー・シング以外、誰も英語は話せません。入って行くと彼らは私を中国人と取りました。でも、私は彼らの言うことが少しもわかりません。そこで紙を取出して、質問を書いてくれるように頼みました。第一の質問は、あなたは中国のどの地方から来たか、でした。紙の上に私は答えました。「私は中国でなく、日本から来たのである。日本の首都たる江戸の出身であり、現在では、十字架にかけられた救い主を同胞にのべ伝えるために、神の御言葉を勉強中である。」この答は彼らをひどく驚かせました。私はさらにキリストの愛について書きました。

彼らはきわめて聡明のようで、その中の一人は、イエス・キリストは神の御子であると申しました。もっと長く話を続けたいと思いましたが、彼らもこれ以上仕事を休むわけにはいきません。私は彼らの仕事場、食堂、寝室を見てまわりました。彼らは今なお自分自身の生活様式を守り、ご飯を食べるのに箸を使っています。彼らはとても儉約家です。自分の衣服を洗濯し、つくり、また自分用の野菜を栽培しています。彼らは地元の何人かのアメリカ人たちはほどには早くお金をもうけることはできないでしょうが、徐々に、着実にお金をためていくことでしょう。彼らは何人かの若い日本人のような、大きな抱負や愛国心は持ち合わせていません。全能のドルを若干蓄積することだけで満足しています。他方日本人の方はかねをためることはあまりあくせくしないで、常に西洋文明の知識と思想を求め続

けています。日本人は自分自身のためだけにそうするのではなく、同胞を高め、啓蒙したいという意図をもっているのです。日本人は祖国を愛しており、祖国のためには自分自身の生命をも喜んでなげうとうとするのです。ですから、もし日本人で真理を愛するのであれば、彼らは祖国のために立上るのと同じようにして、真理のために立上ることでありましょう。ああ、慈愛に富み給う御父が、あの未開の国土にキリストの祝福の御旗を立てられるように、そして氣力を失った彼らの魂に救いの福音をのべ伝えられるように、どうか私たちに力とめぐみを与えて下さいますように。

私の第四の宿りの場所はニュー・ヨーク州トロイ^{*}でした。トロイには三人の日本人学生がおりましたから、彼らとともに、安息日を含めて二日間をすごしました^{**}。彼らはまだクリスチャンではありませんが、それでも彼らは聖書を学び、聖書を神の言葉として尊敬しています。自由なめぐみにより、彼らがキリストにおいて生まれかわることを願っております。彼らとかなり深く話しこみましたが、その話は実に愉快でした。オールバニー^{***}では四時間すごし、スタイト通り、医学学校、州立地質学室、州庁等を訪れました。

第五の宿泊地はカークランド^{****}でした。ここでは大学時代の友人、ジョージ・サザランド^{*****}氏のところで二週間すごしました。カークランドは地質学的にみて重要な中心をなす所であり、私はそこを根拠地として多くの日々をクリントン、ダンズヴィル、オリスカニーの滝、ウォーターヴィル、ニュー・ハートフォード、トレントンの滝^{*****}ですごしました。トレントンの滝はすばらしいものです。ナイアガラ瀑布ほどには壮大でないという人もいますが、しかし、これの方がはるかにきれいです。第二の滝がいちばんよろしい。滝のところから出かけようとしていた時にきつい雨が降り始めました。私は雨の中に立ったままで、急いで滝の写生をしました。

明日の夕方、話をするように頼まれていますので、手紙はここでやめて、講演の準備をしなくてはなりません。

フーサク山での日記からの抜萃

一八七一年七月十五日。もしこの山頂に数日滞在していたならば、すばらしい自然の啓示によって靈感を受け、私の名を不朽にするような詩を少くとも一、二篇は書けるだろう。しかし、ああ、私にはそんな才能がない。この比類のない朝に一篇の詩すら作ることができないとは。この壮大な眺めを詩に歌う能力がないとは。私は実務的なヤンキーのようであり、私の言葉は平凡そのものだ。次の歌が示すように、私の心もペンも、靈感とは無関係である。

めざめよ、眠たげな太陽。ぐずぐずするな、怠け者の太陽。

わたしはバークシアの山の頂きに立っている。

一人でたたずみ、太陽よ、お前を待っているのだ。

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八七一年九月十七日

こちらに帰ってからおたより差上げるつもりでおりましたところ、ここ二週間ほどはめっぽう忙しく、私の旅の残りの部分について記すことができませんでした。この旅では非常に豊かな経験をしましたので、そのうちのいくつをお話したいのは山々ですが、今はそうしないでおきましょう。こちらに帰ってみますと旧師*から手紙がきており、弟がなくなったことを知りました。どのようにしてなくなったかは言わないで、ただ彼がなくなったただけ知ら

せてくれたのです。旧師は帰国するようすすめています。私がいないために父がとても淋しがるだろうからというのです。今学期にフィリップス高等学校に入学した日本の学生^{*}から、ごく最近に江戸からやってきた日本人で、かつて旧師の教え子であった人がボストン・ハイランズにいることをききましたので、その人に会うために二週間ほど前にボストンに行きました^{**}。どんな風にして、またどんな病気で弟が死んだのか、それを確かめるためです。しかし彼は弟の死については何も知りませんでした。その日本の友人のところに二日間滞在し、彼とともに、またテイラー船長の奥さんも一緒に、非常に楽しい安息日をすごしました。日曜日には、二、三日前から知らされておりました国からの手紙を受取るために、ステイト通り^{***}のご子息様を訪ねました。それは父からのたよりでした。父は弟の死についてくわしく知らせてくれました。弟は三か月ほど病気をし、この三月に死んだのです。彼がそんなに若くして死んだことは、考えるだけでもつらいことです。大きな悲しみと失望をのべた父の手紙を読むことはさらにつらいことです。まさしくショックな知らせであり、どんなに悲しく思いましたことか。しかしながら、私はそれに驚くべき仕方では堪えることができます。なぜなら、それは単独で堪えるものではありませんから。今や元気いっぱい、心の底から「あなたの御心を成させ給え」と祈ることができます。問題の一切は主の御手に委ねます。主は最上のことをご存知であり、私のためによいことをすべてなし給うからであります。しかしながら、失望の中にあって慰めを見出し得ないでいる両親のことを思うとき、私は涙を抑えることができませんでした。先週父に手紙を書き、奥様のお写真と同封致しました。それがいくらかの慰めとなることを願っています。今すぐに私が帰郷すれば父は大いに喜ぶでしょう。しかし私はもはや父のものではないと感じております。私は主のために自分自身をささげたのであり、同時にまた祖国のために献身するつもりです。主がどう畑で主のために労するようにと私を召し給うのであれば、それこ

それは地上で得ることのできる最高の、最もほまれ高い仕事であります。主の家にあっては最も小さく、最も弱いうつわにすぎない私ですが、もしも主が、その私を通して日本に主の輝かしい御国を拡張することをお望みになるならば、私はこの上ない元氣と希望に満ちあふれて主の御意志に従うつもりです。私は鋤に手をかけています*。故に、主の御為に働かなくてはなりません。神が私の両親のいのちを、真理の生命の光が彼らにのべ伝えられる時までならえさせて下さるということ、これが彼らのための真剣な祈りなのです。神が私のためにして下さったことの故に、私は常に神に感謝しております。故郷から悲しいしらせがきましたけれども、主は決して慰めのない状況に私をほっておかれません。

日本政府からの旅券と、旧師からの手紙を受取りました。どうか私と一緒に喜んで下さい。主は私の道を平坦なものにしようとしておられるように見えるからです。

ニュー・ヨーク州とカナダから数多くの地質学の標本を持って帰りました。これは私の財産です。今はとても豊かだという気がしています。

ハーディー氏あて

アンドーヴァー、一八七一年九月二十七日

日本政府から送られてきた旅券を翻訳してみせるようにとのお指図を拝承しました。^{*}来週セイレムでお目にかかれと存じますので、旅券を持って参るつもりです。^{**}旅券と一緒にいくつかの書類を受取りました。お目にかかります際に、それらについては一切ご説明申上げるつもりであります。今朝、父からまた手紙を受取りました。これまでの

ところ父からの手紙は私的なつてによって送られてきましたが、この最後の手紙は日本国公使の手を通して届きました。その手紙によりますと、五月のはじめ頃に、政府は私たちの藩主のところに役人を派遣し、同藩の新島という名で、かくかくの時期に姿を消した者があったかどうかを照会してきたそうです。役人は一切を確認してから帰っていききました。二、三日して父の許に文書が送達されましたが、その内容は次のようでありました。「政府は新島七三太がアメリカ合衆国に滞在し、修学することを認可する。」あわれな境遇にあった父は大いに満足したと確信致します。国禁を犯して脱出した以上、どうしたら安全に帰国できるか、その点が今までのところわからず、私が脱出した時と同じく、こっそりと帰国するだろうと考えていたからです。今や父は私がいかなる時にでも安全に帰国できることを知っており、できるだけ早く帰ってくるよう望んでいます。父は私が日本政府の命令により、あと数年間アメリカに滞在しなくてはならないのだと考えており、息子の名前が朝廷にまで知られたことは最高のほまれである、と述べています。しかし、父はこのように書いています。「できるだけ早く帰国しなさい。お前の顔をもう一度見たい。そうすればわたしは満足する。年が加わり、この世の命もそう長くはないかもしれない。もう一度だけお前に会えたら、それで十分なのだ。そのあとはアメリカに帰り、好きなだけ長いこと滞在したらよい。お前のアメリカ滞りが日本国の利益になるというのであれば、勉学を完成することができる日まで、喜んでそちらに滞在させることにしよう。しかし、お前のあわれな父親をぜひ思い出しておくれ。死ぬまでにもう一度お前の顔を見せてほしいのだ。」何というつらい訴えでありましたことか。しかしながら、ご存知の通り、私は手を鋤にかけています、まだ後をふりかえるわけにはいきません。私としてはこの地で勉学を終るまで、あわれな父には待ってもらいたいと考えます。奥様あてに、お二人様に対する父の最大の感謝の気持をあらわしている父の手紙の一通をお送り致します。父はこのよ

うに書いています。「お二人様に対する感謝の気持は筆舌につくしがたいものがある。わたしは友人たち、隣人たちばかりか、見知らぬ人にまで、お前がアメリカでどんなよい人に救われたか、そしてこんなに長い間どのようにしてアメリカの友人たちに支えられて教育をうけてきたかを語ってきた。お前の好運話を聞いた人、お前の友人たちのご親切の話を聞いた人は口をそろえて、日本ではそんな話はありえない、と言っている。」奥様が私にご親切を示して下さいましたことは最高の動機と崇高なお人柄によるものであることは存じ上げておりますけれども、それでもなお、父の手紙をごらん頂き、そこに表現されています最大の謝意を受入れて頂くことによりまして、多少なりとも奥様のお気持にお答えできればと念願している次第であります。

ハーディー夫人あて

アンドーヴァー、一八七一年十一月七日

セイレムでお目にかかって以来、おたよりを差し上げていなかったと思います。完全な者になろうとして先人たちがどんなことを言ってきたかを、奥様も多分ご存知のことと思います。明日、または、将来のいつかに、われわれは完全になるだろう、というのです。明日になると彼らはまた同じことを言い、決して完全になることがありません。そういうわけで私もこれまでのところ、「あしたになったら奥様に手紙を書こう」と言いながら、一日のぼしにして参りました。あくる日になると私は言いました。「エドワーズの自由意志論^{*}を読まねばならぬ。それにわれわれの議論のための基調報告も書かなければ。」こうしてさらに後日へと手紙をのぼしてしまいました。私はパーク教授の授業に出席し、新しい学派の人といわれるに十分な理論を学んできました。私は信じる通りのことをやり、信じる通り

の在り方をしたいと決意しました。つまり「私はそれを今この瞬間にやりとげよう。もはやそれを明日にのばすことをしないでおう」と。とりたてて申し上げることは何もないのですが、それでも私の勉強についてちょっとお知らせしておきたい存じます。私はパーク教授の講義に出席し、その講義にそうて書物を読んでいます。今年は神学校でいちばんきびしい年であるかもしれませんが、なぜならきわめて綿密な注意と思考が必要とされているからです。今の勉強はホワイト・マウンテンズへの旅のことを思い出させます。あの山に登ることは相当つらいことでした。しかし周囲の景色の壮大さが私の野心と熱望をかきたて、さらに高く登って、すばらしい自然のもっとすばらしい景色を見ようとさせたのでした。そのようなわけで、私は知的・精神的な分野への最も喜ばしい旅を始めたばかりなのです。運命が私をどこへ導いていくかは問題ではありません。行けるところまで、そして私の力が許す限り行くだけのことです。将来の一切は永遠から永遠へとこの宇宙の諸事象の一切をみそなわす神の御手にゆだねたままです。

フリント氏あて

ボストン、一八七二年二月十五日

日本の使節団に対し、アメリカの教育制度について報告するためにワシントンへ来るようにと、日本国公使から要望されています。それで先週以来、そのために勉強をしてきました。なすべき仕事が多すぎます。日本の使節団がワシントンに到着すればすぐにワシントンへ行くつもりです。異教徒である使節団の前で、キリストの御為に、弁じたいと望んでおります。これはキリストのことを語るよい機会だと思っております。どうか私のため、また使節団のた

めにも、特に祈って下さいようお願い致します。

一八七二年に、日本国がこれまでに派遣したうちで最も重要な使節団がアメリカとヨーロッパを歴訪した。將軍の政府によって下級の人士が研究の使命をおびて他の国に派遣されたことはあったが、今回は天皇の政府を代表するはじめての大使節団であった。それは四人の閣僚級の公使たちといくつかの政府部局の理事官から成っており、日本の貴族政治家のうちで最も傑出した一人である岩倉具視（とみ）に引率されていた。派遣先は当時日本と条約関係にあった十五か国だったが、その目的とするところはワシントンで提出された信任状に次のように記されていた。「現在わが国と合衆国との間に存在している条約を改訂する時期が一年以内に迫ってきた。われらはこの条約を最も開化した諸国と同等の立場に立てるように改定、改正することを期待し、かつそれを意図するものである。・・・われらの目的とするところは文明国の中にいきわたっている諸制度の中から、わが国の現状に最も適合するものを選び、われらの方策と慣習とを漸次改定、改正しつつ、それを採用し、もって文明諸国と同等になることにはかならない。」外交面から見ると、この使節団は失敗だった。条約を締結していた国々は治外法権的な諸権利を放棄しながらなかった。この国は、民事訴訟法をもたない国民、陪審による裁判や人身保護令状を知らないような国民、刑罰が依然として残酷さと、個人の権利に対する輕蔑の念によって特徴付けられるような国民——こういう国民に裁判をすっかりまかせてしまうことを嫌った。しかしながら、キリスト教世界の政治的、社会的制度に関する情報を収集するという副次的な目的についていえば、この使節団は大成功をおさめたのであり、その帰還後にはきわめていちじるしい一連の改革が実施されることになったのである。

使節団のおもな顔ぶれは岩倉具視、大久保利通^{としみち}、木戸孝允^{たかよし}、伊藤博文^{いらふみ}、寺島宗則^{むねのり}、田中不二麿^{ふたみ}であった。^{***}全權大使の岩倉は公卿^{くけ}であり、今の天皇の御父上〔孝明天皇〕の侍従をつとめたことがある。幕府が倒れたのち彼は外務卿^{ぐわふけい}として政府の中樞に入った。木戸、伊藤、大久保とともに彼は王制復古へと導いた運動の立役者だった。大政奉還に關して木戸が起草し、西南の有力諸大名が署名した天皇に對する有名な上奏文があるが、一八六八年から六九年にかけての革命において、木戸が尊皇の側の頭腦であり、西郷が腕であったといえる。^{***}使節団は帰国すると政府の重要な地位を占め、国家の建設のために顕著な役割をはたした。当時ワシントンにおける日本代表であり、維新後公使に任命された最初の日本人である森有礼^{ありのり}は、以前アーモストで新島に會ったことがあり、このたびは文部理事官の田中を助けるよう新島をワシントンに呼んだのであった。この呼び出しは新島にとってきわめて幸運なものだった。というのは、このために新島は政府の将来の政策を大幅に統轄することになる人々と知り合いになったからであり、この要人たちの友情は後年困難と敵に遭遇したさいに、新島に非常に価値のあるものとなったからである。ただし新島はこの呼び出しを危惧の念をもって受け、気乗りのしないままにそれに従ったのであった。政府は維新前に諸大名によって海外に派遣された留学生たちの金銭的な支援を引き受けたが、新島の場合にも同じことをするのではないか、また金銭的な保障をする代りに、彼の勉学を政府が指図し、そのあとには奉仕を要求することになりはしないかと、新島はそのことを以前から恐れていた。キリストの自由な使者として祖国に帰るのだという彼の大切な計画をおびやかすものは何であれ、彼にとっての脅威だった。それ故彼は森が使節団に對して、新島は個人的な庇護のもとに學問を続

*寺島宗則はこの使節団の一員ではなかった。ハーディーまたは新島の記憶ちがいであろう。

けている者であること、ならびに、新島に要求される奉仕があるとすれば、それは彼が政府に対するあらゆる義務から自由であることを認めた上で、契約に基づいてなされなくてはならないこと、この点をぜひ説明してもらいたいことを注意深く要求したのであった。次にかかげる手紙に述べられているように、新島の使節団との会見、彼が自身身の立場と政府の留学生の立場との相違を主張した時の威厳と謙虚さ、要求が満たされたのちに新島が田中の任務の達成のために示した熱意、このようなことはすべて、すぐれて新島らしい特徴を示すものであった。新島は木戸から親しく知遇をえた。やがて彼は田中にとってきわめて貴重な存在であることがわかり、田中はヨーロッパへ渡るについて、どうしても新島をつれて行くことを主張した。この提案は多くの点で非常に魅力のあるものだった。ヨーロッパ行きが彼の健康にとってよいことであろうことは疑いの余地がなかった。人々に出会えるということ、西洋の諸制度を研究できること、例外的といってよいほど有利な状況で世界を見聞し、視野を拡げられること、なかんずく、日本の将来の教育制度に関して、教育と宗教、文明とキリスト教の関係についての彼自身の見解を提起できること——このような機会は独特のものであり、確かに二度と再び起こりえないものであるろうと思われた。新島は理事官と世界間のコミュニケーションの通路だった。当時田中氏は外国語が全然話せなかったからである。新島は日本の教育制度全般に関して報告書を書くよう求められていた。彼の友人たちは口を揃えて理事官の申し出を受け入れるようにすすめた。それでもなお彼は、キリストの僕となるよりは天皇の僕となることで終ることになるかもしれないこの進路に、態度をきめかねていた。そこで彼はこの問題の最後の決着をつけるために、「アメリカの父」に相談したのであった。結局のところ理事官の申し出を受け入れるという決心をした。このようにして新島は新日本の最も有力で進歩的な人士の何人かと日常的に接触することになった。儒教の中で鍛えられ、儒教が導く社会生活、家族生活には経験

上慣れていたにもかかわらず、親孝行に関する儒教の教えは専制的であると常に非難していた新島である。彼は自分がニュー・イングランドのクリスチャン・ホームで知った生活に田中氏が慣れるようにと、特に意を用いた。三か月にわたって東部諸州の学校や大学を参観してまわった間に、田中氏はニュー・ヨーク、ボストン、ニュー・ヘイヴン、アーモストの多くの指導的な教育家、慈善家たちの客となったのであった。

日記と手紙の中で新島は、使節団に対する奉仕のことをつつましく述べている。けれども、日本の教育の進歩のために新島が使節団を通して与えた影響を過小評価することは困難であろう。^{*}アメリカにおいてと同様ヨーロッパにおいても新島は、時間と精力のすべてを費して、当時有力だった最良の教授法を学び、学校やあらゆる段階での学術機関の組織と運営法を学んだのであった。また、帰国後に文部大輔に任じられた田中氏が現在の日本の教育制度の基礎をおいたのは新島の報告書にもとづいてのことであった。^{**}新島の個人的な影響力はまた、彼と接触するすべての人が感じていた。彼の性格は類似の資格で使節団と接触した他のすべての人々からぬきんであらうものであり、それがのちに彼にとって非常に貴重なものとなるあの同情的な評価と尊敬を得させることになったのである。ほかの人々と一緒に旅をしていた時でも、新島は祈りを欠かさなかったし、安息日には休息するという良心的な決意を変えなかったし、キリストのために語る努力をおこたらなかったのである。

ハーディー夫妻あて

コロンビア地区ジョージタウン、^{***}一八七二年三月八日

昨日の朝首都に安着、森氏が丁重に迎えてくれました。到着したとき非常に疲れていましたので、使節団の滞在し

ているホテルへは行かないで、まっすぐ日本公使館へ赴き、どこか静かな個人の家庭をあつせんしてほしいと公使にお願いしました。公使は非常に親切に自分の家で休むように言ってくれましたが、その家はごったがえしていましたがために全然眠ることができませんでした。午後になって公使の米人私設秘書が首都からほんの二マイルのところにある、しかも彼自身の家からさほど遠くないジョージタウンに適當な場所をみつてくれました。^{*}森氏は今朝アーリントン・ハウスに^{***}来るように申しました。そこで約束の時間に出頭し、日本の文部大丞に^{***}会いました。アメリカにいる十二人の日本人留学生が彼に助言するため召集されていました。彼らには文部大丞に対してどのような動議を提出してもよく、どのような助言をしてもよいという権限が与えられており、その動議は多数決で実施されることになっていました。彼らは文部大丞にお目にかかるために接見の間に入りました時、日本風のおじぎをしました。けれども私は彼らの後でその部屋の際に直立していました。この接見の少し前に私は森氏にメモを手渡し、お二人様に対する私の現在の関係のことを伝え、私を他の留学生とは区別してもらうよう要望しておいたのです。森氏はきわめて好意的に私の代弁をしてくれ、「田中文部」理事官に対して、私を他の日本人と同格に扱ってはならないこと、その理由は私がボストンの友人たちの支持によって教育を受けてきた者であり、日本政府からはまだ一セントたりとも支給されたことがない、従って理事官は私を日本政府の奴隷として扱う権利はない、と申し立てたのです。森氏は言いました。「新島君は私がお願いして来て頂いた方です。つまり奴隷としてではなく、まさに閣下に対して教育に関するアドバイスを致したいという親切心から来て下さったのであります。従って閣下におかれましても同君の親切と善意をどうかご嘉賞頂きたいと存じます。新島君はボストンの友人たちとの関係があり、彼らの同意なしには日本政府に対して態度をきめるわけにはいきませんし、政府と致しましても同君に対して何らかの要求をしたり、あれをせよ、こ

れをせよと命令したりする権限をもちません。すべては閣下と同君との間の契約に基いてなされるべきであります。さいわいにして同君は三週間の休暇を得られたので、もし閣下が同君を友人として待遇なさるのであれば、同君は閣下のためによい働きをして下さるものと存じます。新島君は日本を愛する士であって、奴隸ではございません。」この言葉は文部理事官を大そう喜ばせました。そのため室内にいたみんなが私の方を見ました。文部理事官は私が立つているのに気付くと、森氏にむかって、隅に立つておられるのが新島君ですか、と聞きました。そうだとわかると理事官は座席から立ち上がって私の方へ進み、握手を求め、私に対して最も優雅な、しかも最も威厳にみちたおじぎをし、どうぞよろしく、と言ったのです。彼が六十度のおじぎをしましたから、私もお返しに六十度頭をさげました。うしろの隅っこに立っていた者が理事官からこれほどまでに扱われたことを思うと、心の中で笑わずにはおられませんでした。理事官は、自分がこの国の諸学校を視察してまわるときには通訳をつとめること、そしてこの国の学校制度についてすっかり報告するよう私に命じました。そこで私はこう答えました。もしこれをなせと命ぜられるのであれば私としてはおことわり申し上げなくてはなりません。私は政府から援助を受けておられる方々とは區別して頂く必要があります。けれども何らかの報酬を定めた上でこれをなすように要望されるのであれば、喜んでお求めに応じましょう。このように述べたところ、文部理事官は森氏にむかって、私の申しのべた通りに私を待遇し、受け入れるようにと告げました。

明朝十一時に集合ときまりました。今日の集りで留学生たちはいくつかの提案を致しましたが、彼らと自分を同列に置かないために私は賛否に加わらず、発言も控えました。解散するとき留学生たちは理事官にむかって三十度のおじぎをしました。握手はなし。しかし理事官は私に近付いてきて、宿はどちらかと聞き、こっそり訪ねてきてもら

いたい、と申しました。それから握手をし、七十度のおじぎをした上、早く健康を取戻してほしいとつけ加えました。日本人の間でこれほどきわ立つ存在となった私のことを笑わずにはおれません。だって私は自分をひとかどのものだと思ったことは一度もありませんでしたし、いつも公の目から身を隠していたいと願ってきたのですから。そのため接見の間に入ったときでも私は隅の方で、他の連中の後に直立したままでおじぎをせず、自分の権利を守ろうと思ったのです。嬉しいことに私は自分の権利を守り、その権利は私に許されたのです。どうか私とともにこの勝利の時を喜んで下さい。私は自由人、キリストにあって自由の人だからであります。お二人様の助力と援助のおかげでこの自由に到達できた私は、お二人様に感謝せずにいられません。こうして今、お二人様の祈りが答えられたのです。でも、なお祈り続けて下さいように。私は人々の評価を気にしません、ただ神様のへりくだった子供でありたいと祈るのみであります。

もし健康に十分留意するならば、この休暇を使節団と共にすごすことにご賛同いただけるでしょうね。まだ特命全權大使の岩倉には会っていません。しかし岩倉の秘書官とは愉快的な会見をしました。その人は江戸にいる私の親友二人の友人であり、その連中の消息をすべて聞きました。

私の下宿は現在数名の日本の娘さんたちの滞在先の^{***}ごく近くです。昨日そのうちの二人に会いました。その一人は十五歳くらい、もう一人はたった八歳で、この子は今では日本で有力な役人になっている私の古い学校友達の^{***}次女です。彼女はなかなかかわいらしい、しかも抜目のない小娘です。その二人と非常に楽しくおしゃべりをし、また一緒に食事しました。彼女らはその家の婦人たちが話しかける言葉が通じないものですから、私が訪ねると喜んで私に会い、いくらかでも質問をします。彼女らは私に対して友好的であり、恐れずに質問します。もし私に何かを聞くこ

とを躊躇するようなら大へん残念だ、と言ってやったからです。彼女らに説教するわけではありませんが、でも愉快なやり方でもって道徳上の原理を教えています。ですから、私がしばしば彼女らを訪ねましても、彼女らは私を女好きだと考えるのでなく、一種の教師と考えているように思うのです。彼女らは私が語りかけるたびに大そううやうやしく日本風におじぎをします。彼女らに役立つことができてとても有難いと思います。

ハーディー夫妻あて

ジョージタウン、一八七二年三月十日

昨日の朝日本留學生の集りに出席するため公使館に行きました。ワシントンに召集された留學生は十二人でした。彼らは二派に分かれています。半分は上党と呼ばれ、もう半分が下党なのです。私は自由な日本市民としてとどまる権利を得ました、いや、むしろその権利を保持してきましたので、文部理事官と森氏とは私を休暇中傭い、私の奉仕に対して高額を支払うことに同意しました。私はすぐさまその条件を受け入れました。そうすることに賛成して頂けると考えたからです。その集りの目的は外国における日本政府留學生のための規則を作ることでした。私は上党の一員なのです。ご存知の通り私は自由な一員なのであり、いつでもそこから身を引くことができます。森氏が討議のためにいくつかの話題を出しました。論題は二つの党に配分され、それぞれが別室で自分たちの論題を議論しました。今朝はまた一緒に集り、分かれて討議した論題を全体会議にかけました。理事官が司会する筈でしたが、今朝は姿を見せません。彼は一寸私たちを恐れているのではないかと思えます。といいますのは、この国に留学している私たちは真の民主主義者ですから。私たちはためらわずに発言します。先週の土曜日に私たちは全権大使にあてて請願

し、多数決によって規則を作る権限を与えられるようにと願い出ました。その請願が通れば文部理事官に対してさえそれを指図できるようになるかも知れません。そうなれば私たちは在外留学生に関する規則をつくるにあたり、大臣その人以上の権限をもつことになります。今日の論題はあまりお二人様にとって興味をひくものでないかもしれませんが、それについては記さないでおきます。私のおもな仕事は「日本の普通教育」についてエッセイを書くことです。それは最も重要な仕事だと思えます。それは使節団に提出され、恐らくは日本を真理と生命の光に向かって開くの役に立つことになるでしょう。どうかこの祝福された十字架を背負う、疲れを知らぬ兵士のために祈って下さい。なぜなら私の本当の戦場が目に見えてきたことを感じるからです。私は万全の用意ができています。どうかを問うことなく、万軍の主が、義務をはたせるよう助けて下さることをひたすら信じつつ、前進するつもりであります。森氏は相変らず私によくしてくれます。

ハーディー夫妻あて

コロンビア地区ジョージタウン、一八七二年三月十五日

この地へやってきてから本当にはじめて澄み切った青空と輝く太陽の光を見ました。到着以来今日ほど気持ちよく、また元気に感じたことはありません。

今朝公使館に行き、日本人留学生の会議に出席しました。しばらく彼らの議論を聞いておりましたが、彼らの見解はまったく実行不可能なものであり、そういった子供の遊びにはちっとも興味がありません。会議が散会する前に失礼して、教育局長官のイートン氏*を訪ねました。同氏は自分の役所のすぐ近くにある私立女学校に日本の理事官を案

内することを約束していました。そこでイートン氏は日本の理事官と二人の随行員^{*}と私とをその学校に連れていきました。私たちはイートン氏によって女教師に紹介されてから席につきました。すぐに課業が始まりました。一人の若い女生徒が詩の朗読を命じられました。私たちのためだけでなく、それは試験の一部でもあったのです。彼女は非常にしとやかに立ち上り、すばらしく上手に朗読しました。次に生徒たちは代数学の試験を受けました。どうも彼女らは代数学では目立つほどすぐれているとは思えません。このあとでもう一人の女生徒が呼ばれて、散文の朗読をしました。彼女の朗読も非常にすぐれたものでした。試験がすむとイートン氏が女生徒たちに私たちの名刺を配りました。彼女らは書かれている名前をとて面白がりました。

昼食後「大統領秘書の」バブコック^{**}將軍を訪ねました。將軍のところにはアメリカ人の通訳がいるし、また使節団の中にも数名英語の話せる者がいる、そして私は日本の文部理事官のための仕事で手がいっぱいなのだから、私には手伝いを求めないことにしよう、との話でした。喜んで私を「グラント」大統領に紹介してあげるとのことでしたが、あいにく大統領は今日は不在。將軍はもう一度訪ねてくるようにと言ってから、番人を呼び、ホワイト・ハウスのすべての部屋と温室とを案内するように命じました。ランキン^{**}牧師を訪問して、非常に楽しく語り合いました。同牧師は古いアンドーヴァーの卒業生ですから、同じ神学校から来た者は喜んで引見するのです。あしたの礼拝に出席するよう誘われました。それから特許局に行きました。コレクションは驚くべきもので、完全に圧倒されました。骨折ってそれを調べてみることはせず、ただ見てまわるだけでしたが、すばらしいヤンキー的創意工夫の才について或る考えがうかびました。事務所で最新の報告書を入手しました。

私は今、文部理事官をランキン牧師の日曜学校につれていこうかと思案しているところです。田中氏はアメリカの

制度を熱心に見たがっていますから、来るだろうと思います。理事官は日本風にいえば非常に教育のある人であり、私の旧師をもよく知っているのです。田中氏は私に非常な親しみを感じており、自分と一緒にヨーロッパに行って各地の学校制度を調べてほしいと望んでいます。同氏は私の体のぐあいがあまりよくないことを知っているので、短期間ヨーロッパを旅してみてもどうかとすすめてくれます。もし私がヨーロッパへ同行するならば、費用の全部を払い、また仕事に対しては相当の謝礼をしようというのです。私を彼の部下としてではなく、友人として待遇しよう、いつどんな時にでもアメリカに帰る許可を与えよう、とのこと。「アメリカ」北部の諸学校の視察が終り次第ヨーロッパへ行きたい、それも使節団一行より先に出発し、何とか頑張ってイングランド、フランス、ドイツの制度を調べておきたいのだ、とも言っています。私は田中氏にはっきりと自分の経歴の一切を語りました。ボストンに到着したときどんなみじめな状態だったか、どのような親切な人の手に私は拾われたか、どのように私は支えてもらって今日に至ったか、といったすべてをです。特に私がいかにハーディーご夫妻にご恩を蒙っているか、また私はご夫妻の被後見人であり、ご夫妻に相談せずにその問題をきめるわけにはいけない、と申し立てました。田中氏は私の物語を喜んで聞き、お二人様の助言、いやむしろお許しが得られるよう、できるだけ早く手紙を書いてほしいと要望しました。しばらく前に森氏もまた私に同じことを言いました。それは私の選択にかかっている、受けることもわるも私の自由だ、と森氏は言います。使節団は君を自由な日本市民として尊敬してくれるだろう。これこそは願ってもない機会だと思ふよ、と彼は言います。この話をこちらで数人の人に話してみました。彼らもそれは絶好の機会だと申します。私はこの金のかからない、しかも減多にない申し出のことで途方に暮れています。でも、この春と夏とを健康増進のために、また見聞を広めるためにヨーロッパですごしてみたい気持ちにほとんど傾いています。すでに申しました

ように、私はお二人様の被後見人です。お二人様のご承認、ご同意なしには何をする気もございません。何とぞご賢察の上で、私のなすべき道をお示し下さいますように。

日曜日(三月十七日)。吹雪のため、今朝はワシントンのランキン牧師の教会に出席することができなくなりました。そこでこのあたりのもよりの礼拝堂に参りました。それはメソジスト教会*でした。礼拝は非常に静かで印象的なものでした。よい説教でした。原稿なしの単純な説教でしたが、説得力がありました。知的な頭からつむぎ出されたものではあっても、暖かい、敬虔な心から出てきたものでなく、冷い、哲学的な論文を読んでいるような説教などとは大ちがいでありました。

文部理事官の田中氏から、もっとしばしば会えるようにワシントンに移りなさいともいわれています。今週中にそうしようと考えております。

ハーディー夫妻あて

コロンビア地区ジョージタウン、一八七二年三月十九日

今日は日本の文部理事官と一緒に特許局とスミスソニアン・インスティテュション**を訪ねました。建物の係員が特別に遇してくれましたので、私たちは一般の参観者より以上によく見学する機会を得ました。この場所の見学を終わったあと、属官たちはそれぞれの下宿に引揚げていきましたが、田中氏は私を引きとめて食事に誘ってくれました。いつもの昼食時間をいくらかすぎていましたので喜んで氏の誘いをうけ、アーリントン・ハウスで一緒にお昼を頂きました。食後氏の部屋に行き、国民教育の問題を論じながらほぼ三時間すごしました。今までのところ氏に宗教のこ

とを話さなかったのですが、もはや私の燃える情熱を伏せておくことはできなくなりました。私はぼちぼちと国民教育に關する卑見を注ぎ出していきました。氏に語った考えのすべてをここに記してお伝えすることはできませんので、圧縮した形で申し上げることに致します。「よい国または」よい市民であるためには、国家も個人も知的であることが必要である。知的な市民は無知な市民よりも一層よく統治されうる。しかし道徳的に自己を治めるためには知性だけでは十分といえない。知性だけあって道徳上の主義がなければ、その個人は隣人や社会に対して益をなすよりは一層害をなすであろう。とぎすまされた知性はよく切れるナイフに似ている。彼は仲間をそこない、自分自身をもほろぼすことになるかもしれない。もしもそのような破滅をもたらす人間が社会の中で非常な悪影響を及ぼすならば、何百、何千人という破壊的人間は国家の破滅をもたらすにちがいない。それ故、そのような破壊的な知性を統御するための道徳上の主義がなくてはならない。つまり道徳上の主義があればその人は知性を正しく用いることができるからである。それ故日本政府は国民に道徳上の主義を教えるように何らかの手段を講じ、誰かにそれをやらすべきである。人々の徳性を高めるには教育だけでは十分といえない。知性主義の哲学や道徳哲学でも十分でない。私はプラトン哲学や孔子の書を勉強して徳性を高めた人をつて知らない。しかるにキリスト教の中には人々を自由で活力と徳性に富む者にする力がある。人が徳を愛するならばその人は実に真実の人であり、自分を統御する道を知る人である。もし日本人一人一人が自分を統御する道を知っているならば、政府は国中のあちこちに見張りを配置する必要はないであろう。もし国民全体が真理と徳を愛するならば、彼らはみずからを治めるようになり、政府にあまり迷惑をかけることもなくなる。一国の力はその国民の徳性と敬虔さの力である。ある国はキリスト教を単なる道具として使っているが、そうだとすればその宗教はほんものではない。キリスト教には真理がある。私たちはそれが真理である

が、故に、真理を取るべきであって、単なる道具として取るべきではない。

すると理事官は、教育と宗教について私が述べたことは、一つの点を除いて、彼の見解と大いに一致する、と言いました。クリスチャンたちがここでしていることをはっきりと見たので、彼はキリスト教についてある程度わかったし、そのよさと価値をこの国に來て以來ますます評価しはじめたところだ、と言いました。学校や教会、それにキリスト教徒やキリスト教諸団体によって支えられている慈善の制度を見て、彼はほとんど畏敬の念に打たれているのです。そこで彼はキリスト教が民を治め、国家を高めるための最良の道具の一つであると考えたのです。しかし彼は言いました。「われわれが真理を愛さなくてはならないのは、それが真理であるからであって、それが道具として使えるからではない——そのように断言できるほどには、まだわたしは十分にわかってない。」

彼の言うとおり、彼は真理が十分にわかっていないのです。彼はもっと十分に真理について知りたがっています。彼の意見では政府はいかなるかたちの宗教にも干渉する権利はない、なぜなら、いかなる宗教に対する信仰も、それは心の中の問題であって、外面の行為にあるのではないから、というのです。政府の義務は人民を秩序よく治めることであって、政府は人民に対して宗教を自由にしておくべきである。人民はおのおのその良心に従って、真の神をおがんだり、異教の神々をおがんだりさせればよい。一つの宗教の中に他の諸宗教以上の真理と善が含まれているならば、その宗教が結局のところ優勢となるであろう。

彼がこの主題に関して寛容な見解を抱いていることを事のほか嬉しく思いました。これほど自由に語ることのできるこの新しい道が開けたことに對し、非常な感謝を覚えます。理事官は明日鹽啞學校を訪ねる予定ですが、私以外にもう一人日本人の通訳がいますので、私には休息する許可をくれました。私が彼とともにヨーロッパに行くお許しが

お二人様から出るかどうかを、彼はしきりに知りたがっています。その問題については多くのことを言わないで、ただ、私はボストンの保護者のご決定に従わなくてはならない、とだけ言っております。もしこれが私の出掛けていく唯一の機会であるとするならば、私としてはむしろ田中氏と一緒に出掛けたいのです。田中氏は大そう寛容な見解の持主でありますから。ひょっとしたら彼のために善を積んであげられるかもしれません、特に日本にキリストの王国を広めるために。もし私が彼に好意を示すならば、彼もまた私の将来の働きに大いに役立ってくれることになるかもしれません。どうかできるだけ早くご返事を承りとうございます。

ハーディー氏あて

コロンビア地区ジョージタウン、一八七二年三月二十日

夕方に私は、日本の文部理事官とともにヨーロッパに参ることにしてあなたのご決定をお願いする手紙を書きました。投函後しばらくして私はこの事を片側からだけでなく、他の側からも眺めながら、注意深く思案しております。私は田中氏にいくらか役に立つかもしれませんが、しかしながら、私が有用な者となれば、彼はひょっとして私をつかまえて日本に連れて帰り、教育の用に私を使うようワナを仕掛けるかもしれません。いったん政府とそういう関係ができてしまうと、私は政府の奴隷です。そうすることによって何かよいことができるかもしれませんが、でも、政府の手に自分を預けるということは私の喜んで選ぶところではありません。私はすでに最高の王、救い主をわが主、わが政府と認めた者でありますから、ほかにどんな政府も必要としないのです。故に、日本政府のワナから自由な場所に自分を保つことこそが私の最良の策なのです。彼らは私とよい関係を保つでしょう。蜂蜜のような甘い言

葉で私を招くでしょう。そしてはじめのうちはお傭いの召使いとして扱うでしょうが、その後徐々に私を支配してくかもしれません。理事官は完全な紳士であり、私を裏切ったりはしないと思っています。けれどもここに述べたことは、私のヤンキー的思弁というものです。私には十分に深く考えないで他人をあまりにもすぐに信じてしまう危険な傾向があるのです。しかし私の将来の歩みについては私は十分に注意深くあらねばなりません。私は気高く、正しく、まっとうなことをなすべきであります。私は主のご用のために自分自身を献げましたので、主に対する、また、行き暮れた私の同胞に対する義務をはたす機会を探さなくてはなりません。私はこの世的な贅沢と快楽と名誉とをもつて何かほかのことをなすよりは、むしろ苦悩のパンをもってキリスト・イエスの中にある真理を説き、教えたいと思います。だとすれば、問題は、何が私の最もなすべきことであるのか、ということですが。今ヨーロッパを訪れることは私にとってすばらしい機会であります。行かないことはむしろ犠牲を払うことなのです。しかし、ヨーロッパへ行かなくてもなお、私はあまり多くを失うわけではありません。なぜならアンドーヴァーで神学を勉強するのですから。まことにもって決めにくい問題であります。どうか忠告し、導いて下さいますように。ノーとおっしゃれば喜んでご忠告に従います。行けとおっしゃっても、すぐには決定しないつもりです。

日本の文部理事官はボストン市の有名な学校を参観するために、二、三週間のうちにボストンに参ります。恐れ入りますが彼の来訪することを市当局と、彼が参観するねうちがあるとあなたがお考えになる諸学校に、お伝え頂けませんか。そうしてくだされば田中氏も非常に感謝することと存じます。

ハーディー夫妻あて

コロンビア地区ジョージタウン、一八七二年三月二十二日

日本の使節団に随行してヨーロッパに行かせてほしいという私の願いをご親切に聞き届けて頂きまして深謝申し上げます。このことについて手紙を差上げてからというもの、この問題について注意深く、祈りをこめて考えて参りましたが、はたして摂理の御導きが奈辺にあるか、わからないでいました。このお手紙によってはっきりと決断致しました。これは私の活動、すなわちキリスト者としての労働のために道を切り開け、との声である、それも人間の声ではなくして、天からの声であるかもしれないと感じ、考えた次第です。私は短期間だけ田中氏のお供をすることと思いますが、田中氏の心の中にキリストの王国を広め、従って日本にそれを広めるために、いくらかの働きができるのではないかと思うのです。そういうわけで私はもはや疑ったりためらったりしないで、主が導いて下さるところならどこへでも行き、主の栄光をほめたたえることのできるのなら何でもあらうとなすつもりであります。先便をしたためました時には、理事官の申し出をことわり、アンドーヴァーに帰って勉強を続けることにほとんど傾いていたのです。けれど日本人の友人は全部、私に行くべきだとはげましてくれました。森氏も、また彼のアメリカ人秘書官のランマン氏も、行くように、こんなまたとない機会は逃がすべきでないとの忠告してくれました。シーリー教授も「行った方がよい」とのご意見。そして最後に、私が実の親以上に大事に思っているお二人様からご同意を与えられました。今はただ「御心を成させたまえ」と申し上げるのみです。

田中氏も必ずや感謝することと思います。といいますのは、このことについて最初の手紙を差上げました時からずっと、田中氏はお二人様のご返事を待ちこがれていたからです。この次彼に会います時には、九月までには米国に帰

らせてもらうこと、また私が旅にあきた時にも同様にすること、の確約書をもらい、約束のしるしとしてそれを持っていることにしたいと思います。

昨日の朝は木戸副使、田中氏、イートン將軍、四人の日本人とともにコロンビア・カレッジを参観しました。こちらに来てから最も多忙をきわめた日でしたが、大いに愉快でした。午前九時から午後五時まで半分は日本語、半分は英語をしゃべり通しました。引続き八時間の長さです。アーリントン・ハウスに帰ったのは八時半でした。木戸氏はイートン將軍と、私の仲間の通訳と私とを全權大使用にリザーヴされている部屋での夕食に招いてくれました。残念ながら食前の感謝なしに食事が始まりました。

木戸氏は日本の最高実力者の一人であり、あの日本の革命のさいには將軍の專制的な政府を倒して、天皇の新しい、より健康的な、リベラルな政府を打ちたてたのに最も顯著な役割をはたした人です。氏の態度はとても紳士的で好感がもてます。食卓で相当親しく話しこんでしまい、まるでアンドーヴァー「神学校」のクラブで仲間の学生と話し合っているかのように振舞いました。今日は主の日に備えて休息をとっています。今日働きすぎると、安息日の礼拝を楽しむことができないからです。

来週はワシントンを去ってフィラデルフィアとニュー・ヨークの学校を訪問します。多分三週間以内に、世界の中心「ボストン」に到着することになるでしょう。

ハーディー夫妻あて

ワシントン・D・C.、一八七二年三月二十八日

前の二通の手紙を書きましてから、私は田中氏について旧世界を訪れる決心をしました。ご親切なご同意を頂き、また私の成功を祈って頂きまして、本当に有難うございます。これがキリストの王国を、異教徒である貴人たちと日本^{*}の心の中に広めるための好機会になるかもしれないと感じたのでなければ、私は海外に出かけようとは思わなかったでしょう。田中氏は五日以内にワシントンを出発できるように、学校や諸機関の視察を終ろうと努めています。同氏は立派なアメリカの家庭生活を見聞したいと切望しており、お二人様をお願いしてボストンで、真のアメリカ人的生活を味わえそうな個人の家庭をあっせんして頂けないものだろうかと思っています。氏は今までのところホテル住まいでした。氏はまた壮大な様式のアメリカ生活というものはもう見なくてよいから、真のアメリカ的性格を見たいというのです。田中氏と、お二人様のふつつかなしもべを、ボストン滞在中お宅にご厄介にならせて頂けるようお願いすることはちょっと虫がよすぎるかと存じます。しかしあまりご不便をかけないでそれが可能になるようでしたら、氏には非常な益となることを確信いたします。氏とホテルで部屋を同じくするようになりまして以来、お二人様が私のためにここ七年間にして下さったことがらを氏に語ってきかせました。氏もお二人様にしきりにお目にかかりたいと願っています。このことはすべておまかせ致します。どうかお気に召すやり方をお願い致します。氏の願いを満たす最善の道を考えて下さい。田中氏はアメリカの真の誇りと栄光を見抜くに十分鋭い人であると思います。

お知らせするのを忘れていたと思いますが、私は森氏から頼まれて、ノースロップ氏^{*＊}が使節団とはじめて会見した時に同席したのでした。森氏は使節団に代って国民教育と普通教育についてノースロップ氏に沢山の質問をしました。私はノースロップ氏の平易で実的な話のノートを取りました。私は使節団の全員と会ったわけではありませんが、木戸氏とは非常に親しくなりました。木戸氏は使節団の中で最も有能な人であり、普通教育の偉大な友でありま

す。同氏とはしばしば会って、国民教育に関する私の意見を話しました。それは徳性に基づくものでなくてはならないと主張しました。現在私はホテルで田中氏と一緒で、彼とも真の教育、すなわち、魂の教育という主題について語り合うすばらしい機会にめぐまれています。彼は二、三日前の夜私の意見に深い感銘をおぼえ、そして、すべての宗教は自由でなくてはならない、また聖書は教科書としてではなく、徳性を高める食物として、学生一人一人が学ぶべきものである、と申しました。彼はまだ霊の食物を見たり、それについて述べたりするところまでは来ていません。

三月二十九日。昨日ノースロップ氏とその令嬢^{*}、彼女の友人のミス・ページがマウント・ヴァーノン^{**}への私たちの小旅行に同行して下さいました。朝方の天候はかすんでいましたが、天気予報は「快晴」でしたから、勇気をふるってアメリカ人の聖地への巡礼に出掛けました。聖地に近付くにつれてだんだんと霧は晴れていき、空も一層青く澄んできました。川の上を渡る微風も快適で魅惑的でした。とうとう百人以上の同船の人々とともに上陸。一時を少しまわっていましたから、將軍の邸宅の正面のペランダの上に腰をおろし、パーカー博士夫人が準備して下さった弁当をたべました。それはアーリントン・ハウスで使節団の人々と一緒に頂くすばらしい食事よりもさらにまさった味わいでした。昼食後私たちは邸のすべての部屋を見学してまわりました。あの有名なモクレンの葉を二、三枚採集しました。今や私はこの偉大な共和国の首都と、自由の父の墓を訪れたのだと、誇りをもって言うことができます。

私たちは次の月曜日にワシントンをとちます。まことに恐れ入りますがテイラー教授に一筆書いて頂きとうございます。そして私がこちらでしていることを知らせて頂き、神学校に戻らないことについて了解をとって頂きたいのです。どうか主が謙遜になれるよう助けて下さいますように。

フリント夫妻あて

ボストン・オールバニー鉄道で、一八七二年四月十日

ワシントンを去って以来、田中氏と部屋を共にしています。彼の前で引続き朝夕の祈りをささげております。私は彼の日曜学校教師になりました。むろん彼は英語の聖書を読むことはできませんが、漢訳の新訳聖書を一冊持っています。聖書を彼は漢語で読み、私は英語で読み、彼のわからないところを私が説明してやります。彼は信仰を告白する者ではありませんが、心の中ではもうほとんどクリスチャンといっているのです。遠からず神が私のふつつかな働きを祝福して下さると信じています。どうか神のめぐみが彼を異教徒の闇夜から救い出し、彼を日本の国に対する神の国の進展のための偉大な道具として下さいますように。

ハーディー夫妻あて

ニュー・ヘイヴン、一八七二年四月三十日

ボストンを去って以来の私たちは、ボストンにいた時と同じくらい忙しくしてきました。アーモストについた時、私たちはアーモスト・ホテルに泊ろうとしたのですが、シーリー教授が追っかけてきて、そうすることを許しませんでした。教授は私たちを自宅で歓迎して下さい、ねんごろに面倒を見て下さいました。シーリー教授とクラーク学長はこの水曜日に馬車でホリヨーク（女子）専門学校に案内して下さいました。田中氏はこの参観をことのほか喜びました。クラーク学長はまた私たちを（マサチューセッツ）農科大学にも連れて行って校内を案内して下さいました。木曜日の大部分はアーモスト大学ですごしました。金曜日には光学機械の実験を見学し、同じ午後にシーリー教授とヒ

ツチック博士に招かれてノースンプトン聾啞学校を参観。耳のきこえない人や口のきけない人たちを教えるための新しい方法は最も驚くべきものでありました。口のきけない人も、口をきくことができます。土曜日にアーモストに別れを告げ、その午後になれの都（ニュー・ヘイヴン）に到着しました。ニュー・ヘイヴン・ハウスへ行って夕方までゆっくり休息しました。それからノースロップ氏を訪ねましたが、どこかへ引越されたあとで、引越し先はなかなかみつかりません。そこで探索をあきらめ、翌朝まで待とうと思いました。ところがその同じ夕方にノースロップ氏が車でかけつけて、私たちをポーター総長^{*}の家に案内して下さいました。これほど暖い、親切な友人を至るところに見出すことはとても期待していなかったことです。田中氏が皆様に心からよろしくと申しています。ご親切にして頂きましたことを非常に感謝しています。

五月二日。とても急いでいますので、これから何を書くかとしているのかを考えることができないほどです。沢山の学校を参観したためにぐったり疲れてしまい、さらに多くの場所を訪ねようとしていることを思うとぞっとした感じに襲われます。ノースロップ氏は滅多にないくらいいせかす人です。氏は短い時間の内にあまりにも多くの事をつめこみます。ニュー・ヘイヴンに短期間滞在していた間にいったいどれほど多くのものを見たかを申し上げましょう。

月曜日に私たちはイエール大学^{**}、実験資料室、歴史美術館、それにシエフィールド科学学校^{**}を参観しました。火曜日には聾啞者施設、ひとつの高等学校、ブラウン学校、ハートフォードの精神異常者収容施設、ニュー・プリテンの師範学校、州立教護院、メリデンの銀めっき金めっき工場。水曜日に私たちは「コネティカット」州の新知事の就任式典の客となり、四時間ばかりオープン^{*}の馬車にのりました。今日、私たちはこの町の三つの公立学校を視察しました。こちらにきてからというもの、相当な強行軍だったといえます。ノースロップ氏は大へん忙しい人で、私たちに考え

る時間を与えません。今日の午後ニュー・ヘイヴンを立てニュー・ヨークへ向かう予定でしたが、いまなおポーター夫人にひきとめられています。彼女は私たちが出発する前に休息をどうしてもとるべきだと考え、もう一日ここへとどまるようにと私たちを説得したのです。そういうわけで私はこの午後一人で静かにすごすことができた次第で、彼女がもう一日長くひきとめて下さったことを感謝しています。ポーター総長は将来の私の働きに有用と思われる書物のリストを作って下さることになっていますし、また英国の著名な紳士たちにあてた紹介状を書いて下さいました。

私たちがお宅にご招待頂きましてからというものの、あちこちに友人ができました。私たちのために最初に楽しい家庭を開放して下さいましたことに對して、有難く御礼申し上げます。ポーター総長のお宅のようなクリスチャン・ファミリーに滞在させて頂いたことも非常に楽しいことでした。田中氏がこれほど多くのクリスチャンの家庭を見、クリスチャンの生き方の道と様式を見学するよい機会をもちえたことを喜ばしく思います。

お宅においとまを告げる時、私は多くのことを申し上げ、この貧しい、よるべのない脱走者に対してお二人様から与えられた親身のお世話とつきることのない愛に對して、私のいづくせない感謝を申し述べたいと考えていたので、あの午後食卓につきますと、私の過去のすべて——家を出たこと、航海中の労役のこと、ハーディー様との出会い、それ以来ずっと与えられたお二人様のとどまることのないご親切——が、食卓にお皿やプレートが置かれるにつれて心の中に思っておこされたのでした。神の御摂理が靈的な母である奥様にまで私を導いて下さったことをもったいなく思い、感謝の念に満たされて全く言葉が出なくなりました。私がお二人様の許へ送られ、庇護を受け、特別な目的のためにお二人様によって教育を受けたということは、無限の御父のまちがうことのないご指令であったのかもしれない。

れません。ただしこのちっぽけで無価値な私であることを思うとき、この身は縮んでしまっていますけれども。故に、この疲れを知らぬ兵士を導き、守り、強めて下さい、というのが、神に対する私のたえまない叫びであります。

ニュー・ヨーク、五月六日。シーリー教授のお力により、私たちはウイリアム・ブース氏のお宅でご厄介になっています。その父上であるW・A・ブース氏が昨日の午前ステュアート氏の店、聖書館^{*}、クーパー学院^{*}へ、また午後にはファイヴ・ポインツ^{***}、新聞少年宿舎^{****}、そしてタイムズ事務所^{*****}へ案内して下さいました。

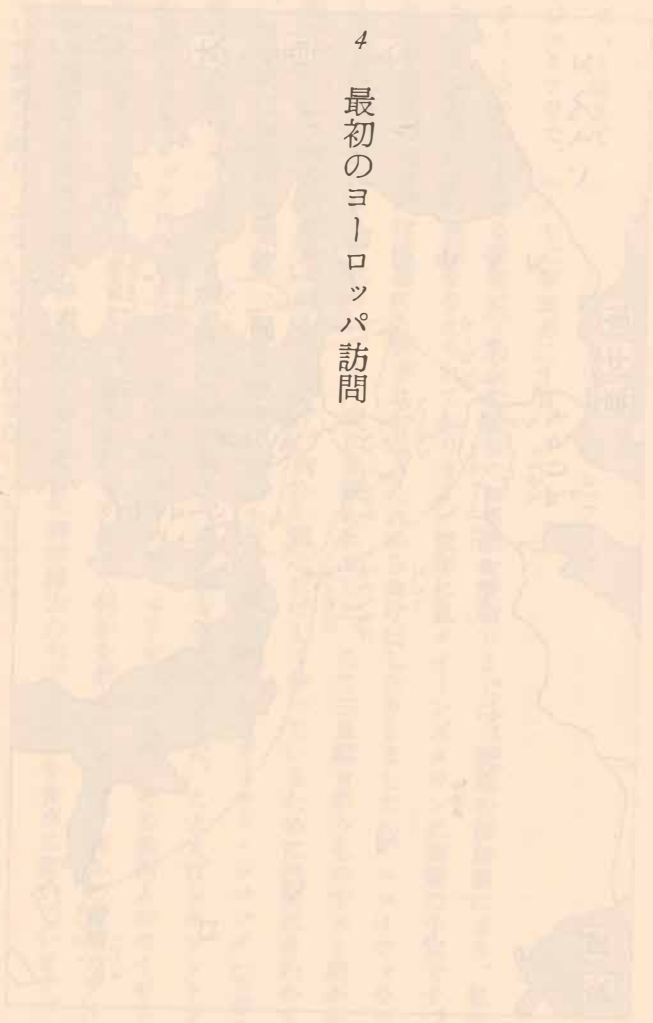
W・A・ブースの兄弟のブース博士が昨日は夕食を共にして下さい、非常に興味深い会話をいたしました。

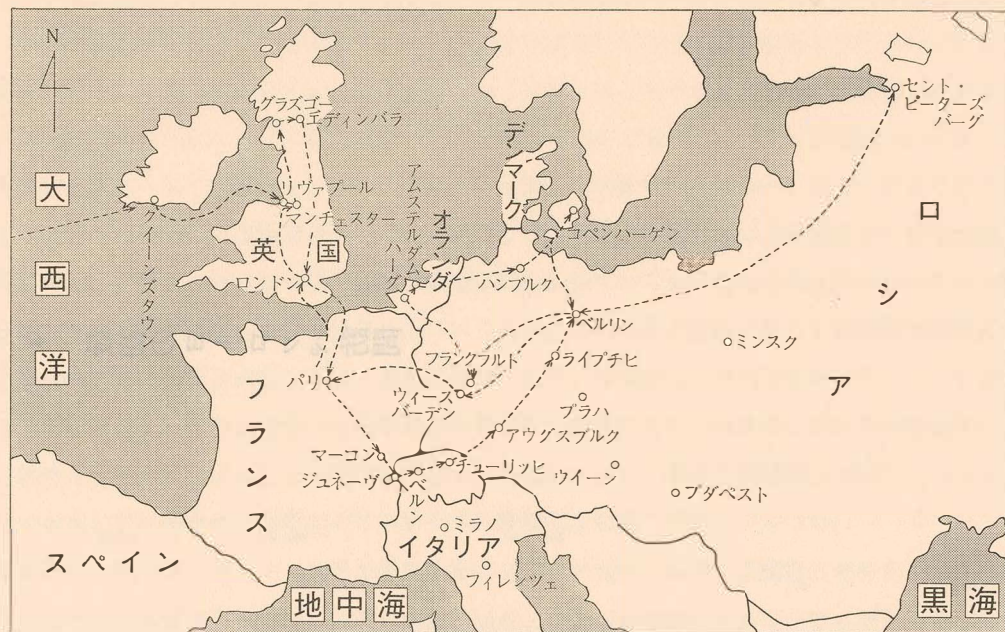
ボストンを訪ねました日以来、数多くの慈善団体を訪ねましたおかげで、田中氏がキリスト教教育の結果について感銘を受けたことを嬉しく思います。お祈りの姿勢についてひと言も言ったことはありませんが、田中氏は今では朝のお祈りのときブース氏の家族とともにひざまづいています。彼は無限の御父に対して本能的な畏敬の念を感じているのだと思います。彼はいつもお二人様のご親切を思い出し、くれぐれもよろしく申上げてほしいと申しています。ヨーロッパへおたちになる前にお手紙を下さいませんか。次の土曜日までもう一度お便りしたいと存じます。

物事を途中でやめたくないものですから、力の許す限り懸命に仕事をしています。田中氏のために沢山の手紙を書きました。

皆ささまようなら。お休みなさい。

4 最初のヨーロッパ訪問





1872—73年のヨーロッパ教育視察

ハーディー氏あて

アルジェリア号^{*}で、一八七二年五月二十日

ジャージー・シティー^{**}を出る直前に、船上で最後のお手紙を受取りました。摂理の御加護により、私たちは大洋にあってもおあふれるほどの祝福を与えられております。夜半にはクイーンズタウン^{***}に到着の予定です。今月の十二日、十三日、十四日の三日間は濃霧にとざされたり、それからぬけ出したりしましたが、ニューファウンドランドの^{***}洲を通過したあと霧が晴れました代りに、よく雨に見舞われました。ここ三日間というものずっと向かい風です。汽船は一時間十二、三マイルの速さで進んでいます。向かい風とはげしく争っているために汽船はきわめて不愉快なゆれ方をし、田中氏は船室にとじこもったきりです。私の方は船乗仲間というオールド・ジャック〔古参の船員〕そのもの。食欲はありますし、毎晩よく眠れました。甲板上での際を楽しみました。たとえばレキシントンのポーター^{***}牧師、その友人であるグッドウィン^{***}夫妻、シカゴのチャールズ・エリオット教授、その他何人かのイギリス紳士などです。航海中奇妙なことに気がつきました。誰もかれもが船上で何かを飲んでいます。何かの種類のアルコールで、私が心の底から嫌悪するものです。紳士も淑女も、それに神学博士たちでも何かを食卓に置いています。私としては水が腐らないで飲める限り、そういうものは飲まないつもりです。

この短い手紙はただ、今までのところ私たちの航海が無事であったことをお知らせするためにすぎません。グラズ

ゴーとエディンバラには二、三日間だけ滞在することになるでしょう。二週間以内にロンドンでお目にかかるように致します。

ハーディー氏あて

エディンバラ、一八七二年六月三日

ロンドンにお着きになったことと推察申し上げます。この短信は私たちがスコットランドでどうしているかをお知らせするためです。先便でお知らせしましたように、私たちはちょうど二週間前にクイーンズタウンに寄りました。

従って明日は私たちがリヴァプールに着いてから三度目の火曜日となります。リヴァプールに上陸するにさいしては

何のトラブルもありませんでした。税関の役人たちは私たちにとても丁寧でした。彼らは私たちの荷物を点検するこ

ともなく、その上、役人の一人がホテルまでついてきてくれました。リヴァプールには一日半滞在しただけで、イン

グランドにおける最初の旅を始めることにし、あの恐ろしく煙っぽい町マンチェスターに來ました。そこでマンチェ

スターの主教と非常に楽しい会見をし、イングランドの教育について多くの情報を得ました。私たちは東洋人に対する

主教の丁寧さと、私たちのこれから先の旅についてのきわめて健全な忠告をととても嬉しく思いました。

私たちは一週間前の金曜日にマンチェスターを去ってグラスゴーに向かいました。しかしその旅はかなりこたえま

したので、その晩はカーライルに一泊。翌朝田中氏は疲れがはげしくて起き上がる力ができません。そこで私は田中氏

を一人残して散歩に出ました。小さな雑踏した通り。長い通り。さいわい町はずれの急な坂の上に立っている古城を

見つけました。孤独の散歩者にとって、それは何という魅惑的な光景だったことでしょう。そこへ登りますと、番人

が親切に迎えてくれました。城壁の上からは全市の景色が展望できました。お孫さんのシャバーン君*が一緒にいたらきっと「すごい」と叫んだことでしょう。

グラズゴーには二、三日滞在しただけでした。田中氏は相変らず懸命に仕事をしています。私たちの仕事は順調にいつています。あしたロンドンに向けてたちます。お目にかかれることを心から楽しみに。

ハーディー氏あて

ロンドン、一八七二年六月八日

今月三日付のお手紙は昨日ベアリング商会で拝受。しばらくのところ、ご到着のことを知りたくてうずうずしてお

りましたので、コークにご安着なさいましたことを非常に嬉しく思います。エディンバラでは非常に楽しくすごしました。学校の参観はすばらしくうまくいきました。スコットランド人の性格、特にエディンバラの人々のそれは実に喜ばしいものです。彼らはまったくのところ、英帝国のボストン人*であります。

ロンドンではホテルを確保するのにとてもつらい思いをしました。午後八時半から十一時まで市内を馬車でまわる

始末でした。ようやくのことでチャリング・クロスのホテルデン・ホテル*に入りました。個室がたった一つしかあいていなかったのです。ホテルは私たちのために酒宴の部屋をあけてくれました。ベッドの台はソファ一台と椅子三脚で作ったものです。一昨日私たちはドナルド・マザソン氏を訪ねました。この人はチャールズ・ダグラス牧師という、以前の中国派遣宣教師で、私たちがエディンバラの大集会で出会った人の親友なのです。マザソン氏は私たちのことを非常に気にかけてくれて、私たちがもつとよい場所をみつけるまでの当座のすまいとして、個人の家庭に下宿

をみつてくれました。リヴァプールに到着以来、ずっと引き続いて学校をまわっていて、本当に疲れてしまします。一切のことが私の肩にかかってくるのです、金銭の出納の記録まで。田中氏は完全な紳士ではありますが、英国のかねの数え方がわからないのです。^{*} 私たちは三、四週間ロンドンに滞在の予定です。大西洋のこちら側で再び握手させて頂きたいと願っています。

私はマレンズ博士^{**}にむかつて、函館に宣教師を二、三人送って頂きたいと声を大にしてお願いしました。函館にはプロテスタントの宣教師は皆無で、いるのは、かつて私がその港から脱走する前に日本語を教えていたロシア正教の司祭だけなのです。この叫び声は夢の中できこえたのではなく、あの途方に暮れた民族の代表から出たなまの声であり、個人的なアピールとしておき頂きたい、とマレンズ博士に申し上げました。私はロマ書十六章九節の一部を書いて、博士に私の写真を差上げておきました。^{**} どうか私たちのために祈り下さい。

ハーディー夫妻あて

マーコン、一八七二年七月二十一日

お別れしたのは僅か一週間と六日前のことでしたのに、もう長い時間がすぎたような気がします。私たちはドーヴァー經由で、水曜日に無事パリに着きました。田中氏にとってはかなりこたえました。おだやかな天気でしたのにはげしい船酔いにかかりました。パリではすばらしい通りと美しい建物に驚いています。しかし、外面の虚飾に汲々としていて、魂の開発を無視している人々にあわれみを覚えました。

昨日パリを発ってジュネーヴへ向かいました。相当退屈な旅でありますので、昨晚この町で下車し、今朝早くジュ

ネーヴ行きの急行に乗るつもりでした。パリを発つとき、土曜日ではなくて金曜日だとばかり思っていました。今日が日曜日だとわかったものですから、今日は旅をすることをやめました。田中氏は今朝ジュネーヴまで一緒に行ってほしがっておりましたけれども、でも私は良心にかけて、安息日に旅行するわけにいかないのです、と告げました。やむをえない場合は別として、私はどこに居ようとも、安息日には魂を主のもとにいこわせるために立ち止まらなくてはなりません。そこで田中氏は今日は自分と一緒に旅をするように私に強いることができなくなり、ここに君と一緒にとどまらなくてすまない、と丁重にあやまった上で、フランス語のできる日本人*をつれてジュネーヴへ向かいしました。そういうわけで私はこの異国の土地に一人残りました。でも全然淋しく思っているわけではありません。朝のうちにフランス人のプロテスタントの教会に行きましたが、説教は理解できませんでした。説教者の熱をおびた声を聞き、彼の身ぶりをずっと注視することにより、その説教者の真摯さだけはわかりました。会衆の数はごく少なく、二十人ばかりの女性と五人の男性、それに男の子と女の子が二、三人いただけです。女性たちはあまりきちんとした身なりでなく、男性たちも肉屋さんのような仕事着を着ていましたが、彼らは礼拝の間中、注意力を集中していたようです。彼らは衣服において貧しくても、内なる人は富んでいる、と私は信じます。

空には雲一つなく、太陽はソーヌ川の青い静かな流れの上にはさんさんと照り輝いています。異邦の人たちの間で、恐れも不安もなしに、良心に従って神を礼拝することのできるこの特権と自由とを与えて下さいました神に、心から感謝をささげます。フランス人の安息日の守り方はニュー・イングランドの人々のそれとは非常に違ったものです。男たちや子供らはソーヌ川の土手で釣をしていますし、女たちはあちこちで洗濯をしています。飲み屋はすべて平日と変らずに開いています。ですから私はただちにローマ・カトリック教徒をプロテスタントの諸国民と区別できるわ

けです。

ハーディー夫妻あて

ベルリン、一八七二年八月六日

マーコンでお便りを差上げましてから、ジュネーヴ、ベルン、チューリヒへ行き、アウグスブルクとライプチヒを経て昨晚ここへ到着しました。^{*} 私たちは今夜セント・ピーターズバーグ^{**}に向けて発ちますが、ロシアには一週間滞在することになるかもしれません。それから戻ってきてプロシアの教育制度のことを調べ始めることになります。今までのところ当地にいる日本人の友人を訪ねただけです。思いがけないことに道でシアーズさん^{***}にばったり出くわしました。彼をみつけ、お二人様のことをうかがうことができてとても嬉しく思いました。今までは一か所から次の場所へと移動するだけでしたが、ロシアから帰ったらきびしい研究に取掛ります。ドイツ語の話せるもう一人の日本人が一行に加わり、セント・ピーターズバーグまで一緒に行くことになりました。田中氏はそれぞれ英語、フランス語、ドイツ語の話せる三人の日本人を従えて得意になっています。この三人がいれば世界中をまわっても困ることはない、と今日話していました。大陸では英語はほとんど使われませんので、私はあまり役に立たないと思うのですが、それでも田中氏が私をつれていきたる理由は、私にヨーロッパの教育制度を研究させ、諸学校における運営をつぶさに視察させたいからなのです。おともの三人は何の困難もなしにうまく折り合っています。私の宗教上の信仰や礼拝、祈禱について他の二人は何も言いません。彼らはキリスト教の諸制度に或る程度の尊敬を払っていますが、罪の許しをやさしくお与えになる救い主のみ許に來ることを通してのみ得られる真理の豊かな精髓を、飲みほしたこ

がないのです。田中氏はちょっとせっかちな人ですから、便利であれば、特に時間を節約するためには安息日でも旅をすることがよくあります。そのことで彼に反対したことはありませんが、私としては町の中であらうと田舎であらうと、安息日には常にそこにとどまることにしています。彼にはその理由をいつも説明してきました。ペルンとチューリヒで英語の礼拝に出席しましたけれど、残念ながら説教は全然満足すべきものではありませんでした。礼拝は一時間以上続き、説教には約十五分間があてられています。その説教はちょっとつめたくて、活気がないのです。

フランスを出てからというものが水が全然合わなくなりました。そのため新しい決断をして、新しい土地ではその地の水に慣れるまでうすめたワインまたはビールを飲むことにしています。アルコールの類を絶って久しいものですから、少し口にしただけで簡単に酔いがまわります。ピューリタン主義者にとって、これはかなりつらいことです。

セント・ピーターズバーグ、「二八七二年」八月十日

一行のうちの二人、すなわちフランスの不信仰と、ドイツ合理主義の影響を受けた連中は、私に何の相談もなしに一人の案内人を傭い、安息日の朝だというのに観光に出掛けました。はじめ彼らは田中氏と私にロシアの教会に行きましようと言ったのです。案内人が一緒にくるものですから、私はただ教会に行くだけだから案内人を傭うことには反対だ、と言いました。私は彼らのワナにかかり、市内でいちばん立派なロシア教会に彼らと一緒に行きました。しばらくして私はその案内人にイギリス人またはアメリカ人の教会はどこにあるかを聞いた上で、ぜひ一人にさせてもらいたいと言いました。教会から帰ってみますと、連中のもくろみは不首尾に終わっていました。彼らはどこかの庭園に行ったのですが、大いに失望し、嫌気がさしたのです。田中氏の方は午後中ずっとキリスト教の書物を読んでいま

した。彼が自身の動機と他の日本人たちのそれとの間にはちがいがあれることを発見したということをお伝えできて嬉しく思います。重い責任が私の肩にかかっていることをますます感じます。

ハーディー夫妻あて

コペンハーゲン、一八七二年九月三日

セント・ピーターズバーグ滞在は短かく、わずか五日で終わりました。大学^{*}、感化院、孤児院、博物館、エルミタージュ等を參觀しました。孤児院は非常に大きな建物で、ほぼ六千人を収容できます。赤ん坊八百人が養育されており、すべて生後二、三週間しかたっていないませんでした。エルミタージュ宮の大コレクションの中で一番感銘を受けたのはラファエルの描いた聖家族でした。セント・ピーターズバーグというのは実に驚くべき都市であります。それは大規模な都市計画に基いて建設されたものです。宮殿と政府の建物は遠くから見ると堂々としていて美しいのですが、建築的に見て、とても美しいとも言えないものもあります。教会堂もまた大型で、大聖堂やアイザック教会^{**}の内部は絶妙な装飾をほどこしています。それらはローマ・カトリックの聖堂によく似ています。聖家族の絵や昔の聖者の遺物が無数にあり、無知な参詣者たちがそれに接吻したり、その前で頭をさげたりしていました。信心深いロシア人たちはその前で日本式のおじぎをしたり、また祈るときには胸の前で二度十字を切るのです。私はこうした信心深いロシア人たちに大いに共感いたします。その信仰において彼らはまじめそのもののように見えます。けれども彼らがまちがった礼拝様式と、まちがった教義に導かれていることは残念であります。

博物館で見たあの有名なマンモスのことを忘れずに付け加えておかねばなりません。それは一七九九年にシベリア

の氷った川岸で発見されたものです。これは現代では存在しない動物であることがおもに二つの点から証明されています。すなわち、第一にそれは毛深いこと、第二にその歯があまりにも密着してはえていることです。その毛がガラスのケースの中に保管してありました。大へん長くて、砂の色をしています。

上流の人々は非常に知的に見え、彼らの大部分は少なくとも一つか二つの外国語を話します。一方下層の人々はきわめて無知であり、見ばえもせず、ロシア語さえ読むことができません。他のヨーロッパの都市ならば馬車の御者はよく新聞を読んでいるのを見かけたものでしたが、ここではそういう御者はついぞ見かけず、彼らは客待ちしながらいつも居眠りしています。馬車はとてものろくて、しかも小さいのです。このスケッチでご覧頂きますように、御者もまた風変りな服装をしています。ロシアのホテルのサービスは全くなっていません。ウェーターは非常にのろまで怠け者です。午前九時より前に起きることはなく、そんな時間に何か必要があれば、連中を起こすのにベルを六回も鳴らさなくてはなりません。この都市のおもな商売はどうやらドイツ人が握っているようです。

私たちは先月十六日にベルリンに帰ってきました。ベルリンでは全部の学校がまだ休暇中でしたから、ヨーロッパの他の部分を訪ねることの方が時間の使い方としてはまじだと思いました。そこでフランクフルト・アム・マイン^{*}經由で、オランダにむけて出発しました。私たちはライン川を汽船で下ってロッテルダム^{***}まで来ました。この忙しい町にはとまらずにハーグに直行し、公教育大臣から親切な接見を受け、首都のすべての学校を参観するすばらしい機会を与えられました。^{***}嬉しいことに教室は清潔で子供たちはきちんとしていました。オランダの学校制度はすぐれたものです。学校は人民の全階級に向けて開かれています。しかしながら私立学校の方が、授業料をとらない公立学校よりもうんとましです。アメリカの制度の方がオランダのそれよりもはるかにすぐれています。オランダの公立学校で

は聖書はすっかり閉め出されています。オランダ人は共和制の時代^{*}に信仰深かったほどには信仰深くないのではないのでしょうか。私は王宮と、王妃^{*※}の私邸である「森の中の家」を参観し、さいわいにして王妃様を見る好機会にめぐまれました。私たちが舞踏室にいた時に、何の前ぶれもなしに王妃がお出ましになりました。はじめ王妃は私たちがその部屋に現れたことを非常に驚いておられるご様子でした。それから、まるで何事も起こらなかったかのように、視線をゆっくりと床におとされました。王妃は黒いヴェールをつけておられたので、お顔をはっきりと見ることはできませんでしたが、五十は過ぎていられるにちがいありません。

アムステルダムに向かう途中、ライデンに二日間滞在しました。大学、植物園、淑女のための学校——すぐれた女学校です——そして博物館を訪れました。博物館では中国と日本関係の珍しいものを集めた大コレクションを見ました。^{***}

アムステルダムでは公教育省の役人の案内ですべてのグレード別の学校を視察しました。一つの学校は変わっていて、そこでは労働者階級の若者たちが工業の特定分野について、理論的・実践的に授業をうけていました。アムステルダムで最も目をひくものはおびただしき数の運河と橋です。どこへ行っても、どうしてもそれを見ないわけにいきません。この安息日を「ドイツの」ハンブルクですごしました。私の二人の仲間は港の方に散歩に出掛けました。むろん私は連中のように安息日をすごすことはできません。私は一人でイギリスの改革派の教会に出席し、イギリス人牧師であるエドワード氏の非常にすぐれた説教を聞きました。

昨日コペンハーゲンに到着し、今朝は公教育大臣を訪問しました。午後にはただ今この町で開かれている見本市に行き、午後中をすごしました。宿舎に帰ると非常に疲れを感じました。けれどもアメリカの最良の友人たちの

ことを忘れることができず、お二人様に対して私の最大の愛と尊敬を表現するためにこの手紙を書き始めたのです。ヨーロッパで学問の府を訪れ、教育の偉大な価値を見出して、お二人様が私に示して下さいましたご親切をますます感謝しておりますことをどうぞ知って下さいますように。受けましたご恩をお返しできるなどとは一度も感じたことはありません。ですから全力をあげて私の将来のすべてをお二人様の大目的、すなわち、どのような状況のもとにあるろうとも、十字架につけられ給うた救い主をのべ伝える、という目的に副うように努力致します。私の前によこたわる宣教の道に、大きな障害が見えはじめております。といいますのは、教育のある日本人の大多数が不信仰のワナにおちいりつつあるからです。しかしながら世界のキリスト教のめざましい発展のことを思いますとき、仕合わせを感じます。そして、キリスト教は障害に出会うことがあっても、ちょうど川が途中で邪魔に出会うと一層早く流れるように、キリスト教もまたその時にはさらに速度を早めて前進することを信じています。生ける神の御手にたよることができるとは、何という喜びでしょう。私たちが神に忠実でありさえすれば、神は私たちのような粗末なうつわでも、神の家の中で大いに用いて下さいます。

どうか私のアメリカの友人たちによろしくお伝え下さい。私の健康は大いによくなっています。お二人様から頂くお手紙はいつでも、私を仕合わせにしてくれます。

〔田中不二麿〕理事官がベルリンに帰ってくると、新島はワシントンで悩んでいた問題に別の形で再びでくわさざるをえなくなった。それは、秋になればすぐにアンドーヴァーで勉強に取掛りたいという希望のことであった。田中氏は今やスエズ経由で日本へむけて急いで帰国するので、新島もぜひ一緒に帰るようにとの熱心な要望を告げた。この

決断は容易でなかった。新島はもはやなくてはならぬ助手になっていた。事柄の性質からすれば、理事官の帰国を待っている重要な仕事、そして今までになされたことはほんの序の口にすぎないといえる大仕事をすすめる上において、理事官を助けるのに、すべての人のうちで新島が最適なのであった。この段階で田中と別れることは、ほとんど逃亡に近いような気がするのであった。おまけに、新島の旧敵のリューマチが再び襲い始め、彼はもうひと冬をアンダーウェアの寒い気候の中ですごすことを恐れた。健康は誰にでも大切であるが、とりわけ、大きな責任の重荷を感じている者、その事業の目的と計画を達成するのに、自分こそが最もうまくなしとげることができるのだという確信をもつ人の場合には、それはなおさら大切である。けれども、年月がたつにつれて健康についてのこのような心配が減っていったことに気付くのである。彼はいつでも自分を犠牲にする準備ができていたので、義務をはたすことはだんだん犠牲ではなくなり、ついには戦のさなかの兵士のように、傍観者ならば無謀と呼ぶかもしれないような熱意と情熱をもって、彼は全く我を忘れ、文字通りいのちを投げ捨てたのであった。彼の面前に横たわる真の問題は、目的の問題ではなく、方法と手段の問題だった。彼の日記からすると、この初期の時期においてすら、のちほど日本におけるキリスト教大学の設立へと導くことになる思想の萌芽が彼の心の中にめばえていたことがわかるのである。教育においてキリスト教的要素がいかに重要であるかを痛感するにつけても、はたして彼はニュー・イングランドに戻り、神学校の課程を終え、宣教の人として日本に帰るべきなのか、それとも、このめったにない機会をつかみ、日本でまさに始められようとしている教育の運動に、その最初において影響を与えるべきなのか。しかしながら、田中氏の計画が、全体としてみても、新島に限定してみても、はたして日本政府によって承認されるものかどうか、その点がちっとも確かでなかった。この不確かさに加えて、役人の生活にこれから先ずっとたずさわることになるかもしれない

ないという恐れが、新島に、もとの意向を守る決意をさせたのであった。

田中氏の出発からアンドルーアー神学校の開講までまだ数か月があった。この月日了新島は、ドイツの学校を調査したり、ドイツ語を勉強したり、ウィースバーデン^{*}での療養によって健康の増進につとめたりしながらすごした。リユーマチはしつこくぶりがえして彼を苦しめた。特に、こんなに多くの時間を、快楽を好む町ですごさなくてはならないために、新島は落着きを得ることができなかった。しかしながら、常に主の御用に立つことに心を砕いていた彼は、日本政府から紙幣の製造の研究を命ぜられてフランクフルトにきていた若い日本人の役人と知り合いになった。新島は彼に聖書を学ぶようにすすめた。二年後に、いよいよ日本へ帰ろうとしていた矢先に新島は、この同国人がキリスト教を受け入れたという手紙を受取った。彼は日記に次のように記している。「ウィースバーデンにいた時、病気が長びいてがっかりしたものだった。今や私はあそこでの滞在が全く無駄ではなかったことがわかり始めた。主がおそかれ早かれ、にがい水を甘い水に変えて下さるということを知るのは、何という大きな慰めであろう。私は主に病気を感謝する。」

ハーディー夫人あて

ベルリン、一八七二年十月二日

ベルリンに帰ってみますと、八月二十五日付ベルヒテスガーデン^{**}からのお便りが届いていました。ご親切な興味深いお手紙本当に嬉しく、奥様もハーディー様も、活力を与える山の空気をお吸いになって、健康を大いに増進されたことと存じます。ここ五週間ほど、むずかしい問題を考えてきました。よくご存知のように、私は田中氏について帰

国すべきか、アメリカに帰ってアンドーヴァーでの勉強を終えるべきか、まったくきめかねております。長い間その問題をあれこれと考えてきました。しかしこちらに帰ってきた田中氏は、私と一緒に帰国するように要望しました。

彼が言いますには、私なしにはうまくやっていけないだろう、なぜなら彼は自分自身の報告書以外に、キリスト教の本を何か印刷する意図を持っているからです。私にしばらく帰国をうながすもう一つの事が起こりました。といいますのは、ここ二、三日、ベルリンで寒気がひどく身にこたえはじめたのです。それで、もしきびしい寒さに身をさらせば、あの持病がまたもやぶりかえしはしないかという気がするのです。こう考えますと、今年アンドーヴァーに帰って勉強を再開することにはどうも気乗りがしないのです。そこで、一、二年間あの温和な気候のもとでこのリューマチから逃れるために帰国してはどうか、そうすれば多分、寒いニュー・イングランドの冬に再び対抗していけるようになるかもしれない、と考えました。いま勉強を続けられないことは残念至極ですが、私としてはどうしても体のことをかえりみる必要があるのです。ご反対でなければ田中氏について帰国することにきめようと思います。私のとるべき道についてご意見をお聞かせ下さいませんか。ご存知の通り、私は帰国する前にぜひともアメリカに戻るといことが、お二人様と私との間での諒解事項でありました。田中氏はスエズ経由で帰国するそうです。その方がアメリカ大陸を経由して帰る場合よりもうんと暖いからです。しかし私としてはむしろボストン経由を望んでいます。もし寒い気候が私のリューマチにとってあまり安全でないとするならば、私は次の春がくるまでヨーロッパの暖い場所にとどまっていたと思います。けれども田中氏は次の春まで私を待ってくれそうにありません。なぜなら彼は使節団から全く離れているからです。私が彼を見捨てれば彼は一人になってしまいます。私はアメリカの友人たちに会いたいという切実な欲求を満足させて田中氏には不便をしのんでもらうことにしたものでしょうか、それと

も田中氏の世話をして私自身の欲望は否定したものでしょうか。私としてはアメリカに帰って神学の勉強を再開し、完成し、宣教の仕事のために完全に備えをなすことにきめます。私はこの世的な富や名声を求める気持は毛頭ありません。なぜなら私は自分の目をキリストの栄光と卓越性にしっかりと注いでいると信じるからです。ヨーロッパに来て数多くの不信仰の人々を見ましたので、人間の魂にとって福音の真理がいかに必要であるかということがはっきりと見えるのです。

ベルリンには今八十人ほどの日本人留学生がおります。しかし彼らのすべてはキリスト教の真理が何であるかを知らず、となしに、クリスチャンたちを馬鹿にする習慣を身につけてしまいました。その一人が田中氏の親しい友人に因り、田中氏は坊主になったのか、と聞きました。なぜならその反宗教的な日本人は田中氏が私と一緒にいて、熱心な興味をもってキリスト教の書物を読んでいると聞いたからです。田中氏はその侮辱的な言葉を聞いたときそれを意に留めることなく、ただ笑っただけでした。こういう連中が帰国すると、彼らは日本に存在を始めたばかりのキリストの教会の大義を大いに妨害することになるだろうと思います。今こそ連中が日本国のために大きな災いをもたらさない前に、私が宣教師たちのために道を開き、国民教育をキリスト教道德の主義でもっておおうようにすべき潮時ではないかと考えております。神が私の思うこととなすことの一切を導いて下さいますように。どうか私にどのように進むべきかについて助言をお願い致します。奥様なら私によりよい光を投げかけて下さることと存じます。今は大いに頑張って仕事をしています。一日に約六時間ずつ、ヨーロッパ各国の学校規則や報告書の翻訳をしています*。

ハーディー夫妻あて

ベルリン、一八七二年十月二十日

親身のご親切と深いご同情をお寄せ頂き、感動のあまり少なからぬ涙を注ぎました。前便で申し上げました問題については祈りをこめて一層深く考えて参りましたし、将来のことをこの世的に計画しないで、「わたしに従ってきなさい」〔マタイ伝19・21〕というささやき声に身をゆだねつつ、まじめに、さらによい光を探し求めています。

そうです、田中氏とともに帰国し、彼を助けて日本に新しい学校制度を打ちたてるならば、多分同胞のために何らかのよい奉仕ができることでしょう。もしそのような仕事に従事するとすれば中途でそれをやめるわけにいかず、もしそれをなしとげようと思えば、少なくとも二、三年間ではできません。田中氏はその仕事はあまり多くの時間を要しない、それで日本に教育制度が確立されさえしたらすぐに私を神学の勉強のために返してあげよう、と言います。

田中氏はその仕事の方が、ヨーロッパの大部分を四か月以内で旅してまわったことより一層容易だと考えているのです。けれども私は彼の言うことをもっと注意深く考えないわけにはいきません。「へびのように賢く、はとのように素直であれ」〔マタイ伝10・16〕という聖書の教えを実践することがよいのです。もし今、遠きをおもんばかることなしに帰国すれば、私は多分わなにおちいり、それから脱け出すのに相当な困難を見出すことになるでしょう。もしそのような道にしばらくつけられるならば、「わたしに従ってきなさい」という御声をどうしたらいいのでしょうか。私たちの人生はあまりにも短いのですから、この世的な事柄にあまり多くの時間を割いてはなりません。主のおん為に働こうとすれば、然るべき準備をすることが必要です。その働きのための有資格者になろうとすれば、ニュー・イングランドの清らかな空気をもう一度吸うことも必要です。神の摂理が私をもう一度アンドーヴァー神学校へと導き給う

よう、私のために祈って下さいませんか。私の持物はすべてアンドーヴァーにありますが、どうかそのままにしておいて下さいように。

ハーディー夫人あて

ベルリン、一八七二年十二月十六日

私の将来の道についてあれ以上のご助言を頂いておりませんので、私は田中氏とともに帰国しないことに決断しました。この決断の理由を説明させて頂きましよう。第一、田中氏はただ何らかの仕方では私を使うというだけで、正確にどのような地位を私のために確保できるのかを知らないのです。彼の招聘は個人的な考えにすぎないのであって、何らの権威もないのです。日本政府はまだ不安定のままです。ですから、もし田中氏の地位に移動が生じた時、誰が私に責任をもってくれるでしょうか。それ故私は彼の招聘を受けるつもりはありません。それはあまりにも子供の遊びに似ているように思えますから。第二、もしも今帰国すれば、政府のために何らかの奉仕は多分できるでしょうが、その間に私の時間はあまりにも多くその目的のために取られ、私の霊の君主に対する奉仕を始めることがおくれをとりはしないかと心配です。私はますます、自分が救い主に捉えられた者であると感じており、主のおん為に働くのであれば仕合わせを感じないのです。私の神学の課程はまだ半分も終わっていませんので、私は復学して、聖職の叙任をうけ、途方に暮れている同胞に福音を伝えられるところまでどうしても進みたいのです。私の十字架を取って主に従いたてまつることこそが私の最初に選んだ道でした。それが私の最も仕合わせな選択であり、それが最良の選択であると信じます。奥様は今までずっと私の霊の母であり、親切な庇護者であって下さいました。どうかこれから

も変らずにご高配をたまわり、学業をさらにのばしていくことをお許し頂けることと信じています。私の教育費用のためにためてきました金をいくら、奥様にお送りして、預って頂きたいと思っています。奥様にドイツでの経験をいくらかお伝えしたいのですが、そうする時間がありません。二、三日前にシアーズさんを訪ねました。彼は音楽に大いに興味をもっています。先便以来私の健康はすぐれませんでした。神経がいら立ち、夜は眠れず、それにめまいを伴う頭痛がしています。一度はほとんどこの仕事をやめようときめたほどでした。でも今はゆっくりと回復に向かっています。あの魅惑的な町、ニュー・イングランドの女王「ボストン」が猛火に見舞われたというニュースを聞いた時には全くぎょつとしました。どのくらいの被害をお受けになったかわかりませんが、それが軽いものであつてほしいと願っています*。

ハーディー夫妻あて

ベルリン、一八七三年一月六日

新年を迎え、大西洋のこちら側からはるかに握手とご挨拶を送ります。ご多幸とご繁栄がまし加わりますよう祈り上げます。私の方は使徒パウロが申しましたように、「神の恵みによって、わたしは」今日あるを得ている」「コリント前15・10」と申し上げることができるだけです。健康の方はあまりすぐれませんでしたけれど、私はなお許されて政府の仕事にたずさわっております。ここ数年の間、神は何と私によくして下さったことでしょう。私たちの将来はまったく未知のままですから、私は神が、過去においてそうであつたと同じように、永遠の未来にいたるまで一歩一歩、皆様や私を導いて下さると信じています。

クリスマス・イヴにシアーズさんと本当に楽しい時をとにすごしましたことをご報告申し上げます。ほんもののドイツのクリスマスの祝祭を見るのははじめてのことでした。あらゆる機会に歌を歌うことがドイツ人の習慣です。始まりは先ず讃美歌と新約聖書の朗読でした。それから私たちは光のない一室にとじこめられ、しばらくしてから別室に招じ入れられました。そこにはテーブルの上にプレゼントが幾山にも盛られてありました。シアーズさんは私にかわいらしい旅行用手さげかばんを下さいました。この祝祭は大いに気に入りました。それが私にとってはじめての不思議な機会であったからばかりでなく、その部屋にいた誰の顔にも、敬愛の念に燃えた微笑がただよっていたからであります。

その時以来、田中氏にベルリン出発の用意をととのえてもらうために大童となりました。彼は三日前にウイーンとローマをめざして発ちました。そして今月中にパリから日本にむけて出発する予定です。そこで私は彼の出発まえに彼のために報告書を書き終えなくてはなりません。教育事情以外に私は彼から、イングランドとアメリカにおけるキリスト教会に関する短い報告を書くよう求められています。

たぶん新聞ですでお気付きのことと存じますが、日本政府は旧暦を廃してヨーロッパ風のカレンダーを採用しました。^{*}ベルリン在留の日本人留学生八十人の全部が或るレストランに集まり、ビールを飲んで私たちの新時代を祝いました。私も出席しましたが、あまり楽しいことはありませんでした。その集まりには天皇の叔父君がご臨席になりました。^{**}宮は非常に謙遜で紳士的な方とお見受けしました。もう一つ喜んでお知らせできますことは、ベルリンの日本人学生の一人が今年の最初の安息日に私のところにやってきて、聖書を説明してほしいこと、また私がいつも行くメソジストの教会に連れて行ってほしいと頼んできました。この要望にはとても驚きました。それはまったく自発的

な申し出だったのです。私たちは最初の学習のためにヨハネによる福音書を選びました。彼は漢訳とドイツ語訳の聖書を持ち、私は英訳とドイツ語訳のそれを持っていました。むろん私たちの会話は日本語でした。私たちは非常に興味に乗ってきて、熱の入った二時間の勉強はとても短く感じました。彼は太そう満足し、安息日ごとにこの勉強を続けようと約束して去って行きました。彼の話ではベルリン在住日本人学生のうち誰一人として聖書を学ぶものはいないそうです。こんなに多くの人々がキリスト教について何一つ知らないとは、何という悲しいことでしょう。私と一緒に学び始めた男のために、彼の目から部厚い不信のウロコが落ちますように、そしてやさしい救い主が側に立っていらっしやるのが見えますようにと、特別の祈りをささげて頂きとうございます。

ハーディー夫妻あて

ベルリン、一八七三年一月十五日

お手紙をただ今拝受いたしました。それは焼けつくように乾いた土地に降る、気分を一新する慈雨の感じがしました。クリスマスをご友人がたと楽しくおすごしになり、新年をまさに迎えようとしておられますご様子を、心から嬉しく存じます。

ボストンの現状についてお知らせ頂き、その廃墟の姿が眼前に彷彿として参ります。

日本について申しますと、だんだんと明るさが増し加わっています。ただしその進歩はちょっと表面的ではありません。*
すが。老父が私の師であり友であるシーリー教授にお目にかかる機会があったことを知って大喜び致しました。

ベルリンに帰ってきてからというもの、少しも気分がすぐれません。これは多分広範囲の旅をしたことと、引続き

たずさわった仕事によるものと思います。リユーマチのため三日間外出できませんでした。キープ博士と私の医師はウィースバーデンに行くことをすすめています。そこへ赴くという考え方を受け入れるわけにはいきませんでした。というのは、それは私ごとき貧しい者の行く所ではないと思ったからです。けれども調べてみました結果、思ったほど高価にはつかないことがわかり、それで行く決心をした次第です。もしご反対でなければ私は夏までヨーロッパに滞在したいのですが。それはひとつには健康のため、いまひとつにはドイツの教育制度に関する調査をさらに進めるためです。しかしお二人様は私の後見人でありますので、どうかいちばん良いとお考えになることをお示し頂きます。私はお導きに従います。

四百八十ドルの小切手を送らせて頂きました。私の計算ではこれでアンドーヴァーでのもう一年間の学業を支えるに十分かと存じます。

ハーディー夫人あて

ウィースバーデン、一八七三年三月五日

当地へ来てちょうど三週間になります。十九回入湯しました。健康はかなり着実に増進していますので、天候の方が落ち着き次第、体も回復することと思います。この入湯はリユーマチにすばらしくきくと思います。神経を相当刺激します。このため私の神経性の頭痛は三週間前とくらべてちっともよくなっていません。医者は入湯をもう一、二週間長く続けるように、また欝水を飲むようすすめてくれます。ベルリンを発つとき大いに気分が良かったです。というのは私のような若者が肉体も精神も大いに使うことができず、療養のために温泉場へ行くことはとんでもない

ことだと思つたからです。けれどもここへ来て、私自身よりかはるかに悪条件の病氣に悩んでいる若者を沢山見て以來、私は大いに勇氣付けられ、また神のやさしいお導きに感謝し始めております。

この場所についてはよくご存知のことと思いますので、この地を描写するつもりはありません。とても美しい所ですが、大多数の人は快楽の崇拜者です。劇場、ダンス・パーティ、仮面舞踏会には人々が大いに集まりますが、教会はからっぽです。けれどもこの場所で真のクリスチャンを若干名見つけ、彼らの間で何人かの知合いができました。彼らは私が暗闇から光の中へと導かれたことを知って大層喜んでくれました。私はここで異国人の間に住んでおりますが、これらの少数のクリスチャンたちを知ることによって、実にアット・ホームに感じ始めています。全体として見ると、ドイツのプロテスタンティズムは政策上の問題であつて、ニュー・イングランドの自由な岸边におけるそれとは非常にかけはなれたものだという氣が致します。

一八七三年四月六日

私の思いは毎日奥様の方へと飛んでいくのですが、ああ、この体の不調は何としたことでしょう。リユーマチは完全になおりましたけれども、なおどんよりとした、めまいをとまなう恒常的な頭痛に悩まされています。二週間前に温泉場を去り、日牧師のお宅に來ました。彼はルーテル派^{*}の非常に敬虔な説教家です。彼の教義上の見解は私の見解と少しちがったものでありますが、二人の間に不快のたねは全くありません。彼は私にルーテル派の神学を学んではしいと思ひ、その神学がすべての教派の神学の中で最も純粹であることを納得させようとしています。しかし私はいくつかの点でどうしても同意しかねます。

シアーズさんは六月十四日にハンブルクからゲルマニア号で帰国の途につくことにきめたよし知らせて下さいました。私はただちに彼のお供をすべきだと思いました。このことを眠られぬ夜の寢床の中で考えておりましたときに、一つの考えが浮かびました。奥様なら恐らくそれは野心的な考えだとおっしゃるでしょう。ご存知のように、私はドイツに来て七か月以上になります。そのうち五か月間をまったく田中氏のために費しました。そのためドイツ語を勉強する大切な機会を持ちませんでした。もし私がアメリカなり、日本なりに、ドイツ語を十分に習得せずに帰るならば、私は同胞に大いに笑われるだろうと思うのです。なぜなら彼らは今や国内において外国人の教師について学び、諸科学においてもヨーロッパの諸言語においても大へんな進歩をとげているからです。私はまた公人として宗教の面で働くためには、現代思想、科学、言語の面で彼らよりもいくらか先んじていることがどうしても必要だと思うのです。もし六月にアメリカに帰るとすれば、それはちょうど休暇中に当たり、あまり多くを達成できないと考えます。そこで私は、むしろ八月一日までドイツに留まってはどうかという気になっているのです。

二週間ほど前に国許からよい便りが届きました。父と姉が非常に気持のよい手紙をよこしたのです。私が田中氏のおともをしているというしらせを父は殊のほか喜び、長い間の心配がこれで十分むくわれた、と言うのです。父は横浜まで行って私がボストンから送ったおかねを受取りました。日本の封建制が廃止になり、藩主への出仕の仕事を奪われまして以来、父は出仕中に節約しておいたかねで生活してきたのです。横浜の宣教師は父にジョゼフ〔ヨゼフ〕の物語をしてきかせ、そのジョゼフをこの無価値なジョゼフになぞらえたそうです。父は馬の代りに人が引く小型の車〔人力車〕に乗って横浜へ行きましたよし。それは現在日本で流行している乗物なのです。

ハーディー夫人あて

ドイツ、オージングゲン^{*}、一八七三年八月六日

二週間前にウィースバーデンでの鉱泉浴の二度目のコースを終了し、あの流行を追う町を去ってフリードリッヒスドルフへ来ました。ここはホンブルクからそう遠くないところにある小さな町で、ベルリン以来の旧友を訪ねるためでした。^{**}住民の大部分はユグノーの子孫であり、今なお母国語で話しています。彼らはフランス語の聖書を読み、フ

ランス語の讃美歌を歌います。まったく驚いたことに、ドイツ語を全然話すことのできない者も何人かいます。友人たちを通してユグノーの教家族に紹介され、滞在中は毎日のように、お昼や晩の食事に招かれました。ドイツの大部分が安息日を聖日でなく休日と考えているときに、この人たちの何人かは古い信仰にしがみついております、彼らの迫害を受けた先祖たちと同様に安息日を守っていることを見て、大へん嬉しく思いました。私の泊った家庭の三人の少女が朝の家庭礼拝のときにかわいらしくフランス語の祈りをささげるのを聞いたときには、涙を禁じえませんでした。

朝には彼らと一緒にフランス語の礼拝に出席し、夕方にはメソジストの教会に参りました。このユグノーたちの大部分はなおカルヴァン派でありますのに、夕方にはメソジスト教会に行くのです。この町にある二つの有名な学校、つまり一つは男子、もう一つは女子の学校を参観しました。生徒たちは改宗した日本人を見て大いに喜びました。女生徒たちは日本伝道のために頑張って下さいと言って、五ターラ十三グロッシェン^{***}を集めて持ってきてくれました。各自が約八セントずつを出したことになります、この少女たちとしては大きな犠牲を払ってくれたのです。

師範学校の運営と規則をしらべるためにこの地に来ました。ここにきてからちょうど一週間、毎日のように師範学校と付属小学校を参観しています。私の観察したことをここに書くことは致しません。それには相当な時間を必要と

しますから。ドイツの制度はゆっくりとしているが着実なもので、すぐれている、とだけ申し上げるにとどめます。来週にはドイツを去り、パリ、ロンドン経由でなつかしのアメリカに向かうつもりです。ウィスバーデンの友人たちや医師は、リューマチをなおすため日本に帰るようにすすめました。しかし私の手は鋤におかれていることを感じます。他方では、私の健康は、私のむさぼるほどの知識欲を満足させるに十分なだけ勉強することを許さないのではないかと心配です。今やリューマチの痛みはまったくなくなりましたし、ほぼ五か月間悩みのたねであった頭痛からも解放されました。ただ神経系統だけがまだ十分に回復していません。頭を使おうとするとすぐ疲れてしまいます。もう一年間勉強を続けるに十分なお金をためました。

ハーディー氏あて

ロンドン、一八七三年八月二十七日

昨日ベアリング商会でお手紙を受取りました。アンドーヴァーの風のふきすさぶ丘の上で冬をすごすことを恐れて、冬の前に帰国しようかな、と考えていました。けれどもご親切な忠告を頂き、再び鋤を手にする勇気が新たに湧きあがりました。帰国はそのあとです。私はしばしば肉体の不調に苦しんできましたが、主は今までのところ見事に私を守って下さいましたので、私は大胆に主の御手に信頼をゆだねまつり、将来、同胞の間で働けるように備えるべく、最善をつくそうと思います。絶えず征服が進む主の戦場において、私にも大胆で忠実な奉仕ができますよう、どうかお祈り下さい。

新島は一八七三年の九月にアンドーヴァーに帰ってきた。不在中に彼は使節団から受けた給料の中から一定額をとりのけておき、それを神学の課程を修了するために使おうとしたのであったが、ボストンの友人たち（ハーディー夫妻）はその分は投資しておき、彼らの援助を引続き受けるよう説得した。ただちに積極的な勉学の生活を始めることになり、彼はアンドーヴァーにもう一年だけとどまり、その二倍の時間が割当てられている神学校の課程をこの一年間でできる限り完了しようと決意した。さいわいにして健康は引続き良好だった。この一年間の手紙は、不屈の勉学の単純な記録である。一八七四年二月にこう書いている。「高等学校の若い淑女たちが今夜神学生たちを個人的なりセプションに招いています。ハンサムな連中だけが招かれました。若干の馬鹿な連中は除外です。私は除外された一人で、そのことを笑わずにおれません。」彼はつけ加えている。「大阪にいる宣教師のゴードン氏*から手紙を受取りました。彼は非常に熱心に私に来てほしいといっています。日本語で説教することは非常にむずかしいといっています。もし彼が注意深い男であることを知らなかったとしたら、彼の言っていることが本当だとは信じないでしょう。日本の急速な発展については生き生きときわめて生彩に富んだ仕方で表現されています。私はまだ日本での自分の将来の運命がどうなるのかわかりません。どこに落着くことになるのか、どのように身を立てていくのか、まだわかっていないのです。」

三月にはこう書いている。「アメリカン・ボードの総主事のクラーク博士*から、私の将来の計画について話したいから、できるだけ早く訪ねてくるようにとの伝言がありました。そこで、すぐに行ってきました。彼は神戸の宣教師のグリーン氏*からの手紙を示して、日本における宣教の事業に献身するつもりはあるかと聞きました。このお召しに對し無条件降伏をしたことはもちろんです。」

同じ頃に新島は神戸の宣教師たちから、彼に帰国と協力を求める緊急アピールを受取った。この宣教師団の何人かとは彼は個人的な友人であったし、学友としてつき合った人もいた。^{*}道徳上の完全な真理ですら、たどたどしい説き方ではとても伝達ができない。日本語を話すことができる人、それが外国のものであるが故に厳しくて近寄りがたいような事がらの多くを日本人の心に解きあかすことができる人、確信を得させ、共感を与える力、つまり同国人だけが効果的に行使しうるような力を知的な力につけ加えることのできる人、そのような人が必要であると痛感されたのであった。

クラーク博士との会話の結果として、新島はアメリカン・ボードの傘の下で宣教師として献身することにきまつた。その主事たちに対し新島は次のような手紙を送った。

アメリカン・ボード主事あて

アンドーヴァー、一八七四年四月三十日

拝啓 私が初期にどのような教育をうけたか、のちにキリスト者としてどのような経験をしたか、そして特に、日本における宣教事業に献身しようとする動機は何であるかについて、手短かに書き記すことをお許し願いたいと存じます。

私は仏教の信仰の中で育てられ、儒教の徳育をも受けてきました。その後私には仏教は不愉快なもの、儒教は不満足なものとなりました。このような影響のもとで私はいくらか懷疑的となりました。ただし、時には一層高尚で一層善良な何ものかに対して憧れを抱いたことも事実であります。

そのような心の状態の中で、中国在留のアメリカの宣教師の書いた聖書の歴史の中国語訳にでくわしました。そこには神に関するはつきりとした見解が述べられていましたので、さらにつっこんで神のことを探求するようになりました。この目的を抱いて私は家を離れることになり、アメリカに渡ったのです。アメリカまでも私を導き給うた摂理は、ボストンに友人を備え給い、その方々のご援助によって今までの教育を受けてきました。私の回心は米国到着後しばらくして起こりました。しかし私は神の言葉をはじめて読んだ日以来、神とその光を探し求めてきたのであります。

新たな経験とともに私の国民の間に福音をのべ伝えたいという欲求が私の中に生まれました。自分自身をこの事業にささげたいという動機は、私の国がそれを必要としていることを感じたからであり、滅びゆく魂を見逃すことができないからです。とりわけ、キリストの愛が私をこの仕事につなぎとめてしまいました。私はこの夏で勉学を完了するつもりです。現在何の借金もありません。日本にいた時には申し分のない健康状態でしたが、米国にきてからというもの、幾分か健康はすぐれません。しかし現在では回復しつつあります。当分の間結婚するつもりはありません。

ジョゼフ・ニイシマ

ボードが宣教師候補者用に作った手引書の中にある質問に答えて、新島は次のように書いている。

「私の見解では聖書の主要な教義は次の通りである。唯一の真の神の实在、聖書は靈感によって成ったものであること、三位一体、神の永遠の意図、意志の自由、人間の完全な墮落性、贖罪、再生、信仰による義認、死者のよみがえり、最後の審判、以上である。私はアメリカン・ボードの下で宣教事業を維持している諸教会が共通に抱いている

教義のいづれに關しても、一点の疑念も持たない。私の回心が真実のものであるという確信を証明するものは、キリストに対して日々高まっていく信頼と、真理に対して日々まし加わっていく共感である。牧師の義務については、人間の救いのために福音を宣べ伝えることであるというのが私の見解である。牧会に入りたいという私の欲求は、日本で今それが必要であるということ、その必要をみたすに当たって役立ちたいという、私自身の希望とに由来するのである。困難と試練に遭遇することはもとより覚悟の上である。しかしキリストを信じることのみならず、キリストの御名の故に苦難を受けることもまた、すべて喜びであると考ええる。この仕事のために生命をささげることこそが、私の目的なのである。」

こうして新島は日本宣教師団の準会員に任職された。一八七四年五月十日にマサチューセッツ州レキシントンのE・G・ポーター牧師※の教会において、はじめての講壇からの説教を担当した。その時彼が選んだ聖句は、彼があれほど大切に思っていた一節（ヨハネ伝3・16）であった。七月二日に彼はアンドーヴァー神学校を選科生として卒業した。彼は二十一名の卒業生の一人であり、卒業式において演説した九人のうちの一人でもあった。日本語で行われたその演説の題は「日本におけるキリストの宣教」だった。一八七四年の夏は帰りの旅の準備と、多くの友人に別れを告げるための訪問にいやされた。八月の後半を彼はメイン州バー・ハーバーにおけるハーディー夫妻の夏の家で、夫妻とともにすごした。それからボストンに帰って、九月二十四日の木曜日に、市内のマウント・ヴァノン教会で按手礼を受けたのである。※※※※近辺の二十の主要な教会からの代表が招かれた。教会外として出席したのはアーモストのJ・H・シーリー教授、アメリカン・ボードのアンダソン博士※※※※とトリート博士とクラーク博士、アンドーヴァーのJ・L・テイラー博士、ボストンのG・W・ブラグデン博士※※※※であった。按手礼の記念説教は「そして、わたし

がこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであらう」〔ヨハネ伝12・32〕という聖句にもとづいて、シリー博士が行った。歓迎の握手をしたのはヒンズデイルのイーフレイム・フリント牧師、そして激励の辞を述べたのはボードの運営委員会のA・C・トンプソン牧師^{*}であった。

十月九日の金曜日に、アメリカン・ボードの第六十五回年次大会がヴァーモント州ラットランドで開かれた。新島はこの集會に出席した。そして夕方の集りにおいて、彼と同様に、これから海外の任地に赴こうとしていた人々とともに、彼もまた別れの言葉を述べるように求められた。彼の短い演説の主題は日本にキリスト教の大学を設立することについてのまじめなアピールであつて、彼は長い間そのことを考えてきたのであつた。この計画について彼はクラーク総主事とハーディー氏に相談したのであつたが、あまり激励は与えられなかつた。彼が永眠する直前のこと、その時には彼が長年にわたつてはぐくんできた計画がすでに現実のものとなつていたのであつたが、彼はその計画は當時としては白日夢にすぎなかつた、と書いた。^{**}宗教のしもべとしての教育の重要さ、そして、いろんな科目がキリスト教の影響の下で追求されるような教育機関から、ボードが特別な伝道事業において引き出す利点は、完全に理解されたのだった。それでもなお、教育そのものはボードの第一義的な目的ではなかつたので、ボードの役職の人々は、それがいかに称賛に値するものであつても、特別な目的のためのアピールを激励する気になつたのである。時あたかもボードの正規の事業を拡大するために一層多くの献金をどうしても必要としていた時期であつた。しかしこの早い段階においてこのような計画を新島が考えていたということ、そして十五年間にわたる困難と反対を乗り切つて実現に至らせたことは、彼の識見の広さと目的意識の堅固さを証明するものである。新島は眞の福音伝道者であつた。どのような環境にあつても、人生の旅路においてどこで宿ろうとも、彼は主の証しをした。彼の生涯は個人と

しての努力の記録である。けれども彼は義務や機会について偏狭な見解をもたず、また単一の努力目標の線に固執することもなかった。彼は同胞の将来の必要性のことを深く考えていたのである。彼は同胞たちが知識を渴望していることを知っていた。彼は教育が潮のように前進することを予見し、それがまたキリスト教信仰のたねを胚胎することを念願したのである。彼自身は、その聡明さと愛国心の故に祖国の将来を牛耳るよう運命づけられた階級に属していた。彼はこの階級の心を捉えたいと思った。これを達成するためにはどうしても教育のある日本人による牧会が必要であることを予見したのであった。十年後に運営委員会あてに彼が書いた手紙の中に、彼は次のように述べている*。

「最近の革命によって封建制度は廃止されたのではあるが、今なおあの（サムライ）階級の人々が国家を指導している。彼らの若い世代もまた、父祖から得た武士道精神を身に帯びて、当分の間はわれわれの指導者たり続けるであろう。

それは奇妙な階級である。多分アジア大陸全体を見渡しても、そのようなものはどこにもみつからないであろう。それはインドの排他的なブラーミン階級のようにでもない。アラビアの武装強盗団のようにでもない。私自身の観察によれば、彼らは日本で見出されうる最も気位の高い、野心的な種族である。彼らは自分たちの仕える封建君主に対し、死を賭してまで忠実であるよう訓練されてきた。愛国心は世代から世代へとうけつがれてきた。彼らにとっては名誉がすべてであり、生命も財産もものの数ではない。自殺の一形式であるハラキリはこの階級でのみ行われてきたが、それは武士たるものは他人によって殺されることを恥と考えるからである。実に武士こそは東洋の騎士であり、日本の精髓であり、国の花である。彼らの階級は従属的なものに見えるが、実際はどうかというと、過去六世紀間、名目上の主権者の屏風の陰からこの国を支配してきたのは彼らなのである。最近の革命の突破口を開いたのも実に彼

らだった。將軍の專制的な政府を打ち破り、長らく隔離されてきた天皇御一人に統治の大権を返したのは彼らであった。古い、すり切れたアジア的制度を投げすて、強力なたちのヨーロッパ文明を採用したのも彼らだった。学校をスタートさせ、新聞を発行し、個人の諸權利を声高く主張し、今や自由な憲法を布くために道を開きつつあるのも彼らである。彼らはまた同胞に対して人間の救いの喜ばしいおとずれをもたらすよう運命付けられているのだということ、ここで確言できることを、私は仕合わせに思う。彼らは他のいかなる階級のものよりも、はるかによい教育を受けている。彼らはもはや無知でもなければ、口のきけない偶像を崇拜している者でもない。近代の学問こそが彼らの知性を磨くための砥石である。ヨーロッパの政治は彼らのがつがつとした食欲のための、汁気の多いビフテキにすぎない。もし彼らに彼ら自身の道を辿らせたならば、将来の日本の運命はどうなるだろうか？　もし彼らが倒れれば、日本もまたともに倒れるであろう。もし彼らが立ち上がるならば、彼らは確かに国全体を立ち上がらせるであろう。もし人民の中から彼らだけを取り去ってしまえば、あとに残るのは旧態依然としたよぼよぼばかりであろう。国が栄えるかみじめになるかは、この特定の階級の支軸のうえにかかっている。まさに今こそ、武士たちに手をのばし、彼らを救い、彼らをキリストへと勝ち取るべき好機だと私は信じる。もし彼らが福音の網から逃げ出していくにまかせておくなら、彼らは必ず悪魔の手につかまるであろう。悪魔は光の子らよりもはるかに利口であることを思い出そうではないか。もし今彼らの心に達することができなければ、福音伝道の過程は骨の折れる仕事になるであろう。しかし、もし彼らの心をつかむならば、必ずや日出ずる国の全体をつかむことになるのである。他のどの階級よりもはるかによい教育を受けているだけに、彼らはキリスト教の真理に一層敏感である。封建領主に忠義をつくすようにきびしく鍛えられてきただけに、彼らは領主中の大領主たる神に対して一層忠節をつくすことであろう。ただしその主

をはっきりと知らせてやりさえすれば、のことである。中間の階級であるが故に、彼らは自分たちより高い階級、低い階級の両方の心に達することができる。武士階級こそは、その中にタルソのサウロをみつけることのできる階級である。然り、武士階級こそは、先頭に立って十字架を負う者たちとして、彼らの同胞を永遠の都に導き入れるために、神がはじめから選んでおかれた人々なのであらう。

当然のことながら疑問が生じてこよう。それではこの階級の心にどうやって到達するのか？ この質問に対する私の答はまことに簡単である。われらに能う限り最高かつ最良の、真正銘のキリスト教学校を与えよ。これこそは武士たちを満足させ、彼らの心を勝ち取る唯一の道である。日本における私の十年間の経験が確言させる。最高のキリスト教教育こそが、国を救う力となるのである。」

新島はあのお別れの集りの前日の夕方にハーディー氏を訪ね、この計画をボードの集りに出したものかどうかを相談した。この出来事に関して新島は一八八九年に書いた手紙の中で、次のように述べている。「ハーディー氏はそんなことをしても余り成功しないだろうという意見でした。しかしながら、私はむしろ我意を通してみたい、と主張しました。何故ならこれこそは、そのようなクリスチャンの大集会にそうした問題を持ち出す最後のチャンスだったからです。するとハーディー氏はほほえみながら、まことにやさしい、慈父のような態度でこう言いました。『ジョゼフ、わたしはどうもおぼつかないと思うのだが、まあやってみるか。』この同意をうけるとすぐに私は宿舎に帰り、演説の原稿を作ろうとしました。ところが心臓が高鳴り、十分な準備はとてできません。私は神に祈りました。私はそのとき神と格闘したあわれなヤコブのような状態であったのです。翌日いよいよ演壇に立ちますと、覚えた筈の言葉がほとんど思い出せないのです。私には演説の経験はないも同然でしたから。しかし一分間たつと私は自分をと

り戻しました。かくかく震えていた膝もしゃんとしてきました。新しい考えが心の中にひらめき、私は用意した言葉とは全くちがったことをしゃべりました。演説は全部で十五分間も続かなかったと思います。話していくうちに日本の同胞に対する強烈な感情に動かされていきました。私は結局、同胞のために語る代わりに、さめざめと涙を流したのです。しかしながら、私の貧しい演説を終る前に、日本でキリスト教主義の大学をたてるために、その場でただちに約五千ドルの寄付の約束が与えられたのでありました。」

新島の演説の記録は残っていない。^{*}このような動議はあらかじめ相談されたわけではなく、予期しないことだった。だからそれに続いて起こった出来事はボードの正式議事外のことであり、従って主事の議事録にもならなかった。しかし出席者のすべてはこの演説者の強烈なまじめさを感じとったのであり、今なお、忘れることのできない情景であったといい伝えている。感情のおもむくままに、自分の訴えが応答を得るまでは着席を拒否すると述べ、お願いしたかねなしには日本に帰らない、それを頂戴するまで演壇に立たせて頂くと宣言したこの若い日本人は、聴衆の耳目を奪ったのである。ワシントンのピーター・パーカー博士^{***}が立ち上がって千ドルを申し込んだ。ヴァーモント州のペー^{***}ジ前知事とニュー・ヨークのウイリアム・E・ドッジ氏^{***}が同額を申し込んだ。新島が演壇からおりる前に、彼の白日夢は現実となっていたのである。

聖職叙任を受けた日本人第一号である新島は、十月の終わり頃ニュー・ヨークを立ち、サン・フランシスコ経由で、約十年間もるすにきてきた日本に向かった。

ワイオミング州グリーン・リヴァー、一八七四年十月二十五日

この淋しい山の頂上で安息日をすごそうとして、ここにとどまっているわけを説明しなくてはなりません。シカゴを出るとき、私は安息日をすごすことについて誤算をしてしまいました。土曜の夕方にはソールト・レイク・シティ^{*}に着けると思ったのです。ところがそうではありませんでした。そこで、安息日には旅をすべきでないと考えたのです。私はシャイアン^{**}からララミー^{***}でとまった方がよかったのかもしれませんが、けれども、時を失うことは最善の策ではないと考え、それで昨夜旅を続け、この朝食用の駅で下車したのでした。朝食後すぐに小さくてみすばらしい宿屋に部屋を取りました。かなりがさつな宿です。この土地の人々もがさつな労働者。駅の食堂で六人の中国人を見付けました。彼らと筆談しましたところ、大部分の者は気持のよい、丁重な人々でした。その一人が達筆の漢文で、どうしてこの場所にとまるのか、と聞きました。安息日をすごすためです、と答えました。その人にイエス・キリストを信じていますか、と問いますと、わたしはキリストに属する者です、との答。まことに快い返事でした。あなたのお仕事が終わったら、あなたやあなたの同国の方々としてばらくお話したいと申し入れました。ここには教会はなく、あるのは沢山の飲み屋です。この淋しい山中の町で、いったいどんな安息日を守ればよいのかわかりません。ここの荒々しい入植者たちにうまく接触できないのであれば、この中国人たちと宗教について語ってみたいと思います。汽車の中で二、三人の旅行者に、この荒涼たる地域に下車する理由を話してみましたけれど、ここらは安全でなく、気持のよい所でもないという理由で、誰一人として私を激励する者はありませんでした。ミシシッピー川より西では安息日というものは存在しない、と述べた人々もいました。そういう連中に耳を貸すつもりは一切ありません。大きなお世話というものです。安息日を守るのに誰の世話にもなるつもりはありません。

ハーディー氏あて

サン・フランシスコ、一八七四年十月二十九日

宣教師の一隊（五人が日本へ、二人が中国に向かうのです）^{*}のいるこの町に到着したところです。先日の安息日をワイオミング州グリーン・リヴァーで静かにすごしました。あれは不思議な場所です。私は中国人たちを訪ね、彼らと楽しく語りました。十六人のうち二人がキリスト教の真理を何とか知っていました。残りの者は英語が話せず、下品で無知で墮落しています。彼らは家に神をまつています。一緒になって豚のような暮しをしています。相当さうなところですよ。入植者の半数以上は若い未婚の男たち。何とかしてこの人々に接触をはかろうとしましたが、ほとんど不可能だとわかりました。きっと邪惡な連中なのです。月曜の夕方ソールト・レイク・シティに着きましたので、ブリガム・ヤング^{**}に会いしようとしたところ、病氣とのことで会うことができませんでした。ヤングの秘書に会い、彼を通して、モルモン教徒のうちで最も有能な説教家、文筆家であり、十二使徒の一人でもあるオーソン・プラット^{***}に紹介されました。プラットは非常に紳士的で、モルモン教についての私のすべての質問に非常に辛抱強く答えてくれました。彼は彼が宣べ伝えている福音を私が宣べ伝えるように希望しました。しかし私は、お気持は有難いが自分は新約聖書の中に見出す福音を宣べ伝えなくてはならないのであって、他の何物も宣べ伝えるつもりはない、と答えました。この答に立腹した様子もなく、彼は大会堂、市役所、モルモン大学等^{****}といった、見どころを參觀することに喜んで手を貸してくれました。

この旅は非常に楽しいものでした。特にグリーン・リヴァー以西の景色が面白かったです。私のかばんは地質学の標本でほとんどいっぱいです。山頂の雪は約八インチもありましたが、それから二、三時間もするうちに気候は温

和となり、自然はまったく快適で魅惑的な様相を呈してきました。オークランドでミッシンの友人たちに話すよう招かれています。

〔一八七四年〕十月三十日

お二人様がニュー・ヘイヴンまで見送りに来て下さいましたおかげで、予期していたほどのつらさを味わわないでボストンを去ることができました。どうやら、私がお宅を去るにあたって何を感じていたか、びたりご存知だったのですね。お二人で来て下さいましたこと、そして二度もお別れを告げる機会を与えて頂きましたことは、この上なく有難いことでした。お別れにさいして頂いたプレゼントについても心から御礼申し上げます。今では父は借金をしている身ですが、これでもって父の借金が返せるだけでなく、両親と姉たちのために何かを買ってやることができます。私の感じています感謝の念はどうも言葉で言いつくせませんが、おわかり頂けることと信じております。

ハーディー夫人あて

北緯三十度六分、東経百五十八度二十五分、一八七四年十一月二十一日

日本に到着する前にアメリカ行きの郵便船に出会うことを期待しながら、この広大な大洋をどれくらい進んできたかをお知らせするためにこの手紙をしたためています。先月の三十一日にコロラド号^{***}に乗船。船がサン・フランシスコを出るちょうど一時間前に旅客係がハーディー様から父あてのお手紙を届けてくれました。ゴールデン・ゲイト海峡^{***}を出たときはすばらしくよい天気で、海はとても静かでした。そよ風がおだやかに気持よく吹くので、夕方かなり

遅くまでオーバーなしに甲板上にすることができました。出発後二、三日すると、船客たちは性分の合った友を求め始めました。彼らの道徳的、宗教的性格を見つける、いやむしろそれを読み取るためには、安息日こそがいちばんいい時だと思いました。安息日と週日における観察をつき合わせることによって、この人生に対して彼らが何をおもな目的と考えているかを、おおよそつかむことができます。一等船室に四十五人、三等船室に二百三十人います。一等船客は十一の異った国籍の人々から成っています。すなわちアメリカ人、イギリス人、ベルギー人、フランス人、オーストリア人、ドイツ人、ポーランド人、イタリア人、アイルランド人、中国人、日本人です。三等船客の大部分は中国人です。中国人の中にはアヘンをのむ人が相当多数いて、サン・フランシスコを出て以来すでに六人がなくなりました。恐るべきことではありませんか。アヘンは中国人にとって大きな呪いです。あの国にはじめてアヘンをもたらししたのはわざわいです。アヘン吸飲者たちはどこでも飲むことを許されていませんから、やむをえず大きな箱の中でのんでいます。その箱はかつて氷を貯えておくために使われたもので、内部にはブリキの内張りがしてあります。死んだ人々はたいてい老人でした。サン・フランシスコ出港以来その箱から出てこなかった男を見ました。彼は昼も夜もその中で横になっており、あの猛毒以外はほとんど何も食べなかったのです。船客の中で宣教師である友人以外には特別な友達はありませんでした。例外はドイツ人医師で、この人はエドの国立医学校で教授になる予定の人であり、この人に私は毎日日本語を教えています。宣教師たちも船酔いのために日本語の勉強を中止せざるをえませんでした。ここ何日間か、海は非常に荒れました。立派な船乗りをもって自任していた私でさえ、ここ一週間はひっきりなしの上下のゆれのために船酔いにかかっていました。私は仏教に関するアイテルの講義[※]その他何冊かを読み終り、日本語で一つ説教を書くつもりをしています。船客たちの間にさまざまなグループが形成されてきたことに気付

きました。タバコを吸う人は吸う人同士、本当に気の合った友達らしくしていますし、酒を飲む人々も同様です。ドイツ人は毎晩ビール・パーティーを催し、同様にイギリス人はラム・パーティーをやっています。どこに行くにもこうも傘に寄りかかっている一人の紳士がいます。彼は死ぬまでに世界中をまわるつもりなのです。これが彼の大望です。彼は去年エジプト、パレスチナ、オーストリア、スイスにいたのですが、こういう国々について大した考え方はもっていません。カイロとアレキサンドリア^{*}のことを質問しましたところ、「ああ、とても大きな町ですよ」とのこと。カリフォルニアの婦人で肺結核の傾向があるため、小さな（しかしなかなか手に負えない）娘をつれて、これから中国と日本に行こうとしている人がいますが、彼女はともみえっぱり。彼女はデッキの上をまるで女王のように歩き、娘も同様やんごとなき雰囲気についてまわります。一人のよく肥えた英国紳士はいつもタバコを吸っているようです。彼は自分のパイプに完全に満足しているのです。船には二人の若い未婚の女性がいます。彼女らはためらうことなく誰とでも話します。数多くの若者たち、特に何人かのフランス人が彼女らのお世話をしたくてうずうずしています。私は時折この快樂追求者たちの群の側に坐ることがありますが、本当に驚いたことには、この人のしゃべっていることはナンセンスであり、全然笑う必要のないことで笑っているのです。船客の中には二人だけ非常な勉強家があります。一人は私の生徒であるドイツ人医師、もう一人は英国紳士です。そのドイツ人は日に七時間勉強し、イギリス人は昼も夜も本を読んでいます。前に述べましたように、船客たちと一緒にいても楽しくないの、あまり友人を作りませんでした。彼らのおもな楽しみはただ食べることと飲むことと、あらゆる官能の喜びにひたることです。自分たちの本性がそれをするのだ、といった言い訳をしています。このようにうつつを抜かした状態で、どうやって自分たちを動物と区別できるのでしょうか。

先日二人のドイツ人と本当に熱い議論をしました。はたして彼らのためによいことをしたのかどうかわかりませんが、とにかく二人を窮地に追いつめたのです。あとになって二人が告白していましたが、私の議論は霊と理想のがわから出たものであるのに対し、彼らのそれは人間一般大衆の間での観察から出たものである、というのです。彼らはまた、あなたの論旨は坊さんたちから学んだものでしょう、と言いました。

海は一層ないできました。ひょっとしたら横浜で収穫感謝祭*が祝えるかもしれません。奥様にお別れを告げることは私にとって本当につらいことでした。今なお私は休暇の旅をしているという気がしていて、宣教の生活に今にも入ろうとしていることが完全には実感できません。私の目の前に、ゆき暮れた群衆を見ればきっとそれを実感することでしょう。私の過去の生活に対する深い反省のことはここでは省略いたします。私が現在感じていることを申し上げればきつと不思議に思われるでしょう。私にできる説明はただ、次のようなものです。

過去の経験からしますと、私は何か大きな仕事に直面した時にはいつも、冷静で、落ち着き、また、いくらか無頓着になるのが常でありました。しかし、今こうして帰国を前にして、なぜこのように冷静でいられるのか、わからないのです。横浜に到着して父と顔を見合わせる時まで、そのことはわからないだろうと思います。父は私のために小牛をほふることはしないでしょうが、必ずや私を歓迎し、抱きしめ、接吻してくれることでしょう。私はただちに江戸に向かいます。そこから両親が現在住んでいる安中に向かいます。トリート博士からは父の許に少なくとも二週間は滞在してよろしいという許可を頂いております。私が選んだ流浪の国アメリカでのあらゆる経験を話すのに、また古い知り合いを訪問したり、彼らの訪問を受けたりして、さぞかし忙しい二週間になることでしょう。私たちの距離はますます開いていきますが、奥様に対する親愛の念はますます深まっています。奥様のことを思いますときにはい

つも、私は泣き叫ぶ子供のような気持です。先日奥様とご主人様の夢を見ました。夢のしるしを信じるものではありませんが、とても楽しい気持でした。夢の中で私は純粹に日本風にしつらえた私の日本のお二人様をお迎えしたのです。お二人様の快い微笑は真に迫るものがありました。ですから私は、これをもってお二人様が日本まで私を訪ねて下さるのだという、吉兆と見なします。どうか私の夢のことをお忘れなく。そしていつの日にか、お二人様ご自身をお迎えする喜びを味わわせて下さいますように。

新島が国を留守にしていた比較的短い期間のうちに日本で起きた変化は、諸国の歴史に例を見ないものであった。政治的には日本史は三つの時期に分けられよう。第一期は神話の時代に始まり、十二世紀に終わる。この時期の国の記録はとぎれることなく、神々の偉業を連綿として語り継ぐものであって、数え切れないほどの時代を経たのちに、紀元前六六〇年となって最初の人皇たる神武天皇が現れた。^{*}しかしながら、紀元七世紀に、歴史的事実に裏付けられた時代に入るには、神武天皇の即位したと考えられる年に千年間が加算されなくてはならない。この時期の中心的存在はミカドである。それは天から降下した絶対の至高者であって、全地とその全住民の最高の支配者であり、公家を通して統治した。公家は主としてミカドの次男以下の息子たちの子孫であるから、皇室とは同盟関係にあった。

十二世紀に始まって一八六八―六九年に至る第二期は日本史における封建時代であって、この期間には日本国の政治構造はもっと複雑な様相をおびてくる。ミカドは依然として神聖な支配者であり、あらゆる権威の源であり、理論的には国家元首のままであり、公家は名目的にその官位と威厳を保持していた。けれども実際には政治の権力は徐々に武家の有力者たちに奪われていき、一六〇三年には決定的に徳川家の手に移った。それ以後二百五十年以上にわたり、歴代の徳川家の当主たちは將軍という称号のもとに、メロヴィンガ王朝における宰相の^{**}ようにこの国を支配してきた。將軍はもとは数ある大名の一人にすぎなかった。大名は階級的には等しいが、禄高と権力においてはまちまちであった。この人々は武力でもってその土地を獲得し、その下に武士団が軍事的な階級を構成していた。一六〇三年

より以前に、こうした封建領主たちが天下を取るための闘争によって国は荒廃してしまっていた。けれども徳川家に権力が移ってからは平和の時代が始まり、それは一八六八―一八九九年の王制復古まで続いたのである。そういうわけで、この第二期には、名目上の元首として隔離されていた天皇、経済的におちぶれた公家およそ百五十家、それぞれの藩内では独立の権威を保持しながらも將軍の至上権に対しては何らかの儀礼を通して服従の意をあらわさなくてはならない幕藩体制に組込まれていた藩主たち二百六十八人、これらの藩主たちから禄を受け、藩主たちに仕えてきた武士たち約四十万人、そして最後に、国家の労働者階層ともいべき、社会的政治的な地位をもたない多数の一般人民がいたのである。この時期の終り頃には將軍の権力が衰え始めてくるのであるが、それは天皇が直接に政治の実権を握ろうと努力したためではなく、大名たちの方で將軍を警戒するようになり、各藩内の内部事情に將軍が干渉することから起こった苛立ちのためであった。南西部の雄藩、特に薩摩藩において、この感情は最も強烈になった。薩摩藩主は伝統的に徳川家の敵であったし、その武士たちは独立精神と武勇の気風で有名だった。南西部の不滿を抱いていた大名が將軍をミカドの臣下として彼らと同等の地位に引きおろしたいという欲求、もしくは、彼ら自身のうちの一人が自ら將軍となって將軍職を永続させようという欲求、どうやらこういうことが諸外国の干渉をひき起こすことなしに政治上の変化をもたらすことになったようである。

それはともかくとして、一八五八年に幕府は諸外国と条約関係を結んだが、これは朝廷の否認するところであり、伝統的な鎖国政策にもとるものだったので、みなぎりわたる不滿はさらにつのり、事態は危機的な状況にたち至った。ところでここに注目すべき事実がある。すなわち維新のたてまえ上の目的は幕府を倒し、天皇に最高の権限をお返しすることにより、日本国が夷敵に対して統一戦線を張ることができるようになり、夷敵を自国の領域から追い出

せるようになることであつたのに、維新が実現するが早い、その指導者たちは西洋文明を採用し、日本が国際社会の仲間に入れるように歩み始めたことである。維新の指導者たちは外国人に対する憎しみの感情を利用して幕府を打ちこわし、中央集権化した政府を打ち建てた。ところで彼らを支持した者たちの大多数が意図したことは、外国人を放逐して昔ながらの鎖国の状態にかえることであつたのに、維新運動の真の支配者たちは、ヨーロッパ文明の基礎の上に国家の政策を再構築するつもりになつていた。鹿児島と下関の砲撃からして、力づくで西洋を排除しようと試みることがいかに無益であるかを支配者たちは確信していたのである。さらに指導者たちの多くは、西洋の歴史、哲学、科学を学んでおり、国家の利益になると彼らが信じたものは、どのような源から出たものであれ、それを自分のものにしないではいられないという、日本人固有の積極性を備えていた。幕府の崩壊後彼らは、不平家たちがもともとてていた計画の中で、外国との通商をやめるといふ部分を捨て去ったばかりか、日本をヨーロッパ化することを公然と唱えるようにさえなつたのである。恐るべき困難があつたにもかかわらず、また反逆や暗殺をためらわない反対派がいたにもかかわらず、彼らはこの政策からそれることを決してしなかつた。中央集権制に対する主要な障害は封建制度そのものにあつた。そこで第一の必要條件は政治制度の中での独立の単位としての門閥が消えることと、大名が伝統的に所有してきた領地と諸特権が廃止されることだつた。一八六九年に薩摩、長州、土佐、肥前の大名たちは天皇に上奏文を提出し、その中で土地は天皇の所有するところであることを認め、彼らの財産と土地の権利を公的に返上したのであつた。力において劣る諸藩が彼らの例にならい、公家や大名の称号は廃止され、同一の法律が国内で施行されるための手続きが取られた。一つ、また一つと、矢継ぎ早に封建制度の支柱が倒されていった。国内は府県に分割され、中央集権化された官僚組織が地方の諸藩の統治形態に取って代つた。家柄や居住地にかわりなしに

役人が任命された。もはや下層階級の人々は社会的に無力ではなくなった。徴兵制度によって国軍を組織することを規定した法律ができて、武人階級としてのサムライは消滅した。天皇は隔離されていた状態から姿をあらわし、都を京都から東京に移し、審議機関と代表制を設置することをおごそかに約束した。

一八七四年十一月二十六日、新島は横浜に上陸した。^{*}東京・京都間の鉄道の建設が始まっており、横浜と首都の間では開通していた。^{**}国内の主要港の間を汽船が定期的に往復し、海岸の重要地点には灯台が設けられた。電信の制度が始まり、米国の制度をモデルとした郵便制度がエゾが島〔北海道〕を除いて全国にひろげられていた。造幣局が大阪に設置された。^{***}海軍は英国の指導のもとに再編成され、ヨーロッパのモデルにもとづく陸軍の建設も始まっていた。横須賀には海軍基地のドックや機械組立工場が作られ、東京には兵器製造所が建てられた。^{***}政府の役人はヨーロッパ風の服装を採用し、またヨーロッパの曆が導入された。日本の新聞はすでに世論形成のための一要因となっていたし、包括的な教育制度の基礎も置かれていた。

このような変革が実施された速度は驚くべきものであった。けれども西洋の諸制度をこうして全面的にとり入れたという事実、それ自体としては日本人の性格に合わないわけではなかった。日本人の外国人との接触の経験がかんばしいものでなかったということは事実である。イエズス会士たちは異端審問の精神をもたらし、オランダやポルトガルの商人たちは奴隷売買、新しい種類の病気、火薬、タバコを導入した。こうした外国人との初期の接触が商業的、利己的な利害に支配された攻撃的な政策のはじまりとなり、その結果は社会の平和を破壊におとしいることになった。この交流が外国人に対する根深い憎悪へと導き、それに続いて迫害が起こったということは、この時期の日本史を学ぶ者にとって驚くに当たらないことなのである。他方、日本人は常に、外国からよいものをすぐに採用する

積極性と、借用したものを彼ら独自の必要性に適應させることに天才を示してきた。芸術、宗教、文学にあっては、隣国からの影響が圧倒的であつて、日本の文明を調べてみると、中国やインドの文明から移植されてきた諸要素を、新しい土地の環境的諸条件が変化させてきたことを除くと、日本に固有と呼べるようなものはほとんど残らなくなるほどである。

新島が日本に帰ってきたのはちょうど、保守主義の諸要素が嵐をまきおこしつつある時期にあたり、それは三年後に薩摩の反乱となつて国内に爆発したのであつた。^{*} 事実、封建社会がこれほど急進的かつ急速に変化をなしとげようとすれば、新秩序の誕生に伴なう陣痛は避けられなかつた。人民の大多数はどのような急激な変化に対して心の備えができていなかったし、またリベラルな政治家たちの政策を支配している理由の真価がわかるには人民はあまりに無知であつた。大名のうちの何人かは、自分たちの始めた運動が、予見できない結果を含んでいたことを知つた。王政復古は今や中央集権化を意味するのであつて、地方的な威厳や權威は一切失われたのだということがわかつてきた。

服装の習慣、生活様式、社会的特権といった、過去によつてハクのつけられたものや、国家の偉大さに関連があるとされた一切のものが、過ぎ去りつつあつた。あらゆる階層から志願によつて兵を集めるということは、武士階級にとつては墮落そのものを意味した。武士たちは長い間軍事的、儀礼的な義務だけに慣れており、比較的のんびりと生活を送つていて、給料も安定しており、何かのもうけ仕事につくよう強要されることもなく、どうせそうしたもうけ仕事はいつも輕蔑していたからである。新政府の国内再建の政策は断固たるものではあつたが、それでも用心していく必要があつた。その程度はどのようなものだったかという点、王政復古後七年たつてもなお、薩摩藩は事実上「帝国中の帝国」の覬があり、そこにおいては国家の統一に抵抗するためになされうるあらゆることがなされ、また独立の

軍事組織が大規模に準備されていたほどであった。

政治上の不満がいきわたると、それにともなつてキリスト教に対する苛立ちが感じられるようになってきた。これについて政府は日和見的な政策を取っていた。日本の指導者たちのうちの開明派について言うならば、彼らが称賛する文明がキリスト教文明である、という事実に感銘をうけていることには疑問の余地はなかった。他方において彼らは、クリスチャンとなるよりはもっと強くなることの方に一層熱心であった。そして攘夷的な要素に対処するために、彼らは民衆の狂信的な宗教信仰を懐柔することを余儀なくされた。機関車が日本の谷間の静けさを破るようになってから相当の年月がたつてもなお、キリシタン邪宗門に対する禁札が大通りに立てられたままであつた。^{*}しかしながら、キリスト教に対する民衆の反感は遠い過去からひきついだ気分にすぎず、それは確信というよりははるかに感情の問題であつた。国家宗教である神道は積極的な力となる要素を全くもたず、抵抗する力さえほとんどないという有様だつた。神道には教義も道徳上の規律も聖典もなく、それは宗教というよりはむしろ自然と祖先に対する漠然とした崇拜の念にすぎない。仏教が中国からもたらされた時にも神道は何ら本格的な抵抗をしなかつた。生活や行動様式に対する影響の点からすると、仏教や儒教の影響力にくらべて神道のそれは影のようなものにすぎなかつたといえる。

一七〇〇年に純粹な神道主義が文学的な復活をとげた。この運動はその性質において純粹に愛国的かつ政治的なものであり、仏教、儒教をはじめとする一切の外国からの影響力を非難する点で、民衆の心の中に、幕府を倒して、封建制の時代よりも以前にあつた黄金時代に帰りたいという欲求をもりたてることになった。それ故、王制復古にさいして排仏毀釈^{はいぶつきしやく}が起こり、国家宗教としての神道の樹立が行なわれたことは、長い間進行してきた原因の当然の歸結だ

ったのである。けれどもこのことが成就してしまうと、宗教としての神道そのものは事実上、その政治上の使命をも終わってしまった。しかしながら、キリスト教に対する仏教の反抗ははるかに活気に満ちていた。仏教は六世紀に中国からもたらされたもので、人民の宗教的性格に対して、神道が欠いていたすべてを与えたのだった——動機、因果、目的といった思想、深淵な哲学、道徳上の規律、荘厳な儀式などを。社会生活の中で人間関係の行動を導くものとして儒教が提供した実際的な規則は、封建社会の中にびったりと定着していた。仏教は儒教と協力しつつ、神道の神々をも如才なく自己の神々の中に加えながら、徐々に教育の基礎を形成し、国の政治的構造をも作り直していた。もしこの積極的な信仰の抵抗が期待していたほどには頑強でなかったとすれば、それは日本人の心の、すぐれて実際的な性格によるのである。日本人の心は思弁的な探求にはあまり関心がなく、彼らの実際的な関わりをはなれた問題には興味を示さない。仏教哲学は日本人の心に何ら深い印象を残さず、また国民全体の共感をかきたてることができなかった。だからキリスト教が直面したのは人民による反対運動というよりは、むしろ僧侶による反対運動なのであった。

横浜に到着したときの新島の最初の願いは、当然のことながら、年老いた両親を訪ねることだった。両親に別れてはや十一年にもなろうとしていたし、彼らは東京から城下町の安中に移っていた。そこで彼はただちに人力車で出発した。人力車というのは人が引っぱるようになっていて軽二輪車のことで、彼の留守中に導入された乗物だった。

ハーディー夫妻あて

日本、安中、一八七四年十二月二十二日

横浜に無事到着したことはすでにお知らせしました。横浜にはひと晩と半日だけ滞在し、「十一月」二十七日には東京に行きました。その日の午後東京を出発して故郷へ向かい、二十八日の深夜にこちらに着きました。食事時以外は少しも休まずに二十時間人力車（人間の引く車です）の旅をしました。旅行用に備ったのは三人で、一人が私をのせ、二人は荷物を引きました。彼らは二十時間に五度食事をしました。食事ごとに約一時間使いました。十五時間で六十マイル走ったわけですから、一時間四マイルの速度です。横浜に到着した時私はそこに三日間滞在するつもりでした。しかしいったん陸地——私の愛する祖国——を足でふみしめたとき、とても三日も待つわけにはいけなくなりました。そういうわけで、故郷めざして急いだのです。安中には真夜中に着きました。両親の眠りを妨げたくありませんでしたので、この町の旅館に一泊しました。翌朝私は父の許に使いをやりました。その上でわが家に帰ったのです。年とった両親、姉たち、近所の人々、古い友人たちから歓迎を受けました。父は三日前からリューマチのために動くことができませんでした。けれども私が無事に到着したことを聞くと、立ち上がり、父親らしいやさしさで私を迎えてくれました。私が挨拶しますと、父は言葉もなくへたりこんでしまいました。見れば涙が床の上に流れおちています。古い友人たちがその家に集まってきて、アメリカでの私の経験をすっかり話してくれ、とせがみました。帰郷以来、訪問者はこの町からだけでなく、ここから七、八マイルの範囲内の近隣の町村からもやってきます。私はずっとひっぱりだこでした。彼らは私の名前を聞いて、せめて数分間でも私に会ってみたいと思ってやってくるのです。彼らは羊飼いのいない羊の群れのようにです。彼らに何らかの霊の食物を与えずに帰らせることはとてもできません。帰郷後すぐにあなたのお手紙を父に渡しましたが、長い間それを父に翻訳して聞かすことができませんでした。というのは、それを読もうとすると、お別れを告げた最後の場面を思い出さずにはいられなくなり、そのことを思うと

とても自由に話すことができなくなったからです。ようやく先日になって両親と姉たちに集ってもらい、お手紙を彼らに訳してきかせることに成功しました。お手紙のなかばにも達しないうちに、私に対するお二人様の、親にも勝るご親切に感じ入って、両親も姉たちもみな泣き始める始末でした。父は、ハーディー様は私たちの救い主だ、神様だ、と言いました。そこで私は父にむかって言いました。アメリカの恩人を神様にしてはいけません、お父さん。ハーディーさんの親切に感謝なさるのであれば、あなたもあの神、唯一の神、宇宙の創造者で人類の救い主である神、そして私たちのアメリカの友人の信じている神をおがまなくてはなりません。あの恩人たちがさすらいの異邦人に対してさえあれほどやさしく親切であるのは、真の神を礼拝する人々だからであり、つましくキリストに従う人々だからであります。ハーディーさんが悲惨な状況から私を救い出し、必要な教育を与えて下さったのは、日本の迷っている人々に対し、救いのおとずれをもたらす教師に私になるようにとの願いからでした。ハーディーさんは同胞たるアメリカ人を愛するのと同じくらいに、日本人を愛していられしやるのです。私はこのように述べたのです。その時以来父は日本の神々と祖先を礼拝することをやめてしまいました。父の了承を得た上で私は神棚から紙や木や陶器やしんちゅうで作った神々を取りおろし、それらを焼き捨てました。ここに同封するのは母が火中に投じた紙製の神の見本です。今やこの家には神々も偶像もありません。今後家族は真の神を礼拝する者になるであろうと信じています。ここ十年間、私たちが命をながらえさせて頂き、しかも、この世を去る前に再会させて頂けたということは、何という有難いことでしょうか。私が救い主にさらに近付いていけるように、そして主の大義のために完全に献身できるように、どうか私のために祈って下さい。

私の友人たち以外にも、ここ三週間におけるこの地での私の貧しい働きは、すばらしく恵まれたものでありまし

た。その報告を申し上げればきつと私の成功に驚かれることと存じます。今月二日に、八人の友人と一緒に、最近鉄の鉱脈の見つかった町へ行きました。^{*} 私たちは鉱山の近くの宿に泊りました。翌朝非常に早く起き、無駄話を始めました。そこで私は型破りの説教を開始しました。聴衆の中に一人みじめな酔っぱらいがいました。私が説教をしている間、その男はとても注意深く耳を傾け、全く静かにしておりました。その時以来その男は自分の生き方をすっかり改め始めたのです。先日にも彼は私を訪ねてきて、言いますには、お酒を止めてからというものは朝は早起きができるし、以前よりもずっとよく働くことができるとのこと。もう一人、生きざまを改めた人がいるそうです。それに、非常に大勢が真剣にそのことを考えているということです。数度にわたり学校で説教しましたし、次々に家庭をまわって小人数の集会でも話しました。先の安息日の一週間前には仏教のお寺で相当の人数を前にして説教を致しました。^{**} この地域の僧侶全部がやってきて、この新しい宗教の教えに耳を傾けました。この集まりにはまた、近くの町で一万五千人の人口を有する高崎から上級役人の全員が聞きに来ました。おとといは隣村の役人が私を招いてくれ、一夜を彼と共にすごしました。夕食がすむと彼は家族全員を居間に集め、イエス・キリストについてきかせてほしいといいました。八時に話し始め、その晩十時半まで話し続けました。この町の人三十人とよその人二、三人は、キリスト教の書物を買うために金を集めました。彼らはキリスト教の真理に餓えかわいているのです。この地にもうしばらく滞在できる許可を頂くために、一週間前にD・C・グリーン先生に手紙を書きました。しかし先生は次の安息日には大阪に行くように私にすすめています。ここではもう福音のためにすっかり備えができています。ここでもし二、三か月引き続いて働くならば、上に述べた人々の大多数がキリストに従うものとなることは疑いありません。この餓えた群を残して出発するのはまことにつらいことです。この地域は外国の悪い影響から完全に免れています。ですから

ら、ここは神戸や大阪以上に、クリスチャンの共同体を建設するのに望ましい場所であるかもしれません。

新島の父からハーディー夫妻あて

安中、一八七四年十二月二十四日

謹啓、十月二十日付のお手紙はせがれを通して拝受しました。ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

せがれが頼る者もない放浪者として貴国に赴きました節には、苦境に沈まぬようお救い下さり、あたかもわが子同様に遇し、必要なものの一切を与えて下さいました。神の知識を身につけたせがれを、お手紙をそえてお返し下さいましたことについては、いくら感謝しても十分ではありません。長い離別のちにせがれに会いました時、心は喜びに満たされて、ほとんど物も言えぬ有様でありました。「家系の断絶を防ぐために日本の社会で広く行われている慣習に従って、新島の出国後、彼の安全のしらせが届かない前に、父は相続人かつ未来の戸主として、その地方の若者を養子に迎えていた^{*}」せがれは私の息子ではありますが、私はもはや彼を息子と呼ばず、神から送られた人のように扱いたいと存じます。私は日々彼の教えを聴聞し、家族は真の神を礼拝し始めたところでもあります。

せがれと共に、また私たちと共にどうか喜んで頂きたいことは、まっ暗闇の中に暮してきたこの地の人々が今や眠りからさめ、彼らの辿るべき真の道に対して目を開いたということです。福音の真理によって輝かしい時がやがて来ることを期待し、信じております。もっと多くのことを申し上げたく存じますが、筆紙がつきようとしています。この短い手紙がお手紙に対するご返事となり、せがれに対してお示し下さいましたご親切に対する心からの感謝を表現するものであれかしと願う次第であります。

どうかご健康に氣をつけて下さい。家族一同心をこめてよろしくと申しております。

頓首百拝

新島民治

これは直訳、意識をこきまぜた翻訳です。まがりくねった東洋の文章をずばり卒直なアメリカの考え方に訳すことは至難のわざだと思いました。私から何も言い出さないのに父はこの手紙をしたためたのです。私はちょうどよい時に帰りました。というのは、父はほんとうに貧しいのです。彼には今特定の収入はありません。彼の老屋を修理させるために、頂きましたおかねに、私からの若干のかねをそえて、父に渡しました。神戸へ両親を連れて行きたいものと思っていたのですが、こちらの生活費の方がうんと安くつくため、残していくことが最上だと思っています。

J・H・N・

一八六九年にピッツバーグで開催された年次大会で、アメリカン・ボードは日本宣教の開始をきめていた。ところで北の東京と、南の長崎とはすでに他の団体が着手していたので、アメリカン・ボードの最初の宣教師グリーンは国の中央部にある神戸を根拠地とした。すぐ彼に続いてO・H・ギューリックが来日し、大阪に落ち着いた。一八七三年にはボードの宣教師十八人が来ていた。^{***}一八七二年には聖書の日本語への翻訳が力強く開始された。だが新約聖書の方は一八八〇年までかかり、旧約聖書は一八八七年になってやっと完成した。^{***}しかしながら、教育のある階層は漢訳聖書のおかげで聖書に近付きやすかった。一八七二年に最初のプロテスタントの教会が横浜に設立された。^{*****}また新

島が帰国した時点で、神戸、大阪、東京に小さな教会ができていた。^{*}しかしながら開港地以外では何の伝道も行われていなかったのも、新島の安中訪問は内陸部に福音がもたらされた最初の例となった。まだ効力のあったキリンタン禁制の高札を公然と無視して新島が大胆に発言したため、県知事は東京に赴いて政府当局にうかがいを立てた。^{**}さいわい岩倉使節団との関係を通して新島は政府の要人たちによく知られていたもので、彼の活動は干渉を受けずにすんだ。このようにして彼は大手を振って一つの運動を創始した。その結果、日本における最も徹底したクリスチャンの地域の一つの基礎を置くことになった。その地域はわずかな年数のうちに数箇の自立教会をもつようになり、^{***}一八九〇年に帝国議会に選出されたその地方の「最初の」代議士たちの三分の二がキリスト者なのであった。新島は任地に赴くために、後ろがみを引かれる思いで安中を去った。しかし現実には彼は自覚していたよりもはるかに多くのことをなしてあげていたのだった。彼が大阪に向けて出発した時、彼は日本の中心部にキリスト教の精神を植えつけていたのである。

東京経由で赴く途中に、彼は数名の友人にキリスト教主義の学校設立のプランに関心を抱かせた。横浜では諸教派合同の集りで説教したが、彼は外国人の聴集に英語で語りかけた最初の日本人であった。同じ日の夕方には日本人の聴集に説教した。「わたしの同胞にむかってキリストの話をするのは大きな喜びです」と彼は書き記している。

彼は「一八七五年」一月二十二日に大阪に到着し、ゴードン宣教師の歓迎を受けた。宣教師団はすでにボードの外

^{**}切支丹禁制の高札の除去は前年（一八七三）の二月二十四日のことであるから、ハーディーのこの記述は正確でない。しかし、開港地以外でキリスト教を公然と布教できない現実が存在していたことは事実である。

国伝道總主事^{*}から、キリスト教伝道者の養成学校設立のために集められた金があるという通知を受けていた。けれども

キリスト教に対する反対の動きが強いため、そのような学校は宣教師たちには遠い将来のことのように思えた。外国人の有害な影響力から逃れるために、新島は外国人居留地の外で、大阪の地に学校を設立する計画を立てた。このことを目的として彼はただちに大阪〔府〕の知事^{*}に相談した。この人はキリスト教にきびしく反対する人で、少し以前

に長崎で生き残ってきた天主教徒たちの弾圧にかかわったことがあった。このクリスチャンたちは四千人を上まわる人数で、二百年間にわたり洗礼、或る形式の祈り、若干の宗教書を保ち続けてき、信仰を捨ててゐることを拒んだため

に、故郷の村々から強制的に場所を移されていた。彼らは六年間にわたり国内各所に追放者として分散させられ、一八七三年になって釈放となり、故郷に帰ることを許された。大阪で新島は日本人の商人から六千円寄付の約束を得ていた。けれども知事は、^{***}学校の設立は認めたものの、宣教師を教員に傭うことは許さなかった。大阪での努力の結果

に落胆した新島の目は聖なる都、京都に向いた。宣教師団は必要な権限が与えられることを条件として、学校が京都の地に置かれることに不承不承同意した。この時の新島は政府当局者の反対だけでなく、宣教師そのものの反対とも戦っていたのである。宣教師たちにとっては、政府のつけた条件、すなわち、日本の学校で教師となる場合には、福音の宣教師としての彼ら独自の働きは放棄しなければならぬ、という条件に服することは、むしろ不可能だった。

彼らの考え方もまた、当然のことながら、日本人伝道者を教育するための神学的な養成所の案に集中していた。ところが新島は、広い意味での大学課程以下のものでは、彼がその心を捉えたいと思つてゐる階層の心を捉えることができないと確信していた。一八七五年三月に彼は次のように書いている。「伝道者の」養成所に加えて大学をつくるのであれば、私たちの仕事がかう多くはくはないと確信します。私はこの前のボードの集まりでこのことをお願いし

ました。^{*}しかし宣教師団はあの資金を養成所だけに使いたがっています。私としては宣教師諸君がわが青年たちの知識に対する激しい欲求を満足させるためならどのような科目でも教えて下さる、ということであるなら、その案に喜んで賛成したいと思います。もし神学と聖書だけを教えるというのであれば、日本の最良の若者たちは私たちのところから逃げていくでしょう。彼らは近代科学をも欲しているのです。」

その上なお、京都に場所を得ようという新島の計画は、彼の同僚である宣教師の多くから時機尚早であり、荒唐無稽であると断ぜられた。一八六八年の東京遷都まで、この都市はほぼ十一世紀間にわたって天皇の住まうところであり、依然として国の文芸的、精神的な中心であった。本州の中心部の、山々に囲まれた肥沃な盆地に位置する京都は最良の茶を生産する地域の中心でもあり、長い年月にわたり絹と陶器の産業でぬきんできていた。天皇の住み給う土地であるため、多くの重要な政治事件の場面でもあった。ここには国の高官たちがその家臣たちとともに詰めていたし、天子様の居城としてのこの都は何世代にもわたり、巡礼者、快楽を追う人々、しろうとの古伝承、妖怪伝承研究家等の訪れるところであった。京都の物質的繁栄は政府の移転によって打撃を受けた。そこで、産業を活発に押し進め、消え去った宮廷の魅惑力の代替物を与えるために、寺院の境内や建物を会場として、国内各地の産物の博覧会が何度かにわたって開催された。^{**}こうした博覧会は封建制度によって押しつけられていた障壁を打ちこわすのに非常に役立った。なぜなら封建制度は不自然な抑制を加えて国の産業の発達を制御し、また、はるかにかけ離れた地域同士の産物を比較したり点検したりすることにはいつも干渉してきたからである。一八七二年の博覧会は御所で開かれたのであるが、これまで聖所であった御所を取りき、通商のための陳列の場に転換したということは、古い日本と新しい日本、過去と現在とを面と向かって出会わせることになった。天皇ご自身に対する崇敬の念は人民の思いの中にあ

つては根本的なものであり、人民にとって天皇は、文字通り神であった。天皇のお名前は口にすることができなかったし、そのお顔は最高の位階に属する人々でも見られないほどであった。天皇が旅をなさる時には死のような静寂があたりを支配し、大通りを行く人の姿もなく、家々は閉ざされた。天皇のお住まいでさえ神聖さを帯びるようになり、宮廷人が近付きうるのは宮中の公的な外郭の間だけであって、禁裏の内部は皇族方にしか見られないのであった。御所の門が民衆に対して開かれたということ、隔離されていた庭園が大衆の手にわたったということは、国家の最も神聖な場所の放棄を意味した。^{*}

外国人には京都を訪問する許可はめったに与えられなかった。ただしこうした博覧会ときには百日間にわたって「外国人にも」町が開かれたために、新島の計画が達成するよう道が備わったのである。

当時京都には京都府顧問の山本覚馬^{かくま}がいた。^{**}非常に教育のある人だったが、盲人で、麻痺した体のために歩くことができなかった。宣教師団の中の何人かは、京都が外国人にも開放された時に彼と知り合いになっていた。そして宣教師の一人「ゴードン」は『キリスト教の証拠』^{***}という書物の中国訳を彼に贈ったのだ。この書について彼は新島に次のように語った。「その本はわたしにとても有益だった。キリスト教についての多くの疑問を氷解してくれたし、長年わたしを苦しめてきた難問をも解いてくれたのだ。若い頃わたしは何とかして国家につくしたいと思い、そのために兵学の研究にうちこんだ。しかしこれだけではあまりに小さすぎると感じたので、人民のために正道が敷かれることを願って法学に関心を向けた。けれども長い間研究と観察を重ねた末、法律にも限界があることをさとした。法律は障壁を築くことはできても、それは心を入れかえることができないからだ。心の中の障壁がなくなるとすぐ、ひとは盗んだり、嘘をついたり、殺したりするようになる。法律は悪しき思いを防ぐことができぬ。しかしわた

しにも明け方の光がさしてきた。今やわたしには、以前には全くわからないでいた道が見える。これこそは長い間、無意識のうちにわたしが探し求めてきたものなのである。」^{*} こういうわけで、四月になって新島が京都の知事に彼の計画を披瀝した時には、山本がその案に暖い支持を与えたのであった。山本の影響力を通して、知事はのちほど、科学とキリスト教を教える学校の設立を認可するようになった。一八七五年六月に新島はデイヴィスと^{*}ともに再び京都を訪れ、山本から、将来の同志社の土地となる五エーカー半の地所を購入した。^{***}そこは大きな寺院の森と、からっぽになった天皇の宮殿の中間にあたる、市内の閑静で健康な地域であり、新島の目的には見事にかなうものだった。以前に薩摩藩邸のあったところである。府の認可は得られたものの、なお中央政府の認可と、さらにまだ、宣教師が学校で教え、市内に居住するための許可とが必要だった。

そこで八月に新島は自分で請願書を提出するために東京へ出向いた。田中はその時文部大輔になっていたが、新島はすでに田中あてに手紙を書き、彼の学校のために影響力を行使しようとの約束を得ていた。東京に着くとすぐ彼はただちに文部大輔と相談し、さらにまた古い知己の森と木戸にも会って、信教の自由という大義を訴えた。この仏教のとりでの中にわけ入ろうという彼の努力が成功したのは、彼がこうしたリベラルな政治家たちから得ていた尊敬と信頼のおかげであったといって差支えないであろう。会見を繰返しつつ不安に満ちた夏がすぎて、請願の趣旨はついに認可された。ただし民衆の偏見をかき立てるようなことは何一つしないこと、という注意がついていた。十月十九日にデイヴィスは家族連れで京都に入った。^{***}外国人は開港地以外では不動産を所有する権利がなかったので、新島と山本が結社し、名称として、一つの目的、または志を同じくするものの結社、を意味する「同志社」が採用された。^{*****}一八七五年十一月二十九日、八名の生徒から成る学校が新島の家での祈禱会をもって始まった。デイヴィスは書いて

いる。「あの朝新島が捧げたまじめな、やさしい、涙にみちた〔祈りの〕言葉を私は決して忘れることはできない。」
学校の正規の授業は教室用に借りた建物でなされた。^{***}十二月四日には生徒は十二名となり、その冬の間に四十名にふえていった。

これは試練と落胆の冬だった。その年は政治的に不穏な動きがあり、人々が不安に駆られた年であった。政府は極端な保守主義の精神をかきたてるよう意図されたものは、それが何であろうと、何としてでも避けたいと欲していた。佐賀の乱、土地の税として現物納のかわりに金納を要求する法律〔地租改正〕から生じた農民一揆、金禄公債から生じた不満、それに長州、秋月、熊本で発生した陰謀などは、息の絶えかけていた封建制度との来たるべき戦いを暗示するものであった。^{***}この戦いに対して政府は用意を進めていたが、急激に戦いに突入しないよう気を配っていた。薩摩藩の傲慢で強力な藩主だった島津三郎〔久光〕^{***}の部下たちは当時京都に集まっており、薩摩の指導者たちが長い間かかって準備してきた地雷は一触即発の状況であった。京都に住居を定めるとすぐ、新島とデイヴィスとはそれぞれの家で日曜日の礼拝を始め、参会者に聖書を教え聞かせた。二、三週間のうちに出席者数は六十名を数えるようになった。この礼拝は仏教の僧侶たちの反対をひき起こすことになり、僧侶たちは十一月に中央政府にあてて強い抗議文を送った。学校用に借りていた家屋の所有者は自分で使うから貸せなくなると伝えてきた。数度にわたり新島は知事から面会を拒否された。かつては友好的だった知事の態度は公然たる敵意に代わっていた。とうとう新島は呼び出されて、科目表の中に出てくる聖書^{***}は何の意味であるかを説明するように求められた。この反対運動の結果として田中は授業科目の中から聖書釈義を除外するよう要求してきた。この要求に応じたために興奮はやわらいだ。知事の許可により、キリスト教は修身という名で引続き教えられた。

またこの間ずっと新島は伝道の仕事にも忙しくたずさわってきた。一八七五年七月七日に彼はこう書いている。「この安息日には大阪で説教し、二人の興味深い人物を私たちの教会に受け入れました。その一人は伏見の近郊に住む有力な日本人医師で、この人は五十人の弟子に生理学、化学、解剖学等を教え、毎日聖書を勉強するために近所の人々を自宅に集めています*。」

この人は、よく集会に顔を出した人々とともに京都府の役人にただちに呼び出され、この種の集会はその後禁じられてしまった。この医師と役人との会話はデイヴィスがその当時記録したところによると、次の通りである。

「このデイヴィスという男は英学校を教えにきたのじゃないんか？」

「そうです」

「それじゃあいつは鹿の肉を売るライセンスをもらって犬の肉を売る男だな」

「さあ、はたして犬の肉でしようか？ 私もそうではないかと思っていたのですが、たべてみると鹿の肉とは段違いにおいしいことがわかりました。ひとつうかがいたいのですが、この宗教は神戸、大阪、また東京市内では二、三十か所で公然と教えることが許されているのですよ。この京都ではいったい、自分の家でさえ教えてはいけないことになっているのですか？ われわれはみんな同じ政府のもとにあるじゃありませんか。私には合点がいきませんが」

「うん、だがぼくはこの宗教がいいとか悪いとか言ってるんじゃない。あんたやあんたの友達がそれを自分の家で見聞きしちゃいかなと言っているのでもない。ただ平民、下層階級、あのわかりもしない連中を入れちゃいかなと言っているんだ。それは許すわけにいかん。日本には立派な宗教がたとあるんだからな。これ以上はもういらん。あんたのような学者には儒教というものがあるし、一般大衆には仏教がある」

「もうひとつおうかがいしますがね。もし孔子の教えが十分立派な教えであるとしたら、キリストよりも何百年か先の時代に孔子が長い生涯をかけて教え続けたこの教えが、中国と日本以外にはひろまらなかったのは何故でしょうか？ 同じく仏教が十分立派な教えであるとしたら、キリストよりも何百年も早くからブッダが始め、長い生涯をかけて彼が教えてきたこの道が、インド、中国、日本以外にひろまらなかったのはなぜでしょう？ としてもキリスト教が悪い宗教だとするのなら、その創始者は僅か三年間教えただけで、三十三歳のとき死刑になったというのに、その教えは全ヨーロッパとアメリカにひろがり、なおアフリカ、アジア、大洋州のすべての島々にまでひろまりつつあるのはいったいなぜでしょうか？」

「われわれはキリスト教がよいとか悪いとか言ってるんじゃないんだ。要するにもう、あんたの家での集会はやめること。帰ってよろしい」

当局のこういう措置のために、伏見での活動はとめられた。しかし二月には新島は、京都の東にあって相当重要な商業都市である大津から招かれ、そこでは副知事*^{*}の許しをえて、一連の日曜礼拝を始めた。

一八七五年の秋に新島は山本八重と婚約した。彼女は京都府顧問の妹で、市内の府立女学校の教師だった。*^{*}彼女はクリスチャンと婚約したということであちまち解雇された。アメリカの友人たちにこの婚約を報告して新島は次のように書いた。

「彼女は盲人である兄上にいくらか似ていて、自分の義務を確信しているときには何びとたりとも恐れませんが。彼女は同僚たちがそうすることをこわがっていた時には、学校のためにしばしば知事に会いに行きました。クリスチャンになってからは時々生徒たちにむかってキリスト教の真理について語り*^{*}ました。今では彼女は知事によって解雇さ

れていますが、それは生徒たちが彼女を通してキリスト教を学び、そのため親たちが生徒に学校をやめさせてしまいはしないかと知事が恐れたためです。結婚はいつになるのかわかりません。私たちのことは宣教師の兄弟たちにきめて頂きたいと思います。これまで私は旅館や個人の家に住んできましたが、最近、一軒の家を借りました。^{*}近くに、庭一つ隔ててもう一軒の小さな家がありますので、それを老いた両親のために借りようと思います。」

一八七六年一月二日に京都ではじめての洗礼式と聖餐式が守られた。^{**}新島の結婚は三日にデイヴィスの家で挙行された。一月六日の新島の手紙から引用する。

「式のあとでお菓子が配られ、誰もが仕合わせそうに見えました。それは京都での日本人クリスチャンのはじめての結婚式でした。この結婚については事前にお知らせすべきでありましたが、どうにもならないくらいに忙しかったのです。常に生みの親のように親切でやさしくして下さっていますお二人様、どうかこの遅延をお許し頂きとうございます。」

一八七六年三月にテイラー博士^{***}とラーネッド博士^{***}が京都に住み、教えることに関する認可が下りた。この認可を得ようとして新島は五か月間戦ってきたのである。だが聖書は依然として授業科目から外されていた。それで宣教師団の中から、そのような状況のもとで京都に永住することがはたして賢明であるかどうかを疑う者が出てきた。三月に大阪で開かれた特別会議で、京都残留が大きな不安の表明とともに決議された。六月にはまた校舎二棟の建設が決議

^{**}山本八重は一八七六年一月二日に宣教師ジエローム・ディーン・デイヴィスから洗礼を受けた。場所は京都御苑の中のデイヴィス宅、すなわち旧柳原邸であった。これはデイヴィスが『新島襄の生涯』（北垣訳六十五ページ）で証言している。

されたが、それもやはりしぶしぶの状況でしまった。^{*} というのは政府の認可が得られるかどうかが一層危ぶまれたからである。校舎が完成し、献堂式が挙げられた後でさえ、宣教師団は聖書教授の問題を押しつけてき、もしそれができないようなら、京都をあきらめて引揚げる気持に傾いていた。当局者が非友好的な態度であり、さらにまた聖書が締め出されているような学校は、自国の聖職者を教育するための養成所とはとても呼べないという事実を考えてみれば、この目的のためにすでに与えられていた金を実際に送金してもらうことを彼らがためらったことも、それにまた、成功するかどうかが多分にあやぶまれるような実験をアメリカン・ボードにさせるようにしむけることを宣教師団がためらったことも、全く無理からぬことであった。外国人の居留地以外のところに学校を置いたために、学校の所有権は日本人であらねばならず、このこともまた不満をひき起こした。けれども新島は最後には成功することを固く信じて、すでに入手した土地を保持することに満足していた。六月六日付のハーディー氏あての手紙に、次のように書いている。

「私たちは役人や僧侶に憎まれています、すでにここに真理の旗を打ち立てたのですから、もはや、退却することは、ありません。このキリストの学校は、もし神がこのあわれな家出の男をあなた方のご親切な手に届け給わなかったならば、決してここに存在しえなかったであろう、ということ、私は他の人には言いませんが、あなた方には申し上げます。この国で事を進めるための唯一の方法は、困難がどれほどであろうとも、勇気をもって進んでいくことです。」

その困難がどういうものであったかということは、京都で出版されたデイヴィス博士の著作『新島襄の生涯のスケッチ』から抜萃した次の文章から推測されよう。^{**}

「このような状況のために、日本人として事実上の校長である新島は、学校ともども引き続き批判の対象となっていた。新島はこうした問題を痛いほど感じていた。彼は宣教師たちを愛していたし、いつも宣教師団に忠実だった。

宣教師団の意向に反すると思われたことは極度に彼の心をいためた。一八七六年九月にはその試練があまりにも高まったため、京都地区の宣教師たちはこれらの誤解のいくつかをとこうとして、宣教師全部に手紙を送った。^{*}」

この手紙の中で京都の宣教師たちは次の点を指摘した。すなわち、新島氏と山本氏は学校の名義上の所有者なのであって、学校の管理はずっと「京都」在住の宣教師たちの手にすっかりまかされてきたこと。授業科目や教授法の詳細については何一つ山本氏と打合わせをしていないこと。新島氏は常に外国人の同僚のサジェスチョンに従ってきたし、完全に彼自身の裁量で使えるような、個人献金の支出に関してすら彼らに相談してきたこと。学校の組織や運営に関して宣教師たちはあたかも日本人の所有者が存在しないかのように自由に振舞ってきたこと。新島氏の努力はすべて宣教師たちの忠告と示唆に従おうとするものであったこと。

新島が京都でじかに接している同僚たちの間でどんなに高く評価されていたかということとは、この宣教師たちが一八七五年から七六年にかけて書いた手紙からの抜萃の中に看取されるのである。

「新島氏を日本におけるわれわれのミッションと、キリスト教宣教のために与えられたということは、新島氏の教育のために投資された金額を何倍にしてみてもあらわせないくらい貢献であったと感じています。われわれは新島氏の完全にキリスト的な精神に魅せられています。……その十分の一すらも私の心の中にあるかどうか、あやしいものです。……彼の生活、存在、目的のすべてが、日本国民の救いのために主に献げられていることには疑いの余地がありません。……あなたとアメリカン・ボードが新島氏と日本に対してつくされたことに対し、新島氏は心か

ら感謝しています。新島氏はアメリカン・ボードとわれわれのミッションの意志がどれほど自分自身の意志と異なっているか、それを神の意志として受け取っています。……もし新島氏が聖霊によって正しく導かれ、氏の目的と事業に固く立ち、そして氏の健康が許すならば、氏は恐らくわれわれのミッションの全部を合わせたくらいの仕事をなしとげるよう定められていると私は思います。……われわれは牧師の仕事よりもっと広い分野で彼を必要としています。つまり伝道者養成所の教師として彼が必要なのです。彼は或る種の教科に關してはどの外国人よりもふさわしい教師です。われわれはまた伝道者として彼を必要としています——それは同じ場所です。いつも彼の影響力を用いるためではなく、方々をまわって関心を呼び起こすためです。……彼の帰国後長い間われわれは彼が体をすっかりこわしてしまふのではないかと心配しました。彼はほとんど眠ることができなかったのです。はじめの二、三か月の間に彼が数回私に語ったところでは、何百万人という日本人がキリストを知らずにあの世に行くことを考えると、まるで気が狂いそうになるということです。今年のはじめ頃からその状態は次第によくなり、今までよりもよく眠れるようになります。これはひとつには学校がうまくスタートして、そこでの仕事に着実にはかどっているからですが、もっと大きな理由は、結婚して、自分自身の幸福な家に落ちついたからであるといえましょう*。」

上に述べられている家はボストンのJ・M・シアーズ氏の好意によって与えられたものであつて、同氏はまた礼拝堂を建てるためのお金をも送ってきた*。数年間というものの市内に説教のための場所を確保することは不可能だった。そこでこの間には礼拝は新島邸と隣接の礼拝堂で守られた*。そこには福音を聞くために二百人が集まってくることがしばしばあったのである。

一八七六年九月十八日に新校舎の献堂式が挙行された。この出来事について新島はハーディー夫妻に次のように書

いている。

「私の深く愛してやまぬ祖国にキリスト教主義の学校を設立できるようにと私を導き、私に教育を与えて下さいましたことに對し、あなた方に心からの感謝を申し上げなくてはなりません。ご承知のように、私たちは一軒の家を借りて学校を始めました。しかしこれではあまりに不便になりましたので、二か月前に建築に取り掛かりました。建物の数は三棟で、二棟には教室と、学生の起居する二十四室があり、小さなもう一棟は食堂と台所にあてています。これらの建物は簡素ではありますが丈夫なもので、ぐるりの空地から眺めるとなかなかきれいに見えます。私たちは一昨日これらの建物の献堂式を挙げることを許されました。式は英語による開会の祈り、日本語による献堂の祈り、学校の沿革の紹介、日英両語の讚美歌合唱から成っていました。ドーン先生とラーネッド先生が英語で、山本氏と私が日本語で演説しました。京都の宣教師団からは二名を除く全員が出席され、約七十名の学生と、それに若干名の来賓も出席して下さいました。山本氏の式辞は短いながらも、まことに時宜をえたものでした。山本氏は肉体こそ弱っており、体の自由もききませんが、私たちの中の最もすぐれた思索家の一人と見なされています。京都に宣教師団が存在できるのはおもに山本氏のおかげなのです。日本のような不道德な国は、キリスト教以外のいかなる手段をもってしても清めることができないのだというのが氏の確信でありまして、氏の影響力と働きとによって、あの誇り高くていかめしい知事も、私たちの言うことに耳を傾け、ついには私たちの努力に對して笑顔を送るようになったのです。この冬の暗い試練の時に、山本氏は私たちのために立ち上がり、知事を説得するために最善をつくしました。知事の方でも私たちの献堂式には何らの干渉もしませんでした。

喜んで頂けるとありますが、私たちの寄宿学生四十七名のうち半数以上はクリスチャンであります。彼らがここに

来たのは、聖書を学び、牧師になる準備をするためです。最初からそのような学生を獲得できたことは非常に仕合わせであると思います。この学校が日本のために、将来の大学の中核となるよう祈っています。私たちの伝道の仕事もまた輝かしい状況を呈しています。伝道の仕事は主として学生たちの手でなされているのです。三つ目の教会がやがて形成される筈です。^{*}年取った私の両親は偶像の代わりに真の神を礼拝しておりますし、病身の姉は、親たちよりも早く精神的な事柄を把握し、私の家で催される婦人たちの祈禱会に参加しています。私の妻は学校の聖書中心の礼拝に出席しています。私たちはみんなで非常に仕合わせにしています。私はこの家をアメリカで見たようなクリスチャン・ホームにしたいと努めております。」

一八七六年九月には、九州の肥後からやってきた三十人の学生が加わって、学生数の増加を見た。^{**}彼らの入学は学校の初期の歴史における重要な出来事だった。彼らがやってきた状況は注目すべきものであったし、また、この若者たちが、当時進行中だった教育的、宗教的な運動全体にのちほど及ぼした影響の光に照らしてみれば、その状況は一層興味をそそるのである。一八七一年に、もとアメリカ陸軍の将校だったL・L・ジェインズ大尉は、城下町熊本***の学校の訓育に当ることになった。^{***}この学校は、この頃特に西南の地方に攘夷党によって設立された多くの私学校の一つだった。英語で近代科学が教授されていたが、その運動ははっきりと国粹的なものだった。というのはこうした学校の唯一の目的は、そのすぐれた訓練と知性によって一層効果的に外国の影響力に抵抗し、西洋思想の進展に反対するような若者の一団を形成することにあったからである。熊本はその地方の中心にある内陸の町であり、封建主義的な精神が依然として強かった。開港地にゆきわたっていた影響力から孤立したかたちであったジェインズ大尉は、キリスト教に対する反感があまりに強いために、数か月の間は自分の信仰を敢えて人に知らせることをしなかったほど

である。しかしながら、そうすることが賢明であると思つたとたんには彼はキリスト教について語り始めた。それから先は五年間というものの、彼の学校での働きには絶えず、直接的な宗教教育が付きものとなつた。彼の到着後およそ二年たった頃、彼は上級生たちに向かつて、新約聖書を組織的に研究することを提案した。十五人ないし二十人の若者たちは、学校の当局者に相談した上で、週二度、その授業を受けたのであったが、表向きの目的は、キリスト教の進展によりよく反対できるようにするために先ずキリスト教の知識を獲得する、というのであった。一八七六年一月三十日に、この若者たちの約四十人が近くの花岡山に登り、彼らの生涯をキリストに献げるといふ最もおごそかな盟約のもとに、クリスチャンの団体を組織したのであった。彼らは結果がどうなるかを十分承知の上でこの立場を取つたのである。つまりこのことは、この世的な幸福を犠牲にすること、多くの場合、彼らが準備してきた栄達の道を放棄することだけでなく、友人や家庭との絶縁や、きびしい迫害を受けることをも意味したのである。一月のはじめ改心していた青年たちは下級生たちを教え始め、英語の聖書を手にして教室に集まつてきた。学校当局への苦情が出たので、ジェインズ大尉はこのやり方を中止するよう忠告した。そして謝罪文が学校の管理者に提出された。けれども集會はジェインズ大尉の家でもなおも続けられた。大尉のやり方は如才のない、それでいて断固としたものだった。彼は管理者にむかつて、クリスチャンというものは正當な命令に従わないということはありえないことをうけあい、しかし、そのような集會が禁じられるのであれば、キリスト教に反対している人々、また個人に対する侮辱や暴力のおどしを仕掛けてくる人々の集會もまた同様に禁止されるべきだと主張した。その知事というのはかつてフランス人の一群を襲つてその何人かを殺した十七人の一人であつて、彼の仲間の何人かがハラキリという必然的な処罰に服したあとで外国人官吏のお情けによつて切腹を免れたのであつた。^{*}中央政府の感情がリベラルなものであることはよく知ら

れていたし、キリスト教信仰を抱いた者たちの家族が取つたはなはだちの悪い家庭内での迫害の故にひきおこされた不安の感じが、恐らく、この地方の当局者の表面上の無関心を説明するであろう。当局者たちは利己的な理由からして、東京の政治家たちの政策を、尊敬はしないまでも、恐れる傾向にあった。しかしながら、キリスト教信仰を公然と表明していたすべての人々のための食糧は学校の管理者がただちにとめてしまった。この処置のため多くの生徒たちはまったくジェインズ大尉の支持に頼ることになった。彼らは乏しい金を出し合つて共有とし、大尉の指示に従つて食堂当番を組織し、学校の調理室で自分自身のたべものを準備して配つたのである。そのうちに、先にのべた家庭での迫害がはなはだ苛烈なものになつてきた。この若者たちが京都にやつてきた時には、英語の聖書と身につけている着物だけが彼らの持物であつた。彼らは身内の者の手によつて最も残酷な仕打ちを受けていた。家からは追放され、友人たちからも縁を切られ、彼らは信仰のために文字通り一切を棄てたのであつた。彼らを同志社に受け入れてもらうための手紙の中で、ジェインズ大尉はデイヴィス博士に次のように書いてゐる。^{*}

「生徒たちと私は尋常でない出来事を経験してきました。きびしくて執念深い、いきり立つた迫害のささやきがぐるりに聞こえてきます。クリスチャンの生徒四人が今なおそれぞれの家に監禁されています。この小さな集団はまだ事実上そこなわれてはいないと思います。かなり深刻に脅されたりはしましたが、まだ命を失つた者はありません。まだハラキリの例は報告されていません。ただし一軒の家の母親と、もう一軒の家の父親とは息子らに信仰を捨てさせようとして、その手段に訴えようとしたことはありましたけれども。最後まで忠実であろうとする者たちの数は私が予期していたよりも多くありました。監禁されているクリスチャンの生徒たちのことを思えば悲しくなりません。一人の子の健康は衰えてきました。この無思慮な迫害はその子の死を招くかもしれません。彼の聖書は二、三日

前に火刑に処せられたそうです。」

のちに同志社教会の牧師となり、校長代行として新島のあとを継ぎ、社員会の代表をつとめた金森「通倫」氏について、ジェインズ大尉は一八七六年六月二十五日に次のように書いている。^{*}

「この手紙の持参人はこちらのキリスト教徒組の一人で、彼についてはすでにお知らせしました。彼は自分自身の物語をあなたに語るにちがいありません。ただ申し上げておきたいのは、彼は本年の卒業生であり、学校から引き取られて迫害を受けるようになる前に、正規の課程を終了したということです。彼は、こちらで反対派の影響の下にある兄の手にかかって最も残酷で非道な仕打ちを受け、百二十日間にわたって事実上監禁状態に置かれていました。彼は自分の家の召使いたちに仕える奴隷とされ、召使いたちは、彼を悪魔にとりつかれた者として、人権を無視して取扱うよう指示されていたのです。彼は今や事実上の浮浪人です。家族との縁を最終的に絶ち切り、自由をめざして進んでいます。彼は毛をつみ取られた小羊です。すべてを捨てて出発するのです。」

熊本バンドという名で知られるようになったこの人々の中には、次の人々がいた。現在「同志社」理事である徳富「猪一郎」氏は東京で出ている季刊誌『国民之友』の主筆、また有力な日刊紙の主筆でもあり、全国的な名声と影響力をもつ著述家である。^{**}同じく理事の横井「時雄」氏は東京の教会の牧師であり、日本における組合教会の週刊誌『基督教新聞』と文芸誌『六合雑誌』の主筆である。^{***}小崎「弘道」氏は新島の後任として現在同志社の社長である。^{****}海老

名「弾正」氏はのちに安中の教勢さかんな教会の牧師となり、現在、熊本の大きな英学校の校長である。^{*****}森田「久万人」氏は十一年間にわたり同志社の教授であった。^{*****}下村「孝太郎」氏は現在化学の教授である。東京における小崎、上野

氏における海老名、大阪における宮川「経輝」、岡山における金森、四国における横井——この人たちの仕事についてデ

イヴィスは書いている。

「彼らはすでに日本の歴史を変えるような仕事をしたのである。これらの若者があの開校後もない時期にまじめなクリスチャンの目的を抱いて同志社に来たことが、同志社に一つの色彩を与えた。その時以来同志社の道徳的形成と教科目の編成には、彼らの影響力が感じられた。同志社をして今日の同志社たらしめるようにしたのは彼らであった。彼らは新島を愛するようになり、新島からも兄弟として愛されるようになった。」

一八七六年から、新島が米国を再訪する一八八四年までの記録には、健康の衰え、絶えることのない試練と不安のことが記されているが、最後には成功するのだという信念はゆらいでいない。生徒数はゆっくりとふえていったが、数年間というものの地元の反感が大へん強かったために、近隣から来た生徒はほとんどいなかった。熊本バンドの影響で、九州から来る者が多かった。沢山の熱心な親たちは子供らを「新しい方法」で教えてもらうために「同志社に」よこした。生徒たちは一般にクリスチャンとしてさげすまれていたけれども、彼らの道徳的な気風は学校の名声を広めるのに貢献した。

一八七七年三月に新島は書いている。

「この前の聖餐式のために父が教会に加えられました。^{*}あの老人がバプテスマを受けたということは私たちみんなにとって最も重要な出来事でした。父はここ六十九年の間、異教の闇の中に住んできたのです。私たちは父が真の光を得ずしてこの世を去りはしないかと、絶えず心配しておりました。」

この頃、新島の俸給の額について誤解が生じた。彼の俸給は、五百ドルがボードの会計から支払われ、その残りは

ハーディー氏が支給することに取りきめてあった。そのような通知が彼に届いた時、彼は俸給が五百ドルに切下げられたと受け取り、ハーディー氏に次のように書いたのである。

「あなたの方からのご通知もご説明もありませんにそのようになさるというのは、ちょっとおかしいと思いました。

とにかく、運営委員会の方で、私が最低の給料で生活すべきであり、切下げるのが最良であるとお考えになり、あなたもそうお考えになるのであれば、私は従わなくてはならないと、自分に言いきかせております。私は常にあなたの従順な息子でありますので、父上様のご意志に反したことをする気はありません。そのことを妻に話し、二人して額をつきあわせ、どのようにして支出を切りつめるかを相談しました。『あれもこれも切っていこう。必要なときに庭の手伝いにきてもらっているお百姓さんもあきらめよう』と言いました。多くのものを切りつめてみた結果、何とかあの俸給で暮していけそうです。私たち夫婦以外に両親と病身の姉がいるものですから、はじめは相当きついと思いますが、のちほど、キリストの御為に克己することをとても仕合わせに感じてきました。どの宣教師に対しても私の俸給が削られた理由を質問したり、また私の気持を表明したりもしておりません。けれども最近、あの削られた額で生活していくことがかなりきつかったものですから、デイヴィス先生にそれについて何かをお聞きになりましたか、と尋ねました。先生は私に、ボードは毎年五百ドルをミッションの会計から引き出すよう認可していることと、残りはハーディー様が私に送って下さることになっていると説明して下さいました。何たるまちがいをしでかしたことでしょうか。しかしながら、もしあなたが五百ドルでやっていけとおっしゃるなら、私ははいと申し上げ、そのことを感謝いたします。またもしあなたが、残りの分を与えて下さるのでしたら、感謝の気持をもってお受け致します。私は使徒パウロの主義を採用しました。『わたしはすべてのことに感謝します』^{*}」

一八七七年の夏に仕事で憔悴した新島は妻をつれて和歌山に遊んだ。その地から七月十二日に彼は次のように書いている。

「鉄道で大阪に来ましたあと、この静かな漁村までは人力車で参りました。ここは京都の南西約六十マイルにあたり、いくぶん暑いところです。有名なみかんの産地からほんの二、三マイルはなれているだけです。ここに来たのは海水浴が目的で、海水浴は体によろしい。非常に裕福な漁師の所有にかかる小さな別荘を借りました。その別荘はともよい位置を占めています。魚と野菜が豊富です。特に私たちだけの静かなひと時を喜んでいます。外の荒れ模様が終り次第、魚釣りに行きたいと願っています。こちらに来てすぐ、まわりの山に登ってみましたところ、すばらしくきれいな景色でした。高い山の頂きに一人で腰をおろして丘や川、平地や入江、岬や小島、そして彼方にひろがっている海を眺めていましたとき、いつかマウント・デザート^{*}にご一緒したときの楽しかったこともを思い出さずにいられませんでした。その時突然涙がしたり、声をあげずに泣きました。ご一緒に経験させて頂いた喜びの一つ一つが非常に貴重で神聖なものに思えるのです。この世に生きている間に、あのような楽しいことに再びめぐりあえることは決してないだろうという気が致します。」

一八七七年のはじめごろ新島は義兄の山本氏を通して大津刑務所の囚人たちに何冊かの本を送った。その本の中にはマーティン博士の『キリスト教の証拠』の漢訳『天道溯源』が入っていて、それを読んだ一人の囚人はその本に非常な興味を抱いて、無学な仲間たちのためにそれを日本語に訳したのであった。そこで起こったことについて新島は次のように記している。

「囚人の大多数は無学な、こそ泥を働いた連中です。夕方の学習のためにランプの使用が許されています。これは

当局者からすれば大きな譲歩です。なぜなら従来はランプの使用は禁じられていましたから。しかしたった一つのランプでは学ぼうとする多数の囚人には不十分でした。彼らは八十人もいたと思います。従つてもう一つのランプが許可され、次にもう一つ、さらにもう一つ、という風にして、しまいには室内が十分に明るくなりました。仲間たちに教えていた男は、毎日彼らに説教するようになりました。或る日刑務所で火事が起こりましたが、少しの混乱も見られませんでした。その男が仲間たちに完全な秩序を保たせたのです。彼の指揮でめいめいが気高く振舞い、やがて火事は消しとめられました。その後囚人たちの点呼がありました。脱走した者は一人もありませんでした。驚くべきことであります。市の当局者たちは囚人たちの行動とその理由について報告を受けました。囚人たちの指導者は刑期があと一年ありましたけれども、この善い行いの故に釈放されました。釈放後に彼は私たちのところにやってきました、彼の話を書かせてくれました。彼は十年前に喧嘩で人を殺したという経歴の持主でした。彼はその後大津で私立学校を始めました。デイヴィス氏と私と学生のうちの何人かは、その後ずっとそこへ行って説教を続けています。まもなくこれが結果として大津に教会を形成することになるでしょう。」

一八七八年三月には、学校関係の仕事で東京に行った際に、新島は安中まであしをのぼした。安中は彼がアメリカから帰ってきた時最初に福音を説いた所である。

「外務卿の病気が重いものですから、すぐに会えるという見込がなく、時間を善用するために安中へ行くことをただちに決意しました。三年ばかり前にあの土地を去りましてから、人々を導く者がいなかったため、彼らは真理に対する興味を失い始めておりました。時折私が彼らに宛てて書いた手紙が、二、三の人々の勇気を保つのに役立つ程度でした。去年の夏、京都から行った兄弟の一人が、ほとんど消えかかっていた彼らの信仰の火をかきたてました。彼

らは夏場よりも冬場の方がよけい暇でしたので、冬にもう一度彼に来てほしいという特別の要請がありました。安中に行ってみますと、彼らは洗礼を受ける準備が十分にできていました。到着した晩に集会をもち、翌日は大きな集りで説教し、その晩に試問会をいたしました。試問会は翌日も繰返され、四日目には三十名の者に洗礼を授けて、教会を組織しました。^{*}それはこれまでに私が経験したうちで、最も厳肅かつ最も喜びに満ちた出来事でありました。今までのところ会衆はすべての支出を負担し、外からの援助は何一つ受けておりません。彼らはそうすることに誇りを感じており、教会を維持していくための資金をすでに集めました。会員の中に一人、富裕な実業家がいます。^{**}まだかなり若いのですが、この土地では最も影響力のある人物です。彼は牧師を自分の家にとめ、牧師が快適にやっていけるよう骨身を惜しみません。彼はまた無料の読書室を開いており、そこには日刊紙、週刊誌、月刊誌が、宗教的なものもそうでないものをも含めて備わっています。私が安中を去るとき、多くの人々が町はずれまで私を見送り、私の来訪に謝意をあらわしてくれました。」

京都ではこれより二年前に一宣教師の宅で女学校が開校しており、最近、女学校用に建てられた建物に移ったのであつた。^{***}同様の学校はすでに神戸に設立されていた。^{***}これらの女学校の目的は、日本の女性たちの間でやがてなされる大事業に、若い娘たちを適合させることであつた。これらの「ホーム」以外のどこにも、だんだんとふえていくクリスチャンの働き人たちはクリスチャンの助け手たる女性を見つけ出すことはできなかった。宣教師団の何人かはこの動きを時機尚早と見ていたが、事の成行きからすれば、自信と希望を持っていた人々でさえ、その自信と希望が十分でなかったことがわかるのである。新島の東上の目的は教師として二人のアメリカ女性の京都での居住許可を得ることであつた。^{****}この申請は知事によって拒否されていた。^{****}新島は書いている。「これは私たちがこれまでに経験した

うちで最もゆゆしい問題です。私たちは及ぶ限り落ちつきはらってそれを忍ぶつもりであります、あの専横的な知事が私たちを虐待することをやめなければ、私たちは勘忍袋の緒を切つて、最高権力に訴え出るつもりです。」アメリカ公使^{*}と、日本の外務卿に相談してみ、おもな困難の理由は次の事実であることがわかった。すなわち、同志社は名目上日本人の結社であるが、その資金は外国から出ていること、そして、同志社は教育の名のもとに運営されているが、その本当の目的はキリスト教の拡大にある、というのである。学校が成長し、繁栄しているところへもつてきて、女子のための「京都ホーム」が設置されたことが知事の敵意をひき起こしたのだった。政府の当局者たちは干渉することを拒否した。「ウォラス・テイラー博士は自宅においてさへ医療に従事することを禁じられ、ついには京都から退去することを命ぜられた。がっかりさせる状況であった。新島は恒久的な基金を求めて、アメリカあてに強いアピールの文章を書いた。その中で「そういう基金が得られるならば、それが外国から来たものであり、外国人の管理するものであっても、なお私たちは、自分たち自身のかねで教師たちを維持しているのだと主張することができま^{*}す」と彼は述べている。

京都の知事による女性教師たちの入洛の拒否は、井上^{*}（馨）伯爵^{*}によって四か月ののちにくつがえされた。新島は書いてある。「私は井上伯に私の考えを述べ、キリスト教を阻止しようとしてもそれは不可能である、何となればキリスト教は活きた原理であるから、と申しました。キリスト教は一つの町で粉砕されても、必ず他の町で火を吹くのです。最良の方法はほっておくことです。でなければ日本は最上の愛国者を失うことになります。中央政府の決定は私たちに有利なものとなり、府当局者の計画は完全にくつがえされました。活ける神に栄光がありますように！」

この頃新島は極度の試練に直面していた。山本氏は同志社に対する積極的なかわりの故に府当局との関連を失っ^{***}

ていた。学校にかかわるすべての困難、校内管理についての諸問題と校外の反対運動から派生する諸問題はすべて、新島に解決を追ってきた。新島は学生たちと外国人教師たちとの間に、身近な同僚たちとミッシェン全体との間に、学校と役所との間に立っていた。彼は宣教の事業にも積極的にたずさわっていた。同志社ならびに京都ホームとの関連から切離すことのできない心労に加えて、国中に次々に形成されてきた日本人信徒の教会や、日本基督伝道会社の結成から生じる心労があった。^{*}この伝道会社の事業を監督する役割を、彼は長年にわたって熱心にはたした。

一八七八年の夏、新島は京都の郊外で短い休暇を取った。八月十六日に、その休暇先から次のように書いた。

「妻は私をこの静かな村に送り出してくれました。京都からはなれること六マイル、京都よりはずっと涼しい所で
す。木が沢山はえています。いたるところに木陰があります。三日前にここに来まして、今はお寺にとまっています。大きな、風のよく通る二部屋を借り、一室は読書用に、一室は寢室として使っています。お寺にはぐるりにとても広い廊下がついていて、その一部で炊事をします。料理人を連れてきたか、とお聞きになるかもしれませんね。答はノーです。家では女の子を傭っていますが、私ひとりである時にはこんな所に女中をつれてくるわけにはいきません。私はすばらしく適応能力のある男ですから、料理もできれば、身のまわりの世話もできます。干し肉、卵、さつまいも、果物など、全部揃っています。今こそあのワイルド・ロウヴァー号上で使った昔の腕前を示す時^{***}。ああ、それも自分以外に誰も見てくれるものがありません。老僧とその家族は庫裏^{ぐり}の方に住んでいます。彼らはとても静かな人々で、私を疑うことを全くいたしません。私は早寝早起きで、七時前には朝食をすませています。十時まで本を読み、次に健康のために塩水の風呂に入ります。それから食事の準備にかかり、ひるねをし、木陰の谷間へ長い散歩に出掛けます。」

この年の春に新島は岡部〔長職〕^{ながと}子爵^{*}から手紙を受け取った。岡部は当時マサチューセッツ州スプリングフィールドに留学中で、その地の組合教会の会員になっていた。岡部氏はもと和泉の国岸和田の大名で、^{いずみ}當時は外務小輔であったが、岸和田に住んでいた旧家臣たちに福音を説くために誰かを派遣してほしいと新島に要望してきたのである。この要望に答えて、新島はただちに、自分でその土地を訪問したのであった。次にかかげるのは、一八七八年八月十六日付で彼が岡部子爵に書いた手紙で、この中にその訪問の報告がなされている。

岡部子爵あて

あなたの古い城下町での経験について、若干お知らせしたいと思ってこの手紙をしたためている次第です。お手紙を頂きました時、私たちの最良の学生の一人をそちらに派遣しようといと大いに努力いたしました。残念なことに、お手紙を受け取る前に、彼らはすべて他の場所に割当てられておりましたから、やむをえず、しばらくの間、問題にはそのまま手をつけないでございました。多事多忙ではありましたが、先月十九日に当地を出発し、二十日に岸和田に到着。すぐさまJ氏のところへ人をやりましたところ、氏はすぐにM氏ご同道で私を訪ねて下さいました。私はJ氏にあなたからの特別のご要望をお伝えし、お二人にあなたのお手紙を訳して聞かせました。お二人は私との対面を大いに喜び、お二人の迅速な処置によって、さいわい、二十一日に、「浜町産物」商社において、ご家臣の方々に第一回の講義をすることができました。聴講の方々は二十名。七日間連続で福音を説き、聴衆はふえていって百名に達しましたが、全部男子で、ほとんどが武家の方々でした。沢山の学校教師と、高学年の生徒たちがおられ、その大部分は若くて、きわめて鋭い人たち。彼らはあらゆる種類の質問を致しました。私の説く新しい教義は彼らにはとても不思議

議な、疑わしいものに思えたからです。彼らは靈魂不滅といった教えはこれまでに聞いたことがなかったのです。岸和田滞在中はとても忙しくしていました。彼らはすかさずに聞き、すかさずに議論する、私の方でもすかさずに語る。時のたつのも、体力の限界も忘れてしまいました。私はこうした聡明な聞き手たちを捉えようと思いましたけれど、教育のない人々を無視することも致しませんでした。講義では一時間を前者のグループに、もう一時間を後者のグループに使用しました。こうして講義は毎日二時間ずつ続きました。とても満足に思いますことは、教育組は福音書と『キリスト教の証拠』を読み始め、彼らの創り主と、彼ら自身の中に存在する聖霊をも見出したことであり、また未教育組は非常に注意深く講義を聞き、何人かはすでに改心し始めていることです。それでは十字架につけられた救い主を一人でも信じ始めたのかどうかを、切に聞きたがっておられるのではありませんか。まだ肯定の答を申し上げることはできません。けれども今簡単に申し上げられることは、神の恵みにより、ふつつかなしもべが、あの人たちにお入り頂くべき新しい道を切り開いたということ、もし私がまちがっていないければ、何人かの人々はすでに顔をそちらの方向に向けた、ということです。

二十五日に、私は男子の皆さんに対してと同様、女子の皆さんにも福音を説きたいという希望を申しのべました。男子だけが救いの道を学ぶべき存在であるのでなく、女子もまた同様なのです。わが国のように女子が奴隷の如くさげすまれている間は、社会状態は決してよくなりません。逆に、もし女性がキリスト教化され、教育を受け、高められていくと、彼女らは社会を浄化するのに男子以上の働きをします。——そのように私は説きました。そこで二十六日と二十七日の晩に、女性たちのための特別集会がもたれることになりました。聴衆の数はさらに多く、各回百人を上まわるものでした。

「京都に」帰ってみますと、福知山から帰ってきたばかりの一学生をみつめました。^{*}彼はそこへ伝道に行っていた者です。その地域の当局者の頑迷さの故に、やむをえずその地を去ったのです。そこで、私のし残した仕事を続けさせるために、彼を岸和田へ派遣しました。彼以外に、私たちの学校の学生二十六名ほどが岸和田に海水浴に出掛けました。彼らの大部分は若い連中で、しかも信者であります。私たちの仕事についてもっとお伝えできたらと思うのですが、ほとんど私の力に余るほどの仕事がありますので、取急ぎ、簡単ではありますが、これで失礼させて頂きたいと存じます。

新島は時折、そしてこの頃は特に、宣教師団の内部にいちじるしかった意見の対立に悩んでいた。あらゆる種類の障害が絶えずもち上がっていた。その障害は学校の存在そのものばかりか、これまで達成された一切をも脅かすほどのものであった。外国に反対し、キリスト教に反対する人々は、新島の計画を挫折させ、同志社の成長をとめるためにあらゆる機会を利用した。名目上は日本人の結社であるけれども、実際上同志社は外国からの毎年の補助金でもって維持されているという事実が攻撃の基礎となり、ほとんど閉校という結果になりかけたほどである。「京都」在住の教師たちの旅券の再発行も、長い執拗な努力の結果やっと許可されるという有様で、授業科目は府の役人たちの敵意のこもった干渉をたえず受けていた。状況はしばしばわめて深刻となり、宣教師団は完全に元気を失い、希望はないものとして戦いを放棄しかけたのであった。国内のいろんな困難がその状況を悪化させた。新島の同僚の何人かは、京都では厳密な意味での教育事業にあまりにも重点がおかれすぎていると感じた。国内の諸教会はアメリカン・ボードから完全に切り離されるべきであるという主張を公然とするものが現れた。^{**}そういう行き方は教会の初期

段階では実施できるものでないと新島は信じていた。学生と教授陣、日本人牧師と外国人の同僚たち、宣教師団と諸官庁、こういったものの間に起こったすべての争いを解決する仕事が新島にまわってき、彼はしばしば彼が尊敬し、愛していた人々から誤解をうけたり、誤って伝えられたりした。最も親しくしていた日本人の友人の多くが、彼がハーディー氏から金の支援を受けていること——それはアメリカン・ボードが支払うつましい給料のことを思えば不可避というべき金であったが——をきびしく批判した。そしてこの批判は時にはにがしい個人攻撃のかたちを取るものがあつた。校長としての彼の立場から切りはなすことのできない心労に加えて、内国伝道を組織するための彼の働きは莫大な分量の文通と頻繁な旅行を含んでいたので、長年にわたり、事実上彼は休息も休暇もとれないでいた。彼はかつてデイヴィス博士にむかつてこう叫んだことがある。「ああ、私も一度キリストのために十字架につかれ、それでもってすべてを終わりにすることができたら、どんなにいいでしょう！」それでもなお新島は、その場にとびつたりの人だった。アングロ・サクソンのそのものずばり式の行き方は、半分無頓着で間接的である日本人の心から余りにもかけはなれていたので、中間に立つ人をどうしても必要とした。そしてその性格と教育の両面からして新島はその位置にはもってこいの人であった。彼は両者いづれにも共感できるに十分なだけ両者を知っていたし、彼の偉大な愛情は常に両者の間にあって、はげしい葛藤や不幸な誤解が起らないように留意した。海外で教育を受けた多くの若い日本人たちは彼らの優越性を確信して帰国するので、彼らと協力してやっていくことは全くできない相談だった。新島は特に困難で誘惑の多い位置を占めていた。ために集中砲火を浴びることがあり、それが彼の氣遣いと辛抱を限界まで追いつめるのであつた。しかしながらこの間ずっと、彼はこの一筋につながる真摯な目的と、純真そのものであるキリスト者の性格の故に、すべての人々の信頼を保持し続けた。

一八七九年二月、新島はまたもや東上し、当時外務大輔になっていた森〔有礼〕氏にラーネッド博士の旅券の更新についての配慮を願ひ出た。この件で彼が成功したことは、同僚たちが見込みなしと見做していたことを彼がいつも首尾よくなしとげてきた例の一つにすぎない。この場合、彼の使命の特別な目的は達成されたのであったが、森氏との会見から新島は、学校の安否は恒久的な基金を設定することに依存していることを確信した。それ故新島はアメリカン・ボードの運営委員会あてに、ただちに次のような強いアピールを書いたのであった。

「九州への伝道旅行から帰ってきました時には、かの地の強烈な熱気にさらされたために相当消耗いたしました。あちらでの仕事は始めますとすぐ、重要な問題に当たるためできるだけ早く帰宅するようにとの電報が多数届きました。^{*}まことに遺憾ではありましたが、私は仕事をやめて帰宅の途につかざるをえなくなりました。今や私の双肩にかかっている困難についてご報告しなくてはならないのですが、どうか落胆なさらないようお願い致します。主は私の愛する国に王国を拡張なさるために、ありとあらゆる試練を私が堪えるよう定めておられることを十分に確信しています。その十字架がどれほど重いものであっても、私はそれを荷う用意があります。ただ私の恐れますことは、私たちが現在直面しています危機的な状況を、差し迫っている困難と緊急の要望ともども十分おわかり頂けるように描写することがむずかしいのではないかとことです。

京都市において私たちの学校を始めることになりました時、法律の定めに従って、学校設立のことと、外国人教師傭い入れのことについては中央政府からの許可を得ることを余儀なくされたのでした。というのは、外国人は京都のような内陸の都市では、日本人に傭われるのでなければ居住することを許されないからです。アメリカの友人たちが

学校を設立するための資金を提供して下さり、アメリカン・ボードが私に教師を傭うことを認めて下さったので、私は自然、学校所有者の立場をとらざるをえなかったのです。学校設立の許可願いは、京都府知事の承認をえて先ず文部省に提出されました。けれども、公立学校であろうと私立学校であろうと、正規の宣教師を教師として傭うことは文部省の規定に違反することであつたのです。これが私の最初の障害でした。けれども田中「不二麿」氏の特別なほからいにより、デイヴィス博士が日本の神聖な古都に入る許可を獲得しました。それがうまくいった時、私は喜びのあまり「奇蹟だ！」と叫びました。私たちは学校を始めるとすぐに、能う限り静かなやり方でもって福音を宣べ伝えることを開始しました。しかし個人の私的な一室で語られた真理は全市に知れわたるようになり、その地域の僧侶たちの間に大きな危機感を与えるようになりました。彼らは立ち上つて大集会を開き、私たちの宣教をすっかりやめさせるようと、團結して知事に陳情書を提出しました。そこで知事は私を府庁に呼び、私の家でこれ以上伝道をしないようにと要求しました。けれども私は彼に尋ねました。もし私の友達がうちに来て真理のことを質問したとすれば、閣下はその場合いかなる答をもしてはならぬと強要なさるおつもりですか？ 彼はそのようなつもりはないと答えました。そこでまた聞きました。もし二人、三人、いや百人の友達がやってきてキリスト教の真理について私に何かを尋ねたとすれば、私がそれについて語ることを禁じる権限を閣下はお持ちでしょうか？ 彼は持たないと答えました。それでは、そういう権限をお持ちでないのであれば、私は自宅で説教を続けることができますね、と私。私が大へん強情な奴だとして、知事は、学校では聖書を教えないように、といましめただけでした。聖書ははじめからずっと、最も暗い時期にすらやめることなしに教えてきました。一つの戦いが終ると次の戦いが始まりました。それからその次の戦い、またその次の戦い、という具合です。知事が中央政府にむかつて、新島は教育を口実にして学校を始

めたが、彼の真の意図は国中にキリスト教を広めることである、と報告したという噂があります。ちょうどその頃、私はミスWとミスP^{*}が京都に入れるように許可願いを出しました。それは理由をつけずに拒否されました。知事がその次に持ち出した文句は、私は外国人教師たちの名目上の傭主ではあるが、学校は実際には日本のものではなくて外国のものである、なぜならそれはアメリカン・ボードの毎年の補助金で支えられているのだから、ということでした。私たちの状況は一層危険なものになりました。東京の責任者はいつも宣教師の京都入りを阻止しようとしてきました。ラーネッド氏の最初の旅券の期限が切れかけたので再発給を願いました。一切が暗澹^{あんたん}として絶望的に見えました。通常の手続きをふんだのでは許可が下りないことは確実でした。大胆に打って出よう、というインスピレーションが湧きました。私は府庁に知事を訪ね、私の申請を認可して頂きたいこと、そして外務省の方にはよしなに口ぞえして頂きたいと頼みました。知事はできるだけのことはする、と約束してくれました。しかしすべては外務省次第だ、と言うのです。このようにして彼が悪たくみをしないようにおさえた上で、森氏に会うために東京に向かいました。森氏に学校に関する一切のこと、つまり学校の沿革と財源について説明しました。森氏の答はこうでした。「あなたはボードの資金でなしにご自分の資金を用いるならば、存在する権利も、また外国人教師を傭う権利もお持ちです。外務省はあなたがアメリカン・ボードに全く依存しておられることに反対なのです。」そこで私は、この毎年の援助金は自由な贈物なのであり、私たちはそれを善用してきたのである、と申しました。私たちは外国からいかなる援助をも受取るとは禁じられているのでしょうか？ もしそうだとすれば、法律は私たちが他国を援助することをもまた禁じなくてはなりません。わが国民は昨年、中国の飢餓地域に莫大な分量の米を送ったではありませんか？ だから私たちもまた、私たちの道徳的、知的な飢餓状態に対する援助を受けることはできないのでしょうか？

この議論は森氏を私たちのがわにつけるのにちょうど十分でした。氏の親切により私はラーネッド氏の旅券の五年間の延長を獲得したのであります。

この夏ゴードン博士の旅券の許可を願ひ出た時に、森氏と外務卿との間にきびしい議論が起りました。^{*}外務卿の方がなぜ私たちにこうもつらく当たるのかをお知らせしなくてはなりません。彼はキリスト教を憎んでいるのです。東京の外国人居留地以外のところで外国人のために店を開いている何人かの日本人商人がいます。この商人たちは自分の名前を使っていますけれど、実は外国人に僱われ、外国人から給料をもらっているのです。外務卿はこの商人たちと私たちの間をはっきりと識別していません。そのような商行為は国家の法律によつてきびしく禁じられているのですが、それでも抜目のない日本人がやっていることです。外務卿は私たちをこうした商人たちと同列に置き、いつでも私たちを京都から追ひ出そうとしているのです。けれども森氏は気高くも私たちを擁護し、私たちの許可願ひが認可されるよう外務卿を説得してくれました。同時に氏は一友人を介して用心深くするようにと伝言し、ただちに恒久的な資金を集めるよう忠告してくれました。というのは、もしも私たちの学校がボードによつて支えられていることが証明されますならば、私は重い罰を受けることになり、私たちの事業は停止、私たちは京都から追放されるのです。———そうです、これまでの努力の一切は太陽の前の朝露のように消えうせるのです。そのような暗い前途をみつめている私は、いにしえの預言者エレミヤのように歎いたものでしょうか？ いいえ、私は断じて歎きません。勝利を得るまで戦うのみです。われら、疲れを知らぬ兵士らを、神が助けて下さいますように！ 森氏の忠告を聞いて以来、私は知事の鉄腕をどのようにして逃れたものかと真剣に考えてきました。私たちは国中到處とところでそして、キリスト教坊主のゆりかごととしてあざけられています。もしもここで足場を失うなら、どのようにしてもう一度

内陸で出発することができるとでしょうか？ 宣教師諸君は私たちの危機的な状況を十分には理解しておられません。うち何人かはボードあてにそれについてお書きになったにちがいありません。ボードの皆さんは私たちが減んでいくのを、仲間としての同情もなしに、ただ立ち上がってご覧になるだけなのではないでしょうか？ ボードの政策というものは、最近ボードが受けた大きな遺産の中から私たちに恒久的な資金を与えることができないほどに保守的なものでありましょうか？ 必要な時には、神の御用を大胆にはたすために、新しい政策をたてることが望ましいことがしばしばあります。今こそボードは攻撃するのか、それとも退却するのかを考える時です。もしボードが私の目的を理解しないのであれば、もしボードが今なお半信半疑だということであれば、私は説明申し上げるためにボストンに参ります。もしボードが私にその資金をくださらないのであれば、私はアメリカの裕福な人々に私の主張を開陳いたします。私は公の乞食となつて町から町へとまわります。私の現状からすれば、舌とペンが使える限りは、私は乞食をやめません。キリストの御為、私の国のために、私は大音声で叫ぶ乞食となります。

これと関連して私たちの学校の水準について触れなくてはなりません。日本国民は教育事業の面で大胆な進展をとげつつあります。官立の学校は、いくつかの私立学校とともに、私たちよりも進んでいます。今私たちが改善の努力をしなければ、私たちは教育制度の下層部分に取り残され、最良の学生層を把握することができなくなります。わが善良な宣教師の友人諸君は今までのところ聖書教授にはずいぶんと努力されましたが、科学方面の教授を無視なさいました。有望な青年たちの多くは大いに失望し、私たちの許を去って東京の諸学校に行きました。彼らは東京ではキリスト教の影響を全く受けておりません。私たちはこうした前途有為の者たちを失わざるをえないのです。私たちは彼らにキリスト教教育とともに、完全な、高度な職業教育を与えることによって、彼らをわが校につなぎとめなくて

はなりません。私がまちがっていなければ、これこそが、日本でクリスチャンの努力が成功するためのカギであります。宣教師諸君がこのカギを発見されるのでなければ、彼らの仕事は大部分無駄であり、無益となります。私が大いに失望していることではありますが、何人かの宣教師は、この重要な点に関して日本人の行き方に適応するための努力が十分ではありません。そういうわけで彼らは全く人氣がなくなっており、日本人とあまり円滑にはやっていけないのです。おもな理由は、彼らが依然としてアメリカ人であることです。彼らの習慣も、思想も、想像力も、すべてがアメリカ的です。アメリカ人がよいと思うことを日本人は軽蔑するかもしれません。アメリカで名譽なことがここでは不名譽と見なされるのです。宣教師たちと日本人クリスチャンたちとの間に時折小さなトラブルが持ちあがる場合があります。宣教師たちは自分自身の手で日本人の働き手を育てる代りに、あまりにも多く外国からの後続部隊をほしがるのです。宣教師は日本人同様に話すことはできません。宣教師は日本人と同じように家から家へと巡回することができません。宣教師は日本人と同じように暑さに堪えることができません。宣教師は日本人と同じように辛抱強く、安い家賃の借家に住むことができません。宣教師の仕事は高度の靈的な頭腦労働であるべきです。宣教師は自身語る代りに、語る人を養成すべきです。もし私がクラーク博士の立場にあるならば、キリスト教の牧師、クリスチャンの医師、クリスチャンの政治家、いなクリスチャンの商人をさえも養成するために、日本に強力なキリスト教大学を設立しようとして全努力を傾注することでありましょう。キリスト者は愚かであるという非難を受けてはなりません。さもないければ私たちは人々の尊敬を受けられないのです。私たちは信仰のために嘲笑をうけ、無知の故にまた嘲笑をうけるのです。ですから私たちとしては救い主の御言葉である「へびのように賢くあれ」(「マタイ伝10・16」)を思い出して実践すればよろしいのです。どうか幅の広い教養と強い性格をもち、力強い適応能力を備えたより抜き

の人々、新約聖書の精神の持主を送って下さい。心から懇願致します、どうか京都の宣教師団のいのちを救い、私たちの学校がクリスチャンの力と影響力の中心となるよう、私たちの教育水準を向上させるために、資金をお与下さい。ふつつかない意見を自由に述べさせて頂きました。神よ、どうかアメリカン・ボードの皆様が私どもの現在の危機的な状況を理解できるよう助け給え——これがあなたの方のふつつかない息子の祈りであります。」

この期間の全部を通して、新島は自分の経験した試練と悩みの一切を十分かつ自由にハーディー氏に報告した。だが彼の手紙は個々人の問題を完全に超越しており、非難すべき点をどこに求めるべきかを説明している。希望と信仰の精神が常に落胆の精神をおさえており、あらさがしの痕跡は一切見当らない。このような試練の下で彼が堪え抜いたことについて方々のミッションにいた彼の同僚たちが証言している。だがそれにもまして、次に掲げる親展の手紙は一層強力な証言なのであり、その中で新島は息子が父親に対してそうするように心のたけを吐露している。ただしこれはそのような手紙のうちから二、三をとり出したにすぎない。

「私は京都の郊外の古いお寺に滞在しています。家にいますとひっきりなしに来客があつて時間を取られるのです。来客の大多数は用事があつて来るのですから、彼らを手際よく避けるわけにはいきません。この暑さの最も暑い時期に休暇を取ることができないのです。書かなくてはならない手紙と訪問客のために、ずっと忙しくしております。できるだけ早く家を抜け出そうとしました。でないと体がとてもちませんから。伝道事業に関する私の意見ですが、私は——^{*}氏の計画は短見にすぎると思います。国内の諸教会は自給であるべきであります。大ていの教会は自給であろうと大いに努力しています。日本では独立の精神が欠如しているわけではありません。しかしいくつかの教会

は赤ん坊のようなものです。——氏の計画は赤ん坊を一挙に大人にしようというものです。彼は、教会は外国からはいかなる金をも受けるべきでない、日本基督教伝道会社はミッションから何らの援助も受けるべきではない、同志社は国内の諸教会によって支えられるべきである、女学校もまた諸教会の手にまかすべきである、神学校と新聞も諸教会によって維持されるべきである、と言っています。大部分の教会は、彼らの牧師を支え、諸経費をまかなうだけでも大へなことです。いわんや十六、七箇の貧しい教会がミッションから独立してそれだけ多くを自分らの手に引き受けるということは途方もないことです。私たちは誰一人として乞食根性を持ち合わせておりません。それでもなお、私たちでは効果的にやり通せないことがあるのです。もしもこの計画が実施されますと、私たちの学校は弱体化し、神学生の数はへっていきます。私に言わせて頂くなら、これはお粗末で近視眼的な政策にすぎません。金を節約することは、私たちの最良の働き手を失うことなのです。私たちは今、英語なしで、漢文と日本語だけで何人かを教育する邦語神学科のコースを始めたいと望んでいます。完全な英語教育を受けた者たちが中心的な地位を占めるべきであり、漢文と日本語で教育を受けた者たちは助手的な働き手となることができます。この五月以来、仏教の僧侶たちが大きくめざましました。彼らはキリスト教を攻撃するために学者たちを備える金をどっさり持っています。私たちは日本を前進させるために、科学知識と聖書の知識を十分に備えた人々を持たねばなりません。私たちは今戦場にいるのです。兵士たるものは強くあらねばなりません。今後は無教育の牧師たちは市場から追い出されます。そういう連中は到るところで嫌われます。よりすぐれた宣教師を送り出せば、人々も一層多く金を集めるでありません。

この四月以降で、今は私が見出した唯一のひまな時間です。ただ申し上げられますことは、私の人生はちょうど競走者の人生のようなものだ、ということです。夏にしかひまは見出せません。そのひまは、おもに自分自身の研究に

使っています。日進月歩の世の中にペースを合わせていく必要がありますから。「一八八〇年七月」十七日と十八日には岸和田を短時間訪問しました。私の時間は完全にふさがれ、ほとんど食事のひまもないくらいでした。私が食べている間、人々はその部屋で待っていました。

アメリカン・ボードが私たちの京都の学校を維持するに当たり、賢明な運営をして下さっていることは感謝の至りです。それが必要な限り、現在のとりきめが続いてほしいものです。あなたの親身のご忠告に従い、私は注意深く、宣教師の皆さんとは完全な調和を保ちながらすべてのことをやっていくつもりです。ほかの人の中に欠点を見出さないよう気をつけます。私たちは派遣地を異にする他の宣教師たちからきびしく攻撃されました。^{*}私は自分たちの立場を守ろうとしました。もう今ではすべて終わりました。彼らについては何も申しますまい、彼らのことも彼らに対する反論も。今では私たちのミッション関係の各派遣地の間には完全な調和が存在しています。ここ二か月間は、帰国後経験したうちで最もきびしい期間でありました。私はいちばん下の層に身を置いていますから、全部の圧力が私の上にのしかかってくるわけです。政府に関する重い試練、くわえて日本人の兄弟たちの間の、また学校内での深刻なトラブル^{**}がありました。何という重荷だったことでしょう！主のお助けによって私はほとんど自分自身でそれを背負ってきました。しかし私の頭はすんでのことで破裂するところまできたと思います。」

新島は数年間にわたりハーディー氏の「日本」訪問を「大きな喜びをもって」待ち望んでいた。彼は「太平洋のこちら側であなたと握手させて頂けることが私の夢であります」と述べている。彼はまた、当時アメリカン・ボード運営委員会の委員長であったハーディー氏が、日本で必要としていることを正確に自分の目で見てもらうことを切望していた。久しく待ち望んでいたその訪問が延期になったことを知った新島は「この失望は筆舌をもってあらわしう

るものではありません。あまりにも大きいからです」と書いています。彼は当時、日本列島の四島のうちいちばん南にある九州の日向に出張中だった。伝道に来てほしいという日本人医師の要求に応じて出掛けたのであった。この年の秋に彼の姉が肺の出血がもとでなくなった*。

「五週間前に、教会を組織し、牧師の任職をするために四国の今治に参りました。晩に大勢の会衆に向かって説教しており、家から電報が届きました。急いで帰宅してみますと、姉が死の床についていました。彼女の命をとりとめるために最善をつくしました。彼女は親族一同をまわりに集め、もうすぐきつとこの世を去るのですが、皆さんに対する私の最大の願いは、皆さんが神様と共に歩んでくださることと、生きる為に毎日たべものが必要であるのと同じように、キリスト様にたよって生きてくださることです、と申しました。日本基督教伝道会社の年会に出席するため、大阪に行かなくてはならなかった日のことでした。姉は私がぐずぐずしているのを知って、わたくしが病気になるからといってその大切な会議を休んではなりません、主の御用を先になさい、と申しました。この勇氣ある言葉に大いに励まされて出かけたことでありました。ここ二週間、姉はうわごとを言い、大いに天国を夢見ているようでした。姉の心は天国で満たされたのです。或る日姉は私に言いました。『わたしのようになあわれな罪人が、永遠の天国に希望を見出すことができたとは、何という有難い恵みでしょう！ 今すぐにでもあそこへ行きたいわ。』姉は白衣の人々がうるわしい歌声で歌っている夢を何度も見ました。それからというもの姉は讃美歌がとても好きになり、クリスチャンの見舞客があると必ず歌って下さいと頼みました。歌が終ると彼女は客の手を握り、天国でお目にかかりますまでさようなら、と申しました。死の訪れる二分前に、姉は私の妻に、讃美歌を一つ二つ歌って下さい、と申しました。それから、まるで眠るようにみまかったのです。その朝私が出掛けた後のことでした。帰宅して

みると顔の相はすでに変っていました。私が名前を呼ぶと、姉は一度だけ答えました。あの朝は或る変化が彼女の顔に現れていたので学校に行く気になれませんでした。でも姉は『だめよ、行きなさい、義務をはたさなくっちゃ』と言いました。姉を失って淋しさひとしおです。しかし彼女のことを思うと、天国はきわめて近いと感じずにはおれません。』

十一月に新島が安中から帰ってくると、クラーク博士からの喜ばしい知らせが届いていた。それはその年の予算の中から八千ドルが支出されて、新島が代表者である日本基督教伝道会社に送付された、この金は京都における教育事業のために、新島の監督の下に使用されるべきこと、というのであった。政府に対して抱いてきた困惑の気持のすべては、この決定によって救われたのであり、その安堵感是非常なものであった。一八七九年十二月二十七日に新島はハーディー氏にあてて次のように書いた。

「帰宅してみますとお手紙が届いていました。それを読みましたとき『主が助けて下さった!』と思わず叫びました。嬉しさのあまり涙がほおをつたって流れました。私は妻とともに主のみ前にひざまずき、心から感謝を捧げました。主の次には、私たちに對して寄せて頂いた深いご関心について、私はあなたに感謝申し上げなくてはなりません。私はまたアメリカン・ボードの皆さんにもお礼申し上げます。この処置のおかげで私は非常な困難から救われたことになります。敵の計略は一步また一步と敗退していきます。『主によって喜びをなせ。主はあなたの心の願いをかなえられる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなすとげられる。』〔詩篇37・4-5〕ああ私たちがとってそれは何という貴重な約束でありましょうか。どうして神は私のような、肉体においても精神においても弱いうつわを選んで、この国に神の王国を広げようとされたのか、と私は不思議に思います。主に対してただ、『私

はここにいます。あなたのいやしいしもべにすぎませんが、それでもお気に召すならばどうか私をあなたのぶどう園に備って下さい^{*}』と申し上げるだけです。最近の経験を通して、私は自分の中には何も無いのだということを、これまでにもまして感じています。」

伝道旅行のさいに新島はその町またはその地域の貧しい人々に接触しようとしたが、それと同様に指導的な人々の関心をもかきたてようとするのが常であった。そのことはきわめて新島らしいやり方であり、また教育を受けた牧者を通して福音を広めようという彼の努力と完全に一致するものであった。このことと関連して、一八八〇年二月に彼は岡山から書いている。

「私たちの社会では有力者に接触することは非常に困難であることがわかりました。彼らの多くは氣位が高くて、教えられる氣がないからです。彼らは自信過剰で、道德的状況をこれ以上改善することを望みません。彼らはまた、強い反宗教的精神を持っています。彼らの中には、どんな宗教でも、キリスト教でさえ、国民の進歩を阻害するものであり、近代文明とは無関係なのだといった、奇妙な考え方があることがわかりました。他方においては、堂々とした男らしい、聡明な人がいつでも存在しているものです。私たちのところにも思慮のない生徒が何人かいることは疑いのないことです。それでも誰一人としてキリスト教に反対する者はいません。大いに注意して発言する必要がありますが、彼らは最も古い種類の神学は好まないのです。彼らは頑迷さには堪えられません。政府の東京大学にはおよそ七百人の学生がいますが、そこは不信仰の空氣が支配しています。何人かの日本人教師と外国人教師が悪影響を与えているのです。東京にはまたキリスト教に反対している学校もあります。私たちは二、三年のうちに十分に學識のある人々を得たいと思います。單なるこの世的な知恵は、この滅びゆく民の助けとはなりません。教育を受けた若

者たちの墮落的傾向に対抗するためには、きわめて幅の広い教養と、きわめて強いキリスト教信仰とを必要とします。彼らの愛読する作品はスペンサーでありミルでありドレイパーであるのです。^{*}彼らは私たちを狂信者だとして見下しています。彼らがもはや攻撃することができなくなるまで、私たちの教育水準を上げなくてはなりません。神学教育だけに限っていますと、自分のものをもった最良の学生は私たちのところに来なくなります。立派な、幅の広い教育を与えることで学校を魅力あるものにしてはじめて、キリスト教の影響を拡げていくことができるのです。何人かの兄弟たちはとても奇妙な考え方をしている、まったくのところ教育についてはほとんど何一つと断言していいほど考えておりません。」

新島と京都の同僚たちとの個人的な友情は非常に強いものであった。特に最初から重荷をわかち合ってきたデヴィス博士に対して、彼はきわめて熱い愛情を感じており、繰返し「学校の」成功をデヴィスの機転と勇氣と知恵のせいにしてきた。彼は一八八〇年八月十二日にデヴィス博士にあてて書いている。

「誓って申し上げますが、あなたなしには私たちはとてもやっていけません。この数年間にいくわされた多くの苦勞がきつとあなたの健康を完全に損ねてしまったのです。どうか問題を今少し気楽にお考えになり、できるだけ沢山休息を取るようになって下さい。日本におけるミッションの事業は子供の遊びのようなものではないのです。あなたは沢山の手に負えない生徒を教えてこられた。私もその一人かもしれない。今自分で痛感していることは、多くの事柄に関して私がいかに思慮を欠いていたかということです。確かに、それはあなたにとって大きな試練であったにちがいません。しかし私のような無思慮な子供でも、大きくなるにつれて、一層賢くなることができます。ともかく、私たちとしては、この世を一日で改宗させるわけにはいかないということを思い出すのがよいと思います。」

一八八一年はもっと明るい希望をもって始まった。京都の知事が辞任し、その後任となった人はリベラルな思想の持主であることがわかった。^{*}新島は書いている。「新知事はやがて私を訪問するおつもりだと聞いています。だとすれば、この人は前任者とは相当ちがった人です。新知事に会ったなら、この都市の教育制度をすっかり改革する計画を提出しようと思います。私の目的は小学校教師たちのための日曜学校を始めることです。」京都府に起こったこの変化の直接的な結果の一つは、市内の大劇場で宗教講演会を開く許可がおりたことだった。第一回目の講演会には四千人が出席し、二十人の弁士が演説した。^{**}こうした集会は深い感銘を与えた。日本で最も影響力のあった日刊紙の一つである『大阪日報』は社説の中で次のように問いかけている。その翻訳をかかげてみよう。

「神道と仏教の崇高で神聖な根拠地ともいふべき京都のまただ中で、イエスの道を説くための大集会が何の反対もなしに開かれたということは、人の力によるのか、それとも天の力によるのか？ 時代の不可避的な傾向によるのか、それとも、そこまで進展してきた人間精神の自由によるのであろうか？ 島原の乱におけるキリシタンの完全な殲滅^{*んめつ}までさかのぼらないで、われわれの見てきたことのみに限定するだけでも、十一文字で書かれたキリシタン禁制の高札が全市民の前に高々とかけられていたのはつい昨日のことのように思われる。年に一度、すべての人に仏教か神道かを登録するよう義務づけた宗門改め^{*々}の令についてもまた然り。今やそのような法令は十四年前の夢となり、わが愛する日本からは永久に消え去った。・・・

維新後六年たって（今から八年前になる）政府は異教禁制の高札を撤去することによって、ひそかにキリスト教容認の第一歩をふみ出した。それ以来この新宗教は、西洋の学問、文明と手をたずさえて、開港地のみならず内陸にまで徐々にひろがってきた。キリストの十字架を頂く教会堂が建てられ、わが国民は到るところで公然と聖書を教えら

れている。すでに信者の中には数え切れないほどの数の人たちが、この宗教の輪郭を学んだ上で、到る所に出掛けて行って福音を宣べ、道徳をすすめ、人々を改宗させ、真理を日々遠くの方までぐんぐんと広めつつある。

かえりみると六、七年前、東京の中村〔正直〕氏がマーティン博士の『キリスト教の証拠』の翻訳を出版した時、わが政府内の一部門においてはそのようなことが黙って許されてよいのかどうかをめぐって、熱烈な議論がなされたことであつた。だが今やどこへ行ってもキリスト教の書物を売る店がある。われわれは今日も一寸、明日も一寸、という風にしかキリスト教は拡がっていないと考えがちである。キリスト教のゆっくりした前進に慣れてしまつて、その急速な進展に驚かなくなっている。しかし紙の上にその前進の足跡を描いてみると、キリスト教が根付くときのすばらしい有様に目をとざすわけにいかなくなる。しかもこうしたすべての前進の中にあつて、われわれが最も驚嘆すべきことは、この記事のはじめに書かれていることなのである。この京都の地にあつてたいがい市民は神々についてではなくは迷信的な考え方に今なおふけている。この地において市民たちは死者の靈に最も深い尊敬をはらっている。わずか十年前に外国の一大使がこの地を訪れたとき、神々の都の土が汚されたのだから、神仏のたたりが市民の上に必ずくだるといふ考えが起つたのであつた。その京都、仏教と神道の聖都の中心部において、今やイエスの道が説かれてゐるのだ！」

新島はアンドーヴァーでクリスチャンの家庭に住み、キリスト教的な訓練に影響されながら学校生活を始めた頃、はじめて、日本にキリスト教の大学を設立しようという計画を抱いたのであつた。維新前であつたその頃の日本の状況と、貧困や病弱と戦いつつある脱国者としての彼の境遇を思い起こすとき、彼がこの計画を白日夢と呼んだことは驚くに及ばないのである。しかしそれは当時でさえ夢以上のもの、すなわち、大望であり、大目的だったのだ。「そ

れを胸にとどめたまま、そのために折っておりました」と新島は述べている。^{*}新島は折にふれてその考えを友人たちに打ち明けてきたのであったが、激励してくれる人はなかった。帰国を前にして、計画を成功させるためにはその共感と関心を得ることがどうしても必要だった聴衆の面前で、彼の心の願いが唇をついてほとばしり、そのときのアピールでもって同志社大学^{***}の礎石を置いたのであった。薄暗い二部屋で七人^{***}の生徒をもって始まった学校は、何年もの間軽蔑と嘲笑の的であり、当局者の憎しみと市民の偏見によってことごとく反対を受けたにもかかわらず、彼の目的はゆらぐことがなかった。今や新島自身がその発展に大いに貢献してきた人々の心情に訴えることのできる時機が到来していた。以前には新島のすべての努力に反対していたが、愛国者として教育問題全般に深い関心を抱くようになってきた京都の市民たちは、最も健全な学問は、彼らがかつて軽蔑していたキリスト教の基盤の上にあるものだということを確信するようになっていた。政府の設立した東京大学の結果に満足しないで、国家からは独立した学校を創設する計画が論じられ始めた。法学部と医学部設置のための資金が約束された。新島はこれらの学部を導入し、同志社のカリキュラムを拡大することについて相談を受けた。このような明るい見込みが展開していったので、彼は長年暖めてきた計画の実現をめざして、彼の目的を公に宣言した。^{***}一八八四年の春、大学設立運動に公の関心をおこすために計画された数度の集会の第一回目が京都で開かれた。^{***}この集会には京都の指導的な役人や実業家が出席し、デイヴィス博士、新島、その他の人々が演説した。五月には、山本氏と新島氏によって準備された次のようなアピールが発行された。

〔明治専門学校設立旨趣——自由訳〕

「日本における最近の政治上の変革は、数百年間にわたって社会の基盤であった封建制度を一掃した。この変化の影響は次第に強く感じられるようになり、社会の変革はめざましく、われわれは今や新しい日本に住んでいるように思われる。どちらを向いてみても、わが国の政治制度、教育の方法、通商、産業を改善するよう主張している人々ばかりである。これらが重要であるという点で、われわれは彼らに心から賛成するものである。ところでわが国の現状をしらべて見るとき、われわれに悲しみを与えるものが一つある。それは何か？ すなわちそれは日本に、新しい科学を教えつつ、同時にまたキリスト教道徳の上に基礎を置く大学が存在しないことである。これこそが、われわれの文明が必要とする基盤なのである。地理的な条件で日本は欧米に劣るものではない。それではどうしてわれわれの文明にはこれほど大差があるのか？ 日本には堂々とした至誠の人が少ないこともまた確かである。それ故にこそ大学が必要である。われわれはヨーロッパの実例から学ぶことができる。十六世紀に、偉大な宗教改革者ルターはこう言った。『子供らを学校に送ることを拒む親たちは国家の敵であり、処罰を受けねばならぬ。』ドイツの哲学者フイヒテも『ドイツがヨーロッパ文明の先端を切っている理由は、ドイツの諸大学から発する力の中にある』と述べた。十二世紀はヨーロッパ文明のあけぼのであった。当時パリ大学ではギリシア哲学が研究され、ボローニャ大学では古代ローマ法が研究された。一六〇〇年になるまでにイングランドではオックスフォード、ケンブリッジの両大学が、スコットランドではエディンバラ大学やグラスゴー大学が、またドイツではブレーハ、ハイデルベルク、ライプツヒ、チュービンゲン、イエナの諸大学が設立された。^{*} 大学はまたオランダ、スペイン、ポルトガル、オーストリアにおいても創立されたのである。アベラール、ロージャー・ベイコン、ケプラー、ガリレオ、ベイコン卿、ロック、ニュ

トン、ミルトン、ライブニッツ、カント、リード、ハミルトンなどはこれらの諸国において大学者として名声を博した。^{*}政治および宗教の改革者にはピム、ハンプデン、ピット、フォックス、バーク、ジョンソン、ウィックリフ、ルター、カルヴァン、ノックスらが著名である。^{**}こうした大学の影響を通して哲学と科学は前進し、専政と封建制は阻止され打破されてきたのであり、僧侶と貴族の権力は抵抗を受け、自由と自治への欲求が点火されたのであった。宗教改革とイギリス革命がヨーロッパの状況を一変させた。一八〇〇年にはヨーロッパに百校以上の大学が存在し、その影響によって文明の前進が加速されたことは議論の余地のない事実である。目を転じてアメリカの諸大学を見るがよい。その数は三百を越えているが、政府の設立したものは僅か八校にすぎない。中でも著名なものはハーヴァード、イエール、プリンストン、アモスト、ウイリアムズ、ダートマス、オベリンの諸大学で、^{***}ハーヴァードは最も有名である。現在ハーヴァードは一一〇名の教授を擁し、図書館には一三四、〇〇〇冊の書物を備え、その基金は一四、八五四、三七二ドルに達している。一八七二年のアメリカの大学数は二九八校だったが、それから七年たつうちに六六校が設立された。アメリカにおける高等教育の発展ぶりは世界の驚異の一つである。神を礼拝する自由を求めてビルグリム・ファーズがブリマスに上陸したのは一六二〇年のことであった。彼らはキリスト教の道徳を基本とした学校を設立した。二百六十年間にわたり、彼らの子孫たちは先祖の精神を受け継ぎ、その目的を達成してきたのである。彼らの信じるところによれば、そのような学校は悪人の数をへらして善人の数をふやすのであり、また学校は自由の精神を養い国家の基礎となるのである。さらにキリスト教の大学は自由の護り手だった。疑いもなく彼らの自由の制度はこの精神の結果なのである。

日本政府は大学の重要性を察知するや否や東京にそれを設立し、さらにまた数校の中学校を建てた。これらの学校

はわれわれに知的、物質的な成長をもたらすであろうが、道徳的な成長はもたらさない。儒教の基盤の上に立つて公の道徳を改善しようとする人々が多い。しかしわれわれは彼らの努力を喜ぶことができない。なぜなら中国の道徳は人々の心を深く捉えることがないからである。すべての東洋諸国はほぼ完全に自由とキリスト教道徳を欠いており、それ故文明は急速な進歩をとげることができないのである。ヨーロッパ文明を生み出したものは自由の精神と、科学の進歩と、キリスト教道徳なのである。結果を原因まで遡って調べてみれば、科学はキリスト教の基盤の上に築かれていることがわかるであろう。それ故にわれわれは、日本の教育が同一の基盤の上に築かれるまでは日本が文明を確保できるとは思えないのである。この基礎があれば国家は磐石の上に築かれる。この基礎は剣をもってしても征服できないし、嵐もこれをこわすことができないし、海もこれを呑むことができない。古い儒教道徳に基礎を置くならば、それは浜辺の砂の上に建てられたも同然、荒浪が打ち寄せれば一挙に崩れ去るのである。

それ故われわれは、進んだ近代科学を教える大学で、しかも純粹な道徳に基礎をおく大学をこそ設立したいと望んでいる。この問題に関してわれわれはきわめて真摯であった。この精神をもってわれわれは明治八年に京都に同志社英学校を設立した。学生数は年を追って増加してきた。しかもわれわれの目的はずっとこれまで、大学を設立することであった。われわれは明治十六年四月にわれわれの目的を公にし、大いに激励を受けてきた。このたびわれわれは京都の友人たちとはかり、その名を明治専門学校と名付けた。われわれは先ず歴史、哲学、政治経済学の諸学科、続いて法律と医学の学科を作るための基金を集めることに決定した。これの達成は容易でない。なぜなら校舎を建設し、教授を招聘するために多額の金が必要だからである。少数であるわれわれは自分たちだけで必要な金を調達することができない。しかし、この大学を今建設するという目的を放棄するつもりは毛頭ないのである。われわれは新し

い日本のために働かねばならない。真の愛国者たるものはすべてそのようにすべきである。われわれの目的を達成し、この大事業をなしとげるために、できるだけ力を貸して頂きたい。あなた方の助力なしにはわれわれの目的は達成できないからである。」

新島はこの「大学設立の」問題のために休むひまもなく働きつめてきた。十年間近くもふんばつてきた緊張のために彼の健康ははなはだしく悪化し、今や友人たちのいたく憂慮するところとなった。すでに一八八二年に彼は休養を取るために中国に行くよう勧められたことがあった。しかし彼はそれを辞退した。その時ハーディー氏あてに彼は次のように書いた。「中国に行けば恐らく日本の兄弟たちの間で嫉妬の感情を引き起こすことになります。彼らは一切のこの世的な楽しみを主のために擲って、金銭的に大いに苦しんでいるからです。キリストに在って私の愛している兄弟たちの蹟きの石となつてはなりません。けれども私はこのままではあまり長続きはできそうにない、だから仕事をやめなくてはならない、と感じ始めています。頭痛のため読むことも書くこともできません。それでも常に何かが起こってきます。ですから、クリスチャンの友人に会うことのない北の国に旅をしようときめました。」

この計画は実施され、彼は一八八二年夏の一部を妻の出身地である「会津」若松ですごした。若松へはほとんど徒歩で、中仙道として知られている中央道を辿り、途中安中と日光にも立寄った。若松で新島は頼まれていた青春時代の手記を執筆した。それは本書のはじめに引用したものである。それをアメリカに送るに当たり、彼はこのように述べている。

「これをもっと早く書き上げなかったことでハーディー様のお許しを乞ねねばなりません。ハーディー様は私を不

孝な息子とお呼びになりはしないでしょうか。こちらでこれを書き始めて以来、自分がいかにとるにたらない者であるかがますます自覚され、書きながら震えを覚えた次第です。この点について、極度の過敏症を克服したと思いません。しばらく前、私は自分をサムシング「何物か」であると思っていました、今は自分がナッシング「無」であると感じています。*

この頃新島は授業することは免ぜられており、また同僚たちのおかげでできる限り日常的な義務から開放されていたのであったが、学校の全般的な総括と、ミッションの事業との密接な関係からして、取るべき休息を取ることがどうしても不可能となった。しかしながら、新島は自分自身の健康のことには稀にしか触れていない。一八八四年一月十四日付の手紙でハーディー氏は新島に、スエズ経由でアメリカを訪問することを提案するにあたり、「君は自分の健康にちょっと触れる程度だが、宣教師団はそのことを深刻に考えている」と述べている。そこで春になると新島はアメリカン・ボードの運営委員会の票決により、「必要とされるだけの期間にわたり、休暇を取ること」を正式に要請されたのだった。ついに新島はこの提案を受け入れた。デイヴィス博士は書いている。「彼を出發させることはなはだ困難でした。私たちは彼が乗船するまでに全くダウンするのではないかと心配していました。彼のたずさわっている仕事の数は驚くべきものであり、出發のための準備をする時間をみつけることさえ殆ど不可能といった有様でした。彼のいのちと仕事を尊重されるのでしたら、大西洋を横切る前に、どうかできるだけ長く休息させてあげて下さい。」友人たちの執拗な勧めに従うことになった新島は、一八八四年三月九日付で神戸からハーディー氏あてに次のように書いた。

神戸、一八八四年三月九日

なつかしきのきわまるアメリカを再訪するようにお招き頂きましたことについて、心から御礼申し上げます。これをきめることは深刻な問題でありました。第一に、私はこれをあまりにも大きな贈物だと感じました。これまでずっと、日本の兄弟たちの蹟きの石とならないために、自分を宣教師諸君と同列に置かないよう努めてきたからです。第二に、私のアメリカ行きを外国嫌いの連中が厳しく批判しないかということです。けれども深刻に考えた末、あなたの大変なご好意をお受けして、もう一度お訪ねすることにきめました。日本人の兄弟たちが反対することは先ずあるまいと思います。教会外ではこの国の何人かの著名な人々が、私が行くことに心から賛同してくれました。大阪の友人たちは強く外遊を勧めています。昨日こちらに来ました。友人たちはみな私のためにこのすばらしい好機会を喜んでくれました。安息日に手紙を書くことはふつう私のしないことでありますが、昨日私は二人の著名な人物と宗教問題について話す機会がありました。^{*}私としてはせめて一行なりともしたためてお礼を申し上げなくてはならない思ったのです。ペリー博士^{**}はただちにここから出発するよう強く勧めて下さいましたが、やはりどうしても先ずしておなくてはならないことをかかえております。」

新島夫人からハーディー夫妻あて

私の尊敬してやまないお二人様に一筆したためさせて頂きたく存じます。きびしい頭痛に悩む主人のことで大いに困惑いたしておりましたところ、ご親切にもアメリカへ里帰りするようにと彼をお招き下さいました。そのご親切の深さは重なり合う山々の如くに考えておりますけれども、それを筆紙につくすことはとうていできないのでございま

す。私の感謝の念はただ神様におゆだねするのみでございます。どうか主人のことをよろしくお願い申し上げます。この夏はどうか完全な休養を取る機会を彼に与えてやって下さいませ。帰国いたしますと多忙になり、こちらではとうてい休息の機会は見つけれないからでございます。主人は学校を拡張する計画でございますので、将来とも彼の心痛と労働はますますふえるものと存じます。このことを思えばはなはだしく心が乱れて参ります。裏のおともをして身のまわりの世話をしたいものと心から望んでおりましたけれども、私が一緒に行けば、助けになるよりは却って重荷になるのではないかと思いました。その上、私どものところには裏の年老いた両親がおりますので、私は居残って両親の世話をしなければならぬのでございます。このように長らく裏から離れていることはとてもつらいことでございますけれども、喜んで堪えていく所存でございます。

ああ、私どもは何と仕合わせ者でございましょうか！ 私たちが神様を全然知らなかった時にも、神様の方では私たちをご存知でいらっしやいました。神様は裏をこの国からお呼び出しになり、そして裏を迎えるためにあなた様をお備えになりました。多くの方々のお助けによって私どもの同志社が設立されました。私は日本に生まれ、無知の中に育ったものでございます。そういう次第でございますから、私は主人を助けることができません。しかし、私は純真な心をもって神様にお仕えることで、主人の助け手たらんとつとめているのでございます。最近私は京都の郊外で女性たちの集会を始めました。はじめは出席者が六人でしたが、それが十人になり、十三人になりました。この愛する姉妹たちを導いていく力はございません。信仰の面で私はほんの子供にすぎないからでございます。私は手始めに一人の人の心を得、やがてそれからもう一人が加わって下さるようになりたいと願っております。私はこの感謝の気持をお伝えするために、少なくとも一度、この世でお二人様にお目にかかりたいと念じております。この感謝の気

持はとても筆舌につくしがたいものではございますが、神様のお恵みによりまして私どもが天国に召されました時には、お二人様にお目にかかり、同じことばでお話する機会を豊かに頂けることを願っているのでございます。けれども信仰が弱いために、私は天国へ入れて頂けないかもしれません。私の信仰が強まるようにどうか祈って下さいませ。ご健康を案じつつ、お願いかたがた一筆したためた次第でございます。

この旅行中に新島がつけていたノートは、彼の多岐にわたる興味を示している。そのノートには歴史上の覚え書き、さまざまな統計、紹介状をもらって彼が会った人々との会話のメモがぎっしりつまっている。彼は到るところで学校や大学を参観し、教育の方法や結果について詳細に記録し、校舎や器具のたぐいの図面も描いている。彼が訪問した土地での建築物、農業や生産物のことを細かく記述し、ほとんどの頁にも生産過程や道具の絵や、自然のスケッチなどが入っている。それは鋭い観察眼と幅広い共感性をもちながらも、批判するよりは学びとることの方に熱心であった人の日記なのである。次に引用するのは彼のノートから取ったものと、この間に書かれた手紙からの抜萃である。

「二八八四年」四月六日

今月五日に京都を立った。全校の生徒、それに三つの教会員を含む友人たちが駅まで見送ってくれた。家をはなれることはとてもつらいことだ。特に、老いた両親（両親とも七十八歳）、妻、学校のことが気がかりである。妻は神戸港に碇泊中のキヴァ号^{*}までついてきた。彼女を御父の御手にゆだねる。彼女は私の私に依存するよりも御父に依存

することの方がはるかによいことなのだから。

四月七日

神学生のために祈る。五時三〇分に下関海峡を通過。天気良好。身体のごあいも良好。

四月八日

五年生のために祈る。午前六時三〇分長崎につく。船の避難所として最適の良港である。港としての唯一の欠点は浅いことだ。船からの景色はすばらしい。港は山に囲まれており、外国人の住宅はたいがい高台にある。小舟の船頭が三十銭で市内のすべての通りを案内してくれる。工芸品の製作所ですばらしい鼈甲細工を見かける。

ロシアの司祭についてオデッサへ行く二人の日本青年が同船している。食事は最高。ボーイは中国人とインド人ばかり。

四月十二日

午前一〇時ホンコンにつく。H氏と共に、^{*}アングリカン、^{**}カトリック、中国、回教それぞれの墓地を見学してまわる。回教墓地の建物はとても風変わりだ。すべて綺麗に、趣味よく設計されている。まるでこの世の天国のよう。中国人の住居区を訪ねる。一箇所では品物が地面の上にひろげられていた。街頭で演説する者、歌うもの、易者、などがいた。一つの通りでは厚化粧した女たちが通行人を誘っている。アヘン窟をのぞいてみると、小さな部屋に二十人の中国人がいて、あの呪うべきアヘンを吸っていた。『チャイナ・メール』紙の編集者に、中国人中のアヘン常用者の割合をたずねてみた。ヨーロッパ人中のアルコール常用者とはぼ同じ、という答えだった。彼らは一日に約十セント分を吸う。驚いたことに、中国人というのはいへんな商売人だ。彼らは中国の製品と外国の製品の両方にわたり、

十二分に取りそろえている。クイーンズ街^{*}の店は美しい。家はたいてい三階建てである。

四月十四日

昨日はユニオン教会の礼拝に出席。参会者はまばら。午後にはC博士^{**}の中国語による説教があった。B主教^{**}の船員たち向けの説教も聞く。ホンコンにはいくつかの宣教師団が来ている。イギリスとドイツから、そしてアメリカからも一団。彼らはまだ日曜学校を設立していない。モリソン宣教師^{***}がカントンで仕事を始めたのは一八〇七年のことだった。バードン主教は一八五三年にホンコンに来了。彼は生徒教約三十人のセント・ポールズ・カレッジの責任者である。彼の主教管区はフーチョウ（福州）からホンコンにまたがっている。中国ではフーチョウからこちら側にかけて自給の教会はない。主教自身が一日に一時間ずつ五人の生徒を教えている。のんびんだらり。この教会員の数は百人。三十一年間の成果が百人とは！ 主教の話では、宣教師たちはまだ中国人の上層階級に近づく道を見出していない。上層の中国人たちは自分の生き方をとても誇りに思っており、西洋の学問や様式を採用したがっていない。事実、上層階級の間に、社会問題や政治問題で、ヨーロッパ文明に向かって接近しようという動きは全くないのだ。海外で教育を受けてきた人々からも声があがらない。ヨーロッパ風をよしとする傾向は皆無である。中国人を教育することはがっかりである、なぜなら彼らは英語だけを勉強しにきて、英語を覚えると、さっさと職につくから。中国には随所に秘密結社がある。人民は政府に飽いている。もし人民が有能な指導者を見つければ、彼らは立ち上がるだろう。或る意味で彼らはみな外国人に対して団結している。だが中国人の間には公共の精神が欠如していると言って差支えないであろう。彼らは政府に不満を抱いている。彼らは本能的に、自分のことは自分でする。日本とちがって公衆浴場というものがない。あんなに汚なくて、しかもあんなにケチであるとは驚き入る。彼らは東洋のユダヤ人で

ある。

ホンコン、四月十五日

私たちは今月の八日に長崎を出発しました。海路ずっと天候にめぐまれて、十二日に当地に着きました。アメリカン・ボードのC・R・ヘイガー宣教師を訪問、同氏は私のためにホテルをとって下さり、市内を案内して下さいました。中国人について判断しうる限りでは、彼らはただかねのためにだけ一生懸命になっているように見えます。かねをもうけるために彼らは朝は早く起き、夜はおそくまで働いています。かねもうけのために彼らは食事ぬきですませ、あらゆる種類の困難に堪えています。ここに滞在している間中、私は、こんにちの私がそのために存在している「日本」国民のことを絶えず考えておりました。昨日は「ボードン」主教を訪ねました。主教は中国人に対して、何となく落胆し、希望を失っていました。しかしながら、遅かれ早かれ、ゆっくりではあっても中国は動き始めることでしょう。キリスト者の会話と書き物の中からは、「落胆」とか「希望を失った」というような言葉を抹消すべきだと思えます。しかし、私はここで主教を批判するつもりはありません。十分に同情を感じておりますし、もし私が彼の立場に居たならばずっと以前に落胆していたろうことは疑いないことです。われらの神はただ単に神であるだけでなく、われらの御父でいますということは何という慰めでしょう。日本を去ることは私にとって大きな試練でした。しかし・・・このことについて書くわけにはいきません。嬉しいことに私はずっとよく眠れますし、激しい頭痛もありません。でも沢山書くのはつらいことであります。

セイロン、一八八四年四月二十七日

暑い航海を五日間続けたあとシンガポールに着きました。主の日でありましたので上陸はせずに、大へん寝苦しい夜をすごしました。船は石炭を積んでいました。上陸した人々も暑さのために同様にみじめでした。月曜日に市内を訪れました。さまざまな人種がいますが、商店を営んでいる人々の大多数は中国人です。埠頭のまわりに立ち並んでいるのは、貧しい原住民や中国人の小さな家です。家は一階建てで、柱が屋根を支えています。草木はすばらしく繁茂しています。私たちは馬車を見つけて市内に入りました。御者はとてもずるい奴でした。途方もない高さにまで伸びたココナツの森が私たちを楽しませてくれました。私は『ジャパン・メール』に似た週刊紙を買いました。四十セントです。裸の子供から実においしいパイナップルを買いました。市内に通じる道はよくととのっており、熱帯樹を植えた植物園も手入れがよく行きとどいています。ジョーホールの藩王^{*}が友人たちに別れを告げるために乗船してきました。彼はイギリス風の服装をしており、腰のまわりに色のついた絹のバンドをつけています。シンガポールは起伏のある島です。海峡に要塞ができれば、どんな軍艦も通過できなくなるでしょう。発展のために好位置を占めていますから、将来はホンコンよりもさらに重要な所になるかもしれません。

四月二十三日

今朝ペナンの港に到着しました。この島はマラッカ半島のちょうど西に当たります。島の幅は約十三マイル、長さ九マイルで、町のある北部を除くと丘陵になっています。熱帯の太陽のきびしい暑さがこたえますので、上陸していった何人かの勇敢な人々のおともをして町を訪れることはいたしませんでした。

〔四月〕二十七日、日曜日

ボーイ長の司式による英語礼拝の出席者は少数でした。もちろんカトリック教徒、回教徒、パーシー教徒は出席しません。若い高級船員たちは礼拝をばかばかしい、退屈なものとな見なしています。その一人がいうには、宣教師が乗船しているから、まもなく嵐が来るだろうとのこと。このため水夫連中は私たちをととても恐れています。私は読み上げる形の祈りは好きませんが、キリスト者たちと一緒にいることは好きですし、一緒に讃美歌を楽しく歌いました。二十五日の午後スマトラが見えました。北西には美しい森に囲まれたプーロ・ウェイ (Pulo Way) があります。その厚い森をすばらしい夕立が通りぬけると完全な虹が現われ、絵かきになりたい気持ちをおこせました。とてもきびしい暑さです。今朝、遠くの方にセイロンの峰が見え始めました。ただしあの有名な香味料のかぐわしいかおりはまだただよってきません。明日はコロンボで船を乗換えることになるでしょう。あの有名な囚人アラビ・パジャに会ったり、キャンディの寺院を訪ねるチャンスがあるかもしれません。何というすばらしい機会を今楽しませて頂いていることでしょう。イタリアの町々のことが目に浮かびます。しかし何にもまして、あなた方にお目にかかるために、なつかしいアメリカにもう一度招いて頂いたことを感謝致します。私の心は絶えず愛する日本の方へひき戻されます。ただ言えることは、日本のためにこそ、今私はここにこうしているのだ、ということです。

〔四月〕二十九日

今朝早くコロンボに入港しました。港は立派な防波堤に護られています。防波堤の上には鉄道と灯台があります。日本の友人と一緒にアラビ・パジャの家まで馬車をはしらせました。門前で馬車を捨てて敷地内に入りました。

一人の若者が用件を尋ねにきました。名刺を差出して、アラビ・パシヤにお目にかかりたいと告げました。私たちが話をしているうちに、背の高い白衣の人がヤシの木陰を行ったりきたりしているのが目にとまりました。若者はその紳士のところへ私たちを案内して名刺を差出しました。彼は喜んで会ってくれ、椅子を持ってくるよう命じました。私たちは東洋風に挨拶をかわしました。彼は私たちの訪問の目的を聞いたのち、英国へ行くところかと尋ねました。私たちがどこで英語を習ったのかという質問も出ました。英語は日本で広く教授されていることを告げました。次に彼は英国が日本に領地を持っているかと尋ねました。もちろん、そういうものはないと答えました。私たちの会話は、何人かの英国婦人の短い訪問のために中断されました。彼は英国の訪問者よりは私たちのの方が、もっと気に入っている様子でした。ところでエジプトについて何かを引出そうとしてみると、彼はその話題について語ることに嫌悪を示しながら、こう述べました。「エジプトがどうなっていくのか、それについては何とも申し上げられません。神だけがご存知です。神がちゃんとして下さるでしょう。」また彼は日本の軍隊の大きさについて、また軍艦は何隻あるかと聞きました。私たちの答に対して「結構ですね」と言いました。すぐれた陸軍と海軍を維持していくよう忠告されました。教育制度についても問われましたが、その方面での日本の進展のことを聞いて大いに喜んでくれました。私たちの答に満足するといつも彼は「ヴェリ・グッド」と言うのです。私はアラブ人の宗教について聞きました。「アラブ人は誰でもマホメット教徒です」という答でした。私がコーランを一冊持っている、まだ読んでいないが、読むつもりでいる、と言うと、喜んでくれました。マホメット教はインドで、また中国で急速にひろがっているそうです。私の宗教は何かというので答えたところ、その答は彼を驚かせました。彼は通訳を通して話していたのですが、時々ブロークンな英語で急にしゃべり出すのです。その声は虎のよう。彼が笑うとすばらしく気持のよい相好

になります。背が高く、太り気味で、顔はふっくらとしており、目は比較的小さく、黒髪と浅黒い皮膚をもち、そして長い白い衣服をまといっていました。従者たちはうやうやしく服従し、彼に愛と尊敬を捧げているようです。別れを告げると、彼は訪問を感謝し、私たちのためにサインをしてくれました。

それから私たちはヤシの森や、町なかや市場を通って馬車を走らせました。現地人の住んでいる通りは汚なくてほこりっぽく、いたるところ不快なおいがありました。店は小さく、品物も少なく、シンガポールやホンコンの中国人の店にくらべて非常に見劣りがします。大ていの家は土を材料として出来ており、一階しかありません。市外には緑の庭と高いヤシの木々で囲まれた別荘があつて、実にあざやかです。いくつかヨーロッパ風の立派な教会堂を見ました。カトリック教会でした。数多くの住民たちが私たちのまわりに群がってきました。そして英語と日本語で「ほかに連中はうそをつきますが、わたしはうそをつきません」と書いた紙きれを見せるのです。まるで真夏のハエのように厚かましくてずぶといのです。何の自尊心もない彼らは、全くの乞食です。市場には見慣れない果物が沢山並んでいました。オレンジは日本のミカンほどおいしくありません。多くの質問をしたかったのですが、おびただしい数の厚かましい乞食に取囲まれ、悪臭ふんぶんたる状況でしたから、果物をいくらか買ったあと、逃げ出してしまいました。

五月五日

ソコトラ島*の向かいを通過中です。この島の長さは七十一マイル、英国領で何人かのアラブ人の漁師が住んでいます。いくつかの流域では野菜の栽培ができます。

五月七日

早朝アデンにつきましたが、検疫のためにやむなく船にいます。アデンの町は不毛の丘の上にあり、一本の樹木さえ見えません。午後「涙の門」を通過するさいに、六隻の船の残骸があまり間隔をおかずに横たわっているのを見ました。

五月十三日

スエズもまだみじめな所です。これと思うような家はほとんどなく、残りは窓もなければタイルもない、アラブ人の低い土の家です。何軒かの家は七フィート足らずで、屋根は平坦であるか蜜蜂の巣のようで、雨漏りを防ぐために干草やがらくたをかぶせています。鉄道の制度もなっていない。監理局長といったものもなく、アレキサンドリアに近付いた頃、車掌と機関士が大喧嘩をしました。すべてが混乱しています。こうしたエジプト人たちにとって、時間はタダに等しいのです。

五月十七日

ブリンディージ^{*}に到着し、汽車でナポリに向かいました。耕作がよく行きとどいており、何マイルにもわたってブドウの木とオリーブの木を見ました。農家はきちんとしていて絵のようです。駅はほんものの石造建築であり、二等車は日本のそれよりもはるかにまじであります。

ハーディー夫人あて

ローマ、一八八四年五月二十九日

今朝聖ペテロ大聖堂^{*}を訪れ、その豊かさと広さに完全に圧倒されてしまいました。筆舌につくしがたい、と申しましようか。特に二、三枚のラファエルの絵を注意して見ました。しかし絵画に対する私の欲求が余りに深いので、ローマ滞在を短縮しなくてはなりません。さもないと絵ばかりつめて見過ごることになるでしょうから。聖ペテロの青銅の像の足指にキスをする善男善女たちには、あわれみを覚えずにはいられません。午後、城外聖パウロ大聖堂^{**}の美しい内部を見ていたとき、もしパウロが今日復活したとするならば、彼はこの建物について、あるいはむしろ、この聖堂を建てた人について何というであろうかと、自問し始めておりました。私はペテロとパウロの二人にむかつて、彼らを記念して建てられたこれらの大聖堂についての、個人的な意見を聞きたいものであります。私自身はあまりに急進的、かつあまりに実地的な人間です。死んでしまっている使徒たちから今すぐに答が引き出せない以上、私自身の意見と批判で満足しなくてはなりません。日本国公使およびA・G・グレイ師を訪問しました。そして公教育大臣をも。ローマ大学の学長にこのイエズス会^{***}の大学を案内して頂き、図書館長のオッタヴィオ・グランビーニ博士と長時間にわたって話しました。初等教育課長と一緒にいくつかの学校を参観してまわりました。そういうわけで、私は全く観光に没頭しているわけではなく、この国の将来とその欠陥についての諸問題を解こうとしているのです。ここは人間について学ぶにはもってこいの場所です。旅行と観光は高くつき、疲労しますので、お目にかかります前に、スイスカスコットランドに適当な休養の地を見つきたいと考えております。先ず体を直さなくてはなりません。支出には念を入れて注意深くしています。宣教師たるものは金持のような旅をしてはなりません。ナポリとローマに

おける豊かな経験をお知らせすることは延ばさざるをえません。事柄により、考えていたことと現実とは相異があります。よくチベル川は澄み切った美しい川だと考えていたのですが、事実はまあ何という汚ない川でしょうか！

ハーディー夫人あて

トリノ、一八八四年六月十八日

フィレンツェには七日間滞在し、多くの時間をすばらしいピッティー美術館とウフィッツィー美術館*ですごしました。しかし私にいちばん興味のあったものはサヴォナローラの遺品*で、それは彼の常住した古い独居房の中に保存されています。私はサヴォナローラの伝記の著者であるヴィラーリ博士*にきわめて興味深いインタヴューをしました。

彼は宗教の問題にはむしろ無関心でした。彼は自由な国家における自由な教会というカヴール***の主義を抱いていま

す。私が彼自身の宗教上の見解を聞いたとき、彼は答をためらいました。しかしキリスト教について彼は「それはこの国にとってすばらしいものであり、強力な開化の力をもっています」と述べました。サヴォナローラの精神はまだ残っていますか、という問に対して、答は否で、本当にがっかりしました。たしかにサヴォナローラは死にました。

しかも彼が火刑に処せられた広場には彼を記念する飾り物があるわけがなく、あるのは神話上の飾りだけです。ああ、この僧侶の精神はイタリア人の心の中で死に絶えたのかもしれませんが。しかし彼は福音的信仰の持主の心の中に依然として生き続け、今なお語っているのです。私はまた東洋学者ピッツィーニ博士を訪問しました。彼は沢山の中国語、日本語の筆写本を持っています。私は多くの学校を訪ねました。イタリアの聖職者たちはフランスやドイツの聖職者たちほどにはよい教育を受けていないと思います。しかし私は数多くの東洋学の碩学に会いました。中でもピ

サのテザ博士^{*}の如きはドイツ語、オランダ語、英語、フランス語等を話し、アラビア語、日本語、中国語、そして多くの象形文字言語を読みこなす人です。彼はピサ大学のサンスクリットの教授です。ピサでは社会科学と言語が、ナポリでは哲学が大いに研究されています。

紅海でかかった熱病が完全になおりましたので、勇気を出してあの有名な斜塔に登りました。日がかたむき、静かで美しい夕方でした。西の方、地中海の彼方にすばらしい日没、そして、北西の方向にはアペニン山脈の峨々たる峰が見られ、私のまわりにはピサの町と、よく耕された農地がひろがっていました。この絶景を私は一生忘れられないでしょう。

大急ぎでジェノヴァを訪れました。壮大な山のふもとを流れるポー川の美しい流域を通過しました。

トリノでプロテスタントの礼拝に出席しました。出席者はおよそ二十名。貧しい服装の、無知な顔つきの人々で、ほとんどは女性。みじめな有様でした。ローマ・カトリック国イタリアの様相は暗たんたるもののようです。彼らは神を信仰するのではなく、宗教的な形式を信仰しているのです。トレ博士に同行して頂き〔トリノ〕大学と聖ヨハネ病院を訪問しました。

この地の人々が旅行者のポケットからおかねをしぼり取る技倆はまことにたいしたものです。私は三、四週間休養するために、ワルドー派の人々の住む流域のトレ・ペリチエ^{**}に行くことにきめました。私はイギリスの国会議員、カントベリー大主教、その他の著名な人々あての数通の紹介状を持っていますので、本当はここで休養すべきかどうか迷ってしまうのです。あるいはそうすることが最上なのかもしれません。しかし英国で時をすごしたいという気持は非常に強いのです。観光がキリスト者としての仕事から私の思いをそらせてしまうのですが、日本のことを考えずに

いることは至難のわざです。これからさき長年にわたって日本のために働けるに十分なだけの力をつけたいと望んでいます。

ハーディー氏あて

トレ・ペリチェ、一八八四年七月一日

この流域はトリノのま西に^{*}当たり、トレ・ペリチェはいちばん大きな町です。ここには若者たちのための大学と女学校とがあります。人々はプロテスタントの信仰を保持しています。トリノのアメリカ領事は、美しい景色とすばらしい空気の故に、ここに来るようすすめてくれました。領事はこの流域の住民については何も言いませんでしたけれど、私は以前からこの地のことを承知しており、もっとよく知るために、その歴史を学んでみたいと思っています。ご存知の通りこの地の人々は実にきびしい宗教的迫害を受けてきたのです。彼らは自活するに十分な程度状況にあり、その他のことは何もできません。貧困さえなければ彼らはイタリアにとってのパン種となることもできるでしょう。すでに近辺の山地に足をのぼし、多くの知りあいを作りました。彼らと一緒にいるのは楽しいことです。まだ多くのものを讀んだり調べたりすることはできません。ここ数年にわたって私の健康は下降線を辿ってきましたので、それをたて直すにはいくらかの時間を必要とします。お手紙の中で、私たちの京都の学校のためのかねについては心配しないようにと、強くすすめて下さいましたね。しかしながら、私は一日たりとも日本のことを思わずにすごすことができないのです。私の心は天国と日本——この二箇所にあります。そうです、もう一箇所、アメリカを付け加えなくてはなりません。私は医学校を開設するための金をアメリカで集めたいと望んでいます。これについてはすで

にペリー博士と連名であなたに書きました通りです。私はまた日本で私たちの学校のために特別な講座を作ることについて、友人たちから賛同を受け始めました。事柄はまだ海のものと山のものともわかりませんが、そのために働かねばならぬと感じています。沈むか、泳ぐか。成功するか、失敗するか。そのどちらかに相違ありません。この問題についてこれ以上書いて、いつものお叱りを受けるといけませんから、もうやめます。特別なお願いを申し上げます。どうか日本のために強烈に、熱誠をこめて祈って下さいますように。私の心は日本のために燃えており、それを制御することができないのです。

新島はフィレンツェでワルドー派の人々に深い興味を抱くようになった。彼らの神学校を訪れ、トレ・ペリチエにひと月以上も滞在して彼らの歴史、制度、生活様式を研究した。次にかかげる随想はこの時期における彼の日記から抜萃したものである。ほとんどはベッドの上で書かれたものだが、それは遠出をしていて嵐に会い、やむをえず山中の小舎で一夜を明かした時にかかった風邪のために臥せるようになったのである。

「沈黙。沈黙は徳の一つである。沈黙していれば大いに安全である。賢者はあまり多く語らない。舌はよい目的に役立てるようにと与えられているのだから、よい目的のために使うべきだ。空虚で無意味なことを語るときには名声を傷つけることがしばしばあり、また、男らしさをなくするものになる。空しい、おしゃべりの男の中には不安定な、モミガラのような要素を見い出すことがよくあった。沈黙の中には気高く澄み切った何物かがある。沈黙は何かを隠すことではない。悪人には口数の多さで悪行を隠すことがあるからだ。沈黙は男らしい自己制御である。沈黙の

人は家庭にとつても社会にとつても祝福である。沈黙は決してにがにがしい顔つきと結びつくべきものではなく、上機嫌な顔とこそ結びつくべきだ。空虚なおしゃべりはかきみだが、沈黙は慰めといやしを与える。むなしなおしゃべり男を測るのはたやすいことだ。しかし賢明な沈黙の人の心の深さを測ることは容易でない。しかし語ることによつて善や真理のためのあかしがなされる場合には、沈黙を破らねばならぬ。ああ、われわれの発する言葉の何という大きな部分がこの世の空しいことがらについてやさされ、真理のためにはいかに少ししかついやされないことだろう！言葉がいったん口から出ていくと、それは焼け土の上に水をこぼすようなものだ。それが二度と返ってくる可能性はないからである。言つてしまったことは言つてしまったことだ。それはわれわれの人生の事実となるのであつて、それについてわれわれは将来申し開きをしなければならぬ。しかし、とりわけ、悪い思いを抱かないことだ。悪い思いは邪惡で空疎なおしゃべりの源だからである。^{*}」

「何とみじめなことか。われわれは沢山の計画をたてるが、ほんの少ししか実現しない。計画は、しばしば何かによつて挫折させられる。」

「人々を辛抱強くもてなせ。英雄になりたければ、辛抱強くあることだ。兄弟が非道な振舞いをするなら、彼にやさしい言葉をかけてあげられる機会を待とう。彼を立腹させてはならぬ。キリストにある兄弟がやつて来たならば、彼を去らせてはならぬ。『聖なる獣は一枚の草の葉さえふみつけたりしない』というが、これは、神の御心はどんなおろかな人間、どんな邪惡な敵をも輕蔑し給わないという意味だ。人を落胆させてはいけない。神のために他人の惡

を辛抱せよ。神はわれわれの悪を辛抱強く忍んで下さるからである。神はただちに怒り狂ってわれわれを正したりしないで、いろんな機会を用いてわれわれをいやし、長い年月をかけてわれわれを清めて下さる。他人に対するわれわれの義務をなおざりにしないようにしよう。大海をみよ、何と美しいことか。しかし海は陸地から流れこむ沢山の汚物を受け容れなくてはならない。海は汚物を受け容れ、それを浄化する。海のようにあれたら幸福な人といわねばならぬ。自分自身についてはあらゆることに細かくあれ。しかし他人と接するときには、十分に計算して、立腹させないように注意しよう。」

「荒、つ、ばい、こ、と、い、ん、ぎ、ん、な、こ、と。親切な心をもった人の荒、つ、ばい振舞いは、全くそのつもりもないのに示される、こぢんまりとした不自然ないんぎんさよりも、はるかにましである。日本は世界でも最もいんぎんな国の一つである。だが残念なことに、そこに心がこもっていない。みせかけのいんぎんさが国民の習性となったのである。これは本当のまじめさの結果ではない。いんぎんさは本当の愛と親切に付随して出てくるものであって、まじめさのないいんぎんさというものは、一種のまやかかしである。」

「実務的、性、格、イタリヤ人はいんぎんそうに見える。だが彼らには実務的、性、格、が欠けている。彼らは本来、気楽にやっという、こ、う、という性格であり、できれば仕事をのぼしたがる。彼らは誰かに押されなければ動こうとしない。迅速ということを知らないのだ。イタリヤ人は大変よくしゃべり、すぐに興奮する。イタリヤでは、時は金なり、というわけにいかない。なすべきことはただちにこなすがよい。おしゃべりに時を浪費するな。それをせよ、そうすれば事は

終るのだ。」

「人間の偉大さ。人間の偉大さはその人の学問にあるのではなく、自分自身にとらわれないことにあるのである。大いに学のある人は無学の人より一層利己的になりやすい。十字架上のキリストを仰ぎ見よ。キリストこそがわれらの模範である。ああキリストは何と気高く、偉大で、慈悲深く見えることか。自己を忘れ、真理の大目的のために自分自身を進んで献げようではないか。また、心から悔い改めて、謙虚になろう。これを私は人間の偉大さと呼ぶのである。」

「真の英雄崇拜者。たいがいの日本人は英雄を崇拜する。日本人は自分たちの見上げる英雄に導かれるのでなければ、にっちもさっちもいかない。しかし英雄が導けば簡単についていくのである。日本人は英雄の、とうとうと感情をあおり立てる言葉によって動かされる。日本人には個性が欠けている。たいがいの英雄崇拜者はその英雄と同じ色に染まるものだ。彼らの弱点は、彼らがその英雄以上に出られないことである。英雄がまちがいや失敗をおかせば、彼らもまた同じくまちがいや失敗をおかす。英雄が倒れると彼らもまた倒れる。日本の歴史を吟味してみれば、日本ではそうであったことがわかる。日本では自分の利害を度外視して頑張った英雄が一人もいなかったこともわかるであらう。英雄は一般大衆より一層利己的なものであり勝ちだ。もし日本人の心が英雄中の英雄、世界がこれまでに生み出した最大の英雄に向けられるならば、日本の将来には革命的なことがおこると私は確信する。その英雄はソクラテス、孔子よりもはるかにすぐれていたが、しかも彼は貧しい者の友であった。彼はアレクサンダーやナポレオンよ

りもはるかにすぐれていたが、自分の満足のために何十万人という罪のない人々の血を流したりする代わりに、人々のために自分自身の血を流した。彼は自分の人生に何ら利己的な目的を持たなかった。彼は完全に神聖であり、しかも完全に単純であった。彼はこの世にあって枕する場所を持たなかったが、永遠にわたって宇宙の王座についている。もし日本人が英雄を持たなくてはならないなら、この英雄、この英雄中の英雄をこそ崇拜するがよい。彼を崇拜していけば、最上の色、つまり清らかさという色に染まっていくであろう。この範囲の中にはなお十分に自由の領域がある。人は悪い有害な職業以外であればどんな職業でも選んでよいのである。キリストに従っていくならば、われわれは人間の本当の自由を獲得し、個性を確実にもつことになる。ああ、日本国民が、人間の弱さをはるかに超えて立ち給うこの英雄に関心を向けるようになればかと、私はどれほど願っていることだろう。」

「教壇に立つ機会が再び来るなら、私は教室でいちばんできの悪い学生に特別の注意を払うつもりだ。そうすれば教師として成功することはうけあいである。」

「神学校^{*}に関する方策。われわれは磨かないダイヤモンドのようでありたい。内部に輝く部分を秘めているならば、外面のざらざらは気にかけないでいこう。次の三項目をわれわれの永続的なモットーにしよう。一、われわれの礎石としてのキリスト。二、立派な教師。三、よくととのった図書館と完全な設備。この三者がわれわれの神学校のまことの光る部分となる。余分なレンガやモルタルは私のつましい趣味に合わない。私が心から欲しているのは内部の磨きの方である。それこそがレンガや石やモルタルよりもはるかに、思慮深い日本人たちの尊敬をかちえるに違いない。」

「ふつうの観察者なら磨かないダイヤモンドに気付かないだろう。経験を積んだ宝石商は一目でそれと見分けるのである。その中に秘められているすばらしい美しさ。われわれが社会の中で光らないためにこの世がわれわれに注目しなくても気にかけない。もしあのすばらしい美しさを内に秘めてさえいれば、われわれにとってそれで十分ではないか。もしわれわれの内部にキリストの命と光とを宿しているならば、われわれは最も貴重なダイヤモンドなのだ、たとい外面はざらざらのままで磨きがかかっていなくても。」

「失望している人のことをたえず思い出せ。」

「約束。約束は急いではたすようにせよ。明日までのばしてはならぬ。ひょっとしたら明日という日はこないかもしれぬ。来たとしてもほかの仕事に忙殺されるかもしれないからである。ひとにむかってあらゆる種類のいいわけをすることは、一種の弱さであり、恥である。はいといいえをはっきり言うべきである。するか、それとしないか、である。不精は禁物。仕事は中途半端のままで残すな。まじめさは透明な水晶のようなものである。しかし愛は蜂蜜のようなものであって、常に甘美で、にがさを含まない。」

「心の中に思っていることを語るように努めよ。心の中で本当にそう思ってもいないことを語ってはならぬ。本当に思ってもいないことを言うのは、道徳的な弱さである。直接にずばりと言う傾向はアングロ・サクソン民族の中にいちばんよく見出される。」

「クリスチャンの中には偏狭で愚かな人がいる。けれどもキリスト教はおおらかさと活発さと進歩を生み出さねばならぬ。偏狭さと愚かさは死んだ信仰の結果である。塩がその味を失えば何の役にもたない。」

「人々を一つの事例からだけ眺めて判断を下すのはきわめて危険なことだ。注意深くあらねばならぬ。何となれば、ある事についてはさっぱりだめな人であっても、他の事については非常に得意である、といった場合があるからである。いわゆる完璧な人物にも、何らかの欠陥があるにちがいない。その人の気質、教育、環境、人生における状況といったものを見分けることだ。異常なことが起こった場合、その人がどう対処するかを見るがよい。早まって批判しないこと。きっとその人をまちがって判断することになるからだ。クリスチャンらしいやさしさをもって判断せよ。厳しすぎてもいけないし、細かすぎてもいけない。天の御父が私たちを愛し給うように、人々を愛すること。もし愛がこちら側にあれば、ちっばけな批判精神は一切消えるだろう。ああ、他人に対してあまりにも批判的な目を向けるということは、何と不幸で不健全なことだろう。他人に何かの欠陥を見つけた場合、それをあたかも自分自身の欠陥であるというふうに取りすること。そして他人の欠陥を二度と見ないようにすること。兄弟が成功した場合には、彼がさらにもっと成功するよう念ずること。兄弟を羨望の目で見ないこと。彼が善良であれば彼をほめ、彼のために祈り、彼の例にならうこと。誰かが友達に関してよいしらせを聞いたとき、その成功を喜ぶかわりに、『だって、あいつは、こうなんだぜ』と言うのを聞いたことがしばしばある。弱い人間はどこにでもいっぱいいるものだ。教育のある人々の間には大へんな競争がある。このことに注意せよ——病気であるとき、また不幸である時には特に辛抱強くあれ。」

「何でも屋になるな。田舎町を通るとき、店に品物がいっぱい並んでいるのを見かける。しかし一つ一つの品を綿密に調べてみると、どの種類も在庫がごく僅かであることに気付くのである。多くの分野について幅広い知識をもつのはよいことである。だがこの田舎の店をまねてはならぬ。種類はごたごたが多いが、それぞれの品数は乏しい。われわれは少なくとも一つの科目または専門分野に精通していなければならぬ。そういう専門をもつことはすばらしいことである。生涯の成功は主としてそれに依存することになるだろうから。真理の戦いに臨むときに、これをわれわれの攻撃、防御の両用の武器にするがよい。われわれは才能は乏しいかもしれないが、それをがっしりとした、重いものにしよう。単純な目的を単純な心で追求せよ。そうすれば遅かれ早かれ目標に達するだろう。空中に向かって矢を放つな。目標を確実にねらった上で矢を放て。的を外れたなら、何度でも満足のいくまで繰返すのだ。才能があり気位が高くて、心の定まらない人は、価値のある仕事に成功したためしは一つとしてないのである。」

「善をなしうるといっておきの機会は決して逃がさないこと。銃にはいつもたまをこめておくこと。獲物を見つけたらそれをねらってすぐに発砲せよ。獲物は決して人を待たないからである。隣人に善をなす機会を見つけたならそれを逃がさないこと。明日までのばさないで、ただちにそれをせよ。なぜならその機会は二度と返ってこないからである。鳥獣を射つのは単なる遊びにすぎないが、主のために人をうち取ることは重大な仕事である。銃に命の火薬と天から授かったたまをこめて、いつでも撃つ用意ができていなければならぬ。人を得ようとする狩人の中には、銃にたまをこめないでいる人が多い。だからキリストの王国が人々の間にもっと早く拡がらないのである。」

「神の火。キリスト教の牧師の中には非常に高い教養の持主があり、説教の草稿を書くときにはきわめて手際よく考えをまとめる人が多い。いわばギリシアの大理石の像のようにすばらしい出来ばえである。ところが、残念なことにはその中には熱がない。熱は火がなければ生じない。説教の中に聴衆の心を熱くする火が欠けているとすれば、それはゆゆしい事だ。人々の心を熱するためには神の火が必要である。この火は毎日祈り求めるものだけにだけ与えられるものである。自分の才能と知識だけをたよりにしている者は、この大いに必要な神の火を自分の聴衆のために、また自分自身のためにも求めることを忘れ勝ちである。そのような人の心は会衆に何と冷たく感じられることだろう！その心には火もなければ命もない。もしキリストを告白する者一人一人がこの神の火を持っているならば、キリスト教世界はどんな様相を呈するであろうか。ああ天の父よ、われらにこの火をお与え下さい！われらがいかに小さな者であろうとも、真の火さえあれば、世界全体をさえ燃やしつくすことであろう。ほんのちょっとした火花がカナダの広大な森林を燃やしたのであった。小さなランプの火がシカゴという大都市の三分の二を燃やしたのであった。時には神の火をまねて、人工的に火をもやしている人もいる。けれども彼の聴衆は遅かれ早かれ、それを見破る。それはにせものの火だからである。そのような者を神は祝福し給わない。ああ神の火がわれらの内に絶えず燃え続けますように！」

「人生において成功したときにはキリストの御言葉『それはわたしである』（「マタイ伝14・27／マルコ伝6・50」）を思い出すことにしよう。キリストこそがあらゆる真の成功の原因なのである。恐ろしく感じた時、失望した時、孤独な時には、主が『わたしである』と言われたことを思い出そう。ああキリストが現に存在し給うということは、何という

慰めであらう！」

「今朝めざる時、世界の或る重要事件のための祈りのことを考えていた。たった一つの祈り、たった一つの言葉や行いが、巨大な影響をおよぼすことがある。ああ、われらは何という責任のある存在であることか。このことはさらにもっと自覚したいものだ。」

「『すべてが終った』『ヨハネ伝19・30』。今は際の発言としてこれほど大胆なものが、これまでにあっただろうか。」

「この世界には利己的な野心を全く超越した人がいるだろうか？ その人は自分が利己的な野心から完全に自由であるということをして知ることができるだろうか？ ほんの少しのいつわりからも完全に自由であるといったような人が存在するであろうか？ 文明社会からいつわりを根絶することはできるであろうか？ 何人の人が神に向かつて、『わたしはいささかの野心、いささかのいつわりもなしに一生を生きました』と申し立てることができるだろうか？ 神の独り子を除いて、そのように完全なタイプの人間を、アダムの子孫の中に見た人がいただろうか？ 将来そういう人を見る望みがあるだろうか？ こんな疑問を抱くことはあまりにも愚かなことだ。しかし私はそういう人に出会ってみたいものである。」

「目的がないというのは命がないということだ。疑ってばかりいる人は何事も達成しない。だから、もし疑いの心

があるなら、先ずその疑いを晴らすことだ。中途半端な科学者、学者、キリスト者、政治家、慈善家、といったものはこの世で何の役にも立たない。」

八月五日に新島はトリノを立て、コモ湖とサンゴタール峠を経由してスイスに入った。^{*}同行者のアレグザンダー・トンブソン博士は二十一年間にわたってユダヤ人やトルコ人の間で働いてきた人である。ゲンエネンでこの同行者と別れた新島は、同じ場所出会ったドイツの紳士と一緒に徒歩で進んで行った。それから起こった事柄については、彼自身の言葉で記述するのがいちばんよからう。

ルーツェルン、一八八四年八月九日

ここに同封したものは本月六日にサンゴタール峠のホテル・デュ・モン・プローザで書いたものである。そこであの時私は心臓の発作に襲われて大いに苦しんだのであった。あと一マイルで峠にたどりつくというところで異常な呼吸困難を覚えた。私は同行のドイツ紳士に、とても同じペースで歩くことはできないので、先に行ってくれるようにたのんだ。従って彼は先に進んだ。約十メートル進むたびにとまって息をついた。へとへとになりながら峠のホテルに到着した。しばらく休んでから中食となったが、食欲がなく、それに咳が出はじめた。ソファアの上で休んでみたが、体の調子は悪くなるばかり。医者と呼んでもらおうとしたけれど、医者はいないという。悪寒を静めるためにスプーン一ばい分のブランデーを飲み、からしを塗布した。この頃になると、これはひょっとして主がこの変りやすい世界から、あの不変の輝かしい世界へと移して下さるおつもりなのかもしれない、と考え始めた。その瞬間に、日本

に對する私の思い、伝道事業に關する計画、キリスト教主義大學を創立するという長い間の私の白日夢、妻と両親に對する愛情、ハーディー夫妻に對する感謝の念——これらが火山の爆發さながらにふきあげてきたのである。それでもなお、こういった感情の中で、とりわけ、自分自身を天の御父の御手の中に完全にゆだねまつたと信じている。私は繰返して御父に、御心ならばみ胸の中にわが魂を受け入れたまえ、と祈った。胸の中にあるとんだ底の苦痛にあえぎながらも、御父の私に對する親切なおはからいと、特に御子イエス・キリストを通してあらわして下さった許しと恵みの故に、私は何という仕合わせを感じ、何という感謝をささげたことであつたろう。

それから私はベッドの上に起きあがり、スケッチ用に持参していた画用紙二枚に、同封の遺書を書いたのである。それを書いているうちに氣を失いかけた。夕方に少しよくなったように感じはじめたので、お茶を飲んだ。非常によく眠った。翌朝はさらによくなったが、アンデルマツトに向けて出発する力はなかった。アイロロから乗物に乗り、ひる頃にアンデルマツト^{*}に到着、その午後はそこで静かに休んでいた。医者にみてもらいたいと思ひ、八日にルーツェルンに向けて出発した。ストックカー博士に胸を見てもらつた。私の心臓は健康な状態でないので、二、三日は静養するように、と医者は警告した。

私はこの文書を保存しておきたいと思う。なぜなら私はそのとき、自分の人生でかつて感じたことのない、きわめて特異な感じを味わたつたからである。あの時以來、私の生命は私のものではないということをますます感じるようになった。生きるにも死ぬるにも、私はキリストの為に生き、死ななくてはならない。願わくは主がイエス・キリストの義の故に、この罪に傷つた魂を常に保護の御手の下におき給ひ、主の御国の中でいちばん小さな者に数えて下さるように。

主の最も価値のないしもべ

ジョゼフ・H・ニイシマ

〔サンゴタール峠での遺書〕

「二枚目」私は日本人で、私の生まれた国に派遣されたキリスト教宣教師である。病気のためにやむをえず祖国を出た。昨日ミラノからアンデルマツトに到着し、ホテル・オーベルアルプに宿泊した。今朝ドイツの紳士といっしょにサンゴタール峠へと旅立った。私の容態が悪くなったので、彼は私をここに残してアイロロへと進んでいった。呼吸が苦しい。これは心臓の故障にちがいない。私の所持品は若干の金とともにホテル・オーベルアルプに預けてある。私がここで死んだ場合には、どうかミラノ市トリノ通り五十一のジュリーノ牧師^{*}あてに電報を打ち、私の遺体の処置をお願いして頂きたい。どうか天の御父が私の魂をみ胸に受け容れて下さいますように。一八八四年八月六日。J・H・ニイシマ。これを読んだ人は誰でも私の愛する祖国日本のために祈って下さい。

「二枚目」私はジュリーノ牧師に対し、遺体をミラノに葬って頂くようお願いする。そしてこの文書を、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市ジョイ通り四のアルフィアス・ハーディー氏あてに送って頂きたい。同氏とその夫人とはここ二十年間にわたり私の恩人であった。主がお二人に、この世にあって、あの世にあって、十分な酬いをお与え下さいますように。どうかただちにハーディー氏あてに電報を打って頂きたい。どうか私の頭髮を少し切り取り、それを日本の京都にいる私の愛する妻と年老いた両親あてに、キリストにあって分かちがたく結ばれていることのしるしとして送って頂きたい。日本に対する私の計画は挫折するであらう。しかし有難いことに主はすでに

日本のためにこれだけ多くのことをなして下さった。主が日本においてさらにまだすばらしいことをして下さると私は信じている。願わくは主がわが愛する祖国のために、数多くの真のキリスト者と気高い愛国者を生み出して下さいますように！　アーメン、アーメン。^{*}

ルーツェルン、八月十七日

大いに歩くつもりで、ミラノで登山杖を買いましたが、私の計画はだめになりました。それでもなお、何が来ようとも受け容れるつもりです。経験から学び、決して悲しんだり、落胆しないことを決意しました。ああ、何というきびしい決意でしょう！　私は今スイスの高等教育について資料を集めています。その次にはボンでクリストリープ教授^{***}を訪問します。健康のためにこうした試練を経ておりますが、太陽はいつも私の前を照らしてくれます。バーゼルのミッション・ハウスから丁重な招待を頂きましたので、来週はバーゼルに行きたいと思ひます。^{***}

ルーツェルンでかかった医師のすすめに従って新島はスイスの徒歩旅行の計画をあきらめ、バーゼル、ウィースバーデン、ボン、ブリュッセル、ロッテルダムをへて英国へと向かった。ウィースバーデンの旧友のところしばらく滞在し、ロンドンで二週間すごし、ケンブリッジ、オックスフォードの両大学を訪問したのち、リヴァプールから船に乗り、一八八四年九月二十七日に^{***}ニュー・ヨークに着いた。ボストンに向かう途中、ニュー・ヘイヴンのポーター総長のところで二、三日間すごした。彼の日記には十月一日付で次のような短い記入がある。「ボストンが視界に入ってきたとき、何と嬉しかったことか。わたしは州会議事堂の金色のドームと、諸教会の尖塔を見た。^{***}ボストンでは

何という歓迎を受けたことか。」

十月七日に新島はボストンを立てオハイオ州コロンバスに向かった。それはアメリカン・ボードの第七十五回年次大会に出席して、十日の夜の集会で短い演説をするためだった。ボストンに帰ってから彼は、日本のキリスト教主義高等教育のためのアピールを執筆した。このアピールはアメリカン・ボードの主事たちやシーリー総長、ホブキンズ総長*の推薦の言葉を付して印刷され、教育関係の友人たちの間に内輪に配布された。同じ時期にボードの運営委員会にあてて出された手紙と一緒に、そのアピールを次にかかげる。***

「日本伝道促進についての試案」

アメリカン・ボード運営委員会御中

委員の皆様。日本伝道促進についてのふつつかな試案に皆様のご注意を喚起したいと思ひまして、以下の提言を差し上げる次第であります。この件に関して詳述する前に、先ず日本国の過去と現在の状況に注目して頂きたいと存じます。

日本はご承知のように、十六世紀において一度、外国との通商や、イエズス会の事業のために、門戸を開いたことがあります。しかしながら或る理由のために、オランダ人を除く全西洋諸国に港をとざし、ローマ・カトリック教会は非人道的な迫害と根絶によって阻止され、十字架を信奉した者たちの犠牲者は恐らく六十万人を下らないと考えられます。このようにして日本は隠者のような国になりました。その孤立と排他性は徹底したものでした。日本は外部の世界とは全く関係を持つとうとしなかったのです。その頃以来、わが海域に近づく黒船(われわれは当時外国船を

そう呼んでいました）には発砲することが、国のきびしい掟だったのです。ついにわれわれはアメリカの外交官に強く押されてアメリカと条約を結ぶに至りました。これがわれわれの歴史のあけぼのでした。国民は突如として、深い朝の夢を破られたのです。たちまち党派根性が幅を利かせるようになりました。国内の動揺は恐るべきものでした。所々方々で流血、暗殺が起きました。まもなく先の革命が突発し、その結果はわれわれの目にさえ最も驚くべきものにうつりました。將軍の專制的な政府は粉碎され、天皇の統治権は現天皇ご自身において回復されたのです。天皇の大義のために戦い、また外国人を水域から追いはらう決意をしていた誇り高い人士たちは、突如として見解を変え、最も熱心な西洋文明の唱道者になりました。進歩のためには大きな障害になったと思われる攘夷の精神が、こうした実力者たちによって一掃されました。国家の運営は全く異なった基盤の上でなされ始めたのです。熱心で有能で視野の広い愛国者たちが国政に当たるよう天皇によって任命されました。太政官制が布かれ、八人の大臣が任職を受けました。封建制度のもとにあった大名はすべて、国家の公益のために、その所有していたものを政府に差し出しました。その家臣たち、つまり誇り高いサムライたちは、帯刀を禁じられました。社会から追放されていた被差別民も人民の中に数えられるようになりました。ただちにヨーロッパ諸国の軍事制度が導入されました。軍艦が建造され購入され、ドックが作られました。国内の汽船会社と外国の汽船会社の間にはげしい競争が起きました。郵便局が到る所に作られ、国中に電信用の線がはりめぐらされています。公立学校も絶えず改善されてきました。トンネルが開通し、重要な商業の中心地を結ぶために鉄道が布設されました。東京の通りにはガス灯がつき始め、大通りには外国風の馬車が走っています。首都にはアメリカ流の軌道馬車ができています。ヨーロッパ流の銀行が沢山開業しました。いくつかの重要な都市では商工会議所や証券取引所が仕事を始めました。警察制度が注意深く組織され、適切に運用

されています。大きい町には裁判所ができ、個人の権利や財産は今までよりもはるかによく守られるようになっています。小学校と中学校の制度は一八七二年にはじめて出発したもので、外形に関する限り、今のところ非常に成功しています。同じ頃に東京大学が天皇によって創立されました。そこには今二千人以上の学生がいます。印刷所が活版に仕事するようになり、新聞や雑誌は「昔の」三倍の早さで発行されます。公的なニュースはとも早く広まっています。物質科学が大きな支配力をもつようになって、古い迷信を駆逐しています。神道と仏教は政府や人民の支持を失いつつあります。公開講演の弁士たちは熱心に彼ら自身の政治的、科学的見解や理論を押し広めています。探求精神の持主の間では自治が討論のトピックスになりつつあります。

こうしたすべての物質的、社会的な変化は二十年にも満たない期間のうちに魔法のように生じたのであり、そしてこの事実そのものが、日本における伝道事業も同様にときはきと進んでいくのではないかと信じさせるに至りました。そうです、現在の日本の変化しつつある状況が、今こそ情熱と活気をもって福音を導入すべき時であると考えようにしむけたのです。さもないければ、物質中心主義や社会主義といった反キリスト教的要素が、国家の健全な発展のためにはやがて最大の障害となることでありましょう。仏教と儒教は私たちの行手をたいして妨げるものではありません。しかし外国から伝えられるこうした近代の不信仰の要素は、将来必ず私たちの敵となるのです。政府は最近、無法状態と不満と無秩序への傾向が、わが国にあることを認めました。或る人々は道徳ぬきの自由を叫び、宗教ぬきの文明を求めて狂奔しています。あらゆる種類の犯罪が今までにもまして頻発しています。警官の数をふやすと、犯罪人の数もふえてきました。学校に修身を導入しましたが、教師自身が道徳を欠いていたのでは役に立ちません。このように、臣民を改善しようとして政府が打った手はことごとく失敗に帰しましたので、政府は無意識の

うちに、單なる人間の頭の作り出したものよりはもっとすぐれた何物かを求め始めています。

他方において、京都において皆様のミッションが運営してきましたキリスト教教育は、最近大きな重要さと、輝かしい将来性を示し始めました。学校は創立後まだ日も浅いのですが、すでに英学校から四十六名、神学科からは二十八名の卒業生を出しました。この卒業生たちは政府の設立した東京大学で学んだ者たちには劣るかもしれませんが、彼らの高い道德性と熱心なキリスト教徒的性格の点で、人々の大きな尊敬をかちえております。或る県の知事は、私たちの卒業生の一人に面接したあとで言いました。「この男のような若者は、わが県には一人もいない。この若者は何という純粹な目的と、高い道德性をもっていることか」と。『東京毎週新報』の主筆もわが卒業生の一人であります*。

二、三年前、彼は首都において、創立後日も浅い諸教会の僅かな支援をえてあのキリスト教週刊誌を始めました。彼は自分自身の個人的収入のすべてを注ぎこまねばならなかったのです。しかし彼はその週刊誌を、かねもうけのためでなく、それがどうしても必要であるということで、敢然として発行し続けています。彼はどんな論者がキリスト教を攻撃してきても、いつでも正面から渡り合います。

私たちの伝道者養成所「神学校」の若い学生たちが示した道德上の勝利は、京都の市民たちの目に大きな驚異と映っています。それは実にわが国民生活の中で前例を見ない事実なのです。京都で最近スタートしたばかりのこのキリスト教学校は、すでに健全な果実を生みました。私たちは自分たちの存在を知らせようと努めたことはあまりなかったのです。しかしどうしたわけか、私たちは日本の指導者層に知られています。指導者たちは私たちの学校のことを始め始めております。彼らのうちの何人かはすでに息子たちや友人たちを、キリスト教の影響のもとに教育してもらおうとして送ってきました。そして彼らは、もし私たちの学校の水準を上げることができたなら、もっと喜んでそう

することでありましょう。彼らは自分たちのために、さまざまな専門科目の講座を設置してほしいと強く要望しているのです。もし同志社がそうするならば、きわめて多数の若者たちが悪い仲間に入って非行に走り、ついには完全な破滅におちいることから救うことができるのだと、彼らは言うのです。同志社での五年間の課程が終ったあと、彼らが息子たちを他の学校に送ってさらに教育を受けさせなければならないことは大変残念なことであります。日本においてはおつう、学校というところは若者たちにとってきわめて危険なところなのです、但しキリスト教の教えの行われていない学校では。物質主義の影響はふしだらな行為と必然的に結びつきます。学校から少し離れたところに住んでおり、私たちとは全く面識のなかった或る金持の商人が、数年前に京都を訪問し、学校の理事者とはじめて会ったときに、もし私たちが同志社につらなる法学校を創設するならば、少なくとも五千円提供することを約束致しました*。

それ以来ずっと彼は私たちに好意を示し、現在彼の娘二人はミッションによって支えられている京都ホーム〔同志社女学校〕で教育を受けています。専門研究への要望は外部からだけでなく、私たちの教会からも出ています。彼らはまた京都で医学校を出発させるよう私たちに要望しています。キリスト教の事業家たちが有馬で避暑をしておられたJ・C・ベリー博士のところに三人の代表を派遣して、アメリカン・ボードが京都の伝道者養成所との関連で医学校を建てて下さるようお願いしたのは約三年前のことです。彼らはクリスチャンである医師が宣教のためには非常な助けとなることを発見したのです。昨年京都で私たちの日本基督教伝道会社の総会が開かれた時にも、皆様のミッションと関わりのある諸教会の全代表はこの問題を話し合い、医学校設立のためにベリー博士に再び全会一致のアピールを送りました。彼らのすべてが一致したことは、京都で医学校をスタートさせるために、もしベリー博士がアメリカン・ボードから予算をもらって下さるのであれば、彼らは土地を買い、建物を建てるために何らかのことをしよう、

ということでした。私たちのキリスト教事業の現段階ではそのような学校が必要である、という意見を各自が表明しました。もしそのような学校が、私たちの学校の場合と同様、キリスト教の基盤の上に設立されるならば、それは伝道事業だけでなく、貧しい人々の福祉全般を大いに推進させるものと確信します。ペリー博士がすでにこの件に関して大衆に訴えられましたように、私は博士がその高貴な目的を遂げられるに十分なだけの資金集めに首尾よく成功されるよう希望し、祈っております。

米国をめぐってにして日本を発する二、三日前に、京都の著名な市民およそ七十人に二回集まって頂き、キリスト教教育という題で演説を聞いてもらいました。J・D・デイヴィス博士その他の人々に、このテーマで演説をお願いしました。こういう次第で私たちは講演会を開催し、聴衆から心暖まる承認を勝ち得ました。彼らは一八九〇年を期して同志社にいくつかの専門の講座を設置するに十分なだけの資金を集めることに同意したのです。その年には天皇が憲法発布に関連してなされているかねてからの約束を実施なさることになっています。京都の有力者たちは、日本の政治史におけるこの重要な出来事を記念したいという考えなのです。私たちはこの気高い贈物に謝意を表明しましたが、それをキリスト教の基礎の上で実施することについて、完全な自由を認めて頂くのではありません、私たちとしてはそれを頂くわけにはいかないと断言しました。この大胆な意志表示に対して、彼らは何の反対もしませんでした。彼らはこの問題を私たちが自分の手で引き受けて、彼らに代って実施してほしいと言いました。二年前でさえ、そのようなことは夢想だにしませんでした。世間がそのような信頼感をもって私たちとの交際を求め始めたということは、大きな驚きであります。しかしながら私たちはのぼせ上がっているわけではありません。静かに待ちつつ、彼らが私たちに何をするかを見たいと思います。

最近わが国の指導的な政治家たちが宣教師たちと会見しましたが、それによると、政治家たちがキリスト教について何かを知りたがっていることは明白です。或る政治家たちは諸外国がわが国を異教国として扱うことを痛切に感じているのだと思います。故国からの最近の知らせによれば、何人かの政治の指導者と編集者たちは、信教の自由を求めて叫びをあげ始めましたし、キリスト教に好意的であるような、きわめて大胆な記事を発表したといえます。最近政府が大胆にも在来の異教的宗教との関連を断つたためにとった処置を見るにつけても、神は私たちのために戦っておられるのだと、深い恐れをもって申し上げたいのであります。

私たちの若い教会について申しますと、彼らは皆様に注目して頂く値打ちがあると考えます。他の場所ですうでありましたように、彼らも今までは軽蔑され、排斥されてきました。しかしながらここ一、二年の間に彼らは社会の真正面に足をふみ出しました。私の受け取った最終の報告によれば、彼らは自給している上に、純粹な伝道事業のためにおよそ一千ドルを集め、その中のいくつかの教会では収入の四分の一以上をこの目的のために献げました。日本国の全教会の代表が昨年、第三回全国会議に集まりました時、^{*} 私たちを迎えてくれた東京の諸教会のまったく中に起こりつつあった、最も祝福されたリバイバルにあずかることができました。この信仰復興運動によって点火された会議の精神が私たちを激励し、そして今世紀中に三千六百万同胞の大部分の心を獲得できるようにしようとの望みを起こさせたのです。あちこちでリバイバルが起こっています。特にわが伝道者養成所の内部で火のように燃えあがったりバイバルは、^{*} 日出ずる国全体が義と平和の御子の王国になるのだという、新たな勇氣と確信を私たちに与えてくれました。十年前の私たちの祈りは、扉が開かれますように、でした。しかし今の祈りは、こんなに広く開いた扉を通して、有能な働き人たちが入っていきますように、であります。ぐるりから援助を求める叫びがきこえてきます。この

声を拒否することはきわめてつらいことです。私たちキリストの働き手たちが偶然にか、あるいは計画的にか寄り合う時には、今たずさわっているキリストの仕事以外には、何の議論のトピックも持ちません。「われら何をなすべきか？」——これが私たちの間での合言葉です。そして長い観察と、注意深い考慮の末に、私たちの到達した結論はこれです——有能な日本人伝道者を教育し、育成せよ。

一つの計画を提出して皆様のご考慮を煩わす前に、こんなに長々と歴史的事実を述べてきましたことをお詫び申し上げます。しかし私としては、現下の差し迫った必要をご理解頂くには、そうすることが必要であると感じた次第でありました。それでは次の計画にご注目を煩わせたく存じます。

第一、キリスト教の牧師には能う限り最高の教育が与えられるべきであること。

第二、クリスチャンである医師に完全な教育を与えることは、「伝道の」偉大な補助手段であること。

第三、法学、政治学、経済学、哲学、歴史、文学等の講座を設置すれば、これが強い魅力となって、最良の学生たちをキリスト教の影響下に引き入れることができること。

私は第一点を直接のキリスト教事業と見なしますので、この点については後で詳述したいと思います。第二点は第一点に勝るとも劣らない重要性を持ちます。第三点は間接の事業とでも呼ぶべきものですが、それは静かに発酵して影響力を発揮し、力強くなっていく過程であります。直接の伝道の場合、私たちは多くの反対にでくわすことがあります。この間接的な努力に対して誰一人反対する者はありません。それはいわば子供に対する母親のやさしい影響力のようなものであって、あまりに親密なために拒絶しがたく、あまりに印象が強いので忘れるわけにはいかなるのです。しかしながら、学生たちをキリスト教の友とするだけが私たちの目的ではなく、彼らをキリストのもの

にして生命を得させること、それが目的なのです。私たちはなぜ未来の指導者たちの心を捉える努力をすることができないのでしょうか？ なぜ、あらゆる階層の人々を漁る者になれないのでしょうか？ 私たちの持っている銃は近代的改善をへたものであります。故に私たちもまた上から賜る力を発射するために、与う限り最良の銃を持たねばなりません。誰が神の選り給う者たちを屈服させられるのでしょうか？ 私たちは神の御旗の下に戦わなくてはなりません。日本国の全体をキリストのために勝ち取らなくてはなりません。現在のところこの問題はぼんやりとした夢のように見えます。しかし私たちはこの夢を実現させて下さるように、神に目を注いでいます。計画の第二点と第三点は、これらの目的のための特別な寄付金なしには取り掛って頂くわけにはいきません。なぜなら皆様の第一義的な目的は福音を広めることにありますから——このことは私によくわかっています。そういうわけで、これらの点はしばらく措き、計画の第一点について述べさせて頂きましょう。これこそは私たちにとって最も大切な点であり、それは皆様にとっては何ら新しいことではないのです。皆様はすでに京都における計画を実施なさり、数多くの有能なアメリカの働き人たちを成功裡に派遣して下さいました。私たちは皆様のお取りになった大胆な処置に心から感謝申し上げます。長老派^{*}、メソジスト、イギリスの聖公会の兄弟たちがそれぞれ神学校を設置しましたので、今では日本在住宣教師の間では日本人牧会者をいかに教育するかが主要な話題になっています。アメリカン・ボードの宣教師諸君が成功しましたことは、主として、宣教師諸君がその事業に私たちの参加をすぐに受け容れて下さったことによるものであります。彼らは国籍はアメリカですが、心は日本人です。彼らは愛情をもって私たちの側に私たちと共に立ち、私たちの大部分の者はこのことをますます感謝しております。〔新島は続けて神学校が特別に必要としている事柄を列挙し、その将来計画を詳述する。^{**}〕皆様の中には私たちが知育に傾きすぎているとお考えになる方があるかも知れませ

ん。しかしながら、キリスト教教育をぬきにして、一握りの宣教師たちがどのようにして何百万人という、おびただしい数の人々に近付いていけるというのでしょうか？ 皆様はそれが何とのろい、落胆させるような歩みであるかときっと思われることでしょう。宣教師たちは国の内陸部に住むことさえ許されていないのです。ですから最良の魚が捉えられるところで網を打って頂きましょう——私の申す意味は、いわゆるサムライ階級、すなわち大小を帯びる特権を持っていた武士階級に属していた学生層のことです。（ここにその武士階級の記述が続くのであるが、それはすでに前の頁に引用した。）アメリカン・ボード宣教師団がこれまで日本において成功してきたことは、主として宣教師たちが国の中心部、すなわち神聖なミカドの古都において伝道者養成所をあれほど早い時期に設立したことによるのであります。あの養成所で教育を受け、現在雄々しく伝道事業に邁進しているキリストの働き人たちは、一人の例外もなしに、武士階級の出身です。皆様はあの大胆な企画をよもや後悔なさっているわけではありませんまい。私たちはトルコや中国の場合のように、小学校の維持をお願いしているではありません、なぜなら日本人は子供らの初等教育は自分らの手でなしうるからです。私たちはまた教会を援助して下さいと申し上げているわけでもありません。大部分の教会は自給しているからです。また、男らしい日本人は金をねだることを恥とします。しかしながら、私の同胞に福音の祝福を与えるためには、私は喜んでこの身を差し出して恥を忍びます。しかし私たちがどうしてもこの特別な高配をお願いしなくてはならないのは、大きな圧力が私たちの上にのしかかっているからであり、同時にすばらしい将来の展望が開けているからに外なりません。私たちは今革命的な過渡期にあるのです。日本の歴史にこのような好機はかつてありませんでしたし、将来それがあるとも思えません。これこそは日本民族の救いのために神が定め給うた時でありましょう。この絶好の機会を逸すれば、それは二度と再び返ってくるとは思えないのです。私たちの

義務は今はたさなければ、裁きの御座の前に立つあの恐るべき日に私たちは何と言われるでしょうか？ それを思えば私の血は血管の中に煮えたぎり、心臓が痛みます。「鉄は熱いうちに打て」——私はあなた方のこの格言の礼賛者です。どうか力を増強して下さい。二十五年間でもって皆様の大事業にけりをつけて下さい。そうすれば同じ力を他にまわすことができます。結局のところ、それがより経済的なやり方であるのです。

皆様。ながながとお引き留めしました。私の書きました事の中に皆様のお気に障ることがあったとすれば、心からお許しを乞いたいと存じます。しかし、十字架を担う、取るに足らぬ一宣教師ながら、また祖国をまじめに愛する者として、私は内にこもって沈黙していることができないのです。沈黙すれば、深夜の夢の中でさえ叫び出すことでしょう。つけ加えて頂きますが、私はこの紙片の上に心のありったけと祈りとを流れるままに注ぎました。それだけでなく涙もまた注いだのです。すでに損っている健康にとって危険なことでありました。しかしながら、どれほどの犠牲を払っても、皆様のご高配を賜りたい——これが私の動かない決意であります。心をこめて、祈りをこめて、この計画にご賛同賜りますようお願い申し上げます。神が皆様に神の道をお示し下さいますように。

ふつつかな友であり、同労者である

ジョゼフ・H・ニイシマ

日本におけるキリスト教主義高等教育のためのアピール

古い日本はほろんだ。新しい日本が勝利をえた。古いアジア的方式は静かに消えつつあり、最近移植された新しいヨーロッパの思想は力強く、はなばなしく成長しつつある。ここ二十年間に日本は一大変化をとげ、大きく躍進した

ため、もはやもとの状況に帰ることは不可能になっている。日本は古い衣をかなぐり捨てた。今や、よりすぐれたものを採用する用意がととのった。毎日おびたらしい数の新聞が全国に配られ、読者の間に新しい変化を求める新鮮な欲求を絶えず作り出している。日本の指導者層も古いかたちの専制的封建制に堪えられなくなり、またアジアの道徳、宗教のすり切れた教義にも満足できないでいる。二、三年前に彼らは憲法を要求する声をあげ、すでに天皇から、一八九〇年に憲法を發布するという約束を得ている。もろもろの異教は彼らの探求心からすれば、単なる古い迷信の残骸にしか見えないのである。

最近義務教育が小学校において実施され、学校数はおよそ三万に達した。これは一般大衆の知識を刺激し、高めるのに大きな役割をはたすものであることが立証されている。東京帝国大学は年々百名にのぼる高度の教養を身につけた卒業生を世に送り出し、この人たちは或いは官吏として或いは個人の資格で、それぞれ責任ある仕事につきつつある。もう一つの大学がやがてこの国の二番目に重要な商業都市である大阪に政府の手でたてられ、高等教育を熱心に渴望している若者たちを受け容れることになる筈である。^{*}最近の日本における外形上の進歩について長々と述べる必要はなからう。それについては次のように言えば十分であろう。日本沿岸の水域には今や日本の船舶がひきもきらずに往来している。道路は絶えずよくなってきている。トンネルがあちこちに掘られ、重要な商業都市を連結するために鉄道が敷設されている。全国津々浦々にいたるまで電信網がはりめぐらされた。これほど短い期間に日本がなしとげてきたものを概観するとき、われわれは日本が必ずやヨーロッパ文明の形をとるであろうこと、そして日本は、その国家目的を達成する栄誉を見るまでは、決してやむことのない国であると考えざるをえないのである。

最近の変化と進歩をもたらすために、日本は痛みの中で莫大な財産と貴重な血を犠牲にしてきた。事実、日本の勝

利は高い価を払ってあがなわれたものである。それは急速に、しかし立派になしとげられた。それは急激な運動であった。しかし驚くべきことには、日本は自らたどってきた道中、ほとんど誤ちを犯さなかった。日本は能力が許す限り最善をつくしてきた。政治上の革命の最も重要な時期はほとんど過ぎ去り、政府も社会も、まもなく或る新しい形へと展開していくのであろう。しかしどのような形をとるというのか？ 筆者にはこれからすぐ先のことが、過去よりもっと深刻な問題に見えるのである。われわれの将来は何であるのかという問が、われわれの間で必然的に問われている。たしかに日本は自主的な立憲政府をもつよう運命付けられている。日本はその国民を完全に教育しなくてはならない。もし自由な憲法と高等教育が国民に保証されるなら、これこそはすばらしい偉業といふべきである。しかしながらこれら二つの要因は、まさに言論の自由をもたらし要因なのであって、このために自由な意見同士の間に恐るべき衝突をもたらしかねないのである。だから、それを阻止するものがなければ、国家をあげてのともんでもないほどの混乱状態におちいることが日本の運命となるかもしれない。今の日本のように、国民が自分勝手な歩み方をするにまかせておけば、国家再興への望みは永遠に失われたといふべきであるかもしれない。しかるに、危急の際には、常に無限の知恵をもって国々を支配し給う神が、この国家的なわざわいと絶望からわれわれを救い出すために介入し給うたのである。十字架を背負うたアメリカの宣教師たちがわれわれの国土に上陸し、国民の魂を救う福音を宣べ伝えて下さったのは、早すぎも遅すぎもしない、まさに絶好の時であった。彼らのまじめな働きと絶え間のない祈りによって、キリスト教会の礎はまもなく築かれたのだった。

日本で伝道を開始したすべてのミッションは数年間の経験をへてから、日本で宣教をすすめる上で最上と思われる一般的な政策を、一致して採用するようになった。それはすなわち牧会に当たる者として日本人のクリスチャンを育

てる、ということである。現在日本にはその種の学校が六校以上ある。日本の国土でこのようにして育てられた人たちはあちこち出掛けていって新しい教会を設立した。短い期間のうちに多くの魂を新しい信仰へと改宗させるにあたって彼らがすでになしとげたことがらは、単なる人間の力であったとして説明するにはあまりに大きな事実であるように思われるのである。「神はわれらのために戦い給う」——これがわれわれの叫びであったといつてよい。アメリカン・ボードの傘のもとでたった十六年前に日本の中心部で始まったミッションは大きな祝福を受け、最近では大きな収穫の喜びを経験した。最新の報告によれば現在三十三教会、三千人の教会員、十四人の按手礼を受けた牧師、九人の仮牧師がいる。この七月に現場の一宣教師はボードに書いた報告の中で次のように述べている。「一月以来わがミッションとの関連で六つの教会が組織されました。ひと月に一教会の割合です。」兄弟たちの賢明な導きを通して、この諸教会には宣教精神が大いに養われてきた。彼らはすでに日本基督伝道会社、さらにまた教育会を組織して、福音宣教事業を遂行するためにアメリカン・ボードの宣教師団と協力している。それはこぢんまりとした出発だった。しかし自給への欲求はすでに彼らの努力の中に明白にあらわれている。ここで喜んで触れさせて頂くのであるが、われわれの教会は大部分が自給の教会であり、教会のうちのいくつかは創立時以来ミッションからの金銭的な支援を一度も受けたことがなかった。以上はアメリカン・ボード宣教師団が日本に第一歩を印して以来、なしとげてきたことのあらましである。しかしその成功の原因について、ここでどうしても述べておかねばならない。

もちろん悩んでいる魂に平和の福音をたずさえていった宣教師諸君が、現場を大いに足によって往き来したという事実は否定できない。けれどもその功績の相当な部分は、諸教会にきわめて熱心な、克己心にとんだ日本人の兄弟たちを派遣することをめざして、京都に何年か前に設立された、アメリカン・ボードの教育機関に帰せられるのであ

る。この学校は五年間の英学教育と、さらに三年間の神学教育を行なっている。学校は創立後まもないものであり、まだ十分に設備がととのったとは言えないが、それでもなお日本国の塩^{*}となるよう運命付けられているものと思われる。学校は完全にキリスト教の基盤の上にたてられており、今ではヤソの学校として人々から公然と認められている。学校は国中の各地から多くの若者たちを惹きつける中心となった。たいいていの者は未信者のままで学校にくる。学校を出ていく前に、若干の例外はあるが、ほぼすべての者がクリスチャンになっているのである。

この学校を拡大し、改善してほしいという要望が絶えずなされてきたので、アメリカン・ボードは最近、さらに多くの人を送り、さらに多く資金を出して学校を強化するべく異例の措置をとられた。そこでもっと多く建物^{**}がたてられた。設備の購入も進んだ。図書館には書物がふえた。英学校普通科も近年は大いに改善されてきた。神学科もまたカリキュラムを拡大するために大胆な一步をふみ出した。それでもなお、しなければならぬことが沢山ある。もしもわが国にわれわれのミッション・スクールよりもさらに高級な学校がないのであれば、わが校の現状はかなりよいものだといえよう。しかし政府のたてた大学は近年非常な発展をとげ、多数の卒業生を送り出すようになってきた。貧弱な教育しか受けていない者は社会の指導者としては役に立たないとして、公職から退かなくてはならない日が、われわれのところにもやがて来るであろう。そのような社会の中で、キリスト教の伝道者として第一線を占めるためには、われわれの若者たちは一流の教育を受けなくてはならない。日本で十年間の経験を積んでみて強く確信することがある。それは、日本人を教化するための最良の方法は日本人の伝道者を育て上げることであり、そのような伝道者は日本でみつける最良の若者たちに最高のキリスト教的教養を与えることによってのみ確保できる、ということである。それは高くつく仕事であるかもしれない。しかしそれは最後には必ずつぐなわれて余りが出る。ミッションの

事業が信仰の事業であるべきことはもちろんである。しかしわれわれの場合、知的教養はどうしても無視できないものである。よりよい教育を受けた者はより大きな仕事をすることができる。伝道者としての資格をよりよく満たしている者はそうでない者にくらべて、自給し、自己の拡大をはかるような教会を一層早く組織することができる。そういうわけで、最良の若者たちに広い教養を与えることが、彼らを主の御用のために勝ち取り、備えていくのに最も必要欠くべからざる手段となるのである。伝道事業を實踐するというこの大きな要求以外に、高等教育について考慮を要することが今一つある。

われわれの学校には、その環境が伝道者になることを許さない若者や、また伝道者には不向きな若者が何人かいる。彼らはわれわれのところにやってきて、五年間の英学の課程を修める。しかし、学校には神学以外には高度の課程を置いていないために、さらに学問をしたい者はどこかの所に行かねばならなくなる。彼らはこのミッション・スクールに居る間にキリストに導かれる。しかしよそへ行けばキリストを捨てる危険が生じる。彼らはまだ年も若いのである。彼らの信仰は十分に固まっていない。彼らはなお手当てを必要としている。彼らは不信仰の深みにおとされてしまふには貴重すぎる宝のようなものである。彼らがよく行くことになる学校というのは東京帝国大学のことであるが、そこでは国家との関連のためにキリスト教は全く排除されている。そこでは彼らの信仰はさめてしまうことがある。彼らはかつて見出した道から迷い出ることがある。そのような学生についてはどうしたらよいのか？ 解決しにくい深刻な問題である。われわれの考える唯一の道は、「同志社で」二、三の学問分野のための講座を備えることである。それにより、彼らは将来の有用性のために利益をえることになるであろう。もしも医学校が設立され、クリスチャンの医師がそこで養成され、キリスト教の伝道者たちとともに手に手を取って、主の御用をはたすために送り

出されていくならば、これはわれわれの宣教事業を助け、押し進めることになるであろう。日本で十二年間すごし、最近帰国された一宣教師は、この目的のためにアメリカの人々に緊急のアピールをして下さった。^{*}けれども医学校を始めるには莫大な金が必要であるので、同宣教師の要望に対してこれはというような反応はまだあらわれていない。

昨年京都で、同志社において政治学、歴史、文学、哲学の講座を設けようという、いま一つの運動が始まった。

同志社の関係者はこの決定的な処置にふみ切らざるをえなかった。なぜなら第一に、われわれはあの若者たちがその専門分野の学問を修めるために、キリスト教学校の聖なる壁の内側に彼らをとどめておくことができると感じたからであり、第二に、われわれは、神学以外にもそのような科目が設置されれば、喜んでわが校に來たがる者たちを惹きつけることができると思ったからである。アメリカの友人諸君の中には、われわれが軌道から外れ、もともとの学校計画からは無縁な何かを始めようとしている、と見る人がいるかもしれない。われわれもまたはじめには、そのような意図はなかった。しかし現状がどうしてもこのような針路を取らざるをえなくさせるのである。またわれわれがあまりにも野心的に事業を進めようとしていると行って、非難する人があるかもしれない。そのような人々に対し、われわれは時勢に取り残されることを恐れている、とお答えしよう。もしわれわれが地の塩であるよう運命付けられているならば、われわれは取り残されてはならない。将来国家を指導しようという有望な若者たちを獲得してこれを育成すること、そうしていけない理由があるだろうか？ 北部の人々が南部の黒人を高めるためにやったこと、東部の人々が西部の新しい人々を育成するためにやったこと、それは宣教師を派遣すること以外に、強力な大学や神学校を移植することを通してであった。これこそが日本の新しい世代を育て上げるための真の道を示しているといえよう。もしわれわれが学校をただ神学教育だけに限定しているならば、社会の中でわれわれが影響を及ぼしうる範囲はキリ

スト教の教会だけに限られてしまふかもしれない。しかし、もしわれわれが完全なクリスチャンの教師陣のもとで神学以外の他の専門分野を若者たちに提供するならば、それは或る階層の若者を捉えて、学校の中で彼らを教化するためのすばらしい機会となるであろう。それ以外には彼らの心を捉える方法はないと思われるのである。

われわれはクリスト教が全人類に益をもたらすものであることを信じる。すべての人々をクリストの方へと誘い入れるためには、低い所と同じく高い所にもわれわれの影響力を拡大していけない理由があるだろうか？ なぜわれわれのクリスト教主義学校の中で、クリスチャンの伝道者や教師を養成するのと同じく、クリスチャンの政治家、クリスチャンの法律家、クリスチャンの編集者、クリスチャンの商人、を養成することに対し、深刻に反対しなくてはならないのであろうか？ クリスト教によって日本を救うということ、これが不肖われわれの目的とするところである。われわれは東洋人の魂と肉体は完全に清められるべきであり、天におけるごとく地においても、クリストの輝かしい王国を建設するために主にむかって献げられなくてはならない。もしわれわれが、神の御心に沿うて、パンのかたまりの全部をふくらますために、社会のさまざまな領域において人々を養成するのでなければ、われわれがぐずぐずしている間に他の連中がやってきて、すぐに破滅のたねをまきはしないかと恐れる。救い主がルカ伝十六章八節で仰せられたことを想い出して頂きたい。「この世の子らはその時代に対しては、光の子らよりも利口である。」

高等教育に関してそのような措置をとれば、当然のことながら、野心のある学生たちは神学科から他へと引っぱられていくのではないかという不当な恐れが起るかもしれない。あるいはそうかもしれない。しかし英学校（普通科）にはこれまで以上に多くの学生が入学してくるであろうし、その結果何名かは、神学科に大きな損失を与えることなしに他の分野へまわすことができるであろうとわれわれは信じている。それどころか、われわれは他の学科から神学

科へと何人かの学生を惹きつけることさえできるであろう。そのような措置のために何らかの不都合が起こるかもしれない。しかしそれにしても、そのために達成される益によってつぐなわれて余りがある、ということにもなりうるのである。ここでこの企てに関していくつかの理由を述べることを許して頂きたい。

一、そのような措置は若者たちをして普通科の課程を終わつたのちにも学校にとどまらせ、さらに研鑽をつませることになるであろう。それは彼らのキリスト教的な性格の発展強化に貢献することになるろう。

二、そのような措置は思慮深い父兄の意に沿うことであろう。すなわち彼らは当然のことながら、若者のおちいりがちな悪や腐敗に対する防波堤となれるくらいにしっかりとした徳性を養い、育てるような学校へ、子弟を送りたいと思うであろうから。

三、このようにして広い教養を身につけた若者たちは、必ずや、社会によい影響を及ぼす機会に非常にめぐまれるであろう。社会の各層において、よい教育をうけた、まじめなクリスチャンたちの言行は、直接間接にこの大目的を大いに助けるであろう。時には間接的な努力の方が、直接的な努力よりもっと素早く結果をうむものである。

四、この措置は神学科に深刻な害を与えるどころか、必ず神学科を益し、強めることであろう。

五、われわれは専門課程に力を入れることによって、キリスト教教育に対する幅の広い基盤をおきたいと望んでいる。

今やこの措置を取って、国内でもっとも優秀な若者たちを同志社に集め、最高の善と、最高の目的のために、彼らを育て養うべき時が熟しつつある。このようにしてわれわれは、この大突撃を試み、三千七百万の貴重な魂をキリストの為に獲得する仕事に乗り出さなくてはならない。真理の種子は今すぐに播かねばならぬ。ぐずぐずしていると折

角の好機を不信心者の手にわたすことになり、大変なわざわいを招き、あの美しい島帝国を取り返しのつかないほど不毛の地と化してしまふことであらう。ああアジア第一等のうるわしの国日本よ！「もしわたしがあなたを忘れる

ならば、わが右の手を衰えさせて下さい。わが舌をあごにつかせて下さい。」〔詩篇137・5-6〕

すでに述べたように、京都では、特別な部門のための講座を設置すべく、募金運動が去年始まった。しかしわれわれの仲間は非常に少ない。いま国民は不景気のためにうちひしがれており、さらに最近、非常な洪水が国土に破壊をもたらした*。そういうわけでわれわれは彼らから多額の寄付を期待することはできない。昨年この目的のために特に京都のあまたの名士に参集を求めたとき、われわれは彼らに一八九〇年までに資金を与えてもらいたいと強く要望した。それは天皇が憲法を發布される年であり、われわれはこの政治上最も記念すべき年を記念して大学を設立したいと願ったからである。この訴えは彼らの間に大きな熱意をよび起こした。中には分に應じてできるだけ寄付を約束してくれた人もあった。だからわれわれは二、三人の日本人教授を傭うにちょうどい程度の資金は達成できであらう。しかし若干名のアメリカ人を教授として確保するに十分なだけの金を受けることは、とても期待できないのである。そういうわけで、アメリカの友人諸氏から、政治学、歴史、文学、哲学の講座を設置するために二、三人分の教授招聘用の資金を与えられるならば、われわれの目的を助けて頂くこと甚大というべきである。近代ヨーロッパの不信仰の大波がどれほど危険な仕方で日本の岸辺に打ち寄せているか、米国ではわかって頂ける方が少ないのではありませんか。けれども、わが国が最近辿ってきた道を深刻に注目し観察してきた日本人の目には、現代は容易ならぬ時期に思えるのである。日本における将来の戦いは外国の侵入者との戦いではなく、それは必ずキリスト教対不信仰の戦いとなるであらう。

神がご自身の御国のために戦われるのだからといって、われわれは準備もしないで平静を保っていればよいのであろうか？ われわれが自分の戦いを戦うのでなければ、神はわれわれを助け給わないのではあるまいか。今こそわれわれは日本を腐敗と不信仰から救うために、渾身の力をふるって、キリスト教教育とともに、伝道事業を押し進めるべき時である。アメリカン・ボードは賢明にも、その力の及ぶ限り教育の方面で、われわれに援助の手をさしのべて下さった。しかしわれわれの仕事をさらに効果的に進めていくためには、まだまだしなければならないことが残っている。主の軍隊は、戦いがまだ始まったばかりのところで妨げられてはならない。戦場に次々に強い人々を送りこむためには、強い手段が講じられなくてはならないのである。

ところでこのアメリカの偉大な共和国の中に、差し迫った国家的危機からわれわれを救い出すために、時宜にかなった援助の手をさしのべて下さる方はないものであろうか？ この国には貧しい人間を益するためには自分の財宝をどのように用いるのが最善の道であるかを深刻に考えている方々もおありだと思う。そのような方々に対し、われわれはまじめに懇願し、声を大にして「われわれを思い出して下さい！」と叫ぶものである。願わくは、神が心ある人の心に触れ給うて、そのたまものの一部をわれわれに与えさせられますように。こうして、アメリカ合衆国と日本の間の永続的な平和の記念碑として、日本にキリスト教主義高等教育のための講座が設置せられ、それを通して、何百万人という日本人とその子孫が、祝福を受けることができますように！

「アピール」終り

新島はアメリカ訪問中にも、彼の地位とは切りはなすことのできない心痛や心労から解放されはしなかった。日本の将来性は期待を超えてひろがっていき、より大きな機会があらわれると、それをつかまえて利益をあげようとする

野心家もあらわれた。同志社の若い卒業生たちが痛切に感じていたことは、同志社の教育水準がさらに高まることであり、日本人によるキリスト教の出版物が必要なことであり、つまり、直接の伝道からすれば副次的なものではあつても、伝道が成功するにつれて一層不可欠となる出版関係の機構が必要だということであつた。新島はすべてこうしたものの必要性は十分に感じていたが、彼の日本人の同僚にくらべれば、それがどれほど重要であらうとも、そういう事業に財政的援助を得るといふことのむづかしさを、はるかによく見分けることのできる地位にいた。つまりそのような事業はアメリカン・ボードの第一義的な関心事ではなかつたからである。ボードの財源は世界中からの要求を満たすには不十分だつた。その財源めざして緊急の要求をしたのは日本ばかりではなかつた。その資金の配分は特殊な分野で働いている若いまじめな人々にどうしても失望を与えないではおかぬものであつた。新島がさきにかかげた文書の中で触れている医学校設立案は強力に推進されてゐた。その頃東京に設立された宗教新聞の援助のために緊急の要望が提出されてゐた。同志社の日本人教師の或る者を米國に留学させて、よりよい教師として義務をはたさせることを可能にするための資金を確保しようといふ努力がなされた。仙台その他の地での伝道にアメリカン・ボードが注目するように圧力がかけられた。同志社を大学に昇格させようとする計画の場合と同じく、これまでに述べた諸計画においても新島は日本と出資者側との間の主要な伝達のチャネルと見做されてゐた。新島は絶えずこうした受益者たちのために、アメリカン・ボードにアピールを書いたり、ボードの主事たちや運営委員たちと相談したり、さらにはまた他の慈善事業の関係者と相談するなどして、働き続けた。しかし彼の努力は必ずしも彼の熱心な同僚たちの感謝するところとはならず、勘忍袋の緒が切れそうになるくらいにきびしい批判の手紙を多数受け取つた。一日本人牧師から来たかういふ手紙の一つについて、彼は一八八四年十二月十五日付で次のように書いてゐる。

「日本の若者たちは大義のために熱心なあまり、時には激烈になり勝ちです。彼らは事業の現段階にとってその機構がどうしても必要であると考えています。ちょっとでも摩擦があれば彼らはすぐに立ち上がって油をさし、再び動きはじめることでしよう。途中邪魔になるものがあれば、彼らは何とかしてその障害を取り除こうとします。この点において彼らは革命的な性格を持っているのです。宣教という大目的のためには彼らは完全に独立しており、忌憚なく批判します。私が彼らのためにあらまほしく思うことは、彼らがもっと忍耐と雅量を発揮することです。彼らはすばらしい連中であり、日々賢くなっています。ここ二年間、そのような熱い火の中をくぐってきたため、私はちっとも彼らがこわくはありません。私は彼らを愛しておりますし、彼らを我慢し、許すことができます。しかし私が心配しますことは、彼らがアメリカン・ボードに対して不愉快な態度を取りはしないかということです——それは彼らが忘恩の徒であるからではなく、われらに共通の主の大目的のために熱心すぎるからではありませんけれども。」

その頃ボードに提出された重要問題に関連して新島の立場と行動について深刻な誤解が生じた。これについて宣教師団の一員が書いた手紙について、新島はデイヴィス博士あてに次のように書いた*。

「それはこれまでに受け取ったうちで最も侮辱的な手紙でした。残念ながらその手紙はくず籠に捨てました。それを読んだ時思わず『何ということだ！ わたしは廉恥心を失ったのか？』と思いました。けれども私はすぐひざまずいて、自分を神の御手の中にとどめて頂くよう祈りました。もういいのです。あのことは誰にも言わないで下さい。」

自分の取った行動を説明したあとで、彼はこのように手紙を続けている。

「私の目的は両派^{*1}を和解させることでした。けれども、私の試みは京都でひどく誤解されたのだと思います。それから私は、わが善良な兄弟たちが私にもっと信頼を寄せてくれているものと思っていた、と静かに悲しげにつぶやき

ました。私は彼らを裏切ったのでしょうか？ 愛する兄弟たちを私が裏切るなどということは断じてありません。あの時どんなに悲しく、落胆したか、言葉で表現できません。唯一の慰めは、その問題は後ほど説明できるということです。あなたの方にあまりにも激烈な手紙を書いたことで、私は非難されて然るべきであります。私は両派をあまりにも早く和解せようと躍起になりました。多くのまちがいを犯したことを恥ずかしく思います。病人らしく口をつぐんでいればよかったのです。誓って申しますが、私はあなたの方の宣教師団に対して常に忠実であり続けるつもりです。」

やがて明らかになったことは、新島を活動へと誘うことがらの一切から彼が完全に手を引くのでなければ、彼が求めるようになった休息を取ることはとうていできない、ということだった。従って一八八四年十二月に彼はクラーク博士とともにニュー・ヨーク州クリフトン・スプリングスに赴き、その療養所に三か月間滞在した。彼ははじめ日本のことを考えることをあきらめようと努めた。そして研究に精を出した。この冬の期間に彼が読んだ書物の中にはルコントの『地質学』やニューカムの『天文学』がある。^{*}しかし日記の中では彼はしばしば「愛する祖国日本のことを考えまいとしたところで、それが何の役に立つのか！」と叫んでいる。

あらゆる種類の困難について、どのように解決したものかと、彼のところに相談の手紙が届いた。そこでとうとう彼としても、病気だからといって彼の立場にともなう責任からはとうてい免れえないものだ^{*}と結論したようである。三月十日の日記には次のように記されている。

「こわれた茶碗！ 部分をくっつけて元の形をととのえたにしても、お前はもはや主の御用に立つには適していない。今となってお前は主の家に置いて頂いているうつつに過ぎぬ。しかしながら、それでもお前は、人々にむかっ

て、お前の足跡を辿るなかれという警告のmiseしめにはなれるだろう。そういうわけだから、お前はなおも義務をはたしうるのだ。なおも義務に忠実であれ。」

健康はいくらか回復した。そこへ、日本ミッシェンからの特別の要求に答えて五万ドルを支出するというしらせが入り、たいへん元氣付けられた新島は一八八五年三月にクリフトン・スプリングスを去り、次の三か月間をボストン、アーモスト、ニュー・ヘイヴン、アンドーヴァー、ニュー・ヨーク、ブルックリン、フィラデルフィア、ワシントンの友人を訪問しながらすごした。アンドーヴァーで彼は日本に対するきわめて深い関心をかきたてた。この関心は結果としてミッシェン・サークルの結成となって結実し、十二人の神学生が、もし道が開けるならば宣教の事業に献身することを誓った。ニュー・ヘイヴンでは、アメリカで科学の研究を完成し、新しい理化学学校の教師として一層完全に磨きをかけたいと熱望していた同志社の一教員^{*}の受け容れの手はずをととのえた。ニュー・ヘイヴンでの日記には次のように記されている。

「この物乞いして歩くあわれな日本人に、あの人たちはうんざりするだろうか？ わたしは死に至るまで何時までも日本のための乞食をやめない。それがわたしの魂にのしかかる重みのすべてなのだ。」

ブルックリンとニュー・ヨークで新島はストーズ博士、テイラー博士、ベーレンズ博士^{**}その他と長時間話し込み、図書館のために、また科学用具購入のための相当な金額を集めた。ワシントンでは日記の二十頁以上を使ってスミスソニアン・インスティテューションのペアー^{**}教授や他の館員との話し合いのことを記入している。それは同志社における自然科学教育、日本における漁業、その他の科学問題にかかわりのある対話である。ボルティモアではジョン・ホプキンズ大学のギルマン^{**}総長の客になっている。

新島はドーチェスターのウォルター・ペーカー夫人宅で一か月間の静養をしていたとき、義兄山本（寛馬）受洗のしらせを受け取った。^{***}彼は言う。「これは驚くべきニュースです。どんなに感謝しましたことか、とても言葉で表現できません。このことは京都の有力な市民たちの間に大きな影響を及ぼすことでしょう。」

一八八五年の夏、新島はメイン州のフレンチマン湾の北岸にあたるウェスト・ゴールズバラですごした。ハーディー夫人はマウント・デザート^{***}での多忙な生活からの避難所として購入しておいた大型の気持のいい農家を、新島が自由に使えるようにした。ここで新島はあれほど必要としていた休息と平和を見出したのである。その家は入江に向かって傾斜している地面に一軒だけぽんと立っていた。その戸口からは港内に点在する島ごしに、きらきら光る波と、遠くの山々の頂きが眺められた。十分な休息の日々が続いた。それを破るのはただ対岸からヨットがやってくる時だけだった。ヨットは食糧品や手紙を運んできたが、いちばんいいのは彼の愛する友人たちの到来だった。しかしここでさえ、わずかながらもお「伝道の」機会があった。七月二十八日付で彼は対岸の人々にこのように書いている。^{***}

「おいしい、さわやかな空気があります。特に朝はそうです。湾内の水の静けさと、野鳥の心地好い楽しい歌とは、私にとってすばらしい慰めであり魅惑であります。ハーディー様がおっしゃいましたように、ここではすべてが『ピースーピースー』と叫んでいます。アイアンシー号が港からゆっくりと出ていくところで、私は今その白帆を眺めています。まるでゴールズバラがああ、あの舟を行かせたくないともいうかのように、舟は私の視界の中をただよっています。あの舟が帰ってくる時には、先ず遠くの方に一つの点として姿を現わしますが、私の歓迎をうけるに十分な速さで進むことはありません。」

日曜日にはこの教会に行きました。礼拝のあとで日曜学校のことを聞いてみました。驚いたことに日曜学校はないということです。この若い人々が日曜学校なしに育っていると聞いて不思議に思うと同時に遺憾に思いました。その時思いついたことは、ここで私たちが日曜学校をスタートさせてはどうか、ということでした。そこで一人の婦人に向かつて、私たちは教師になる用意があるがどうか、と提案してみました。私は自分がこの考えの発案者として前面に出たくないの、牧師にそれを実行してもらうように努めました。牧師は大いに喜んでそうすることにきめました。私は彼らのために責任をもって日曜学校の教材を確保する約束をしました。あなた方がこの仕事に参加して下さること、他の人々にもそれに対する興味をかきたてて下さることを信じて疑わないからであります*。」

その後新島が日本からよこした手紙は、多くの事に心を勞し、死の手が近づいていることを感じながら書かれたものであるが、その中で彼は「私の日曜学校はその後うまくいっているでしょうか？」と繰り返し尋ねているのである。

7
晩年と永眠

新島は米国滞在中の最後の十か月間、諸教会にあてて同志社に關する計画を提出することで忙しくしていた。一八八五年十一月にサン・フランシスコを出帆し、十二月十二日に横浜に到着した。鉄道で京都に着くと、学生、教員、親族、京都市の著名人たち五百人を超える人たちが彼を出迎えるために集っていた。翌日同志社の創立十周年の記念式典が催され、新島は二つの新しい建物の礎石を置いた。^{**}この喜ばしい帰還の報告を読みながら、このかつて隔離されていた神聖な都で彼が下車して多数の友人の歓迎を受けている姿を思い浮かべてみると、二十年前のことが思い出されてくるのである。あの時の彼は貧しい青年で、日本人の心に強力にのしかかる親孝行の氣持を押し殺し、夜間にまぎれて遠い北の港から密出国し、見つければ死刑になるという状況での孤独なさすらい人だった。十二月二十三日に彼はハーディー夫人にあてて次のように書いている。

「あの時あんなに多くのご挨拶を受けてどんなに仕合わせであったか、とても筆でいいあらわすことはできません。帰宅してみますと年老いた両親が私の帰りを今か今かと待っていました。妻はいつものような日本式の夕食を準備していました。私たちは日本式に坐りました。私たちにとって本当に幸福な日でした。奥様から妻と両親あてに頂いたお手紙を翻訳しようとした時には、本当にやさしい、母親のようなお言葉を読むことができる前に、何度となく立ちどまることを余儀なくされました。奥様に対する深い親愛の情は、私が旅してきた何千マイルのために減少することはありません。奥様の御許でござって頂いた過去のすべては、真実の実質的な現在なのであって、ふりかえつ

てしみじみ思い出せばまことに甘美なものであります。私は決して夢を見ているのではなくて、現実を省察しているのです——愛が愛を生むのだという現実を。私の心臓はこの主題について書くことを許しません。そうしようとする和すぐに動悸が始まり、それが早くなるのです。私のためにして頂きましたすべてのことについて、心から御礼申し上げます。」

上に述べた記念式典は予定を二、三日延期して、新島の到着後すぐに挙行された。新しい建物というのは、一つが大きな礼拝堂であり、いまひとつは図書館、博物館、実験室を兼ねたもので、その礎石が午前中にすえられた。午後には学校中で当時部屋として最大であった体育館で記念式典が行なわれた。式場は常磐木と菊で美しく飾られていた。京都府の〔北垣国造〕知事が臨席し、その大きな式場は生徒や卒業生や社友で満ちあふれた。デイヴィス博士が歴史を回顧する演説を行なった。晩には色彩豊かな提灯が校庭にあかあかとともされ、新島の〔帰朝〕歓迎会が催された。生徒、教授陣、京都の諸教会の代表が演説した。その次の日にはアルムニ会が結成された。^{*}当時学校は意気さかなな状況にあり、その年のはじめには百二十名が入学を志願し、そのうち八十名が試験に合格した。新たな学科が設立されたことや、教育水準が向上したと、そして設備の方もふえたことに対して地域での関心が十分に高まり、新島はただちに、精力的に計画の実行に取りかかった。

新島は学校創立当初から校長として認められてきた。〔同志社の〕社長としての職責に付随する責任を引き受けながらも、彼は常にその権利、特権を主張することをためらい、チャペルの壇上の社長の席につかせることは相当骨の折れることであった。彼は手紙の一節にこう書いている。「帰国以来、ある堪えがたいものがあることに気がつきました。それは教師たちが私を社長と呼ぶことです。この呼び名から免れることができたらどんなにいいでしょう。これ

を名誉な称号と感じる人もあるでしょうが、私はそのように呼ばれるねうちは全くと感じていません。」

二年後、アーモスト大学が法学博士の名誉学位を授与することになったことを知らされたとき、彼は次のように書いている。

「大阪にいましたとき誰かがこのことを伝えてくれました。それはまちがいに違いない、と私は申しました。そのような知らせを信じるのができなかったからです。妻の滞在している海岸^{*＊}に来ましたとき、大学からの公式の手紙を手にしました。そこでそれが本当であったことを理解しはじめました。それをお受けすべきかどうか、本当に迷ってしまいました。どうしたらよろしいでしょうか？ その榮譽には全く値いしないと感じましたので、数名の友人に手紙を書いて意見を求めました。その時にはそれを辞退しようと考えていたのですが、友人たちはぜひ受けるようにとすすめるのです。そういうわけで、あふれる感謝の心をもってお受けすることにきめました。この二十年間に道を切りぬけてくるにあたって、いったい自分の中にどういう才能、力、能力があったのか、それを見出すことは不可能です。それを思えば私はまったく圧倒されてしまい、同時に、私は立ち上がってこの世に直面するよう勇気付けられるのであります。」

一八八七年の春に、同志社が徴兵免除の特権を得るため、新島は東京に赴いた。この徴兵令によれば、官立学校の生徒以外の全生徒は兵役に服することになっており、そのため多くの生徒が徴兵をのがれようとして同志社を去ったのであった。この徴兵令はのちほど改正され、或るきめられた条件を満たしている学校は免除の学校に加えることになった。この条件を満たすためにあと五万ドルの基金が必要であった。一八八七年五月十七日に「アメリカン・ボードの」運営委員会の決議により、上記の金額の利息として、年間二千五百ドルを下らない収入が同志社のために保証される

ことになった。新島はこの決定のしらせを受けたが、同時にハーディー氏の最後の病気の知らせも一緒に受けたのだ。その時新島は、京都の宣教師団の決議に従って義務から解放され、休息をすすめられて、エゾ〔北海道〕の新しい都である札幌に滞在中だった。^{*}札幌から彼はハーディー夫人あて次のように書いています。

「一八八七年七月三十日。ハーディー様から運営委員会の決議についてのお知らせの手紙を当地で拝受し、感謝のほかありませんでした。この喜びに酔うていましたところ、何とということでしょうか、そのハーディー様ご危篤の電報が届き、たちまちあの喜びをかき消してしまいました。この前のお手紙を頂いた時からいくらかそのような心配を抱いていたのです。私の心が今どれほどかき乱されていますとか、ここにはとてもあらわすことができないほどです。一時間ごとに私たちの意思を伝達できる手段があればよいのにと願うことしきりであります。ハーディー様のこととが心配なりません。ハーディー様こそは私どもと一緒に種子を播いた方です。それ故、この世を安らかにお去りになる前に、この日本において、私たちとともにもっと多くの収穫をして頂きたいものと心から願っています。それになお、私はハーディー様に対して本当の愛情を感じています。私はお二人様を実の両親以上に愛しているのです。私はお二人様の愛によって誕生した者であります。純粹な愛は同種の愛に火を点じます。気高い愛情が自然の絆以上に固く私たちを結びつけています。お二人様から遠く離れてここにおりますけれども、せめてハーディー様の夢の中になりともし私が現われることができたなら、と願っている次第であります。」

「八月二十四日。手紙を書こうとしますと心が千々に乱れます。ハーディー様のご逝去にさいし、奥様に申し上げたいことがいっぱいあるのです。けれどもそれを書こうとしますと、ああ、すべてがめちゃくちゃになります。机の

前に坐り、ペンを手に取ります——しかしそれ以上のことは何もできません。天の御父がハーディー様に対し、祝福にみちた天上に来るようにと望み給うたことは、むしろ承知しています。私たちは一切を御父の御手に委ねなくてはならない——このこともよくよく承知しております。ハーディー様は悩みの多いこの世よりは、あの世にある方がはるかに仕合わせであるかもしれない——これまた私の承知しているところです。けれどもハーディー様がこの世にいられないとは何ということでしょう。私は淋しくなりません。実の父を失ったような気がいたします。いいえ、ハーディー様は私にとって実の父以上の方でありました。ハーディー様は私の日本人の友人たちの全部をあわせたよりも以上に私を知って下さっていたと信じています。私は日本の真の友をなくしたのです。当地で最近起こった皆既日食のように、私の心は暗闇になりました。楽しさも明かるさも一挙に消えうせました。ああ、これはまっくら闇です。空気はひえ、気温はさがりました。日食はほんのしばらく続いただけでしたが、私の心の日食は生きている限り続くことでしょう。私はこの数行さえ書き終えることができません。いま神経がとても苛立っています。この苛立ちの気持ちのほかにもう一つの気持ちがあります。それは奥様、あなたに対する同情の気持ちです。あなたこそは測り知れない淋しさを味わっていらっしゃるに相違ありません。ハーディー様の元気のよいお声を聞くことはもうできません。奥様のために私の心はうずいています。しかしながら、奥様と一緒に喜びたいと思うことは、ハーディー様は旅立たれる時に、必ずや奥様を常に強い、永遠の御手に委ね、それに信頼するようにと命じられたに相違ないからです。今後はこれまでもよりもしげしげと奥様に手紙を書きたいと思えます。しかし、今この手紙を書くことはとてもつらいことです。」

「九月四日。この午後はひどく雨が降っています。今は来客に煩わされることもありません。私の心はボストンに向いています。奥様とハーディー様に対する思いが私の心を非常に強くとらえています。ご主人様が亡くなられてからこれで五度目の安息日です。しかしご主人様にとっては昨日も今日も変らぬ安息日の連続であるにちがいありません。後に残された私たちは泣いたり悲しんだりしていますが、ご主人様は喜んでおられます。この世で神秘とされていることがらの一切は、ご主人様にとってもはや神秘ではないかもしれません。それは何というすばらしいことでしょう！ この世で私が悲しく淋しく思い、同時にご主人様が最も神聖な、幸福な、祝福された状態におられるのだという考え方によって慰められたりしている時に、私は対立する感情をこもこも味わっています。私たちはすべて、日本伝道の父を失ったことを感じています。幾人かは私の悲しみを慰めるために電報をくれましたし、他の人々は手紙で哀悼の意を表してきました。今や私たちはハーディー様のご忠告やご支持なしで仕事を進めていかなくはなりません。この危機的な時期にあつてはただ「神よ、われらを助け給え」と叫ぶのみです。私はこの島〔北海道〕で観察した事からについて書きたいと思っていました。今のところそれをする勇氣がありません。奥様からのお手紙を受取りました。これは私にご主人様を記念する最もつかしい事柄を伝えるものです。これほど遠くはなれていて、私のことを思い出して下さったということにどれほど感動したかを申し上げなくてはなりません。このことは決して忘れません。神のお助けにより、私はハーディー様の例にならない、私に伝えて下さいました通りにわが同胞たちに伝えていくつもりです。奥様のお手紙が涙とともに書かれたものであったことは、疑いの余地がありません。私の手紙も同じことです。私の心は私たちの事業に関するあらゆる種類の計画で、いまなお火山のように燃え続けています。けれども私の妻は絶えず見はつていて私をチェックし、コントロールしようとしています。彼女はまるで警官のように私から

ペンと紙とを遠ざけ、訪問者に対しては面会時間をすぐ切り上げるように求めます。わたしはもう国内では身を隠すところがないのだ、そしてそのことを感謝しているのだ、と彼女に語ったことでありました。」

一八八八年三月五日

「私たちのキリスト教の事業は当地で大いに根をおろしつつあります。この前の聖餐式で私たちの教会は四十名以上の新会員を受け容れました。次の聖餐式にはあと三十名ほどが入会することになるでしょう。それに、何の興奮のしるしもあります。着実な霊的成長と呼んで差支えないと思います。毎週の祈禱会に集まる人々は礼拝堂を満たしています。そこに五百人の若者が集まるのはすばらしい眺めです。一週間前に私はわれわれの暖い友人である横浜銀行の頭取を結婚させました。^{*}同君は昨年の夏に私たちの予備校のために一千円を寄付しましたし、また先週には寮を完成するために四百円を支出してくれました。その寮には同君の名前がつくことになっています。同君の若い妻は裕福な実業家の長女で、以前京都ホーム〔同志社女学校〕の生徒でありました。結婚式は市内の最大のホテルで挙行され、大変な盛会でした。結婚式の行列も相当華やかなものでした。花嫁はわれらの知事夫人と六人の乙女にかしずかれ、花婿には隣の滋賀県の元副知事がつきそいました。多数の名士が出席するなか、キリスト教による厳肅な結婚式は深い感銘を与えました。」

一八八八年四月には大学設立の基金の問題を議するために、京都の知恩院という大きな仏教寺院で集会が開かれた。府と市の役人たち、京都の指導的な銀行家や実業家が出席した。知事、市長、新島その他による演説ののち

に、この問題と積極的に取組むための委員会が任命された*。クリスチャンとしての新島の見解はむしろよく理解されていたし、同志社の目的と精神のすべても全員に知られていた。同志社のめざましい成功が他の諸都市の、教育に関心のある友人たちを刺激し、新島の監督の下に組織された仙台の学校は、第二の同志社を創りたいという設立者の願いから成長したものであった。仏教の最も壮大な大寺院の大広間で、そのような目的のためにそのような人々が集まったということは、大衆の感情の中に起こっていた変化を示すものである。知事の息子はその当時同志社の学生であったし、二人の娘も京都ホームで教育を受けていた。新島が一八七二年に岩倉使節団と関係を持ったこと、初期の反対のあった時期に学校のために奮闘したこと、卒業生たちが実社会で獲得していった目ざましい地位——このようなことが新島の従事した事業に対する関心と呼んでいた。彼自身は官界に入るようにと申し出をすべて繰返しことわってきた。しかし彼は常にその時代の有力者と知り合いになるようにとめてきたのであり、彼のまじめで自己犠牲をいとわない献身ぶりは彼らの尊敬と同情をかちえてきた。四月には最近まで外務大臣だった井上〔馨〕伯爵のきもいりで夕食会が催され、多くの高名の招待客たちにむかって彼の大目的を開陳する機会を与えられた。彼はその時苦勞のあまりほとんど消耗しつくし、話しているさい中に気を失った。この会合の結果約三万ドルの約束を得ることになったことは、次にかかげる新島の準備した大学設立のための訴えの中に記されている通りである。これは十一月に

*ここに市長(Mayor)とあるのはハーディーの思いちがいである。一八八八年当時では京都市長の職務は知事が行っていた。京都市は行政的に上京区、下京区の二区制で、それぞれに区長がいた。四月十二日の知恩院大集会で演説したのは新島、浮田和民、金森通倫、北垣国道の四人である。出席者は六百人を越えた。

国内の二十の主要新聞に掲載された。

〔同志社大学設立の旨意——英語による意訳〕^{*}

日本に大学を設立しようという意図を抱いたのはずっと以前のことであり、この目的を達成するために長年にわたってまじめな労苦を続けてきた。今や世論の波は私の計画に対して実に好意的なものとなってきたので、現在こそは私の計画を天下に知らせ、この大事業を達成するために人々の協力を要請すべき好機であるように思われる。それ故私はここで、この大事業に着手するようになった理由と、提案している大学計画が何であるかを説明したいと考える。

およそ二十年前、わが国が諸外国との交流の問題をめぐって大いにわき返っていた頃、西洋諸国で勉強したいという願いを抱いて私は函館へ赴いた。日本人は国を離れてはならないという法規を犯して函館を脱出し、首尾よく商船に乗り込み、水夫として一年間のきびしい生活を送ったのちにボストンに到着した。私の目的にとってさいわいであったことには、私はボストンで一人の有名なアメリカ紳士に歓迎され、援助を与えられて、その人の親切によってアーモスト大学とアンドーヴァー神学校で勉強することができたのであった。十年間以上にわたってアメリカで学生生活を送っている間に、西洋文明の状況を観察し、多くの指導的な人々に会って話をする機会をもってみて、私は徐々に、アメリカの文明は一つの偉大な源、すなわち教育からだんだんと、しかも恒常的に発展してきたものであることを確信するに至った。また私は国家の発展と教育の間には密接な関係があることを省察するようになった。そういうわけで私は教育を自分の生涯の仕事として選び、この事業に献身する決意をするようになった次第である。

明治四年（一八七一年）、私がアンドーヴァーで勉強していた時、田中文化理事官が故岩倉大使とともに、西洋諸国の教育事情を視察するために到着された。そこで私はこの目的のために彼らに随行するようにとの招きを正式に受けた。北米の有名な学校や大学を訪問したのち、私たちはドイツ、フランス、イングランド、スコットランド、スイス、オランダ、デンマーク、ロシアを旅してまわり、こうした国々の諸学校の教育の状況や条件をつぶさに調査する機会を得た。その結果、私は教育が西洋文明の基礎であること、そしてまたわが日本を世界の文明国に仲間入りできるほどの国にするためには、近代文明の外形だけでなく、その本質であるところの精神をも移入しなければならないことをますます確信するに至った。従って私は、故国に帰ったならば一つの大学を設立し、こうして祖国に対する義務をはたしたいという決意を一層強めたのであった。

明治七年（一八七四年）、まさに日本に帰ろうとしていた時、アメリカン・ボードの年次大会に出席し、友人たちの求めに応じて短い演説を試みたことがあった。その時私が述べたことは、わが国の秩序が乱れ、人民は正道へと導いてくれる光を求めてさまよっていること、そして真の教育こそが、人民が知識においても道徳においても進歩をとげることのできる唯一の手段である、といったことであつた。これを語っている間に私は大層感動して涙をとめることができなかったほどである。演説ではさらに一步をすすめて、私は祖国に帰ったならば、必ず教育の事業に献身するつもりであると述べ、聴衆にむかつて、もし私の目的に賛同して頂けるならどうか助けを頂きたい、と訴えた。このように語り終わるが早いのか、聴衆の中にあまたの紳士淑女諸君が私の要望に賛意を示して下さり、その場において数千ドルの寄付が与えられた。

この大目的を胸中に秘めた私は明治七年（一八七四年）の暮れ方に、十年間留守にしていたわが家に帰ってきた。

翌年の一月に内閣顧問の木戸氏に会い、私の目的を告げたところ、同氏は賛意を表して下さり、その目的達成のために大いに力を貸して下さった。私はまた文部大輔の田中氏と、当時の京都府知事であった榎村氏からも大きな援助を受けた。その結果、山本氏と結社して、一八七五年十一月二十九日^{*}に、京都に学校を開校した。これが現在の同志社のはじまりである。

同志社はこのようにして設立された。その目的とするところは、ただ単に英語や他の諸学科を教えるだけでなく、高度の道徳的、精神的な諸原理を授け、このようにして、知識と学問を備えた人々だけでなく、良心と真摯さを備えた人々を鍛えることなのであった。これは一方に偏した知的教育によっては決して達成されない。また精神を統括し規制する力を失ってしまった儒教主義によっても不可能である。それはただ、神を信じ、真理を愛し、人情に篤いキリスト教主義に基づいた完全な教育によってのみ可能だと私たちは信じている。私たちの事業はこのような主義に基づいているという点で、当時の支配的な教育観とは異っていた。このために私たちは長年にわたって大衆の共感を得ることができなかった。当時私たちの状況はきわめて貧弱であり、国内にほとんど友人もなく、私たちの教育の主義は無知な人々に軽蔑されるばかりか、教養のある人々からさえも冷たい扱いを受けた。にもかかわらず、私たちは真理が最後には勝利を得ることを確信し、互いに助け合い、励まし合いながら、非常な困難の中にあつて、目標から目をそらすことなく、強い決意をもって歩み続けたのであった。

さいわいにして今や宗教に関する世論は一変するに至り、そのためキリスト教を信じていない人々でさえも、キリスト教が人心を革新する生きた力をもっていることを進んで認めるようになってきた。こうして社会は私たちを歓迎する気になったのである。同時にわが同志社は、喜ばれ尊敬されるようになり、私たちが学生に知的にも道徳的にも

健全でよくバランスのとれた教育をしているということを人々が認識し始めるに至り、その結果私たちの学校は親たちがためらうことなく子弟を送るところとなっている。そうした好評に答えて、私たちの学校は学生数においてもカリキュラムの程度においても着実な前進をとげ、友人たちはさらに高度な課程を備えるようにと促すに至ったのである。

特に明治十四、十五年の兩年（一八八一、八二年）にそのような要求が高まり始め、私たちは将来の大学の基礎をすえるよう計画を進めるべきだと感じていた。しかしながら、この国においては、大学を設立するということは最も大きな事業の一つなのであり、多数の助け手と多額のかねを必要とする。ところで当時の私たちの状況はどのようなものであったろうか？ 若干の友人や助け手はあり、開校当初ほど甚だしく無視されていたわけではないが、それでも私たちは孤立した状況にあった。当時の私たちには何ができたか？ 私たちは一瞬たりとも目的をめざして働くことを躊躇しなかった。私たちの計画を好意的に支援してくれそうな人々を捜し求めていたところ、援助を約束してくれる人が数名あらわれたので、幾たびか集会を開き、京都府會議員を招待して協力を要請したのであった。府議會の有力者たちの賛同を得たので、私たちは「明治専門學校設立旨趣」という小冊子^{*}を公けにし、提案する学校の目的を説明したのであった。これは事業着手の第一歩と呼んでよからう。しかしながら、多数の人士が協力を約束されたのではあったが、時あたかも実業界の不況の時期に当たったために、募金については何の成果もなく、私たちの計画はしばらく停止したように見えたのである。私自身はしばらくアメリカに行くこととなり、留守中は仕事を友人たちの手に託さざるをえなかった。そのために、今年の四月までに集まった金額は一万円にすぎなかった。

今年になって私たちは特にこの仕事に打ち込んできたので、良好な結果をおさめることができた。四月に私たちは

京都の名士六百人以上に集って頂き、私たちの計画を説明した。その時北垣京都府知事は私たちの計画に賛同されただけでなく、この事業を支援するように人々に勧誘する演説を自ら試みられた。それ以来、数度にわたる会議が開かれ、委員会が募金に従事してきた。京都府民の寛大な公徳心に対する私たちの確信は裏切られないであろうと期待してよい理由がある。

私は京都と同様に東京でも努力をしてきた。私の計画を大隈〔重信〕伯、井上〔馨〕伯や青木〔周蔵〕子その他の方に説明申し上げたところ、それぞれが賛同を表明された。特に大隈伯と井上伯とは学校を訪れて親しくその状況を視察された上で、暖い称賛の言葉を下さり、高度の専門課程を設置しようという目的を激励して下さった。なおその上、東京や横浜の紳士や実業家の諸氏は、私の計画を聞いた上で、今年四月以来、次のような金額を寄せられたのである。

一、〇〇〇円	大隈伯
一、〇〇〇円	井上伯
五〇〇円	青木子
六、〇〇〇円	原 六郎氏
三、〇〇〇円	岩崎久弥氏
二、〇〇〇円	大倉喜八郎氏
二、〇〇〇円	田中平八氏

六、〇〇〇円

渋沢栄一氏

五、〇〇〇円

岩崎弥之助氏

二、五〇〇円

平沼八太郎氏

二、〇〇〇円

益田 孝氏

後藤^{*}〔象二郎〕伯、勝〔海舟〕伯、榎本〔武揚〕子もまた私たちの事業に賛同を表明し、援助を約束して下さった。

それに加えて、アメリカにおける私の友人たちは学校の基金として五万ドルを約束して下さったし、今一人の友人は最近理化学館建設のために一万五千ドルの約束を寄せられたのである。^{**}

上記の点から考えてみると、私たちの事業は今や二十年以上にもわたって前進してきたのであり、多くの方面において多大の賛同を博してきたのであり、しかも今私たちは非常な成功をおさめ始めているのであるから、私たちは今やまじめに多くの助け手を探し求めなければならないと考える。なぜなら大学を設立するということは一大事業なのであって、多額のかねと、あらゆる種類の助けを必要とするからである。今私たちの目前にある機会は、いったんこれを失うと二度と再び返ってこないものである。それ故私たちは一瞬たりとも浪費してはならない。また同志社の現状を考えてみると、私たちの目的が空しいものではなかったことが確信されてくる。私たちは同志社の理事の数^{***}をふやし、基本となる規則を定め、このようにしてこの教育事業の運営を堅実な基盤の上に打ち立てた。同志社には現在

予備校、英学校、神学校、女学校、病院、看病婦学校がある。各校について若干の統計を示せば次表の通りである。

このように本校は高度の水準に到達したのであるから、私たちは英学校の課程を今年中に官立の高等中学校の課程に同等たらしめたいと考えるのである。それ故私たちは現在の学校に大学の課程を加えることが必要であり、さらに、大学を設立すべき時が来ていることを感じるのである。大学は専門学科において完全な訓練を施すべき場所であるから、英学校の卒業生は希望に従って専門学科での研究を続けられるように、大学の課程を開設しなくてはならない。英学校を持ちながら、さらに高度の大学の課程を欠いているというのは、アーチを作りながらその頂点に要石を欠いているのと同じである。こういうわけで、私たちはこれ以上大学の設立をのばしていくわけにいかなくなっている。

私たちはこれまでこの大事業に従事するようになった動機について語ってきた。今や私たちの視野にある目的について述べたいと考える。私たちは教育の事業をすっかり政府の手にまかせてしまうことを適当だとは考えない。なぜなら若者たちを教育することは私たち自身の義務なのであり、この義務は私たち自身で遂行することができるだけでなく、もっと活発に、完全に、しかも経済的にやり通すことができるからである。このようにしてわが同志社は現在

正 規 教 員	予 備 校	英学校・神学校	女 学 校	看 病 婦 学 校	計
一	一七	一三	三	三四	
助 教 員	六	二	二	二	二二
学 生 ・ 生 徒	四二六 八一	一七六	一三	八九九	
卒 業 生	一〇八	八〇 五七	二一	四*	二七〇

**

の盛況を見るに至った。故にこのようにして、他の方々のご支援を得つつ、わが校を大学にまで拡充したいと考えるのである。私たちはそれがどれほど文化的に程度の高いものであるうとも、政府の管轄下にある単一の大学に依存することはよくないことだと考える。政府がその大学を設立するようになった理由は、政府が高等教育をすべて自分たちの一手にひき受けようと望んだからではなく、むしろ政府としては、私たちが範とすべきモデルを与えたかったのだと思うのである。それではいったい、何時までそのモデルを眺めて感心するだけで満足し、それを模倣しようとする力しないのであろうか？ 私たちはもちろん帝国大学の利点は理解しているし、その基金と設備のすぐれていることは認めるものである。しかしながら、私たちはまた、わが学生たちの胸の中に独立独行の精神を涵養し、自治の人民を訓練していくことは、私たちに特に与えられた仕事であると信じるものである。

教育は一国の最も重要な事業の一つである。人民が臆病な怠け心から、教育をすべて政府の手にまかせてしまっているのを見ることほど悲しいことはない。なぜならそのような行為は、政府への依存という恥ずべき精神をはっきりとあらわすものだからである。

国民を教化するという仕事は一日で達成できるものではない。ニュー・イングランドにおいては、ピルグリムたちが嵐吹く荒涼たる大西洋の岸に上陸して十五年以内にハーヴァード大学を創立したのであった。今やハーヴァードは百十名の教授と、二十万冊以上の書物と、約一千五百万ドルの基金をもっている。そのような学校の生きた力こそが、アメリカ人の間にあまねくいきわたっている自治の精神の一大原因であることには疑いの余地がない。ドイツにおいては足利時代（三百五十年前）から次々に大学が創立されてきて、今ではついに三十校以上の大学が栄えている。イタリアには大学が十七校ある。いまわが国をかえりみると、そこにはたった一つの大学があり、しかもそれ

が政府の管轄下にあることを知るとき、これではたして人民を教化するに十分であるといえるであろうか？ 私たちは人民を教育するための設備において、また国の将来の福祉を準備するにあたって、大いに欠けるところがあるといわざるをえないではないか？ このようなことを考えた結果、私たちはどうしてもこうした大事業に乗り出すことを至上命令と考えるようになったのである。

教育の真の目的は何か？ 私たちの理解するところでは、それは全能力を十分かつ均衡のとれた風に発達させることであって、一方に偏した教化、といったものではない。学生たちがいかに學術技芸に秀でていても、もし着実に忍耐する性格をもっていなければ、わが国の将来を彼らに託すことはできないのである。もしも教育の主義が的を外れていた結果、若者たちが型にはめられ、一方的で歪んだやり方でもって鍛えられているとすれば、そのような主義が国家に甚だしい害悪をもたらすものであることは、誰しも否定しえないところである。そのような学生たちは西洋文明を探究するにあたり、文学、法律、政治制度、衣食等、ただ単に文明の外的、物質的要素だけを選び、文明の源泉を理解していないように思われる。その結果彼らは、盲目的に光を求めて闇の中をさまよい、獲得した主義に導かれてしまう。教育におけるこのような悪い傾向を改革したいと思う人々が現れることがあるが、この人々は学生を圧迫したり規制したりするやり方に頼ってしまい、結局は悪を一層ひどい悪にしてしまうだけのことである。彼らのなすべきことは、訓練をうけた、自由で広大な精神を持つ学生、自らを治め、自分のことを自分できめられるほどの確信をもって、正道を歩む学生——このような高貴で高潔な学生を鍛えていくことなのである。このような考えがわが国と国民に対する不安の念を起こさせるとすれば、私たちは口をつぐむしかないのである。

西洋文明は現象的に見れば多様なものであるけれども、全体からすればキリスト教文明であると私たちは考える。

キリスト教の精神がすべてのものの、奥底にまで注ぎ込まれているので、もし文明の物質的な要素だけを採用して宗教を放置しておくならば、それはあたかも肉だけはあるが血液をもたない人体を作りあげるようなものである。

西洋の文学と科学だけを勉強しているわが国の青年たちは、新日本を背負うにふさわしい人物になっていくとはいえない。遺憾ながら彼らは教育に関するまちがった主義の故に、正道からはずれていくのである。ああ、これはわが国の将来に対する予想を裏切る、何という悲しむべきことであらう。

まじめに告白するのであるが、私たち自身はそのような大事業にたずさわるだけの値打ちがある者だとは思わない。しかしながら神の祝福と、愛国心に富んだ同胞市民たちの助けとによって、私たちは自分の弱さをうち忘れ、この大事業に敢えて乗り出そうとしているのである。

私たちの希望を簡単に表現するなら、私たちがこの世に送り出したいと求めているのは、文学や科学に精通した人だけでなく、強い高邁な性格を持った若者たち、つまり彼らの学問を同胞たちの善のために用いることのできる人たちなのである。私たちの確信するところによれば、これは抽象的あるいは思弁的な教授法や、厳格で複雑な規則によつては決して達成することのできないことなのであつて、キリスト教主義、つまりキリスト教のいのちのかよつた強力な主義によつてのみ達成できる。それ故私たちはこの主義を教育事業の不変の基盤として採用し、この主義を実現するために私たちのエネルギーを献げようとするのである。

私たちの事業はこのような主義に基づいているのではあるが、もし仮りに、私たちの目的は宗教を広め、キリスト教の牧師を養成することにある、と主張する人があるとすれば、その人は私たちのことを全く理解しない人だと言わなくてはならぬ。なぜなら、私たちは、世に言われているよりはもっと広い目的をもって仕事に乗り出したからであ

る。私たちの事業は宗教を広めることにあるのではなく、生きた力を与えることにあるのである。それは青年に教養を与えることだけにあるのではなく、彼らがその仕事と行動を通して他の人々を導き、影響力を発揮していけるようにすることにある。それ故、すでに設立されている神学校の外に、私たちは政治学、経済学、哲学、文学、法学等の専門課程を設置し、真の大学を作りたいと願っている。これらすべての課程を同時に設置することができないとすれば、一つ一つ、私たちの力量と、諸学科の相対的な重要性を勘案しつつ組織していきたい。こういうわけで、私たちの大学が宗教上のものであれ政治上のものであれ、一教派、一政党を広めるための手段として意図されているのではないことは明白なのである。

この目的を天下に公表し、人民の共感と支援を得ることによって、私たちは誠意をもってこの事業を完成したいと願っている。私たちの卒業生中の或る者は政界に入るであらうし、或る者は農夫、あるいは実業家として、さらに或る者は科学に献身するであらう。それぞれの従事するところは異っても、私たちが望むことは、彼らがすべて真の愛国者となり、各自が国家の福祉のためにその分をつくすことである。国家の安寧が二、三の偉人の存在に依存するといふよりはむしろ、知的で公徳心に富んだ一国の良心とも呼ぶべき人民の手に政治がまかされることにこそあるのだとすれば、そのような人々を教育することこそが、日本にとっての大きな差し迫った必要性なのである。やがて来ようとしている重要な明治二十三年〔この一八九〇年は国会の開設される年として定められている〕^{*}を前にして、私たちは一層強く、今計画しているような大学が必要なことを痛感する。なぜなら、立憲政体が現在の政体取って代わり、人民が政治の権力に大きく参与するようになると、最も重要で必要なものは、完全な法律や制度ではなく、実に、自治的な聡明な人民それ自体だからである。

私の目的はこうしたものであるが、顧みて自分の力を思えば、そのような大事業を達成するにはあまりにも非力である。だが私は沈黙しているわけにはいかない。わが国の必要とするところが、また友人たちの差し迫った要求が、私にこの事業を放棄させないのである。時代の状況によってこのように励まされ、強要されている私は、自分自身を忘れてこの事業に献身している。願わくは神の恵みと同志諸君の助けによって、首尾よくこの大学の設立が達成されますように。

京都、一八八八年十一月

一八八八年の夏の間、新島の健康状態はきわめて不安定だった。東京の医師たちからあまり寿命はもたないと警告され、彼らのすすめで山間の保養地の伊香保^{*}まで駕籠で運ばれた。もはや人力車ですら旅することができないくらいに弱っていたのである。いろんな原因が彼の力を減入らせる働きをした。一八八五年にアンドーヴァー^{*}にいた時、彼は神学生たちの間に強い関心の火を点じたことがあり、日本での仕事に献身することを誓った数名の人たちの到着を長い間待ち望んでいた。ところがこの運動は当時論争の行われていた或る神学上の問題点に関して、「アメリカン・ボード」運営委員会の見解と一致できなかった候補者たちを、運営委員会が外国伝道に派遣することを拒否したために、阻止されてしまった。^{***}運営委員会の委員長であったハーディー氏が辞任したことは、さらに一層新島を落胆させた。一年後に起こったハーディー氏の急逝はまさしく打撃であり、この打撃から新島はついに立ち直れなかった。同じ年に新島自身の父も永眠した。^{***}一八八七年に提案された、日本における組合教会と一致教会の合併の計画もまた彼を大いに悩ませた。彼は「両教会が」連合し協力するという大原則に反対ではなかったのだが、組織としての結合には好

意をもたず、こうして長年いつくしんできた友人たちや同労者たちと対立するに至った。医師の警告にショックを受けた状態で、一八八八年七月四日に、東京からハーディー夫人に宛てて書いた手紙は次の通りである。

独立記念日に当たり謹んでご挨拶を送ります。私は去る十一日に当地に参りました。妻も一緒です。私の警察官である彼女は、私が仕事をしすぎないように見張っています。かすかに回復しつつありますが、再び健康になることはもうあるまいと信じています。医師によると私の心臓は肥大しており、元の大きさに戻る見込みはなく、私の肉体の生命にはいつ終わりがくるかもわからぬということです。私がこの宣告を勇気を出して堪えていることはもちろんですが、妻にとつてはそれはほとんど堪えがたいことと思われるのです。彼女はそれを私に隠しておくようにいわれたのです。けれども可哀そうに、彼女はそれを隠しておくことなどとてもできませんでした。私は努めて彼女を慰めようと、将来に対する私の期待のすべてを語ったことでありました。しかしながら、この苛立つ気持ちを静めることはむずかしいことでした。それ以来というものの、妻はいつも私のかたわらに在り、手紙を書く機会をあまり与えてくれないのです。この手紙を書くために、今しがた数分間の用事をいつけて彼女を追っ払ったところです。私は自分の将来を天の御父のやさしい御手に委ねることを断固として決意しております。しかし奥様のことを思うとき、そして過ぎ去ったすべてのことをかえりみると、奥様の慈愛に満ちた、絶えることのない愛がたちまち私の記憶によみがえり、私はまるで赤ん坊のように泣いてしまうのです。私は親しくして頂いた人々にお別れの言葉も述べずに突如として死ぬことは厭です。それ故、あらかじめそのようなことをお知らせしておくことは無益かもしれませんが、奥様に対して私の最後のお別れの言葉と、私のために奥様がして下さった一切の事柄に対して筆舌につくしがたいお礼

の言葉を申し上げることなしにこの世を去るとしたら、それは実につらいことです。私は一切を奥様に負うています。お返しするとしても、ただ私の感謝の言葉と、奥様のための日々の祈り以外には何もありません。医師から告げられていきますように、もし突然の死により最後のご挨拶を送ることができなかったとしたら、どうかこの手紙を奥様に対する私の最後の言葉と見なして下さいますように。感じるままに書いたらどんなにすばらしいでしょう。でも、全然うまく表現できません。どうか私の気持をお汲み取り下さいますように。今申し上げることのできない事は、あの世で申し上げたいと存じます。妻と老母に対する私の気持についてはお察し頂けることと思います。私たちの京都の学校と、この島国全体に対する宣教の事業についての私の関心がいかに大きいものであるかは、すでにご存知の通りです。これらの仕事の一切をあとに残していく覚悟はできています。愛する祖国のために、これまでにして頂きましたことについて、御礼申し上げます。今や何を期待し、希望したものでしょうか？ ご存知の通り、私は京都の学校をキリスト教主義の大学にしたいという悲願を抱いています。このために東京に来たのです。このために病気になる、卒倒しました。このために今なお東京にとどまっています。けれども私は細心の注意を怠っていません。残念ながらこれから奥様にあまりお手紙を差し上げられなくなると思います。たとい私がこの世を去ることになりましたも、あまり悲しまないで下さい。これは独立記念日のご挨拶としてふさわしくないことはわかっています。けれども自分自身を主の御手に委ねるつもりである以上、共感して下さるわが母上様に対し、どうか私の魂のために祈って下さるようお願いしたいのです。妻が帰ってきました。早くペンをおくように言っています。この手紙の内容は妻にも告げておりません。どうかこのことは他の人々にもおっしゃらないで下さい。私はまだ生きる望みもっています。がしかし、この世を去る準備もできています。

ハーディー夫人あて

上州伊香保、一八八八年八月十三日

友人たちが、特別の会議を開いて私の弱った体をどうしたものかを話し合ってくれました。彼らが東京大学のベルツ博士^{*}に相談したところ、博士はこの温泉場に行くよう強くすすめてくれました。彼らは私を京都から引き離しておいて、学校のことを心配させないようにしよう、という計画なのです。この場所の静かさを喜んでいます。ここは海拔三千フィートほどもあり、涼しくて快適です。鉄道の終点である前橋からの道路はゆるやかな登り坂でした。前橋には二百人の会員をもつ教会があります。このような山の中の町が何と早くアメリカ化してしまったかに驚いています。良質のミルクと牛肉、それにかなりおいしいパンが入手できます。季節になるとよい旅館がいっぱいになるのですが、私は一軒の山小屋を借りました。この小さな地域にも福音が浸透しています。これは日本人を教育せよ、そうすれば彼らは自分自身で面倒を見るようになり、自給の教会を出発させる、という私の意見の見事な証拠の一つだといえます。できればこのあたりの諸教会を訪れてみたいものです。残念なことに、病気にしておいて主の道を私に教え給うことが、主のご意志なのかもしれません。できるだけ休息にとめています。歩くこと少く、食べること遅く、語ること少く、読み書きすることもまばらです。ヴィクトル・ユゴの『レ・ミゼラブル』と『九三年』^{**}、それにフランクリン博士伝を読みました。フランクリンの教訓は立派ですが、彼のやり方は多くの人々を迷わすかもしれません。今奥様はマウント・デザートにいらっしゃることと想像致します。今あのペランダに腰をおろしていられるとしたら、奥様とお話したり、お話をきかせて頂いたり、やさしい波の音を聞いたり、アイアンシー号が湾内に浮かんでいるのを眺めたりできますのに。ああ、しかしその喜びには何かが欠けています。一年前にハーディ

一様のご永眠についてシアーズさんから電報を頂きました。あの時に感じたことは、今なお痛いほど感じておりますし、これから先いつまでもそれを感じることでしょう。奥様のために甘い香のする鬼百合の花びらを押し花にしました。心からの尊敬のしるしであります。

一八八九年の間に、同志社の理化学校のための建築費として一万五千ドルをすでに寄付したコネティカット州ニュー・ロンドンのＪ・Ｎ・ハリス氏は、その寄付金を十万ドルまで増額した。学校の社員会（「理事会」）を代表して新島はこの寄付金に対する礼状をハリス氏宛にしたためたさいに、「わが国においてはこのようなご寄付はまさしく未曾有のことであって、前例がありません」と書いている。ハーディー夫人あての手紙の中で彼はこの寄付に触れて、次のように述べている。

「最近京都で社員会が開かれ、財政問題を相談しました。仏教の僧侶たちは私たちの発展を阻止しようとして躍起になり、私に對しあらゆる種類の悪口を言っています。彼らは私がキリスト教運動の指導者だと考えているのです。私は今なお神の御手に護られています。私の生命は神の御手の中にあり、私は少しもびくびくしていません。この寄付はちょうどよい時に來て、私を非常な不安から救い出してくれました。一八七四年にポストンを去るとき、私は一人用のマットレスを購入しましたが、それは一人きりの生活をせざるをえないことになるかもしれない、いや、主の御名のために殺されることさえあるかもしれないと考えたからでした。そんな殉教者みたいな精神であのマットレスを買った時の私の考えをお笑いになるかもしれませんがね。あの創業の時期に、主は私の思いを超えて、このふつつか者を祝福して下さいました。私が今病気で弱っており、力を要する仕事にはたずさわれないでいることはご存知の通

りです。この弱さの中にあってもなお、主は私を用いて下さいます。このことは全く不思議です。こうした個人的なことをしたためましたのは、奥様に、私とともに喜んで頂きたいからに外なりません。」

一八八九年の夏は健康状態がずっとよかったようである。新しい理化学館の定礎式が終ったのち、十月には大学設立義捐金の募集のために東京へ赴いた。大蔵大臣の松方〔正義〕伯が彼の計画に大いに関心を持つようになったのであったが、外務大臣大隈〔重信〕伯の殺害計画と不安定な政治状況のために、あまり多くのことは成就しなかった。そのため新島は短期間休養するために前橋に行った。前橋で新島は激しい風邪にかかり、東京に帰って仕事を続けた。病気が再発したので、彼は横浜の南西約四十マイルのところにある海岸の保養地、大磯に、書記〔永岡喜八〕を連れて、衰弱した状態で赴いた。新島がなくなったのはこの大磯においてであった。新島が東京に発つ直前の十月五日に、京都からハーディー夫人あてに書いた最後の手紙は次の通りである。***

「ウェスト・ゴールズバラからのお手紙は昨日拝受しました。この手紙をお書きになりました家には貴重な思い出がつらなっています。あの家から奥様はきつと、時折頭をあげて、あちらこちらに白帆の浮かぶあの美しい入江の静かな広がりをご覧になったに違いありません。その思い出はまるで昨日のこのようにあざやかであります。悲しい、しかしそれでいて、神聖な思い出です。」

今日はとても暖かくて、書斎の窓をすっかりあけています。天候が静かですと、私の方でも静かであらざるをえません。この書斎で私は昔のこと、奥様にかかわりのある昔のことを思いめぐらしています。私の思いははるかな国へと飛んでいきます。それは地上の天国ともいうべき場所です。そこが地上にあるのか、それとも天上にあるのかは、

ほとんど取るにたらないことです。私の思いの赴くところ、そこには甘美で神聖な何ものかがあります。

きびしい心臓の発作を経験して以来、力のいる仕事につくことができません。しかし私の思いは将来の私たちの大学のことで、「新」日本を建設することで忙しく活動しています。キリスト教の働きは今教会合同問題のためにいくらか弱まってきました。政治の方でも大きな騒ぎが起っています。人々はまじめに条約改正のことを論じており、諸政党は党勢を伸ばすためにこの問題を利用しています。来年は国会に送るべき代表を選ぶ年になりますから、興奮はいっそう高まることでしょう。これは私たちの政治の歴史で重要な時期になります。日本が動いています。私たちの教育の事業を促進させ、人々の良心を把握しなくてはなりません。ああ、日本をつかまえて、それをうやうやしくキリストに献げるために最大限の努力をすることが、私たちにはなぜできないのでしょうか？

何人かの東京の学者たちは改進黨とキリスト教の事業を阻止しようと頑張っています。彼らは恐らくしばらくの間、勢力を保つでしょう。彼らは積極的ですが、偏狭で、排他的です。その運動は半分政治的です。けちな政治家たちは仏教の僧侶たちの支持を欲しがっています。僧侶たちの方はこうした偏狭で近視眼的な政治家らの助けによって、自分の地位を保ちたがっているのです。しばらく待って、どのくらい彼らが世の光に反しつつ生きのびるかを眺めてみたいと思います。このような時には私たちの前線、線を固めるために協力一致しなくてはなりません。ところで今言われている合同は、私たちの地方教会の中央集権化の試みなのです。単純に考える人々は、この合同が寛容なものに見え、明確な形で提示されているために、合同に賛成しています。私の望む合同は、むしろ靈的な合同なのです。私はデモクラシーを愛する者です。私の現在の立場を取り続けることはたやすい業ではありません。何かが起こると、いちばんきつい打撃を受けることになるのはたいがい私なのです。しかしそんなことはちっとも気にしておりま

せん。教会の自治権が認められ、教会員それぞれが教会の管理と運営に発言権があること——私の選んだ主義はそういうものです。もし合同の約定がこの条件に基づいているのであれば、私は合同に対して何の反対も致しません。けれども私は、無条件で突っ走らないように注意を払っているのです。このような不愉快なことを申し上げてすみません。しかし心配はしないで下さい。私たちはこの世にあっては火の中をくぐらなくてはなりません。しかし時がすぐてのけちな感情や誤解をいやしてくれます。ああ、この気持を静めるためにはもう一度ウェスト・ゴールズバラへ戻らねばなりません。そのような思いをしばらく捨てて過去のことの思いを寄せること——私にとってこれこそが天国そのもののように思えます。将来、天上の霊的世界に足をふみ入れる時、どんな思いをもつことでしょうか。この世の出来事にしばしばむかつくような思いをしながらも、キリストの御為に、生き抜いて頑張らなくてはならないと思います。」

新島夫人は夫が大磯^{*}に転地したことを知って大いに心配し、夫の世話にかけつけたいと思った。しかしながら新島は、当時八十四歳であった彼の母の許にとどまるよう強く要望し、夫人にあてて「昔の武士は戦場に妻を連れていくことをしなかったではないか」と書き送った^{*}。はじめのうちは万一のことを思わすような深刻な心配はなかったし、「翌年の」一月の最初の週には回復のきざしが見えた。元日に彼は短い詩を作った。次にかかげるのはその直訳である。

古い年が過ぎていくのを眺めながら、

病気の身を悲しむことをやめよう。

にわたりの鳴き声は、すばらしい時が、

近づいていることを先触れしているではないか。

能力の劣った私でありながら、この世代をよくしようと、

貧しい計画をねってきたが、それでもなお、

大きな希望を抱きながら、

この春を迎えるのである。

送歳休悲病羸身

鶏鳴早已報佳辰

劣才縦乏済民策

尚抱壮図迎此春

新年の最初の日々を、新島は日本伝道の問題を研究しながらすごした。彼は何人かの指導的な日本人牧師や伝道者にあてて長文の手紙を書き、いくつかの新しい伝道のためのセンターを確保するよう訴えている。^{*}彼は決してでたために種子をまく人ではなかった。さまざまな地域の人々の特質を熟知し、内陸部が外からの影響にむかって扉を開く有様を注意深く観察しながら、彼は司令官のように作戦をねり、五つの地域の地図の上に前進を示す戦略上の線をマーカーし、彼が確保したいと思う場所の相対的な重要さを異なった色のインキで印づけたのであった。一月十日はふだんと変らぬように見え、二人の教員^{**}と新設の理化学校の計画を論じながらその晩をすごした。下村（孝太郎）教授は日本

風の宿での生活の不便さを見て、京都に帰ることをうながしたが、新島は彼らしく「ここには二万ドルの借金があるのでね、それを支払うまでは出ていくわけにはいかないよ」と答えた。翌日、腸カタルの発作が起こり、急速に悪化して腹膜炎をひきおこした。十七日には東京と京都から医師が呼び寄せられた。もう奥様をお呼びになつては、と言われても「いや、もう少し待って下さい」と答えた。しかしながら彼の病氣は急速に悪化し、十九日には新島夫人あてに電報が打たれた。夫人は京都や東京の友人たちとともに夫の枕許にかけつけた。二十一日には、京都から来ようとしていた友人たちに関して、新島は夫人にこう言った。「あの人たちが来たら、激励してやっておくれ。わたしのために泣かないように言つてほしいのだ。わたしもまた感情の人だから。彼らが悲しんでいると、それに動かされて、たがいに悲しみを増幅させることになるだろうからね。」

新島がとまっていた日本の旅館には近代風の快適な設備がなかったので、マットレスと掛けぶとんが運び込まれた。しかし安楽にするためのこうしたわずかな道具にも彼は反対し、自分はそんな楽な状態で死ぬねうちがない、と言うのであった。苦痛が時々はげしくなった。しかし最後まで頭ははつきりしていた。一月二十二日に彼はもはや見込みがないことを告げられ、何か残しておくべき指図があるかどうかを聞かれた。「今日はだめ。休息させてほしい」との答であった。翌朝彼はこれまで研究してきた地図を持ってこさせ、それを目の前に広げさせた上で、伝道を拡大するための彼の計画を説明した。それから次のような遺言を書きとらせた。

「同志社の目的はキリスト教、文学、科学を前進させ、教育の全体を推進することである。これらは相互に助け合うものとして追求されるべきである。同志社教育の目的は神学、文学、科学それ自体にあるのではなくて、むしろこれらの学問を通して、偉大な活力にとんだ人物が、真誠の自由と祖国につくすよう鍛えられることである。」

「社員たるものは生徒を賢明に、そして鄭重に取り扱うべきである。強い生徒、血気にはやる生徒をも手荒に扱うべきでなく、彼らの本性に従って、強くて有用な人物へと育てあげるべきである。」

「学校が大きくなるにつれて、ますます機械的に流れる恐れがある。これは注意深く警戒すべきことである。」

「外国教師と日本人教師が愛において一体化するよう、あらゆる注意が払われなくてはならぬ。わたしはこれまで何度も両者の中間に立って大いに苦心してきた。将来社員諸君はどうか、わたしがしてきた通りにして下さるようお願いする。」

「わたしは生涯ずっと敵を作らないように努めてきた。わたしは誰一人をも憎しみの目で見ることにはない。しかしながら、わたしに対して稔然としない人をご存知であれば、どうかその人にわたしを許して下さるようお願いしてほしい。わたしは天に何の欠陥をも見出さないし、人に対して何のうらみをも抱かない。」

「これまでに達成されてきた成果はわたしの働きによるのではなく、諸君の働きによるのである。すなわち、わたしがなしえたところの一切は、諸君のまじめなご協力を通してのみ可能であった。わたしはそれを少しも自分の功績とは見做さない。わたしと共にあれほど熱心に働いて下さった諸君に感謝するのみである。」

「同志社に対するわたしの気持はこの歌の通りである。『吉野山花咲く頃は朝な朝な心にかかる峰の白雲』。」

ハーディー夫人あて

わたしはもう行きます。長年にわたる奥様の御いつくしみとご親切に対し、感謝はつきません。もう自分で書くことができません。わたしの仕合わせのために奥様がして下さったことに対する感謝に心を満たしつつ、この世を去り

ます。

「N・G・」クラーク博士あて

あなたがわたしに対して、またわたしの事業のすべてに対して与えられたご信頼に対して、心から感謝したいと存じます。健康がすぐれず、まことにわずかの仕事しかできませんでした。

新島夫人に対する最後の言葉の一部はこれであった。「わたしの死後記念碑は建てないでほしい。一本の木の柱に『新島襄の墓』と書けば十分である。」

一月二十三日の午後二時に、最後が近付いたことを見て、引続き総長代行と学園教会の牧師をつとめることになる金森〔通倫〕^{*}が新島にむかって「先生、どうか安らかに逝かれますように。私たちは最善をつくして先生のお仕事を継承いたします」と言った。はげしい苦痛の中で新島はほほえみながら左手を挙げて「十分だ。それで十分だ」とささやいた。彼は二時二十分に^{**}「平和、喜び、天国」という言葉をつぶやきながら眠りについたのであった。

それよりひと月足らず前のことであるが、ある地方の山村で、一群の子供らが寒さのためにほほをバラ色に染めながら道を行くのであった。一人の旅人が子供らに何をしているのかと聞くと、子供らはにっこりと笑いながらこう答えたという。「ぼくらは友達や親戚のところへクリスマススの挨拶まわりをしてプレゼントを集めているんです。新島先生が来られたら、そのプレゼントを大学のために差し上げるんです。」ああ、かわいい子供たちよ、君らがそれは

ど期待していた先生は、もう来られないのだ。

一月二十四日に、遺体は埋葬のために京都へ運ばれた*。列車はほとんど真夜中になるまで到着しなかったが、六百人の生徒たちを含む一千人が駅まで出迎えた。新島先生危篤のしらせを受けたとき、生徒たちは一団となって師の病床にかけつけることをやつのことでおさえたのであった。新島の死が伝わるまでの数日間にわたって開かれた祈禱会での、まじめな、訴えるような数々の祈りは、先生と弟子たちの間の強い愛情をあかしするものであった。それは嵐の夜であり、通りは泥と半分とけた雪とでぬかるんでいた。しかし生徒たちはほかの誰にも柩に触れることを許さず、それを自分たちで順番にかつぎ、ブロックごとに肩代りし、駅から新島邸までの三マイルの道のりを歩いたのである。彼らはすべてこの神聖な奉仕に参加しようとして一生懸命だった。二十六日の日曜日にチャペルで記念礼拝が行なわれた。午前の礼拝は日本語で、午後は英語であった。一日中何百人という人々が、彼らの愛した先生に最後の別れを告げようとして、柩の側を列を作って進んだ。一人の若い日本人が私に次のように語った。「わたしが感動したことは、先生に最後のお別れに來た沢山の人々の中に、京都地方裁判所の首席判事が*おられたことです。愉快なひとで、いつもすぐに何か面白いことを言う人でした。彼は非常にゆっくりと家に入り、柩の安置されている部屋に入る前に外套をぬぎました。それで、彼が礼服を着ていたことがわかったのです。彼は非常に大人しく部屋に入り、最敬礼をしました。それから、まるで生きている人に語りかけるかのように、『新島さん。あなたが生きておられた時には本当にお世話になりましたなあ。もっと多くのことができなくてすみませんでした。将来はきっと、もっとよいことをしますからなあ』と言ったのです。そして子供のように涙を流しながら出て行きました。あくる日、柩が運び去られる時に、彼がこうつぶやくのが聞こえました。『——伯と——氏は葬儀屋にかつがれて墓へ行った。しかし新

島さんは祖国にこれから偉大な貢献をする人々の肩にかつがれて墓へ行きなさるのだ』と。今しがた触れた二人とは、最近なくなった総理大臣と、東京の最も富裕な商人を指している*。

葬式は一月二十七日、月曜日に、同志社の教職員生徒、全国各地から集った卒業生、府市の当局者、外国ミッシェンの代表者たちの参列のもとに行なわれた。礼拝堂だけでは集まった群衆——その数は四千人を超えていた——を収容することができないので、校内に大きなテントが張られた。校門から礼拝堂への道の両側には、こういう特別な場合に日本人が惜しみなく使う、花と常盤木から成る巨大な花束五十個が並べられた。柩は花の中に隠れてしまった。

新島の後継者となった小崎〔弘道〕氏が、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」〔ヨハネ伝12・24〕という聖句を引いて短い説教を行なった。長さが一マイル半に及ぶ葬式の行列がはげしい雨の中を進み、生徒たちが再び柩をかついだ。彼らは最初から、可能なことは一切自分たちの手で行なうことを主張しており、墓も彼らが用意したのだった。本質的にみて日本は対立するものが共存する国である。花やのぼりを持った葬列が三条通りの〔北側の〕なだらかな斜面にある仏教寺院〔南禪寺〕の美しい森を通って行った。ここには新島の父〔民治〕が眠っているのであるが、新島自身は「日本におけるキリスト教の大立物」だという理由で、その埋葬は拒否されたのだった。ところで葬列の中に「大阪の仏教徒より」と書いたのぼりをかかげた僧侶たちの代表もいたことはまったくの驚きである。他ののぼりの中には東京から来たものがあり、それには新島の最後の言葉のひとつ、「自由教育、自治教会、両者併行、邦家万歳」という語句が読まれた。日本の私人として、これまでに、新島の場合ほどその死が広く、かつ深く感じられた例はなかった。「この人はいったい誰なのか？」と大磯の一住民は叫んだ。「その人の名前を聞いたこともないが、金持やえらい人たちと交流し

ているだけでなく、その最後に臨んで、そういう人々もやはり悲しんでいるというこの人は？」新島の死は国家の損失として、全国の新聞が哀悼の意を表した。あらゆる階層の人々から何百通という手紙や電報が寄せられた。新島が彼の同国人たちからのような愛と尊敬を受けていたかを正しく評価するためには、彼の死が引き出した多くの感動的な贅辞のいくつかをどうしても知る必要がある。というのは、彼の堅持してきた目的や確信からすれば、反対者のみならず敵を作り出しても無理とはいえなかったような状況の下で、彼はなおも尊敬され、すべての人々の愛情をさえかちえていたからである。

井上「馨」伯爵は大磯あてに「センセイヲシナセテハナラヌ」*と打電してきていた。青木「周蔵」子爵は手紙の中で「私は偉大にして善良な友人を失った」と書いている。「中井」滋賀県知事は悔やみ状にそえて、大学設立資金として約束していた金を同封してきた。新島の後継者たちと家族あてに、一人の仏教の僧侶は次のように書いてよこした。***

新聞紙上で総長新島襄先生ご永眠のことを知り、心から悲しむものであります。私は仏教信者でありますのでいつも先生に反対し、先生の主義をししば攻撃してきました。先生は柔和で高貴で忍耐強く、まじめな方であられましたので、ご自身の信じられたことを公表してこられたのであり、そしてこのことがわが国民の宗教思想をめざますにあずかって大いに力があつたことについては、疑いの余地がありません。はじめてお目にかかりましたとき、私は先生のご親切と愛に感動しました。二時間もたたないうちに旧知のように感じたのです。ああ、私が仏教を信じていなかったならば、恐らく先生に従ってキリスト教を信じていたことでありましょう。今もはつきりと覚えていますが、あの時私は、宗教者はすべからずこの人のようでなければならぬ、と自分自身に言いきかせたことであります。そ

の後いく度か先生にお目にかかる機会がありました。お目にかかるたびに、先生に対する尊敬の念がまし加わりました。この悲報に接し、先生のやさしいお顔が目に見え、ご親切な言葉が再び耳にひびき、失ったものの大きさがひしひしと感じられるのです。新聞でお年が私と同年であったことを知りました。あれやこれやの思いがこもこも湧き起こってとどまることを知りません。とりあえずおくやみの電報をお送りしましたけれど、私の心中をもっと十分に表わすために、この手紙をしたためた次第であります。

東京の『女学雑誌』(「一九八号」)は佐々城豊寿夫人^{ささきとよじゆ}による、永眠一か月前の新島との会見記をかかげた。

私たちの宗教の導きの星であり、京都の大学の創立者であられる新島襄先生は、明治二十三年一月二十三日、四十七歳をもって永眠されました。私たち自身のためばかりでなく、日の浅い日本の教育のためにも、先生のご永眠を悲しむものでございます。先生は愛にあふれ、徳に満ち、献身的な精神の持主でいらっしゃいました。偉大なお仕事の完成を目前にして他界なさいましたことは、特に残念なことでございます。先生のご経歴についてはすでによく知られていますので、私が拙い文章でそれを繰り返すことは先生を冒瀆することになるかと考え、これを省略させて頂きます。ただ私は先生のお言葉のうちのいくらかを皆様にご披露し、これでもって自分を励ますためのよすがにもさせて頂けたらと思うのでございます。

先生は約十五年前にアメリカから帰国されました際に、東京と横浜でしばしば説教され、また数回の講演もなさいました。聴衆はすべて深い感銘をおぼえ、あたかも日本国民の父であるかのように仰ぎ見たのであります。私もそ

の一人でありまして、その時以来、できるだけ何べんでも先生にお目にかかろうと致しました。お名前はだんだんと知れわたるようになり、最近では大学設立の計画に着手なさいました。私はこの企てを嬉しく思い、私の関心を示すために他の友人たちと音楽会を開き、その収入でもって貧者の一灯を献げたのでございます。先生からはお礼のお手紙を頂き、かえって恐縮した次第でございました。

去年の暮に先生が上京なさいました。十二月二十三日のことでしたが、私は先生と長時間にわたりお話しする機会を頂きました。^{*}おだやかなお顔の中に、意志の強さがあらわれていました。言葉数の少ない方でございましたが、その一語一語にはかりしれない重さがこもっておりました。先生はまるで父親が子供を迎えるようにして私を迎えて下さり、微妙な遠慮とともに、あふれるばかりの愛をもって接して下さいました。先生はこう言われました。「これがいい機会だと思うので、わたしは一つあなたにお願いがあります。あなたに献身して頂きたいと思う仕事があるので。今日の時点では実に重要な仕事です。日本人の中に偉大な人物がまことに少ないということ、また国民の道德がまことに低いということについてはいろいろな理由がありますが、わたしの信じるところでは、その最大の理由は男女の権利に不平等が存在しているということにあるのです。それ故、女学校の若い生徒たちの心にしっかりと刻みつけた第一のことは、彼女らが個人としての権利と義務をもっているということであって、このようにしてはじめて宗教の根本精神に彼女らの関心をかきたてることのできるのです。多くの女性たちは、親に多くの金を使わせ、苦勞をかけて、四、五年勉強したあとですぐに結婚生活に入り、まるで教育などは受けなかったかのように振舞っているのを見かけます。彼女らは社会のために何一つなすところがないのです。彼女らは夫の言うがままになっています。能力を示す機会もなく、学びもしなかった事がら、つまり炊事や育児にしばりつけられています。これは何としても

残念なことです。悲しいことに夫たちも小さな便利さにかまけてしまつて、このことを理解していません。それは習慣の結果であるかもしれませんが、これが文明の進歩を妨げているのです。社会改良ということにかけては婦人の影響力は男子のそれに勝っています。婦人の力はほんとうに偉大であります。しかしわが国には依然として古い秩序にしがみついている、保守的で頑固な男たちがいます。わたしのこれまでの経歴をふりかえつても、大変な困難がありました。この人こそは眞摯な友であると思つて心中を打ちあけていた人が、わたしの敵になつてしまいました。最善のことだと信じて決行したのに、あざけられたり、憎まれたりいたしました。わたしたちの道には口に出して言えないほどの苦勞が横たわっています。今日の婦人たちが出会われるに相違ない試練もまた、同様に大きいものです。あなたにこのような仕事をお願いするのは、あなたの命を縮めるようなものかもしれません。しかし、わたしたちは利己的な目的のために生きているのではなく、あなたもわたしも神のしもべである以上は、定められている義務をはたしているのです。それ故、この世の嘲笑や悪口に驚いてはなりません。わたしたちが堪え忍ぶ試練が大きければ大きいほど、わたしたちの受ける恩賞もまたそれだけ大きいのだということを忘れてはなりません。今わたしの言っていることは、世間の多数の人に言わせれば愚かな説ということになるでしょう。昔の偉大な人々のことをふりかえつて見ると、すべてがその同時代の嘲笑と攻撃を耐え忍ばねばならなかったのであり、命を犠牲にすることさえあったのだということがわかります。キリストが十字架上の苦しみをお受けにならねばならなかったことは驚くに当たりません。それ故、指導者となろうとする者は、自分の命を献げる覚悟がなくてはならないのです。

もう一つつけ加えたいことは、今日のクリスチャンたちのことです。彼らは神によつて養われ、衣服を神から頂いておりながら、まるで死人同様ではありませんか。これは彼らが神の御言葉を理解していないからです。残念なこと

が多い中で、これこそは最もなげかわしいことです。たとい三千九百万の民が名ばかりのクリスチャンになってみたところで、社会を浄化するにはほど遠いということです。このことは決して軽く考えてはならないことであります。」

お言葉は私の胸をつらぬきました。かなり時間もたちましたので、日を改めて、潮田^{うしおだ}さんと一緒にもう一度お目にかけようございます、と申しあげてからおおいとしました。すると別れしなに先生は一枚の写真を私に賜わり、こう言われたのです。「これは今お願いしたことをお忘れにならないために差し上げるのですよ。」二日のちに潮田さんと一緒にお訪ねしました。大へんお忙しいところ、二人に会って下さり、ここに再現することのできないほど沢山の話を話して下さいました。先生のお考えを正しく表現することはとても私にはできないような気がいたします。しかし、その中には私が生涯忘れられないと思うお言葉がございました。それは「お二人とも決して絶望することなく、忍耐して下さい。断然この世の改革者、そうです、革命者となって、働き続けて下さい」とのお言葉でした。

このお言葉を吐かれた時の先生はとても気色ばんでおられましたので、私たちは涙しつつお別れました。最後のお言葉はこうでした。「これがお目にかかる最後となるかもしれません。どうかわたしのため、また同志社のために祈って下さい。」お顔をみつめながら戸外に出ました。そして悲しみに満たされつつ家路を辿ったことをごさいます。

私たちはその日から毎日、先生のご回復のために、また大学のために祈っておりましたところ、思いがけない悲報が二十三日に届きました。あまりにも思いがけないことで、茫然としています。私たちが先生からお話をうかがったのは十二月二十三日のことでした。この二つの二十三日の間に、わずかひと月しかたっていないのです。あのお言葉が私たちへの最後のお言葉になろうとは誰が予想できたでしょうか。あの日のことを思い返してみますと、お顔に

苦痛の色が現われていたことを思い出すのです。けれども先生は苦痛を意識なさらないかのようにお話しになりました。ああ、あのお言葉！ 今でも目をとじてみますと、先生のお顔がはっきりと目に浮かびます。悲しみに圧倒されてしまい、先生のお言葉のほんの一部だけしかお伝えできませんことを申しわけなく存じます。

過去三十年間における日本国内の動きに通じている人々には、福沢〔諭吉〕氏の名前は知れわたっている筈である。新島と同様彼も武士階級の出身である。西洋の知識を追求したために家族を孤立させることになり、迫害と汚名を蒙ってきた。最初の日本の使節団とともにアメリカを訪れたのであったが、帰国後『西洋事情』と題する書物を出版した。^{*}この書物は日本にとって啓示の書であった。きびしい感情の荒れ狂う時代にあつて福沢氏は攘夷派の人々からはげしく憎まれた。一八六二年に氏はヨーロッパを訪問し、帰国後『学問のすすめ』を出版した。この初版は五十万部以上売れた。宗教、政治、社会面での改革問題の全般にわたつて、福沢氏は新生日本の独立的な指導者として認められていた。新島と同様、氏もまたあらゆる官途の招きをはっきりと拒否してきた。ジャーナリスト、講演家、著述家、そして特に教師として、氏は一日本人作家の言葉によれば「日本における西洋文明の發達に対して、他の誰よりも大きな寄与をしてきた」のであった。次にかかげるものは福沢氏が編集者である『時事新報』〔第二五四六号〕にのせられた記事からの抜萃である。

新島襄氏は本月二十三日、心臓病のために大磯の旅館で死去された。

人間の経験において死ほど悲しいものはない。しかし特に新島氏の死は社会のための損失として悲しむべきことで

ある。今社会の狀態を調べてみると、人々は官界の事柄にあまりにも重点を置きすぎており、名声と榮譽をもたらず地位は政府以外にはないかの如くである。これは封建制度の自然的な帰結だといえる。政府の役人になれば成功が確実に保証されたことになる。このことが信じられているために、官界の庇護を求める人々は押すな押すな盛況を呈している。政治や実業界はもちろんのこと、教育や宗教界においてさえ、すべての人々の目は、繁榮の中心的根源たる政府の上に注がれている。このような傾向が存在することは、実に恥ずべきことである。社会の構成要素は沢山あるのであって、政府はこれらの構成要素の一つにすぎず、決して唯一のものではない。文明があまり發達していない段階にあっては為政者は途方もない權力を持っていた。しかしながらそのような状況はこの開化の世紀にあっては汚点なのである。教育や宗教の運動に興味をもつ人々は自分自身のためにも、また自分のたずさわる事業のためにも、独立をこそ目指さなくてはならない。しかし、こんにちの状況はそうになっているであろうか？ われわれの間には、利己的な利害から自由でありつつ、社会の眞の独立を追求している人々がはたして何人あるであろうか？ この問題について時折意見を聞くことがある。しかしながら、個人の具体的な実例が伴うのでなければ何の役に立つのか？ これはまるで大酒飲みが禁酒の効用を説くようなものである。独立の人が独立の社会を作る。新島氏は腐敗した時代に生きながら、時代によって腐敗することがなかった。教育と宗教の主義のために働き続け、その目的としたところは常に単純であった。新島氏こそは実に独立の模範である。肉体はほろびても、彼の名前は忘れ去られるものではない。後世の人々は彼の名前を聞いて勇気をふるいおこし、彼のあとに従っていくであらう。そのことが彼の霊を慰めることになるのである。われわれは新島氏ご永眠の悲報に接し、「日本の」社会が眞の自由人を失ったことを悲しみ、ここに深く哀悼の意を表わす次第である。

日本語による新島の伝記を準備中である徳富猪一郎氏は、自らその主筆である『国民之友』の中に次の一文をか
 げた*。

ラマルチーヌは言った。人間の与えうる最も高貴なものは血であり、その次に涙である、と。われわれは個人としてはその力と光と愛の故に、父とも師とも仰いできた新島襄先生を失った。社会としては日本の道德改革運動の指導者を失ったのである。われわれは涙をおさえようとして全力をつくしてみたが、無駄であった。今は悲しみを表わすべき時ではない、なぜならこんにちその悲しみは文字でも言葉でもとうてい捉えることができないからである。今はまた先生をほめたたえたり、先生の性格を分析したりする時でもない。・・・勇者たちだけでなく、大磯の浜辺を洗うあの心をもたぬ波でさえも、先生のために嘆いているように思われる。しかし先生の献身の精神は今なお生きている。われわれは先生から親しく教えを受けた者として、勇気をふるいおこし、先生の精神を継承して働き続けるべきではなからうか？ 絶妙な哀悼文、壮大な葬式、すばらしい記念碑——こういったものを先生は喜ばれないであろう。それよりもはるかにましであるのは、われわれが毎日の義務をはたすことであり、全身全霊をあげて社会の道德的改革を少しずつ押し進め、こうしてわが国を、自由と真理と慈悲と神を愛する人々の社会にしていくことにほかならない。これこそがまさしく先生を喜ばせる道である。先生の人物を称賛し、先生の死を惜しむ人はこのことをこそ考えてみるがよい。説教者たちよ、あなたがたの教会を自給の教会たらしめよ。教師たちよ、あなたがたの学校を性格鍛練の場たらしめよ、学生たちよ、自由を愛し、国家の福祉のために貢献することのできる人々の精神とエネルギー

―を追い求めよ。編集者たちよ、友人に対しても敵に対しても、真実を恐れずに公言せよ。すべての人々よ、精神をつくし、力をつくして神と真理を愛し、互いに愛し合え。

一八九〇年二月二十一日に、東京の大公会堂である厚生館^{*}に、新島を記念して多数の人々が集まった。次にかけるのはその日に行なわれた東京大学総長加藤弘之^{*^{*}}氏の講演の一部である。

皆さんは新島先生を追悼するために今日お集まりになっております。私も出席して何かを話すようにとのお話がありました。はじめはおことわり致しました。私は新島先生にお目にかかったことさえありませんし、先生とはこれまで何の関係もなかったからです。私はイエスを信じる者ではありません。今までにお話しになった方々はすべてクリスチャンであるにちがいありません。私だけがクリスチャンでもなく、仏教徒でもなく、まるっきりの無宗教です。・・・しかし、それでも何かをしやべるようにということですから、ごく簡単にお話ししようと思います。新島先生に関して承りましたことから致しますと、私には先生がどのような方であったかが実によくわかるのです。先生はまことに尊敬すべき方であります。話された方々はみな一致して、先生には不屈の目的意識があつたことをお述べになりました。私が尊敬いたしますのは先生のこの何をもつてしても打ち破ることのできない精神なのであります。私は先生がキリスト教徒であつたという理由で先生をはめるつもりはありません。先生がイエスを信じておられようが、おられまいが、それはどうでもよい。私はあの不拔の精神、つまりそれは宗教、学問、政治、商売等、あらゆる分野においてなくてはならないものでありますが、その不拔の精神の故に先生を称賛致します。この精神がどこにおいても

大切であるのはもちろんですが、この精神ほど日本に必要なものはないと考えます。日本人は賢い民族であります。西洋諸国もこの点でわれわれをほめており、それは疑いもなく正しいことです。二、三十年のうちにわれわれは、このかしこさの故に、西洋から多くのものを獲得してきました。賢いことはよいことです。しかし賢いだけでは力に欠けます。賢いことと、堅忍不拔の精神はめったに並行して行きません。賢いだけではとかく軽佻浮薄におちいります。軽佻浮薄の精神は大事業を最後までやりぬくことがめったにありません。きつと例外はあるでしょうが、私の考えでは、私たちには西洋人のもっているあの忍耐力、不撓不屈の精神が欠けている、それが私たちの弱みです。しながら新島先生の場合、決断してアメリカへ行かれた最初の時からその生涯を終わるまで、この不撓不屈の精神を貫かれることいちじるしいものがありました。先生が達成されたあのご成功のごときは、単なる利口さだけで可能であつた筈がないのであります。

過去三十年間において日本がなしとげてきた莫大な進歩は世界の称賛するところです。つい先日まで外国人を野蠻人としてさげすんできた多くの人々が、今では彼らをほとんど崇拜している有様です。外国人を野獸同様に見ていたところから、彼らを神のように崇めるところまできたのです。この変化は天才的な利口さがもたらしたものでありまして、そうなったことは別に悪いことではありません。ただしもつと不屈の精神があつたなら、この変化はもつとゆっくりとやってきたことでありましょう。・・・外国人たちはわれわれの動きの早さを批判しています。事実、動きの早いことだけでは決してよい結果を生むものではありません。・・・ほかの諸特質をもたなければ、日本は西洋と競争して勝利を得ることは不可能です。たとい格闘の実戦で勝つたことがあつても、平和の競争で負けてしまふでしょう。西洋は利口であり、しかも強いからです。・・・だからといって私は、日本がこの力の要素を全く欠いている

と申すではありません。もしそうだとしたら、われわれの将来は絶望的であります。ただ私の強調したいことは、新島先生は青年たちにとって、この点で偉大な模範であるということです。先生の信仰に従っていく人々だけでなく、商人も、政治家も、学者も、すべての人々が先生の精神を獲得するよう努めるべきであります。この適者生存の時代にあつて、忍耐しうるというこの能力がいかに必要であるかを理解すべきであります。こういう気性の人物がもつと日本の中に育成されていくことを、心から希望して止みません。

皆さんの中にはクリスチャンのみならず、儒教の方も仏教の方もいらつしやる。クリスチャンが多数であると思いますので、この機会に新島先生が模範であるもう一つの点を指摘させて頂きましよう。・・・キリスト教を信仰しますとどうも愛国心と天皇への忠誠心が弱まるように思います（聴衆の中から若干の拍手と、「ノーノー」という叫びが起こる）。これは或る人々の意見でありまして、これは何人かのクリスチャンたちの言動によつて確認されていると考えます。「ノー」の声が大変多いようですね。この批判がまちがっているなら喜ばしいことです。キリスト教を信じれば国家に対する忠誠心がへらねばならぬ理由はあります。だがキリスト教は外国で起こつた宗教であるため、他の宗教の人々は、それが自分自身の信条を擁護するためだけであるにしても、こうした批判をするのは当然だといえます。儒教が全盛をきわめていた徳川時代のことですが、或る偉い学者が弟子たちにむかつて、もし孔子と孟子が大軍を率いて日本に攻め寄せてきたとしたら君たちはどうするか、と尋ねました。弟子たちは返事ができないでいた。彼らにはこの単純な真理がわからなかった。すなわち孔子であれイエスであれ、わが帝国に侵入してくるならば、これを防ぐのがわれらの義務だということであります。・・・こんにち、そのような風潮があらうとなくろうと、クリスチャンたるものはこの批判を堂々と受けとめ、反対者たちにこの点で攻撃する余地を与えないよう心がけ

るべきであります。新島先生こそはこの種の批判に何一つさらされる人ではありませんでした。それ故私は躊躇することなくそのことを語ったのであります。この点においてもまた、われわれは先生を尊敬し、見習わなくてはならないということを申し上げて、躊躇なく先生を推奨いたす次第であります。

同じ集会で『基督教新聞』の主筆、竹越〔与三郎〕氏^{*}は次のように述べた。

老若男女がぎっしりとつめかけていらっしやるこの大きな集まりには、クリスチャンとともに必ず無神論者、有神論者、仏教徒、唯物論者がおられることでありましょう。新島先生を知らない方もきつと多数まじっておられることと思います。いったい何故これほど沢山の新島先生を知らなかった人々が、先生をよく知っていた人々とともにここに集まったのでしょうか？ それは先生を記念するためです。ではどのようにしてわれわれは先生を記念するのでしょうか？ われわれは先生を同志社の総長としてあがめるのでしょうか？ 同志社大学はすでに先生の在世中にその基礎をすえましたので、われわれはそのために悲しむ必要はありません。それではわれわれは先生をクリスチャンとしてあがめるのでしょうか？ しかしこちらの無神論者、そちらの唯物主義者、あちらの仏教徒の方々は、どうして先生をそのような理由であがめることができるのでしょうか？ いったい何故その方々はここにおられるのか？ 私 생각합니다のに、この大聴衆が集まってきたのは、今世紀の偉人の一人として、その独得の性格は国民の共有財産である人物として、新島先生を記念するためであります。それ故この機会においては、先生の事業の歴史をふりかえってみたり、先生の信仰の物語を語るよりは、一箇の英雄として新島先生について語ることがふさわしいのであります。

す。そこで先ず心に浮かんでくるのは「英雄とは何か」という問題です。人間は英雄を崇拝する存在です。宇宙は英雄を崇拝するための神殿です。人類がこの世界に住みはじめてから何千年という時間がすぎましたけれども、人類の歴史とは英雄崇拝の歴史にほかならないのであります。

カーライル^{*}の断言するところによれば、偽の英雄を崇拝するのは弱さの証拠であり、真の英雄を崇拝することは偉大な民のしるしであります。けれども、偉大な国民ですら偽の英雄に身をかがめ、彼らのまったく中で生きて死んでいく真の英雄に気がつかないでしまうことがしばしばあるのです。一国民が真の英雄を認め、これを尊敬するのは偉大な、輝かしいことであります。そこでもし新島先生の性格がわれわれの偉大さの理想を満足させるものであるとすれば、先生の名声は国民の共有する栄光となるのであります。もし軍隊を指揮して、飛びくる弾丸ときらめく銃剣の間に馬を走らせるのが英雄であるとすれば、新島先生は英雄ではありませんでした。もし大風のような雄弁でもってすべての反対者を圧倒する人だとか、あるいはまた口八丁手八丁でもってあらゆる事業に成功をおさめる人が英雄であるとするならば、新島先生は英雄ではありませんでした。しかしながら、もしもその人の伝記が一つの詩であり、一つの教訓として歌われ、後世の人々の熱情をかき立てるような人が英雄であるとするならば、新島先生こそは実にその名を与えられるべき人でありましょう。これをもって途方もないほめすぎだとして私を非難する人があつてしょうか？ 私は信じるところを申し上げただけであります。偉人といわれる人の名声が、その人の実体よりも大きいことがしばしばあります。影の方が体それ自身よりも大きいのです。そのため、実物に近付いてみて失望することがよくあります。このために、偉人はしばしば絵にたとえられるのであって、一定の距離を置いて観察しなくてはなりません。しかし新島先生の場合には決してそのようなことはありませんでした。先生の名声は高いものでありましたが、

お側に近寄って先生にお目にかかり、お話してみますと、先生を一層尊敬せざるをえなくなるのでありました。先生を個人的に知っておられた人々は、先生がやさしくて柔和な方であったと証言しておられます。しかし先生の内部にははげしい火が燃えていたのであります。こうした両面が一個人の中に見られるということは、きわめて稀なことです。単なる善人は柔弱におちいりやすく、能力のある人は粗暴過激におちいりやすいからです。やさしさと力が、新島先生の中にあつては稀な度合で共存していたのであります。

かつて私が頂いたお手紙の中に、先生はこうのように書いておられます。「若者よ、一度戦つて、そこで止めてはならぬ。三度戦つたあとでさえ、止めてはならぬ。刀折れ、矢つきても、戦いを止めてはならぬ。真理のためにはすべての骨がくだけ、最後の血の一滴まで流してはじめて止めるのだ。真理のために戦うのでなければ、われわれの命は無用ではないか？」^{*}この言葉は私を行動へ駆り立てます。それを読む時、私は姿勢を正します。先生の体内では、先生の精神は荒れ狂う海のように逆巻いていました。しかしそれが外側に流れ出るときには、柔和でやさしい行動の中に、静かにやわらいで流れ出たのであります。それはちょうど、山々を震わせるほどの力をもった泡立つ大川が、いったん海に注ぐと、広大な海面に静かに広がって、小波さえ立たなくなるのと同じであります。このやさしさと激しさの結合の神秘はどこにあつたかといえますと、それは先生の天に対する信頼にありました。先生は一切を神に委ねました。先生は「草は春風に礼を言わない。落葉は秋風に不平を言わない」と言うのが常でした。先生には秋風と春風は同じものであります。先生は名声を得ようと努めたこともなければ、不幸を避けようと努めたこともありませんでした。喜びや楽しみが来れば、先生はこれを拒みませんでした。喜びや楽しみが側を通りすぎるならば通りすぎるにまかせておき、その後を追うことはありませんでした。先生は一切を自然の成り行きにまかせたのであります。

す。このようにして先生は、臨終の床で「わたしは天にむかって不平を言わないし、誰の中にも欠点を見出さない」と言われたのです。先生の生涯は天に対する信頼をもって始まり、天を楽しむことで終わりました。何という崇高な生涯であったことでしょう。先生はまた、怠け者の説教家のように、天から与えられた仕事を軽々しく考える人ではありませんでした。先生が神戸で療養しておられた時、私は大阪にいたものですからお目にかかりに行きました。先生はご自分の病気のことも忘れて長時間にわたって話されました。そして、いかなる時代においても、一国の進歩と隆盛をはかるには、その国の偉大な人物の数をもつてはなくてはならぬ、と断言されました。先生はこうして、ヒューマニティーの大義のために献身する人々の少ないことを嘆かれたのであります。一時間ものお話のあとでお疲れになり、私の方でもこんなに長くお話しになってはお体にさしざわりがあることを心配して、もうお止め下さいとお願いしたのです。しかし先生は同意なさらずに、まるでちっとも病気でないかのようにお続けになりました。この自己追求的な世界を一変して自由と正義の王国にすること。そこでは老人は若者を助け、若者は老人をいたわり、富んだ人と貧しい人が互いに攻め合うことなく、労働には適正な報酬が与えられ、平和と繁栄が全世界に満ち、一言にして言えば、人類の偉大な可能性が実現した世界であります。これこそが先生の永続的な関心事であり、目的でありました。朝も晩も、寝てもさめても、それは先生の念頭を去りませんでした。この目的のために、先生は教育に道徳を加味しようと努められたのです。先生の生涯の一大事業はこの同じ目的をめざすものでありました。劉玄徳は趙雲を評して「全身これ胆」と言いましたが、^{***}それと同じく新島先生についても「全身すべて火である」と言われてきました。しかもこの火は平和で繁栄する国民をもたすために燃えました。先生の涙、祈り、博愛行為、いな病気ですらも、すべて祖国のためにささげられたのです。先生のお仕事は天が定めたものでした。先生は地上に天国を築くこと

を最高の義務と考えました。われわれは今や、何故先生が自分自身を信じ、あれほど大きな責任を自己に課したかをたやすく理解するのであります。

もし真理と人間愛を結合し、大胆な精神と柔和な性格を結合し、国家のおえら方やこの世の実力者たちの助けなしに、キリスト教が何であるかを自分自身の行動を通して具体的に示すことができた人があったとすれば、新島先生こそはその人でした。先生は十九世紀のピューリタンでありました。先生の生涯は人々を刺激し、めざませる力をもった、一篇の詩でありました。それは模範とすべき教訓です。先生のような人物こそまさに尊敬に値するのであり、このような人物をもつことはわが国民の名譽に外なりません。

皆さん、新島先生はもはやこの世におられません。なま身の人間であり、東洋のピューリタンであり、人類の指導者であり、独立独行の人であり、子供を愛した人であり、若者たちの教師であり、女性の味方であり、老人を慰める人であった新島先生は、もはやこの世におられません。先生の肉体は泥棒の肉体同様に埋められました。しかし先生はなお生きておられる。先生は日本人の記憶の中に、真理と人類愛という大目的の中に、国民の感謝の念の中に、生きておられるのです。新島先生を記念するために集まれた皆さん、日本を強く、正しく、高潔な国にするよう献身して下さい。これこそが新島先生を記念する最上の道であります。

自分自身がその一部分を構成する社会の状況を真剣に考えてみる人の数は少い。社会の状況を嘆き悲しむ人々の中で、社会の改造という大義のために献身しようとする人の数はもっと少い。批評したり、不平をこぼしたりする人々の数は、改革のために自己犠牲をはらいながら努力する人々よりも、いつも多い。しかし新島は若い頃の、不満を抱

き、じっとしておられなかった時期でさえ、自分自身のことを考えていたわけではなかったように思われる。なぜなら、彼を脱国へと導いた動機は、はっきりと愛国的なものだったからである。生涯をつらぬいて、新島の動機は、愛国心であった。しかし、彼の視野が広がるにつれて、彼の大志も広がっていった。新島は祖国を強力ならしめたいという欲求で出発したけれども、最後には祖国をキリスト教化するための努力で終った。ワシントンで「岩倉」使節団が彼の奉仕を要望した時、彼の忠節心はすでに日本帝国からキリストの王国へと移行していた。新島はいわゆる成功へと導く多くの要因、またはこの世的な偉大さを構成する諸要因を持ち合わせていなかった。彼は学問の人でもなければ、深遠な学者でもなかった。彼は如才のない人でもなければ、行政能力にたけていたわけでもない。人々の関心を集めるにはあまりに謙遜であり、遠慮勝ちであった。講演者としてはたちどころに人々に印象を与える資質に欠けていた。新島に個人的に接触してみたところで、しばしば成功の理由とされる、あの深い自信を指し示すような堂々とした性質が現れてくるわけではなかった。しかし彼はどうかやら自分の欠点を意識するときだけに自分を思い出したようであったが、彼は働き給う神に対する不拔の信仰を堅持しており、この信仰のおかげで、自我に対する信仰だけではとうてい打ち勝つことのできない落胆や失意を乗り越えたのであった。新島が自分自身の実力を過少評価していたことは彼の人格に非常な魅力をもたらしたが、そこにはまた彼の内部に働くより高い力に対する信頼もまじっていた。この信頼の念は彼自身の勇気の源であり、同時にまた彼が他の人に与えた靈感の源でもあった。彼は寛大な人だった。彼がたずさわったような事業においては、この寛大さという素質は、鋭敏さとか頭の回転の早さといった消極的な素質にもまして、一層効果があった。彼ははなばなしほどの指導力を構成する諸要素を所有していたとはいえない。けれども範を示し、他人に模倣したい気持ちを起こさせるような諸性質、すなわち、この一筋につながるという

た目的意識、義務に対する忠誠心、克己心、温和な行動、あふれるばかりの愛——これらはまさしく、すぐれて彼のもののなのであった。それ自体としては取るに足りないような言葉や行動の背後に横たわる人格を分析したり、ありきたりの言行の中から特別な言行を引き立てたりすることは困難である。人々との静かな交わりにおいて新島は、平凡な事柄に非凡な意味を付与する力をもっていた。絶対的な真摯さの故に、彼はより慎重ではあっても愛の心の少ない人ならばしり込みするであろうようなことを、なしたのであった。

或る時、学生たちの間できびしい処罰を求める反逆的な精神が表明された時、彼は教員会議がきめた通りに処罰することに同意したのであったが、チャペル内での全校の集まりを前にして、深い感情を示しながら、このような反逆の心が現われたのは学校行政の欠陥の証拠である、すなわち自分にその責任がある、それ故自分もまた処罰されなくてはならぬと宣言した。そこで鞭を取りあげ、力まかせに自分自身の手を打った。このため居合わせた人々すべてが涙を流し、それをやめるようにはげしく申し立てたのであった。^{*}この出来事は、「新島にあって」真の正義と愛の結合がいかに密接であったかを力強く示すものである。新島の愛は無際限だった。自分の友人を愛するのはたやすいことである。自分の敵を愛することも可能であろう。しかし、会ったことのない多数の人々を愛する人に出くわすことは稀である。新島は或る人に、地方での仕事に就くようすすめていた時、昔の將軍の奥方の作といわれる歌を引用したことがあった。

都の春がどれほど喜ばしいものであらうとも、

田舎の花のしぼんでいくことを思えば、

深い悲しみを覚えずにはいられない。

新島の記念碑は京都を見おろす丘の上にある単純な墓石だけではない。^{*}丘の下の盆地にある大学もまた彼の記念碑なのである。日本を訪問する人は誰でも、その大学がすでになしとげた結果に深い感銘を受ける。本国で相当高い地位にある一人のロシア貴族は、一八八七年に新島に会い、同志社を視察したあとでこう語った。「彼は或る点からすると、これまでに自分が知った最もすばらしい人物の一人である。そしてこの学校はいかなる国にとっても祝福といえるほどのものである。シベリアには同志社と較べうる学校は一枚もない。この学校の設立にあたって示されたエネルギーと力と知恵の幾分かが、われわれの所有するアジアの広大な国土に散在しているわが同国人を教化する仕事のためにささげられることを私は願うものである。」けれども、新島の生涯の、目に見える結果である大学それ自体ですら、彼の活動の総体を示すわけではない。なぜなら、同志社の設立に注ぎこまれたすべてのエネルギーと自己犠牲を超えて存在するのは、人間と社会に対する個人的な、間接的な影響力だからである。それは計ることのできないものであり、記念碑や碑文によって適切にあらわすことのできないものであり、しかも「太陽の運行とともに」^{**}広がっていくものである。

付 録

同志社英学校は一八七五年に設立された。神学科〔英学余科〕の第一期生は一八七九年に、また英学校本科の第一期生は一八八〇年に卒業した。女学校は一八七七年に開校された。同志社予備学校、同志社病院、京都看病婦学校は一八八七年に開校・開院。ハリス理化学校は一八九〇年九月に開校。理事会〔社員会〕は一八九一年に政法学校の開校を決議した。一八八四年に提案された「明治」専門学校という名前は、一八八八年に同志社大学と改められた。社員会は京都、東京、大阪の居住者である十名の日本人と、三名の外国人、一名の名誉社員とから構成されている。一八九〇年度のカタログは教師陣に三十四名を数え、うち二十三名が日本人であり、次のような課程が設置されている。二年間の予備学校、四年間の普通学校、四年間の神学校（志願者は普通学校かそれと同等の課程を修了したものでなくてはならない）、三年間の別科神学科（一八八二年に設置。一年間の予備的履習を必要とする）、二年間の速成邦語神学科（神学科の全コースを履習することはできないが、伝道に従事することを欲する者のための課程）。ハリス理化学校には二つの部門がある。一つは純正部門（大学の課程）と今一つは応用部門（専門の課程）である。一八九〇年に入学した学生・生徒数は次の通り。

予備学校	七六名
普通学校	三七六名

理化学校

三三名

神学校

八五名

計

五七〇名

同志社は現在約二十の建物を保有する。うち十三棟は寄宿舎で七百名を収容することができる。このほかに体育館、予備学校のための礼拝堂、そしてレンガ建築が四棟ある。レンガ建築は七百名を収容できる礼拝堂、教室を六室含む書籍館〔現在の有終館〕、八室から成る教室棟〔現在の彰栄館〕、講義室と実験室をもつ新しいハリス理化学館である。

新島襄全集10 ■新島襄の生涯と手紙■注解

まえがき

3 Alpheus Hardy (1815—87) は本書であきらかになるように、脱国してアメリカにやってきた新島襄を助けてフィリップス高等学校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校へと送り、その間の学資と生活費を援助しただけでなく、帰国して同志社英学校を設立した新島に対し、その後も金銭的な援助を続けた新島の大恩人であり、新島はその恩に深く感じて自分のミドル・ネームをハーディーと称した。ハーディーはボストンの実業家で、十数隻の船を所有してヨーロッパや東洋との貿易にも従事した。典型的なニュー・イングランド・ビュリタンの実業家であり、少年の頃牧師として立つ志を抱いてフィリップス高校に入学しながら病氣のために挫折したけれども、クリスチャン実業家として神に仕える決意を貫いた。フィリップス高校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校の理事をつとめただけでなく、アメリカン・ボードの法人会員として、また運営委員として一八五七年から八六年まで熱心にそのつとめをはたした。七三年から八六年まではその運営委員長としての重責をはたした。ハーディーがアメリカン・ボードを通して、特に新島を通して日本の宣教と教育のためにつくした貢献は、はかりしれないものがある。またハーディー夫人 Susan Holmes Hardy (1817—1904) は新島にとって「アメリカの母」であった。そのことは本書が雄弁に立証する。このハーディー夫妻の三男アーサー・シャバーン・ハーディーが本書の著者である。

1 〔誕生から日本脱出まで〕

9 A・S・ハーディーは William B. Savory というやうに、ミドル・ネームを B. としているが、原書の四〇ページにあるように「.」が正しい。William T. Savory (1827—97) は若い時代を船乗りとしてすごした。第6巻『英文書簡編』に新島からセイヴォリー船長あての手紙が二通収められている。セイヴォリーから新島あての書簡三通が同志社に現存している。

***九ページ末尾の注参照。

10 陰暦で六月十四日にあたる。

*税関の役人が点検のために乗り込んできたのは、翌朝の出帆の前のことであった。本書四四ページをみよ。

***Wild Rover 号は一八五三年に Damariscotta, Maine で建造された三本マスト、一〇三六トンの帆船で、ヨーロッパ貿易や東洋貿易に従事したほか、南アメリカ南端まわりでニュー・ヨークとサン・フランシスコの間を何度か往復した優秀な船であった。一八七一年にロング・アイランドで座礁して廃船となったが、この時にはハーディー商會から他人の手にわたっていた。Octavius T. How and Frederick C. Mathews, *American Clipper Ships: 1833—1858* (Salem, Mass.: Marine Research Society, 1927), 2:709—10 にくわしい記述がある。

****Horace S. Taylor (1829—69) とその家族は、後出のように、夏休みごとに新島を North Chatham の家に迎え、家族の一員として歓待した。井上勝也「アメリカ時代の新島襲」『人文学』同志社大学人文学会、一三二号（一九七八）をみよ。

****原書では「八月」となっているが、あやまりであるので、七月「二十日」に訂正した。

*****Joe はきわめてありふれた名前であり、発音しやすい。元来 Joseph の愛称であるので、新島はハーディー氏からは Joseph と呼ばれ、自分もまたそのように名乗るようになった。しかし日本名は襲の字をあてた。これはあくまで「ジョウ」であって、「ユズル」でもなければ「ノボル」でもない。

*****「しばらくして」とあるが、新島がハーディー夫妻にはじめて会うのは一八六五年十月上旬のことであり、この間二か月半にわたり、彼は東ボストン港内に停泊中のワイルド・ロウヴァー号を宿としてすごしていた。

11 海員ホーム Sailor's Home は当時ボストンの埠頭に近い 99 Purchase Street にあった。この建物は一九八四年現在では Holiday Stores という倉庫に使われている。一八二七年に設立された意欲的なクリスチャンの団体である The Boston Seaman's Friend Society の経営する五階建ての立派なホームで、水夫、船員を低額または無料で宿泊させ、道徳的・金銭的な堕落から防ぐとともに、クリスト教的に教化することをめざした。この団体は独立の教會を持ち、聖書やキリスト教関係の文書を配布し、読書室を設け、海員相手の銀行までも組織した。アルフィアス・ハーディーはこの協会の第四代会長を一八四九—七一年にわたってつとめた。新島のボストン到着のときには彼が会長だったのである。さらにハーディー夫人は The Woman's Seaman's Friend Society の副会長の一人だった。詳細は Mervin M. Deems, *A Home away from Home: The Boston Seaman's Friend*

Society, Inc., 1837—1975, Second Edition, 1978 を参照。

***文書、記録の執筆、作成にあたる常置の職。

***[原注] 執事、つまり殿様の召使やご家人、小姓、使い走り、料理人、駕籠かき、等々の総元締で、相当な権威と責任のともなう役職だった。

***この友達は一五ページ、三七ページに言及されている友達と恐らく同一人で、杉田廉卿（一八四六—一七〇）であった可能性が強い。彼は当時の一流の蘭学者杉田正卿の娘の縫（一八四七—一九三九）と結婚して杉田家の養子になった。従って杉田玄端の義理の甥にあたる。いちはやくキリスト教に帰依したものとされる。廉卿はわずか二十四歳で静岡で病死する。未亡人となった縫夫人はのちに福沢諭吉の媒酌によりのちの日銀総裁、東京府知事、富田鉄之助（一八三五—一九一六）と結婚する。クララ・ホイットニー『クララの明治日記』（講談社、一九七六）に、富田縫は非常にすばらしい日本婦人として描写されている。新島は富田と手を組んで仙台に東華学校を設立する。晩年の新島は、東京で病気になる時はしばしば富田家で厄介になっている。

12 [原注] ここで「地図書」と呼ばれているのはジャンハイのブリッジマン博士が中国で書いた『合衆国の歴史』だった。ブリッジマン博士の死後、未亡人が横浜のブラウン博士を訪ね、亡夫のあらわした歴史書を数冊あずけた。それをブラウン博士は配ったのである。新島が手にしたのは、この数冊の中の一冊だったに相違ない。

[訳者注] 上記の歴史書の中国語訳は一八三八年出版のものは『美理哥合省国志略』、一八四六年出版のものは『亜美理駕合衆国志略』、一八六二年出版のものは『連邦志略』というタイトルであったらしい。邦訳が一八六四年に出ている。この Elijah Coleman Bridgman (1801—66) はアーモスト大学一八二六年の卒業生で、中国派遣の宣教師として一八二九年から没年まで中国に滞在し、聖書の中国語訳にたずさわった。一八四一年に New York University から D・D・の名誉学位を与えられている。なお Dr. Samuel Robbins Brown (1810—80) は米国のオランダ改革派の初期の宣教師で、一八五九年来日し、聖書の日本語への翻訳にたずさわり、井深槐之助、植村正久、押川方義ら、キリスト教の指導者（いわゆる「横浜バンド」）の育成につとめた。

13 この殴打事件は「青春時代」には出てこない。本書の三三—三四ページでは、これは板倉勝股の大坂詰めの時期にあたる。従って七五三太を殴打したのは留守役の責任者であったと取る方が恐らくよいのであろう。原文に my

princeとあるので殿様と訳したのであるが、これは当時の新島の英語の表現力とハーディーの編集を勘案してみると、起こりえたまちがいの例といえよう。東京大学の川西進教授も同様の推定をされている (Kawanishi Susumu, "Teachers and Friends of Niijima Jo during His Early Years," *KBS Bulletin on Japanese Culture* 108 [June-July 1971], p. 10)。

*森中章光氏はそれが「ハンデルブルグ竊理書抄」であろうとの意見である (『新島研究』15号 [一九五七]、一七ページ)。

14 オランダ船がはじめて江戸湾に入ったのは安政六 (一八五九) 年四月一日のことだった。

*外国との通商の結果、物価があがった、という意見は恐らく当時の通説に基づいた意見であろう。これについては小西四郎『日本の歴史 9・開国と攘夷』(中公文庫、一九七四)の中の「異国人との商売」という章の中でくわしく論じられている。同書の一九六―一九七ページをみよ。

15 一八五七年四月十一日に築地講武所内に開設された。のち「軍艦操練所」と改称した。新島の入学は一八六〇年であったと考えられる。

16 新島の最初の英語の教師は誰であったか？ この重要な、そして興味深い問題は現在までのところ未解決である。松井全氏はのち陸軍兵学寮の校長になった川勝光之輔広道 (一八三〇―一八八) であったのではないかという仮説を提唱しておられるが、川勝は英語よりはフランス語の方を得意とした人であり、確定するに至らない。他に『同志校校友会報』第七号 (一九〇一) には、北海道の丸山伝太郎 (同志社神学校別科一八九三年卒) が、新島の一八六四年函館滞在中の友人だった小林友八から聞いた話として、江戸の緒方の塾の塾頭だった高柳松之助 (武田斐三郎の門人。紀州藩士で英語、数学、航海術に長じていた) から新島は英語を習ったという。

*「青春時代」であきらかになるように、新島は一八六二年十一月から六三年一月にかけて、幕府の老中、板倉周防守勝静（あきしず）の所有である、米国から輸入されたスクーター船 (二本マストの軽快な、姿のよい帆船。マサチューセッツ州ではじめて建造され、スクーターと命名されたもの。のちには四本マスト、六本マストのものできた) 快風丸に乗って浦賀から備中玉島 (現在では岡山県倉敷市に編入されている) まで航海したことがあった。船長は林拾、軍艦奉行は三島毅であったらしい。その乗組員に加納格太郎がいた。ここで知人というのは加納のことであるが、加納が「船長」だっ

たわけではない(第5巻『日記・紀行編』八ページをみよ)。「青春時代」では「玉島への航海のときに知己となった一友人」(三八ページ)となっている。この「船長」にもA・S・ハーディーの手が感じられる。

17 ワイルド・ロウヴァー号の航海日誌は同志社大学の大鉢忠教授とオーテス・ケリー教授の熱心な探索の結果、現在その持主が確認されている。すなわちコネティカット州ニュー・ケイナン New Canaan, Conn. 在住のフレッド・ガードナー Fred Gardner 氏である。ケリー教授が一八六四―六五年の部分に目を通された限りでは、新島の存在をおおむね記述はないという。新島はあくまで「密航者」だったからである。

21 この日付の時点で新島は米国に滞在中だった。「京都」という地名は、従って、京都で執筆し、発信したことを意味するわけではない。

22 [原注] 旧暦による。新暦では一八四三年二月十二日となる。

[訳者注] 新島は新暦による自分の誕生日を二月十四日と考えていたふしがある。

***四人の姉の名前を順番に示すと、くわ、まき、みよ、とき。このうち三姉みよは第七五三太を背負っていたときあやまって転び、そのため生涯左脚の自由を失った。一生嫁がず、のちには京都の新島の家で暮すことになる。彼女の永眠前のもようはハーディーあての手紙にいきいきとした描写で報告されている(本書、二五〇―五一一ページ)。

***[原注] 日本政府は一八七二年まで太陽暦を採用しなかった。この時期までの暦は六〇二年に中国からもたらされた太陰暦で、二十九日と三十日の月が交互に十二か月あり、或る特定の時期になると、月と太陽の時期を調和させるために、さまざまな長さから成る閏(うるう)の月を入れることになっていた。

***原文が At the day dawn であるので「あけ方」と訳したが、『詳年譜』には「巳ノ中刻(午前十時―十一時)」とある。

23 [原注] 日本では子供は幼いときに両親によっていづれかの神道の神の加護のもとにおかれ、子供はその神の養子とされるのである。十五歳になるまで新島は父の家の中の一室に作ってあった神棚に鎮座する神々をおがんでいた。しかしその後は、神々がお供えの食物を食べないのを見て、彼はおがむことをやめた。

[訳者注] これはいわゆる七五三(しちごさん)の宮参りであろう。

30 講武所と呼ばれ、一八五六年四月に江戸の築地に開校された。

31 ハーディーはここに [Dr. Sugi] と挿入しているが、これはまちがいである。この招聘された学者は江州日野の出身の田島順輔（一八二七—一五九）であった。

33 これが杉田玄端であったと考えられる。玄端は杉田玄白の息子立卿の養子となった秀才で、杉田正卿の義理の弟とされた。

34 横井三右衛門。

36 「洋式帆船」と歴史的事実に基づいて訳したが、原文は *steamer*（蒸気船）となっている。新島が乗ったのはすぐあとに出てくるように、*schoner* と呼ばれる帆船だった。A・S・ハーディーの「なおしぎ」の一例である。

*備中松山藩主は板倉周防守勝静で、幕府の老中をつとめていた。この家は安中の板倉家にとって宗家に当たる。なお備中松山は現在の岡山県高梁。^{たかはし}

37 恐らく杉田廉卿。

*徳川末期にはダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の邦訳（オランダ語を通しての重訳）が二種類あったことが知られている。新島が読んだのは嘉永初年頃に江州膳所藩の蘭学者、黒田麴^{まがら}廬の訳した『漂荒記事』であった。重久篤太郎『日本近世英学史』（一九四一）一三八—四二二ページをみよ。

*新島は一八六二年九月十九日に甲賀源吾の塾に自費入塾し、「西洋海陸の兵学修業並測量算数の術等」を学んだ。甲賀源吾（一八三九—一六九）は新島よりも四歳年長で、戊辰戦争の時宮古湾で戦死した。

*****一、一二ページとその注をみよ。

*****川西教授の前掲論文の脚注（二三ページ）に基づき Alexander Williamson (1829—90) の『六合叢談』(*Shanghai Serial*) を挙げておく。ウィリアムソンははじめ London Missionary Society の宣教師で、のちに National Bible Society of Scotland のハイジントンという中国に在住した。

39 川田剛^{ただ}（一八三〇—一八六）を指すと考えられる。川田は玉島の出身で、備中松山藩主に仕えた漢学者。添川廉斎の没後には安中藩でも漢学を教えた。漢学者として名声があり、のちには東京大学教授、文学博士、学士院会員となった。歌人川田順の父に当たる。

40 祖父弁治はこの時「行けるなら行ってみてこよ花の山」という句を示したといわれる。

41 興津港（現在、千葉県勝浦市内）から出帆するときのことで、旧暦三月二十二日であった。

*原文では Nicholi となっているが Nikolai という綴りが正しい。本名を Ioan Dimitrovich Kasakin (1896—1932) といい、ギリシア正教の宣教師としてロシアから派遣され、一八六一年函館のロシア領事館付司祭となった。ニコライは彼の修道士名である。のち主教、さらに大主教に任ぜられた。日本におけるギリシア正教の大立て者で、東京駿河台のニコライ堂は彼の努力によってたてられた。日露戦争中も日本にとどまって迫害に堪え、東京で永眠した。

43 徳川幕府の掟ではたしかにそのようになっていた。しかし実際に外国に行こうとして捕えられ、そして死刑になった実例はないようである。よく吉田松陰の例が引きあいに出されるが、彼の刑死は安政の大獄の時期であって、ペリーの軍艦で密航することに失敗したのは一八五四年。投獄され、解放されてから松下村塾を主宰したことを思い出す必要がある。松陰の刑死は一八五九年だった。

*〔原注〕この手紙を托された彼の友人や彼の父が、幕府によってきびしい処罰を受けることになるかもしれないというので、この手紙は届けられなかった。新島の父が息子からはじめての手紙を受取ったのは三年後のことであつた。

***大町築出地の外国人居留地域にあった。

46 後年新島はセイヴォリー船長あての手紙（第6巻『英文書簡編』二二三ページ）の中で、あやまって海中に捨ててしまったスプーンを several（数本の）と表現している。

47 アルフィアス・ハーディー夫妻。

***「箱桶よりの略記」には四月十日（第5巻『日記・紀行編』七七ページ）、航海日記には四月八日（第5巻『日記・紀行編』六〇ページ）とある。Boston Daily Journal の一八六五年七月二十日付の shipping Journal の欄にはワイルド・ロウヴァー号のボストン到着と航海記録をのせているが、そこではマニラ発は四月十日となっている。

48 リンカン大統領が撃たれたのは一八六五年四月十四日、そして翌朝早く死亡した。

***マサチューセッツ州会議事堂をさす。ちなみにアルフィアス・ハーディー夫妻の住居は議事堂の隣のジョイ通

り四にあった。本書二九四ページをみよ。

52 ここで編者A・S・ハーディーはタカシマをタカシマと誤記している。また備中松山藩主板倉勝静所有の、アメリカ製のスクーナー船「快風丸」のことを不注意にも「Japanese junk」と書いてゐる。

2 高等学校・大学時代

57 原文は「九月の末」であるが、「脱国の理由」を夫妻が受取ったのが十月十一日であることからして、アンドーヴァー行きはそれ以降と見なさざるをえない。第5巻『日記・紀行編』三三四ページには「廿年前十月三十一日」入学、とある。実際は十九年前である。

*Phillips Academy はマサチューセッツ州アンドーヴァー（ボストンの北二十三マイル）にある一七七八年創立の名門高校で、今日なお数多くの卒業生をハーヴァードその他の大学へ送っている。新島も後述のようにここに一八六五年十月から一八六七年六月まで在学して、アーモスト大学入学に備えた。なお、新島がアーモスト大学卒業後入学したアンドーヴァー神学校は、このフィリップス高等学校の広大な敷地内にあった。

***Samuel Harvey Taylor (1807-71) はフィリップス高等学校の第六代校長を、一八三七年から七一年までつとめた。ギリシア語、ラテン語の教師であり、校長としては厳格なピューリタン教育家として知られ、厳格な訓育、正確な知識、それに徳性と信仰を重視した。一八七一年一月二十九日、厳寒の日曜日の朝、自分のバイブル・クラスに急いでいたテイラー校長は校舎に入ろうとして倒れ、そのまま永眠した。DABに詳細な記述がある。ただし新島は「朝の祈禱のために入ろうとして」と記している。本書一一五ページをみよ。

***Mary E. Hidden (1818-93) と David I. Hidden (1833-97) はアンドーヴァーの人。殊にミス・ヒドンは日曜学校の教師等をしながら、ピューリタン婦人としての生涯を送った。第6巻『英文書簡編』には新島のミス・ヒドンあての手紙を四十七通収録している。井上勝也、前掲論文をみよ。

***「下宿人を置いたこともない」という表現は、後出のフリント夫妻のことと矛盾するようにひびくかもしれない。しかし井上勝也教授の前記論文が示すように、フリント夫妻は一軒の半分を借用しており、その残りの半分にヒドン姉弟が居住していたのである。

*****Ephraim Flint, Jr. (1828-88) はウィリアムズ大学の一八五一年卒業生。学校教師また校長として教職にあったが、その職を中途で放棄して牧師になる志を立て、アンドーヴァー神学校に学んでいた。のちマサチューセツ

州ヒンズデイルの牧師として一生をすごした。母校ウィリアムズ大学の理事をつとめ、母校からD・D・の名誉学位を受けている。フリント牧師の死後もフリント夫人 Orilla H. Flint は毎年同志社に神学教育のために金を送り続け、同志社はそれを神学書の購入に当てた。

58 原文では「秋まで」となっているが、不正確であるので訂正した。新島は六月にフィリップス高等学校を終え、七月二十五日からしばらくの期間をノース・チャタム North Chatham のテイラー船長宅で過ごし、

***アーモスト大学 Amherst College は一八二一年創立のリベラル・アーツ・カレッジで、組合教会との関係が濃厚であった。新島が入学した頃ハーディーはこの大学の理事だった。新島の卒業する一八七〇年頃には、卒業生の四〇パーセントが牧会に入っていたといわれる。新島以来この大学への日本人留学生の数は少なくない。中でも神田乃武（一八五七—一九二三、ア大一八七九年卒）、内村鑑三（一八六一—一九三〇、ア大一八七七年卒）、樺山愛輔（一八六六—一九五三、ア大一八八九年卒）等は輝かしい存在である。この大学は現在リベラル・アーツ・カレッジとして一流であり、また今日に至るまで同志社との交流が続いている。一九三二年アーモスト大学は卒業生新島を記念して同志社にアーモスト館を寄贈した。戦前には学生代表が連続九名派遣されてきたが、その九代目はのちにイエール大学で日本史を教えた John W. Hall 教授である。戦後はアーモスト大学全体を代表する Otis Carr 教授が同志社に派遣されて今日に至っている。アーモストは創立以来男子のみの大学であったが、一九七五年からは共学になった。現在の学生数は約千五百名である。

61 recite を「復誦」と訳した。当時の教授法では算数でも暗誦させたようである。

***マタイ伝 5・3—10 または 11 を指す。ローマ・カトリック教会ではこれを「真福八端」、ギリシア正教会では「真福九端」と呼ぶ。

***主の祈りはマタイ伝 6・9—13、ルカ伝 11・2—4 に基づいている。教派によって多少異なるが、日本基督教団では次のようになっている。「天にまします我らの父よ、願わくは御名をあがめさせたまえ。御国を来らせたまえ。御心の天に成るごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪をおかすものを我ら

が許すごとく、我らの罪をも許したまえ。我らを試みにあわせず、惡より救い出したまえ。国と力と榮えとは限りなく汝のものなればなり。アーメン。」

***キリストの山上の説教の一節「何事でも人々からしてはしいと望むことは、人々にもその通りにせよ」(マタイ伝

7・12)をよす。

*****「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」

*****既出。五八ページをみよ。

62 やめめ女とその息子についての奇跡は旧約聖書の列王紀上17章に出てくるが、スリア王の軍勢の長ナアマンの病氣を奇跡的になおしたのはエリヤでなくて、その後継者となったエリシャだった。列王紀下5章をみよ。

64 引用文で最後の単語は believe となっているが、これは新島が英語の聖書に基づいて believed と正しく書いたものを、A・S・ハーディーもデイヴィスも believe と誤って書き写したのであらう。ここでは be saved のつもりで訳した。

66 原文で Mrs. Hidden となっているが、むしろ Miss Hidden が正しい。また原文に Mrs. C—とあるのはヒドン姉弟の独身の叔母の Miss Abigail Chandler (1795—1866) のことで、姉弟のところに同居していた。井上勝也「アメリカ時代の新島襄研究」をみよ。

67 一八七四年ボストン市に編入された区域でミスティック川とチャールズ川の川口にはさまれ、ボストン内港の一部を形成している。独立戦争のさい一七七五年六月十七日にここでバンカー・ヒル Bunker Hill の戦いがあった。米海軍の小規模な基地があり、有名なフリゲイト艦コンステイテューション号が繋留されている。

69 新島がアンドーヴァー神学校付属教会で受洗したのは一八六六年十二月三十日だった。誰が彼に洗礼を授けたのかを新島は語らないが、内村鑑三は手紙の中でシーリーが授けたと書いている(『内村鑑三全集』〔岩波書店、一九八三〕三六卷二〇六ページ)。

70 幕府の軍艦受取り使節か。

***ワイルド・ロウヴァー号のテイラー船長の実家をさす。

***ボストンから北のアンドーヴァーと、南東のチャタムとは、それぞれ始発駅が異なり、その間を連絡する交通

機関がなかった。メイン駅は現在のノース駅をさす。オールド・コロニー駅は今のサウス駅の近く、サウス通りとKneeland通りの交叉点にあった。

71 ニュー・ベッドフォードはボストンから約五十マイル南にある海港で、十九世紀の米国の捕鯨業の全盛時代には最大の捕鯨船団基地として栄えた。捕鯨の時代の終った現在でも漁港であり、ここからボストン、ニュー・ヨーク、マーサズ・ヴィンヤード、ナンタケット行き便船が出る。

**アクシユネット Acushnet 川。

73 Edwards Amasa Park (1808—1900) 教授はよくニュー・イングランド神学の最後の代表者といわれる。若い頃一年間アーモスト大学で道徳哲学とヘブル語を教えたことがあり、一八三六年からは母校のアンドーヴァー神学校で神学を教えた。一八八一年に引退したのちもアンドーヴァーに住み、著述に専念した。新島は一八七一年、神学校の学生時代にパーク教授の授業に出た。パークは自分の神学体系を完成しようとしていたが、晩年には新神学が台頭し、すぐれた弟子たちが次々に新神学に走るのを見た。説教家、教師、人格者として人々の尊敬と信頼を集めた。本書一二八—二九ページをみよ。

**Whelock Craig (1824—68) はホーソンやロングフエローを出した Bowdoin College の一八四三年の卒業生で、バンナー神学校を出て組合教会の牧師となった。一八五〇年にニュー・ベッドフォードの Trinitarian Church の牧師に招聘され、十八年間奉仕した。人格者であり、学者であったので、一八五八年に母校ボードン大学から近代語教授としての招聘があったが、敢えてそれを拒否して牧師職にとどまった。新島に会った翌年(一八六八年)健康を害し、休暇を得て保養のためヨーロッパに赴いたが、病気が悪化してスイスのニューシャテルで十一月二十八日に客死した。四十四歳だった。

75 ミス・ヒドンあての一八六七年七月三十一日付の手紙に O'Hara という名が見えるので、この人のことかもしれない。また一八七〇年の Yale College の Law Department の在籍者に Ohara Reinolke という名が見える。鹿兒島出身であるので恐らく同一人であろう。なお新島は一八六九年七月二十三日にイエール大学の卒業式の日、ニュー・ヘイヴンで吉田と大原という二人の日本人に会ったことを記している。本書一〇六ページをみよ。

**Henry Martyn (1781—1812) はインドに派遣された英国国教会派の宣教師。新約聖書と祈禱書をヒンドスタニー

語に訳した。ペルシア、トルコを経て帰国の途中、トルコの *Holatta* で病死した。DNBをみよ。

- 78 Julius Hawley Seelye (1834—96) はアーモスト大学一八四九年卒業生で、母校の哲学の教授をつとめた。一八七六年から一八九〇年までの十四年間アーモスト大学の総長だった。ニュー・イングランド切つての教育家であり、深い学識と宗教的信仰に支えられた高潔な人格者として知られていた。新島は休暇のたびにシーリー家で厄介になり、病気のときにはシーリー家に引きとられた。内村鑑三をシーリーに紹介したのも新島である。内村の『余はいかにして基督信徒となりしか』の中にシーリーの面目がいきいきと描かれている。その他についてはDABをみよ。

- 81 William Jacob Holland (1848—1933) はアーモスト大学に入る前にモラヴィア派の神学校を出ていたから、ギリシア語がよく出来たと考えられる。のちにすぐれた動物学者、古生物学者になったけれども、モラヴィア派の牧師の資格ももっていた。一八八七年八月十九日の白河を中心とする関東地方一帯で見られた皆既日食のさいには日本に派遣されている。そのさい富士登山をも試みている。のちウエスト・ペンシルヴァニア大学（現在のピッツバーグ大学）の学長を一八九一年から十年間つとめ、また Carnegie Institute の館長を一八九一年から三十一年間にわたつてつとめた。一八八八年に母校のアーモスト大学からD・D・を授与された。ホルランドの新島回想については大島正満「新島のおじさんと満坊」『新島研究』六三号（一九八三）をみよ。DABにも小伝がある。

- 82 文中から、このルームメイトがホルランドであったことがわかる。新島のアーモスト入学が一八六七年、ホルランドのアーモスト卒業は一八六九年である。従つて二人は二年間にわたつて同室であつたとみてよからう。

- 83 ライデン瓶は十八世紀なかばに作られた素朴な蓄電器の一種である。

- 85 アーモスト大学ではジョンソン・チャペルを中心に、南に南寮 South College、北に北寮 North College がある。大学で最も古いのが南寮で、内村鑑三はこの中に住んだ。両寮とも現在なお学生の寄宿舎として使用されている。

**Missionary Band は六人のアーモストの学生が一八四六年夏に結成したが、その一人はのちのアーモスト大学総長となったシーリーだった。インドのマドラスへ宣教師として行っていたスカダー博士が大学を訪問したことがこの団体の結成をうながすことになった。もともとこのグループは宣教活動に興味をもつ学生が、南寮の南西隅の

一室で、聖日の夕方の祈禱会の前の半時間集会をもつといったものだった。初期の頃では、その半時間は祈りと会議と伝道活動に関する情報の交換についてやされていた。「バンド」は一八五九年四月十日に結成しなおすことになり、その目的を「真の伝道精神を涵養し、異教世界の欠乏の状況を確認すること」と定めた。一八六二年には集会は定期的に北寮二十四号室で午前十時から開かれていた。その後は会員の室の持ちまわりで開くようになった。規約には「絶えずめざめており、キリスト者にふさわしい克己を重ねることにより、われらはキリストのご命令にいつでも従えるようにそなえる。もし主が導きたまうならば、宣教師として異邦人の中へ出掛けていく」とある。会員数は少なかったが、高貴な、献身的な学生たちのグループだった。このグループから次々に異邦人の国へ出掛けていく人々が出た。一八五九年から七一年までの統計では総計七十一名が会員だったことがわかる。内訳は一八五九年卒業組四名、六〇年組三、六一年組九、六二年組三、六三年組二、六四年組六、六五年組一、六六年組一、六七年組六、六八年組四、六九年組五、七〇年組一、七一年組六、七二年組六、七三年組二、七四年組二。〔新島は最多の七〇年組に属した。〕(George Rugg Cutting, *Student Life at Amherst College: Its Organizations, Their Membership and History* [Amherst: 1871], pp. 63—64.)

⁸⁶ 河出書房新社の『日本史年表』(一九七九)の一八六七年六月十三日の項に「幕府長崎浦上のキリスト教徒六八人を逮捕する」とある。これは仏教の僧侶の手によらないで死者を埋葬したキリシタンを弾圧したものであった。これがアメリカの新聞にまちがって伝わったのであろう。講談社の *Encyclopedia of Japan* は逮捕者の数を六十四人としている。

*一八六七年四月十一日付の父民治あての新島の手紙から、横浜のアメリカ人が S・R・ブラウン宣教師であったことがわかる。一八六八年三月十二日付の父あての手紙では James H. Ballagh 宣教師も手紙の世話をしていたことがわかる。なお「日本の友人」とあるのは安食銈次郎(のちの粟津高明)である。

⁸⁷ 安中藩目付役の飯田逸之助。この人は添川廉斎の高弟だった。新島の函館行きについても便宜をはかった人である。

*原文では *flag* となっているが、これは *frog* のあやまりであると考えられる。A・S・ハーディーが「井の中の蛙」という日本の表現を知らなかったことから起こったあやまりであらう。

88 Selah Burr Treat (1804—77) はロネディカット州の出身でイエール大学を一八二四年に卒業ののち弁護士となつたが、キリスト教の伝道に転身する決意を固めて一八三三年にアンドーヴァー神学校に入り、三五年に卒業、六年に長老派教会の牧師の任職を受け、ニュー・ジャージー州ニューワークで牧師となった。健康を害したために四年後に牧師をやめ、キリスト教関係の雑誌の編集の仕事に移った。一八四三年から五六年にかけてアメリカン・ボードの重要な機関誌『ミッショナリ・ヘラルド』の編集にたずさわった。同時にアメリカン・ボードの記録係主事となり、一八四七年から三十年間、総主事 (Corresponding Secretary) として奉仕した。

**Crosby Howard Wheeler (1823—96) はアメリカン・ボードの東トルコ・ミッシェンの宣教師として Hartford に一八五七年に赴いた。その地の宣教で中心的な働きをしたが、のち暴動のため宣教師館の焼き打ちに会い、命がら逃げのびた。 *Ten Years on the Euphrates* (1863), *Little Children in Eden* (1866) の二著を残した。

***Nathaniel George Clark (1823—96) はヴァーモント州に生まれ、一八四五年ヴァーモント大学を卒業した。しばらく高校教師をしてからアンドーヴァー神学校に一八四八年に入り、都合二年間神学を勉強したが、卒業はしなかった。一八五二年にオーバン神学校を卒業後、オーバンの同級生で親友となった J・H・シーリーとともにドイツにわたり、Müller と Tholuck の下で数か月勉強した。一八五二年から五七年には母校ヴァーモント大学の英文学の教授、また五七年から六三年まではラテン語の教授をもつとめた。一八五七年に按手札を受けている。一八六三年から二年間、ユニオン大学で論理学、修辞学、英文学の教授だった。一八六五年アメリカン・ボードに入り、Corresponding Secretary となり、一八九四年までその職務を忠実に果たした。殊に一八六六年からはルーフ・アス・アンドソン (後出、一八五ページとその注をみよ) の後任として外国伝道の担当であり、日本を含む各国に派遣されている宣教師たちとの連絡に当たった。日本に送られてきたすべての宣教師がクラーク主事に手紙を書いたゆえんである。一八六五年ユニオン大学から D・D・を、また一八七五年には母校ヴァーモント大学から LL・D・を授与されている。クラークはマウント・ホリヨーク、ウェルズリーの両女子大学の理事を長年にわたつてつとめ、ウェルズリーでは理事長もつとめた。彼はリ्यूーマチをわずらつており、死因もリ्यूーマチだった。新島と共通の病氣をもっていたわけであり、本書三一八ページに見られるように二人してクリフトン・スプリングスに療養に出掛けたこともうなずける。なおクラークには一冊だけ著書がある。 *An Outline of the Elements of the*

English Language (Charles Scribner's, 1863) で、英語(用)の教科書として編まれたものであるが、付録の例文の選び方に工夫のあとが見られる。オリヴァー・クロムウェルがその妻に与えた手紙でもってしめくくられている。

89 Monson Academy はマサチューセッツ州中部のモンソンに一八〇四年に設立された高校で、十九世紀にはキリスト教主義に基づく教育がさかんであった。したがって、卒業後大学をへて神学校に進み、牧師や宣教師になる者が多かった。早くも一八四七年に清国からの留学生を三人受け入れている。現在なおすぐれた高校で、卒業生を諸大学に送り出している。薩摩藩がここに留学生を送ったのは一八六七年のことで、これは宣教師 S. R. Brown (既出) の出身校であったことが影響している。一八六七年から七四年にかけて延べ十五名の日本人がここに学んでいる。そのうち一八六七年のカタログにはヨシダ・ヒコマロ、オーハラ・レイノスケ、ヒサマツ・シオゾー、アシワラ・シュヘイ、クドー・ジュローの五名があがっているが、このうちアシワラは同年七月二十三日に病死した旨注記されている。なお現在ではこれがすべて偽名で、ヨシダは種子島敬輔、オーハラは吉原重俊、ヒサマツは江夏喜蔵、アシワラは木藤市介、クドーは湯地定基であったことが判明している。

90 William Smith Clark (1826-86) はマサチューセッツ州生まれの科学者、教育家。一八四八年アーモスト大学の卒業生で、二年間ドイツのゲッチンゲン大学で化学と植物学を専攻し、博士号を得て一八五二年に帰国、母校アーモスト大学から化学の教授として迎えられた。のちには動物学、植物学も教えている。南北戦争には義勇軍として参加し、死線をくぐりぬけつつ功績を立て、大佐に昇進した。戦後アーモストに帰って教授を続けたが、マサチューセッツ農科大学設立の計画が起これと、アーモストの当局者や州の当局者を動かして、アーモストに誘致することに成功した。彼は事実上その初代学長であったといつてよい。彼が学長であったのは一八六七年から七九年までの十二年間であるが、この間一八七六年から七七年にかけて八か月間、日本政府の招きをうけて来日し、札幌農学校の第一期生を教えて非常な影響を与えた。その学生たちとの別れにあたって残した *Boys, be ambitious!* という言葉はあまりにも有名である。帰国後のクラークは不遇であり、洋上大学の計画は失敗に帰し、手をそめた鉱山の事業にも失敗した。クラークがアーモスト大学の教室で新島を教えたかどうかは不明である。新島がアーモストに入学した一八六七年にクラークは農科大学の方に移っているからである。しかし何らかの機会に二人は識り合ったのであり、札幌からの帰途京都にも立ち寄り、開校後日も浅かった同志社に新島を訪ね、若干の寄付金を残し

て去っていった。同志社にはクラークから新島にあてた教通の書簡が残っている。なおマサチューセツ農科大学は現在マサチューセツ大学として発展を続けている。

91 **エゾの知事とはむろん北海道開拓使長官の黒田清隆をさす。たしかに黒田はクラーク博士を招聘して札幌農学校第一期生の指導に当たらせた。しかし黒田が一八六七年当時モンソンに学んでいたという記録はない。函館の近くの七重勸業試験場長となった薩摩藩の湯地定基(マサチューセツ農科大学でクラークの学生だった)との混同であろう。

92 **二月二十二日は米国初代大統領ワシントンの誕生日。

93 Edward Hitchcock (1828-1911) はアーモスト大学の総長で、組合教会の牧師であり、有名な地質学者であった同名の父の長男で、アーモスト大学を一八四九年に卒業後ハーヴァードで医学をおさめ、英国に留学した。帰国後アーモストに新設の保健衛生学科の責任者となった。彼は全米の大学ではじめての体育の教授であり、体育の発展のためにパイオニア的な働きをした。DABをみよ。なお足浴 footbath は足だけを湯につけて血液を足にもたらすという療法で、十九世紀には広く試みられたが、不眠症をなおすのにとれだけ効果があったかは疑問である。

94 ルカ伝9・62。

**ニベソ書6・17。

95 White Mountains はニュー・ハンプシャー州北部にあり、アパラチア山脈の支脈をなす。その最高峰ワシントン山の高さは一九一七メートルである。

96 ニュー・ハンプシャー州のくわしい案内書にも「ダイアナの滝」は記載されていない。North Conway の近くに、Hopper 川から流れてくる水が Cedar Brook で、岩風呂を形作っており、そこが「ダイアナの風呂」Diana's Baths と名付けられている。新島は恐らくそれをダイアナの滝と呼んだのであろう。New Hampshire: A Guide to the Granite State [American Guide Series] (Houghton Mifflin, 1938), p. 282 をみよ。

**Cannon Mountain は高約一三三五メートル。北東から見ると大砲に似ているのでこの名がある。南東側に Old Man と呼ばれる、横顔のかたちをした自然の岩がある。ホーソンはこれにヒントをえて短編“The Great Stone Face”を書いた。

***このプリマスはニュー・ハンプシャー州のプリマスで、the Flume からはほぼ真南に当たる。

97 これはニュー・ハンプシャー州の Orford を指すものと考えられる。州内随一の景色のよい、静かな村といわれ、ここを訪れたワシントン・アーヴィングは「この国とヨーロッパを旅してみたが、ここほど美しい村を見たことがない。魅惑的な場所だ。自然はここで最高の装いをこらしたのだ」と書いているほどである。

**コネティカット川をへだてて Orford の対岸に Fairlee というヴァーモント州の村がある。

***Miss Phebe Fuller McKean は新島のフィリップス高校時代の日曜学校の教師。新島に関心を抱き、一八六七年に彼の生い立ちの記を *A Sketch of the Early Life of Joseph Hardy Neesima* としてまとめあげボストンの D. Lothrop 社から一八九〇年に出版した。その全文は『新島研究』三五号、三六号に転載されている。

98 Hanover はコネティカット川の東側、すなわちニュー・ハンプシャー側にある。ここに一七七〇年創立の名門校 Dartmouth College がある。本書の著者 A・S・ハーディーはこの大学で一八七四年から九三年まで、はじめ土木工学の、ついで数学の教授をつとめた。またこの大学を出てアメリカン・ボードの宣教師となり、後年同志社で教えた人々の中には Sidney L. Gulick (1860—1945), Samuel Colcord Bartlett (1865—1937) らがいる。なお、ハノーヴァーは既出のウィンザーよりも北にあたるので、新島がダートマス大学を訪れたのはウィンザーにくだる前のことだと推定される。

**Oliver Payson Hubbard (1809—1900) はコネティカット州の出身でイエール大学を一八二八年に出、サウス・カロライナ医科大で M・D・の学位を得た。イエール大学、ウェスリアン大学で教えたのち、一八三六年からダートマス大学の化学、薬学、鉱物学および地質学の教授をつとめて一八八三年に至り退職、名誉教授となった。

99 James Dwight Dana (1813—95) の *System of Mineralogy* (1837) を著す。これは半世紀間にわたり、鉱物学者のバイブルといわれる書物だった。ただし新島旧邸にはダーナの *Manual of Mineralogy* (1875) が残っている。ダーナはのちイエール大学の地質学、鉱物学の教授になった。

103 George Eaton Sutherland (1843—99) を著す。新島と同年で、いくらか晩学ということになる。弁護士となり、のちウィスコンシン州の上院議員、州の裁判所の判事をつとめたりした。本書一二三ページをみよ。

**原語は American Missionary Society であるが、主事の話の内容からして American Home Missionary

Societyをやすのであろう。この協会は一八二六年に創立されたもので、組合教会の人々が中心であり、その意味でアメリカン・ボードと同根だったといえよう。

105 Hartford はコネティカット州の州都で、ここには内村鑑三の学んだハートフォード神学校がある。

**David Ely Bartlett (1843—99) のことか。彼はハートフォード聾学校の教師であつたらしい。一八八二年八月二十八日付のニュー・ヨーク・タイムズに彼の記念碑の除幕式が行なわれた記事が出ている。

**Middletown はハートフォードとニュー・ヘイヴンの中間にある町で、この日記にあるように Wesleyan University (一八三二年創立) というメソジスト系の大学がある。

***一八七〇年組というのは一八六九年当時の三年次生にあたる。新島も一八七〇年に卒業したので、A氏は新島の同級生ということになる。次の Haddam はミドルタウンから南東八マイルの町。

****Portland は一六九〇年に植民の始まつた町で、砂岩採石場があつた。

*****アーモストを含むコネティカット川流域には中生代に沢山の恐龍が生息していた。現在でもその足跡(鳥の足跡に似ている)の化石がみつかる。

106 電気石 (tourmaline) はホウ素、アルミニウムなどの複雑なケイ酸塩を主成分とする鉱物。多くは黒いが、青、緑、赤などの色で透明なものは宝石に入る。コロンブ石 (FeNb_2O_6) はニオブウム (Nb) の原鉱。

**New Haven は一六三八年にピューリタンの建設した町で、商工業の町として発達をとげた。コネティカット州ではハートフォードにつぐ人口をもつ。イエール大学はこの町にある。

**吉田清成と大原令之助か。大原であればモンソン高校に学んでいた人である。

****J. K. E. Society は米国の伝統的な名門大学の友愛会の一つで、十九世紀には秘密結社の要素をもっていた。友愛会はその排他的な要素のために、現在では廃止した大学もある。

****Providence はロード・アイランド州の州都。ロード・アイランド植民地の創設者 Roger Williams の命名した町で、ここにはブラウン大学がある。

107 Springfield はマサチューセッツ州中部の都市でコネティカット川に臨む。

3 アンダーヴァー神学校時代

113

このB・S・は日本人として海外の大学で取得したはじめての学士号であると考えられる。B・A・でなくB・S・であったのは、一八八七年にアーモスト大学を出た内村鑑三も同じことだが、これは必修の古典語の履修を免除されたことによるようである。新島が七月十四日に行なわれた卒業式に出席したかどうかは現在のところ確定できない。B・S・は最初一種の「名誉学位」のように取扱われていたふしがある。新島が一定の単位を修得していたことも事実であるが、成績等の記録は一八八二年のWalker Hallの火災で焼滅した。新島は級友から選ばれてクラス・デ어의演説を七月十二日に日本語で行なったらしい。それは一種の愉快な、面白い行事であったとされている(アーモスト大学図書館古文書分室長John Taneset氏から訳者あての一九八四年七月十二日付の手紙による)。

**Andover Theological Seminaryは一八〇七年に設立された、米国における組合教会系最古の神学校で、いわゆる「ニュー・イングランド神学」のとりでを形成していた。その神学の最後を代表したのは新島の学んだE・A・パーク教授だった。この神学校の卒業生の中にはアメリカン・ボードの宣教師になった者が多い。科学主義に基づく新神学の出現によって大きな論争を経験したが、一九三一年にバプティスト派のNewton Theological Institutionと合併して、現在ではAndover Newton Theological Schoolとなっている。新島のミス・ヒドンあての書簡は現在この神学校に保管されている。なおアンダーヴァー神学校がアンダーヴァーに存在した期間は一八〇八年から一九〇八年までであった。

116

森有礼(一八四七—一八九)は鹿児島出身の先覚的な外交官、政治家。藩命により一八六五年から二年間英国で学んだ。明治政府がワシントンに派遣した最初の外交官で、一八七〇年十一月に小弁務使に任命されてワシントンに赴任した。彼の任務はアメリカ政府との折衝と留学生の監督だった。一八七一年四月中弁務使に昇進し、同年十月に職制が変わって代理公使になり、一八七三年七月まで在勤した。新島がボストンで会った時の森は小弁務使のときであった。森は帰国後一八七三年十二月に外務大丞、一八七五年には外務少輔となり、その年の十一月には清国駐劄特命全権公使となっている。開明家であった彼は英米の文物、制度を取り入れることにきわめて熱心であり、日本の国語を英語に切換えることさえ考えた。伊藤博文内閣の初代文部大臣となり、学校制度全般の改正と積極的に取り組んだが、その「西洋かぶれ」を憎む刺客のために暗殺された。

117 「」はA・S・ハーディーによる注記である。

**Massachusetts Agricultural College は一八六三年アーモストの町に創立された。既述のように初期の頃十二年間学長をつとめたのがW・S・クラーク博士である。初期の農科大学に二人の日本人が留学していたことがクラークの手紙からわかる。すなわち湯地定基と内藤誠太郎である(太田雄三『クラークの一年』[昭和堂、一九七九]五五ページ)。森公使が連れていったのはこの二人のうちのどちらかであろう。

**発信地はアーモストとあるが、恐らくアンドーヴァーのあやまりであろう。

118 「請願帰朝之書」をさすものと思われる。『新島先生書簡集』(続)二六五—六九ページをみよ。ただしこの請願書は提出せずに終った。

119 ナイアガラ瀑布はイリー湖からオンタリオ湖に注ぐナイアガラ川の間にある大瀑布。トレントンの滝はニューヨーク州ユチカの北十五マイルのところにあり、石灰岩の中を横切って流れる。地質学では「トレントン」という年代を設定しているが、それはこの滝の名にちなんでつけられたもの。オルドヴィス紀(四億四千万—五億年前)に相当する。

121 ホラス・S・テイラー船長の両親には十三人の子供があつた。成人したのは五人の息子と四人の娘で、五人の息子のうちJohn, Simeon, Horace, Prince の四人が船長となつた。Leominster にいた兄弟が誰であつたか確定しがたいが、この町のバプテスト教会に David Taylor という牧師がいたという記録がある。ただし一八五〇年以前のことである(William A. Emerson, *Leominster, Massachusetts: Historical and Picturesque* [1888], p.53)。

**マサチューセッツ州西部、Hoosac 山を貫通するための、ボストン・オールバニー鉄道のトンネルで、全長四・七五マイル。二十四年間をかけて、一八七五年に開通した。当時としては画期的な大工事であつた。

122 North Adams はウィリアムズ大学のある Williamstown から約五マイル東にある町で、製紙、織物、製靴、電気製品等の工場がある。

123 Troy は州都オールバニーの北東八マイル、ハドソン川の東に位置する商工業の町で、南北戦争のころまで製鉄の中心地だった。一八二四年設立の Rensselaer Polytechnic Institute という工芸大学があつた。

**石附実『近代日本の海外留学史』の付録「海外留学名者リスト」によれば、松本莊一郎(大垣の人。のち鉄道庁長官、

工博)、山本重輔(山口の人。のち日本鉄道会社技師長)が一八七〇年に日本を出てレンセラー工大に在学中だった。ほかに目賀田種太郎(静岡の人。のち横浜税関長、男爵)も一八七〇年に日本を出、ハーヴァード・ロー・スクールに入る前にしばらくトロイに住んでいた。ただ目賀田と新島はケンブリッジとアンドーヴァーで同じ時期に学生だったから、ボストンやワシントンで会った可能性が強い。

***Albany はニュー・ヨーク州庁の所在地。一六一四年にオランダ人が植民した町として古い歴史をもつ。

****Kirkland はニュー・ヨーク州ユチカの西五マイルのところにある村。

*****アーモスト大学時代、北寮四階一三号室で同室だった友達。一〇三ページとその注をみよ。

*****Clinton, Dansville, Oriskany Falls, Waterville, New Hartford, Trenton Falls 44 Dansville をのぞき、カークランドから二十マイルの範囲内にある。Dansville だけは同じニュー・ヨーク州内でもはるか百二十マイル西方の町。従ってこれはカークランドの南の Deansboro との混同であると推定される。

124 川田剛。新島雙六は川田の塾生だった。この手紙は同志社に保存されている。『新島研究』二号(一九五五)二九一—三〇ページに全文が掲載されている。川田については本書三九ページとその注をみよ。

125 川田から新島あての手紙から察して、名古屋藩士の丹羽という人らしいが、この名前は『近代日本の海外留学史』のリストにもあらわれない。

**池田徳潤といい、因州の大参事とのことであるが、詳細は不明。

***State Street は現在のボストン市役所の南から東の方ボストン港に通じる通りで、アルフィアス・ハーディーの事務所はその通りの一八一番にあった。この場所は一九八四年現在、Dockside というレストラン兼バーとなっている。

****新島雙六(一八四七—一八七二)は二月七日に永眠した。二十三歳二か月だった。

126 ルカ伝 9・62。九四ページにも同じ表現を用いている。

**原文に the passport sent from the Japanese government とある。それ以外に「大学」から下付された「留学免許状」がある。「安中藩貫属 新島七五三太 辛未二十九歳 米国学免許候事 辛未五月 大学回」という簡単なもの。

***マサチューセッツ州 Salem で十月上旬にアメリカン・ボードの第六十一回年次大会が開かれることになった。ハーディー夫妻も新島もそれに出席する。新島はこの大会で、日本に向けて出発しようとしていたジェーム・ディーン・デイヴィス宣教師にはじめて会う。

128 十八世紀ニュー・イングランドのキリスト教思想家、牧師であった Jonathan Edwards (c. 1703-58) の主著 *Careful and Strict Enquiry into the Modern Prevailing Notions respecting that Freedom of Will which is supposed to be essential to Moral Agency* (1754) をよめたのと思われ。

131 一二一ページ末尾の注参照。

***この遣欧米使節団の総数は約五十名で、特命全權大使の右大臣岩倉具視の下に四人の副使、すなわち参議木戸孝允、同大蔵卿大久保利通、同工部大輔伊藤博文、同外務少輔山口尚芳がいた。寺島はこの使節団のメンバーではなかった。ただし彼は一八七二年に渡英し、駐英大弁務使となっている。なお田中不二磨は理事官、文部大丞だった。使節団のリストは『回覧実記』(1)三七六―七七ページに掲げられている。

***外務大臣にあたる。

***木戸がそのような上奏文を起草したという事実はない。ただし木戸は五箇条のご誓文の最後の仕上げをしたといわれる。

***田中不二磨(一八四五―一九〇九)は尾張藩士で、幕末に尾張藩の勤王派として頭角をあらわし、明治政府では一八七一年文部大丞となった。一八七一年に岩倉特命全權大使一行に加わって欧米の教育事情を調査し、『理事功程』十五巻を報告した。新島は後に見えるように、ドイツ滞在中にその下働きをした。一八七四年文部大輔(文部次官にあたる)。この時文部卿が欠員だったので、彼は事実上文教政策の最高責任者だった。一八七六年から七七年にかけて再び米国に出張して教育制度の調査にあたり、『米国学校法』を文部省から出した。彼は日本の学校教育制度をアメリカのモデルに基づいて改革しようとしたのである。それは一八七二年の「学制」があまりに中央集権的かつ画一的だったからである。文部省教育顧問のアメリカ人 David Murray は田中に協力し、一八七七年に「学監考案日本教育法」を田中に提出したが、これは一八七九年の「教育令」の重要資料となった。教育令が自由主義を基調としたものであったため非難をうけ、一八八〇年には司法卿に転じ、一八八四年イタリア公使、一八

八七年フランス公使、のち枢密顧問官、一八九一―九二年には司法大臣として第一次松方内閣に参画するなど、教育・司法界に多くの業績を残した。子爵に列せられた。

133

原文は yet it would be difficult to overestimate the influence he exerted through it upon the educational progress of Japan (pp. 118―119) である。この overestimate は文脈からみて underestimate のちがいである。あるいは it would be difficult not to overestimate the influence... のまがいかもしれない。

※既出の『理事功程』の材料となる報告書を、新島はドイツ滞在中に書いた。

***Georgetown は米国の首都圏でどの州にも属さないコロンビア地区 (District of Columbia—D. C. と略称される) の中の西北の地域で、ポトマック川の北に位置している。ここに Georgetown University があつた。

134

公使とはむしろ森有礼をさす。正式には「代理公使」であった。

※この秘書は Charles Lannan (1819―95) で、日本公使館で十一年間秘書の役をつとめた。探險家、画家、その他多くの興味を追求した人で、自宅に日本からの最初的女子留学生である津田梅と吉益亮を下宿させて、世話をした。三十二冊の著書のある教養人だった。DABをみよ。

***Arlington House はアーリントン・ホテルとも呼ばれ、一八六九年にワシントンのアイ・ストリートとヴァーモント・アヴェニューの交わるあたりに建設された、当時アメリカの超一流のホテルだった。場所は大統領官邸の北二ブロックのところにあり、日本の使節団が泊ったときは建設後三年目だった。現在このホテルはなく、その場所に Veterans Administration Building が建っている。

****田中不二麿。

136

一等書記官、外務少丞田辺太一 (一八三二―一九一五) をさす。田辺は岩倉使節団の書記官長格で本国政府との通信連絡に当たっていた。儒学者の次男に生まれ、昌平黉に学んだ。早くから西洋事情に興味を持ち、福沢諭吉らと交わった。一八六四年横浜鎮港談判使節に随行してヨーロッパに派遣された。一八六七年にはパリ博覧会派遣使節に書記官として随行。新政府の外務省に入ってから岩倉使節団で重要な役割をはたした。のち清国に在勤。元老院議員となった。

※開拓使派遣の五名的女子留学生は吉益亮 (当時十六歳)、永井繁 (十一歳)、津田梅 (九歳)、山川捨松 (十二歳)、上

田悌（十六歳）。津田梅の父は新島の旧友の津田仙であり、彼女は帰朝して教師となり、のちに津田塾を創設した。山川捨松はのち大山巖元帥夫人、永井繁は瓜生外吉海軍大将夫人となった。

***津田仙（一八三七—一九〇八）は旧幕臣で早くから洋学に志し、はじめ蕃書調所で手塚律蔵について蘭学を修め、のち英学に移った。新島より六歳年長だった。のち農学者として麻布に労農社農学校を開き、農業教育につくした。

138 John Eaton (1829—1906) はダートマス大学の一八五四年の卒業生。アンドーヴァー神学校を卒業して牧師の任職を受けた。南北戦争にさいしてグラント將軍の信頼をうけ、解放奴隷のためにつくし、一八六五年准将に昇進した。従って後出（一四七ページ）のようにイートン「將軍」とも呼ばれる。米政府の教育局長官（Commissioner of Education）を一八七〇年から八六年までつとめた。その後二つの大学の学長を歴任した。DABをみよ。

139 『回覧実記』（1）の校注によると、田中理事官の随行員として次の五名があがっている。文部中教授長与兼繼、正七位中島永元、文部中助教近藤正綱、文部中助教今村和郎、内村良蔵（同書三七六ページ）。

**Orville E. Babcock (1835—88) はウェスト・ポイント出身の軍人で南北戦争のときは工兵部隊を指揮して手柄をたて、グラント將軍の厚い信任をえ、准将に昇進した。グラント大統領はバブコック將軍を個人秘書として用いていたが、バブコックはのちに収賄の嫌疑をかけられた。裁判で無罪となったが、大統領秘書は辞任した。DABをみよ。

***Jeremiah Fames Rankin (1828—1904) はアンドーヴァー神学校の一八五四年卒業生で、組合教会の牧師となり、名説教家といわれた。一八六九年から十五年間にわたり首都ワシントンの第一組合教会の牧師をつとめ、のちには同市のハーワード大学の学長を十三年間つとめた。詩人でもあり、送別の讃美歌 God be with you till we meet again（日本語讃美歌四〇五番「神とともにいまして」）はランキン牧師の作詞である。

141 メソジスト教会は一七二九年にイングランドのオックスフォードで Wesley 兄弟たちが始めた信仰覚醒運動から出発したもので、一七九五年に正式に Church of England から分かれた。わが国では青山学院や関西学院がメソジスト系の大学である。

**英国の化学者、鉱物学者 James Smithson (1765—1829) の寄付により、学術の普及を目的として一八四六年に首

都ワシントンに設立された国立の機関で、その博物館は世界有数のものである。

147 Columbia College は一八二一年にワシントンに設立された私立大学で、一八七三年に Columbia University と改称。さらに一九〇四年に George Washington University と改称して今日に至っている総合大学である。ニューヨークの Columbia University と混同してはならない。

148 アメリカ人はアメリカを新世界、ヨーロッパを旧世界と呼ぶ。

**Birsey Grant Northrop (1817-98) はコネティカット州に生まれ、イエール大学、イエール神学校を出て組合教会の牧師になり、教育家、教育行政家として功績をあげた人。一八七二年森公使はノースロップに日本の教育の指導に当たってほしいと要請したが、彼は固辞した。初期の日本からの留学生の世話をした。「植樹の日」 Arbor Day の提唱者でもある。一八九五年にはじめて来日、七十七歳の高齢にもかかわらず二か月間に三十八回の講演をした。同志社では四月二十八日に聖書と教育の関係について、五月三日には学校衛生について講演した。また下関事件の賠償問題で奔走し、その甲斐あって米政府は日本から受取った賠償金を日本政府に返却するに至った。D ABをみた。

149 Miss Harriet Eliza Chichester Northrop (1850-1933) はのち B. D. Holbrook 夫人となる。

**Mount Vernon はワシントンからポトマック川ぞういに二十四キロ下流にあるヴァージニア州の名所。初代大統領ジョージ・ワシントンの住居だった。彼の墓地もある。

**Dr. Peter Parker の夫人 Harriet のことと思われる。ハリエット夫人はウェブスター家の出身でダニエル・ウェブスターの親戚にあたる。一八四一年にバーカー博士と結婚、宣教師夫人として中国に赴いた。中国入りした最初のアメリカ婦人であったといわれる。一八五七年バーカーはアメリカン・ボードの中国派遣宣教師、また中国駐在アメリカ公使を辞して、首都ワシントンに住んでいた。なおバーカー博士が一八七四年十月、ラットランドで新島のアピールに答えて千ドルの寄付を約束することは後出の通り。

****John Lord Taylor (1811-84) はイエール大学を一八三五年に卒業、のちにイエール神学校で神学をおさめた。一八三九年に牧師の任職を受け、アンドーヴァーの Old South Church の牧師を一八五二年までこめた。この年フィリップス高等学校の会計、アンドーヴァー神学校の会計兼理事になった。一八六八年同神学校の Smith

Professor of Theology and Homiletics となり、「別科」神学課程（フル・コースをとらないで牧師になろうとする者のための課程—初期の同志社の邦語神学の課程にあたる）の責任者になったが、同時にアンドーヴァー神学校の学長に選ばれた。一八七九年病氣のために教職を辞任し、名誉教授となった。ティラー教授はまた一八七三年から七年間にわたり Andover National Bank の頭取だった。一八六八年に Middlebury College から D・D・の名譽学位を受けている。本書一八五ページにあるようにティラー学長は一八七四年九月二十四日、ボストンにおける新島の按手札に母校のアンドーヴァー神学校を代表して出席している。

150 アーモスト町の代表的なホテルとして一九一七年まで存続した。位置は現在の Jones Library の向かいに当たる。最盛時には四階建てであったが、何度も火災に遭っている。“Amherst House”とも呼ばれたこのホテルの写真が Frank Prentice Rand, *The Village of Amherst: A Landmark of Light* (1958) の中に収められている。

**Holyoke Seminary は正式の名を Mount Holyoke Female Seminary とし、一八三六年に Mary Lyon (1797—1849) 女史によって設立された。セミナリーという呼び名が示すように、神学の課程をもっていたが、それは一八九三年に廃止され、それ以降は Mount Holyoke College となった。歴史的には米国最古の女子大学であり、現在なおきわめて高い水準を維持している。この大学の出身者の中から宣教師または宣教師夫人となった人々の数が多い。詩人の Emily Dickinson (1830—86) もここで学んだ。

151 Noah Porter (1811—92) はイエール大学の卒業生で組合教会の牧師になった。一八四六年母校から道徳哲学、形而上学の教授として招かれ、学者として国際的な名声を博するようになった。一八七一年イエール大学総長になり、十五年間その職をつとめた。教育者としては保守的な傾向が強く、ギリシア語・ラテン語をリベラル・アーツの基礎と考えた。神学的にも保守的であったが、意見を異にする人々にも紳士的に接した。新島は一八七四年十月に米国を去るにさいし、ポーター総長夫妻をニュー・ヘイヴンに再訪し、総長は新島を停車場まで見送っている。

DABをみよ。

**Yale University は一七〇一年ニュー・ヘイヴンに創立された米国有数の大学。

***Sheffield Scientific School はイエール大学の理工学部に当たる。

153 聖書館はアメリカ聖書協会の建物で一八五二年に Ninth Street に建つられた Astor Place Bible House をや

す。新島たちが訪ねたのはここだと考えられる。同協会は一九三六年に Park Avenue, 57th Street の新しい聖書館に移った。この協会はアメリカのみならず、全世界に聖書の普及をはかることを目的としており、日本聖書協会はその日本支部が、英国聖書協会の日本支部と合併して出来たものである。

**Cooper Institute はニュー・ヨーク出身の実業家・発明家である Peter Cooper (1791—1883) が私財を投じて一八五七—五九年に設立した学校で、Cooper Institute と Coopers Union と呼ばれ、市内のワシントン広場に近い Astor Place にあった。その目的とするところは「学問と芸術の進歩」であり、諸科学、電気、機械工学、芸術等の科目の高度な講義を無料で市民に提供した。すぐれた図書室と読書室をも備えていた。

**Five Points はマンハッタン南部の Barter Street, Worth Street, Park Street の交又するあたりの呼び名だった。一八三〇年ごろまではスラムが密集し、市内随一の犯罪多発地帯だった。一九三〇年代になって、ようやくスラムは取払われ、裁判所やオフィス・ビルディングが建てられて、面目を一新した。

****新聞少年宿舎は米国の社会事業家 Charles Loring Brace (1826—90) がニュー・ヨークに一八五四年に設立したもので、この種のものとしてははじめてのものであった。それは一八五三年に彼が設立した Children's Aid Society の事業の一環であり、夜学校、職業訓練学校、夏のキャンプ、サナトリウム等を含むもので、当時急増した移民の子供らを特に対象とした。社会福祉事業の先駆的な功労者である。なお多くの成功者の物語を書いて一世を風靡した Horatio Alger (1834—99) はこの新聞少年宿舎に毎日出入りし、そこにいる少年らの友達になり、また彼らの物語から自分の作品の材料を仕入れたりした。

*****タイムズ事務所は『ニュー・ヨーク・タイムズ』の本社をさすものと思われる。

4 最初のヨーロッパ訪問

157 Algeria 号は一八七〇年に進水した Cunard Line 所属の大西洋航路の船で、三二五三トン、時速十二ノット半。二本のマストと一本の煙突をもっていた。

**Jersey City はハドソン川をへだてて、マンハッタン島南部の西側にある。

***Queensdown は現在アイルランド共和国 Cork 郡の Cobh[kou] という海港の旧名で、大西洋航路のさかんな

時代には重要な寄港地だった。

*****the banks of Newfoundland と Grand Newfoundland Banks と呼ばれ、大漁場として有名である。

*****Edward Griffin Porter (1837—1900) は新島と同じ Phillips Academy の卒業生。ウィリアムズ大学に二年間学んだのちハーヴァード大学に移って一八五八年に卒業した。ヨーロッパにわたってベルリン、ハイデルベルク、アテネで勉強して帰国し、一八六一年ハーヴァードから M・A を取得。アンドーヴァー神学校で一八六一—六四年の間学び、説教者の資格を得てから再びヨーロッパに二年間滞在した。一八六八年十月レキシントンの Hancock Church の牧師となり、その職に一八九一年までとどまった。雄弁家であり、沢山の著書があり、またヨーロッパの政治事情に精通していたといわれる。本書一八五ページにあるように、新島は一八七四年五月十日に、ポーター牧師の牧するハンコック教会ではじめて講壇からの説教を試みたのであった。

*****Charles Clinton Goodwin (1839—1905) は薬剤師であり、四十七年間にわたり、教会の聖歌隊のメンバーであった。Lexington Savings Bank の理事でもあった。夫人は Alice といひ、一八三八年の生まれ。Charles Hudson, *History of the Town of Lexington* (Houghton Mifflin, 1913) をみよ。

158 Glasgow はスコットランド第一の工業都市で船舶の建造がさかに行なわれていた。前出のアルジェリア号もこの都市で建造されたもの。Edinburgh はスコットランドの首府で、風光明媚であり、歴史上の遺跡が多い。どちらの町にも古いすぐれた大学がある。

**Liverpool は十九世紀の大西洋航路の英国側の玄関にあたる港であり、またアイルランド行きの便船もここを起点とする。従ってここには税関や外国の領事館がおかれていた。

***Manchester は中部英国の工業都市で、産業革命の結果非常な発展をとげた。マンチェスター大学がある。

****当時のマンチェスターの国教会の主教は James Fraser (1819—95) という人で、一八七〇年から永眠するまで十五年間、工業都市マンチェスターの主教をつとめた。教育問題にくわしく、カナダと米国を一八六五年に五カ月間訪問し、すぐれた調査報告書を書いたほか、マンチェスター市内の高等教育機関の理事をつとめた。労働争議の調停役としても活躍した。DNB をみよ。彼に新島を紹介したのがイェール大学のポーター総長であったことは、新島が六月一日付でミス・ヒドンに書いた手紙から知られる(第6巻『英文書簡編』一一四ページ)。

****Carlisle はイングランド Cumberland 郡の首都で、大聖堂がある。新島が訪れた古城には一五六八年にスコットランドのメアリ女王が二か月間幽閉されたことがあった。

159 この孫は名前から察して恐らく著者 Arthur Sherburne Hardy の最初の結婚で生まれた子供であらう。ただし著者の長兄 Alpheus Holmes Hardy の息子という可能性が消えるわけではない。次兄の Charles Francis Hardy はこの段階で未婚。この孫 Sherburne は祖母のお気に入りの子孫だったらしく、ミス・ヒドンあての手紙にも出てくるし、また新島の一八七四年八月十日の英文の日記には、ハーディー夫人が Shadie をピクニックにつれていったことが出てくる。なお田中不二麿から新島あての一八七五年七月九日付書簡に「ボストンのハルデー氏より同人孫児シュルヘー死去之段赴告有之小生江も伝通之旨悲歎遙察ニ不堪御序之節可然御致意是折候」(『同志社百年史』資料編、五ページ)とあり、これが Shadie の夭折を暗示するように思われる。本書四五〇ページの系図をみよう。

****Baring, Brothers and Co. という商会。ヘアリング氏はボストンのハーディー商会のロンドンの代理店であったと考えられる。店は 8 Bishopsgate [Street] にあった。

****Cork はアイルランド南部の町。既出の Queenstown (Cobh) はコークの外港に当たる。

****Charing Cross はロンドンの中央部、Trafalgar Square の南にある。交通量も多く、繁華な部分である。ゴールデン・ホテルとあるが正式の呼び名は Golden Cross House で、ストランド街をへだてて鉄道のチャリング・クロス駅向かい合う位置にある。このホテルは一八九〇年版のフランス語版ベデカーでは "Moin's chers" の部に入っている。

160 英国の貨幣単位は現在では一ポンドが百ペンスであるから簡単であるが、一九七一年二月までは一ポンド＝二十シリング、一シリング＝十二ペンスという三種の単位を用いていた。おまけに一ギニー＝二十一シリングという単位もあって、医師への支払いや大学の授業料等に使われていた。

****Joseph Mullens (1820—79) はロンドンに生まれ、一八四一年にロンドン大学を卒業した。組合教会牧師としての任職を受け、London Missionary Society の一員としてインドに赴き、十二年間奉仕を続けた。一八五八年英国に帰り、London Missionary Society の外国伝道部主事となった。一八七〇年にブルックリンで開かれたアメリカン・ボードの年次大会に出席。一八七九年に中央アフリカの伝道を強化するため自らアフリカに渡り、彼地で

病死した。エディンバラ大学と米国のウィリアムズ大学からD・D・の名譽学位を受けている。DNBをみよ。

***新島の時代にはよく名刺がわりに写真を交換しようである。ただしロマ書16・9は「キリストにあるわたしたちの同労者ウルバノと、愛するスタキスとに、よろしく」であって、写真に記すのにふさわしいかどうか疑問である。

****Macon は Saône 川ぞいの町で、ジュネーブまで直線距離にして百キロであるが、アルプス山中を行くため、鉄道はまがりくねって進んでいる。

161 今村和郎(一八四六—一九二)。新島の英文日記一八七二年七月十六日の項をみよ。

162 ヨーロッパの地図ではスイスのジュネーヴ、ベルン、チューリヒ、現在西ドイツのアウグスブルク、東ドイツのライプチヒ、そしてベルリンはほぼ一直線上に並ぶ。

***現在のソ連のレニングラードは帝政ロシア時代の首都で、セント・ピータースバーグといった。

***Joshua Montgomery Sears (1834—?) は実業家 Joshua Sears (1791—1857) の一人息子で、アルフィアス・ハーディーがその後見人であった。百五十万ドルの遺産を受け継いだ人で、一八七八年に新島邸の建築資金二百ポンド、教会建築資金二百ポンドを寄付した。ミス・ヒドンあて新島の英文書簡一八七八年七月十日付(第6巻『英文書簡編』一八九ページ)をみよ。

164 この大学はアレクサンドル一世の開明的な政策によって一八一九年に開設された。レニングラード国立大学の前身にあたる。

***St. Isaac's Cathedral はフランス人 Auguste Montferrand の設計を基にして四十年間を費して一八五八年に完成した大聖堂。金色に輝くキューポラは百メートルの高さである。現在は博物館になっている。『回覧実記』(4)四八ページに口絵がある。

165 Frankfurt-am-Main は英語では Frankfurt-on-the-Main と表記する。メイン川に臨む Hessen 州の首都で、大学や聖堂がある。ゲートはこの町に一七四九年に生まれた。

*Rotterdam はオランダ南西部の海港。エラスムスは一四六六年ごろにこの町で生まれた。

***The Hague は正式にはオランダの首都ではなく、首都はアムステルダムである。しかしハーグには古い王宮、

政府の諸官庁、外国公館等があるから、いわば準首都ということもできる。国際司法裁判所もここに置かれている。

166 オランダの共和制時代は一五八一年から一七九五年まで。この国は一七九五年ごろからナポレオン戦争にまきこまれ、フランスの治下に入った。オランダを君主とする王制が始まるのは一八一四年からである。

**ウィリアム三世の最初の妃で Wittenberg のウィリアム一世の娘 Sophia をさすものと思われる。二人の王子をもうけたが国王との間がうまくいかず、別居の状態が続いていた。『回覧実記』でも日本の使節団がウィリアム三世に拝謁した時、王妃は不在だったと久米が記している。なお現オランダ女王の祖母の Wilhelmina 女王はウィリアム三世の二度目の結婚からできた子供である。

***Amsterdam はオランダの首都。Leyden には一五七五年創立のすぐれた大学がある。この博物館はいわゆるシーボルト博物館で、日本のコレクションはむろん医師・博物学者であった Philipp Franz von Siebold (1796—1866) の集めたものである。このコレクションはオランダ政府が一八三七年に買い取り、現在の National Museum of Ethnology (Leyden) の基盤となった。

169 Wiesbaden は現在西ドイツの Hessen 州にある。ライン川に臨み、川をへだててマインツと向かい合う鉱泉保養地。

**Berchtesgaden は Bavaria 州のアルプス山中の保養地で、オーストリアのザルツブルグの南にあたる。二十世紀前半にはここにヒトラーの山荘があった。

174 171 この仕事は田中の報告書『理事功程』の材料となる。第1巻『教育編』をみよ。

174 一八七二年十一月九日ボストンの 8385 Summer Street から出火、翌日正午まで燃え続けた大火。ボストンの最良の商店街六十五エーカーにわたり、七百七十六棟を焼き、千三百五十万ドルにわたる大損害を出した。

175 太陰暦による明治五年十二月三日を、太陽暦による明治六年一月一日に切換えた。日本政府はこのことを各国政府に通知した。

**北白川宮能久親王(一八四七—一九五)は伏見宮邦家親王の第九子であったが、一八四八年仁孝天皇の養子となったので、明治天皇から見て義理の叔父に当たる。維新にさいして若干反逆的な態度をとったため謹慎したのち、一八

七〇年ドイツに留学、プロシア陸軍大学校に学び、七七年に帰国した。のち陸軍中將に進み、近衛師団長。台湾島民の反乱鎮圧のために出征し、台南で罹病、逝去した。

- 176 アーモスト大学のシーリー教授はインド旅行の途中に日本に立寄り、一八七二年七月二十七日に東京の善福寺において新島の父民治に会った。

- 178 ルーテル教会はマルチン・ルターによる宗教改革の結果、十六世紀後半に現在の東西両ドイツに当たる地域の三分の二がルーテル主義に立つようになつて形成された。デンマーク、スウェーデン、ノルウェーのスカンディナヴィア三国ではルーテル教会がいわば国教会である。ローマ・カトリック教会に反逆した点では同じでも、ルーテル教会はカルヴァンの系統に立つ長老派教会や組合教会とは教義上対立することがあつたし、時には内部分裂をも経験して今日に至っている。

- 179 この宣教師は新島が父あてに書いた一八七二年五月三日付の書簡から推して、オランダ改革派の宣教師 James H. Ballagh (1832—1920) をよすものと思われる。バラは一八六一年に来日し、のちに日本で最初のプロテスタントの教会を横浜に創設した。なおヨセフ物語は旧約聖書の創世記37—50章にある。

- 180 原書に Elsing とあるが、これは A・S・ハーディーの読みちがいであり、本文の内容との関連から Uising となるのが妥当だと考えられる。オージンゲンはフランクフルトから三十キロほど北の町である。

- **Friedrichsdorf は Bad Homburg のすぐ北にあり、フランクフルトから十キロほどの田舎である。

- ***ユグノーは十六、十七世紀ごろのフランスのカルヴァン派のプロテスタント教徒の呼び名。カトリック国のフランスでは迫害されて、外国に脱出したものが多かった。

- ****タラーもグロッシェンも昔のドイツの銀貨。貨幣単位としては一タラー＝二十四グロッシェンだった。Thaler (Taler) と dollar は同一の語源から来た言葉である。

- 182 Marquis Lafayette Gordon (1843—1900) はペンシルヴァニア州の生まれで、義勇兵として南北戦争に三年間従軍してからアンドーヴァー神学校に入り、一八七一年に卒業。その後一年間医学を学んでからアメリカン・ボードの宣教師として来日し、大阪で伝道した。一八七九年から同志社の教師として実践神学、牧会学、讃美歌を教えた。日本伝道に仏教の研究が必要であることを痛感し、自らその研究にうちこんだ。一八九九年病気で帰米するま

で二十年間、同志社の教育につくした。ゴードンと新島は神学校で同級だったわけではない。

***アメリカン・ボードは正式の名称を「The American Board of Commissioners for Foreign Missions」とし、米国の組合教会の人々が中心となり、海外の伝道を目的として一八一〇年にマサチューセッツ州ブラッドフォードで結成された。ウィリアムズ大学、ブラウン大学、その他からアンドーヴァー神学校に学んだ若い神学校卒業生が最初の宣教師となってインドに派遣されたのは一八一二年であった。宣教師はその後国内ではアメリカン・インディアン向けにも派遣されたが、また海外ではセイロン、ハワイ諸島、トルコ、シリア、マルタ島、ギリシア、中国、ジャム、ボルネオ、アフリカ、南アメリカ、ミクロネシアへと、地球的な規模でその宣教活動の範囲を拡大し、ついに一八六九年になって、D・C・グリーン夫妻を日本に派遣してきた。その後日本にはO・H・ギューリック、デイヴィス、ペリー、ゴードンらが続いて到着した。アメリカン・ボードの一世紀半の歴史からすれば、日本伝道の章は非常に長いものとはいえない。ただし新島が学んだアーモスト大学もアンドーヴァー神学校も、すべて組合教会系であり、彼の保護者であるアルフィアス・ハーディーはアメリカン・ボードの法人会員(Corporate Member, 1857—87)であり、かつ運営委員(Prudential Committee, 1857—86)であり、その委員長を十三年間とめたのであったから、新島がのちにアメリカン・ボードの準宣教師となったことは、事の成行き上当然であったといえる。本書の記述からも明らかなように、アメリカン・ボードは、財政面でも同志社に非常な援助を与えてきた。しかし新島の永眠後同志社とボードの間に深刻な意見の対立が生じ、一時は宣教師全員が同志社から引きあげたり、また財産権の問題をめぐって裁判にまで発展しかなかったこともある。しかし多くの人々の努力によって友好関係は修復し、戦後にもまた日本の精神的復興を助けた。一九六一年にアメリカの組合系諸教会が「Evangelical and Reformed Church」と合併して「The United Church of Christ」を形成したさいに、それぞれの宣教機関も合併して「The United Church Board for World Ministries (UCBWM)」となった。

***総主事は「Corresponding Secretary」の訳語である。アメリカン・ボードの構成を、一八七三年を例にとって説明すると次のようになる。会長一名(この時期はウィリアムズ大学の Mark Hopkins 総長)、副会長一名(William E. Dodge——翌年、新島のラットランドのアピールに答えて千ドルを寄付した人)、運営委員九名(その中に、後出の A. C. Thompson、アルフィアス・ハーディー、ボードの総主事を三十四年間とめた Rufus Anderson が入っていた)、総主事

Corresponding Secretaries 1名 (S. B. Treat & N. G. Clark) 記録係主事 Recording Secretary 1名 会計
Treasurer 1名 監事 Auditors 2名があり、これがボードの執行部であった。法人会員 Corporate Members
は103名、準会員 Corresponding Members は四名(すべて英国在住者)である。この他名誉会員 Honorary
Members が1308名あり、日本の項目では J. D. Davis, Eliza Talcott, J. E. Walker の三名が名誉会員となっ
ている。この年の宣教師の総数は350名で、その内訳は次表の通りである。

Missionaries of the American Board (1873)

Zulu Mission	28
European Turkey Mission	21
Mission to Western Turkey	53
Mission to Central Turkey	20
Mission to Eastern Turkey	30
Mahratta Mission	20
Madura Mission	27
Ceylon Mission	18
Foochow Mission	11
Mission to North China	31
Japan Mission	20
Micronesia Mission	10
Dakota Mission	7
Choctaw Mission	2
Mission to Western Mexico	3
Mission to Northern Mexico	1
Mission to Spain	5
Mission to Austria	8
Mission to Italy	4
Missionaries Resident in the Hawaiian Islands	31
計	350

****Daniel Crosby Greene (1843-1913) は二月十一日の生まれであるため、この日は日本で十二日にあたり、新島
とまったく「同日」に生まれたことになる。ダートマス大学を一八六四年に卒業し、三年後にアンドルーヴァー神学
校を卒業した。アメリカン・ボードが日本に派遣した最初の宣教師で、一八六九年に来日し、七〇年から神戸に移
った。一八七四年に摂津第一公会(のちの神戸教会)を創設し、その牧師となった。一八七四-八〇年には横浜に滞
在し、新約聖書の日本語への翻訳に従事した。一八八一-九〇年には同志社で教鞭を取り、旧約聖書釈義その他を
担当。同志社チャペルや彰栄館も彼の設計による。一八九〇年以降は東京に移り、東京の教会を助けながらアジア
協会や平和協会の会長をつとめ、また同志社の理事(一八九九-一九一)でもあった。葉山で永眠した。一八七九
年にラトガーズ大学からD・D・を、一九〇九年には母校ダートマス大学からL.L・D・を受けている。

厳密に言うと、神戸と大阪の宣教師は夫人たちを除き八名で、緊急アピールの署名順に示すと「J. C. Berry, J. D. Davis, H. H. Leavitt, D. C. Greene, J. L. Atkinson, G. M. Dexter, M. L. Gordon, Wallace Taylor 以下」の中で「個人的な友人」といえた人がいたかどうか疑問である。この中で新島が会ったことがあるのはデイヴィスとゴードンであり、「学友としてつき合った人」はなかったと思われる。グリーンとゴードンはアンドーヴァー神学校の同窓だが、新島と同年だったわけではない。

ここに「日本宣教師団の準会員」と訳出したのは原語で *corresponding member of the Japan mission* である。この *corresponding* という言葉は *associate* と等しいのであるが、従来の新島伝の多くはあやまって「通信員」という表現を用いてきた。魚木忠一教授のいわゆる「日本ミッションに於ける宣教師待遇者或は準会員」(『新島襄一人と思想』六九ページ)ととるのが正しい。新島は日本人であったので、正式の宣教師の資格はかえって蹟き招きやすいという配慮から、アメリカン・ボードがこのように決定したものと推定する。なお『同志社百年史』通史編六八七ページに F. F. Goodsell, *You Shall Be My Witnesses* から引用して *corresponding member* に関する定義が与えられているが、あの定義はアメリカン・ボードの法人会員 *corporate member* の *corresponding member* を意味するのであって、現実には英国在住の四人がかなり長い期間にわたって *corresponding members* だった。しかしこの四人は宣教師だったわけではない。新島は宣教師として *corresponding member* だったのであり、アメリカン・ボードの *Annual Report* を調べてみると、少なくとも新島の生前では *corresponding member* としての宣教師は新島一人だけである。

***既出。一五七ページとその注をみよ。

***新島が Bar Harbor に到着したのは一八七四年八月八日、土曜日、午後三時だったことが、八月十七日付のミス・ヒドンあての手紙(第6巻『英文書簡編』一三九ページ)からわかる。しかし、いつまでそこに滞在したのかはわからない。バー・ハーバーは Frenchman 湾に臨む町の名前で、避暑地として有名。ここので英国の植民は一七六三年に始まった。「ハーディー夫妻の家で」とあるが、実際にはその近くの Deering House というセシ・ホテルですごした。

***Mount Vernon Church 近ボストン 6 Massachusetts Avenue 近 Charles 川 近 Harvard

Bridge という橋のふもとに建っていた石造の教会であるが、現在では教会堂として使われてない。按手礼は牧師の任職を意味する。

****Rufus Anderson (1796—1880) はメイン州の生まれで、Bowdoin College を一八一八年に卒業した。外国伝道に献身するつもりでアンドーヴァー神学校に入り、一八二二年に卒業し、二六年に按手礼を受けた。神学生時代からアメリカン・ボードと関係し、Jeremiah Evans 総主事を助けてきた。一八二三年副主事、一八三二年に外国伝道担当の総主事 Secretary of the Board for foreign correspondence に選ばれ、三十四年間にわたってその職務をはたした。この間何度か海外の宣教師の派遣地を視察したり激励したりしている。一八六六年、外国伝道担当総主事を N・G・クラークに譲ったあとは、ボードの運営委員となった。一八三六年にダートマス大学から D・D・を、また一八六八年に母校のボードン大学から L・D・の名譽学位を授与された。

*****George Washington Blagden (1802—86) は首都ワシントンの生まれで、イエール大学を一八二三年に、アンドーヴァー神学校を一八二六年に卒業した。牧師となり、アルフィアス・ハーディーの所属するボストンのオールド・サウス教会の牧師を一八三六年から七二年までつとめ、非常に尊敬された聖職者だった。

186 Augustus Charles Thompson (1812—1901) はロネティカット州に生まれ、イエール大学に入ったが病気のため中退した。健康回復ののちハートフォード神学校に入り、一八三八年に卒業、その後ドイツのベルリン大学で一年間研修を積んだ。一八四七年牧師の任職を受け Roxbury の組合教会を牧した。アメリカン・ボードの運営委員を一八四九年から九三年まで四十四年間にわたって熱心につとめ、インドの宣教の視察に出掛けたこともある。アメリカン・ボードの生き字引的存在であった。一八六〇年アーモスト大学から D・D・の名譽学位を授けられた。

187 **これは一八九ページにある「一八八九年に書いた手紙」の中にみえる。
これは本書二九五—三〇五ページにかげられた「日本伝道促進についての試案」の中の省略された一部分である。この箇所は三〇四ページに入る。

ルカ伝 16・8。

189 188 使徒パウロはタルソの出身で、もとの名をサウロといい、キリスト教徒をはげしく迫害していた。しかしキリストは或る日ダマスコへ向かうサウロを捉えて回心をもたらし、キリストの使徒として立てたのであった。パウロは

回心後の名前である。新約聖書「使徒行伝」の後半はこのことをあかしする。

**デイヴィス—北垣でこの手紙を引用している（四五ページ）が、それを新島が「死ぬ数日前に」書いたとしている。ところがハーディーは一八八九年としており、はたして誰あての手紙なのか不明である。

***創世記 32・22—30。

190 古くからそのように信じられてきたが、オーテス・ケーリ教授の努力によって一九七五年に *Rutland Weekly*

Herald 一八七四年十月九日号の記事がみつかり、新島の有名な演説のようが客観的に、しかも臨場感をもって知られるようになった。その全文は『同志社百年史』資料編、巻末六一—六四ページに収録、その抄訳は『同志社百年史』通史編、一七一—二〇ページに掲げられている。

**Peter Parker (1804—88) は一八二七—三〇年にアモースト大学に学んだが、設備が不十分な学校だったのでイェール大学に移り、一八三一年にイェールを卒業、医学と神学を学び、一八三四年に M・D・となった。同年長老派の牧師に任職されたが、アメリカン・ボードの中国派遣初代宣教師として一八三四年カントンに赴き、中国での医療伝道に献身した。一八三七年に K. F. A. Gutzlaff の船に乗って浦賀まで来、七名の遭難した日本人漁師を送り届けた上で日本での伝道に乗り出す計画であったが、砲火を受け、上陸するどころでなかった。このように、身の危険を感じながら日本の扉をあげようとしたことのあるパーカーに、日本人で福音の戦士となることを誓っている新島がどのように映じたかは、おのずとあきらかである。なおパーカーは米国と中国が一八四四年にはじめての外交条約を結んだ時には外交面で活躍し、しばらくは在中国アメリカ公使をつとめたこともある。ラットランドの大会のときパーカーは七十歳だった。新島は一八八五年四月から五月にかけてワシントンにパーカーを訪ね、客となっている。D A B をみよ。

***John Boardman Page (1836—86) はヴァーモント州の第三十一代知事として一八六七—六九年の期間在職した。実業家で銀行も経営し、National Bank of Rutland の頭取になった。

****William Earl Dodge (1805—83) は実業家で熱心なクリスチャンであり、鉄道、鉄鋼、石炭の分野で活躍した。二年間国會議員をつとめたこともあり、ユニオン神学校やニューヨーク市立大学の評議員をつとめた。アメリカン・ボード副会長を一八六四年から十九年間つとめている。

191 Salt Lake City は現在ユタ州の州庁所在地であるが、ユタが正式に連邦の四十五番目の州として加入するのは一八九六年。ソールト・レイクに臨むこの町は Brigham Young の指導するモルモン教徒が一八四七年から建設を始めた町である。

**Cheyenne は現在ワイオミング州の州庁所在地であるが、ワイオミングが四十四番目の州として正式に連邦に加入したのは一八九〇年。のちに新島を助けて重要な働きをする Jerome Dean Davis 宣教師は中西部の荒れた町といわれたこのシャイアンで一八六九年から二年間、開拓伝道に従事したことがある。このことを知っていた新島は、ある店に入ってデイヴィスのことを聞いたところ、店の主人はデイヴィスに協力して伝道したことのある人だった。新島はその地の教会を訪ねて、記念の写生をした。

***Laramie はシャイアンから西北西四十五マイルのところにある町。現在ではここに一八八七年創立のワイオミング大学がある。

192 日本に向かう五人とは Mr. and Mrs. J. H. DeForest, Dr. and Mrs. A. H. Adams と新島自身。中国のフーチウに向かう二人は Mr. and Mrs. Blakely だった。

**Brigham Young (1801—77) はモルモン教の指導者。三十一歳のときモルモン教に改宗し、宣教師として成功をおさめ、教祖 Joseph Smith の死後モルモン教の最高指導者となった。クリスチャンによる迫害が続いたので、教徒をひきいてソールト・レイクの東岸に移り、ここをモルモン教徒の総本山とした。一八四九—五七年には Territory of Utah の最初の知事をつとめた。一夫多妻主義を宣言し、実行したため、非難、攻撃されたが、それに屈しなかった。DAB をみよ。

***Orson Pratt (1811—81) は貧しい家に生まれ、十九歳の誕生日に洗礼を受け、のち教会内でよい成績をあげてモルモン教の指導者になった。ほとんど教育らしい教育を受けていないにもかかわらず、独学で沢山の著作をした。数学に秀いで、キリスト教神学にもくわしく、モルモン神学樹立のために大きな貢献をした。教祖 Joseph Smith の愛人だった女性と結婚したため、しばらく教祖との仲がひえたこともある。ブリガム・ヤングはブラットの哲学的傾向が気に入らなかつたらしい。しかしブラットには開拓者精神、企画力、政治力、実行力がそなわっていて、モルモンの宣教に大きな成功をおさめた。数名の妻と四十五人の子供があった。DAB をみよ。

****Mormon University は恐らく俗称であり、これは一八五〇年創立の University of Deseret をさすものと考え

られる。一八九二年に University of Utah と改称した。現在ではユタ州を代表する総合大学に発展している。な
※ Brigham Young University という大学がヤング自身によってユタ州の Provo という町に創立されたのは、

新島の訪問した翌年の一八七五年のことであった。

193 Oakland はサン・フランシスコ湾をへだててサン・フランシスコの対岸に位置する町で、各種の工場や造船所
がある。現在では一九三六年に完成した Transbay Bridge をわたってサン・フランシスコと結ばれているが、当
時はフェリーボートが交通手段であったことと思われる。この町には一八五二年設立の Mills College という女
子大学がある。

**Colorado 号は Pacific Mail Steamship Co. 所属の船で、一八六四年にニュー・ヨーク市で建造された三七二
ハトンの船。二本マストと煙突がついていた。一八七九年廃船となった。

***Golden Gate 海峡はサン・フランシスコ湾を太平洋につなぐ海峡で、現在ではここに長さ一二八〇メートルの
大鉄橋 Golden Gate Bridge がかかっている。船舶の時代にはこの海峡を通過することが即アメリカに到着する
ことであり、アメリカを離れることであった。

194 一八七四―八一年に東京医学校で教えたドイツ人としては内科の Agathon Wernich と外科の Emil A. Wilhelm
Schultze の二人があるが、新島が日本語を教えたのは Wernich の方であったかと思われる。

**Ernest J. Eitel (1838-1908), *Buddhism: Its Historical, Theoretical and Popular Aspects: in Three
Lectures* は初版が一八七一年にホンコンで、第二版は一八七三年にロンドンから出版された。ただしこの書は旧
邸文庫にない。著者はスイスのバーゼル・ミッションから London Missionary Society に移り、ホンコンを中心
に南シナに一八六五年から七九年まで駐在した宣教師。一八八二年に至るまでのホンコンの歴史を一八九五年に出
版している。

195 Alexandria はエジプトの北部、ナイル川のデルタ上にアレキサンダー大王が紀元前三三二年に建設した町で、
古代世界における学問の中心地だった。現在でもエジプト第一の商港としてさかえている。

196 収穫感謝祭は米国の重要な祝日で毎年十一月の第四木曜日。一八七四年の感謝祭は十一月二十六日に当たる。ち

なみにコロラド号はその日の午後五時に横浜に到着した。

※ルカ伝15章に記されている放蕩息子のお話にもとづく。特にルカ伝15・23。接吻はむしろ日本人の習慣でない。この表現の中に新島の十年間の外国生活の反映を見る人がいるかもしれない。しかし注釈者はむしろ、A・S・ハーディーのなおしすぎの一例と考える。

5 日本における宣教事業

201 著者はここでいわゆる皇国史観として確立することになる日本史の見方にナイーヴに従っている。以下の日本史

概観はきわめて大雑把なものといわなくてはならない。

※Merovingian Dynasty は神話上の初期フランク王国の王朝。四八六年Clovis 一世から七五一年カロリング王朝にかわるまで続いた。その宰相を Mayor of the Palace と称し、メロヴィンガ朝後期においては実質上の主権者であった。

204 A・S・ハーディーはここで十二月六日と誤記している。新島のハーディー夫妻あての次の書簡(二〇八ページ)にてらして、新島の横浜到着は一八七四年十一月二十六日と考えるべきである。

※日本最初の鉄道である新橋・横浜間の鉄道は一八七二年十月十四日(陽暦)に開業した。

※造幣寮という名称で一八七一年四月四日(陽暦)に開業した。

※横須賀における修理用ドックの設置は一八七一年三月二十八日(陽暦)、また海軍省が東京の築地に兵器製造所を設置したのは一八七四年九月二十四日であった。

※※※※※イェズス会については本書二七七ページの注をみよ。

205 一八七七年の西南戦争をさす。

206 日本最初の鉄道(新橋・横浜間)の開通が一八七二年十月十四日、切支丹禁制の高札を除去したのは翌一八七三年二月二十四日であった。従ってハーディーの「谷間の静けさ」云々は誇張である。

210 小坂鉄山をさす。

※安中の龍昌寺。

211 この「」の部分はA・S・ハーディーによる注記である。その養子は新島公義で、新島得夫氏の尊父にあたる。

ただしハーディーのコメントは厳密でない。公義との養子縁組は七五三太の安全の報が届いたあとで、弟雙六の死期が迫ったときになされたのである。

212 東京、横浜方面では長老派とオランダ改革派が、長崎では監督教会やオランダ改革派が伝道を開始していた。

**Oramel Hinckley Gulick (1830—1923) は一八七一年に来日。大阪に住み、ついで神戸に移って『七一雑報』を創刊した。新潟、岡山、熊本でも伝道に従事した。一八九二年ハワイに移り、彼地の日本人のために働き、ハワイで永眠した。

***二十名が正しい。来日順に示すと次のようになる。D. C. Greene 夫妻 (1870), O. H. Gulick 夫妻 (1871), J. D. Davis 夫妻 (1871), J. C. Berry 夫妻 (1872), M. L. Gordon 夫妻 (1872), John L. Atkinson 夫妻 (1873), Eliza Talcott (1873), Julia E. Dudley (1873), G. M. Dexter 夫妻 (1873), H. H. Leavitt (1873), Mary E. Gouldy (1873), Wallace Taylor 夫妻 (1873)。この人たちは神戸または大阪に居住した。

***一八七二年九月、当時在日の十四人の宣教師の会合において新約聖書の日本語訳に着手することを決議し、三人の委員を選んだ。すなわちオランダ改革派の S. R. Brown、組合派の D. C. Greene、長老派の J. C. Hepburn である。これは超教派的な事業であり、これらの委員をそれぞれ高橋五郎、松山高吉、奥野昌綱が補佐した。彼らは土曜、日曜を除く毎日午前九時から正午まで、横浜のブラウン博士宅に集まって仕事をした。旧約聖書は一八七六年に英長老派の Hugh Waddell、英監督教会の John Piper、長老派の David Thompson、カナダ合同教会の George Cockran の四人を委員に選び、一八八七年に旧約聖書の翻訳を完成した。

****三月十日、アメリカの、オランダ改革派の宣教師 J・H・バラを牧師として生まれた無教派主義の教会で、日本基督横浜海岸教会といった。バラやブラウンのもとで教育を受けた人たちはしばしば「横浜バンド」と呼ばれる。

213 神戸は先述の摂津第一基督公会（神戸教会の前身）で、一八七四年四月創立。大阪は同年五月にゴードン宣教師を仮牧師として設立された梅本町公会（大阪教会の前身）。東京は一八七三年九月に築地に創立された東京基督公会で、のちに新栄町に移り、新栄町教会と改称した。

***二二三ページ末尾の注参照。

***新島によって福音の種子を播かれ、海老名によって育てられた安中の人々は一八七八年に新島を招いて洗礼を受け、三十名の会員でもって安中教会を組織した。その後安中教会員らの伝道によって一八八四年に甘楽教会が、また一八八六年には原市教会が誕生した。一八八四年に創立された超教派の高崎教会もこれに加えてよからう。この高崎教会は一八八八年に組合派に加わった。

214 外国伝道総主事はN・G・クラーク博士をさす。

***渡辺昇（一八三八—一九二三）をさす。旧大村藩士。坂本龍馬や木戸孝允、伊藤博文らと手を組んで維新の実現につくした人である。一八六八年新政府の諸郡取調掛として長崎裁判所に赴任し、浦上キリシタンを弾圧し、キリスト教徒を逮捕し、約四千十人を諸藩三十四家に分付することにした。大阪府知事になったのは一八七七年であり、一八七五年当時は知事でなくて権知事だった。なお著者はthe Governor of the city (p. 194) という不正確な表現を用いている。またクリスチャンの追放期間を六年間と記しているが、これも五年間（一八六八—七三）が正しい。

***磯野小右衛門（一八二五—一九〇三）という実業家で、長州萩の人。この寄付をあっせんしたのは木戸孝允だった。金額は一説には二万円だったという。のち大阪、京都で活躍し、大阪株式取引所頭取、大阪商業会議所頭取に就任した。京都織物、北浜銀行の創立にも関係した。後年同志社大学設立の発起人の一人として加わっている。なお新島はアーモストのシーリー教授あてに、その寄付金を七千ドルと報じている（一八七五年四月二十七日付、第6巻『英文書簡編』一六五ページ）。

215 ここでいう「ボードの集まり」は大阪で五月二十四日に開かれたアメリカン・ボード宣教師会議をさす。一八七五年の年会は五月二十六日から六月七日まで神戸で開かれている。

***京都は一八七二年以来、現在の京都御苑や岡崎公園の地等を会場にして博覧会を催していた。これは「いつのまにか」首府が東京に移り、徐々に衰退に向かいはじめた京都に活を入れるための催しであった。

216 この表現はむしろ極端のそしりを免れない。京都御所は人民の手に帰したわけではないからである。

***山本覚馬（一八二八—九二）は会津藩士で、一八六四年に藩主松平容保に従って京都に来了。維新後は体が不自由なため京都にとどまった。非常な見識の持主であったので、のちの京都府知事榎村正直の信頼が篤く、開明的な榎村に数多くのアイデアを提供した。「京都府顧問」といいならされるが、そのような辞令が出たわけではなかつ

たらしい。後述のように新島と結社して同志社英学校を設立した。本書二二五ページをみよ。妹八重は新島の妻となり、娘久栄は徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』のヒロインである。新島の没後、同志社の臨時社長をつとめた。

***漢訳のタイトルは『天道溯源』といい、原著は W.A.P. Martin のあらわした *Evidences of Christianity* である。マーティンについては二五五ページの注をみよ。

217 当時京都府知事は長谷信篤（一八一八—一九〇二）という尊王攘夷派の公家であったが、京都府政の実権は大参事の榎村正直（一八三四—一九六）が握っていた。この後新島が「府」当局と交渉するのは常にこの榎村が相手だった。榎村は山本覚馬や明石博高の協力をえて、東京遷都後さびれた京都の復興に大きな業績を残した。彼は京都府権知事に進み、一八七七年に長谷に代って知事になり、一八八一年までその職にあった。

***Jerome Dean Davis (1838—1910) は「ハー・ヨーク州の田舎に生まれ、Beloit College に学んだ。在学中に南北戦争が始まり、北軍の義勇兵として出陣し、シャイローの戦に連隊旗手として大功を立てた。陸軍中佐 Lieutenant colonel」に昇進したが、戦争終結後は大学に復帰し、のちシカゴ神学校に学んだ。牧師の任職を受けたのち、しばらくワイオミング州で開拓伝道に従事した。意を決してアメリカン・ボード宣教師となり、一八七一年に家族をつれて来日し、神戸と三田で伝道の成果をあげた。一八七五年新島襄の同志社英学校設立にさいして新島の計画に賛成し、同志社英学校開校当初からの教師だった。おもな担当科目は組織神学、キリスト教倫理学、キリスト教弁証学。祈りの人、情熱の人であった彼は、新島の重要な協力者、同労者として終始よく献身し、新島の死後も同志社の発展を助けた。著書『基督教教証論』（二八八五）、『基督教之基本』（二八九〇）、『神学之原理』（二八九一）はわが国プロテスタント神学の先駆的な労作であり、*Sketch of the Life of Reverend J. H. Nestina* (1880) はその後の新島伝のさがけとなった。帰米中に永眠したが、最後の言葉は「わが生涯がわが遺言」だった。

***五エーカー半は二二二五・六・九平方メートルにあたる。同志社の記録では五八〇五坪七合であり、これは一九一五・八平方メートルとなり、かなりのひらきがある。購入価格は五百円、当時のドルに換算して五百五十ドルであった。

***臨濟宗の大本山相国寺。

***当時、現在の京都御苑内にはまだ公家の邸宅が残っていた。新島はデイヴィスとその家族のために、空き家とな

つていた柳原、前光の邸を借りることに成功した。

****「同志社」という名称を提案したのは山本覚馬であったといわれる。

218 Jerome Dean Davis, *A Maker of New Japan: Rev. Joseph Hardy Neesima* (New York: Fleming H.

Revell, 1894), p. 57. ただし語順に若干の異同がある。

****寺町通丸太町上ル、松蔭町十八番地にあった華族高松保実の邸宅。一か月十四円という高い家賃であった。

****「金禄公債」は旧士族らの秩禄(家禄、賞典録)を整理するための公債証書で、禄高を米相場で金高に換算記載した。「長州」は前原一誠の萩の乱、「熊本」は神風連の乱をさす。秋月の乱をも含め、すべて一八七六年十月におこった。

****島津久光は厳密に言えば薩摩藩主ではない。彼は藩主島津斉彬の腹ちがいの弟で、久光の息子の忠義が藩主を継ぎ、久光はその後見人となった。そのため薩摩藩の最高の実力者だったことはまちがいない。ただしデイヴィスもハーディーも彼のことを島津三郎と呼んでいることが面白い。

****実際に「聖經」と記載されていた。

219 この人は大村達斎といい、のちに新島が同志社病院、京都看護婦学校を設立するときの協力者となった。

220 一八七五年八月から七八年にかけて滋賀県では「県権令」は籠手田安定だった。したがってこの人をさすものと思われる。彼は七八年に「県令」に昇格する。

****新島と山本八重の婚約を著者は「一八七五年夏」としているが、実際には十月十五日であったから、秋と訂正しておく。新島八重(一八四六—一九三三)は京都女紅場(京都府立第一高等女学校、現在の鴨沂高等学校の前身)の舎監をつとめていた。

****「クリスチャンになつてから」は奇異にひびく。この手紙が書かれた時期にはまだ彼女は洗礼を受けていなかったからである。

221 上京区第二十二区新島丸頭町四十番地、岩本元勇方。現在の鴨沂高校の東裏にあたる。

****二二ページ末尾の注参照。

****宣教医 Wallace Taylor (1835—1923) は一八七四年の元日に神戸に到着した。同志社在職は二年間にすぎなかつ

たが、それは二年を超えての在任許可がおりなかったためである。理由は、知事の命令に背いて患者に投薬を続けたためであったといわれる（本書三五ページ）。その後は大阪に移り、キリスト教精神にもとづく病院を設立して医療と伝道に当たった。一九一二年に引退して帰国。テイラー博士の専門は腹部外科という、当時の日本では珍しいものであった。

****Dwight Whiney Learned (1848—1943) はコネティカット州出身。イェール大学の卒業生で、若い時から秀才のはまれが高く、ギリシア語を専攻して二十五歳で Ph. D. を取得した。アメリカン・ボード宣教師として新島を助ける目的で一八七五年十一月二十六日に来日し、神戸で待機しつつ伝道していた。彼は同志社ではそのニーズに従って神学から経済学にいたるまで自分の学問を深化させ、五十二年間にわたって同志社教育に献身した。彼は同志社史の最初の半世紀間における最高の学者であったといえよう。新約聖書各巻についての註解は二十九冊に及び、教会史の分野でも学殖豊かであった。経済学や政治学史の分野で開拓的な役割をはたした。初期の学生たちと与えた学問上のインパクトは絶大であった。八十歳になって惜しまれつつ同志社から引退した。一九一九年から二〇年にかけて、同志社大学の初代学長をつとめている。

222 この会議は五月二十四日から三十日にかけて開かれた。従って、六月というのは正確でない。

**これは Jerome Dean Davis, *Sketch of the Life of Reverend J. H. Nesima* であって、新島の永眠した一八九〇年の十一月に丸善から出版された。ただしこの書のまがきの日付が一八九〇年二月であることは奇異に感じられる。これがデイヴィスの『新島襄の生涯』の初版であり、村田勤、松浦政泰による翻訳『新島襄先生伝』が一八九一年一月に警醒社から出た。デイヴィスはこれを訂正増補して一八九四年に Fleming H. Revell Company から *A Maker of New Japan: Rev. Joseph Hardy Nesima* を出した。これが北垣宗治訳『新島襄の生涯』（同志社校友会、一九七五）の小学館（一九七七）の底本である。

224 223 *A Maker of New Japan*, p. 68.

これは京都ステーションの宣教師たちがハーディー氏にあてたものだというが、その大部分はデイヴィスが書いたものであることはあきらかである。一八七五年から七六年にかけて、彼は新島にとって最も親密な同僚だったからである。

※このシアーズは新島が一八七二年のクリスマスをベルリンで共に祝った人である。なお、この時の家屋建設費として贈ったのは、一八七八年七月十日付のミス・ヒドンあての手紙（第6巻『英文書簡編』一八九ページ）によると英貨二百ポンド。礼拝堂用にも同額を贈った。合わせて一千米ドルとなる。

※「隣接の礼拝堂」というのはハーディーの誤解にもとづく記述である。西京第二公会ははじめ新島丸頭町の新島の飯寓で集会をもっていた。その後松蔭町の新邸に新島が移り、集会もそこで行なわれてきた。その後同志社チャペルの完成につれて第一、第二、第三公会の再編が行なわれ、第二公会員を中心とする同志社学生と教職員は同志社教会を組織し、同志社チャペルで礼拝を守るようになった。そして第三公会員を中心とする同志社関係者以外の人々が平安教会を組織した。なお現在の洛陽教会は新島邸の敷地内の南側に一八九三年に建てられたもので、京都東三木講義所が改称して一八九〇年に洛陽教会となった。

225 Edward T. Doane (1820-90) はアメリカン・ボードの宣教師でその夫人はデイヴィス夫人と姉妹だった。ミクロネシアの伝道から日本に移り、京都では竹屋町に住み、一八七六年十二月十日、彼の宅で西京第三公会がスタートした。初期の同志社英学校余科で旧約聖書を講じた。夫人が精神に異常をきたしたため、不幸にして早くも一八七七年に日本から引揚げた。

226 字義通りに取れば京都における三番目の教会であるが、京都の第一公会、第二公会、第三公会は一八七六年の十一月から十二月にかけて一週間ずつの間を置いて設立されるのであるから、この手紙が九月中に書かれたとして、事実に合わない。

※一般に「熊本バンド」と呼ばれる人々である。

※*Clery Lansing Jones (1838-1909) は熊本洋学校の教師として、熊本バンドの育ての親である。彼は熊本を去ったのち大阪、京都で教えたのであったが、デイヴィス宣教師の神学と正面から対立するような神学を信ずるようになった。晩年のジェインズは不幸であった。同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』（みすず書房、一九六五）をみよ。

安岡良亮か。

228 227 デイヴィスによれば、これは一八七六年三月四日付の手紙である。

原語は President of the Board of Trustees であり、訳せば「理事長」ということになるが、金森が「社員」ないし「社員会の議長」に選ばれたという事実はない。ただし彼は一八八八年九月五日に「社長代理補助」になった。

金森通倫（一八五九—一九四五）は同志社卒業後、組合教会の牧師として岡山に伝道した。一八八六年に同志社の教壇に立つこととなり、基督教証拠論、自然神学、新約講義等を担当し、学生に強烈な印象を与えた。同志社教会の牧師として一時に百五十名の学生に洗礼を授けたこともあった。新島の信頼も篤く、社長代理をさえまかされていた。新島の死後同志社を去り、東京の番町教会牧師となった。一九〇一年「日本現今ノ基督教並ニ将来ノ基督教」を発表し、正統信仰を批判して新神学を唱え、キリスト教界に大きな衝撃を与えた。その後しばらく教会を去り、自由党に入って板垣退助、星亨、松田正久らと交り、米穀取引所理事や内務省囑託を歴任。一九一四年妻の死を機に教会に復帰したが、救世軍、ホリネス教会に移るなど、特定教会には落着かなかった。保守的な単純な信仰に戻り、伝道にはげんだ。既出『熊本バンド研究』三二—二九ページをみよ。

※徳富猪一郎（一八六三—一九五七）は蘇峰と号し、明治、大正、昭和前期にまたがる最も有力な言論界の重鎮であった。『国民之友』は一八八七年二月十五日創刊、ただし季刊とあるのはまちがいで、はじめは月刊、ついで月二回、旬刊、週刊となり、一八九九年八月三七二号で廃刊となった。「有力な日刊紙」は『国民新聞』をさす。

※横井時雄（一八五七—一九二七）は一八九一年当時東京の本郷教会牧師であった。彼は横井小楠の息子で、一八九七年六月から九八年十二月まで、多事多難の時期に第三代同志社社長をつとめた。

※小崎弘道（一八五六—一九三八）は第二代同志社社長（一八九二—一九七）。ただし花岡山での「奉教趣意書」に署名していないので、熊本バンドの一員と見なすことを躊躇する人もある。

※海老名弾正（一八五六—一九三七）は一九二〇年から二八年まで第八代同志社総長をつとめ、東京大学その他からすぐれた学者たちを同志社に集めて、同志社大学の学問的水準を飛躍的に高めた。彼は熊本バンドでは最後の総長だった。

※森田久万人（一八五八—一九九）はこの書物の書かれた一八九一年当時はイェール大学に留学中だった。心理学、倫理学、哲学を専攻して一八九二年に Ph. D. を取得した。

*****下村孝太郎（一八六一—一九三七）はハリス理化学校の指導者であった。一九〇四年から二年間、同志社の第六代社長をつとめた。

230 新島民治は一八七七年三月四日に西京第二公会で受洗した。

231 英語訳聖書（二六一）にはこの文とびったり一致する箇所が見当たらない。しいて言えば、エペソ書5・20であらう。

232 Mt. Desert はメイン州の大西洋岸の小島の名で、Bar Harbor がこの島の東側にある。バー・ハーバーにはハーディー夫妻の夏の別荘があった。

233 原文に Minister of the Interior とあるので、これは「内務卿」となるが、新島の三月二十七日の日記（第5巻「日記・紀行編」ハーバー）にもとづき外務卿と訂正しておく。新島はこの日津田仙と同行して寺島宗則外務卿を私宅に訪ねたが面会できなかった。

***海老名弾正。

234 これが現在の日本基督教団安中教会のはじまりである。

***湯浅治郎（一八五〇—一九三三）をさす。群馬県から選ばれて帝国議会最初の議員になった人である。同志社の社員「理事」となり、京都に居を移して新島の遺した同志社の財政を支えた。湯浅八郎総長はその第八子である。

***同志社の女子部はデイヴィス宣教師の仮寓である、御苑内の柳原邸で、一八七六年十月二十四日に発足した。

「京都ホーム」と呼ばれていた。

***神戸女学院のことで、創立当時は「神戸ホーム」と呼ばれた。創立は一八七五年十月十二日。

***女子部の宣教師 Miss H. Frances Parmelee (1852—1933) と Miss Julia Wilson (1845—?) をさす。ミス・バー

ミリーは一八七七年十月に来日し、八〇年に「雇い入れ」となった。ミス・ウィルソンも同時に来日、七八年六月神戸に移った。

*****著者はここで再び the governor of the city という表現を用いている。

235 一八七八年当時の駐日アメリカ公使は John A. Bingham (1815—1900) で、その在任期間は一八七三—一八五五年であった。

※井上は一八七九年九月十日に寺島宗則に代わって外務卿になる。パーミリー宣教師に入洛の許可がおりたのは一八八〇年六月五日のことであった。ウィルソン宣教師は一八七九年か八〇年に帰米した。

※著者はここで「市当局」と書いている。

236 一八七八年一月二日、神戸、大阪、三田、兵庫、京都第一、第二、第三、浪華、多聞の九教会の代表が大阪土佐

堀、梅花女学校に集まり、日本基督伝道会社を結成し、新島襄、沢山保羅、今村謙吉が委員に選ばれた。

※洛西樽尾（とがのお）で休暇を取った。

***ハーディーのテキストでは the Wild River という滑稽なミススペリングになっている。

237 岡部長職（一八五四—一九二五）はやくから英米に学び、帰朝後官職につき、外務次官、全権公使等を歴任した。一九〇八年桂内閣の司法大臣をつとめた。アメリカン・ボードの法人名譽会員であった時期もある。

※綴りは次の新島の手紙の場合と同様、Kishinowada となっている。

239 福知山の綴りは Fukichigama となっている。この学生は山崎為徳であろう。湯浅与三『基督にある自由を求め』

『八三ページに、この夏、伝道会社によって派遣された人々のリストがある。なお笠井、佐野、茂『沢山保羅』（一九七七）の一二七ページに「七月に山崎為徳とともに同地を訪れた」とあるが、新島のこの手紙から推して、「ともに」ではなかったと考えられる。

※一八八〇年五月二十八日、梅花女学校で日本基督伝道会社の第三回年会が開かれた。この時宣教師 Leavitt と沢山保羅の二人は、伝道会社が外国からの補助金を受取ることなく、自給すべきことを主張して譲らなかった『基督にある自由を求めて』八九ページ）。

241 原文は When I fairly commenced my labor... であるが、新島の fairly の使い方の癖から推して as soon as の意味に取るのがよいと考える。本書解題の四六六—六七ページをみよ。

243 Miss Wilson と Miss Parmelee のうちは二三四ページでもふれている。

244 原文の a sharp discussion between Mr. Mori and the minister を文脈から察してこのように訳しておく。

the minister は卿ではあるが、外務卿とは限らない。なおゴードンの旅券申請は一八七八年十一月二日に提出、翌年一月七日付で外務省から不許可となり、再び交渉し、六月二十六日許可になった。従ってここに新島が「この夏

・・・・願い出た時」と書いているのはおかしい。なお森有礼は一八七八年十月二十七日から七十九年十一月六日まで外務大輔をつとめていたのであり、外務卿が寺島から井上に代わるのは七十九年九月十日であることに注目したい。

247 H. H. Leavitt もしくは沢山保羅をさすものと考えられる。

249 一八八〇年当時でアメリカン・ボードは日本国内で神戸、大阪、京都、岡山にステーション（派遣地）を持っていた。このうち一八八三年にしばらく新潟にステーションが置かれたが、その年だけで終り、一八八六年からは仙台が新しくステーションとなる。

250 **一八八〇年四月十三日にはいわゆる自責の鞭の事件が起きている。この出来事に著者はやや抽象的に三七五ページでふれている。

250 新島の姉みよは一生涯嫁ぐことなく、一八七九年十月二十三日に永眠した。

252 **明治教会の初代牧師は横井時雄であった。

252 この表現の背景にはマタイ伝 20・1—16 がある。

253 Herbert Spencer (1820—1903) は十九世紀の英国の哲学者で、あらゆる人間の知識を進化論の立場から総合することを企画し、社会学、経済学、心理学、教育論の分野で著作を次々に発表した。彼は教育の基盤は古典語に基づく知的訓練よりは自然科学であるべきだと考えた。John Stuart Mill (1806—1873) はベンタムの功利主義を出発点とした哲学者であるが、有名な『自叙伝』が立証するように、父親による極端なまでの英才教育は彼に情緒的な欠陥を与えた。Draper については不詳。スペンサーとミルは、カーライル、ニューマン、ラスキン、アーノルドらとともに、十九世紀英国を代表する最高の知性であったけれども、ニュー・イングランドのピューリタンの福音主義者の新島はそのうちの誰にも満足することができなかった。

254 後任の北垣国道（一八三五—一九一六）は一八八一年から九二年まで京都府知事をつとめた。新島の強力な後援者であり、娘を同志社女学校で学ばせた。但馬養父郡の出身で、農兵を組織して生野義塾をはかった人。京都府知事時代に田辺朝郎（既出の田辺太一の甥）を用いて琵琶湖疏水事業を完成させた。男爵。

**一八八一年五月十七日、京都四条北の芝居（北座）で講演会が開かれ、新島をはじめ、金森通倫、浮田和民、山崎為徳、ラーネッド、ゴードン、宮川経輝、森田久万人らが演説した。

***神仏判然令（一八六八年四月二十日）のことか。

255 一八七五年十一月に中村正直訓点『訓点天道溯源』が出た。原著は既出の W. A. P. Martin, *Evidences of Christianity* である。これの漢訳に返り点をつけて、日本人に読みやすくしたもので、その意味では確かに一種の「翻訳」だといえる。

著者の William Alexander Parsons Martin (1827—1916) はインディアナ州の長老派牧師の息子に生まれ、インディアナ大学を一八四六年に卒業した。一八四九年に牧師の任職を受け、一八五〇年に宣教師として清国に渡った。伝道と著作活動に専念し、その成果を『キリスト教の証拠』(『天道溯源』) にまとめて好評を博し、この書は清国でも日本でも版を重ねた。福音を説くだけでなく国際法や自然科学をも教えて、中国に西洋の学問をもたらした功学者の一人に数えられている。北京を中心として、死に至るまで伝道と教育につくした。DABをみよ。

256 この一節はすでに一八九九〇ページに引用された手紙の一部である。デイヴィス・北垣ではもう少し長く引用している(四五—四六ページ)。

*著者はここで Meiji University と書いているが、これはいわゆる明治専門学校の英訳である。誤解を避けるため、同志社大学とした。

***二一七ページでは八名となっている。

***一八八四年四月一日、京都商工会議所でその集会があった。

257 各大学のスベリングと創立年(代)は次の通りである。Paris (1253); Bologna (11th century); Oxford (13th century); Cambridge (13th century); Edinburgh (1563); Glasgow (1451); Prague (1348); Heidelberg (1386); Leipzig (1409); Tübingen (1477); Jena (1558). 年代の資料は *Random House Dictionary* をよめ。ハーディーはぶつしたわけかダブリン大学(一五九二)をぬかしている。

258 Pierre Abélard (1079—1142) フランスのスコラ哲学者、神学者。Roger Bacon (1214?—94?) イギリスの哲学者、科学者。Johann Kepler (1571—1630) ドイツの天文学者。Galileo Galilei (1564—1642) イタリアの物理学者、天文学者。Francis Bacon (1561—1626) イギリスの政治家、哲学者、随筆家。John Locke (1632—1704) イギリスの哲学者。Isaac Newton (1642—1727) イギリスの数学者、物理学者。John Milton (1608—74) イギリスの詩人。

Gottfried Wilhelm Leibniz (1646—1716) ドイツの数学者、哲学者。 Immanuel Kant (1724—1804) ドイツの哲学者。 Thomas Reid (1710—96) スコットランドの哲学者。 William Hamilton (1788—1856) スコットランドの哲学者。

*John Pym (1584—1643) イギリスの政治家。 John Hampden (1594—1643) イギリスの政治家。 William Pitt (1708—78) イギリスの政治家で「大ピット」と呼ばれる。その息子 William Pitt (1759—1806) も政治家で総理大臣を占めたことがあり、「小ピット」と呼ばれる。 Charles James Fox (1749—1806) イギリスの政治家、雄弁家。 Edmund Burke (1729—97) アイルランド出身のイギリスの政治家、雄弁家。 Samuel Johnson (1709—84) イギリスの辞書編集家、詩人、批評家。 John Wycliffe (c.1320—84) イギリスの神学者、宗教改革者、聖書翻訳家。 Martin Luther (1483—1546) ドイツの宗教改革者、聖書翻訳家。 Jean Calvin (1509—64) フランスの神学者で、イスにおける宗教改革指導者。 John Knox (c.1510—72) スコットランドの宗教改革者。

****スパーリントと創立年は次の通りである。 Harvard (1630); Yale (1701); Princeton (1746); Amherst (1821); Williams (1793); Dartmouth (1769); Oberlin (1833)。

259 のちに徳富猪一郎の提案により、明治専門学校という呼称はやめて、「同志社大学」が採用された。

261 この手紙は「青春時代」が会津若松で執筆されたことを傍証するのであるが、本書二二ページにある猷皇の辞の一八八五年八月二十九日という日付と調和しない。結局これは一八八五年夏に、第二次米国訪問のさいに、メイン州のバー・ハーバーで推敲して完成したと考えれば一応の解決がつく。英文日記もこの推測の正しさを裏付ける。

6 第二次欧米訪問

266 一人は板垣退助か。『原田助遺集』四六ページをみよ。

**John Cutting Berry (1847—1936) はメイン海岸の小村 Small Point Beach に生まれ、Bowdoin College と Jefferson Medical College (Philadelphia) に学んだ。しばらくの医学研修のち結婚し、アメリカン・ボードの宣教師として一八七二年に来日した。神戸（一八七二—七七）、岡山（一八七八—八四）で医療伝道に献身したのち京都に移り、一八八六年から九三年に至った。この間に新島を助け、同志社病院ならびに京都看病婦学校の設立と運営

に当たった。新島の永眠後同志社病院は徐々に経営難におちいり、同志社当局の方針とベリーの考え方は相容れなくなり、ベリーは失望のうちに日本を去った。

268 新島は神戸からホンコンまでP & Oラインの *Kliva* 号に乗船。ホンコンからロンボまでは *Thames* 号、ロンボからスエズまではカイゼル・ハインド号 (*Kaiser Heind*)、エジプトの *Alexandria* からイタリアの *Brindisi* までの船名は不明である。

269 H氏は二七一ページに出てくる Charles R. Hager 牧師。アメリカン・ボードのホンコン・ミッション (のち南シナ・ミッションと改称) の最初の宣教師で、はじめサン・フランシスコで中国からの移民の間で働いていた。ホンコンに一八八三年に赴き、八年間にわたって伝道に従事した。ヘイガーのやり方はサン・フランシスコからホンコンに戻ってきた中国人たちと連絡を取りつつ、彼らを通して地域への浸透をはかることだった。夜学校を開いて英語を教えた。

**アングリカンは *Church of England* の呼び名であり、「エピスコパル」ともいう。いわゆる聖公会はこの系統である。

270 ホンコン島内ヴィクトリア市の目抜き通りで、香港政府、銀行、外国公館、高級商店が並んでいる。

**John Chalmers (?-1899) は London Missionary Society の宣教師で、一八五二年からホンコンに駐在。中国語に堪能で、中国古典の英訳をしたほか *Dictionary of the Cantonese Dialect, Concise Kang-Hi Chinese Dictionary, The Structure of the Chinese Characters* を出版した学者であった。漢訳聖書改訂の仕事にもたずねられたことがあり (Norman Goodall, *A History of the London Missionary Society: 1895-1945* [London: Oxford University Press, 1964], p. 152)。

**三行あとに出てくる John Shaw Burdon (1826-1907) はスコットランド出身の Church Missionary Society 派遣の宣教師。ホンコンのヴィクトリアの主教となった。その主教座は一八八三年までは南シナと日本を含む広大なものであった。主教になるまではシャンハイやペキンで伝道し、新約聖書のペキン語訳の五人委員の一人でもあった。DNB (一九〇一年) をみよ。

****Robert Morrison (1782-1834) は London Missionary Society が中国に送った宣教師一号であった。中国語

に精通していたので東インド会社の通訳をつとめたり、一八一七年にはアーモスト卿の通訳としてベキン入りをしたりした。龐大な中国語辞典を完成し、聖書の漢訳事業においても功績があった。一八一七年にグラズゴー大学から D・D・の名譽学位を授与された。DNBをみよ。

272 マラヤは九つの藩(または県)から成っており、ジョホールはその最南端の藩。その世襲的君主を Maharaja (=great king) としる。

273 パーシー教 Parsee は紀元前六世紀にイランの Zoroaster がはじめた宗教で、拝火教とも呼ばれる。

***イギリス国教会 Church of England の系統の教会は英国の外では聖公会とか Episcopal Church と呼ばれ、教会の定めた祈禱書を用いる。新島は組合教会の伝統に育ったので、自発的な祈りに慣れていたのである。祈禱書を用いてそれを読み上げるのはローマ・カトリック教会と聖公会の礼拝形式の大きな特色の一つである。

***Arabi Pasha (1841?—1911) はエジプトの革命家で、はじめエジプト軍の兵士であったが、次第に国家主義の指導者として頭角をあらわしていき、国防次官にまで昇進した。一八八二年 Tel el-Khena で英軍と戦って敗れ、裁判の結果死刑を宣告されたが、罪一等を減じて終身刑となり、セイロン(現在のスリ・ランカ)に流された。一九〇一年に赦されてエジプトに帰った。

***Kandy はセイロン島のほぼ中心に位置する町で、十五世紀に首都となり、王宮や寺院がある。この寺院はブツダの歯をまつているので、「仏歯の寺院」とも呼ばれる。

275 Sokota 島はインド洋に浮ぶ島で、アフリカの Cape Guardafui から約百三十マイル東に位置する。

276 Brindisi はオトランド海峡に臨むイタリアの海港。長靴のかかとの部分に位置する。

277 St. Peter's Basilica はローマ市内の一部分を占めるヴァチカン市国の中にあるローマ・カトリック教会の総本山で、その隣にはローマ教皇の住居であるヴァチカン宮殿がある。ここにはルネサンス期のイタリアの大画家ラファエルの傑作がいくつもあるが、中でも壁画「アテネの学園」(プラトンとアリストテレスが議論しながら歩いている図)や「解放される聖ペテロ」などは傑作中の傑作である。

***S. Paolo Fuori le Mura (St. Paul's Outside the Walls) はコンスタンティン大帝により使徒パウロの墓の上に建てられた大聖堂で、ローマにおける七つの重要な大聖堂の一つである。

***イエズス会 Society of Jesus は十六世紀にイグナチウス・ロヨラによって創設されたローマ・カトリック教会

内の一宗派で、宣教にも教育にもきわめて熱心な宗派である。ロヨラの友人フランシスコ・ザヴィエルは東洋への伝道に乗り出し、インドに宣教し、日本にまでも渡来して布教に従事した。なお「ローマ大学の学長」は the rector of the Collegio Romano の訳語である。

278 ビッテリ宮はフィレンツェ最大の宮殿で、その建築は一四四〇年からはじまっている。フィレンツェがイタリア

王国の首都であった時には皇帝の住居になったこともある。美術の宝庫で、ラファエル、ティンツォ、ティントレット、ヴェロネーゼ、ルーベンス等の名作がある。ウフィッツィー宮は十六世紀にメジチ家のコシモ一世のために Vasari が建てたもので、これまた美術の宝庫である。国立図書館もこの中にある。

***Giralamo Savonarola (1452—98) はドミニコ派の聖職者で当時の教会内外の道徳的腐敗を痛烈に糾弾した。一時はフィレンツェの独裁者となってビュリタンの政治を布いたが、反対派に逮捕され、教皇からも破門され、拷問の末処刑された。

***Pasquale Villari (1827—1917) は *The History of Giralamo Savonarola and of His Time* の著者。新島が読んだのは Leonard Horner による一八六三年刊行の英訳本であったと思われる。

****Camillo Benso di Cavour (1810—61) はイタリアの統一を指導した政治家。

279 Emilio Teza (1831—1912) が。

**Torre Pellice はトリノの西南西四十五キロの町。さらに西へ十七キロ進むとフランスとの国境である。Torre はイタリア語で塔の意。Pellice を新島(ハーディー)は一貫して Pellico と綴っている。

ワルドー派はイタリアのピエモンテ州の溪谷に住んでいたクリスチャンの小集団の名称で、この Waldo という名は十二世紀におけるその宗教集団の指導者 Peter Valdes からくる。このグループは Waldensians, Waldenses, Vaudois などと呼ばれてきた。ワルドー派の人々はローマ・カトリック教会の慣行に反対し、原始キリスト教徒のような清純な生活に徹しようとした。彼らの後継者たちはいちじるしくプロテスタント的な信仰を保持し、そのためローマ教会から迫害された。最もきびしい迫害は一六五五年に起こり、ヨーロッパ中のプロテスタントから同情を買った。ミルトンの有名なソネット *On the Late Massacre in Piemont* はこのことを主題にしたものである。

その信者の一部は現在なおピエモンテ地方に残っている。トレ・ペリチェはいわばワルドー派の首都である。

「ま西」というより「西南西」という方が正確である。

デイヴィスによれば、これは七月二十四日の記録である。

原文では *our Training School* となっている。現実に合わせて神学校とした。

280 282 285 291

Como 湖はイタリア北部ロンバルディー地方にある風光明媚な湖。長さ四十八キロ。St. Gotthard 峠はスイス国内で言語的にはイタリア語圏からドイツ語圏へ入るところに位置している。新島の一八八四年八月十六日付夫人あての手紙に「サンゴタール」と記されているのはフランス的発音である。ちなみにイタリア語では S. Gotardo サンゴタルドー、ドイツ語では St. Gotthard ザンクト・ゴットハルトとなる。

292 **Alexander Ramsay Thompson (1822-95) のことか。オランダ改革派のトルコ派遣宣教師であったと思われる。

徒歩でサンゴタール峠越えをした時の新島の進路は南から北へ、ではなくて、北から南へ、であった。Göschenen, Andermatt, Airola は北から南へと並んでいる。つまりゲシェネンまではサンゴタール・トンネルを通じて、汽車で赴いたのであった。

293

Pastor Jurino とあるが、Turino が正しいかもしれない。八重夫人あての一八八四年八月十六日付の手紙には「トゥリノと申一牧師」とある。ミラノ滞在中に新島はこの牧師からたびたびご馳走になった。

294

ハーディーはこの遺書を二つの段落に分けないで続けて書いているが、ここでは特にデイヴィスに従って、一枚目と二枚目を区別して、二つのパラグラフに訳した。

**Theodor Christlieb (1833-89) のことだ。次のような著作がある。Leben und Lehre des Johannes Scotus Erigena (1860); Moderne Zweifel am christlichen Glauben für ernsthafte Suchende erzählt (1870); Modern Doubt and Christian Belief: A Series of Apologetic Lectures Addressed to Earnest Seekers after Truth (1874); Protestant Foreign Missions: Their Present State. A Universal Survey (1880?); Protestant Missions to the Heathen: A General Survey of their Recent Progress and Present State throughout the World (1882).

***このミッション・ハウスはドイツのプロテスタントが経営していたもので、「宣教師を西アフリカ、インド、中

国等に送っていた。多くの宣教師の家族がここに住んでいて、子どもたちの学校まで設けられていたが、ヘルマン・ヘッセの父ヨハネス・ヘッセはその学校の先生をしていて、新島を客として快く迎え、世話をした」(和田洋一『新島襄』(一九七三)二五八ページ)。ドイツ文学者の高橋健二氏は一九五三年にヘルマン・ヘッセを訪問したときのことを、次のように記している。「食事中、ヘッセの一族の話が出たので、私はかねての疑問をただしたいと思った。ヘッセの母の日記に、日本のニイシマがバーゼルの伝道館に訪ねて来たことがしるされている。それは同志社の創立者新島襄にちがいないと考え、それをたしかめると、やはりそうだった。ヘッセは、『自分は七つぐらいだったが、よくおぼえている。新島が自分の会った最初の日本人だ。自分の両親は新島をかわいがっていた。あ、七十年後の今日、自分たちが新島の話をしているのを両親が知ったら』と言ひ涙ぐまんばかりだった」(『ヘッセ―思い出の詩人画家』(トモ選書、一九七七)。

****ミス・ヒドンあての十月二日付の手紙(第6巻『英文書簡編』二三六ページ)によると、到着は前週の日曜日、すなわち九月二十八日となる。

****マサチューセッツ州の州会議事堂はビーコン・ヒルの上にあるため目立つ。その西隣といってよいところにハーディー家(ジョイ通り四)があった。本書四八ページをみよ。

295 Mark Hopkins (1802-87) はウィリアムズ大学の総長を一八三六年から七二年までつとめた人で、アーモストのシーリー総長と並ぶ、高等教育界の指導者だった。彼の教え子だったジェイムズ・A・ガーフィールド(第二十代アメリカ大統領)が「理想的な大学とは丸太棒の一方の端にマーク・ホプキンスをのせ、他方の端に学生をのせたものである」と言ったと伝えられるほどの人物であった。教授としては道德哲学を担当し、自己教育、学生と教授との間の親密さ、知育と徳育を併行することの重要性を強調し、リベラル・アーツ教育の重要な指針とした。アメリカン・ボードの会長を一八五七年から八七年にわたってつとめ、新島をいろいろと支持した。DABをみよ。

****新島によるこの手紙とアピールの草稿は第7巻『英文日記・紀行編』に収録される。ここにかかげる訳文はA・S・ハーディーのテキストに基づくものである。

298 『東京毎週新報』は小崎弘道の編集により一八八三年八月以来発行されてきた。これは一八八五年一月から『基督教新聞』となり、一九〇〇年一月に『東京毎週新誌』、さらに一九〇三年一月からは『基督教世界』と改題して

今日に至っている『近代日本総合年表』(岩波書店、一九七九)九七ページ)。

299 土倉庄三郎(一八四〇—一九一七)をさす。『詳年譜』一七三ページ、一八八二年一月十二日の項に「この夜土倉

庄三郎同志社大学法学科設置に対し五千円の寄付を約す」とある。

301 第三回日本基督教信徒大親睦会は、一八八三年五月八日から十二日にかけて東京で開催された。

*一八八四年三月、同志社校内にリバイバルがおこった。『同志社百年史』通史編一三四—三七七ページをみよ。

303 カルヴァンの盟友であるスコットランドの宗教改革者ジョン・ノックスによってはじめられたプロテスタント教会で、その本拠はスコットランドである。英語で Presbyterian Church といわれるもので、新島の時代には「一

致教会」の呼称がふつうであり、その指導者は植村正久だった。明治学院大学はその系統の大学である。

*〔一〕内はハーディーによる注記。

304 〔一〕内はハーディーによる注記。本書一八七—一八九ページをみよ。

306 大阪に設置されていた官立の学校は、次々に制度と名前が変り、やがて京都に移って第三高等学校となってい

く。すなわち一八八〇年十二月に大阪専門学校から大阪中学校となつて、唯一の官立模範中学校と見なされていた

が、一八八五年七月に、この大阪中学校は大学分校に改組され、将来大学にする見込みで、予備科、専門科等

を置いた。新島はこの動向を察知してこのように書いたのである。なお大学分校は一八八六年四月に第三高等中

学校となった。場所は大阪城西辺であった。第三高等学校は新制度の京都大学教養部の前身である。

309 「あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなつたら、何によつてその味が取りもとされようか」(マ

タイ伝5・13)が背景になっている。

*一八八五年当時、同志社英学校には正科(普通科)と余科(神学科)があった。名称が年々変化していくので複雑

だが、原語は the preparatory course in English であっても、いわゆる同志社予備学校をさすわけではない。予

備学校の設置は一八八七年である。

311 J・C・ペリー博士をさす。

314 一八八四年八月二十五日、四国・中国地方に暴風雨が降り、徳島県下の被害が特にいちじるしかった。九月十五

日には東海道に暴風雨が降り、静岡県・東京府などに被害が出た(『近代日本総合年表』)。

317 デイヴィスによると Milford, Del. から一八八五年四月二十日付で書いた手紙である(デイヴィス『北垣、一六六ページ』)。

**同志社女学校のいわゆる明治十八年事件で対立した宣教師側と日本人教師側をさすものと思われる。

318 Joseph LeConte (1823—1901) をちよつものと思うが、DABのルコントの項に *Geology* という書名は見当たらない。「新島旧邸文庫所蔵目録」には *A Compendium of Geology* (1884) がみえる。Simon Newcomb (1835—1909) は一世を風靡した天文学者であつて、その理論はアインシュタインの理論を裏付けるものである。新島が読んだのは彼の *Popular Astronomy* (1878) であらう。ただしこの書は「旧邸文庫所蔵目録」にない。

319 下村孝太郎の可能性が濃厚である。「詳年譜」一八八五年十月十五日の項に下村がボストンの宿に新島を訪問したとある。ただし下村はこの年イェールに入らずに Worcester Polytechnic Institute に入学している。

**Richard Salter Stearns (1821—1900) はアーモスト大学の一八三九年卒業生、またアンドローヴァー神学校の一八四五年卒業生で、ともに新島の先輩にあたる。ニュー・ヨーク州ブルックリンの Church of the Pilgrims の創立以来の牧師で、説教家としては、同じくアーモスト大学出身の Henry Ward Beecher と名声を二分するほどであつた。博識で歴史に精通し、図書館についても知識があり、「ヨーロッパの図書館」という講演をしたこともある。ホプキンス総長のあとをうけてアメリカン・ボードの会長を一八八七年から十年間つとめ、American Historical Association の会長を一八九五—九六年につとめ、さらにアーモスト大学の理事でもあつた。アーモストに入る前にはモンソン高校で学び、同高校で一年間教えたこともある。DABをみよ。

William Mackergo Taylor (1829—95) はスコットランドの生まれでグラスゴー大学の出身、エディンバラ大学で神学教育を受け、リヴァプールの近郊で牧会に入った。一八七一年渡米し、ニュー・ヨークの Broadway Tabernacle の牧師になり、雄弁な説教で名声を博した。イェール大学で Lyman Beecher 講座を二期担当した。新島のミス・ヒドンあて一八八五年十月二十九日付の手紙(第6巻『英文書簡編』二八六ページ)をみると、このテイラー博士をニュー・ヨークのメイリング・アドレスにしていることがわかる。ちなみにその住所は 5 West 35th Street, New York City であつた。DABをみよ。

Adolphus Julius Frederick Behrends (1839—1900) はオランダ生まれで米国に移住し、バプティスト派の牧師

になったが、バプティスト派と相容れず、組合派に移り、Central Congregational Church of Brooklyn, N. Y. を収めた。ストーズ、ビーチャーらと並ぶ重要な牧師であり、のちにハートフォード神学校やイエール大学の教壇に立ったこともある。DABをみよ。

***Spencer Fullerton Baird (1833—87) は十九世紀アメリカの第一級の動物学者で、早くも二十三歳で母校 Dickinson College の物理学の教授になった。のち首都ワシントンのスミスソニアン・インスティテューションに迎えられ、一八七八年にその Secretary となった。新島がベアードに会ったのはこの頃である。当時のベアードは鳥類学者として第一人者だった。のち政府の委託をうけて魚類学者としてはなばなしい活躍をし、マサチューセッツ州ウッツホルの魚類研究所を世界的なものに築き上げた。DABをみよ。

***Daniel Coit Gilman (1831—1908) はイエール大学の出身で、母校の自然地理学と政治地理学の教授をつとめた。一八七五年にジョンズ・ホプキンス大学の初代総長となり、二十六年間その職に在ったうちに、ジョンズ・ホプキンスをドイツのすぐれた大学に倣って研究機関として最高水準にまで高め、教育機関としても一流のものにした。DABをみよ。なお新島はこのときジョンズ・ホプキンズに留学中の新渡戸稲造(札幌農学校二期生)に会っている。新渡戸から、内村鑑三が深い精神的な悩みの中にあることを聞いて、内村にも会って激励した。このうち新島は内村をアーモスト大学に紹介した。

320 Dorchester はボストン市内南部の一区画でドーチェスター湾に臨む。Walter Baker (1792—1862) は三代続いたこの町の実業家で、製粉、製紙、チョコレート製造で富を築いてきた。ことにチョコレートは Baker's Chocolate として今日でも有名である。その未亡人はワシントン通りとパーク通りの交わるあたりのなだらかな丘の上、ドーチェスター湾を遠望できるあたりに立っていた一七五〇年以後の邸宅に住んでいた。現在ではこの邸宅は存在しない。

***山本覚馬は一八八五年五月十七日、京都第二公会でグリーン宣教師から洗礼を受けた。

***マウント・デザートはバー・ハーバーをさす。本書二三二ページとその注をみよ。

***「対岸の人々」とはバー・ハーバーに避暑に来ていたハーディー夫妻をさす。

321 これはデイヴィスによると一八八五年七月二十八日付のハーディー夫妻あての手紙である(デイヴィス—北垣、一

7 晩年と永眠

325 東海道線の開通以前のことであり、新島は横浜から神戸まで船に乗り、神戸から京都まで汽車に乗った。

**同志社チャペルと書籍館（現在の有終館）をさす。

326 同志社アルムニ会は現在の同志社校友会の前身である。同志社では、同志社英学校、普通学校、中学校、高等学校、香里中学および高等学校、大学等の卒業生をもって同志社校友会を構成している。別に同志社同窓会があるが、これは女子部（女学校、女子専門学校、女子中学校、女子高等学校、女子大学）の卒業生でもって構成する。

327 アーモスト大学の理事会は一八八九年七月二日に、新島に Doctor of Laws (LL. D.) の授与を決定した。

**新島夫妻は八月三日から二十日まで保養のため垂水（現在の神戸市垂水区）ですごした。

328 新島は一八八七年七月七日から九月十四日まで、札幌の福士成豊の持家に滞在していた。

**アルフィアス・ハーディーは一八八七年八月七日（日曜）午後三時半に、ボストンの自宅で永眠した。七十一歳十か月であった。

331 一八八八年二月二十五日（土曜）に祇園の中村楼で原六郎と、土倉庄三郎の娘富子は、北垣国道知事夫妻の媒酌で結婚式をあげ、新島がその司式をした。原の名を取った寮は同志社に存在しない。原がそれを辞退したのであらう。

332 三三二ページ末尾の注参照。

**一八八七年六月十七日に開校した東華学校をさす。ただし著者はこの学校に training school という表現を用いている。

**北垣知事の娘としては一八七二年生まれの静（のちの田辺朝郎夫人）と一八八〇年生まれの順（のちの北村勘三夫人）がいた。どちらも同志社女学校は卒業しなかったようである。

***一八八八年四月二十二日。著者はここで七月と誤記している。この日の出席者には井上馨をはじめ、青木周蔵、陸奥宗光、野村靖、渋沢栄一、原六郎、益田孝、沖守固がいた。

333 「同志社大学設立の旨意」のオリジナルは第1巻『教育編』一三〇—四二ページに掲載されている。以下の訳文は英訳を通しての重訳である。

334 ハーディーは「アメリカとカナダ」と記しているが、田中文化理事官の一行がカナダに行ったという記録はない。「同志社大学設立の旨意」には「北米中著名の大中小学校を巡視し」(第1巻『教育編』一三〇ページ)とある。

335 ハーディーはここで十一月八日と誤記している。

336 ハーディーの表現は「私立大学の設立について」(On the Establishment of a Private University)であるが、実際には「明治専門学校設立旨趣」(第1巻『教育編』九五—一〇二ページ)である。

338 ハーディーは「to」と誤記している。

***五万ドルはすでに見たように、アメリカン・ボード運営委員会の決定であった。また一万五千ドルはコネティカット州ニュー・ロンドンのJ・N・ハリスからの寄付である。ただし一八九九年十二月八日付のハリス書簡には寄付金額を十万ドルとする旨明記されている。これによってできたのがハリス理化学校と、建物としてのハリス理化学館である。

***「理事」と訳したが、当時は「社員」と称していた。

339 「同志社大学設立の旨意」では看病婦学校の卒業生数は四名であるが、ハーディーは四三としており、卒業生合計も三〇九としている。「設立の旨意」記載の数字に従って訂正した。

***旧制の高等学校の前身を高等中学校と称した。たとえば京都大学教養部の前身は第三高等学校、その前身は第三高等中学校であった。

340 当時の唯一の官立の大学は東京帝国大学だった。

343 「」内はハーディーによる注記。

344 新島はドイツ人医師ベルツ博士のすすめにより、一八八八年七月二十七日から九月十五日まで、群馬県榛名山中腹の温泉町伊香保に保養のため滞在した。千木良三郎の山荘を借りて住んだ。

***三一九ページをみよ。

***これはアンドーヴァー論争 Andover Controversy と呼ばれる事件である。これについて教文館の『キリスト教

大事典』(一九六三)は次のように説明している。「このきっかけとなった問題は、福音の光を受けないで世を去る異教徒に対しては、未来において救の光にあずかる機会があるかどうかという点であった。アンドーヴァーの教授 N・スミス (Newman Smyth) は、肯定的な立場を弁護する論文を発表し(一八八四—九三)、これを、のち『進歩的正統主義』(Progressive Orthodoxy)と題して公刊した。たまたま同神学校の卒業生が、アメリカン・ボードの宣教師として志願したところ、これが拒否されたことによって問題は重大化した。この論争の背後には、教授たちの自由主義的神学の傾向に対する理事者側の反対があったことが認められる。教授たちの主張の中には、神の内性、進歩の教理、聖書批評の権利、人間教育の可能性等の主張が含まれていた。論争はついに、E・スミス (Egbert C. Smyth) に対する提訴に至ったが、教授側の主張が認められ、会衆派神学校における思想的自由は増大した。」ハーディーのアメリカン・ボード運営委員長辞任(一八八六)、A・C・トンブソン博士の運営委員辞任(一八九三)、Edmund K. Alden 牧師の総主事辞任(一八九三)、N・G・クラーク博士の総主事辞任(一八九四)はすべて、この論争と関連がある。

***新島民治(一八〇七—八七)は一月三十日に永眠した。

347 Erwin von Baelz (1849—1913) はドイツの医師で一八七六年来日し、東京大学医学部等で生理学、病理学を講じた。草津、伊香保の温泉を研究してその効能を発表した。新島が伊香保に出掛けたゆえんである。一九〇六年に帰国した。

***Victor Hugo (1802—85) はフランスの詩人、小説家、劇作家。西洋文学としては若い頃に『ロビンソン・クルソー』しか読んでいない新島としては、『モーの *Les Misérables* (1862) と *Quatre-vingt-treize* (1873) は彼の接した数少ない西洋文学作品といふべきである。彼は英訳本で読んだものと思われるが、『旧邸文庫所蔵目録』にはのっていない。フランクリン博士伝とは恐らく Benjamin Franklin の *Autobiography* (自叙伝) をさすのであろうが、これも『所蔵目録』に見当たらない。

349 ハーディーは *Malsugata* と綴っている。t と i とを見誤ったものである。

***一八八九年十月十八日に大隈は閣議からの帰途、玄洋社員来島恒喜に爆弾を投げられて、左足切断の重傷を負った。

***『詳年譜』によれば十一月二十八日に胃腸の痛みをおぼえ、十二月九日に及んだ。東京に帰ったのは十二月十三日。

***新島は十月十二日に神戸から乗船して東京に向かった。医師はその健康を気づかい、三週間以内という条件つきで旅行を認めた。これが新島の最後の京都出発となったのである。

351 大磯では百足屋旅館に滞在した。

***一八九〇年一月四日付の夫人あての手紙に「・・・私ハ元より覚悟之上の事男子の戦場に出ると同様なりと存候」とある。

352 一八九〇年に入ってから新島は、一月六日には鹿児島島の私立女学校に赴任する松尾音次郎あて、一月七日には新潟の広津友信あて、一月十一日には新潟県新発田に伝道中の原忠美あて、一月十七日には新潟県長岡に伝道中の時岡恵吉あて、また再び原忠美あてに、それぞれ手紙を書いている。その何通かは相当な長文である。

***金森通倫と下村孝太郎。金森はこのとき普通学校、神学校、予備学校の校長だった。

355 新島の永眠後、同志社の社員会は山本覚馬を臨時総長に選んだ。金森は三月三十一日に校長を辞任したが、これには新島の次のような遺言が関係しているものと考えられる。「金森通倫〔氏〕を以て余の後任と〔な〕す差支ナシ氏は事務ニ幹練し才鋒当ル可カラサルノ勢アリ然れども其の教育家として人を順育し之を誘掖するの徳ニ欠け或は小刀細工ニ陥ルの弊ナシトセス 是れ余の窃かに遺憾とする所ナリ」(『同志社百年史』資料篇七〇九ページ)。

***ハーディーは時刻を午後四時二十分としている。ここでは新島の治療にあたってきた山龍堂病院院長櫻村清徳博士の「死亡証」記載の時刻に従っておく。

356 東海道線新橋・神戸間が全通したのは一八八九年七月一日のことであった。当時は一日一往復で、片道に約二十時間を要した。新島の遺体はこうして、大磯から京都まで東海道線で帰ってきたのである。

***京都始審裁判長だった富永冬樹(？一八八九)をさすものと思われる。彼は岩倉遣外使節団の一員として米欧をまわった一人。そのときは「田辺〔太一〕外務少丞厄介」ということで、「兵部省理事官随行心得申付、御用中十一等旅御手当被下様」(大久保利謙『岩倉使節の研究』二七ページ)とある。田辺はすでに見たように新島の友人である。富永はのち大審院部長となったが、病気のため一八九四年退官し、東京株式取引所理事になった。妹のあは

益田孝夫人。

357 この時までの首相は伊藤博文、黒田清隆、山県有朋の三人で、一八九〇年一月現在で三人とも存命中だった。従って、誰をさすのかわからない。

*「大阪仏教信徒中」。

358 山口県にいた井上から百足屋にいた徳富あての一月二十一日付の電文は「キヅカイツツゼヒゼンクワイイノルト

ヲニンエシラセタノム」。

*大内青密（せいもん）（一八四五—一九一八）は仙台の出身で曹洞宗に入った。漢学に秀いで、真宗本願寺派法主大谷光尊の侍講となった。『駁尼去来問答』でキリスト教を論難して名声があがった。啓蒙運動、教育と社会福祉の方面でも活躍し、一九一四年には東洋大学長となった。

359 佐々城豊寿（一八五二—一九〇二）は初期の基督教婦人矯風会の幹部。夫、佐々城本支との間に一男三女をもうけ、長女佐々城信子は国木田独歩と恋愛結婚した。信子は五か月で独歩の許を去った。その後の信子は有島武郎の『或る女』の葉子のモデルである。豊寿は信子の離婚事件以来、矯風会筆頭幹部を辞し、失意のうちに病死した。

360 京橋区南鍛冶町四番地、茂林館においてであった。

362 潮田千勢子（一八四四—一九〇三）はクリスチャンの社会事業家で、基督教婦人矯風会の創設者の一人。矢島樺子のあとをついでその第二代会頭になった一九〇三年に永眠した。

363 慶応義塾の創設者福沢諭吉（一八三四—一九〇二）は一八六〇年に幕府の派遣した軍鑑奉行木村喜毅の従僕として咸臨丸で渡米した。『西洋事情』は一八六七年のはじめに出た。

*福沢が遣欧使節に随行してヨーロッパを訪問したのは一八六二年のことであったので、そのように訂正した。ハーディーは一八六六年としている。

365 『国民之友』七二号に掲げられた「一月二十三日午後二時二十分」と題する社説。徳富に新島伝執筆の意図が早くからあり、そのために資料を集めていたようだが、新島伝はクリスチャンたる弟子が書くべきだと考えるようになり、収集した資料は安中教会牧師の柏木義円（一八六〇—一九三八）にひきわたしたといわれる。柏木も新島伝を完成することなく永眠した。

**Alphonse-Marie-Louis de Prat de Lamartine (1790—1869) はフランスの詩人で、彼の *Méditations Poétiques* (1820) はフランス文学のロマン主義運動に大きな影響を与えた。雄弁家としても著名で、一時は外務大臣をつとめた。

366 厚生館は京橋区木挽町二丁目にあり、もと明治会堂と称した木造西洋風の大建築であった。この追悼会では竹越与三郎、小崎弘道、加藤弘之、平岩愼保、美山貫一の五名が演説した。ハーディーはこれの中で加藤と竹越の演説を採用している。池本吉治編『新島先生就眠始末』(一八九〇)には竹越、小崎、加藤の演説が入っている。

*加藤弘之(一八三六—一九一六)は法学者、政治学者。但馬国(兵庫県)出石の出身で、江戸に出て学問にはげみ、蘭学からドイツ学に転じ、幕臣として開成所教授となった。明治政府でも活躍し、初代の東京大学総理になった。

一八九〇—九三年には帝国大学総長をつとめた。明治の代表的官僚学者で、勉強家であった。はじめ人民の自由平等を説き、のち社会ダーウィニズムに転じ、強権主義の立場から国家論を展開した。文学博士、法学博士、男爵。

368 山崎闇斎(一八一八—八二二)の有名な逸話を井上哲次郎の文章から引用しておく。「闇斎が嘗て群弟子に問うて、『今日西土より孔子を大将とし、孟子を副将として皇国に攻め来らば、孔孟の道を学ぶ者は何とすべきであるか』と、斯う云ったところが、群弟子皆な黙然として答ふことが出来なかった。其の時闇斎は斯う云った。『さう云ふ場合に吾々は何の遲疑する所かあらん、堅甲を被り、利兵を執つて是れと戦ひ、孔子を虜にし、孟子を戮して國の為に恩を報いん、是れ即ち孔孟の道なり』と斯う云った。孔孟が、何の理由も無く日本に攻めて来るやうなことは、断じて無いことであるけれども、群弟子の迷夢を醒ますために斯かることを云ったのは當時に於いては如何にも卓見であったと云へる』(平凡社『日本人名大事典』)。

369 竹越与三郎(一八六八—一九五〇)は新聞記者、歴史家。埼玉県に生まれ、慶応義塾で学んだ。国民新聞、時事新報の記者として活躍し、また政治家としては政友会に属し、代議士に当選すること五回。のち貴族院議員、枢密院顧問官を歴任した。著書に『二千五百年史』『日本経済史』などがある。竹越はこの演説以外に『基督教新聞』第三四〇号に『新島襄先生長逝す』という一文を寄せており、それはデイヴィス著、山本美越乃訳『補正新島襄先生伝』(一九〇三)の三二二—二七ページに転載されている。

370 Thomas Carlyle (1795—1881) はスコットランド出身の評論家、歴史家。彼の『衣裳哲学』(Sartor Resartus,

1836)『英雄崇拜論』(On Hero, Hero-worship, and the Heroic in History, 1841)などは十九世紀の道徳思想に莫大な影響を与え、わが国でも明治時代に、日本の青年でこれらの著作に鼓舞された者の数は非常に多い。なお、この竹越の演説はすぐれてカーライルのものである。

371 「男兒一戦して敗るゝも已む勿れ再戦して已む勿れ三戦して已む勿れ刀折れ矢尽きて已む勿れ骨摧^{くづ}血尽きて已むべきのみ真理の爲めに擲^{なげ}つにあらざんば吾人の生命もまた無用ならずや」(山本訳『新島襄先生伝』三三七—三八ページ)。

372 死の前日である一月二十二日の新島の言葉として「天を怨みず人を咎めず」が記録されている。

**劉玄徳(一六二—二三三)は蜀漢の建設者劉備のこと。彼の下には諸葛亮をはじめ多くの英雄がいて臣事した。武將趙雲(？—二九)もその一人であった。

375 一八八〇年四月十三日、第二寮の講堂で毎朝行なわれる朝礼での出来事であった。新島の自責の鞭と呼ばれる事件である。

376 新島の墓は左京区の若王子山^{にやぐさうじ}の同志社墓地にある。鞍馬石に、勝海舟の筆で「新島襄之墓」とほられている。

*英国の桂冠詩人 Alfred Tennyson (1809-92) の名作「Locksley Hall」の中の「一三八行目に出てくるフレーズ。一三七—三八行のカブレットの大意は次の通り。「だが私はもろもろの時代を通して一つの目的がだんだんと大きくなりながら流れていることを疑わない。そして人々の思想は太陽の運行とともに広がっていくのだ」。

377 一八九〇年当時の社員は松山高吉、横井時雄、中村栄助、宮川経輝、湯浅治郎、大沢善助、徳富猪一郎、金森通倫の八名。ハーディーはこれに臨時総長の山本覚馬と、校長の小崎弘道を加えたようである。三名の「准社員」である外国人は J. D. Davis, D. W. Learned, J. H. Pettie であり、名誉社員は J. N. Harris である。

THE HISTORY OF THE

ARTS AND MANUFACTURES, LIFE AND CUSTOMS OF THE PEOPLE, MANNERS, DISCIPLINE, AND POLICE OF THE KINGDOM OF GREAT BRITAIN, AND THE CITY OF LONDON.

By JOHN HENRY COLEMAN, Esq. of the Middle Temple, Barrister at Law. In three Volumes. The second Edition, corrected and enlarged. London, Printed by J. DODD, in Pall-mall; and by J. H. COLEMAN, in Strand, 1794.

THE HISTORY OF THE

ARTS AND MANUFACTURES, LIFE AND CUSTOMS OF THE PEOPLE, MANNERS, DISCIPLINE, AND POLICE OF THE KINGDOM OF GREAT BRITAIN, AND THE CITY OF LONDON. By JOHN HENRY COLEMAN, Esq. of the Middle Temple, Barrister at Law. In three Volumes. The second Edition, corrected and enlarged. London, Printed by J. DODD, in Pall-mall; and by J. H. COLEMAN, in Strand, 1794.

解題

此書は、大英の歴史、生活、習慣、風俗、紀律、及び政治の歴史を、三巻に分けて記述したものである。著者は、ミッドル・テンプルのバリエーターである。第二版は、訂正及び増補されたものである。ロンドン、パルマール街のJ. DODD、及びストランドのJ. H. COLEMAN、1794年に印刷された。

この訳書の底本として用いたのは

Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1891)

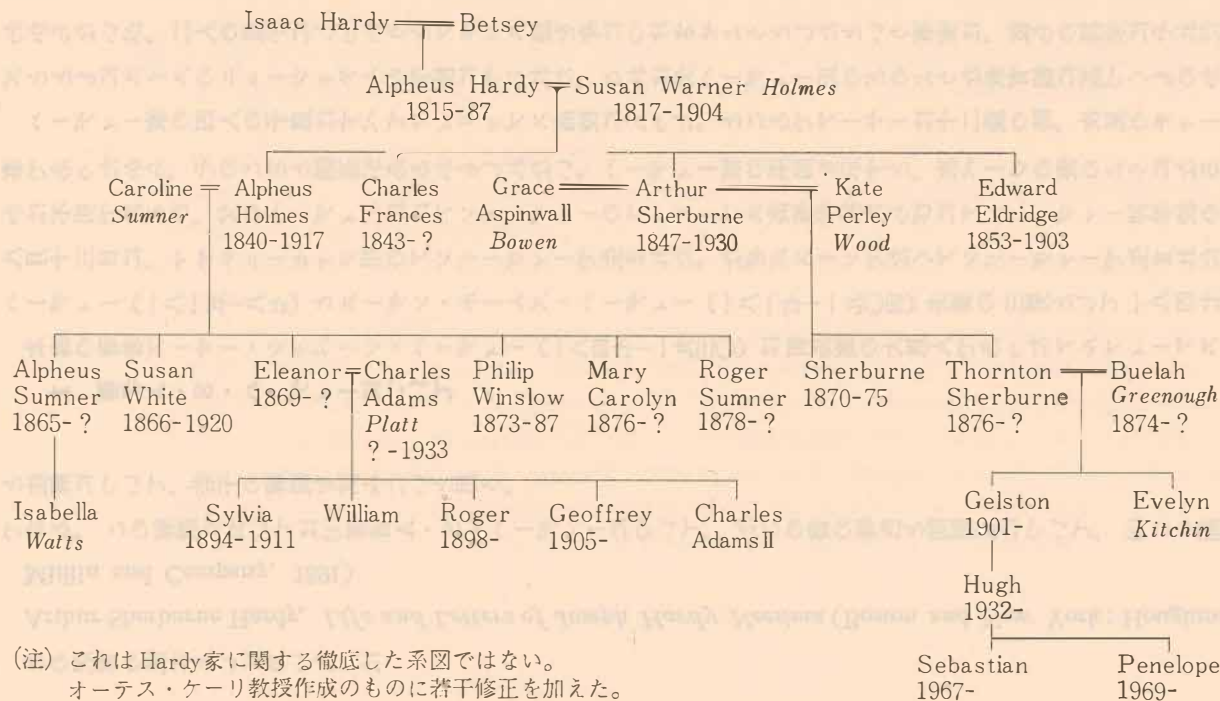
である。この解題においては(1)著者A・S・ハーディーについて、(2)この書の特色と問題点について、(3)この翻訳と注解について、若干の解説を試みたいと思う。

1 著者A・S・ハーディーについて

本書の著者アーサー・シャバーン・ハーディー(一八四七—一九三〇)は新島襄の大恩人であったアルフィアス・ハーディー(一八二五—一八七)とスーザン・ホームズ・ハーディー(一八一七—一九〇四)夫妻の三男として一八四七年八月十三日に、マサチューセッツ州のアンドーヴァーで生まれた。なぜボストンでなくアンドーヴァーで生まれたのかは不明であるが、父のハーディー氏はアンドーヴァーのフィリップス高等学校ならびにアンドーヴァー神学校の理事であったから、そのことと関連があるかもしれない。ハーディー家の系図を示すと、次ページの表のようになる。

ハーディー家の四人の子息はすべてフィリップス高校に入った。ところでアーサーは十二歳の時、次兄のチャールズとともにスイスのニューシャテルの学校にやられた。これは父ハーディー氏のどのような教育観に基づくものかはわからないが、二人の息子にしっかりとフランス語を身につけさせようとしたという事実は、彼らの将来にそれだけ期待するところが大きかったといふべきであらう。事実アーサーはのちにアメリカ政府の外交官としての役割をはたすようになったのだし、またダートマス大学の教授になる直前に短期間フランスに留学したことからも、このス

The Hardys



(注) これは Hardy 家に関する徹底した系図ではない。
オーテス・ケーリ教授作成のものに若干修正を加えた。

イスでの三年間は非常に重要だったというべきであろう。この三年間は道徳的にしっかりした家庭に下宿させられ、英語で話すことを一切禁じられ、フランス語一本槍で押し通したという。この結果、彼はきれいで正確なフランス語を自由に話せるようになった。

南北戦争たけなわであった一八六三年、十六歳のとき、フィリップス高校の生徒だったアーサーは年をいつわって軍隊に入ろうとしたが、若すぎるということで入隊を拒否された。二人の兄は戦争に出ていた。家では、将来ウェスト・ポイント（米国陸軍士官学校）に入ることを許すから、ということとで学校に戻り、フィリップス高校を一八六四年に卒業した。その秋アーモスト大学に入ったが、一八六五年の春には中途退学し、七月一日にあこがれのウェスト・ポイントに入学した。従って新島襄がワイルド・ロウヴァー号に乗ってボストンにたどりついた一八六五年七月二十日にはアーサーはウェスト・ポイントの新入生だったわけである。この年ウェスト・ポイントに入学したのは七十一名で、四年後の一八六九年にはその半数あまりの三十九人が卒業した。アーサーはむろん卒業組の一人だった。

陸軍少尉に任官したアーサーは、つそく母校ウェスト・ポイントの Artillery Tactics (砲戦術) の教官として残り、五か月間その任務をはたした。その後フロリダ州 Dry Tortugas 群島のフォート・ジェファソンで一年間勤務したのち、願いによって陸軍から退職した。結局ウェスト・ポイント四年間、少尉として一年半、合計五年半の軍隊生活だった。恐らく少年時代の情熱やみがたくして陸軍に入ったものの、軍隊生活に身を縛られることに堪えられなくなったというのが実状であろう。

その後彼は二年間（一八七二―七三）、アイオワ州グリネルの Iowa College (Grinnell College) で土木工学と応用数学の教授をつとめた。その後一年間フランスに留学ののち、ニュー・ハンプシャー州の名門大学 Dartmouth College の土木工学の教授に就任し、四年間その任務をはたした。のちに数学の教授に転じた。彼はよい数学教師で

あり、彼の著した教科書 *Elements of Quaternions* (1881), *Imaginary Quantities* (1881)——これはフランスの数学書から翻訳、*New Methods in Topographical Surveying* (1883), *Elements of Analytic Geometry* (1889), *Elements of Calculus* (1890) はそれぞれ好評を博した。ダートマス大学教授時代に彼は創作に意欲を燃やすようになり、一八七八年に *Francesca of Rimini* という四十六頁から成る詩を刊行した。彼の名声を高めたのは *But Yet a Woman* (1883) をはじめとする一連の小説だった。すなわち *The Wind of Destiny* (1886) はその時代のすばらしい描写を含むものであったし、*Passé Rose* (1889) は中世を背景とするすぐれた歴史小説だった。このようにして、創作活動に脂の乗り切っていた時期に本書、すなわち *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* (1891) を出版し、伝記作品においてもすぐれた腕前を示した。ハーディーはこのため一八九〇年秋に、日本の京都まで取材の旅を試みたのであった。

当時ダートマス大学の総長は Samuel Colcord Bartlett 博士 (1817-93) で、この人はダートマスはえぬきの牧師、教育家であり、シカゴ神学校の創立にあずかり、十九年間にわたりシカゴ神学校教授をつとめた人であった。のちに新島の同労者となり、新島の伝記を書いた Jerome Dean Davis が、南北戦争後復員し、もとのピロイト大学に復帰すべきか、それとも直接シカゴ神学校に進むべきか迷い、バートレット教授に相談の手紙を書いたところ、ぜひ先ずピロイトに帰り、大学教育を完了した上で神学校にきなさいと忠告されたのであった。デイヴィスはその忠告を守り、それがいかに正しい忠告であったかをさとり、終生バートレット教授への感謝の念をもち続けたという。バートレットはシカゴ神学校でのデイヴィスの師であった。バートレットはアンドーヴァー神学校の卒業生であり、E・A・パーク教授を通してニュー・イングランドの保守的な神学を身につけた人でもあった。

一八六九年秋にアメリカン・ボードの第六十年次大会がピッツバーグで開かれたとき、ボードの S・B・トリー

ト総主事は日本伝道開始の歴史的な提案をした。その案の審議は、七名の有識者から成る委員会に付託された。その委員会の委員長をつとめ、提案の可決を総会に勧告したのはバートレット教授だったのである。そればかりか、バートレットの子息で同名の Samuel Colcord Bartlett (1886-1937) はのちほどアメリカン・ボードの宣教師として一八八七年同志社に着任し、三十二年間にわたって日本での伝道と教育につくした。うち十五年間を同志社教育に献身したのであった。

このダートマスバートレット総長に対して教授陣の中から反乱がおこり、その反乱組の指導者と目されたのがアーサー・シャバーン・ハーディー教授であったことは歴史の皮肉といわざるをえない。事の起こりは人事に関するもので、大学によくありがちなボタンを辿った。すなわちギリシア語の教授が欠員になった時、後任をバートレット総長が推薦したのであったが、それは教授会にはからなできめた人事であったため、その高圧的な態度に数名の教授が反発した。これがきっかけとなって、教授会は総長派対反総長派に割れていった。悪いことに校友会がこれにからんで、特に有力なニュー・ヨークの校友たちがバートレット総長追い出しをはかるに至った。そこで大学の危機を救うために、卒業生の中の有力な判事たちや弁護士たちが厳正中立の立場で仲裁に乗出し、一種の模擬裁判を行ない、その報告書を理事会に提出した。結論は大まかにいえば総長に特別な落度はなかったこと、ただし総長はもう少し教授たちの意見をきき入れ、温和な思いやりをもって事に当たるべきである、といったものだった。騒ぎはおさまり、任命をうけていたギリシア語の教授は就任を辞退した。しかしこうしてできたところは簡単には修復できないものであった。ダートマスにとって感謝すべきことは、こうした危機を経験したにもかかわらず、大学は財政難におちいることなく、着々と教育・研究の施設を拡充してきたことである。一八九二年に七十五歳のバートレット総長が老齢の故に退陣を表明し、次期総長選考が始まったとき、学生たちは断然ハーディー教授を総長候補として推したのであ

った。しかしバートレット総長はこれを断固として拒否するよう選考委員会に申し入れたといわれる。

ハーディーは学内抗争にあけくれた大学にあいそをつかしたのであろうか、一八九三年に大学をやめ、William Dean Howells の後を襲って *Cosmopolitan Magazine* の編集者になった。その仕事を一八九五年まで続けた。ダートマス大学をやめるとき、ボストンの隣市であるケンブリッジのマサチューセッツ工科大学(MIT)からフランス語の教授としての招聘があったが、彼はこれをことわった。彼としてはむしろ母校のウェスト・ポイントでフランス語を教えたかったのであるが、その招聘はついに来なかった。

ハーディーは一八七二年にアイオワ・カレッジからM・A・を、一八七三年にダートマス大学からM・A・を、また同じ年にアーモスト大学からPh・D・の学位を授与された。

一八九七年にハーディーはマッキンリー大統領によってペルシア駐在公使に任命されてテヘランに派遣された。テヘランに二年間駐在したのち、次の二年間(一八九九—一九〇一)はギリシア・ルーミア・セルヴィアの公使であった。さらにスイス(一九〇一—〇三)、スペイン(一九〇三—〇五)でもって外交官生活に終止符を打った。引退後はコネティカット州のウッドストックに住み、その地域の文化的な諸活動に参加し、また著述にはげんだ。こうして *His Daughter First* (1903); *Aurélien* (1912); *Diane and Her Friends* (1914); *Helen* (1916); *No. 13, Rue du Bon Diable* (1917) を次々に出版したが、ダートマス教授時代の作品ほどには読者をひきつけることができなかった。時代の趣向はすでに移りかわっていたのである。彼は一九二三年に回想録 *Things Remembered* を出した。最後に、ギリシアに住む一少女との往復書簡集 *A May and November Correspondence* (1928) と約二十四頁の本を出して出版活動を終えた。

八年間にわたる外交官時代には次のような秘話があった。一九〇二年十二月十一日に國務長官ジョン・ヘイはハー

ディーあてに手紙を書き、アメリカ政府の國務次官補 Assistant Secretary of State になる気はないか、ただしスペイン公使の地位にとどまりたいのであればそれでもよい、しかし早急に返事をほしい、と伝えた。翌日ハーディーはヘイ長官に返事を書き、「もしこれを命令するといわれるのであれば、私は引き受けます。しかし私の選択にまかす、といわれるのであれば、私はむしろ現職にとどまりたいのです」と述べた。

その後セオドー・ローズヴェルト大統領からスペイン公使を交替させたい、という意向が伝わってきたので、ハーディーは一九〇五年五月に公使を辞任し、帰国のちホワイト・ハウスに帰任の挨拶に行った。その時ローズヴェルトは持前の率直さでこう言ったという。「わたしはあなたに、あなたが拒否なさったポストを提供しようと思いました。あなたはウェスト・ポイントの卒業生なのだから、従順に受けて下さるものと思っていたところ、拒否なさった。一つのポストを命じたのに、それとはちがったポストを選ぶような人には、わたしとしてはもう用がないと思ったのですよ」。これはハーディーにとってはあまりにも意外な話だった。

一九〇七年一月に前國務長官のヘイがなくなり、ハーディーがスペインからヘイ長官あてに送った問題の手紙をハーディーは手に入れた。そこで、彼はその手紙にそえて、あのときの自分の反応はこの通りであった、大統領の誤解はこれで氷解するものと期待する、と書き送った。大統領は、あの時自分が受けた印象は誤解に基づいたものであったことは明白です、という返事を送った。このエピソードはハーディーの率直さ、高潔さ、そして丁寧さを物語るものである。

ハーディーは最初の妻 Kate との間に息子が二人あった。長男は夭折し、次男の子孫が今日にいたっていることは系図の示す通りである。グレイス夫人と再婚したのは一八九八年三月アテネにおいてであった。当時彼は Director of the American School of Classical Studies をもつていた。グレイスは外交官夫人としてうってつけであった。

A・S・ハーディーの小伝は *Dictionary of American Biography* に見出される。またウェスト・ポイントから S. E. Tillman による小伝（一九三〇）が出ている。

2 本書の特色と問題点

本書の特色は何といっても、「脱国の理由」と「青春時代」という新島の重要な自叙伝的ドキュメントのみならず、新島の英文の手紙を数多く収録し、新島をして新島自身を語らせる、という方法を採用していることである。その大部分の手紙は新島がアルフィアス・ハーディー夫妻あてに書いたものであるが、北海道の福士成豊あての手紙とか、スプリングフィールドにいた岡部長職あての手紙が収録されていることは驚きである。いったいハーディーはどのようにしてこれを入手したのであったろうか。

ジェローム・ディーン・デイヴィスは新島の死後ただちに新島伝の執筆に取掛り、新島永眠の年一八九〇年のうちに *A Sketch of the Life of Rev. Joseph Hardy Neesima* を丸善から出版した。そしてこの書がハーディーによって本書に利用されていることは明らかである。たとえば同志社英学校開校のときの新島の祈りのこと（本書二一七―一八ページ）、伏見の医師大村達斎と府の役人との問答（本書二一九―二〇ページ）とか、熊本のカインズからデイヴィスあての手紙（本書二二八―二九ページ）などがその証拠である。しかしデイヴィスが一八九四年に最初の新島伝の改訂増補版を *A Maker of New Japan: Rev. Joseph Hardy Neesima, LL.D., President of Doshisha University, Kyoto* と題して米国の Fleming H. Revell Company から上梓した時、逆にハーディーによる『生涯と手紙』からいくつかの資料をもらってきている。それは「脱国の理由」からの引用とか、ハーディー夫妻あての手紙の一部、さらにはその第七章に掲げられた追悼文の全部である。そういうわけでハーディーとデイヴィ

スは相互補完的な関係にある。しかし特にハーディーが重要であるのは、新島のフィリップス高校、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校時代の精神的発展段階を手紙から跡づけること、また田中不二麿文部理事官の案内役兼通訳としてのヨーロッパの旅の道中が克明にうかがえることである。デイヴィスによる伝記はこれらの点が弱いといわざるをえない。新島の同志社創立と草創期の苦心の描写についてはデイヴィスがそのかけがえのない証人ではあるけれども。

本書の資料としての価値の重要さはいくら強調してもしすぎることはない。しかしながら、本書にもまた本書なりの限界、さらに言えば、欠陥があることも否定しえない事実である。この限界は主として A・S・ハーディーに日本語ができなかったこと、また日本文化に関する知識が欠けていたことに起因する。しかしこの点でハーディーを責めることはできない。当時は日米の接触がはじまって日も浅く、日本人とアメリカ人のうち誰一人として、日米の両方に等しく通じることはできなかったからである。ハーディーを責めるのではなく、ハーディーの限界を補うことを訳者としては心がけ、そのために、必要以上と思われるほどの詳しい注解をつけた次第である。

日本に関する知識の不足からハーディーがおかしたミスの例を二つあげてみよう。第一の例は原書の七七ページ（本書八七ページ）で、新島はフリント夫人に宛てた手紙の中で弟雙六のことを次のように述べている。

He is studying Chinese in a high school. He feels quite ignorant and humble. He says he is like a *flag* which dwells in a small well and sees the heavens in little space. [Italics added]

日本人であれば「井の中の蛙大海を知らず」という諺を知っている筈であるから、ここは *flag*（旗）ではなくて *frog*（蛙）である。

(カエル)でなくてはならない。しかしハーディーがそのように読んだことには、新島の方にも責任があったかもしれない。日本人として御多分にもれず、エルとアールをまちがえて、彼はカエルを *flap* と綴ったかもしれないからである。

第二の例は次のようなものである。新島は一八七四年十一月に米国船コロラド号で十年ぶりに帰国するのであるが、船が北緯三〇度六分、東経一五八度二五分を通過するところに、ハーディー夫人にあてて手紙を書いている(本書一九三一九ページ)。その中で新島は十年ぶりに対面する父のことを想像しつつ、自分をルカ伝の放蕩息子に擬して次のように記している。

He may not kill a calf for me, but he will certainly welcome, embrace, and kiss me. (p.179, *Italics added*. 父は私のために小牛をほふることはしないでしょうが、必ず私を歓迎し、抱きしめ、接吻してくれることでしょう。——本書一九六ページ)

私にはこの *kiss* という動詞を新島が使用したとはどうしても考えられないのである。日本人の父親が、成人である息子にキスすることが本当にあるであろうか。これは明治七年の話なのである。これはハーディーが日本人の習慣を知らないで手を加えた部分であろうと推測しうる箇所である。

人名と地名に関するミスは、すべて固有名詞にかかわるものであり、大目に見てよからう。本書三三八ページの後藤伯は原書では *Count Ito* (p.311) となっている。新島が後藤象二郎のみならず伊藤博文とも旧知の間柄であっただけに、これは危険なミスであったといえる。福知山(本書二二九ページ)を *Fukichigama* (原書二二二ページ)と綴っ

ているのはご愛嬌である。若い日の新島は快風丸に乗組んで初航海し、備中（岡山県）玉島まで行ったのであるが、ハーディーは原書の四六ページで玉島を「Takashima」と綴っている。おまけに原書の目次ではジェインズが James になっているし、第二次欧米旅行のとき立寄っていないジャンハイが、ホンコンとコロンボの間に入っている。

玉島航海のついでに言えば、その箇所ではハーディーは快風丸のことを「Jenny」と書いている。実はそれは米国から渡来したスクーナーだったのであり、ジャンハイやホンコンの港にうかんでいるジャンクと同類のものと速断したことは編集者としてはいかにもまずい。すなわち快風丸は徳川幕府が一八六二年に諸藩に外国船の購入を許可して早々に、幕府の老中主座の地位にあった備中松山藩主板倉勝静が米国から輸入したスクーナーだった。スクーナーはふつう二本マストの軽快な、姿のよい帆船であって、歴史的にはニュー・イングランドのマサチューセッツ州において「発明」され、スクーナーと「命名」されたものである。「脱国の理由」でも「青春時代」でも新島はスクーナーという単語を正しく使っている。それをジャンクと書いたあたり、ハーディーはその軽卒さを責められねばなるまい。

ハーディーは本書を執筆するにあたり、激変する日本史の中に新島の生涯を投影してみるという、当然の意欲をもっていた。そのために、彼なりに日本史を相当勉強したあとがある。日本史を神武天皇から説きおこすあたりに無理からぬものを感じさせるのだが、日本が封建制を打破して開国し、新政府のリベラルな政治家たちの下でどんどん近代化の道を歩んだ有様を、比較的的確に把握しているように思う。しかし時として小さな勇み足のあることも否定できない。たとえば明治維新後の日本社会の激変を描写するにあたり、

機関車が日本の谷間の静けさを破るようになってから相当の年月がたつてもなお、キリシタン邪宗門に対する禁

札が大通りに立てられたままであった。(本書二〇六ページ)

とあるが、日本最初の鉄道である新橋・横浜間の開業が一八七二年十月、そして切支丹禁制の高札の除去が翌一八七三年二月であったことを思えば、機関車が日本の田舎の谷間の静寂を破るようになって長らくのち云々というハーディーの表現は、ドラマ的な効果をねらったにしても、歴史の事実と反するといわなくてはなるまい。しかし私としては、そこまでハーディーを責めることは酷であると考えている。

これまで書いてきたのはハーディーに、日本語や日本文化に関する知識が不足していたためにおこったあやまちの諸例だった。次に純然たるミス、出版を急いだために不注意から起こったと考えられるたぐいのミスを指摘してみたい。

先ず、ヨーロッパの地名に見られるミスである。これはそれまでにスイスとフランスで四年間すごしたところのあるハーディーとしては簡単に調べがついた筈であるから、弁解の余地がないであろう。原書一六二ページにあるドイツの地名 Elsinggen は Usingen (本書一八〇ページ) が正しいし、原書二五八ページその他に現れるイタリアの地名 Torre Pellico は Torre Pellice (本書二八〇ページその他) が正しい。

次にハーディーが新島の単語を不注意からうつつし損なった例を二つ挙げてみよう。原書三四ページ〇行目に *our* という単語がある。これはそのままでも意味が通じるけれども、文脈からすると *one* でなくてはならない箇所である。新島は「青春時代」の中で、快風丸に乗って江戸から函館にむかう途中の出来事を次のように記している。

At the entrance of our harbor we might have experienced a sad shipwreck, being helplessly carried

by the strong tide against a reef, if we had not received kindly help from the shore to tow us out of danger. (*Italics added*)

「われわれの」というのであれば、どこか特定の港を指す筈である。港の名は与えられていない。だからここでははつきりと「或る港の入口で」といいたいのである。故に one と読むのが正しい。

編集者として不注意のそしりを招きかねないのは、次のような不正確な引用の場合である。新島が最も愛した聖句がヨハネ福音書の三章一六節であったことはよく知られている。それに続く一七節であるが、福士卯之吉あての一八六六年二月二十三日付の手紙を引用するにあたり、原書五四ページにおける

For God sent not his son into the world to condemn the world, but that the world through him might believe. (*Italics added*)

であるが、最後の単語は欽定訳聖書では be saved と二語になっている。新島が故意に聖書をまちがって引用したとは考えられない。ハーディーは当然新約聖書に当たって厳密を期すべきだったのではあるまいか。

次に、日付のまちがいや混乱は、伝記の場合、きわめて遺憾といわねばならない。顕著な例は新島の一八七四年の帰国のときの横浜上陸を十二月六日としている（原書一八四ページ）ことである。これはすぐあとの一八八ページに出てくる新島の手紙に「横浜にはひと晩と半日だけ滞在し、『十一月』二十七日には東京に行きました」（本書二〇八ページ）とあることからして、矛盾は一目瞭然である。いまひとつの例は新島と山本八重の婚約の日付であるが、これは

一八七五年十月十五日のことだった（『詳年譜』一一九ページ）。これをハーディー夫妻に報告した、日付の与えられてない手紙（原書二〇二ページ）の中で新島は「彼女は・・・クリスチャンになってからは時々生徒たちにむかってキリストの真理について語りました」（本書二二〇ページ）と述べているが、実は山本八重の受洗は一八七六年一月二日のことで、この手紙の通りだとすると新島と八重が婚約したころ、八重がすでに洗礼を受けていたことになり、事実には反する（おまけに原書二〇二ページではハーディーは新島と八重の婚約を一八七五年夏としており、ここにも二か月あまりのギャップが見られる）。少なくとも、私としてはこの場合、ハーディーによる新島の英語の修正の行きすぎといったものを感じないわけにはいかないのである。

編集者としてのハーディーの最大の不手際の一つは、原書の第一ページに函館のフレデリック・ウィルキーをのせたことである。現在では函館市立博物館の千代肇氏や、日本英学史学会の手塚竜麿氏によってウィルキーが何者であったかということや、アレグザンダー・ポーターとは全く別人であったことが明らかにされている（ともに『新島研究』六三号所載、千代「新島襄日本脱出の背景——箱館と福士成豊について」、手塚「箱館の外商フレデリック・ジョン・ウィルキー」による）。それにしても編者ハーディーが何故ウィルキーのことを本書の冒頭に持ち出し、その結果後世の新島伝執筆者に多大の迷惑をかけるに至ったか、という点が究明されなくてはならなくなる。

そういえば原書の二三ページで、板倉勝明が安中藩に招いた最初の蘭学の師について、[Dr. Sugita]と角ガッコ(Brackets)つきで名前を挿入したが、新島の最初の蘭学の師の確定を百年以上にわたって遅らせる原因になった。それにしても杉田という名をどのようにして知ったのか？ これまたハーディーの不手際にまつわる興味深い点である。

本書は現存する新島の英文書簡二九九通のうちの一二〇通を収録しているが、その一二〇通の原資料はオーテス・

ケリー教授の三十年以上にわたる探索にもかかわらず、依然としてその行方がわからない。もしそれが発見されるならば、編集者としてのハーディーがどの程度新島の英語を修正したかがわかるのである。修正が行なわれたことは疑いない事実であつて、このことは本全集第六巻『英文書簡編』の中の、*Life and Letters* から採られたものと、それ以外の手紙を比較してみれば一目瞭然である。いまここで、ハーディーの修正のやり方に光をあてるとすると、新島の残した第二次欧米旅行の時のノートの中にある「ワルドー派の地域」で書き記した断想(トレ・ペリチェ断想)が適当な材料を提供してくれる。

ここには二つの断想を引用する。中央線の左が新島のノートからの転写、右がハーディーの修正したテキストである。これの訳文は本書二八一—八二ページ、八八ページにある。

Neesima

Silence. Silence is one of virtue. There is much safty in silence. Wise men never talk much. As our mouth and tongue was given to be used for good purposs, use them for good purposs. Vain and senless talking often indure our reputation and causes to loss our manhood. I often noticed uneasyness and chafflike element in some vain talketitive men. There is some thing noble and serene in silence. Silence ought to be distinguished from concealment, because a talketive sinner may

Hardy

Silence. Silence is one of the virtues. There is much safety in silence. Wise men never talk much. As the tongue was given us to use for good purposes, use it for such. Vain and senseless talking often injures our reputation and causes us to lose our manhood. I often noticed uneasiness and a chaff-like element in vain and talkative men. There is something noble and serene in silence. It does not imply concealment, for the wicked often conceal their deeds with words.

conceal his deeds. *Silence is a manly forbearance.* Man of Silence is a blessing to a family or to a society. Silence ought by no means combined with bitter countenance but with cheerfulness. Vain talking often disturbs affairs in a family or in society but silence heals it. We could easily weigh a person of vain talk, but could not easily measure the depth of the mind of a wisely silent man. But do not keep by all means if we can thereby do much good to others or witness for the truth. Oh! How large portion of our talks we spend for vain things of the world, and how little for the truth. When a word goes out from our mouth, it is like a spilled water on a parched soil—there is no possibility of taking it back again. What is said, *is said*. It became a fact to our life for which we must give account in future. But above all let us not keep evil thought, for the evil thought is the main spring of the evil and vain talking.

Silence is a manly forbearance. A man of silence is a blessing to a family and to society. It ought by no means to be accompanied by a bitter countenance, but rather with a cheerful one. Vain talking disturbs, but silence soothes and heals. We can easily weigh a man of vain talk, but cannot easily measure the depths of mind of a wisely silent man. But do not keep silence if by speaking we can do good or bear witness for the truth. O, how large a portion of our talk we spend upon the vain things of the world, and how little for the truth! When a word goes out from our mouth it is like water spilled on a parched soil; there is no possibility of taking it back again. What is said, is said. It becomes a fact of our lives for which we must in the future give an account. But above all let us not harbor evil thoughts, for evil thoughts are the mainspring of evil and vain talking. (pp. 259—60)

Don't be a jack of all trades

By passing through some country towns I noticed that there were ever so many things spread and shown in shops but when I closely examined each article I found that each stock is rather scanty. It is well for us to be widely informed with many subjects but do not imitate those country shops. Many articles but scanty supply in each. We ought to be well posted at least in ONE subject of those Professional studies. It will be rich treature to us. Success in our life will chiefly hang upon it. Let it be our wapon of the offensive or defensive in the battle field of truth. Though our talent may be small yet let it be solid and weighty. Be single minded for single purposs. We shall sooner or later reach our mark. Never shoot our arrows into air. Aim at an object surely and then let it go, if we miss it repeat the process again and again until we can satisfy ourselves. I never knew a single case of a tenlented, puffed up yet unsettled minded chaps' having accomplished any thing

Don't be a Jack-at-all-trades.

In passing through some country towns I notice there are ever so many things shown in the shops, but when I closely examine each article I find the stock of each kind is rather scanty. It is well for us to be widely informed on many subjects, but do not imitate those country shops, —many articles, but a scanty supply of each. We ought to be well posted in at least one subject or professional study. It will be a rich treat to us. Success in our life will chiefly hang upon it. Let this be our defensive and offensive weapon on the battle-field of truth. Though our talent be small, let it be solid and weighty. Be single-minded for a single purpose. We shall sooner or later reach our mark. Never shoot one arrow into the air; aim at an object surely, and then let it go. If we miss, then repeat the process again and again until we can satisfy ourselves. I never knew of a single case of a talented, puffed up, yet unsettled man accom-

noteworthy.

— pishing anything noteworthy. (pp. 264—65)

ハーディーの修正の仕方は、大学における英作文の教師のそれを思わせる。それは英語国民である読者に新島の意図を正しく伝えるための最小限の修正であったといえよう。新島の意図を曲げようとする気は少しもない。上記の二例で新島の一八八四年当時の英語表現の実力は相当なものであったことがわかるが、ハーディーはそれに多少の磨きをかけている。たとえば新島の *let us not keep evil thought* はハーディーにより *let us not harbor evil thoughts* と修正されている。この *harbor* はちょっと日本人ばなれした、文学的な表現である。この種の例は時々見受けるが、多くはない。さすがに新島のスペリングのまちがいはすべて訂正されている。新島は *purpose* を一貫して *purposs* と書いている。

しかしハーディーは新島の英語を完璧なものにしようと意図したわけではなかった。誤解されてはならないことだが、実はいくらまちがいの残っている英語の方がチャーミングなのである。ハーディーはそれを心得ていた。だから訳者としては、はたと当惑する箇所に時折ぶつかった。必ずしもむずかしい英語というわけではない。新島がどんなつもりでそんな単語やフレーズを使っているのかを、考えてみなくてはならないのである。実例をあげよう。

次に掲げる三つの文はすべて *Life and Letters* から採ったものだが、その中のイタリック体で示した *fairly* という副詞に注目して頂きたい。

- (1) When I *fairly* commenced my labor there numbers of telegrams came informing me... (p. 223)
- (2) When we had *fairly* started our school we began to preach the gospel in a most quiet possible way.

(p. 224)

(3) The Lord's army must not be hampered there while the battle is fairly commencing. (p. 291)

この fairly はふつう「うまく」「上手に」「幸先よく」といった意味で、三例ともそのような意味に取ることは可能である。しかし、この三例とも動詞部は commence または start で、「始める」という意味である。ここで、特に(1)と(2)においてこの fairly を scarcely … (when) の意味にとるとどうであろうか。「…するとすぐ」ととると、文意がすっきりしてくるだけでなく、むしろそのつもりで新島がこの副詞を用いたのであったらしいことがわかってくる。これは fairly の用法としてはむしろまちがいであるが、ハーディーはこの副詞を敢えて修正せずに残した、と私は見るのである。これは目立つ例であるが、仔細に見ていくと、類例はもっとみつかるであろう。

3 この翻訳と注解について

本書は A. S. Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* の翻訳としてはじめての完訳である。とはいえ、原著は部分的にはかなり訳されていたのである。殊に「脱国の理由」と「青春時代」とはデイヴィス著、山本美越乃訳補『補正新島襄先生伝』（一九〇三）に文語で訳出されている。また「青春時代」は同志社女子大学の児玉実英教授が「私の若き日々」と題して口語訳を試み、筑摩書房の明治文学全集46『新島襄、植村正久、清澤満之、網島梁川集』の中におさめられている。本書における訳文はこれら先達の訳を時々参照させて頂いたが、徹底的に比較検討することはなかった。

新島襄著、鏈田研一編『わが人生』（全国書房、一九四六）の中にも *Life and Letters* からの翻訳が随所に見られ

る。この本は一九四六年当時としてはよく資料に当たっており、親切な注が沢山ついており、有益な本である。ただ新島の候文の手紙が、英文からの翻訳である口語体の手紙に混じって出てくるので、これが同一人物の文章かと戸惑うことがある。

デイヴィス著、北垣宗治訳『新島襄の生涯』（同志社校友会、一九七五、のち小学館、一九七七）と本書では重複する部分が相当ある。私としては重複部分には特別に慎重を期し、前訳を利用できるところは利用した。本書の第七章に、新島に対する一連の追悼文と追悼演説がのっているが、これについてはデイヴィスの場合と同じ方針を守った。すなわち、徳富猪一郎の『国民之友』七二号に掲げられた「一月二十三日午後二時二十分」という社説のテキストはむろん、本書にそのまま掲げることができるのであるが、敢えてそれをせず、*Life and Letters* のテキストを口語に訳したものをのせた。同じことは佐々城豊寿の追悼文、加藤弘之と竹越与三郎の追悼演説についてもいえる。

本書には必要以上とも思われる分量にのぼる注解をつけた。それはここ四十年間にわたる新島研究の成果を、本訳書に反映させないわけにかなかったからである。ハーディーの中に見出される大小のまちがった記述は私としてできる限り訂正したつもりである。デイヴィスの場合、私の注解は十四頁にすぎなかったが、本書では注解だけで六十七頁に及ぶ。ハーディーのテキスト中特に重要なまちがいの場合には、敢えて注解の頁に入れないで、本文の頁の末尾に入れた。ただしそういう箇所は僅か五箇所にすぎない。他の小さなまちがいはできるだけ訂正したうえで訳文を作り、それに注記する、という方針を取った。

A・S・ハーディーの *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* の邦訳が『新島襄全集』の第十巻として入ることになったのはなぜであったか？ 新島が著わしたわけではないこの書物をなぜ全集の中に入れるのかをいふ

かる人もあるであろう。全集委員会ではこの点について次のように考えてきた。新島には固有の著作がないので、彼ら全集は教育編、宗教編、書簡編、日記紀行編等に分けられるにしても、いきおい基本的には資料集ということにならざるをえない。それ故、新島の生涯を一つのまとまりとして読者に概観して頂くには、いわゆる“*My Younger Days*”（「青春時代」）をはじめとする、自叙伝的要素の濃厚な『生涯と手紙』をそっくり日本語でもって提供することが早道である。編著者であるA・S・ハーディーはこの書物の中で新島の英文書簡やレポートの類をふんだんに利用しており、いわば新島をして新島自身を語らしめるという方針を取っているのだ、新島の全体像を掴むにはこの書はきわめて適切なものだといえる。加えて、現存する新島の英文書簡二九九通のうち一二〇通を収録する『生涯と手紙』はきわめて重要な資料でありながら、今までにその訳が出ていなかった。この書は全集の中で和文日記以外では「読みもの」としての役割りを果たすことのできる唯一の巻ということになるであろう——以上のような理由からして、全集委員会はこれを全集に加えたのであった。

『生涯と手紙』という表題はいかにもぎこちない、せめて『伝記と書簡』とすべきではなかったか、とも反省する。しかし、口語訳になった新島の *Letters* はどうも、書簡ではなくて、手紙だという気がするのである。はじめに感じていた違和感は訳者の中では少しずつすれていき、もはや『生涯と手紙』でよい気がしてきた。

この訳業をすすめるに当たり、全集委員会の委員長だった同志社の上野直蔵総長から絶えず暖かい激励を頂いていた。第十巻の初校が出たところで上野先生は永眠された。それ故この巻を上野先生のご霊前にささげたいと思う。訳業の全般にわたり、また注解の作成にあたり、同志社のオーテス・ケーリ教授、井上勝也教授、河野仁昭氏、松井全氏に特にお世話になった。松井さんは訳文と注解の全部に目を通し、私のまちがいを指摘して下さった。しかし、な

おまちがいが見出されるとすればそれは一切私の責任である。松井さん作成の新島襄略年譜を、デイヴィスの本から転載させて頂いた。あわせてお礼申上げる次第である。

(北垣宗治)

西 暦	和 暦	月 日	年 齢	事 項	関 連 事 項
1843	天保14	1月14日	0歳	江戸神田の安中藩邸内に生まれる。幼名は七五三太。祖父・弁治、祖母・のぶ、父・民治、母・とみ、姉くわ、まき、みよ、とき。	將軍・徳川家慶、藩主・板倉伊予守勝明。オランダ国王、將軍に開国勸告の書簡を送る。この前年、阿片戦争終わる。
1847	弘化4	12月14日	4歳	弟・雙六生まれる。	幕府、相模・安房・上総沿岸の警備を命じる。オランダ船、風説書を提出し、幕府の外交について忠告する。
1848	嘉永元	2月14日	5歳	習字のけいこを始める。	祖母永眠。外国船、対馬・五島・蝦夷沿岸に出没。マルクス「共産党宣言」発表。フランス二月革命、ドイツ三月革命。
1850	嘉永3		7歳	遊んでいるうち、あやまって転落し、前額部に負傷する。	高野長英自殺。江川太郎左衛門、伊豆韮山に反射炉を築く。中国に太平天国の乱起こる。
1851	嘉永4		8歳	読書 習字につとめ、絵画・礼儀作法を学ぶ。	アメリカ船、土佐の漁民・中浜万次郎を送還する。メルヴィル「白鯨」、フォスター歌曲集「故郷の人々」出版。
1853	嘉永6		10歳	安中藩の学問所に入り、添川廉斎について漢籍を学び始める。また剣術・馬術のけいこを始める。	ペリー、浦賀に来航。プチャーチン、長崎に来航。幕府、品川台場の築造を始める。クリミア戦争始まる。
1856	安政3		13歳	藩主・板倉勝明に命じられ、田島順輔について蘭学をはじめ。	板倉勝明「甘雨亭叢書」刊行。アメリカ総領事ハリス、下田に着任。吉田松陰、松下村塾を開く。
1857	安政4	11月15日	14歳	田島が長崎留学のため、蘭学を中断する。元服。諱は敬幹。祐筆補助役を命ぜられる。	藩主・板倉勝明死去、弟・勝殷あとを継ぐ。幕府、軍艦教授所を設ける。ハリス、將軍に謁見し国書を呈する。インドにセポイの乱おこる。

1858	安政5	7月	15歳	藩主の送迎や記録の保管にあたり、日常の時間浪費に苦しみ、仕事に嫌になる。
1859	安政6		16歳	漢学の師・添川死し、代わって九月より備中松山藩の川田剛が藩の学問所で教える。
				父が藩主に随行して大阪に出張中、祐筆職代勤および書道教授をする。
1860	万延元	11月	17歳	杉田玄瑞?について再び蘭学をはじめる。
				藩主の護衛役に選ばれ、はじめて安中に行く。
				幕府の軍艦教授所にかよい、数学・航海術を学ぶ。
				この頃、江戸湾内でオランダ軍艦をみて、その偉容に驚く。
1862	文久2	9月19日	19歳	眼病と不眠症のため軍艦教授所を退所、甲賀源吾の塾に入門して洋学を継続する。
		11月12日		備中松山(高梁)にある板倉藩の洋式帆船・快風丸に便乗し、備中玉島に向かう。翌年一月一日江戸に帰る。
1863	文久3		20歳	蘭学のほか英語の勉強をはじめる。和訳のロビンソン漂流記、漢訳のアメリカに関する書物や聖書抜萃等を読む。
1864	元治元	3月12日	21歳	北方交易にむかう快風丸に便乗、品川を出帆し函館に向かう(四月二一日到着)。
		5月5日		長岡藩の菅沼精一郎の紹介でロシア人の司祭ニコライの日本語教師となり、彼の家に移る。
		6月14日		福士成豊(卯之吉)のあっせんで、夜半ひそかに函

日米修好通商条約調印。日本在留外國人に
対しキリスト教を解禁。安政の大獄始まる。

幕府、神奈川・長崎・函館を開港、露仏英
蘭米との貿易を許す。ウィリアムズ、フル
ベッキ、ヘボンら宣教師来日。ダーウィン
「種の起源」、J・S・ミル「自由論」出版。

感臨丸、アメリカに向かう。桜田門外の変。
リンカン、アメリカ大統領に当選。武田斐
三郎設計の函館五稜郭完成する。

寺田屋騒動、生麦事件おこる。幕府派遣の留学生津田真道・西周・榎本武揚らオランダに向け出発する。横浜に The Japan Punch, The Japan Express 発刊。やがてロシア宰相にビスマルク就任。

リンカン、奴隸解放宣言。薩英戦争。伊藤博文・井上馨ら長州藩士、英国に密出国する。

幕府、神戸に海軍操練所をおく。禁門の変、第一次征長の役。英米仏蘭四国連合艦隊、下関を攻撃。太平天国王・洪秀全自殺。第一インターナショナル結成。

[illegible]

1866	明治2	12月25日	23歳	父・民治から藩庁あてに、 中、風雨のため遭難した旨を届け出る。 アンダーヴアー神学校付属教会で洗礼を受ける。
1867	慶応3	12月30日 6月9月	24歳	フィリップス・アカデミー卒業。 アーモスト大学入学。大学のミッシヨナリ・バンド に加入。
1868	明治元	7・8月	25歳	夏休み中、ニュー・ハンプシャー州各地を歩き、また 鉱山の見学旅行をする。
1869	明治2	4月6月	26歳	春休みを利用してアーモストの南部地域の銃器、製紙、織物工場等を見学する。 アーモスト大学を訪問のS・R・ブラウンにあい、日本のことを話しあう。
1870	明治3	7月23日 12月13日 7月14日 9月	27歳	コネティカット州各地を旅行中、ニュー・ヘイヴン でイエール大学の卒業式を見学する。さらにチャタム のテイラー船長を訪れ、ひと夏をすごす。 テイラー船長がボストンで事故死したことをきき、遺族を弔問する。 アーモスト大学を卒業、B.S.の学士号をえる。 アンドーヴァー神学校に入学する。
1871	明治4	3月15日	28歳	森駐米少弁務使とボストンではじめて出会う。

討幕のための薩長連合なる。佐賀藩の村田若兼守、フルベッキより受洗。第二次征長の役。

明治天皇踐祚。討幕の詔勅・大政奉還。マルクス「資本論」第一巻出版。

戊辰戦争おこる。新島一家、江戸から安中に引き揚げる。沢辺琢磨、ニコライより受洗。

薩長土肥藩主、版籍を奉還。東京遷都。D・C・グリーン夫妻、横浜に来る。スエズ運河開通。

祖父・弁治、コレラのため永眠。キダー女史、フェリス女学校を設立。政府、森有礼を米国駐在少弁務使に任命する。普仏戦争始まる。

弟・雙六、植栗持弥（のち新島公義）を養子とする。雙六永眠。フィリップス・アカデミーのテイラー校長永眠。熊本洋学校開校。

父・民治から藩庁あてに、
中、風雨のため遭難した旨を届け出る。
アンダーヴアー神学校付属教会で洗礼を受ける。

フィリップス・アカデミー卒業。
アーモスト大学入学。大学のミッシヨナリ・バンド
に加入。

夏休み中、ニュー・ハンプシャー州各地を歩き、また
鉱山の見学旅行をする。

春休みを利用してアーモストの南部地域の銃器、製紙、織物工場等を見学する。
アーモスト大学を訪問のS・R・ブラウンにあい、日本のことを話しあう。

コネティカット州各地を旅行中、ニュー・ヘイヴン
でイエール大学の卒業式を見学する。さらにチャタム
のテイラー船長を訪れ、ひと夏をすごす。
テイラー船長がボストンで事故死したことをきき、遺族を弔問する。
アーモスト大学を卒業、B.S.の学士号をえる。
アンドーヴァー神学校に入学する。

森駐米少弁務使とボストンではじめて出会う。

1874	明治7	5月	9月	7月25日	2月12日	1月	5月11日	3月	10月	8月22日
31歳						30歳		29歳		

森のあっせんで日本政府の旅券と留学免許状が送付される。

セイレムで開かれたアメリカン・ボード年会に出席し、日本伝道に向かうJ・D・デイヴィスとあう。

森の紹介で岩倉使節団の一員、田中不二麿文部理事官に会い、教育視察のための通訳を委嘱される。また使節団の随員で知人の田辺太一や友人の娘・津田梅ともあう。

田中文部理事官と共にニュー・ヨークを出帆、ヨーロッパ諸国の教育視察の旅にでる。ヨーロッパ諸国の教育制度を視察し、九月からベルリンに滞在、田中文部理事官の報告書の原稿を書く。

帰国する田中不二麿に報告書草案（のちに刊行される「理事功程」の一部）を渡す。

リューマチ治療のため、ウィースバーデンに移り、約五か月湯治する。

ウィースバーデンを出発、帰米する。九月一四日、ニュー・ヨーク到着。

アンドーヴァー神学校に復学する。

アメリカン・ボード（略称A.B.C.F.M.）の日本ミッションの準宣教師に任命される。

アンドーヴァー神学校卒業。

ボストンのマウント・ヴァノン教会で按手札を授け

校。岩倉特命全權大使一行、欧米視察に出発。パリ・コミュニケーション。

岩倉特命全權大使ら、グラント大統領に謁見。横浜で諸派合同の第一回宣教師会議が開かれる。新橋―横浜に鉄道開通。政府、太陰暦を廃し、太陽暦を採用する。

切支丹禁制の高札を撤廃。岩倉特命全權大使ら帰国。征韓論に破れた西郷隆盛・板垣退助ら辞職。

板垣ら民選議院設立建白書を提出する。佐賀の乱。板垣ら高知に立志社を創立。摂津第一基督公会設立。

									1875
									明治8
10月9日	10月31日	11月29日	12月28日	1月9日	1月22日	2月	4月	5月24日	6月7日
									6月
									7月6日
									8月23日
									32歳
<p>ラットランドで開かれた A. B. C. F. M. 第六五回 年会の最終日に演説、日本にキリスト教主義大学の 設立を訴えて約五〇〇〇ドルの寄付金をえる。 サン・フランシスコを出帆、十一月二十六日夕方、横 浜に到着、D・C・グリーンらに出迎えられる。 安中の両親と一〇年ぶりに対面する。 東京に出て田中不二磨らに帰国挨拶をする。 父宛ての書簡にはじめて「襄」の字を用い、「ジョ セフの略也」と説明をつける。 大阪に到着、川口与力町の宣教医 M・L・ゴードン 方に止宿する。 大阪で木戸孝允を訪ね、学校設立につき援助を依頼 するが、渡辺大阪府知事の反対にあい断念する。 大阪から奈良・宇治・大津・比叡山をへて京都に入 る。横村正直京都府大参事、山本寛馬らに面会、山 本から京都に学校を開くことをすすめられる。 大阪で開かれた在留宣教師会において京都に学校を 開くことを決議する。 J・D・デイヴィスと共に山本寛馬を訪問、学校敷 地として、京都御所の北にある彼の所有地・旧薩摩 屋敷約五八〇〇坪をゆずり受けることとなる。 大阪から上京第三一区の山本寛馬方に移転する。 京都居住に必要な送籍状を父から受け取る。 「私塾開業願」を横村権知事宛に提出、九月四日認</p>									

沢辺琢磨、ギリシア正教司祭となる。沢山
保羅、アメリカから帰国。神戸女学院創立。
ラーネッド来日。さんばう律、新聞紙条例
制定。ゴータ綱領宣言。

	1878	明治11	9月7日	35歳
	1877	明治10	12月3日	34歳
	1876	明治9	10月15日	33歳
			11月29日	
			1月3日	
			4月26日	
			9月18日	
			9月	
			12月	
			4月21日	
			7月20日	
			7月27日	

可される。

仮校舎として寺町通丸太町上ル松蔭町の高松保実邸を借り受ける。また山本方から上京区新烏丸頭町〔現在の鴨沂高校の東〕に移転する。

山本寛馬の妹・山本八重と婚約する。

「同志社英学校」開業。生徒八名。

デイヴィス宅で山本八重と結婚式をあげる。

両親、姉・みよ、甥・公義ら安中をひきはらい、京都に来る。

旧薩摩屋敷跡に建築中の校舎二棟、食堂一棟が完成、献堂式を行なう。この頃、相国寺門前にある豆腐屋を買収、聖書を講義する。

L・L・ジェインズの紹介で、熊本洋学校の生徒が相ついで同志社に入学する。

新島宅に京都第二公会が設立される。教会員二三名。下旬からデイヴィス宅で女子教育を開始する。

女学校、デイヴィス宅から今出川通寺町西入三丁目常盤井殿町の新校舎に移転、翌二日、開校許可を出願し、二八日許可される。

アメリカ留学中の旧藩主・岡部長職の依頼により、岸和田に伝道する。

シアーズの寄付による住宅が寺町通丸太町上ル松蔭町に完成、仮寓から移転する。

熊本バンド奉教の盟約。京都第一、第二、第三基督公会設立。札幌農学校開校。熊本神風連の乱、萩の乱おこる。マーク・トウェイン「トム・ソーヤの冒険」出版。

西南戦争おこる。京都―大阪鉄道開業。木戸孝允没。片岡健吉ら国会開設建白書を提出。田口卯吉「日本開化小史」刊行。チャイコフスキー「白鳥の湖」初演。

日本基督教伝道会社設立。大久保利通暗殺される。東京に体操伝習所を開設、アーモスト大学出身のリーランドが指導に当たる。フーバー「昆虫記」、エンゲルス「反デューリング論」出版。

1879	明治12	2月11日 ～12日	36歳	勝海舟を訪問する。
1880	明治13	2月 6～8月	37歳	第一回卒業式を行ない、英学余科（神学）生一五名に卒業証書を授与する。 愛媛・宮崎・鹿児島県下に伝道旅行をする。 岡山・愛媛を伝道旅行。旅行中に英学校二年生のクラス合併につき生徒間に不満広がる。 いわゆる「自責の鞭」事件おこる。これに関連して五月に徳富蘇峰ら退学。 夫人と共に岡山・愛媛・福岡・熊本各県の伝道旅行に出発する。
1881	明治14	10月中旬 10～12月	38歳	奈良大滝村の土倉庄三郎、民権運動家の古沢滋と共に新島を訪問、二兄の教育を依頼する。
1882	明治15	1月11日 4月17日 4月21日 ～28日 6月29日 7月3日	39歳	奈良大滝村に土倉庄三郎を訪問し、一六日まで滞在。大学のため五〇〇〇円寄付の約束をえる。 岐阜で遭難した板垣退助を大津まで出迎える。二一日、大阪に見舞う。 明石・生野銀山・豊岡・城崎をへて宮津に至り、天橋義塾を見学。 女学校第一回卒業式。卒業生五名。 夫人と共に中仙道をへて群馬・栃木・福島・山形県下の旅行に出発する。途中まで伊勢・徳富・湯浅ら

姉・みよ永眠。「天道溯原」の著者マーティン、同志社を訪問。グラント前アメリカ大統領日本訪問。徴兵令改正。イブセンの交響詩「わが祖国」発表、ペーベル「婦人論」出版。

集会条例公布。文部大輔・田中不二麿、司法卿へ転出。小崎ら東京基督教青年会を結成。小崎ら「六合雜誌」創刊。教育令を改正、中央集権を強化。

明治法律学校創立。明治三年に国会を開
設することに決定。板垣退助ら自由党結成。
S・R・ブラウン、栗津高明没。文部省
「小学唱歌」刊。

在米中の恩人E・フリント没。軍人勅諭下る。日本銀行開業する。東京専門学校（のちの早稲田大学）開校。エマソン、ロングフェロー没。

[illegible]

組合・一致両教会の合併問題おこり、大学募金とともに、いちじるしく心労を重ねることとなる。

明治学院設立認可。徳富蘇峰、民友社を創立。石井十次、岡山孤児院を設立。保安条例公布、いわゆる危険人物の東京退去を命令。

1889	明治22	1888	明治21
10月12日	8月27日	5月22日	5月8日
1月29日	11月7日	7月19日	4月22日
4月12日	3月4日	2月21日	11月15日
8月13日	6月17日	45歳	46歳

仙台の東華学校の開校式に出席する。校長は新島。札幌に保養中、ハーディー氏死去の通知を受ける。同志社病院開院式、京都看護婦学校開校式を行なう。東京の有力新聞・雑誌の代表者を招待、大学設立について支援を依頼、代理として金森を派遣する。大学設立について雑誌「国民之友」にその主旨を紹介するよう徳富蘇峰に依頼する。大学設立について徳富の協力はきわめて大きい。知恩院に京都の名士六〇〇人以上を招き、大学設立について支持と理解を求める。井上馨邸で政財界の有力者と大学設立について懇談、会合中、脳貧血のため倒れる。外相・大隈重信邸に政財界の有力者集まり、約三万円を寄付申し込みをえる。「同志社大学設立の旨意」を「国民之友」はじめ全国的主要新聞・雑誌に発表する。大学敷地として彦根藩屋敷跡（京都寺町鞍馬口下ル）約六〇〇〇坪を買収。アメリカのJ・N・ハリスから理化学校のため合計一〇万ドルの寄付申し込みを受ける。組合教会総会が神戸で開かれ、教会の合併は議決に至らず、翌年四月に中止と決まる。アーモスト大学から名誉学位（D.L.D.）を贈られることを知り、大いに困却する。病身をもかえりみず、大学募金のため関東におもむ

大隈、外相に就任。市制・町村制公布。樞密官制公布。内村鑑三帰国。オーストラリア、中国人の移民を禁止（白豪主義）。

改正徴兵令公布され、戸主の徴兵猶予など廃止。大日本帝国憲法発布。森有礼暗殺される。同志社で初のキリスト教夏期学校開かれる。大隈外相遭難。パリにエツフェル塔建設。

							1890
							明治23
11月28日	12月27日	1月1日	1月11日	1月17日	1月20日	1月21日	1月23日
11月10日	12月16日	1月27日	1月24日	1月23日	1月24日	1月23日	1月27日
(47歳)							
<p>群馬県前橋に滞在中、胃腸に激痛をおぼえ、募金を中断して一二月一三日東京に帰る。</p> <p>徳富のすすめにより、療養のため神奈川県大磯の百足屋に移る。</p> <p>送歳の詩を作る。</p> <p>胃腸病にわかに悪化する。</p> <p>この日以後、危篤状態。</p> <p>各地に危篤電報をうつ。</p> <p>八重夫人、小崎弘道、徳富蘇峰を枕もとに呼び遺言をのべ、徳富がこれを筆記する。</p> <p>午後二時二〇分永眠。病名は急性腹膜炎症。</p> <p>夜一時二〇分、遺骸が七条駅に到着、生徒に迎えられて新島邸に帰る。</p> <p>同志社チャペル前で告別式を行なう。参列者四〇〇人。式後、同志社生徒により若王子墓地に運ばれ、埋葬される。</p> <p>J・D・デイヴィス、最初の新島の小伝を刊行する。八重未亡人、勝海舟を訪問、墓表をしたためられる。</p>							
<p>京都市、琵琶湖疏水工事竣工、インクライン開通。教育に関する勅語発布。第一通常国会召集。ビスマルク宰相辞任。ゴッホ自殺。</p>							

新島襄全集編集委員

委員長 同志社前総長・理事長

同志社総長

委員 同志社大学名誉教授

同志社大学文学部教授

同志社大学文学部教授

同志社大学工学部教授

同志社大学人文科学研究所教授

同志社本部庶務部長

同志社社史史料編集室室長

上野直蔵

松山義則

高橋 虔

オーテス・ケーリ

北垣宗治

島尾永康

杉井六郎

園部 望

河野仁昭

ホワイト・ハウス White House 139
ホワイト・マウンテンズ White
Mountains 95-96, 129, 395
ホイットニー Whitney, Clara 382
ウィースバーデン Wiesbaden 177-
78, 294, 410
ワイルド・ロウヴァー号 the Wild
Rover 9, 17, 46-48, 236, **381**,
384, 386
ウィリアムズ大学 Williams College
258, 388, 399, 431
ウィルソン Wilson, Julia 234, 243,
427, 428

[Y]

イェール大学 Yale University 106,
151, 258, 390, 397, 405, 431
山本覚馬 216-17, 232, 256, 335,

421-22

同志社の名付け親 423
府との関係を失う 235
受洗 320, 439
『キリスト教の証拠』 216-17
京都の宣教師団の支え 225
臨時総長 443, 446
山崎闇斎 368, 445
山崎為徳 428, 429
横浜 86, 207-08, 325
新島の英語説教 213
最初のプロテスタント教会 212,
411, 420
横井三右衛門 34, 385
横井時雄 229, 250, **426**, 429, 446
吉田松陰 386
ヤング Young, Brigham 192, **417**,
418
湯浅治郎 234, **427**, 446

文部大輔 217
 新島に帰国をすすめる 167-68
 新島に対する信頼 132
 ニュー・ヨーク 153
 ポーター総長の客になる 152
 『理事功程』 401, 402, 410
 三人の通訳 162
 初対面 134-35
 田中平八 337
 テイラー (船長) Taylor, Horace S.
 10-11, 17-18, 46, 89, 381
 夫人 Sophia Dodge Taylor 108,
 125
 事故死 107
 「ジョウ」という名 47
 家族 74, 95, 107, 388, 399
 新島の思い出 108
 再会 67-68
 テイラー (アンドーヴァー神学校教授)
 Taylor, J. L. 149, 185, 404-05
 テイラー (フィリップス高等学校長)
 Taylor, Samuel H. 57, 59,
 387
 永眠 115-16
 新島評 58
 テイラー (宣教師) Taylor, Wallace
 221, 235, 414, 420, 423-24
 テイラー (牧師) Taylor, William M.
 319, 438
 『天道溯原』→『キリスト教の証拠』
 テニソン Tennyson, Alfred 446
 トンプソン Thompson, A. C. 186,
 412, 415, 442
 東華学校 332, 382, 440
 東海道線 204, 419, 443
 徳富猪一郎 229, 365, 426, 431, 446
 東京大学 252, 258, 310, 441
 富永冬樹 356, 443-44
 富田鉄之助 382

トリノ Torino 279, 291
 トレ・ペリチェ Torre Pellice 279,
 280-81, 434
 トリート Treat, S. B. 88, 185,
 196, 393, 413
 トロイ Troy 123, 399, 400
 津田仙 403, 427
 津田梅 136-37, 402-03

[U]

内村鑑三 388, 389, 391, 397, 398,
 439
 植村正久 382, 437
 潮田千勢子 362, 444
 オージンゲン Usingen 180, 411

[V]

ヴァチカン Vatican 277, 433

[W]

若松 260
 和歌山 232
 ワルドー派 Waldenses 279, 280,
 281, 434-35
 ワシントン Washington, D. C. 319
 女学校見学 138-39
 日本人留学生たち 135-36, 137-38
 到着 133-34
 渡辺昇 214, 421
 ウェルズリー女子大学 Wellesley
 College 393
 ウェスリアン大学 Wesleyan Univer-
 sity 105, 397
 ウェスト・ゴールズバラ West Goulds-
 borough 320, 349, 350
 ホイラー Wheeler, C. H. 88, 393

94, 435

セント・ピーターズバーグ St. Petersburg 163-65, 409

セイレム Salem 126, 401

ソールト・レイク市 Salt Lake City 192, 417

サン・フランシスコ San Francisco 193, 325

札幌 328-30

札幌農学校 394, 395

佐々城豊寿 359-63, 444

サヴォナローラ Savonarola, Girolamo 278, 434

セイヴォリー Savory, William T. 9-10, 42, 44-46, 380, 386

スコットランド Scotland 158-59

スクナー schooner 383, 385

シアーズ Sears, J. M. 174, 179, 348, 409

ベルリンでの遭遇 162

クリスマス・イヴを新島とすごす 175

新島の家と礼拝堂建築資金を送る 224, 425

シーリー Seelye, Julius H. 78, 80-82, 85, 88, 93, 95, 121, 146, 295, 391

N. G. クラークの友人 393

ミッショナリ・バンド 391

新島の按手礼 185-86

新島評 82

新島民治に会う 176, 411

田中と新島を歓迎 150

聖公会 269, 303, 432, 433

聖書館 153, 405-06

聖書の日本語訳 212, 382, 420

渋沢栄一 338, 440

島津久光 218, 423

下村孝太郎 229, 352, 427, 438, 443

新聞少年宿舎 153, 406

宗教講演会 254

シンガポール Singapore 272

スミスソニアン・インスティテューション Smithsonian Institution 141, 319, 403-04, 439

添川廉斎 32, 385, 392

ソコトラ島 Sokotra 275, 433

スペンサー Spencer, Herbert 253, 429

スプリングフィールド Springfield 107, 237, 397

ストーズ Storrs, R. S. 319, 438

スエズ Suez 276

杉田玄端 382, 385

杉田廉卿 382, 385

サザーランド Sutherland, G. E. 103, 123, 396, 400

[T]

太陰暦 175, 384, 410

田島順輔 31, 385

竹越与三郎 369-73, 445

田辺太一 402, 429, 443

田中不二麿 131, 133, 141, 160, 161, 163, 242, 334, 335, 401-02, 408

アルジェリア号 157

アメリカ的性格の探究 148

ボストン訪問 145

コロンビア・カレッジ参観 147

ヨーロッパ視察旅行にさそう 140

ヨーロッパを出発 175

ハーディーに対する感謝 146

疲労 158

漢訳聖書 150

勤勉 159

キリスト教への傾斜 171

国民教育について論じる 141-43

大磯 349, 351, 443
 岡部長職 237, 428
 岡山 252
 興津港 41, 386
 大隈重信 337, 349, 442
 大倉喜八郎 337
 大村達斎 219-20, 423
 オランダ→Holland
 大阪
 学校設立計画 214
 到着 213
 押川方義 382
 大津 220
 大津刑務所 232-33
 大内青巒 358-59, 444
 オックスフォード大学 Oxford University 257, 294, 403, 430
 尾崎直紀 27-28, 32

[P]

ページ Page, J. B. 190, 416
 バリ Paris 160
 パーク Park, E. A. 73, 128-29, 390, 398
 パーカー夫人 Parker, Harriet 149, 404
 パーカー Parker, Peter 190, 404, 416
 パーミリー Parmelee, H. F. 234, 243, 427, 428
 パウロ Paul, St. 277, 415-16, 433
 ペナン Penang 272
 ペリー艦隊 American Fleet commanded by Commodore Perry 29, 386
 ペテロ Peter, St. 277, 433
 フィラデルフィア Philadelphia 147, 319

フィリップス高等学校 Phillips Academy 57, 387, 388
 ビルグリム・ファーザーズ Pilgrim Fathers 258
 ピサ Pisa 278-79
 ポーター (函館の商人) Porter, Alexander 9
 ポーター (牧師) Porter, G. E. 157, 185, 407
 ポーター (イエール大学総長) Porter, Noah 151-52, 294, 405, 407
 プラット Pratt, Orson 192, 417
 プロヴィデンス Providence 106, 397

[Q]

クイーンズタウン Queenstown 157, 158, 406-07, 408

[R]

ランキン Rankin, J. E. 139, 141, 403
 『連邦志略』 11-12, 37, 382
 『ロビンソン・クルーソー』 *Robinson Crusoe* 37, 385
 ローマ Roma 277-78
 ローマ・カトリック教会 295, 388, 433, 434 →キリシタン
 イエズス会 204, 277, 434
 城外聖パウロ大聖堂 277, 433
 聖ペテロ大聖堂 277, 433
 ラットランド Rutland 186, 334
 Rutland Weekly Herald 416

[S]

サイゴン Saigon 47
 サンゴタール St. Gotthard 291, 293-

〔新島襄〕

305

日本におけるキリスト教主義高等教育のためのアピール 305-15

同志社大学設立の旨意（自由訳）

333-44

大磯での遺言 353-54

VII. 諸家の新島評

J. D. デイヴィス 223-24, 265

イーフレイム・フリンツ 78-80

福沢諭吉 363-64

A. S. ハーディー 53, 373-76

ミス・ヒドソ 59-61, 76-77

W. J. ホランド 82-83

加藤弘之 366-69

無名の学友 83-84

大内青巒 358-59

佐々城豊寿 359-63

J. H. シーリー 82

竹越与三郎 369-73

S. H. テイラー 58

徳富猪一郎 365-66

新島みよ(姉) 226, 231, 384, 429

臨終 250-51

新島のぶ(祖母) 22-24

新島雙六(弟) 22-23, 87, 400

最後のわかれ 40

死の知らせ 124-25

新島民治(父) 11, 86-87, 100-01,

104, 196, 226, 231

永眠 344, 442

ハーディー夫妻に対する感謝 128

ハーディー夫妻あての手紙 101-02,
211-12

受洗 230, 427

新島帰る 208-09

新島の帰国を渴望 127

シーリーに会う 176, 411

借金 193

新島とみ(母) 49, 93-94, 226, 231

息子の出世をねがう 26-27

新島八重(妻) 231, 232, 250, 330-
31, 423

婦人たちの集会 267

ハーディー夫妻あての手紙 266-68

婚約 220, 423

新島の「警察官」 345

新島の記念碑 355

新島の最後 353

新島の八重親 220-21

姑の世話 351

ニュー・ベッドフォード New Bedford
71, 73, 390

ニューカム Newcomb, Simon 318,
438

ニュー・ヘイヴン New Haven 106,
133, 151-52, 192, 294, 319, 397

ニュー・ヨーク New York 133,
147, 153, 294, 319, 405-06

ナイアガラ瀑布 Niagara Falls 119,
399

日曜学校 321

日本基督伝道会社 236, 248, 251,
299, 308, 428

日本の近代化 203-07, 257, 258-59,
296-97, 306-07

日本史 201-07

ニコライ Nikolai 41-42, 160, 386

新渡戸稲造 439

ノース・アダムズ North Adams
122, 399

ノースロップ Northrop, B. G. 148,
149, 404

性急さ 151-52

〔O〕

オークランド Oakland 193, 418

176, 181, 230, 260, 265, 271,
280, 318, 319, 344, 345-46,
348, 349, 350, 372, 443

腹膜炎 353

眼病 15, 52, 58, 79, 81

ハシカ 15

サンゴタール峠での発作 291-93

リューマチ 81, 92, 109, 113,
114, 168, 170, 177, 178, 181

IV. 新島の意見

アメリカ文明の源泉 333

荒っぽいこと 283

沈黙 281-82

中国人 269, 270, 271

英雄崇拜 284-85

義務 319

実務的性格 283-84

女性の自覚 360-61

女性のキリスト教化 238

革命者たれ 362

神の火 289-90

キリスト 284-85, 292

キリスト教 235

キリスト教道徳 257-59

キリスト教主義学校 186, 189, 255,
341-42

キリスト者のやさしさと大らかさ
287

今日のキリスト者 361-62

教義の内容 184-85

教育の目的 341

教会合同問題 350-51

教会の自給 247-48, 347

何でも屋 288

人間の偉大さ 284

日本のための乞食 319

忍耐強さ 282-83, 317

利己の野心 290-91

摂理 73-74

装てん 288

疑いの心 291

約束 286

誘惑 76

V. 新島の引用・言及聖句

創世記(32:22-30) 189

ヨシュア記(1:9) 74

詩篇(23:1) 85

ク (37:4-5) 251

ク (42:7) 75

ク (137:5-6) 314

マタイ伝(9:2) 75

ク (10:16) 172, 246

ク (14:27) 289

ク (19:21) 172

マルコ伝(6:50) 289

ルカ伝(9:62) 94, 126

ク (16:8) 188, 312

ヨハネ伝(3:16) 58

ク (3:16-17) 63-64

ク (19:30) 290

使徒行伝(20:35) 68

ロマ書(16:9) 160

コリント前書(15:10) 174

エペソ書(6:17) 94

ヨハネ黙示録(7:17) 108

VI. 独立したドキュメント

脱国の理由 11-18

青春時代(=My Younger Days)
21-48

信仰簡条 184-85

武士階級について 187-89

アメリカン・ボード運営委員会あて
のアピール 241-47

明治専門学校設立旨趣(自由訳)
257-60

トレ・ペリチェ断想 281-91

サンゴタール遺書 293-94

日本伝道促進についての試案 295-

〔新島襄〕

フィリップス高校時代の勉学と進歩
59-60, 61-62, 70, 76-80
ピューリタン 373
蘭学 12-13, 31-35, 37
理学士 B. S. 113, 398
『ロビンソン・クルーソー』 37
ロシア人 164-65
ラットランド集会でのアピール
186, 189-90, 256, 416
旅券取得問題 117-18, 126-27
両親への従順 50
作法の訓練 26-27
サンゴタール峠での発作 291-94
セント・ピーターズバーグの安息日
163-64
清潔好き 82
聖書 15-16, 47, 61-62, 63-64,
65, 67, 74, 75, 78-79, 82-83,
89
船長室付きボーイ 47-48
船上の礼拝 273
宣教師団に対する忠実さ 223
宣教師批判 246
宣教師から攻撃される 249
ジャンハイ 17
「七五三太」という名 22
神学校に帰る決意 172-73
信仰 79-80, 82, 91
少年時の教育・学問 11-15, 35,
51, 53
小刀を売る 47
新島家の宗教 23-24
出仕 11-13, 15, 32-34
送歳詩 351-52
葬式 357
スプーン紛失 46, 386
スイスでの礼拝 163
太平洋航路 193-96

玉島航海 36
誕生 11, 21-22
天父の発見 36-38
東京への請願 217
ウィースバーデン 169
若松への旅 260
ヨハネ伝を訳す 65
祐筆補助役 33-34, 51
山本に会う 217
遺言 353-54, 443

II. 新島の伝道

安中とその近隣 208, 209-10, 233-
34
ベルリンの日本人 175-76
ミス・チャンドラー 66-67
フランクフルトの日本人 169
福土卯之吉 63-64
グリーン・リヴァーの中国人 191-
92
今治 250
岸和田 237-39, 249
九州 241, 250
レオミンスター 121
モンソン 高校の日本人留学生 89-
90
新島弁治 87
新島民治 209
ニュー・ハンプシャーの一教会 95-
96
日本 352
ノース・アダムズの中国人 122-23
大阪 219
大津 220
大津刑務所 233
田中不二麿 146
トロイの日本人留学生 123
ヴァーモント州の一教会 97

III. 新島の病氣

新島の病氣 13, 92, 109, 174,

コネティカットの旅 105-07
 大学設立運動 256(→同志社・大学設立運動)
 デイヴィスへの感謝 253
 脱国 9-10, 44-45
 ドイツ語 169, 179
 絵 60
 英語 11, 42, 45, 52, 61, 79, 80, 83, 120
 永眠 355, 443
 永眠記念礼拝 356
 燕尾服 99
 ヨーロッパ行きの決意 148
 ヨーロッパ行きを迷う 140-41, 143-45
 船よいせず 157
 ギリシア語 81
 偶像追放 209
 母の病をなおす 49
 函館 16, 39-45
 ハーディーの手紙を家族に披露 209
 ハーディー夫妻への感謝 20, 21, 60, 61, 62, 65, 68, 74-75, 86, 93, 95, 109, 119, 146, 148, 152-53, 167, 193, 196-97, 266, 273, 292, 326, 345-46
 報告書執筆 175
 俸給に関する誤解 230-31
 フーサク山で作った詩 124
 ユグノー女生徒の献金 180
 ユーモア感覚 83
 祈り 58-59, 62, 89, 104, 119, 133, 150, 269, 290, 294
 遺体京都に帰る 356
 自責の鞭 375, 429, 446
 「ジョウ」という名 10, 47, 381
 受洗 68-69, 389
 かねを紛失 98-99
 家庭教育 24-26

家族との通信 86-87, 93-94, 100-01, 104, 114, 125, 126-27, 179
 家族との別れ 40
 結婚 221
 結婚式の司式 331
 几帳面 82, 84
 帰化問題 113-14
 帰国(1874) 204, 207-09, 419
 帰国(1885) 325
 帰国問題 167-68, 169-70
 記念碑(墓) 376, 446
 キリストの乞食 245
 神戸の宣教師からの協力要請 183
 校長として 326-27
 鉱物学 81, 94, 95, 98, 105-06, 119
 工業技術・製品への興味 106-07, 110
 コーラン 274
 教会合同問題 344-45
 京都入り 214
 京都郊外での休暇 236
 ラテン語 75, 81
 ロンドン 159-60
 マーコンの安息日 161
 マットレス 348, 353
 名誉学位 LL. D. 327, 440
 ミドル・ネーム 20, 380
 ミッションナリ・バンド 85-86
 ニュー・ハンプシャーの旅 95-98
 ニュー・ヨーク州の旅 119-24
 日本の教育の進歩のための新島の影響 133
 日本ミッシェンの準会員 185, 414
 日記 52
 乗換駅をまちがえる 71-72
 オランダの軍艦 14, 35
 第二次欧米旅行への出発 268
 大阪入り 213

マザソン Matherson, Donald 159
松方正義 349, 402
マッキー McKeen, Phebe Fuller
97, 396
明治維新 202-04
明治専門学校 259
メソジスト教会 105, 141, 180, 303,
403
ミラノ Milano 293, 294, 435
ミル Mill, J. S. 253, 429
宮川経輝 429, 446
モンソン高等学校 Monson Academy
394, 438
日本人留学生 75, 89-90, 91
森有礼 244, 398, 404
アーモストで 117-18
ヨーロッパ行きをすすめる 146
外務大輔 241, 429
基金をもてとの助言 243-44
新島に対する理解と信頼 131-32,
134-35, 138, 140
新島をワシントンに招く 129
ノースロップへの質問 148
初対面 116
森田久万人 229, 426, 429
モリソン Morrison, Robert 270,
432-33
マウント・デザート Mount Desert
232, 320, 347, 427
マウント・ホリヨーク [女子] 専門学
校 Mount Holyoke Female
Seminary 150, 393, 405
マウント・ヴァノン Mount Vernon
149, 404
マウント・ヴァノン教会 Mount
Vernon Church 185, 414-15
マレンズ Mullens, Joseph 160, 408-
09

[N]

永岡喜八 349
長崎 269
中井弘 358
中村正直 255
南禅寺 357
ナポリ Napoli 276, 277
新島弁治 (祖父) 11, 23-24, 87, 102
永眠 114-15
新島のみた祖父 49-50
『ロビンソン・クルーソー』 37
せっかん 25
「しめた！」 22
七五三太との別れ 40, 386
新島襄
I. 新島の生涯のおもな出来事
アルコール飲料 157, 163, 291
アメリカ再訪の決意 266
アメリカン・ボード宣教師になる決
意 183-85
アーモスト大学時代の勉学と進歩
81-82
姉たち 22, 28, 40, 384
按手礼 185
アラビ・パジャとの会見 273-75
オーロラを見る 119
ベルリンでのクリスマスと新年
174-75
ベルリン号乗船 43-44
ボストン到着 17-19
侮辱に堪える 45-46
武術にはげむ 50-51
チャタム 74-76
父への送金 179
中国での保養辞退 260
中間者の苦悩 240
中西部の旅 191-93

421
 普通教育 148-49
 新島を夕食に招く 147
 キリシタン
 弾圧 392, 421
 禁制の高札 206, 213, 254, 419
 キリスト教
 外務卿の反感 244
 京都でのキリスト教(会) 254-55, 331
 大村達斎対府の役人 219-20
 『キリスト教の証拠』(=『天道溯原』)
 216, 232, 238, 255, 422
 岸和田 237-39
 北垣国道 326, 331, 429
 大学設立に賛同 337
 リベラルな新知事 254
 娘を同志社女学校へ 299, 332, 440
 北白川宮能久親王 175, 410-11
 神戸女学院 427
 甲賀源吾 37, 385
 小崎弘道 229, 357, 426, 436, 445, 446
 京都博覧会 215-16, 421
 京都ホーム→同志社女学校
 京都看病婦学校 423, 431-32, 441
 熊本バンド 226-30

[L]

ラマルチヌ Lamartine, Alphonse de 365, 445
 ランマン Lanman, Charles 134, 146, 402
 ラーネッド Learned, D. W. 221, 225, 241, 244, 424, 429, 446
 ルコント Leconte, Joseph 318, 438
 レオミンスター Leominster 121
 ライデン Leyden 166

シーボルト博物館 410
 ライデン瓶 83, 391
 リンカン Lincoln, Abraham 48, 386
 劉備 Liu Pei(=劉玄徳) 372, 446
 リヴァプール Liverpool 158, 294, 407
 ロンドン London 159-60, 294
 ルーツェルン Lucerne 294
 ルター Luther, Martin 257, 258, 431
 ルーテル派の神学 178
 ルーテル教会 411

[M]

マーコン Maçon 160-61, 409
 前橋 347, 349
 槇村正直 220, 225, 244, 421, 422
 同志社設立にさいしての援助 335
 辞任 254
 外国人女性教師の入洛拒否 235, 243
 新島学校設立計画を披瀝 217
 新島との真理問答 242
 態度かわる 218
 マンチェスター Manchester 158, 407
 マニラ Manila 47
 マーティン Martin, W. A. P. 255, 422, 430
 マーティン Martyn, Henry 75, 390-91
 マサチューセッツ農科大学 Massachusetts Agricultural College 117, 394-95, 399
 マサチューセッツ州会議事堂 Massachusetts State House 48, 294, 386, 436
 益田孝 338, 440, 444

ヒドン Hidden, Mary E. 57, 62,
 95, **387**
 ハーディーあての手紙 59-61
 ハーディー夫人あての手紙 76-77
 叔母ミス・チャンドラーの改心
 66-67
 ヒンズデイル Hinsdale 57, 388
 平沼八太郎 338
 ヒッチコック Hitchcock, Edward
 395
 足浴のすすめ 92
 聾啞学校案内 150-51
 オランダ Holland
 公教育 165-66
 共和制と王制 410
 ライデン 166
 王妃 166
 はじめてのオランダ船 383
 ホランド Holland, William Jacob
 81-82, 85, **391**
 新島評 82-83
 ホリヨーク女子専門学校→マウン
 ト・ホリヨーク女子専門学校
 ホンコン Hong Kong 47, 269-71
 クイーンズ街 270, 432
 フーサク山 Hoosac Mountain 124
 フーサク・トンネル Hoosac Tunnel
 121, 399
 ホプキンズ Hopkins, Mark 295,
 412, **436**, 438
 ハバード Hubbard, O. P. 98, **396**
 ユグノー Huguenot 180, 411
 ユゴー Hugo, Victor 347, **442**

[I]

アイアンシー号 the Ianthe 320, 347
 井深掘之助 382
 飯田逸之助 87, 392

伊香保 344, 347, 441, 442
 井上馨 235, 428, 429
 電報 358, 444
 新島に対する援助 332, 337
 磯野小右衛門 214, **421**
 板倉勝明 21, 30-31, 32, 51
 板倉勝静(老中) 36, 39, 383, 385,
 387
 板倉勝殷 31-32, 51, 382-83
 岩倉遣外使節団 332, 374, **401**, 443
 顔ぶれ 131, 401
 目的 130
 新島への援助要請 129
 ノースロップ 148
 田辺太一 402
 岩倉具視 130-31
 岩崎久弥 337
 岩崎弥之助 338

[J]

ジェインズ Janes, Leroy Lansing
 226-29, **425**
 人力車 179, 207-08
 ジョンズ・ホプキンズ大学 Johns
 Hopkins University 319, 439

[K]

快風丸 16, 36, 39, 41, **383**, 387
 海員ホーム(ボストン) 11, **381**
 金森通倫 229, 355, **426**, 429, 443,
 446
 加藤弘之 366-69, **445**
 勝海舟 338
 川田剛 39, **385**, 400
 キヴァ号 the Khiva 268, 432
 喜望峰 48
 木戸孝允 131, 147, 217, 335, 401,

新島追悼文 363-64

[G]

ジェノヴァ Genova 279

ジョージタウン Georgetown 134,
402

ギルマン Gilman, D. C. 319, 439

グラズゴ Glasgow 159

ゴールドン・ゲイト海峡 Golden Gate
193, 418

グッドウィン Goodwin, C. C. 157,
407

ゴードン Gordon, Marquis Lafayette
244, 411-12, 414, 420, 428, 429

新島を歓迎 213

新島への期待 182

山本に『キリスト教の証拠』を贈る
216

後藤象二郎 338

グラント Grant, Ulysses 139, 403

グリーン・リヴァー Green River
191-92

グリーン Greene, Daniel Crosby
182, 210, 412, 413, 414, 420

アメリカン・ボードの日本最初の宣
教師 212, 412

山本に洗礼を授ける 439

ギュリック Gulick, O. H. 212,
412, 420

軍艦教授所 15, 35, 383

[H]

ヘイガー Hager, C. R. 269, 271, 432

ハーグ The Hague 165-66, 409-10

原六郎 331, 337, 440

ハーディー Hardy, Alpheus 320,
380, 381

アメリカン・ボード運営委員長 344,
412, 442

アーモスト大学理事 388

バー・ハーバーの別荘 185

永眠 328-30, 344, 347-48, 440

事務所 400

住居 386-87, 436

記念碑としての本書 3-4

危篤 328

森の要求を拒否 116-17

新島にアメリカ再訪をすすめる 265

新島との出会い 48

新島を引受ける 20, 57

新島のサンゴタール遺書 293

新島への関心 18

新島への経済的支援 231, 240

新島のヨーロッパ行きについての相
談 132, 146

ニュー・ヘイヴンまで新島を見送る
193

日本訪問に対する新島の期待 249-
50

ラットランド・アピールの相談 186,
189

ハーディー Hardy, Arthur Sherburne
380, 408

ハーディー夫人 Hardy, Susan H.
380, 381, 408

新島夫人・両親あての手紙 325

新島の感謝 345-46, 354

新島の最後の手紙 349-51

ハリス Harris, J. N. 338, 348,
441, 446

ハートフォード Hartford 105, 397

ハーヴァード大学 Harvard Univer-
sity 258, 340, 431

ヘッセ Hesse, Hermann 436

ヒドン Hidden, David I. 57, 62,
67, 95, 387

土倉庄三郎 299, 331, 437, 440
ドーチェスター Dorchester 320, 439

同志社

徴兵免除の問題 327

大学設立運動 256, 300, 302, 309-
15, 331-32, 333-44, 336, 339-
40, 343, 349, 350

普通教育の必要性 245-46

外国資金の問題 235, 239, 243-44

学校の管理 223

最初の学生 217-18

現況(1890) 377-78

ハリス理化学学校 349, 352, 427,
441

法学部設置計画 256, 299

医学部設置計画 256, 280-81, 299,
311, 316

開校 217-18

キリスト教の基盤 309

初期の寄宿舎生 225-26

恒久的基金 235, 241

熊本バンド 226-30

名声 298

名称 217, 423, 431

リバイバル 301, 437

ロシア貴族の同志社観 376

設立の目的 335, 353

神学校に関する方策 285-86

新校舎献堂 224-25

創立十周年 325-26

統計(1888) 339

同志社アルムニ会 326, 440

同志社病院 423, 431-32

同志社女学校 236, 331

開校 234, 427

北垣知事の娘 299, 332, 440

明治18年事件 317-18, 438

設立に対する反感 235

同志社教会 425

[E]

イートン Eaton, John 138-39, 147,
403

海老名弾正 229, 233, 426, 427

エディンバラ Edinburgh 159, 407

江戸藩邸(安中藩) 21-22, 36

エドワーズ Edwards, Jonathan 128,
401

アイテル Eitel, Ernst J. 194, 418
榎本武揚 338

[F]

フィヒテ Fichte, J. G. 257

フィレンツェ Firenze 278, 281, 434

ファイヴ・ポイント Five Points 153,
406

フリント Flint, Ephraim, Jr. 95,
387, 388

新島の按手札 186

新島との出会い 57

新島評 78-80

新島の教師 59-60, 61, 63, 70

フリント夫人 Flint, Orilla H. 61,
63, 67, 68, 388

フーチョウ(福州) Foochoo 47,
270, 417

フランクリン Franklin, Benjamin
347, 442

フレイザー Fraser, James 158, 407

フリードリッヒスドルフ Friedrichs-
dorf 180, 411

富士成豊(卯之吉) 9, 440

新島の手紙 63-64

新島の脱国援助 9, 10, 43-44

友情 42

福沢諭吉 382, 402, 444

395
 カーライル Carlisle 158-59, 408
 カーライル Carlyle, Thomas 370,
 429, **445**
 セイロン Ceylon [現在のスリランカ]
 273-75
 チャルマーズ Chalmers, John 270,
432
 チャンドラー Chandler, Abigail 66-
 67, 68, 389
 チャールズタウン Charlestown 67,
389
 チャタム Chatham 74, 75-76, 102-
 03, 388
 ジャイアン Cheyenne 191, 417
 シカゴ Chicago 191, 289
 知恩院 331-32
 長老派 303, 437
 クリストリープ Christlieb, Theodor
 294, **435**
 クラーク (アメリカン・ボード総主事)
 Clark, Nathaniel George 88,
 186, 246, 251, 355, **393**, 413,
 415, 421
 クリフトン・スプリングス 318
 新島の按手礼 185
 新島の将来計画 182
 総主事辞任 442
 クラーク (マサチューセッツ農科大学長)
 Clark, William Smith 90, **394-**
95, 399
 同志社訪問 394-95
 田中と新島をマサチューセッツ農科
 大に案内 150
 クリフトン・スプリングス Clifton
 Springs 318, 319, 393
 コッド岬 Cod, Cape 48, 73
 コロンボ Colombo 273-75
 コロラド号 the Colorado 193-96,

418, 419
 コロンビア・カレッジ Columbia
 College 147, **404**
 コロンバス Columbus, Ohio 295
 コモ湖 Como, Lake 291, 435
 クーパー学院 Cooper Institute 153,
406
 コペンハーゲン Copenhagen 166
 クレイグ Craig, Wheelock 71-73,
390

[D]

ダーナ Dana, J. W. 396
 『鉱物学』 99-100
 ダートマス大学 Dartmouth College
 98, 258, 396, 431
 デイヴィス Davis, Jerome Dean 231,
 412, 413, 414, 420, **422**, 424,
 425
 ジャイアンにおける開拓伝道 417
 同志社大学設立運動 256, 300
 同志社女子部 427
 同志社准社員 446
 京都府の見たデイヴィス 219-20
 『新島襄の生涯のスケッチ』 222-
 23, 424
 新島についての証言 217-18, 240,
 265, 317-18
 新島の感謝 253
 新島の結婚式司式 221
 新島との出会い 401
 入洛 217, 242
 大津伝道 233
 伝道者養成所 (学校) 214-15, 224,
 298, 299, 304
 ドーン Doane, E. T. 225, **425**
 ドッジ Dodge, William E. 190,
 412, **416**

アンドー ヴァー Andover 57-58,
 319
 アンドーヴァー論争 441-42
 アンドーヴァー神学校 Andover
 Theological Seminary 109,
 147, 172-73, 177, 387, **398**
 復学 182
 ミッションナリ・サークル 319, 344
 入学 113
 卒業 185
 安中 21
 安中教会 421, 427
 新島の伝道 206-11, 213, 233-34,
 260
 青木周蔵 337, 440
 アラビ・パシャ Arabi Pasha 273-
 75, **433**
 アーリントン・ハウス Arlington
 House 134, 141, 147, **402**
 粟津高明 392

[B]

バブコック Babcock, Orville E. 139,
403
 ベルツ Baelz, Erwin von 347, 441,
442
 ベアード Baird, S. F. 319, **439**
 ベーカー夫人 Mrs. Baker, Walter
 320, **439**
 幕末の状況 29-30, 50, 91, 93-94
 バラ Ballagh, James A. 179, 392,
411, 420
 バー・ハーバー Bar Harbor 185,
 414, 427, 431, 439
 ベアリング商会 Baring, Brothers
 and Co. 159, 181, 408
 バートレット Bartlett, D. E. 105
 バーゼル Basle 294

ミッション・ハウス 435-36
 ベーレンズ Behrends, A. J. F. 319,
438-39
 ベルヒテスガーデン Berchtesgaden
 169, **410**
 ベルリン Berlin 162, 169
 在住日本人 171, 175
 ベルリン号 the Berlin 9-10, 17,
 42-46
 ベリー Berry, J. C. 266, 412, 414,
 420, **431-32**
 同志社医学校設立運動 281, 299-
 300, 311
 ブラグデン Blagden, G. W. 185, **415**
 ボストン Boston 133, 147, 319
 新島のはじめてのボストン 48
 州会議事堂 48, 294
 大火 174, 176
 田中と新島のボストン 145, 148,
 150, 153
 ブリッジマン Bridgman, E. C. 37,
382
 ブリンディシ Brindisi 276, 433
 ブルックリン Brooklyn 319
 ブラウン Brown, S. R. **382, 394,**
 420
 仏教 206-07
 仏教者大内青巒 358-59
 キリスト教に対する攻撃 218, 222,
 248, 348, 350
 新島の葬式に参加した仏教徒 357
 バードン Burdon, J. S. 270, 271,
432

[C]

ケンブリッジ大学 Cambridge Uni-
 versity 257, 294, 430
 キャノン山 Cannon Mountain 96,

索引

凡 例

1. アルファベット順を基調とした。日本語はヘボン式ローマ字に依った。
2. 太字の数字は主要な記述, または注記を示す。
3. 本文中に名前が明示されていない場合でも, 確定できる限り, 注記するとともに, 両方のページを示した。

[A]

アデン Aden 276
アヘン 194, 269
アイロロ Airolo 292, 435
会津若松 260
オールバニー Albany 123, 400
アレキサンドリア Alexandria 195,
276, 418
アルジェリア号 the Algeria 157,
406
アメリカン・ボード American Board
of Commissioners for Foreign
Missions 182, 412-13
——からの独立の主張 239-40
——からの5万ドル寄付 319, 441
法人会員 413
——の給料 230-31, 240
準宣教師 185, 414
会長 412
年次大会 Brooklyn(1870) 408/
Columbus(1884) 295/Pitts-
burgh(1869) 212/Rutland
(1874)186, 189-90/Salem(1871)

401
日本基督伝道会社への寄付 251
日本ミッション 212, 221-22, 223,
239, 308, 414, 420, 421, 429
宣教師団の新島評価 223-24
宣教師数と全派遣地リスト 413
総主事 412-13
運営委員会 231, 265, 412
財源をめぐる問題 316
アーモスト Amherst 117, 121, 133,
150, 319
アーモスト・ホテル 150, 405
アーモスト大学 Amherst College
58, 258, 388, 391
名誉学位 327
ミッションナリ・バンド 85, 391-92
新島の卒業 113
卒業式 121
田中とともに訪問 150
アムステルダム Amsterdam 166,
410
アンデルマット Andermatt 292-93,
435
アンドソン Anderson, Rufus 185,
393, 412, 415

新島襄全集10 ■新島襄の生涯と手紙

1985年4月20日

初版第一刷印刷

1985年5月15日

初版第一刷発行

定価 6500円

編集者——新島襄全集編集委員会

発行者——今田 達

発行所——同朋舎出版

〒600京都市下京区中堂寺鍵田町2 電話 075-343-0621

振替京都5-22982

東京支店 〒101東京都千代田区三崎町3-7-12

会ビル5F 電話 03-234-4982

清話

印刷——図書印刷同朋舎

製本——大日本製本紙工

ISBN4-8104-0440-4 C0321 ¥6500E

THE COMPLETE WORKS
OF
JOSEPH HARDY NEESIMA

10

Life and Letters of Joseph Hardy Neesima
by Arthur Sherburne Hardy

DOHOSHA
1985
KYOTO · JAPAN

分類	099.01	登録 番号	85.05.07.123
記号	N-9	所蔵 場所	図 書 館 用 資
巻次	10		

返 却 期 日 票		
返 却 期 日	返 却 期 日	返 却 期 日
		禁 帯 出

It has ^{our kind} taught ^{without ceasing} a number of
many succeeding ^{that} further heretics. ⁽³⁾ Our ^{central} government to ^{the} ^{school} with a ^{pretense} of education but ^{to} promote Xty & empire. Just
time I presented application for Miss ^{to} to enter a ^{rights} Homo. ⁽³⁾ He was ^{to} report. ⁽³⁾ The next report of
was ^{although} ^{nominal} I am a ^{employer} of these ^{from}
to Keresse is two. I am rather employed
by receiving annual salary. ^{of them} ^{instead}
School is altogether sustained by the ^{and}
to ^{an} Board & here it is ^{Board}
instead of a natives. ^{although} ^{held in a native} ^{of} ^{to} ^{to itself}
sustained by a fund belonging ^{to} ^{to}
since ^{to} ^{permanent} fund to see
how ^{is depending} ^{annual} gift of ^{Board}
Board's institution. ^{according} ^{to} ^{the} ^{principles} ^{of} ^{the} ^{Board}
institute is ^{ought} ^{to} ^{be} ^{allowed} ^{to} ^{exist}
Interior City like Keresse. ⁽³⁾ There was ⁱⁿ
in the foreign department ^{about} ^{the} ^{ministry}
of our school. ^{whether} ^{it} ^{is} ^a ^{native}

When I ~~attempted~~ ^{tried} to start our school
lights I was rather compelled by law to ask
the Central Government ^{to allow} for establishing it
employing foreign teachers. ^{Here you must know the government} ^{will not} ^{employ} ⁱⁿ ^{any} ^{way}
as we had no money to start school & the board of
missionary teachers, ^I ^{was} ^{naturally} ^{appointed} ^{to} ^{be} ⁱⁿ ^{charge} ^{of} ^{the} ^{school}
as for partnership. ^{My} ^{written} ^{application} ^{was} ^{presented} ^{to} ^{the} ^{proper} ^{authorities}
Department ^{for} ^{approval} ^{by} ^{the} ^{Governor} ^{of} ^{the} ^{Province} ^{of} ^{the} ^{Central} ^{Government}
Department ^{to} ^{employ} ^{regular} ^{missionary} ^{teachers} ⁱⁿ ^{public} [&] ^{private} ^{schools} ^{to} ^{manage} ^{the} ^{school}
to account with. But through ^{my} ^{special} ^{favor} ^I ^{received} ^a ^{permission} ^{to} ^{invite} ^{the} ^{first} ^{pioneer} ^{missionary} ^{to} ^{be} ⁱⁿ ^{charge} ^{of} ^{the} ^{school}
as soon as I joyously said "Miraculously
we have fairly started our school we began to
spread in a quiet possible way. But
writing ^{very} ^{soon} ^{after} ^{that} ^{time} ^{became} ^{known} ^{throughout} ^{the} ^{Province}
It caused a great alarm among the
people. They got up a big assembly & presented
petitions to K. Gov. to stop our preaching
course he could do to but he said
he would not.

同志社大学図書館



8505071230